魔法少女リリカルなのは～仮想の未来～

ヨシユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～仮想の未来～

【Ｎコード】
Ｎ８３００Ｋ

【作者名】
ヨシユキ

【あらすじ】
神様の手違いで転生することになった主人公
…それがなぜかリリカルなのはの世界だった
はたして原作道理に進むのか？

仮想の未来（前書き）

はっきり言って思い付きの処女作です
生暖かい目で見守って下さい

仮想の未来

……ハァ…

オレは今、非常に特殊な状況に陥っている。

――なぜなら――

真っ白な空間に居るオレ

その目の前には…

土下座している女性らしき人がいるのであって…

あ、なんだろう…

一瞬で状況把握できそうな…

△▼△▼△▼△▼△

「つまり、神（仮）の手違いで現世でオレは予定外の事故に遭遇し…その…魂だけの存在になったと？」

「…ハイ、本当に申し訳ありません…」

話しによると、この人とは神様の秘書らしい。
神様がうっかりミスでオレの寿命を消してしまった　と。
…よし、ここはキレても神は許してくれるよね？

あ、その神のせいでこうなったんだっけ？

「テメェすみませんでしたじゃね～だろ～っ！！！！！。大体加害者がなんでこね～んだ　あぁ！？」

「ヒッ（泣）　か、神様は今後の対応の為に、各部署で調整しています～～ぅ」

う、ちょっと脅かしすぎたかな…

「あ～…済まない。貴女に言っても仕方なかったよな
とりあえずコレで涙拭いて」

と、何故か普段は持ち歩かないハンカチを渡したのだが…

ヤバイ、泣き顔にちょっとグッと

「チ～～～ン、ズズッ！」

…こなかったことにしよう　うん

「あ～　そのつまりオレはどうなるのかな？　今後の対応って…あの世にご案内ってこと？」

やっぱ事故とはいえそうなるだろうな～

ああ、人並みな恋愛したかった「リリカルなのはの世界に転生じゃよ」たな～…って、何っ？

その声の方に振り向くと…

何故がピースをしていたご老人がいた

とりあえず秘書の人が懐から取り出したスリッパでその老人の頭を
これでもかというくらい殴打していたのは気のせいにしよう…

「ご老人、貴方はもしや神（仮）ですか？」

返事がない…ただのしかばねのようだ…

「って儂はまだ生きとるわいっ！」

あ、復活した。

「ゴホンッ…ご紹介がおくれましたが、こちらが全知全能の神（仮）

…自己紹介がが遅れましたね　私は秘書を勤めている女神スクルドです（ニコッ）」

スクルドさん…スリッパ片手にその笑顔、微妙っす…

「で、神（仮）様、さっきあんた『リリカルなのは』の世界とか言っていたが…」

「儂スリッパで殴られたのにその事スルーっ？

…まぁ　よい

うむ、

今回はこちらの手違いでおぬしに迷惑かけてしまったのでな　同じ世界に蘇生っていうのは無理じゃが違う世界…つまり平行世界の一つ『リリカルなのは』の世界に転生させるという事になったのじゃ」

転生については有り難い…が、

「なぜにリリカルなのはの世界なん！？」

「それはじゃな…、

この間見たＤＶＤにハマっちゃった　テヘ（笑）」

…テヘ　じゃねえだろ神（仮）

「どうでも良いがその（仮）って何じ「神に見えないっ！てか、どこの世界に秘書にスリッパでしばかれる神様がいる」　」

ああ～　隅のほうで神様がドナドナ歌いながらおちこんでるよ…

「か、神様　とりあえず彼に転生について説明をしないと」

スクルドさん　ナイスフォロー…かな？

「む…そうじゃった」

復活早っ

△▼△▼△▼△▼△▲▽

「転生に関して特典？」

「うむ　今回はこちらのミスということだしの…　そなたに特殊能力を付加させるという特典がつくのじゃ」

キタ━━━！！　チートフラグ

「その能力って何でもいいのか？」

「まぁ　可能な範囲でじゃが…　ちなみに制限もないからの～フォフォフォ」

どんだけサービスしてくれるんだ　さすが神様、太っ腹～♪

「じゃあ…
身体能力、魔力、気、精神力をＳＳＳランクオーバー
あ、勿論不老不死で外見年齢は任意で設定可能、
能力は、知っている漫画やゲーム、アニメの知識の能力、道具等はイメージで具現化できそれの使用可能。
能力使用のリスクなし、
さらに能力のアレンジも自由自在に
あ、リリカルなのはの世界ならデバイスも欲しいな～
…インテリジェントデバイスとユニゾンデバイスも追加で～」

ん？二人ともどうしたの？

「…どんだけチート人間じゃ…」

「ここまで遠慮しない人も稀ですね」

あ、確かにこれはやり過ぎかな（笑）

「まぁ…流石に無理「別によいぞ」いいんかいっ！」あ、神様にツッコミをいれてしまった

「デバイスに関しては具体的な案はあるのかのぉ？ここまで来たら何でもどんと来いじゃ！」

あ、なんか神様もノリノリじゃん♪

「そうだな～

インテリジェントデバイスは剣タイプかな～　男としては自分専用の剣ってのに憧れるし…　形はＦＦのクラウドが持っていた剣みたいなねがいいかな～

能力としてマテリアが使用可能　あ、マテリアは取り外し式ではなく任意でマテリアが変化していくタイプで　マテリアも複数同時使用可能みたいな感じで～

　勿論カートリッジシステム搭載で

ユニゾンデバイスは…やっぱ女性型がいいかな～　（ヘンナイミハナイヨ、

ホントダヨ）外見は１７歳位で超高性能かつスタイル超抜群な方で

　ロングヘアーで顔も超美人でっ！」

そこ、石をなげようとしないでっ

「…欲望ダダ漏れですね」

スクルドさん…お願いですからそんな眼でみないで…

「まぁよかろう…

ちょっと待っとれ…」

「アル○マーーッ」

いやいや、それ呪文ちがうし～～っ

「冗談じゃ（笑）
今度はホントに…

カーーーーッ」

そう言うとオレは光に包まれ…

「ホイ　おわったぞい」

早ッ

「これでおぬしは身体能力、魔力（略）になったぞい

後インテリジェントデバイスはこの指輪が待機状態じゃ
ユニゾンデバイスの方はもう少し待ってくれ

…おぬしの注文がアレな為な」

まぁ　ユニゾンデバイスは後のお楽しみにとっておくか…

「こちらのインテリジェントデバイスはまだ登録していないのでマスター登録してくださいね」

スクルドさんは指輪を渡してくれた

「マスター登録か…」

どんな名前にするかな…

――10時間後

「お～い　まだかの？」

「神様　お茶のおかわりをどうぞ」

…をい　何ちゃぶ台だしてまったりお茶のんでるかな～

「よしっ　決めた！

マスター認証　■■■　…って　あれ？名前が？」

おかしい　自分のなまえが言えない？

「おお、　言い忘れておったが　生前の名前はつかえないからの～
そうゆう規則なんで自分の名前も改めて決めてくれ」

…だから　そ～ゆ～大事な事は早くいってくれ…

――――――さらに5時間経過

「神様　このお笑い芸人、狩野〇〇と同じニオイがしますね」

「2年後に〇〇TAってCDデビューしていそうじゃの…寿命刈り取るか？」

…だからお笑いテレビ見ながら何しとんじゃい！　神としての仕事どうした！？

「ん？　そっちは書記のアズラエル君がやってくれておるから大丈夫じゃ～」

丸投げかよ…

「はぁ…　よし　名前はこれにするか」

名前も決めたし今度こそ…

「あ、ここでＣＭまたぎますね」

スクルドさ～～～ん

名前決定！　ついでにデバイスも

「ったく　ＣＭまたぎってこれどっかで放送してるんですか？」

ああ　段々スクルドさんのイメージが…

「まぁ　可愛いノリですっ♪」

「そんな事よりマスター登録しなくていいのかのぅ」

あ、そうだった

「それじゃ…三度目の正直っ！

マスター認証
神代（かみしろ）　恭介（キョウスケ）
術式
　ベルカ主体複数混合ハイブリット…

我がデバイスに個体名称を登録…
　愛称【インフィ】　正式名称
【インフィニティ】…」
『登録完了…
マスターバリアジャケットをイメージして下さい』

そう言われて俺は思い描く…

…黒のロングコートに…　腕にベルトを巻いて…　インナーは…黒

にしとくか…　ズボンはジーパン風に…　腕には篭手を…　まぁこんなものか…

「よしっ…　インフィニティ　Ｓｅｔ　Ｕｐ!」

『オーライ　マイマスター　バリアジャケットＳｅｔＵｐ』

△▼△▼△▼△▼△▼▲

おお～　スゲー　ホントにバリアジャケット展開したよ～

「どうかなスクルド?似合うかな」

そうスクルドの方を見ると…

「……」

アレ?　なんか変だったかな?

「ス、スクルドさん?　どっか変だったかな?」

初めてにしてはまあまあだと思うんだけどな～　…

「い、いえへんではないですよとても似合ってます……／／／」

なんだろう?顔が赤いのは風邪かな?

「はぁ…ありがとうございます（ニコッ）」

「！！！……／／／」

さらにスクルドさんの顔が赤くなったよ…　女神でも風邪ひくんだな～　あ、顔から煙まで…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

スクルドＳｉｄｅ

「はぁ…ありがとうございます（ニコッ）」

ヤバイ…あの笑顔は反則よ…／／／

私の周りにはいなかったタイプだわ

ああダメっ　そんなに見つめられると…

顔が赤いのが自分でもわかるわっ…　ボンっ！バタン…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「よし　インフィ　バリアジャケット解除っと」

そう命令するとインフィは元の指輪に戻った　どうでもいいんですがこの指輪…

「…なあ神様、この指輪って…　ど～見てもボンゴレリングにしか見えないんだが…？　しかも大空Ｖｅｒって…」

そう　この指輪　あきらかにボンゴレリングそのものなのだっ！

（枷はずす前）

「ん～　この前、下界で拾った本に載っているのを見て気に入ったから」

…だからいいのか？神様それで…

▼△▼△▼△▼△▼

「まぁ　とりあえずこれで準備は調ったことだし　早速転生してもらうのじゃが…どうした？」

転生はうれしいんだが…

「『リリカルなのは』の世界だよな？
オレ　多少は知っているが　原作知識穴だらけなんだが」

そう　そうなのである。

オレは『魔法少女リリカルなのは』は知っている　知ってはいるが
知識がかなり穴だらけ　てか原作知識か３割位であるわけで…

作者【まぁ　私も知識はうろ覚えですからね～】
…なんだ？　今変な電波が？

『気のせいですよマスター』

そうなのか？インフィニティ…？

「まぁ　必ずしも原作道理にする必要はないから安心せい
あくまでも平行世界の可能性の一つだから別に原作ブレイクしよう
がハーレムつくろうが問題なしぢゃよ　フォフォフォ」

いや　人としてハーレムはどうかと思うが…

「…まぁ　善処するよ。

確かリリカルなのはって　無印　Ａｓ　ＳｔｒｉｋｅＳ　ってあっ
たけど…　やっぱ無印からか？」

無印ってあまり知らないんだよな～

「いや　正確には、おぬしには無印とＡｓの間に逝ってきてもらう…じゃ♪」

「って　ちょっとまてい！　明らかに字が違うよな　って何？この魔法陣っ？？」

そうしてオレはリリカルなのはの世界に転生された…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ちなみにスクルドは真っ赤になってクネクネしながら倒れたいたのは気のせいだと思う…　てか思いたいっ

「キョウスケ君～～っ／／／／／」

転生先でばったり

「つつ…ここはどこだ？」

目を覚ますとそこは公園だった

…あの神…　もっとまともに送らんかいっ

とりあえず現状を確認しないとな…

「インフィ、ここがどこかわかるか？」

まぁ　あの神が言う所のリリカルなのはの世界なのは確定だと思うが…

『…検索結果、どうやら海鳴市内のようです。』

えらくザックリな説明だな～

まぁ　いいが、…ん？　なんか目線がいつもより低い気が…

『マスター　どうされましたか？』

「いや　なんかいつもより目線が低いな～と思って…」そうなんです　なんか周りが高いというか…

『ああ、　現在マスターの年齢が１０歳前後になっている為です』

なんだ　そうなんだ～…って

「なにいいいいい？」

僕は急いで近くのトイレの鏡で姿を確認…

ホントだ…ｏｒｚ

元の年齢２２歳だったのに　これが転生仕様なのか…　って

「あ、たしかチート能力で僕の年齢任意に変えられ『現在その能力だけは一時的にリミッターがかけられています』なにっ？」

リミッターって…神か？　神のせいか？

それにしても…

「瞳が蒼いって…」

なぜか瞳が某１ｓｔソルジャーみたいな魔眺エネルギーを浴びたような蒼い色になっていた

ま、気にしないけどね（笑）

「ん…　子供の姿って…　ねぇ　インフィ、僕の戸籍や住む所とかこの世界ではどうなっているのかな？」

そう　平行世界に着いたはいいが生活に必要な衣食住が僕にはない。

お金すら持っていないし子供の姿だからバイトも無理、どうしよう…

『マスター　メールが届いています。差出人は…神　となっていますが　いかがしますか？』

え？　神だって？

「インフィ　メール開いてっ！」

▼△▼△▼△▼△▼△▼

メールには…

【これ生活費にしてねっ♪あなたのスクルドより】と書いてあった…

…まぁ…これでお金は問題ない

…通帳に見たこともない桁の金額が…

経済傾くぞ…多分

それからこの世界での僕の身分は神様が偽造してくれたみたいだ

…子供で一人暮らしって何だか…

だが家がないっ…

まぁ　最悪野宿か～　この年齢じゃホテルに行っても無理だし　警察に後厄介になるし…

とりあえずこの世界の情報収集でもするかな

▼△▼△▼△▼△▼△▼

と　いうわけて今目の前に図書館があります～

とりあえずもといた世界とこちらの世界の知識のズレを直さないと

「ん～　予想はしていたけど　こちらの世界も基本的には変わらない、か…」

あれから1時間で僕はあらかたこちらの世界の事を確認した

え？なんでそんな短時間で？

まぁこっそりインフィに手伝ってもらったからだよ～

「とりあえず今日はこのあたりにしてテント買いに行かないと…ハァ」

身体能力もチートだから風邪は引かないいと思うが　精神的につらいな～　鬱だ～

そう考えて手に持った本を返そうとすると…

「…んん～　とどかへん　もうちょい…」

車椅子に乗った少女が

これが僕と【八神はやて】の出会いだった…

八神はやて（前書き）

原作キャラ設定まちがっていたらスミマセン

八神はやて

はやてＳｉｄｅ

私は今図書館にきている。
普通ならこの時間は学校にいってなかあかんのやけど…

そう…【普通なら】

残念な事に私は両足が不十分なんよ…それに私は一人暮らし、両親は私が小さい頃に…っとイカンイカン、なんか湿っぽくなってもうたな

そうゆう訳で私は一人で生活していかなアカンので学校は休学中や。
でも一人暮らしとはいえ、私には援助してくれるおじさんがおるんやただ、一度も会ったことはあらへんのやけど…

私は唯一の楽しみの一つ、読書をしようと棚にある本を取ろうとしてるんやけど…

「…ん～　とどかへん　もうちょい」棚が高くて微妙にととかへんっ

よ～し　こうなったら意地でもとったるで～　関西人パワー全開やそう気合いを入れていると

「この本が見たいのかな?」

そう言って本を取ってくれた男の子がおったんや…　ただ…

「…綺麗な瞳や…」

つい口にしてしまった／／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

僕の目の前で本を取ろうと格闘している女の子が　…アレ？どっかでみたような？

『（マスター、レディが困っているのです　助けてあげましょう）』

とインフィから念話が

「（まぁそうだよな～　ねぇインフィ、このコどっかで会ったことあったっけ？）」

『（マスターはこの世界に来て半日もたっていませんよ？お知り合いはいないはずですが…　ナンパの手段としては古いですよ？）』

ぶっ！こ、こいつ性格変わってきた！？

「（ち、ちがうよ…ただホントに見たことあったからだからっ　…
そりゃ確かに可愛いコだけど）」

『（マスターはあーゆータイプがお好みですか～　確かに将来美人
確定ですね
ホラ　マスター　早く助けないと）』

こ、こいつ　いつかマ改造してやる…

えっと　僕は少女に近づき

「この本が見たいのかな？」

僕は彼女が取ろうとしていた本を代わりに取ってあげると

「…綺麗な瞳や…」

『（マスター、速攻フラグ確立ですね）』

…う、否定できない

気をつけよう　名前で呼ぶのは　フラグ確定？

「今日からここがキョウスケ君の家になるんよ。だったら帰って来た時は【ただいま】って言うんやで？」

なんでしょう…この急展開は

同棲フラグ？

『（マスターが大人の階段を「（黙れ潰すよ　物理的に）」…ｙｅｓ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ）』

一体どうなったらこんなことに…

――――数時間前

「へ～　ほんなら　キョウスケ君はついさっきこの街に着いたばかりなんやね～

でもびっくりしたで　一瞬外人さんかと思うたわ～」

僕と八神さんはお互い自己紹介した後　歳が近いということで色々と話しをしています。
…どこかで見たことあると思ったら、このコが原作キャラの一人【八神はやて】と思い出した

確か闇の書…正確には夜天の書の主になる子…
どうやらまだヴォルケンリッターは現れていない時期らしい…　あれ？いつ現れるんだっけ？

「よく言われるよ　生れつきこんな瞳をしているからね

あ、そうだ、八神さん。このあたり「キョウスケ君！」ハイ？」

な、なんだ？八神さん　なんか急にむ～～～～ってこっち見てるけど？

「…や…んで……や」

え？なに？

「だ、だから…うちの事は【はやて】って呼んでほしいんやけど…駄目？」

グッ…このコは…

はやてＳｉｄｅ

「わ、わかったよ　はやて（ニコッ）」

「…／／／／／っ」

あかん　あの笑顔…反則や　自分でも顔が赤いのがわかるわ～

キョウスケ君　天然でやってるんやろうか？

「そ、それでキョウスケ君、う、うちに聞きたいことってなんにゅ？」

あかん　緊張して噛んでもうた／／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

あ、はやて今絶対噛んだな…　まぁ　気付かないのが紳士の努め…

「あ、このあたりにホームセンターとかないかな？　ちょっとテントを買いに行きたいんだけど。」

「テント？　どっかキャンプにいくん？」

「あ～いや～…住む所が今の所なくて、とりあえず野宿でもしよう

「あかん！！」うぉっ！？」

って　どうしたのはやて　びっくりした～

「あかんで！　野宿なんて　風邪でも引いたらどないすんねん」

いや　チート能力のお陰で風邪は引かない…とも言えないしな～

「それに家族の人も心配するで！」

そういえば言ってなかったな～

「あ～　はやて、僕に家族は（こっちの世界に）いないんだ…」

平行世界にはいないよね～　元の世界では元気でいるけど

「あ……ごめん……」

あああああ～！　はやてが分かりやすいくらい落ち込んでる～っ！

『（当たり前です　マスターはＫＹですか）』

インフィ…　ホント初期と性格が違うっス…

「あ、あの　はやて　僕はぜんぜん気にしてないから

だからあんまり気にし「そうや！」ってなんですか！？」

なんだろう…落ち込んでると思ったら急にキラキラした笑顔でこっ

ち見ているが…

「な、なぁ　キョウスケ君…　よ、よかったら……その……

私と一緒に住まへん？／／／」

爆弾が投下されました

と　いう訳で前回の冒頭に戻る訳だが…

「ねぇ　はやて…さすがに出会って半日しか経っていない人を家に招き、しかも一緒に暮らすってのはマズイんじゃないかな…　それに、はやてのご家族に何て話したら…」

「…わたしも一人暮らしだから大丈夫やー」

あ…忘れてた

確か原作だとヴォルケンリッターたちが現れるまで一人ぼっちだったんだっけ…

『（マスター…本ッ当にダメダメですね～　－１００００点です）』

なにその減点方式の基準！？

あ、そうだ

「（インフィ…僕にリミッターかけて魔力反応を０にできるかな？）」

『（…まぁ可能ですが…何か不都合でも？）』

そう、かなり不都合なんです

僕の魔力はＳＳＳオーバーなので、この状態でヴォルケンリッター

達と出会ったりしたら…バリバリ警戒心持たれてしまうのは確実
時期が来るまでは一般人として振る舞わないと

それに万が一管理局にバレたりしたら…　無理矢理就職→強制労働確定だし…

最悪人間ロストロギア扱いで永久封印とかもありえる…

まぁ　万が一そうなった場合は嘱託魔導師になれば永久封印だけは免れるが…

めんどいのはないに越したことはないしね

『（分かりました　……リミッター設定完了。これでマスターの魔力反応は0になりました）』

これでとりあえずは安心…か

「……く　キ…ウ…ケ……君
キョウスケ君てば！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「…わたしも一人暮らしだから大丈夫やー」

そう　わたしは一人ぼっちやった…

でも…今は…

「キョウスケ君？」

…どないしたんやろ？　考え事？

やっぱ一緒に住むんは嫌なんやろうか…

こんな不十分な足のうちなんて面倒…やろうか…

「…キョウスケ君？」

ダメや　なんかブツブツ言うとるし…

そう思うと急に不安になってしもう…

「キョウスケ君てば！」

あかん！つい大声だしてもうた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケSide

「うわっ！　どうしたはやて？」

びっくりした～　急に大声で呼ばれるとは思わなかったよ～

「あ……その……うちと一緒に住むのは…嫌なん？」

うぅっ　そんな涙目で訴えないで下さい　ライフが　残りライフがぁぁぁ～～

『（はやて嬢の攻撃！ダイレクトアタック！！　マスターのライフは0になりました）』

……まぁ　これは断れないよな～

「ううん　そんな事ないよ

それじゃ…　お世話になります　はやて（ニコッ）」

そういってはやてと握手しました

はやての顔がまた赤くなっていたのは…

気のせい…だよね？

『（マスター　少女相手に1ターンキルですか）』

ち～～～が～～～う～～～

新婚？生活（前書き）

すみません！

今回の話と次の話　抜けていました～！！

ゴメンナサイッ

新婚？生活

とりあえず、僕ははやての家に住むことになりました。

「さぁ～　今日はキョウスケ君の歓迎会や～
腕によりをかけて夕飯作らなあかんな～」

どうやらはてやは僕の為に歓迎パーティーを開いてくれるみたいです

なんかはやて…うれしそうだな

…っと、　さすがにはやてだけに料理作らせる訳にもいかないか

ん？　僕に料理ができるのかって？

そりゃ～前世で一人暮らしだった時は料理作っていたからね～

…中の下レベルだけど

「はやて、僕も何か手伝うよ。」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

ん～　今日はどんな料理作ろかな～

せっかくキョウスケ君に食べてもらうんやから…美味しいって言ってほしいわ～／／／

さ～て　冷蔵庫を開っけて～……ああああ～ｏｒｚ

し、しもうた　玉子があらへん　せっかくキョウスケ君に特製オムライス食べてもらいたかったのに～…

よし！ここはひとっぱ「はやて、僕も何か手伝うよ。」…ってキョウスケ君？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

あれ？なんかはやて困っているみたいだな

「はやて、どうしたの？」

「そ、それが…ちょ～っと材料が足りなくてな
あ、これから私が買ってくるからキョウスケ君は待っててな」

いやいやいや　さすがに車椅子の女の子を一人買い物に行かせて僕は待ってるだけってのは…

「いいよ　はやて　僕が代わりに買ってくるから　」

「そ、そんな　ええよ　私が買い忘れたんやから…」

…はぁ　このコは

「はやて、僕ははやてと一緒に住むんだよね？　だったら遠慮なんかしなくていいんだよ　僕ははやてと家族になりたいんだし」

『（マスター　いきなりプロポーズですか？）』

グフッ！…　いきなり何をいうんだインフィニティさんっっ／／／／

そんなんじゃないやいっ！

…あ～はやてさんが真っ赤になって俯いちゃった…

『（これぞ天然フラグメーカー属性ですか～さすがマスター　私も鼻が高いです）』

いや　インフィニティさん　変な感心しないでよ

「…ほんまに家族になってくれるん…うれしい…／／／」

う〝　ヤバイ　お持ち帰りしたい位可愛い…　いやいやいや　しっかりしろ俺っ！

「そ、それで何を買ってくればいいんだい？」

なるべく平静を装い聞いてみると　どうやら玉子がなかったらしい

「じゃあ　すぐに買ってくるよ。　行ってきま～す」

外に出て顔を冷やさないと…

お店はちゃんと確認してから選ぼう！（前書き）

すみません　抜けていた話です　どうぞ

お店はちゃんと確認してから選ぼう！

キョウスケＳｉｄｅ

うう…　我ながら恥ずかしい台詞を…

多少は外の空気をすってクールダウン中です

とりあえず近くの銀行へ行き、神様が偽造しｔ　ゲフンゲフン…

…用意してくれた貯金を下ろして今商店街で買い物中です。

え、何か問題ありましたか？

偽造？　なにそれ　おいしいの？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

さーて　はやてに頼まれた買い物は済んだし…　少し財布も余裕あるな、

…デザートでもお土産に買って帰るか

『マスター　でしたらあそこの喫茶店でケーキでも買っていきましょう』

ん…そうだな　ちょっと寄って行くか…

僕はその時気付くべきでした…

その喫茶店が…

【翠屋】だった事に…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―カランカラ～ン♪

僕はお店のドアを開けるると

「いらっしゃいませ～」

…バタン

…そのままドアを閉めました

ＯＫ　キョウスケ　とりあえずＣＯＯＬになれ。

今さっき居た女の子、　ツインテールがピョコってなっていて、声がＶｏ　田村ゆかり　っぽかった女の子…　あれは…

とりあえずもう一回ドアを開け…

「い、いらっしゃいませ～」

うん　確定！

魔王様こと【高町なのは】ご降臨っ！

どこからか『魔王じゃないもん！』という電波が聞こえたような…

魔ｏ…なのはＳｉｄｅ

「いらっしゃいませ～」

私は今お店のお手伝いをしていたんだけど…　にゃあああ！

今入ってこようとした男の子、私の顔を見たとたんドアを閉めちゃった～　なんで～？？

あ、またドアが…　　あ、またあの男の子だ

ううん～　私何かしたかな～？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

これが高町なのはとのエンカウントでした

『【てきよけ】のマテリア装備しますか？』

おそいわ～っっっ！

エンカウント

「あ、さっきはごめんね　ちょっと知っている人と勘違いしちゃって…」

とりあえずはごまかさないと…

それと迅速に用件を済ませて帰らないと…　なぜか嫌な予感が…

「えっと、テイクアウトでシュークリームを４ついただけますか？（ニコッ）」

「…／／／あ、はい　少々おまちください～」

テッテッテッテ…ガシャン！！

あ、こけた

あんなに慌てなくてもいいのに…

ん？　何か視線というか殺気が…

…そういえばここにはシスコン属性もった危険人物がっ

『（マスター　貴方の事は忘れません）』

おいこら　勝手に別れをつげるなっ！

「あら、この辺じゃ見かけないコね～」
おお、この声は　高町家の影の最終兵器…
なのはのお母さん【高町桃子】さんっ
うわ～　　ホント生で見ると若いな～
この一家って見た目若いんだよな～
…なにげに不老一家かってツッコミたくなるが
「あ、はい　最近このあたり引っ越してきまして、今親戚の家にご厄介になっています」
まぁ　微妙に嘘はいってないよな?
桃子さんは　あらあらまだ小さいのに偉いわね～　とか言っているが
そりゃ～中身は成人青年ですからね～
それなりの対応は可能ですよ～
「お、おまたせしたした～／／／」
お、どうやらなのはさんがシュークリームの入った箱を持ってきてくれたみたいだ
いや　だから何故頬を赤らめてイラッシャルンデスカ?
『（…ハーレムルート一直線）』

…こいつは…

ハッ！

殺気が強くなった！！

とりあえずここは撤退したほうがいいかな

「ありがとう　可愛い店員さん（ニコッ）」

「／／／／／……あぅ」

ぴきーーん

は、！僕は一体何を

『（天然とは恐ろしいですね）』

ううう…否定できませんょインフィニティさん

「じ、じゃあ　お代はここに置いておきますね　あ、お釣りはけっこうですのでそれじゃ！」

とりあえず殺気がこれ以上にならない内にお店をでました

後ろの方で男の人の声がしたような気がしたが　気にしないでおこう…

「インフィ…とりあえず【ラッキー】と【てきよけ】のマテリア装備して…」

気がつけばお約束？（前書き）

すみません、今回は短いです

気がつけばお約束？

「ただいま～」

あの後、逃げるように？翠屋を後にした僕は無事に八神家に帰宅できました

『色々なフラグは立ちっぱなしですが』

某シスコン兄との決闘フラグは勘弁してほしいが…

『まぁ　マスターならぷちっと相手を瞬殺でしょうが』

…やれやれ　安息の日はないのかな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

あれからはやての料理に舌鼓を打ち（ホント美味しかった）、お土産に買ってきたシュークリームを二人で食べ（はやては喜んでくれたな～♪）今二人で居間にいるのですが…

「そういえば…はやて、僕はどこで寝たらいいのかな？」

まぁ　居候の身ですからソファーでもいいのですが

「ん～？　一応お客さん用の部屋があるけど…もしキョウスケ君が

よかったら…その……一緒に…寝よか？／／／」

ＯＫ、ガール、　少し落ち着こうか。

「…あの～はやてさん　分かっていると思いますが…

僕男の子なんですが？」

「うん　わかっとるよ…でも…

キョウスケ君の事信頼しとるから平気や／／／」

『（マスター　これは断れませんね）』

しかもとどめに

「うちと寝るの…嫌なん？」

って涙目で言われた日には　罪悪感が～

…数時間前にあった「お風呂に一緒に入ろう」発言は何とか丁重にお断りできたが…

『（あれは笑え…大変でしたね）』

そこのデバイス！今笑えるとか言いかけただろっ！

「うう～　わかったよはやて、じゃあもう夜も遅いし寝ようか？」

「うん……／／／」

いや　ホント　ロリコンぢゃないから手は出さないよ　ホントダヨ？

僕ははやてを俗に言う【お姫様だっこ】をして寝室へ行き一緒に寝ました

…はやてが寝ぼけて抱き着いてきたので、精神が削られていきましたが…

気がつけばお約束？（後書き）

作者「とうとうストックが尽きた…」

インフィ「ならさっさと執筆してください」

作者「いや～あったはずの資料が行方不明になっていた為、発掘が大変で…」

インフィ「…」

作者「とりあえず微かな記憶とインスピレーションでがんばります♪」

インフィ「そろそろあのイベント発生ですが大丈夫ですか？」

作者「…たぶん」

インフィ「少し…頭ヒヤソウカ？」

作者「な、なるべく早く更新できるよう努力いたします

誠にスミマセンっ

てかキャラというかデバイス違うし～」

ズガガガガガーン

能力確認は計画的にネ（前書き）

な、なんとかできた…

能力確認は計画的にネ

「…んん…　朝か　……」

僕は起きようとしたが…アレ？　動けない？　金縛り!?

そう思っていると隣には

「…Ｚｚｚ」

僕の体に腕を回して抱き着いて寝ているはやてがいた…

『（おはようございますマスター　昨晩は大人の階だ「（潰してほしいのかな…インフィニティ？）」ガタガタガタ）』

とりあえず、はやてを起こさないように…っと

僕はそーっと部屋から出てリビングへ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「（さて、と　インフィニティ　この部屋に認識阻害の結界を）」

そう　たしか原作ではこの八神家、ギル・グレアムに監視されていた筈　その使い魔のロッテ　アリア（だったかな？）の猫姉妹もいたはずだし…　まぁ　既に僕の存在は気付いているだろうが…

『結界を展開させていただきましたマスター様』

…まぁ…スルーするか

僕は神様から貰った能力で【別荘】を想像し創造した

※魔法先生ネギま、エヴァ別荘初期Ｖｅｒ

うわ～　ホントに出来た♪

よし　早速転位っ

シュッ――――

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

おお　スゲー　漫画と同じだ～

『マスター　ここでの２４時間は外では１時間ですので』

あ、やっぱ原作と同じか～

「じゃあ…ここでチート能力確認するか～　ここなら派手にやっても平気だろうし」

バリアジャケットを展開、と

「…インフィニティ　デバイスの2フォームとしてモード変化出来る？」

『はい可能です。』

「なら2フォームは砲撃型にしたいから銃（ハンドガン）タイプで、僕の魔力でも耐えられるくらいの強度設定しておいて」

これは、見た目ハンドガンだと相手は威力はたいしたことないと相手は油断する　そのスキを付いていきなり極大魔法砲撃をぶっ放すっ！フッフッフ…

『ああ、マスターが腹黒く～…純真なマスターは何処へ…』

その後色々な武具や道具を製造

まとめて僕専用の異次元空間（原理は「王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」とお考え下さい）に収納

あ～能力開発は楽しいな～♪

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

あれから２４時間経過…

気が付いたら、別荘が半壊してました。

『調子にのって【バハムート】＋【まほうみだれうち】を使うからです』

いや～壮観だったな～　うん　後悔はしないっ

「じゃあ　今日はこのくらいで戻るか…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

外に戻って結界解除っ

さぁ　世界征服するか～

足掛かりにまずは帝都日本を

フッフッフ…アーハッハッハ！！

『マスターが壊れた～、しっかりして下さい！マスターぁ』

その後、起きてきたはやてによって正気に戻ったとか…

「はっ！僕は今まで何をっ！？」

サプライズは程々に？

さて、あれから一週間が起ちました

こちらの生活は何も問題無く　はやてとの二人で出掛けたり、時間が出来たら別荘で修業したりとの繰り返しかな？

そんなある日……

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「え、明日はやての誕生日ですか？」

本日　はやての定期検診に付き添いで病院に来たら、担当医の石田先生に教えてもらったのである。

「はやてちゃんから聞いてなかった？…やっぱり遠慮しているのかしら」

まったく　家族なんだから遠慮しなくていいのに…

「ええ、はやてはそんなこと一言も言ってくれなくて…

あ、でも石田先生に教えていただいてよかったです。逆にサプライズではやてを驚かせてやりますよ」

そう、そんな大事な事を黙っている子にはサプライズ（お仕置き）をしなければ…フッフッフ

『（最近黒キャラ目指してますか？）』

ソンナコトナイヨ

「ふふっ、じゃあ私もキョウスケ君に教えた事は　はやてちゃんには黙っててあげるわ…

　キョウスケ君、はやてちゃんの事　お願いね。あのコ　貴方に会ってからとても楽しそうで　治療にも前向きに取り組んでくれて…本当に貴方には感謝しているわ。」

「いや　そんな…僕は何もしていませんよ　ただ…はやてには笑顔でいてほしい　それだけですよ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

さて、そーゆー訳で石田先生にはやてを任せて、その隙に準備をする為　商店街に来てはみたが…

『（ケーキはやはり翠屋で買いますか？あそこのケーキは美味しいと評判ですよ）』

確かに味はあそこの店が1番なんだが…

「まぁ　まだ午前中だからまだ学校にいる時間か…」

魔王&シスコンに会わないように…

あ、【ラッキー】のマテリア使おう！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

よっしゃ～！　助かった！！

無事エンカウントすることなくケーキＧＥＴだぜ！

とりあえずケーキは僕専用の次元収納空間に保存して、今度はプレゼントを買いに…

「って　何買おう…？」

ヤバイ　考えてなかったあああああ！！

どうしようどうしようどうしよう…

『（マスター　手作りで何か作っては？）』

おお、それだ！

インフィニティさん、他に何かアドバイスをぷりーず

『（面白い位テンパってますね♪
まぁ　弄ぶのも何ですし、そうですね…　指輪　と言いたい所ですが　今回は……なんていかがですか？）』

そうか～

あ、どうせ僕監修で作るなら…

さあ主人公は何をを作るのか？

次回をまて！

『まだ決まってないだけでは？』

【作者】
…ナンノコトヤラ

出会いはいつも稳便に？

みなさん　こんばんは

神代　恭介です…

さて　僕は現在…

生命の危機に立たされています…

みなさんに現状を伝えるとすれば…

黒い服（インナー？）を着た　女性２人に幼女１人　大男１人が僕の目の前に居て、僕をバインドで拘束シテイマス

特に幼女の方はゴル〇ィオ〇ハンマーかってツッコミたいくらいの凶器を構えています…

「おまえは何者だ？」

ピンクのポニーテールの女性がそう尋ねてきましたが…

いや　喉元に剣先突き付けないでください～

何でこんな事になったかというと…

数時間前――――――
―八神家　リビング―

「はい、はやて　ちょっと早いけど…お誕生日おめでとう」

そう言うと、はやてはポカーンとした顔で僕の手にある包装された箱を凝視しています

「（インフィニティ、今のはやての顔を写メってお気に入りフォルダに保存っ！保護設定に）」

『（マスターも性格変わってきましたね）』

いや～　サプライズ成功っ♪

はやての面白い顔見れた～

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「はい、はやて　ちょっと早いけど…お誕生日おめでとう」

えっ　なんでキョウスケ君　わたしの誕生日の事知っとるん？
それにそれって…プレゼント？あかん、嬉しくて泣きそうや…

「あ、ありがとう　キョウスケ君…／／／」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「あ、ありがとう…キョウスケ君…／／／」

ぐっ、ヤバイ　可愛い　抱きしめたい…って、イカンイカン！　理性を保たないと…

『（時には感情のまま行動することも大切ですよ♪）』

いやいや！　未成年どころが年齢が二桁も行っていない少女にそれはマズイから　法的に！

「あ、開けてもええかな？」

「う、うん」

前回言っていた　僕手作りのアレ…

――それは――

「うわ…めっちゃ可愛いペンダントやな～」

そう　ペンダントです

もちろん《ただの》ペンダントではないですけどね

「ありがとうキョウスケ君　で、その…な

キョウスケ君…ペンダント付けてくれるかな／／／？」

うっ　かなりドキっとする台詞を／／／

「う、うん　いいよ／／／」

『（マス「（静かにしてようなインフィ君…）」…）』

僕はインフィを黙らｓ…さらに待機状態にして誕生日イブ？でしたが、せっかくということで命懸けで入手した翠屋のケーキをはやてと一緒に食べ　その日の最後にはやての

「今日は一緒に寝たいなー」

発言で　特別に今夜は一緒に寝ることになった

が、

次に目を覚ました時には…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「お前は何者だ?」

To Be continued…

指示は的確にしよう？

深夜

―八神家―

――はやて寝室――

はやてＳｉｄｅ

「あ…あ……」

なんや？目の前で本が勝手に…

？『起動』

ピカーーーーッ

「ひっ…」

なんや！？わたしの胸から光の球が…

カッ！

「んっ！」

シュウーーーーゥ

急に本が光った。その光が収まるとわたしの目の前には…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？Ｓｉｄｅ

「闇の書の起動…確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター　…何なりと命令を」

「……」

（ん？んん？　…ねえ　ちょっとちょっと）

（ヴィータちゃん　シーッ）

（でもさぁ…）

（黙っていろ、主の前での無礼は許されん）

（無礼ってかさぁ…こいつ　気絶しているように見えんだけど）

「うそぉ！？」

「きゅうぅぅ…」

？Ｓｉｄｅ

「ん？こいつ誰だ？」

主の隣で寝ている少年…　なんだ！　この少年から凄ましい気を感じるっ！

「…ッ、シャマルっ！この少年を拘束しろっ！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

と　いう訳で前回の冒頭に戻るんだけど…

「…あの～　貴方達は一体誰ですか？それに何でこんな変なロープで拘束されている…まさか…泥棒ですか？」

一応　一般人を装い質問してみる

…だが、何故だ？こうゆう状況にならないように魔力は消して普通の一般人と変わらないように振る舞っていたのにっ！

「ふっ…　とぼけても無駄だ　貴様から感じる凄ましい気はごまかされんっ！」

…ハイ？　スザマシイキ？…

（インフィニティ…リミッターは掛かっているよね？）

秘匿回線でインフィニティに念話を送ると

『（ハイ、マスターの指示道理　魔力にはリミッターを掛けています　万全です）』

……アレ？……

（ごめん　インフィニティ　もう一回言ってくれないかな？）

『（ですから、マスターの指示道理　魔力にはリミッターを掛けています　万全ですよ）』

……えっと

（……気の方は？）

『（指示がなかったのでそのままですが？）』

……指示がない！？

――――回想――――

「（インフィ…僕にリミッターかけて魔力反応を０にできるかな？）」

『（分かりました　……リミッター設定完了。　これでマスターの魔力反応は０になりました）』

――――回想終了――――

…あ…言ってない…

こ、これはヤバイ…

あ、そうだ　主のはやてに説明して…って

「気絶してるし～！」

「…もう一度聞く

貴様は何者で何故ここに居る？　…まさか主の命を狙っ「いやいやちがいますよ！」なに？」

ここは早く誤解を解かないと…　殺気も痛いし

「僕はこの家「シグナム、こんなやつ遣っちまおうぜ！！」に…って　はぁ！？」

いやいやいや　ヴィータさん　まずは話し会おうよ　うん

しかも字が物騒な方に～

「だから僕の話しを聞いてくれ～」

その後　復活したはやてにより　ヴォルケンリッター達は僕は敵ではないと納得してくれた…

『出会いは最悪、ですがその後　彼女との仲が急接近ってのが王道ですよ　マスター♪』

何の王道だよ…

『もちろんラブコメです』

とあるデバイスのチート化計画（前書き）

時間軸としてはシグナム達と出会う前です

とあるデバイスのチート化計画

○月×日

――別荘内――

『あの…マスター　何をしているんでしょう?』

「いや～　インフィって容量がかなり空いているじゃんだから新たなシステム増設しようかな～と」

『新たなシステム…ですか?』

「そだよ～　…大丈夫、痛くしないからぁ～」

『マ、マスター?何か様子が変ですよ?』

「フッフッフ…マ改造、マ改造～♪」

『い、いやぁぁぁ～』

【データウェポンシステム】

ファイアーウォール…対魔法防御に特化したシールド

ハイパースキャン…超広域探索

イリュージョンフラッシュ…影分身・高速移動

クラッシュレイ…デバイス内部破壊効果

クロックマネージャー…限定空間時間停止

オートプレッシャー…広域超重力波発生

インフィニットレイヤー…使用者及び任意の相手の魔力完全回復

「まぁ　こんな所かな」

『……』

あれ?返事がない…ただのしかばねのようだ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

○月×日

――また別荘内――

『マ、マスター…今度は何を…？』

「ん～？　ちょっと対魔法用の武器を思いついたから創造しようと思ってね～」

『対魔法？それはどんな？』

「うまくいけば、なのはのスターライトブレイカーすら無効化できるやつ～」

ちょっとまってね…

―カチャカチャ…

パンッ！

バチバチバチッ！―

……出来た！」

『（…早っ）』

銘【細雪】

日本刀タイプのマジックウェポン

刃に触れた魔法はすべて細雪のように霧散させる

使用者のレベルが一定以上ないと扱えない

『…チート仕様ですね～』

「まぁ　否定はしません」

『確か某鳥ロボットが使っていたアタックプログラムですよね』

「…よくご存知で…とりあえずリリなの風に設定しました」

『あまり設定変わってませんよ…』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

〇月×日

――またまた別荘内――

『今度も何か作製中ですか？』

「ん　まあね～

…インフィニティ…

―ブラックホールに興味ある？

『…ハイ？』

続く……？

別荘へいこう！

とりあえず数時間に渡る説得により　ヴォルケンズ達の誤解は解けたのですが…

「キョウスケ君も魔法使いなんやね～」

はい、　はやてにバレました

理由は簡単

僕がヴォルケンズ達の説明を聞いている時【魔法】を何も疑いも無く受け入れて話しを聞いていたって事で気が付いたらしい…

おそるべし洞察力っ！

さすが未来の部隊長！

『自分の迂闊さは棚上げですね』

ハイ　すみません…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「分かったことが1つある
闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住きっちり面倒みなあかんゆうことや。幸い住むところはあるし　料理は得意や　みんなのお洋服買うてくるからサイズはからせてな」

ヴォルケンズ…やっぱ唖然としてますね～
はやては急に4人家族が増えた事がうれしいようだな

「そういえばキョウスケ君は洋服どないしてるんや？」

あ～…魔法がバレたならいいか～

「ん？　空気中の魔力を使って服を創ってるよ。」

「？それって？」

あ、難しかったか？

「まぁ　魔法で創っているって事だよ。」

「そうなんや～　…じゃあシグナム達のお洋服も作れる？」

「まぁ　女性用の服は創った事はないからデザインとかあれ「じゃあこれお願いな～」…ばぁ？」

はやてさん　どこから出したのですかその某女性ファッション雑誌…

『ご都合主義です』

何か妙な電波が…

それから僕はシグナム達の服を錬成？したのですが…

「し、下着もですか…／／／」

下着まで創るとは想定外ッス

はやてさんは僕の方を見ながら笑ってるし～　…ドウシテクレヨウ　コノ狸…

錬成し終わった僕ははやて達に渡し、試着しようとしているヴォルケン３姉妹？たち

僕は慌てて部屋を脱出！　（犬モードザフィーラも一緒に）

「我は狼だ…」

あ～…　スマン

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「いただきます」×5

あれから着替え終わった（あれからまた追加発注を受けたが…）ヴォルケンズと一緒に食事することになりました

「そういえば神代、お前が使っている魔法というのはどんなのだ？聞く所によると、我らの魔法とは違うらしいが…」

あ～　やっぱり興味もちますか～　この頃から既にバトルマニアだったのか…

「ん～　魔法発動にはこのデバイスに組み込まれている【マテリア】を使っているんだ」

「まふぉひふぁ？（【マテリア】？）」

はい　ヴィータさん　食べるか喋るかどちらかにしようね～

「モグモグ♪」

…　スマン　やっぱ聞いてくれ

「その【マテリア】ってどんな物なんですか？」

「ん～　簡単に言うと【　星の命を凝縮した結晶】…だったかな？その中にある知識を引き出して魔法が発動する」

たしかそんな設定だったような…

ん？なんか視線が集中しているような

「どうした？みんな？」

「いや…　星の命なんて言われたからつい…　」

「そうか？　ついでに言うとマテリアには大きく分けて5種類あり
魔法　支援　コマンド　独立　召喚　とあるんだけど…まぁ　口
で言うよりは実際に見てもらった方が早いか　今度【別荘】で見せ
るよ」

別荘なら被害は少ないし管理局にバレないしね～

「えっ？キョウスケ君、別荘なんてどこにあるん？」

「ああ、はやては見ている筈だよ？　前にボトルに入ったミニチュ
アがあったでしょ？　あれ実はマジックアイテムで中に入れるんだ
～」

「ええっ！　そうなんか～？」

やっぱ驚くか

「まぁ　一種の結界みたいな物だよ　」

「よし！では早速その【別荘】とやらに案内してくれ！」

…え？

「えーと…シグナムさん　今からですか？　」

「勿論だ！さあいくぞっ」

何目をキラキラさせていらっしゃるんですか～

ヴィータ止め「面白そうだな　私も行ってやってもいいぞ」

あなたも行く気満々ですかっ　しかも上目線っ！

シャマルは

「はやてちゃん　楽しみですね～」

「そやな　私もワクワクするな～」

二人とも既に同行モード！？

ザフィーラ何とか

「……」

目を反らさないで～

最後の砦がぁ～…

「何をしている神代？　早くしないか」

何このフラグたちそうな伏線…

『マスター　これが宿命です♪』

そんな宿命いやだ～～～～っ！

別荘へいこう！（後書き）

作者【久々の連続投稿…】

インフィ『何か理由でも？』

作者【…いや　まぁ…　前の話　武装追加だけの話だったじゃん…】

インフィ『はぁ　たしかにそうでしたね』

作者【冷静に読んだら…】

インフィ『読んだら？』

作者【話短っ！って思ったから～】

インフィ『まぁ　設定みたいな感じでしたからね』

作者【ちなみにまた設定追加する可能性あるんで】

インフィ『またチート化ですか！』

やり過ぎると、いろんなフラグ立つよね～（前書き）

効果音…意外に難しい？

やり過ぎると、いろんなフラグ立つよね～

やってきました別荘へ

「は～　すごい所やな～」

「ほぅ…ここは魔力が充実しているな」

「すげーな！　ここ」

「はやてちゃん　気をつけて下さいね」

「……」

ただ今八神家ご一行は別荘に驚いています

…ザフィーラさん　影薄いっすよ

「ああ　この別荘の中と外の時間の流れは違うから～　ここでの一日は外では1時間しか経っていないから」

「…ほんま魔法ってすごいな～」

「いえ　主はやて　我々もこれほどの魔法は知りえません。神代、これもお前の魔法なのか？」

まぁ　驚くのも無理ないか…

「僕の魔法は平行世界の魔法を主体としているからね　シグナム達の魔法…というより、この世界の魔法とは根本的に違うよ」

FFやネギまの魔法だからね～

「平行世界？」

ん？はやてが首を傾けているが…

「うん　僕は平行世界から来たからそれぞれの世界の魔法が使え「ええええええ～！！」る…って、みんなどうしたの？」

なんかみんなビックリしているけど？

「キョウスケ君って別の世界の人なんか？」

「…アレ？言ってなかったっけ？」

「聞いてね～よ！　てか平行世界って何なんだよ！」

なんかヴィータが半ギレしてるよ

「え　と　キョウスケ君、それは管理外世界からって事ですか？」

「いんや　違うよシャマル　平行世界っていうのは可能性の世界【ヴォルケンリッターがはやてに会わなかった世界】や【八神はやてが神代恭介と出会わなかった世界】つい最近なら【みんなが別荘に入らなかった世界】　そんな数えきれない世界から来たんだ」

僕は【アニメのリリカルなのはの世界】に来た事になるのかな？

「そんな世界があるのか…いや　神代の事を疑う訳ではないが…」

「あらゆる可能性の数だけ枝別れしていく世界…【極めて近く、限りなく遠い世界】って誰かが言っていたかな」

「じゃあ別荘の中案内するから付いて来てね」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

あれから別荘の中を案内しました

途中プールがあるってはやてとシャマル、ヴィータがはしゃいでいたような…

で、一通り案内し終わったらシグナムが

「神代、お前の魔法を見せてくれ」発言をしたので現在インフィニティをＳｅｔ　Ｕｐしています

『何か久しぶりですね』

「まぁ　否定はしないよ…　さて、インフィ　リミッター限定解除、出力３０％くらいで」

『了解、魔力出力設定３０％…リミット解除しました』

さて、何を見せようかな…

「ますばウォーミングアップ…インフィ【ほのお】＋【ぞくせい】マテリアセット」

僕は大刀を炎属性を付加し刀に炎を纏わせる

…シグナムの目が光ったのはキノセイダヨネ？

その刀を振りながら

「…ファイア！」――――ボウッ！

まずは基本魔法を発動っ！

刀から炎が射出された

「次っ【れいき】セット」

【ほのお】が解除され【れいき】がセットされた

そして近くにあった柱を切る！

「はぁぁぁぁ！」

―ガキッ！

僕は柱を少し傷付けた
そして…
――ピシ、パキッ…
傷付けた所から柱が凍りついていく
「【いかずち】セット」
今度は【いかずち】のマテリアをセットし、凍り浸けになった柱に
――――――
「サンダラっ！」
――ズガァァァ
少し派手目の魔法をぶつけた
「なっ…！」
▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲
シグナムｓｉｄｅ
「なっ…！」

正直驚いた

魔力変換資質など無視し、様々な属性魔法を放つ神代。

魔力変換の炎は私も持っているが…神代は氷や雷といった魔法をもあの大刀に纏わせいた…

それを目の当たりした私は

――――闘いたい――――と

願った

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケｓｉｄｅ

「うっし　今日も絶好調っ！」

僕はバリアジャケットを解除して　はやて達の所へ向かった

「どうかな？とりあえずこんなカンジかな？」

「す、凄いな～　あれが魔法…なんやね」

やっぱり初めて魔法見るのは刺激が強かったかな？軽目にしておいてよかった…

『あれが軽目…ですか？』

…ちょい調子にのりましたスミマセン

「まぁ　他にも攻撃以外にも回復、補助、防御とかもあるから」

なんか今シャマルがピクッって反応したような…　あ、

「あ～でも高等な結界とかは苦手なんだ」

その瞬間、シャマルが「あ、私　結界魔法得意ですから任せて下さい」って言っていた

サポート系のエキスパート魔導師としては気になったのか…

「恭介！　お前召喚魔法もできるって言ってたよな？それはやらねーのか？」

「ん？見たい？いいよ～」

ヴィータ嬢のリクエスト入りま～す
何を喚ぶかな…
「…インフィ【シヴァ】セット」
『了解…召喚マテリア【シヴァ】セット」
「――いでよ　シヴァ！」
そして　上空に雪とともに空から舞い降りた――
氷の召喚獣　シヴァが現れた
「いけっ！　ダイヤモンドダスト！！」
――ゴォォォォ…
▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲
「……」
「……」
「……反則だな」

別荘内の海…全部凍っちゃった　テヘッ♪

ザフィーラさん　喋ろうよ…

お酒は２０才まで…？

――別荘内　夕刻―　―

はい！　あれから【イフリート】を使って氷は解凍しました

何故かみんな無言だったけど…　どうしてかな？

『あんなのを見せられれば当然ですっ！』

さて　時刻は夕刻、別荘設定で２４時間は外へ出れないので『スルーですか！？』…

…外へ出れないので、夕食は別荘内で食べることになりました。

変な周波数はキニシナイ～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「にしても　ホンマ不思議やなぁ～

あんだけ騒いでたりしてたのに、外じゃまだ２０分位しか経ってへんなんてな～」

「ホント…恭介、オメーの魔法って反則ばっかだな。」

反則というかチートだね

『意味同じですよ』

「…正直我らが束になっても勝てるかどうか」

「あら　シグナム、あなたが弱気なんて珍しいわね」

「弱気？フッ…むしろ強者と戦えると思うと騎士としての血が騒ぐ…　神代、今度私と手合わせしてくれないか？」

いや　まだ人生終わらせたくないし

『（不老不死がなにを言っているんですか）』

「シグナム　ケンカはあかんよ？」

はやてナイス！

『…チッ』

何故デバイスが舌打ちを！？

「いや…主はやて、ケンカではなく「みんな家族なんやから仲ようしなあかんよ？」…　はい、わかりました」

ああ　なんかシグナムが落ち込んでいるな～　まぁ気が向いたらこっそり別荘で模擬戦してあげよう

『シグナムフラグ立ちますね』

そうなの？

おまけ

「キョウスケく～ん／／／
いっしょにねろ～／／／」

誰だ！未成年（はやて）にワイン飲ませたのは！？

「主、しっかりして下さい！」

「うわ～ん　はやてが　はやてが～ぁ」

「ウフフ、はやてちゃんカワイイ♪」

「……」

カ、カオスだ…

ちなみに犯人はシャマルだった

「インフィ…【チョコボ＆モーグリ】発動っ！」

「ご、ごめんなさ～い～～～～っ」

―ヒュュュュュ…

ドーーン！！！（ペチッ！）

あ、デブチョコボ降臨

シャマル…無事、かな？

ひだまりの中の日常…

『ピピピッピピピッ…』

ガチャ…

「ん、んん…ふぁぁぁ」

朝か…

おはようございます　神代　恭介です

今日は、いつもより早めに起き『マスター…』ん?

「ああ　おはようインフィ…どうかした?」

『私を目覚まし時計の中に組み込む意味…あるんですか?』

「うん　ないよ♪」

『ひどっ!』

まぁ　漫才は置いておいて

『だからスルーしないでください~』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――キッチン――

ジューー

「♪～？～♪」

あ、はやてもう起きている　相変わらず早いな～

『マスターは朝弱いですよね』

まぁ基本はね～

「おはよ　はやてっ♪」

「あー　おはよーさんや～　キョウスケ君♪（ニコッ）」

くっ　朝から笑顔が眩しいぜ

「朝ごはん作ってるんだよね？何か手伝うよ」

「ありがとな～　じゃあキョウスケ君にはサラダ作ってもらおかな？」

「オッケー」

今日はベーコンエッグに焼き魚か～

「…なんかこうやって二人で料理しとると…新婚さんみたいやね／／／」

って　朝から爆弾投下ですか…って、言った本人が赤くなってるし

「あ～…そうだね／／／」

『マスターも赤くなってますね』

うるさいよ　デバガメデバイスっ！

「おはよう　はやてちゃん！」「おはようございます」

「「シャマル　シグナムおはよー♪」」

『見事に息ピッタリですね～』

…コイツ…

「インフィニティ…ブラックホー『スミマセンでした～ぁ　調子に乗ってごめんなさいっ！！』…分かればよろしい」

「？どないしたん？」

「イヤ　ナンデモナイヨ？」

「何でカタコトなん!?」

まぁ　仕様です

「たっだいま〜っ！」

お、ヴィータ　ザフィーラ連れて散歩いっていたのか…って散歩！？

「おかえりヴィータ　ザフィーラ」

「二人ともミルク飲む？」

「飲む飲むっ！」

「……（コクッ）」

「シグナムも？」

「ああ…いただこう」

…誰もツッコミ入れのか？

「…なあ　ザフィーラ…　一応狼…なんだよね？　散歩する狼って一体」

「……主が犬を飼いたいと願っているので」

ああ！　なんて主想いの守護獣なんでしょう　…インフィにも見習せたいよ

『失礼な！私は主に忠実ですよ』

…そうか？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ほんならいってきまーす」

「……お気をつけを主」

朝食を終え、僕とはやて　ヴィータ、シグナム、シャマルたちとお出かけ

ザフィーラは留守番をしてくれるとの事

「ごめんな～みんな　つきおうてもろて…」

「いえ、お気になさらずに主はやて」

「私達も、はやてちゃんとおでかけできて嬉しいですし」

「はやてがいなきゃ家だってどこだって退屈だもんな」

「う～ん　ほんならみんなが楽しいこと何か探してあげなな～」

「いいよ　そんなの　わたし達はマスターがはやてでいてくれるだ

けでうれしいんだから」

「その御心使いだけで我らは満足です」

「私達は　はやてちゃんが好きなんですから」

「みんな…ありがとな。」

……

『マスター　空気ですね～』

気付いてるからツッコミ入れないで～…

「恭介！なにやってんだ　置いていくぞ」

あ、空気脱出。

『…哀れすぎです』

特別講義　必殺技は…（前書き）

ユニーク１００００突破記念

時間軸は少し前になります

特別講義　必殺技は…

――別荘内――

――カチャカチャ

「よし　できた！」

え？何が？

それは…

『マスター！　また私を改造したんですか！！」

うん　そだよ～

『軽っ！！」

「まあまあ　…正直１ｓｔモードの大刀【ルシファー】に必殺技が欲しいな～って思ってさ」

『マスターの存在自体必殺技みたいなものですが…』

いやいや　そんな僕なんて…どう頑張っても惑星一つ壊すので精一杯ですよ

『…十分です！！』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内、山岳フィールド――

「インフィニティＳｅｔ　Ｕｐ！　モード１ｓｔ！」

――ピカッ！

『必殺技ってどんなのを作ったのですか？』

「ん～　剣に周囲の魔力を吸収・増幅させチャージ、んで　そのまま相手を叩っ斬る！」

『…思ったよりシンプルですね』

「甘い！甘いぞ！砂糖に練乳かけて食べるより甘々だよ　インフィニティ君」

『は、はぁ…』

「いいかい？　この【周囲の魔力を吸収・増幅】　ここが第一ポイントだよ
周囲の魔力と言うのは自分はもちろん、相手が放った魔法もこの範囲なんだよ」

『そ、そうなんですか？』

「そう！　その増幅した魔力を込めた剣の威力は計り知れない…
さらに！」

『まだあるんですか！？』

「吸収・増幅した魔法を開放することで特に、接近戦において　剣

撃　砲撃と相手に二段同時攻撃ができるのだよ！！」

『……』

「驚愕したかい？インフィニティ君
早速実践だっ！」

「はぁぁぁぁ！　チャージ！」
《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

―シュュュュウ

「いくぜ！　ブラスト…シグヴァーーン！！」

――ガキィィィィン！

「…バースト！！」
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

――グァァァァン！！

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

『…ここ、山岳地帯でしたよね？』

「山…消えたね～」

この技を後に見たヴォルケンリッター達はこう語る…

「……流石にこれは…」

「……ちょ…反則だな…」

「……やり過ぎですね」

「……」

呆れていましたね

これでカートリッジ使ったら…

『使う気ですか！？次元震発生しますよ！』

リミッター…掛けるか…

【しつけ】は全力全壊で（笑）

キョウスケＳｉｄｅ

やってきました図書館へ～

久々だな～

「そういえば　ここで私とキョウスケ君が初めて会うたんやね～」

「はは　そうだね～　結構昔に思えるよ」

「神代も本が好きなのか？」

「その時はちょうどこっちの世界に来たばかりだったから情報収集に　ね」

『（…マスター）』

「（…ああ）」

「はやて、ちょっと家に忘れ物してきたんで取りに行ってくるよ」

「なんだよ　忘れ物って？」

「まぁ…財布をね」

「あら　キョウスケ君にしては珍しいわね」

「まぁ　そうゆう訳でちょっと取りに行ってくるよ　はやて達はしばらくここにいるんだよね？」

「うん　そやな～」

「じゃあ　シグナム　ヴィータ　シャマル　はやてを…よろしくね」

「おめーに言われなくても分かってるよ　さっさと取りに行ってこいよ！…早く来ないと置いていくぞからな」

…じゃあ…いくか

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「騎士甲冑？」

「ええ　我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜わなければなりません」

「自分の魔力で作りますから　形状をイメージしていただければ」

「そっか…　そやけど、わたしは皆を戦わせたりせぇへんから…服でええか？騎士らしい服　な？」

「ええ　かまいません」

「ほんなら資料さがしてかっこええの考えてあげなな～」

「それにしてもキョウスケ君遅いなぁ～」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「…さてと、　いい加減でてきたらどうですか？」

「……驚いたな　気配は消していたのだが…」

やっぱりあんたか…仮面の男　いや…　猫姉妹

「まぁ　監視されているのは知っていたからね　当人が現れたんだから挨拶くらいはしないと…」

「……闇の書に関わるな　これは警告だ」

いきなり本題か～

「……いやだ　と言ったら？」

「……排除する」

「ふ～ん…ならっ！」

僕は【瞬動】を使い仮面の男の後へ

「なにっ！」

「…誰を排除するんでしたっけ？」

僕は瞬動と同時にＳｅｔ　Ｕｐ　しインフィ２ｎｄモード【ジリオン】を突き付ける

「…今後八神家に近づかないでもらえますか？　仮面の男さん…ちなみに」

「――――【オートプレッシャー】っ！」

僕の背後に超重力を展開

――――ドカァァァ

「グッ……な、なぜ【二人】いるっ…こ、ことに気付い…た！？」

威力は押さえているとはいえ　よく超重力内で喋れるな～

「やれやれ　初めに言ったでしょ？監視されているのには気付いていた　と」

そろそろはやて達の所に戻らないと

「さて、こちらからも警告です…　八神はやてに危害を加えたら…
文字どうり潰すよ？」

言い終ると同時にオートプレッシャーの出力Ｕｐ

「グァァァァ…」

よし　調きょ…説得終了っと

『今のが説得？よくて脅迫レベルですよ』

まぁ　キニシナイ～

とりあえず　二人にはバインドかけて放置して帰りました

「おせーぞ恭介！いつまで待たせる気だよ！！」

ヴィータさん　人の苦労も知らず…

「まぁまぁ　ヴィータ　キョウスケ君も悪気があった訳でもないんやし…な？」

「う～　はやてがそう言うなら…」

ありがとうはやて様っ

「キョウスケ君が遅れたお詫びに皆に何か買うてくれるって♪」

…ハイ？

「はやて…今何て「拒否権はないで～」…ハイ　ワカリマシタ」

いや　別にいいんだけどさ～

「じゃ　いこか～」

こうして次の目的地へ…

次回を待て…

君は刻の涙をみる…

「いや　見ないしっ！」

～約束～（前書き）

キョ「…作者よ　言い訳は？」

作【スミマセンスミマセンスミマセン！】

キョ「８話と９話投稿し忘れるとは…」

イン『１ｓｔ　Ｍｏｄｅ　起動…』

作【え、その　…】

キョ「さぁ　作者よ…お前の罪を数えてな！」

作【ひぃぃぃぃ！】

キョ「ブラストっ！シグヴァーン！！」

ズガァァァァ…

～約束～

は～るばるきたぜデパートぉ～

『マスター…軽くヤケになってませんか』

ナッテナイヨ～

――デパート内トイ○ら○――

「主はやて、ここは…？」

「ええからええから　こーゆー所にこそ　それっぽい材料があったりなぁ」

「はやて…ぬいぐるみ欲しかったの？」

「あ、ううん　ちょっと資料集めとしてなここに寄ったんよ」

話しを聞くと、どうやらヴォルケンリッター達の騎士甲冑の資料集めに寄ったらしいが…

何故トイ○ら○に？

すると

じ～～～～

ヴィータがとある物体を凝視

「ヴィータちゃん　どうしたの　…ヴィータちゃん？」

シャマルの声が聞こえない位自分の世界に入っているのか…

―クイクイッ

ん？裾がひっぱられて？あ、はやてか

「（ヒソヒソ）なぁキョウスケ君、あんな・・・をこっそり買ってきてくれへんかな？）」

「（ヒソヒソ）…それは構わないが…」

「（ヒソヒソ）じゃお願いな～」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――デパート帰り――

「いい風ですね～」

「ほんまや～」

「お天気もいいですし」

「絶好のお散歩日よりやな～」

いや～あの後さらにみんなの服を購入。
ん？僕が創ってなかったかって？
さすがに僕に創ってもらってばかりは…（下着関係は精神的にキツイからと進言したりもしたが）という事で買いましたよ

「ヴィータ」

「ん？なにはやて？」

「ハイ、ヴィータ」

はやての手には僕が先程はやてに頼まれて買ってきた――

「袋からだしてもええで」

――ガサゴソ――

「うわぁ…はやて、ありがとう」

――うさぎ（らしい）ぬいぐるみがあった

「そのぬいぐるみな、私とキョウスケ君からのプレゼントや。ヴィータ気に入っていたようやから」

「恭介も？」

何驚いた顔でこっちみてるんだ？

「って言っても僕ははやてに頼まれて買って来ただけだけどね（ニコッ）」

まぁ実際そうだし

「……と／／」

「ん？ヴィータ　何か言った？」

「な、なんでもねーよ／／／」

「？？？」

ヴィータＳｉｄｅ

「恭介も？」

正直驚いた

あいつからプレゼントなんて想像できねーからな

「って言っても僕ははやてに頼まれて買って来ただけだけどね（ニコッ）」

うっ…その笑顔、反則だろ／／／

なんか顔が熱くなってきたじゃねーか

…はやてと恭介からのプレゼント…か

「（ボソッ）ありがと／／／」

「ん？ヴィータ　何か言った？」

恥ずかしくて二度も言えるか！

「な、なんでもねーよ／／／」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「さ、はよう帰ってご飯にしよな～」

「あ、今日は私が作りましょうか？」

シャマルの発言に世界が止まった…

「…シグナム、シャマルを台所に近づけないように見張っててくれ」

何とか復活した僕はＶ作戦を提案

「勿論だ　主はやての命を護る為　その任務、我が命に懸けで遂行しよう！」

「ちょっと～二人とも酷いっ！」

いや、マジ命に関わるから…シャマルさん…料理の勉強もっとしよう

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――夜、八神家リビング――

なんとか対シャマル絶対防御壁を展開し無事に食事を終えた僕たち

…途中部屋の隅でうずくまって黒いオーラを漂わせていたシャマルがいたような気がしたが…

はやてＳｉｄｅ

わたしはシグナムに抱っこしてもらい夜空を一緒に見とる

「うわぁ　綺麗…」

今日は天気がよかったからな～お星さまが綺麗や

「主はやて　本当に良いのですか？」

「何が？」

「闇の書の事です…あなたの命あらば我々はすぐにでも闇の書のページを蒐集しあなたは大いなる力を得られます。この足も治るはずですよ」

確かに足が治ってくれるならうれしい…けど

「あかんて…闇の書のページを集めるにはいろんな人にご迷惑をかけせなあかんのやろ？　そんなんはあかん…　自分の身勝手で人に迷惑かけるのは良くない…

わたしは　今のままでも十分幸せや…父さん母さんはもうお星さまやけど、遺産の管理とかはおじさんがちゃんとしてくれてる」

「お父上の御友人…でしたか？」

「うん　お陰で生活に困ることもないし　それになにより…今はみんながおるからな」

今のわたしには家族がおる　それだけで満足や

――バタバタバタ

「はやて〜！」

「どないしたヴィータ？」

「はやて　冷蔵庫のアイス食べていい？」

「ヴィータ、あれだけご飯食べたのにまだ食べるのか？」

「うるせーな　恭介！育ち盛りなんだよ

それに、はやてのご飯ははギガうまだしな♪」

「しゃあないな〜　ちょっとだけやで」

「お〜♪」

――バタバタバタ

「…シグナム」

「はい？」

わたしはシグナムの目を真っ直ぐ見つめ…

「シグナムはみんなのリーダーやから約束してな」

「はい？」

「現マスター八神はやては闇の書にはな～んも望みない
私がマスターでいる間は闇の書の事は忘れてて
　みんなのお仕事は家で一緒に仲良く暮らすこと…　それだけや…
約束できる？」

「誓います　騎士の剣にかけて」

ありがとな　シグナム――

願わくば皆といつまでも一緒にいられますように…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「おい、ヴィータ　一体何個アイス食べるんだよ　しかもハー○ンダッ○ばっか」

「いいじゃねーか　減るもんでもねーし」

「いや　減るって…」

嵐の後にも…　前編

「ほんならいってきま～す」

「はい　お気をつけて」

今日は、はやてとヴィータが二人で図書館に行ったので家には僕シグナム　シャマル　ザフィーラだけになりました

これがこの後の惨劇の始まりになろうとは…

シグナムＳｉｄｅ

「はい　お気をつけて」

「あら、シグナム　はやてちゃん達はもう行ったの？」

「ああ　先程ヴィータとお出かけになられた」

「ね…闇の書の管理人格の起動って、蒐集が４００頁越えてからだ

っけ？」

「ああ、それと主の承認がいる…つまり主はやてが我らの主である限り、私達や主達が管理人格に会うことはないだろうな」

「そうね、はやてちゃんは闇の書の蒐集も完成も望んでいないし」

「どちらにしろ主はやてには管理人格のことは伏せておかないとなあのお優しい主の事だ　きっと気に病まれてしまう」

「そうね…あの子【闇の書】もわかってくれるわ…」

「そういえば神代はどうした？」

「キョウスケ君？今日はまだ見ていないわね　まだ部屋かしら？」

「そうか…　シャマル、私は神代と【別荘】に行ってくる！」

「え？」

―タッタッタッタッ

「あ～…行っちゃった…キョウスケ君、大丈夫かしら？

…あ！そうだわ！！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▽▲▽▲▽▲▽▲▽
――八神家個室――

キョウスケＳｉｄｅ

「ふうっ　とりあえずこんな感じかな？」

え？　なにをしているかって？

【別荘】の拡張ですよ～

流石に部屋には置けない大きさなので、使っていない部屋に設置（はやての許可済）

【別荘ｖｅｒレーベンスシュルト城】完全再現！

「じゃあ　早速試運転がてら中に入るか」

と、魔法陣を展開「神代　いるか？…っこれは！？」っと

「ん　シグナムか　どうした？」

まぁ【別荘】にびっくりしてるとは思うが

「あ、ああ　神代に模擬戦を頼もうとしたのだが…これは？」

「これ【別荘】だよ　少し拡張したんでこれから中に行こうとして

いたんだか…シグナムも付いてくる？」

「う、うむ　いいのか？」

「ああ　まだ細かい設定していないけど問題ないだろう　模擬戦もこの中でしよ「さあ行こう。すぐ行こう　直ちにいくぞ！」うぉ！」

シグナムのキャラが半壊した

『シグナムフラグ…』

インフィさん！今日の開口1番それ！？

「はぁ…　じゃあ僕に捕まって」

シュッ――――――

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

嵐の後にも…後編

――――別荘内――――

「ほぉ…」

「シグナム　こっちこっち　とりあえずこの魔法陣で城まで一気にいけるから」

「…あちらの魔法陣は？」

「ああ、　修行用に作った各フィールド　砂漠　雪山　熱帯ジャングルとかに行く魔法陣だよ」

…凄くシグナムの顔が輝いている…

「ま、まぁとりあえず城までいってみよ」

「うむ♪」

シュッ――――――

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ここは？」

「ああ　カフェテラスだよ　でここを真っ直ぐ行くとお城があるよ～

中はそこらの高級リゾート施設以上になっている」

さすがにメイドは居ないが…

『マスターにメイド趣味があったとは…』

いや　ないよ！

…多分

「では神代…早速手合わせを頼む」

シグナムがレヴァンテインを構えた

てかいつの間にバリアジャケットを展開していたん！？

『漫才中にですよ』

あ、さいですか

「インフィニティＳｅｔ　Ｕｐ！」

ピカッ――――

「インフィニティ　１ｓｔモード大刀…【ルシファー】」

―カチャ

「いくぞ！」

――ガンッ、ガンッガキッ！

僕はシグナムの斬撃を剣で受け

「はぁぁぁぁ！」

―ガキィィィ

「ぐっ…」

―ドカァァァン

シグナムを吹っ飛ばした

「くっ、流石にやるな　神代…だか…レヴァンテイン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

「紫電…一閃ッ！」

やば、

「――――！」

―ドカァァァン！

シグナムＳｉｄｅ

「紫電…一閃ッ！」

―ドカァァァン！

「ハァハァ…クッ、手応えがない…どこだ？」

「―ここだぁ！」

しまった！上か！

上空に神代がいた…筈なのに…

――ドカッ

「ぐっ…！？」

私の【横に】居た神代に攻撃を受けた…

「ッ…レヴァンテイン！」

《ｊａ》

「シュランゲフォルム…飛竜一閃！」

横にいた神代に向かって連結刀を放ったが…

――シュッ

な、消えた!?

残像!?

くっ　神代は何処だ?

そう思考した次の瞬間…

私の意識は闇に落ちた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「―ケアルガ」

僕は気を失ったシグナムにケアルガをかけ治療中

「……ん」

お、気がついたかな

「か、神代…はっ！ここは!?」

はい　落ち着こうね～シグナムたん

「ここは城の中だよ　シグナムは模擬戦中に気を失っちゃって…」

「そうか…私の負け…か」

「ゴメン」

「何故謝る?負けたのは私がまだ未熟だった為だ　お前が謝ることはあるまい」

「あ、いや　そうなんだけど…　ありがとうシグナム（ニコッ）」

「う、うむ　わかればよい…／／／」

「???」

「と、ところで神代、さっきの模擬戦だが…さっきのは何なのだ?」

ああ　あれか～

「【イリュージョンフラッシュ】　簡単に説明すれば、分身しながら高速移動していたんだ　」

「では私は神代の分身に撹乱されたのか…フッ私もまだまだだな」

「さ、一休みしたら家に帰ろう
まだ別荘の時間設置は変えてないから外も夕方だろうし
そろそろはやて達が帰ってくる頃だしね」

「ああ　そうだな」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――シュッ

「ただい……ま？」

僕とシグナムの目の前にある光景…

「ザ、ザフィーラ！！どうした？しっかりしろ！！」

そう　ザフィーラが泡を吹いている

ああ　ザフィーラ
天に召されたか…

となりにはネ○は居ないか…

「……我は生きて…いる」

無事だったんだねパト〇ッシュ

「どうしたんだザフィーラ？　主の身に何かあったのか！」

「い、いや…主はまだ帰宅されていない…原因「あら　おかえりなさい　シグナム　キョウスケ君♪」　コレだ…」

シャマルさん…

そのエプロン姿…もしかして…

「今日は私が夕飯作ったから楽しみにしていてね～♪」

「シグナム…」

「なんだ…？」

「はやて達は助けないとな…」

「…ああ」

その後　帰宅したはやて＆ヴィータは…

「た、大変や！はよ１１４番…ちゃう！あれ？救急車って何番やっけ！？」

「シ、シグナム～しっかりしろ～！　恭介も気をしっかり持て～」

「ううっ　ごめんなさ～い」

大混乱だったそうな

「な、なんで【ちりょう】マテリア使っても治らないんだよ…」

『ギャグ補正です♪』

加速するストーリー

――――某管理外世界――――

「…シューティングソニック！」

「■■■■■■！」

ドカァァァァ…

「すげーな…　幻想種を一撃かよ…」

「ふぅ…　ヴィータ　蒐集を」

「あ、ああ」

みなさん　こんにちは　神代　恭介です

僕たちは今【蒐集】を行う為　世界を飛び回っています

「なに一人でブツブツ言ってんだ？
それより見ろよ！闇の書の頁が１０ページ埋まったぞ！」

「そっか…　でも先はまだまだ遠いな」

「ああ…　はやくしねーとはやてが…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――数日前――

―海鳴大学病院―

今日ははやての定期検診に来ているのだが…原作道理ならそろそろ…

「シグナムさん　シャマルさん…ちょっといいかしら?」

石田先生から二人に話しがあるそうだ

やはりきたか…

シグナムＳｉｄｅ

「命の危険!?」

「ええ…　はやてちゃんの足は原因不明の麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しづつ上に進んでいるんです。この二ヶ月は特に…このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんで

す…」

「何故！何故気付かなかった！！」

「ごめんっ、ごめんなさいっ…私っ」

「お前にじゃない…自分に言っている」

そう　主はやての麻痺は病気などではなく【闇の書】の呪い…
主はやてが生まれた時から共に有った【闇の書】は、主の身体と密接に繋がっていた…
抑圧された強大な魔力はリンカーコアがな主の身体を蝕み、健全な肉体機能どころか生命活動さえ阻害していた…

そして、主が第一の覚醒を迎えたことでそれは加速した

それは四人の活動を維持するためごく僅かとはいえ主の魔力を使用している事も無関係とは言えないはずだった

――――夕方

私はヴィータやザフィーラに現在の主の状態を話した…

「……なきゃ、
はやてを　助けなきゃ！！　シャマル！シャマルは治療系得意なんだろ！そんな病気くらい治せよ！」

「ごめんなさい…私の力じゃどうにも…」

「なんでだ…なんでなんだよっ！うっうぅぅ…」

「…シグナム」

…解っているザフィーラ

「我らに出来る事はあまりに少ない…だが」

このまま主を見殺しにする訳にはいかない！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――深夜

「主の身体を蝕んでいるのは　闇の書の呪い…」

「はやてちゃんが闇の書の主として真の覚醒を果たせば！」

「我らの主の病は消える…少なくとも進みは止まる！」

「はやての未来を血で汚したくはしたくないから人殺しはしない…だけど、それ以外なら何だってする！！」

…申し訳ありません我らが主…ただ1度だけ　あなたとの誓いを破ります

「我らの不義理をお許し下さい！」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

キョウスケSide

「やはり原作道理蒐集が始まる　か…」

さて、どうしたものか…

ヒーローは遅れて参上！！

――管理外世界――

ヴィータＳｉｄｅ

「く、くそぅ…はやてに貰った騎士服をこんなにグチャボロにしやがって…ま、騎士服は直るし　そこそこ頁を稼げたからいいけどよ…」

―ブチッ

あ…靴が…

―ドサッ

くっ、倒れている暇なんでないんだ…ちくしょう、体中…

「い、たくない！痛くない！！こんなのちっとも痛くない！！　昔とはもう…ちがうんだ

帰ったらきっと…暖かいお風呂と、はやてのご飯が待ってるんだ…

　優しいはやてがニコニコ待っててくれるんだ

そうだよ…私は　すっげー幸せなんだ！

だから　こんなの　全然　痛くねーェェェ！」

―ゴゴゴゴゴ…ドカァァ！

「■■■■■■ッ！」

クソッまだいやがったか

「アイゼン！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

「たぁぁぁぁ！！」

――ドカァァァ！！

「■■■■■ッ」

――ドドォォン！

「ハァ　ハァ　ハァ　よ、よし　蒐「■■■■■！！」しまっ！」

しまった！もう一匹いやがったか！

――ごめん　はやて――

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？Ｓｉｄｅ

「――ファイヤーウォール！」

――ドカァァァ！

ふぅ　間一髪

「…大丈夫かい？ヴィータ」

「な、なんで…なんでお前がいるんだよ！【恭介】っ！」

なんでとはご挨拶だね～

「そりゃ～ヴィータを愛しているから♪」

「なっ…／／／　なにいってやが…ッ！」

弄ぶのはこのくらいにして…

『鬼畜ですか』

鬼畜？新製品のお菓子の名前？

「―フルケア」

ヴィータの傷を完全回復っ

「あ…身体が…」

「ヴィータは下がってて…　コイツは僕が倒すから」

ま、この程度なら軽いしね～

「な、なに言ってやがる！　こいつは私が「はい　黙ってようね～【サイレス」】…！？％＃＊？」

さて　サクッと倒すか♪

「インフィニティ２ｎｄモード」

『Ｍｏｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ！　【ジリオン】』

「いくぞ！　カートリッジロード！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

「はぁぁぁ！　コズミックブラスター！！」

―ズガァァァァ

「■■■■■■■」

―ドドォォン―

「な！い、一撃かよ…」

もちろん非殺傷設定だから無事だよ～

「さて、ヴィータ…一度家に戻ろうか

シグナム達にも話しがあるし」

「…ああ」

ヴィータはその後こっそり蒐集していたが…

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――八神家　別荘内――

それから　シグナム　ヴィータ　シャマル達と話し合いが行われた
ザフィーラははやてと外出してくれた

「…なるほどな　はやての命が」

まぁ　知っていましたよ?

「それで神代はどうするつもりだ?…もし邪魔をするのであれば…」

――カチャ

「まぁ　とりあえずレヴァンテインから手を放してくれ　…ま　結

論から言うと　…
なんで、はやての危機に僕だけのけ者なのかな?」

「う、い、いや今回の事は神代には関係な「関係大アリだろ?はやての事なんだから」…」

「でも　キョウスケ君…私達のしている事はどんな理由があれ犯罪行為…貴方を巻き込みたくなかったのよ…」

すでに巻き込まれてるんだけどね～

寧ろ　巻き込まれに来たのかも

『（Ｍッ気もあった「（今回シリアスだから黙ってようね…）」ハイ…』

「シャマル　リンカーコアから魔力を蒐集された人はどうなる?」

「え、えっと　余程の事がない限り命に別状はないわ　しばらく魔法が使えない位かしら」

「そうか…今まで管理局員から蒐集したか?」

この時期すでに管理局員から魔力を奪っていたか原作でも分からないからな

「いや　まだ管理局とは戦っていない　主に魔法生物からの蒐集だが…」

「魔導士からの蒐集なら頁が稼げるんたけどよ…管理局に目付けら

れると厄介だってシグナムが…」

どうやら　まだ管理局員からは蒐集してないか

…まぁ　蒐集しても最悪アースラ関係者からだけなら【説得】して丸め込む事はできると思うが…

「なら　今までどうり魔法生物だけから蒐集してくれ　それなら罪も少しは軽くなると思うし…それから僕も協力する！」

○○王　爆誕！？

と言う訳で『どういう訳かは前々話から読んでクダサイ』…

と、とりあえず　僕も蒐集に参加しています。

参加に当たってまず僕のリンカーコアから蒐集しては?という事を皆に話したら…

「…えっ！？　キョウスケ君にリンカーコアの反応が無いんだけど…」

と　シャマル女医の診断で判明

この世界の魔法の規格外らしい

蒐集したら一気に６６６頁いくと思ったのに…　ちくしょう

――八神家――

はやてＳｉｄｅ

最近はみんな忙しいみたいやな～

シグナムは近所の剣道場で非常勤の講師

末っ子ヴィータは近所の老人会のゲートボールチームに入れてもろて　おじーちゃんおばーちゃんのアイドル（？）に

シャマルはご近所奥様方との交流とか皆のお買い物とか（料理は私と一緒でないとあかん！と止めてある）

ザフィーラは常に誰かと一緒におるな～

まあ　みんなそれぞれやりたい事があるんはええコトやな…

――ガチャ

「あ、はやて　どうしたの？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「あ、はやて　どうしたの？」

なんか元気ないな

「あ、キョウスケ君　なんでもあらへんよ」

「なんでもない人がそんな淋しそうな顔しないよ」

「…かなわんなぁ

…最近　皆一緒の時間があんまり無くて…ちょっと前までは皆ずーっと一緒やったから少し淋しいなって」

――ナデナデ

「ヒャッ！／／／」

「大丈夫だよ　はやて　みんなはやての事が大好きなんだ　今はちょっと忙しいけど、またみんな一緒に暮らせるようになるから　ね」

僕ははやての頭を撫でながら元気つけようとしたのだが…

はやての髪、撫でると気持ちいいな～

『ロリ王降臨ですか』

ロリ王ってなにさ！？

「う、うん……／／／」

あ～　はやても顔真っ赤だ～

「「ただいま～」」

え！？

「はやて　ただい…ま」

「ごめんなさい　ちょっと遅くなっちゃっ…あらあら♪お邪魔だったかしら」

やばい…

『マスター　貴方の事は忘れません…』

って　おい！

「きょーうーすけー！！　てめーはやてに何してやがる！！！」

ヴィータがどす黒いオーラを放っている！！

「い、いや　これは　その…　な、なぁ　はやて」

はやて助けて…

「……／／／」

ってトリップされていらっしゃる～！

こ、これはマズイ！　…そうだ！

「…ヴィータ」

「なんだよ?命乞か?」

僕はヴィータに近づき

――チュ

「な!……／／／」

ヴィータの頬にキスをした

計算どうりパニクりまくってるな

「今だ!【エスケプ】!」

――シュン

脱出する際、背後から凄い殺気を感じたのは…気にしないようにしよう…

『やはりハーレムの才能ありですね』

もういいや…

その後　八神家ではやてがヴィータにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしたそうな…

スマン　ヴィータ　君の犠牲は無駄にしない！

「次はキョウスケ君にO☆HA☆NA☆SHIせなあかんな～」

シャマル曰　修羅神が降臨した　と後に語っていた

激突！！赤と白（前書き）

本格的な戦闘シーン…

はっきり言ってグダグタですっ！

すみませんが想像力全開で読んで下さい

ホント戦闘って難しい…

激突！！赤と白

――夜、海鳴市市街地――

「どうだヴィータ　見つかりそうか？」

「…居るような、居ないような」

「こないだっから時々出て来る妙に巨大な魔力反応　あいつか捕まれば一気に２０頁くらいは行きそうなんだけどな」

「別れて捜そう…闇の書は預ける」

「ＯＫ　ザフィーラ」

「…本当にいいのか？　人は襲わないと恭介と約束を…」

「…急がないとはやての命が危ないんだ…多少の危険は覚悟の上だ」

「…わかった」

―スッ

「…封鎖領域　展開」

「…魔力反応！　大物見っけ！！いくよグラーアイゼン！」

《Ｊａｗｏｈｌ》

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――ビル屋上――

ヴィータＳｉｄｅ

（いた！アイツを仕留めれば！！）

「テートリヒ　シュラーク！」

ヴィータは少女に攻撃を仕掛ける

――ドカァァァ

ヴィータの攻撃によりビルから落下する少女

「キャアア！！

レイジングハート！お願い！」

《Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｌｅａｄｙ　Ｓｅｔ　Ｕｐ》

――ピカッ

少女は光に包まれ白い制服…バリアジャケットを展開し空に舞う

（ちっデバイスを起動さやがったか…でも関係ねぇ！！）

「ふっ！おらぁぁぁぁ！！」

それでも構わずヴィータは追撃をかける

――ドガッ

少女…なのははヴィータの攻撃を飛び続け回避する

「いきなり襲い掛かられる覚えは無いんだけど！　何処の子？一体何でこんな事するの！？教えてくれなきゃ分からないってば！！」

――ヒュン！　ヒュン！

なのはが予め放っていた誘導魔力弾をヴィータの背後まで操作して攻撃する

「ん！　くぅぅ！！」

（ちっ、誘導弾かよ！）

――ドカァァァ！

ヴィータは一発食らうも防壁で耐える

「このやろぉぉぉ！！」

《Ｆｌｕｓｈ　Ｍｏｖｅ》

―ヒュン！

ヴィータはなのはを攻撃しようと接近するが、なのはは高速飛行魔法で回避

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ》

「話しを…」

《Ｄｉｖｉｎｅ…》

「聞いてってばぁ！！」

《Ｂａｓｔｅｒ》

――ドゴァァァ！

なのはは砲撃魔法でヴィータを攻撃

しかし僅かにヴィータの横を通過

「ぐっ、あっ！」

その砲撃はヴィータの被っていた帽子を掠め破り、帽子は落下していった

――パサッ

（はやてがくれた帽子…アイツ！許せねぇ！！）

ヴィータの瞳に憎しみが宿り、その瞳をなのはに向ける
―キッ！
「ああ…っ」
「グラーアイゼン！カートリッジロード！！」
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》
《Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ》
「ふぇぇ！？」
ヴィータのデバイスにピック状の突起物とブースターが現れる
「ラケーケン！！うぉぉぉぉ！」
ヴィータはブースターの力でさらに加速しピック状のハンマーで攻撃
――ブォン！パキィィィ！
なのはは障壁で防ぐが障壁を貫通　そのままレイジングハートに直撃
「ハンマー！！！」
――ドカァァァ！！
「キャアアアア！！」
そのままレイジングハートの柄を折り、なのはをそのままビルに吹

き飛ばす

――ドコォォン！――　カラッカラッ

「ぐっ　ゴホッゴホッ！」

「てぇぇぇぇぇ！！」

「キャ！！？」

ビル内部まで吹き飛ばされたなのはにさらに追い撃ちをかけるヴィータ

――グォォォォォ！

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

レイジングハートはなのはを守る為、自動バリアを展開

ヴィータの攻撃を防ぐ

――ドガガガガガ！

（シールド！？カンケーねぇ！！）

「ぶち抜けぇぇぇ！！！」

《Ｊａｗｏｈｌ》

ヴィータの攻撃はレイジングハートの障壁となのはの纏っていたバリアジャケットの上着を破壊していった

――パリーン！ドカァァァン！！

その勢いで、なのはは吹き飛ばされ倒されてしまう

「ハァ　ハァ　ハァ…あ、ああ　くっ！」

ヴィータはグラーアイゼンをさらに握り締め、なのはに近寄る

「…うっ」

―カタカタッ

なのはは意識を失う寸前になる状態にもかかわらず戦意を喪失せず、震える手でヴィータに破損したレイジングハートを向ける

―スッ

ヴィータはなのはにグラーアイゼンを振り下ろそうとする…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはＳｉｄｅ

（…こんなので終わり？嫌だ　ユーノ君　クロノ君　フェイトちゃん…！）

――ガキィ！

「なっ…！」

（え、何ともない…？）

「ごめん　なのは　遅くなった」

（この声は…）

「ユーノ君…？」

なのはを抱き抱えた少年、そして…

「ちっ、仲間か！？」

振り下ろされたグラーアイゼンを突如現れた漆黒のマントを纏った少女に防がれていた

―ガチッ！…スタッ

お互いのデバイスで弾き返し距離を取る

《Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ》

「…友達だっ！」

「…フェイトちゃん？」

漆黒のマントを纏う少女…フェイトがヴィータの前に立ち塞がった

To Be continued…

激突！！　赤と金　オレンジやピンクも参上！？

フェイトＳｉｄｅ

フェイトは赤い服を着た魔導師にバルデッシュを向ける

「民間人への魔法攻撃　軽犯罪では済まない罪だ」

「あんだテメー　管理局の魔導師か？」

「時空管理局嘱託魔導師　フェイト・テスタロッサ…
抵抗しなければ弁護の機会が君にはある　同意するなら武装を解除して「誰がするかよ！！」！」

―タッ！

しかしフェイトの勧告に耳を貸さずに逃げていく

（くっ！逃がさない！）

「ユーノ　なのはをお願い」

「うん」

フェイトは、なのはをユーノに任せて赤い服の子を追いかける

―タッ！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――上空――

ヴィータＳｉｄｅ

（ちっ来やがったな！）

「バルデッシュ！」

《Ａｒｃ　ｓａｂｅｒ》

「ふんっ！」

上空にいたヴィータに魔力刃を飛ばす

―ザンッ！

（ちっ、させるかよ！）

「グラーアイゼン！」

《Ｓｃｈｗａｌｈｅ　ｆｌｉｅｇｅｎ》

ヴィータもフェイトに向かって魔力球を飛ばす

―バギュッ！

お互いの攻撃が交差し二人に襲いかかる

「っ！障壁っ！」

《Ｐａｎｚｅｒ　ｈｉｎｄｅｒｉｓ》

―ブォン、

―ガガガガッ！

ヴィータはフェイトの攻撃を防御

―ヒュン！ヒュン！ヒュン！

一方ヴィータは攻撃を誘導して回避しているフェイトを追尾している

「はぁぁ！バリアァァァ、ブレイク！！」

突如下からアルフが現れ、ヴィータの隙を付いて障壁を破壊。同時にフェイトも攻撃を回避し魔力球を破壊

―ドカァァァン！

―ガキィ！、パリン！！

「このぉ！　ふん！」

アルフにヴィータの鉄槌がヒット

―ドカァ！

「ッ！うわぁ！」

そのままアルフは落下していく

（よし、一匹吹っ飛ばし―！？）

「はっ！」

フェイトがその隙を付きバルデッシュを振りかざす

《Ｐｆｅｒｄｅ》

ヴィータは高速飛行魔法を展開しフェイトの攻撃を回避する

―ヒュン！

（食らうかよ…っ！ちっ）

刹那、落下したはずのアルフからバインドを掛けられうになるヴィータ

「はぁぁ！」

―ギュン！

さらにアルフからののバインドを回避する

だがヴィータの高速魔法が解除される瞬間をねらい、続けざまにフ

エイトはバルデッシュを構え切り掛かる
「はぁぁぁぁ！」
―ガチッ！バチバチッ！バチッ！
フェイトとヴィータ、二人のデバイスが攻めぎ合ってお互い一方も引かない
（…くっそぉ　ぶっ潰すだけなら簡単なんだけど…それじゃ意味ねーんだ
魔力を持って帰らないと…　カートリッジ残り2発　やれっか？）
Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ
▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲
――アースラ、ブリッジ――
「アレックス　結界抜き　まだ出来ない？」
「解析完了まであと少し！」
「術式が違う…　ミッドチルダ式の結界じゃないな」
「そうなんだよ　何処の魔法だろう　これ？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

ヴィータＳｉｄｅ

「こんのぉ　うっ！？」

フェイトに攻撃をしようと突進するヴィータだが、

―ジャキィィン…ガチッ！

「んんん！」

ヴィータはフェイトに集中していた為、アルフのバインドに拘束されてしまう

（ッ！あの使い魔のバインド！？）

「ぐっ…んんっ！」

脱出しようとするヴィータだがバインドははずれない

「終りだね　名前と出身世界　目的を教えて貰うよ」

（ちっ、こんな所で！）

「んぐぐぐぐ…」

フェイトを睨み付けるヴィータ…

「…はっ！なんかやばいよ！　フェイト！」

「…勘がいいな…そこの使い魔」

（え？こ、この声は…）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「…勘がいいな…そこの使い魔」

…まったく…ヴィータは、暴走した結果捕まってるし

『（まぁ、原作どうりの展開でしたね）』

さて、介入するか

「サンダラ！」

―ズガァァァ！

まずはフェイト&アルフを牽制っと

「くっ！あ、あなたは誰ですか！？」

「このコの仲間…って言えば分かりやすいですよね？」

「…なら、武装を解除して投降して下さい。民間「状況が分かっていないようですね」えっ？」

「僕は仲間を助けに来たんですよ？何でわざわざ捕まらないといけないんですか？それと…」

「…？」

「…仲間は僕１人とは限りませんよ」

僕がそう言い終わると同時に

―シュン！タッ

「シグナム！」

「…レヴァンテイン　カートリッジロード！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

「紫電一閃！　はぁぁぁ！！」

フェイトに切り掛かるシグナム　フェイトはバルデッシュで受け止めるが

―ガキィィィ！

バルデッシュは一刀両断されてしまう

「はぁぁぁ！」

さらにシグナムはフェイトに切り掛かろうとレヴァンテインを振りかざす

「っ！？」

《Ｄｅｆｎｓｏｒ》

シグナムの攻撃に反応出来ないフェイトに代わり、バルデッシュが自動防御でフェイトを守る

―ガキッ！

が、バリアごとフェイトを叩き落とす

―ドカァァァン！！

アルフＳｉｄｅ

「フェイト！？」

（フェイトが落とされた！？
くそっ！早く助けにいかないと…っ！）

―スッ

「お前の相手は我だ…」

アルフの前に青い服を着た男が立ちはだかった

「こんのぉ！邪魔するなぁ！！」

―ドカァァァ！

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

助っ人ついでにコンビニへ♪

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「ヴィータ、無事か～？」

「うっせー　これから逆転する所だったんだ！」

「ハァ…確か僕は人は襲わないようにって言ったよね？」

「うっ…」

「まぁ、無事でよかったよ。お前がケガでもしたら【主】が心配するし」

「…わーってるよ」

「それと…【デスペル】！」

―パキーン！

バインドを解除っ！

…ＦＦ系の魔法でも解除できるんだ

『知らなかったんですか?もし解除出来なかったらイタイですよ』

…まぁ解除できなかったら【細雪】で切ったよ?

「あ、それからコレ、シグナムから預かったヴィータの落とし物だ」

―パサッ

「帽子の破損は直してくれたって　後でシグナムにお礼言っておかないとね」

「…ああ」

さてと、

「てか恭介…おめーどうしてココが分かったんだ?」

今更!?

「ま、それはね…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――数時間前

『マスター、結界が展開されました。この反応は…ヴィータ嬢です』

結界?ってことはやはり原作どうりの展開か…

「ヴィータのやつ…やっぱ【なのは】に目を付けたか」

『どうします？』

「なのはやフェイトに挨拶しに行くか」

『本格的に原作介入ですね？』

まぁね、その前に…

「あ、はやて～」

「ん？どないしたんや？」

「ちょっとコンビニに行ってくるけど、何か買ってこようか？」

「ん～別に今はええよ～それより気をつけてな？」

「ああ、じゃあ行ってくるね」

――ガチャ、バタン

「さて、インフィニティＳｅｔ　Ｕｐ！
いくぞ！」

――ヒュッ！

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――結界表層部――

「…結界が張ってあって入れない…」

『入り方考えてなかったんですか！』

いや～行き当たりバッタリで何とかなるかなと（笑）

…アレ使うか

僕は収納空間から刀を取りだす…

―その刀身は小さな雪片を散らし、うっすら蒼く光っていた―

「…【細雪】こいつなら…！」

―シュッ、…カチン！

・・・パリーン！

結界の破片がまるで雪片の軽さで宙を舞う。

スノーブラインドが僕を覆い尽くした…

「さぁ　行こうか」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽

「と、いう風に来たんだよ～♪」

はい、回想終了です…ん？

「どした？ヴィータ？？」

「【細雪】ってなんだよ？てか何カッコつけてるんだよ！！」

描写にツッコミ！？

「ま、まあ簡単に言うと…この刀身に触れる魔法を全て、淡雪のごとく霧散させる」

「……反則通り越してもう呆れるしかねーな…」

チート仕様だし

「さて、ここまできたら後戻りできないな…腹くくるか！いくぞヴィータ！」

「ああ！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「♪～？～よし、と」

トゥルルル♪ガチャ

［もしもし？はやてちゃん？シャマルです］

「あ、どうした？」

［すみません　いつものオリーブオイルがみつからなくて…　ちょっと遠くのスーパーまで買いに行ってきますから］

「あ、別にええんよ　無理せんでも」

［出たついでにみんなを拾って帰りますから～］

「そうか～？」

［お料理お手伝い出来なくてすみません

「アハハ　平気やって…（寧ろ助かった…？）」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

「なるべく急いで帰りますから」

［急がんでええから　気ぃつけてな？］

「はい　それじゃ」

「…そう　なるべく急いで確実に済ませます　クラールヴィント導いてね」

《Ｊａ》

《Ｐｅｎｄｅｌ　ｆｏｒｍ》

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

迫り来る鏡

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

フェイトＳｉｄｅ

―ガチィィン！

シグナムとフェイトはお互いのデバイスで激突

「くっ！」

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ》

―バチバチッ！

フェイトは射撃魔法弾を展開

「レヴァンテイン、私の甲冑を」

《Ｐａｎｚｅｒ　ｇｅｉｓｔ》

それを見たシグナムは防御壁を展開する

―ブォン

「撃ち抜け　ファイア！」

―バチ！バチ！ガギィ！

フェイトはシグナムに向かって魔法を放つが

―ガキィィン！

「っ！？」

シグナムの防御壁に全て阻まれてしまう

「…魔導師にしては悪くないセンスだ
だがベルカの騎士に一対一を挑むには…まだ足りんっ！！」

―タッ！ヒュッ！

「はぁぁぁ！」

シグナムはフェイトにレヴァンテイン斬撃を繰り出す

―ガキィィ！

フェイトはシールドを張り防御する、が

―パリーン！！

（っ！破られた！？）

バリアを破ったシグナムの一撃をバルデッシュで受け止めるフェイト

「くっ！」

―ドキュ！

シグナムはレヴァンテインにカートリッジをロード

「レヴァンテイン！！叩き切れ！！」

《Ｊａｗｏｈｌ》

シグナムの一撃を再び受け止めるフェイトだが

―ガギィ！…バギィィィ！！

受け止めたバルデッシュに亀裂が入り…

―バギィ！ドォォォォン！！

フェイトはそのままビルに叩き落とされてしまった

「くっ…」

―シュゥゥゥ、

ドキュ！ガチャ！

《Ｎａｃｈ　ｌａｄｅｎ》

シグナムはレヴァンテインに弾丸を装填する

（あれだ…あの弾丸、あれで一時的に魔力を高めてるんだ…）

「終りだか？ならばじっとしていろ
抵抗しなければ命までは取らん」

「ッ！誰が！」

「いい気迫だ　私はベルカの騎士　ヴォルケンリッターが将…シグナム　そして我が剣　レヴァンテイン　お前の名は？」

「…ミッドチルダの魔導師　時空管理局嘱託　フェイト・テスタロッサ　この子はバルデッシュ」

「テスタロッサ　それにバルデッシュか…」

「「はぁぁぁぁ！！」」

―バキィィィン！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

なのはＳｉｄｅ

「助けなきゃ…うっ…私が、皆を助けなきゃ…」

《Ｍａｓｔｅｒ　ｓｈｏｏｔｎｇ　Ｍｏｄｅ　ａｃｃｅｌｅｒａｔｏｎ》

「レイジングハート…？」

《Ｌｅｔｓ　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ　Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅｒｋｅｒ》

〈撃って下さい　スターライトブレイカーを〉

「そんな　無理だよそんな状態じゃ」

《Ｉ　ｃａｎ　ｂｏ　ｓｈｏｔ》

〈撃てます〉

「あんな負担の掛かる魔法　レイジングハートが壊れちゃうよ！」

《Ｉ　ｂｅｌｉｅｖｅ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ》

〈私はあなたを信じています〉

「……」

《Ｔｒｕｓｔ　ｍｅ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ》

〈だから、私を信じて下さい〉

「…レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ！（フェイトちゃん　ユーノ君　アルフさん、私が結界を壊すからタイミングを合わせて転送を…）」

――カチャ

「レイジングハート　カウントを！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

《ｃｏｕｎｔ　ｎｉｎｅ　ｅｉｇｈｔ　ｓｅｖｅｎ……》

《ｔｈｒｅｅｙ…　ｔｈｒｅｅｙ…　ｔｈｒｅｅｙ…》

「レイジングハート、大丈夫？」

《Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ》

〈大丈夫です〉

《Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｒｅｅ　ｔｗ　ｏｎｅ…》

―ドクンッ！

「っ！？あ…あ…」

（な、なに？これ…）

なのはの眼前には…自身の胸から腕が突き出した光景があった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトＳｉｄｅ

「なの…は？」

（なのはの胸から…腕が…？）

「なのはぁ！！」

なのはの異変に気付き、駆け付けようとするが

―カチャ！

だがフェイトの前にシグナムが立ち塞がる

「ここは通させん」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

○○○GETだぜ！？（前書き）

連続投稿の割に短いです
とりあえず一回戦目は終了？

○○○GETだぜ！？

〔リンカーンコア捕獲！　蒐集開始〕

「あ…ああ…」

なのはの胸から突き出した手
その手にあるなのはのリンカーコアから魔力が吸い取られていく

《Ｃｏｕｎｔ　ｚｅｒｏ》

「…ス、スターライト…ブレイカーァ！！」

ふらつきながら、それでもなのはは集束砲撃魔法を放つ

―ドカァァァァ！！

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

キョウスケＳｉｄｅ

「…ス、スターライト…ブレイカーァ！！」

―ドカァァァァ！！

―タッ！

「インフィニティ！カートリッジロード！！全て防御に回せ！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドカァァァ！

「クッ！！やっぱスターライトを受けるのはキツイ…【マバリア】！」

―ブォン！

これで多少は…！

…え？なんでスターライトをわざわざ受け止めているかって？

それは…

『マスター、ＳＬＢラーニング完了しました』

よっしゃ！

そう、マテリア【てきのわざ】にスターライトをラーニングする為さ♪って、そろそろキツイか…

「【リフレク】！」

―キィン！

―ドカァァァァ！！

―バキィィィィン！！

おお！、簡単に結界破壊しやがった…あの威力で非殺傷かよ…【リフレク】でも軌道ずらすのがやっとだし…

ま、とりあえず魔王の技…ＧＥＴだぜ！

…後はなのはを…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

なのはの【スターライトブレイカー】により周囲に張ってあった結界が破られる

「（結界がぬかれた　離れるぞ）」

「（心得た）」

「（シャマルごめん助かった）」

「（うん　一旦散っていつもの場所でまた集合。キョウスケ君も離脱して）」

――シュン！

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――アースラブリッジ――

「結界、破られました！映像来ます！」

「何これ…どうゆう状況…？
ああ、逃げる！ロック急いで！　転送の足跡を…」

瞬間、モニターに映る敵魔導師　その手にある一冊の本

「…っ！あの魔導書は、まさかっ！！」

「急いで医療班を向こうに飛ばして！　それから本局内の医療施設の手配を」

「…ゴメン　クロノ君…しくじった…クロノ君？」

「…第一級捜索指定遺失物ロストロギア【闇の書】…」

「クロノ君　知ってるの？」

「ああ、知っている　少しばかり嫌な因縁があるんだ…」

～座談会～　忘れてかけていた【アレ】決定？

キョ「とうとう本格的にＡｓ介入だな」

イン『そうですね～』

キョ「原作、どうブレイクするか～」

イン『ブレイク前提ですか！？』

？？『あ、あの～　それより私の出番は？』

作【あ～…タイミングがなかなか無くて】

？？『そうなんですかぁ～　でも作者さん…私の事忘れないで下さいね（ニコッ）」

作【は、はいっ／／／】

キョ「…さっきから妙な電波が…」

？？『あ、すみません　私は貴方のユニゾンデバイス（仮）です』

キョ「…あ！すっかり忘れ…あ」

？？『ウルウル（涙目）　えぇ～　忘れていたんですか…』

キョ「…神ガ忘レテイタラシイヨ？」

？？『じゃあ神様のせいなんですね』

イン『神に反逆ですか』

キョ「てか作者！？なんでココにいる！！」

作【座談会だから】

キョ「……さいですか」

作【前々からユニデバの名前考えていたけど　ようやく決定したので報告を】

キョ「ようやくなのか…随分かかったね」

作【友達に「女性キャラクターで名前付けるならどんなの？」って聞いて考えてもらった】

インフィ『丸投げですね』

キョ「だな」

作【いや、友達が考えてくれた名前…既に使われていた為新たに考えて直して時間かかった】

？？『大変だったんですね～』

作【…登場いつにするかは未定だが】

キョ、イン、??『「意味無っ!!」』

作【ま、まあ　気長にまってて～】

??『あの～　それで、私の名前は?』

作【それは…】

キョ　イン　??「『『それは…?』』」

作【《エリス》です!!】

エリス『…エリスですか～。とてもいい名前ですね～　私気に入りました』

キョ「で、このエリスの出番は?」

作【……さあ?】

エリス『…O☆HA☆NA☆SHI　しましょうか?作者さん♪』

作【え、いや　遠慮しまｓエリス『大丈夫　時間はた～っぷり　ありますよ？』　…ハイ】

―ズルズルズル、バタン！！

キョ「その後、ドアの向こうから…いや　やめておこう…」

イン『後の自分の姿ですね～』

キョ「…作者よ　生きて還って来てエリスの魔王化は回避してくれ～！！」

行動には気をつけよう！

――八神家リビング――

「はやてちゃん　お風呂の支度できましたよ」

「うん　ありがとう」

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさい」

「は～い」

「明日は朝から病院です　あまり夜更かしされませんよう」

「はぁ～い」

「では　よいしょ…と　シグナムはお風呂どうします？」

「…私は今夜はいい　明日の朝にするよ」

「そう…」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまにはそうゆう日もあるさ」

「ほんならお先に♪」

「はい」

―ガチャ、バタン

「…今日の戦闘か？」

「…聡いな　その通りだ」

「…お前の鎧を撃ち抜いたか」

「澄んだ太刀筋だった　よい師に学んだのだろうな。武器の差がなければ少々苦戦したかもしれん」

「…だが、それでもお前は負けないだろう」

「…そうだな　我らヴォルケンリッターの誇りに賭けて」

―シュ！

「ただいま～」

「神代！無事だったか」

「まあね～　あ、これお土産ね♪
一応コンビニに行くって出掛けたからね～　お菓子、ジュース、アイスと色々あるよ～」

――風呂場――

ピキーン！

「ん？」

「どないしたヴィータ？」

「なんかアイスの気配が…」

「？？」

――再びリビング――

ん？なんか欲望混じった変な電波が

「どうした神代？」

「あ、いや　何でもないよ」

「…コンビニに寄っていて遅くなったのか」

ああ、呆れないでパトラッ…じゃなくザフィーラさん

まぁ実際はそれだけじゃないけどね～

――回想――

――数時間前

「さて、と…」

―シュッ！

お、いたいた　…って　フェイト、アルフ　ユーノもいるか

「…！あなたは」

―カチャ

バルデッシュ構えて臨戦体制か…ま　無理ないか

「…【ケアルガ】Ｖｅｒ【ぜんたいか】」

―パァァァァ！

「なっ…ケガが！？」

「…僕のより高度な回復魔法！？」

ミッドの回復系は知らないけど、ケアル系の上級魔法だから～

次に…

「【インフィニットレイヤー】！」

―パァァァァ！

「なに…これ…」

「…暖かい…光」

これでなのはの魔力も回復　リンカーコアの回復も早くなる…はず？

『疑問系ですか！？』

だって…ねぇ

「…どういうつもり？」

うわっ　フェイトさん睨んでますね～

「…どういうつもり　とは？」

「友達を…なのはを襲っておいて！…その襲った相手を治療するなんて…」

「まぁ　こちらも色々と都合がある　という事ですね」

「…あなた達は何でこんな事をするんです？」

「…闇を天に…それが【僕の】目的です」

最終的には改悪された闇の書を夜天の書に戻す　…なるべく穏便に…あのキメラもどきとの戦闘は避けたいな～

『ヘタレですか？』

いや　めんどいじゃん！あの多重結界＆超再生って！！

「闇を天に？どういう意味です？」

「…悪いがアフターサービスはここまでですね…管理局員が来たようです」

長話するとまた面倒になりそうだし…

「まって！　まだ聞きたいことが…」

「では、ごきげんよう美しいお嬢さん…【エスケプ】！」

シュッ―

▽▲▽▲▽▲▽▲▽

『…何気にフェイトフラグ立てました？』

あのぐらいでフラグ立つわけないじゃんか～　ハッハッハ

フェイトSide

「な、えっ？…／／／」

美しいお嬢さんって私の事！？

「フェイト？大丈夫？」

「アルフ！？な、なんでもないよ？…／／／そ、それよりなのはをアースラへ！」

…今ドキッとしたのは一体…

いざ！小さき悪魔の巣窟へ？

――教室――

「さてみなさん、実は先週急に決まったのですが今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。一人は海外からの留学生さん、もう一人は編入生さんです。フェイトさん、神代くん　どうぞ」

―ガラガラ

「し、失礼しますっ」

「……」

「あのっ、フェイト・テスタロッサといいます　よろしくお願いします」

「神代　恭介です…よろしく」

はい？　何故フェイトと一緒に自己紹介しているかって？

それは…

「はい、ではフェイトさんは後ろの席に　神代君はその隣の席ね」

…只今聖祥大付属小学生に転入しています

しかも主要人物勢揃いのクラスに…

こうなったのも…アイツのせいだ～ぁ！！

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――数日前――

ピンポーン

「は～～～い」

―タッタッタッ

「八神さん、お届け物で～す」

これが不幸への片道切符のはじまりだった…

――八神家リビング――

「キョウスケ君に荷物が届いているわよ」

なんですと!?

ここに僕宛に荷物を送る人なんていないはず…

「…シャマル、差出人は?」

「え〜と…　【神　進】　ってなってるわ」

「シン、ススム?知らな…いや　まさか…」

―ガサゴソ

僕は荷物を開けるとそこには…

「…制服?　それに手紙?」

あからさまに見た事のある制服…凄く嫌な予感が…

一応手紙を読んでみると…

―聖祥大付属小学生への編入手続きしといたから♪

ｂｙ神　―

…今時ｂｙはないわ〜

「なんや?聖祥の制服?」

はやてさん！いつの間に！？

「さっきや、そういえばキョウスケ君って学校行ってへんよな～
私は今休学中やから仕方ないけど」

…心が読めるんですか？
って、僕は見た目は子供でも中身は大人ですから小学校は…

『コ○ンですか？』

「は、はやて　一応大学卒業程度の学力はあるから…学校に行かなくても問題ないよ」

「ん～…でもせっかく進さんって人が編入手続してくれたんやし…
やっぱ一生に一度の学校生活、キョウスケ君にも楽しい思い出作ってほしいんよ」

いや、これで行ったら2回目ですから

「せっかくですから行ってみたらどうです？（はやてちゃんには私が付いていますから大丈夫ですよ）」

「いや、しかしだな…」

「はやての気遣いを無駄にする気か！！」

うぉ！ヴィータいつの間に！？

「さっき帰って来た」

…いや、だから心読まないでよ

「…わたしの足のせいで、キョウスケ君が学校行けないみたいで何か嫌なんよ…」

こ、これは…断れない空気満載!?

「…はぁ、わかったよはやて。じゃあ週明けから行くよ…」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

と、いう訳で2度目の小学校生活を始めたんですよ…

え?フェイト達に顔バレてるんじゃないかって?

今は変装用メガネ（ネギまＶｅｒ）をかけているからバレない…はずで、只今休み時間なんだが…

「ねぇ　向こうの学校ってどんなカンジ?」

「すげー急な転校だよね　なんで?」

「日本語上手だね　どこで覚えたの?」

「前に住んでたのってどんな所?」

…隣でフェイトが質問攻めにあっています

僕に質問はないのか?フッ、近づくなオーラを出しているから誰も

寄って来ないよ～。だってかったるいし

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

なのは、アリサ、すずかＳｉｄｅ

「フェイトちゃん　人気者～」

「でもこれはちょっと大変かも」

「はぁ　しょうがないな～」

―パンパンッ！

「ハイハーイ　転入初日の留学生をそんなにみんなでワヤクチャにしないの！」

「アリサ…」

「それに質問は順番にフェイト困ってるでしょ…それに、アンタ！」

…ん？僕？

「…何かな？」

「アンタもカンケーないって顔してないでみんなの質問に答えなさい！！」

なんでさ…しかも初対面で上から目線で命令!?

これが噂のアリサクオリティか!!

「何がアリサクオリティよ!!」

…あなたも心読めるんですか…

School Days

キーンコーンカーンコーン

――学校、昼休み――

「フェイトちゃん　初めての学校の感想はどう？」

「歳の近い子がこんなにたくさんいるのは初めてだから…なんだかもうグルグルで」

「にゃはは」

「まあ　すぐに馴れるわよ　きっと」

「うん、だといいな」

―ズルズル…

「あの～…」

「あ、キョウスケ君♪　どうしたの？」

「どうしたのって…教室から拉致られて引きずられているんですが…」

そう　昼休み速攻教室から脱出を試みたが、フェイトに捕まり　アリサに引きずられている状況っす…

「ご、ごめんね～キョウスケ君。アリサちゃん強引で…」

すずかよ…謝るならまず助けてくれっ

「ごめんね　キョウスケ…アリサが捕まえておけって言うから…つい…」

やはり諸悪の根源はアリサかっ！？

「で、バニングスさん…　僕に何か用でしょうか？」

「て、転校してきたばっかだろうし、あんた一人でお弁当食べるのも寂しいでしょ？
だからあんたもついでに一緒に食べさせてあげようというのよ！文句ある！？」

…なんか言ってる事めちゃめちゃな気が…

―ジィィィィ…

ん？視線が…

「ん？テスタロッサさん　僕の顔に何か付いてる？」

「えっ！　う、ううん　何でもないよ　…ただ、前どこかで会ったような気がして…」

ギクッ！

「えっ？フェイトちゃん、キョウスケ君と会った事あるの？」

「う～ん…つい最近見たような…」

ギクッギクッ！ごまかさなければ…

「ほ、ほら　世の中には似たような人が２５人はいるって言うし…他人の空似じゃないかな～？」

「そっか」

「って、フェイト！！さすがにそんなにいないわよっ！」

「…あれ？そう言われれば、私も見たような…」

―ジィィィィ

いや　なのはさんフェイトさん　顔近いって！！…仕方ない　少々危険だが【切り札】を切るか…

「…（ニコッ）」

「「っ！！……／／／」」

ああ～　やはり二人とも真っ赤になって…って？

「「……／／／」」

ナゼにすずか&アリサまで真っ赤に！？

…ハッ！これが世界の修正力か！？

「ほ、ほら　さっさと食べないと昼休み終わっちゃうわよ！」

「う、うん…そうだね」

「ど、どこで食べるのアリサ？」

「それはね…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――昼休み、屋上――

「「「「「いただきま～す」」」」」

ふう…　あれからなんとかごまかして、ようやくお弁当にありつけた

「モグモグモグ…ん？」

―ジィィィィ×４

な、なに？この視線？

「キョウスケ君のお弁当…おいしそう」

「はぁ…味見してみる？」

「え？いいの？　じゃあ私のおかずと取り替えっこしよ♪」

「あ、なのはちゃんだけずるい～　キョウスケ君、私もいいかな…？」

「あ、じゃあ私もいいかな？」

「私のおかずとも交換してあげるわ！」

―パクッ　モグモグ

「「「「美味しい～♪」」」」

「はは、ありがと」

――同時刻、八神家――

ピキーン！

「…っ！」

「どうかしましたか？はやてちゃん？」

「…キョウスケ君が他の女の子と仲良うしている…気がする！」

「は、はやてちゃん？」

――同時刻、管理外世界――

ピキーン！

「はっ！？」

「……どうしたヴィータ？」

「…恭介のヤロー、他の女とイチャついている…気がする！」

「……そうか」

――再び屋上――

―ブルッ！

な、なんか寒気が…

「このお弁当、キョウスケ君のお母さんが作ってくれたの？」

「あ、今親戚の家に住んでるんだ　このお弁当もそのコが作ってくれ……ど、どうした？」

な　何だか４人からダークオーラが発生している…

「…キョウスケ君
【そのコ】って女の子なのかな　かな？」

何故二回繰り返す！？なのはさん！

「あ、ああ…僕と同い年のコだけど…」

「…キョウスケは、その【同い年のコ】と一緒に暮らしているの？」

「え、ええ　そうです…」

フェイトさん…目が単色にナッテマスヨ！？

「同い年って事はウチの学校のコなのかな？」

「あ～　どうだったかな？　今ちょっと病気で休学しているから…」

あ、病気発言でオーラが霧散した

「病気？そのコどっか悪いの？」

「病気…というか下半身がちょっと…車椅子生活しているからね」

「そ、そうなんだ…車椅子だと大変なんじゃないかな？」

「そのコのお姉さん2人（シグナム、シャマル）が面倒見てくれてるから生活面ではそんなに苦労はないみたいだよ　妹も（ヴィータ）面倒見てくれてるし…ってうわっ！？」

な、なんだ！？さっきより黒く深いどす黒いオーラが充満している！？

「…キョウスケ君…女の子ばかりの家に男の子一人で住んでるんだ…」

「ま、犬（ザフィーラ）もいるけど…」

「でも男の子はキョウスケだけなんだよね…」

「…ハイ」

こ、これは…いろんな意味でヤバイ！

「あ、そろそろ次の授業の準備「まだ時間あるわよ？　そこの所をじっくり聞かせて貰おうかしら？」…え？」

アリサに肩を掴まれ振り返ると…

―ゴゴゴゴゴッ！

単色の目をした4人がそこにいた…

い、生きて帰れるかな？

糖分過多摂取!?

キーンコーンカーンコーン…

――――教室――――

な、なんとか屋上から無事生還できた僕は…

「（ヒソヒソ）キョウスケ、授業聞かなきゃ」

隣の席のフェイトが呟いていた…だがな!

「（ヒソヒソ）…無理　てか誰のせいでこうなったと…」

まったく…僕は机に突っ伏してダウン中です

…そうだ!京都に行こう　…ぢゃなくて

「先生、少し体調が優れないので保健室に行ってきます」

「あら大変　じゃあ保健係の「あ、一人で大丈夫です」そ、そう?」

はい仮病ですが何か?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――保健室――

―ガラガラッ

「失礼しま～す…って誰もいないか」

ちょうどいい、ベットで寝かせてもらおう…

フェイトSide

キョウスケが保健室に行ってしまった…

やっぱりさっきのコトが原因かな…

だって、その…キョウスケが他の女の子と一緒に住んでいるって聞いたら…

何だか胸のあたりがモヤモヤして…

何だろう…この気持ち…

キョウスケ…大丈夫かな?

後で様子見に行ってみよう…かな

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キーンコーンカーンコーン

――放課後――

キョウスケＳｉｄｅ

「…んん　知らない天井だ…」

まぁ　お約束のネタを言ってみたが放課後まで寝てたか～

―コンコンッ

「し、失礼しま～す」

ん？この声は…

「テスタロッサさん？」

「あ、キョウスケ　具合はどう？」

…仮病だからね～

「あ、まぁ　大丈夫だよ」

「よかった…あ、実はこれからみんなで翠屋で歓迎会やろうってコトになって…よかったら…その…キョウスケも来ないかな…ね？」

ってフェイトさん　そんな小動物みたいな目で訴えられたら断り難いっしょ

「まぁ　折角のお誘いだし　いいよ」

「ほ、ほんと！？よかった　あ、実はキョウスケの鞄持って来たからすぐ行けるよ♪」

用意周到ですな…

「分かったよ　テスタロッサさ「ねぇキョウスケ！」って　うぉ！？」

いきなりフェイトが凄い勢いで突進してきた

顔近いっスよ…

「あの…ね　私の事は…できればその、フェイトって呼んで欲しいんだけど…ダメかな…？」

だから何故みんな上目づかい＋涙目コンボ使うかな～

「わ、わかったよフェイト…あと、とりあえず顔近いから」

「あ…／／／ごめ、きゃ！！」

「あぶなっ！！」

慌てていた為、勢いよく離れようとしたらフェイトが体制を崩してコケそうになった

…で、僕は慌ててフェイトの腕を掴み助けようとしたんだよ　うんただ…

――ドサッ

…慌ててフェイトを引っ張ったから勢い余ってフェイトは僕に倒れ込んできた

「「あ……／／／／」」

端から見たら、フェイトが僕に覆いかぶさっているように見える体勢になっているが…

「……／／／」

フェイトさん…だから顔近いってか潤んだ目で見つめていらっしゃるし～！！

「フ、フェイト？」

「…キョウスケ…／／／」

―スッ

って、何故目を閉じて近付くんですくわぁぁぁぁ！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――同時刻、商店街――

はやてＳｉｄｅ

ピキーン！

「…はっ！」

「こ、今度はどうしたの？はやてちゃ…」

「…何か急にキョウスケ君を調きょ…【お話】しとうなってきたな～」

「は、はやてちゃん…大根、握り潰してるわよ…」

後にシャマルは、光を失い単色になったはやての目を見て恐怖したという…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――同時刻、管理外世界、戦闘中――

ヴィータＳｉｄｅ

ピキーーン！

「…っ！？」

「どうしたヴィータ！？」

「…何か急にイラついてきた！！」

「■■■■■■■ッ！」

「ヴィータ！危ないッ！」

「…うぜーんだよ！この爬虫類野郎！！
とっととくたばりやがれっ！！
アイゼン！カートリッジフルロード！！！」
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

「うらぁぁぁぁ！！」

―ドグァァァァン！！！！！

…後にシグナムは、辺り一面荒野と化した大地を見たそうな

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「……ん／／／」

ん　じゃねー！

ヤバイ　フェイトとの唇の距離が後１センチ…　このまま流れにまかせ…

―ガラカラカラ！

「フェイトちゃ～ん　キョウスケ君起き…た…」

…られなかった

悪魔降臨…

「キョウスケクン…フェイトチャン…

ナニヲシテイルノカナ？カナ？」

何故カタカナに!?

「いや、これは…事故!　そう事故と不可抗力と偶然が重なって…ヒッ!」

な、なんだ　今のなのはは確実に視線で人を瞬殺できると確信できるぞ!

「フ、フェイト!そうだ!フェイトからも誤解を…ひぃぃぃぃ!!」

なのはの殺気がさらに倍増した!?

「キョウスケ君…
フェイトちゃんの事…名前で呼んでるんだ…」

名前呼んだだけで殺されるんかい!?

「きゅうぅぅ／／／」

フェイトは真っ赤になってオーバーヒートしてるしっ!

「ま、まて高ま…い、いや　なのはっ!」

「ふぇ!?」

あ、名前で呼ばれて驚いたのか　殺気が消えた…

「フェイトが転びそうになり、助けようと咄嗟に腕を掴んだら　勢い余ってさっきみたいな体勢になっただけだよ」

うん　嘘ではないよね　…危なく理性飛びそうだったが

「そ、そうなんだ…」

どうやら納得してくれたみたいだな…

「ほら　フェイトもしっかりしろ」

―フニフニ

フェイトの頬をつねってみた

…お、柔らかいな

いや　だからロリコンジャナイヨ？

「…はっ！　キョウスケ…それになのはも…いつの間に？」

気付かんかったんかい！！

「外でアリサちゃんとすずかちゃんが待っているから早く行こ？」

「う、うん…あ、キョウスケ…さっきは　その…／／／」

「まぁ　その…気にするな」

「…二人とも早く行かないと…」

う、ご機嫌斜め？

「あ、ああ　悪いなのは　今行く…よ？」

なんだ！？この殺気は…

「…キョウスケ…いつの間になのはを名前で…」

何、この負の無限ループは！？

――八神家、キョウスケ部屋――

ピキーーン！

『…何かマスターの身に面白い事が起こっているような…』

机の上に置いてある指輪が呟いていたそうな…

歓迎会、翠屋Ｓｉｄｅ

――学校　校門――

とにかく負の無限ループを脱出しアリサとすすかの待っている校門へ向かって…いるんだが…

「「♪～？～♪」」

右腕になのは、左腕にフェイトが抱き着いている…

何故？

案の定校門にいたアリサ＆すずかは

「あんた！遅いと思ってたら何やってるのよ！！」

「…いいな～なのはちゃんフェイトちゃん」

「「えへへ♪／／／」」

「なのは、フェイト…そろそろ離してく…ぬぉっ！？」

何だこの負のオーラ！？　てかこのパターンは…

「…あんた…いつの間に二人の事名前で…わ、私の事も名前で呼びなさーい！！」

「私もすずかでいいよ♪」

最近　海鳴市周辺は名前で呼ぶの流行っているのか？

「わかったよ　アリサ　すずか」

「わ、分かればいいのよ／／／」

「えへへ／／／」

まぁ　喜んでくれてるみたいだな

両脇から不機嫌オーラが発生していたのは言うまでもないか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――喫茶、翠屋――

―カランカラン

「いらっしゃ…あ、おかえりなさい～」

「ただいま～お母さん♪」

僕は転生して3回目の翠屋来店

桃子さんと士郎さんがいた…入って早々に士郎さんはこちらを見ていたが…

「あら、そちらのコは？」

「あ、僕は「彼氏です♪」っはぁ！？」

なのはさん…あなたは何をほざいてるんですか？
ああ、僕の周辺は一気に混沌に飲み込まれているし…

「あら　なのはったら　こんなカッコイイ彼氏作っちゃって♪」

桃子さん…このカオスに気付いて下さい

「あ～…なのはさんの言っている事は冗談ですから」

当然訂正はするよ？

「そ、そうだよ！キョウスケはなのはの恋人じゃないよ…キョウスケは…わたしの…ごにょごにょ」

ん？最後の方が聞き取れないけど…？
とりあえず挨拶はしておくか…

「あ、はじめまして　今度聖祥に転校してきた神代　恭介です　なのはさん達とは同じクラスメートなんですよ」

ん～　我ながら社交性に長けているな～

―ジィィィ

な、なんか桃子さんが僕の顔を見ている…

「あ、あの　何か？」

「以前お店に来た事…ないわよね～？」

…変装メガネ効いてるのかな？

「は、はい　今日はこちらのお店で僕とフェイトさんの歓迎会を開いてくれるとなのはさん達が…」

「あらそうなの？　じゃあサービスしなくちゃね
なのは、空いている席に案内してあげてね」

「は～い　じゃあキョウスケ君　行こ♪」

だから腕を絡めないでくれ～　士郎さんの視線が～！！って来た～！！

「やあ　君　ちょっといいかな？」

いやです！！と言えればどんなに楽か…

「何でしょうか？」

「…君　何か格闘技とかしているのかい？」

…たしかに身体はチート仕様だが

「…まぁ　格闘技、という程ではないですがそれなりに鍛えていま
「貴様か！なのはに手を出す奴は！！」…はい？」

カウンターから高町恭也が現れた…めんどい

「あ、あの…「なのはに手を出す奴はオレが相手だ！！」…」

駄目だ　このシスコン馬鹿　話し聞かね～　どうしようか迷ってる
と

「…オニイチャン…私のお友達（恋人）に何を言っているのかな…」

何か、なのはの脳内変換で妙な単語が出てきたが

「あ、いや、これはだな「少し向こうでお話　しようかな　かな？」
…はい」

そのまま兄妹仲良く？奥に消えていった
直後　断末魔が聞こえたのはスルーしよう

他の三人は苦笑いしていた…

迫り来る惨事？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――夕方、翠屋――

「さて、そろそろお開きにしようか」

一応小学生だからね～早めに帰らないと　はやても心配だし

「まぁ　今日はもう遅いし、私とすすかはリムジンで帰るけど…二人も乗っていく？」

「私は少しなのはと話しがあるから…」

「僕も大丈夫だよ
あ、なのは　悪いけどお土産用のケーキ適当に見繕ってくれるかな？」

「うん　わかった～」

―タッタッタッ…ドテッ！

またコケた…

「そういえばキョウスケ君、携帯って持ってる？」

「ん？いや持っていないけど…」

「フェイトは持ってる？」

「ううん、私も持ってない…」

「二人とも持ってないんだ…」

「じゃあ今度パンフレット持ってきてあげるから二人の携帯買いに行くわよ！」

何その決定事項は！？

「え、と、私はリンディ提と…さんに聞いてみないと…」

「キョウスケ　アンタは？」

「まぁ　携帯くらいは買えるから問題ないが…別に必要ないような」

「そんなことないよキョウスケ君！　お友達同士いつでもお話出来て便利だから」

「そうよ！　じゃあキョウスケは決定ねっ！　フェイトは…ＯＫだったら買いに行きましょ？」

「うん…わかった」

―タッタッタッ

「おまたせ～　キョウスケ君♪」

お、今回はコケなかったか

「じゃあ料金は…カード使えるかな？」

僕はなのはに黒いカードを渡すとレジに向かって…ん？アリサとすずかがビックリしているみたいだが？

「はい、キョウスケ君　カード返すね
なんかお父さんビックリしていたけど…何でかな？」

さあ？

今日の歓迎会はこれでお開きとなり、僕はケーキを持って帰宅しました

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家、リビング――

帰って来て早々はやて&ヴィータに拉致られてリビングに正座させられています…　なんでさ

「今日は帰り遅かったなー？どっか寄り道してたん？」

はやてさん…顔が笑顔でも目が笑ってないっす

「あ～…学校のクラスメートが歓迎会を開いてくれるって事になって…あ、これお土産のケーキです」

一瞬顔が緩んだ！これで機嫌が…

「……くんくん」

？ヴィータさん、何を？

「ヴ、ヴィータ？どうかした？匂いなんか嗅いで？」

ケーキの匂いでも嗅いでいた？

「…ん！やっぱそうだ！！　恭介から女の匂いがする！！」

はいぃいぃい！？

アタナは警察犬か！？

「…キョウスケ君…クラスメートって女の子だったんかな？」

う、黒いオーラが！！　シグナム！シャマル！ザフィーラ！助けて！！！　って何故目を反らす！？

「は、はい、女の子四人でし「んだと！！テメェいい身分だな！！」

ってちょ！まて、ヴィータ！！」

黒いオーラに殺気がプラスされた！？

「ん！？なんだ？恭介の首に付いてる赤い…」

ま、まさか！？

「い、いや　まて　これはキスマークじゃないぞ！　第一未遂だった…あ…」

「キョウスケ君…少し別荘でお話せなあかんみたいやね」

「はやて…私も手伝うよ…」

こうして僕はヴィータに引きずられ、はやてと共に別荘へ…

その後別荘内で地獄絵図が広がったそうな…

…別荘から出てきたはやてとヴィータの肌艶が妙によかったそうな…

「一暴れした後のケーキはギガうまだよな　はやて♪」

「そやね～♪」

大きい天国、小さき修羅神？

――深夜、海鳴市街ビル屋上――

―ガチャ、バタン

「…来たか」

「うん」

「管理局の動きも本格化してくるだろうから今までのようにはいかないわね」

「少し遠出することになるな　なるべく離れた世界での蒐集を」

「今何頁で来てるっけ？」

「３４０頁　この間の白い服のコでかなり稼いだわ」

「おっし！　半分は超えたんだな　ズバッと集めてさっさと完成させよう

…早く完成させてずっと静かに暮らすんだ　はやてと一緒に」

「行くか　もうあまり時間がない」

「ああ　いくぞレヴァンテイン」

《Ｓｉｅｇ》

「導いて　クラールヴィント」

《Ａｎｆａｎｇ》

「やるよ　グラーアイゼン」

《Ｂｅｗｅｇｕｎｇ》

「それじゃ夜明け時までにまたここで」

「ヴィータ　あまり熱くなるなよ」

「わーってるよ」

―ガチャン！

「ちょっとまったー！」

俺　参上！

「神代！？どうしてここが！？」

「シグナム達が夜中こっそり出ていく気配がしてね…　場所の特定は【ハイパースキャン】の広域探査で」

「それでキョウスケ君　どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよシャマル！

蒐集を手伝うって言ったんだから何で僕に声をかけてくれないのさ

？」

「…すまんキョウスケ　お前には主の傍にいてほしかったのでな」

「ああ、前回管理局を相手にしたからな…　あちらも本格的に動くだろう。万が一に備えて主はやての護衛をしてほしかったのだ」

だったらそう言ってくれ

「そーゆー訳だ恭介！　今回は私らに任せな！！」

「まぁ…分かったよ　今回ははやての護衛に徹するよ　…みんな無茶するなよ」

「はい　わかりました」

―シュン！！

あ～あ　もう行っちゃった

『マスターはこれからはやて嬢と添い寝ですか』

いや　何故添い寝を！？

『最近あちこちでフラグ立ててるようですので、ここいらで一度原点回帰をと』

原点ってなにさ！？

…まぁ　添い寝はともかく　寝直すか…

―シュン！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――早朝八神家、――――

はやてＳｉｄｅ

―ピピピピピ♪　ガチャ

う～ん。ふぁぁぁ朝やな～皆のご飯の支度せな…

「うーん…」

―パサッ

ヴィータ、布団かけへんと風邪ひいてまうよ

「ん～…」

起こさんように…

――リビング――

ん？ソファーに…シグナム、ザフィーラ　まったく…毛布もかけずに…えっと毛布は…っと

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――数時間後――

―トントントン♪

「ん、ん…」

「ごめんな　起こした？」

「あ、いえ」

「ちゃんとベットで寝やなあかんよ　風邪ひいてまう」

「す、すみません」

「シグナム　夕べもまた夜更かしさんか？」

「あ～…その、少しばかり」

「ふふ　あ、シグナム　はい　ホットミルク。暖ったまるよ」

「ありがとう、ございます」

「ザフィーラにもあるよ　ほらおいで」

―ガチャ！

「すみません！　寝坊しましたぁ！！」

「おはよう　シャマル」

「おはよう　あ～もう！　ごめんなさい　はやてちゃん」

「ええよ」

「…オハヨー」

「うわぁ…ヴィータめっちゃ眠そうやな」

「…眠い」

「んもう、顔洗ってらっしゃい」

「う～　ミルク飲んでから…」

「はい」

「…暖かい、な」

「あ、シャマル、もう朝ご飯できるからキョウスケ君起こしてきて

くれへん？」

「はい、わかりましたぁ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――キョウスケ部屋――

キョウスケＳｉｄｅ

―…く……き……い

ん～…なんだ？

―ユサユサ

揺れてる？地震？

―キョウスケ君起きてくださ～い

「…あと５時間１０分～」

「何具体的な睡眠時間言っているんですか～！　朝ですよ～起きて下さ～い」

「…ああ…」

「あ、キョウスケ君起きてくれましたか」

「……」

「キョウスケ君?」

―ギュッ

「え、ええ!キ、キョウスケ君?／／／」

ああ　なんだろう気持ちいいな　またこのまま夢の中へ…

―スパーーン!!

「!いって!?な、なんだ?」

「おはよう…キョウスケ君」

「…はやてよ　朝からハリセン持って何をしているのですか?」

「これか?寝ぼけてシャマルに抱き着いていた誰かさんを叩く為や」

抱き着く?シャマルに?誰が?

シャマルの方を見ると…

「キョウスケ君ったら大胆／／／」

…はい？

『マスターはシャマル女史の胸の谷間に顔を埋めて夢心地だったんですよ』

…ナンデスト？

「キョウスケ君ったら／／／言ってくれればいくらでも…「いくらでも何やシャマル？」い、いえっ！」

朝から混沌としてきたな～

『主な原因のマスターが他人事みたいに…』

「…キョウスケ君　ちょ～っとオハナシしよか…」

「あ、じ、じゃあ私は朝食の支度をしてきますね」

シャマル！　助けてくれよ！！

―バタン！

あ、希望の扉が閉められた～…

「さぁ　キョウスケ君…じっくり話しあおか…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――リビング――――

―ガチャ

「シャマル　主達はどうした？」

「はやてちゃん達は…」

―ドカバキガキドコーン！！

「な、なんだ？　恭介の部屋辺りから変な音が？」

「…ちょっとはやてちゃんがキョウスケ君にお話を…」

「「あ～…そうか」」

直後断末魔が聞こえたとか聞こえないとか…

「大きい胸がそんなにええんかー！！？」

乙女の魂の叫びも聞こえたとか…

後にこの出来事が引き金で、はやては揉み魔になったとかならないとか…？

百合神降臨…（笑）

――八神家、玄関――

「じゃあ　行ってきます…」

何とか【フルケア】で回復した僕は学校に向かう所です

「あ、待って！忘れ物や　はい　お弁当！」

「ありがとう　はやて」

「なんか…旦那様を見送る奥さんみたいで照れてまうな／／／」

なら言わなければ…

「じゃあ　行ってくるね、はやて」

「いってらっしゃ～い…あなた（ボソッ）／／／」

ん？　最後が聞き取れなかったが…まぁ　いいか

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校、昼休み――

ん？授業はどうしたと？
ショートカットしたけど何か？

「はー　やっとお昼だよ～」

「おなかすいたね～」

「なのは～すずか～　早く行きましょ！
あ、フェイト！キョウスケを拉致って屋上ね♪」

アリサよ！何を物騒な台詞を！？

「え、と、じゃあ行こう　キョウスケ♪」

フェイトよ　行くのはいいが…ナゼ手を繋ぐ？　周りのその他男子の殺気が…

――屋上――

「そういえばフェイトちゃん、宿題ってちゃんとやってる？」

「うん　ちょっと難しいけど何とかやってるよ」

「頑張ってね」

「うん　ありがとう　すずか」

「フェイトって漢字の読み書きがまだあんまり出来ないから先生から特別な宿題が出されてるのよね？」

「うん　でもアリサは凄いよね　英語も日本語も完璧なんて」

「えっへん！パーフェクトバイリンガル♪」

「「「わーパチパチパチ」」」

「で・も！　フェイトの理数系の成績についてはビミョーに納得いかないのよね」

「え？なんて？」

「なのはもそうだけど…なんで二人して理数系だけがバツグンに成績いいのッ！？」

「え」

「ええと　なんでだろう…？」

…アリサが坊やだからさ

「なんか言った？キョウスケ！？」

「いえ　なにも」

「あ～　フェイトちゃん　うちのお姉ちゃんの数学の問題も解けたから…わたしより上かも～」

「そんなことは聞いてないッ！」

タダっ子だな　もう…

「キョウスケ！知らん顔してるけど、アンタの成績も納得いってないのよ！！」

え？なんで？

「理数系どころか私と同じ全教科満点って何よ！？真似！？」

殆ど言い掛かりだな。クレーマーだよ
中身は成人男性の知識人だからな～

「まったく　負けてられないわ！　今度は塾のテストで勝負よフェイト！キョウスケ！」

「いーよー」

「遠慮します」

第一僕は塾行ってないし　なんかアリサが騒いでるがスルーするか

「にゃはは　二人とも大丈夫？アリサちゃん負けず嫌いだから」

「うん！面白そうかな」

俺は迷惑だけどな

「そーそー　学校のテストなんて百点は当たり前で面白くないもんねー」

「あーアリサちゃん…それ絶対おかしいから」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのはフェイトＳｉｄｅ

「でも、物理と数学ってミッドチルタもこっちもほとんど変わらないんだね」

「そうだね　リニスに教わってたのとほとんど同じみたい」

「魔法の構築とか制御とかって理数系だもんね～」

「だよね　でもアリサとかキョウスケも凄いよね　あんなに勉強できて」

「そーだねー。すずかちゃんは運動得意だし」

「うん　午後の体育でもまた凄いとこ見られるかな？」

「でもフェイトちゃんは漢字以外は勉強もできるし、運動も得意だ

し…凄いよねぇ…」

「そ、そんなこと…ないと思うけど…」

「わたしは文系だめだし、体育苦手だし～」

「う…ううん…なのはは魔法戦はあんなに強いのにね…」

「あう～っ」

「でも大丈夫　午後の体育のドッチボールでは私がきっとなのはを守るから」

「フェイトちゃん…」

―ギュッ！

「うん…ありがとフェイトちゃん♪」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「うん…ありがとフェイトちゃん♪」

あ～抱き合って二人の世界に入ってらっしゃる

「あー　また二人でベタベタしてる～」

「今日はなんのお話？」

「あ、アリサちゃん　すずかちゃん！？」

「ああ　ええと　いろいろと」

「あはは」

「なのは、フェイト…」

「何？キョウスケ君」

「二人は…百合系？」

「ふぇぇぇ！？」

「な、ち、ちがうよキョウスケ！？」

その後二人は必死に誤解を解いていたという…

「いや、そうしか見えんしっ！」

勉強会と敵陣突入！？前編

キーンコーンカーンコーン

――放課後――

今日のお勤め終了っ！

ん？午後のドッチボール？

テキトーに投げてたら勝ったよ？

さて今日はこれから「キョウスケ君♪一緒に帰ろう？」って…

「なのはとフェイトか…　あれ？アリサとすずかは？」

珍しい　４人セットだと思ったのに

「アリサちゃんは塾だって」

「すずかは図書館に用事があるからって先に帰ったよ」

最近の小学生は忙しいな～

「まぁ　一緒に帰るのはいいよ」

「ホント？じゃあ早く行こう」

なのはよ…当たり前の用に密着してくるよな…　なのはフラグ立てたか？

「あ、なのはずるいよ」

―ギュッ

フェイトさんも腕絡めて密着させるんですね…

いいですけど…

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――マンション、フェイト部屋――

で、なぜこうなった！？

状況はフェイトの部屋に僕、なのは、フェイトの三人

事の始まりは…

――――数時間前――――

「ね～フェイトちゃん　今日の宿題で分からない所があるんだけど…教えてくれるかな？」

「うん　いいよ　あ、でも私も分からない所あるし…あ、そうだ！キョウスケ、よかったら勉強教えてほしいんだけど…」

「あ、フェイトちゃん　ナイスアイディア！　キョウスケ君頭良いしね～」

なんか知らぬ間に流れが変な方向に…

「あ　でも僕も人に教える程では…」

「だめ…かな？」

「キョウスケ…」

うぐっ　だ、だから二人して涙目で訴えないでくれ！

「…わ、わかったよ　でも勉強教えるっても場所はどうするんだ？」

「あ、だったら私の部屋はどうかな？それなりに広いし　ね？」

…ハイ？フェイトの部屋？＝アースラクルー駐屯地＝敵陣だよね！？　まずくない？

「あ、じゃあ私何かお菓子持っていくね」

既に確定っすか…

確かクロノもいるんだよな…あの変態シスコン　あ！この時期は

まだフェイトは養子になってないからシスコンではないか？　ＫＹは健在だろうが…

「あ～　僕がフェイトの家にお邪魔してもいいのか？」

「え？　うん　ぜんぜんいいよ　そ、それにキョウスケの事…その、紹介したいし…／／／」

いや　娘さんを下さい　って言いに行くのではないし

「……」

う、なのはから覇気が！？

「キョウスケ　早く行こ／／／」

だからひっぱらないでくれ～

――――現在――――――

そして僕はフェイトの部屋に

ちなみになのはは光の速さでお菓子を持って参上しました

…かなり息が上がっていたが

この何故か黒い空気…どうなるのさ

…続く

「この状況が続くのか！？」

作者【はい♪】

勉強会と敵陣突入!?後編

―カリカリ、カリカリ

「しかし…二人とも理数系得意なんだし　僕が教える事あまりないよね」

フェイトはともかくなのはも理数系得意ってのは七不思議の一つだな

「…なんか今すごく失礼な事考えなかった?キョウスケ君」

「…イエ?」

「でもキョウスケが居てくれるお陰で勉強もはかどるよ」

ってもちょっとしか教えてないよな～

――ガチャ

「ただいま　フェイトさん…あら、なのはさん　いらっしゃい」

アースラ艦長リンディ提督が現れた!

…逃げる?

「あら　貴方は初めて見るコね」

「お邪魔してます　フェイトさんの「か、彼氏です／／／」…っておい！」

なに？このデジャヴ！？

「あらフェ「違いますから」あら残念」

なんかフェイトが落ち込んでいるが…

「フェイトさんやなのはさんと同じクラスに転校してきた神代恭介です」

「あらこれはご丁寧に　私はフェイトさんの保護者のリンディ・ハラオウンです　フェイトさんと仲良くしてあげてね」

なんかなのはの視線が怖いぃぃ！

「は、はは　なのはさん共々仲良くしますよ」

危機回避能力だけはかなりアップしたからな～　フォローは入れないと

「そうた、恭介君　よかったら夕飯食べていかない？フェイトさんもその方が喜ぶだろうし」

リンディさん！さっきから爆弾投下しっぱなしッスよ～

「……／／／」

「……」

ああ！二人の反応があからさまに正反対だし

「あ、すみません　家で家族が待っていますので遠慮します」

「あらそう…残念ね」

フェイトには悪いがはやてが待っているからな

「それではそろそろ僕は…」

「え？もう帰っちゃうの！？」

もう…って一般小学生には遅い時間だと思うが

「ああ　お菓子ありがとう　なのは（ニコッ）」

「！ど、どういたしまして…／／／」

「フェイトも今日はありがとう（ニコッ）」

「！う、ううん！こちらこそありがとう…／／／」

…二人とも顔が真っ赤だな

「それではお邪魔しまし…」

―ガチャ

「ただいま母さん」

「たっだいま～！」

…クロノ&エイミィが現れた！
…本気で逃げる！？

「ん？お客さんだったのかい？」

「へ～、なかなかカッコイイ子だね　なのはちゃんかフェイトちゃんの彼氏？」

ちょ！エイミィさん！核弾頭投下しないで下さい！！

「「そ「いえ　友達です！！」…チッ」」

二人とも性格崩壊！？
とりあえず…

「フェイトさんのお兄さんにお姉さん…ですか？　はじめまして同じクラスに転校してきた神代恭介です　今日はフェイトさんたちと勉強会を開いていたのでお邪魔させていただきました」

なのはやフェイトが妙な事を口走らない内に説明をしとかないと

「あ、ああ　フェイトの兄…かな？クロノ・ハラオウンだ」

「私はエイミィ・リミエッタ　よろしくね～」

やはりこの頃のクロノはシスコンではないか…

「はい　それでは今日はこれでおいとまします」

「あ、待ってキョウスケ君！」

「ん？どうかした、なのは？」

「えっと、ね　よかったら…送ってってほしいかな？なんて／／／」

あ～、夜道を女の子一人（時期魔王だが）ってのも何だしな～

「まぁ構わないよ」

「え、ホント！？…じ、じゃあ、行こうか…／／／」

僕はなのはとハラオウン家を後にした…

背後から殺気を感じたのはいうまでもないな…

――夜、フェイトマンション（アースラ駐屯地）――

――ピピッ

「ん？はいは～い　エイミィですけど？」

「あ、エイミィ先輩　本局メンテナンススタッフのマリーです」

「あ、何？どうしたの？」

「先輩から預かっているインテリジェントデバイス２機なんですけど…何だか変なんです」

「えっ？」

「部品交換と修理は終わったんですけどエラーコードが消えなくて…」

「エラー？何系の？」

「ええ　必要な部品が足りないって…今データの一覧を」

―ピッ

「あ、きたきた…　えっ！？、足りない部品って…これ？」

「ええ…これ何かの間違いですよね？」

―　エラーコードＥ２０３必要な部品が不足しています
エラー解決のための部品　”ＣＶＫ－７９２”を含むシステムを組み込んで下さい　―

「２機ともこのメッセージのままコマンドを全然受け付けないんです　それで困っちゃって…」

（レイジングハート…バルデッシュ…本気なの!?
ＣＶＫ－７９２…

【ベルカ式カートリッジシステム】…）

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

友達の友達は友達の輪だね♪

あの後なのはを送っていき（途中シスコン兄に勝負挑まれたが、なのはが地獄に連れていった…）八神家に帰宅。

みんなと夕飯を食べていたのだが…

――――八神家リビング――

「友達？」

「そや　明日私のお友達を夕飯に誘ったんやけど…みんなもええかな？」

はやての友達？　何か忘れているような…

「はい　我々は構いません」

「はやての友達ってどんな奴だ？」

「ヴィータ　奴ってのは失礼やで
私と同い年のカワエエ女の子やよ。」

「名前はすずかちゃんて言うのよ　私も話した事ありますけど　とっても優しいコでしたね」

「…ッ!?なんですと～!」

「ど、どうした?神代?」

「えっと…はやて、月村すずかさん　かな?」

すっかり忘れてた～!　原作ではやてとすずか　早期に友達になるんだっけ…

「え!?キョウスケ君知っとるん?」

「まぁ　クラスメートだし」

「え!?すごい偶然やな～　…もしかして、キョウスケ君はすずかちゃんと友達?」

「ま、まぁね」

「…ふ～ん　じゃあ明日、すずかちゃんに学校でのキョウスケ君の事いろいろ聞いてみなあかんな～」

…なんでさ　明日どうしよう…

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

――――次の日、管理外世界――――

今日は学校は休みなので、シグナムと管理外世界で蒐集しています

「■■■■■■ッ！！」

「大物だな…」

「シグナムは下がってて　僕がやるよ」

「…フッ　いいだろう　お手並み拝見しよう」

さて、大型のサ○ホーンみたいなヤツだが…

「【クロックマネージャー】！！」

「■■■…」

僕はクロックマネージャーを発動　相手の動きを止め…

「インフィニティ！フェアリースフィア！」

『フェアリー展開』

僕の周りに十数のスフィアが出現

「いくぞ！…この妖精は、性格悪いぞ！！」

『ターゲットロック』

「いけっ！」

僕が掲げた手を相手に向けると、すべてのスフィアが相手の周囲に展開し…

「…ショット！」

―ドカドカドカァァァン！！

スフィア一つ一つから拡散された魔力弾が射出される

「■■■■■■ッ！」

―ドォォォォン！

「よし　シグナム　蒐集を…ってどうした？」

何かシグナムの顔が輝いている…不吉な！？

「神代！　帰ったら模擬戦をっ！！」

「…はぁ　とりあえず蒐集してね」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――海鳴市内スーパー――

はやてSide

「そやけど最近みんな、あんまりお家におらんようになってしもうたな…」

「え、ええ　まぁそのぉ…なんでしょうね」

「あ、別に私は全然ええんよ　みんなが外でやりたい事とかあるんやったら…それは別に」

「はやてちゃん…」

「私は元々一人やったしな」

「…っ！はやてちゃん大丈夫です！今は皆忙しいですけど、その、すぐにまたきっと…」

「そっか、シャマルがそう言うならそうなんやね。今夜はすずかちゃんも来てくれるし、あ、お肉はこんなもんかな？」

「はいっ」

「外は寒いし、今夜はやっぱあったかお鍋やね。」

「はいっ♪」

――ウィィィン

外はめっちゃ寒いな～

「はぁ、みんなも外でさむないかな…」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「神代　先程のはバインドの類なのか？相手の動きを完全に止めていたが…」

ああ　クロックマネージャーの事ね

「バインドではないよ　あれは一定空間内の【時間】そのものを停止させるんだよ」

「……ヴィータからも聞いていたが、もはや何でもアリだな」

もはや呆れ果てるよね～

「さて、このまま次の世界に《シグナム、キョウスケ君！聞こえる？》ん？シャマルからの通信？」

なんか焦っているような…

「どうしたシャマル？」

《あ、シグナム！？　大変なの！！ヴィータちゃんとザフィーラが管理局の人達に囲まれて…！》

「っ！なんだと！？シャマル二人は無事か！？」

《管理局の捕縛結界に閉じ込められてしまって脱出できないでいるの…》

ふむ…　第二ラウンドか…　確かなのはとフェイトがカートリッジシステム搭載してくるんだったな…

「分かったシャマル、今から現場に向かう」

《お願いします　私も後から合流しますので》

「さて、シグナム…行くぞ！」

「ああ！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

新たな力　舞う戦乙女

――都市部上空――

ヴィータSide

「くっ…」

「管理局か」

ヴィータ達は管理局員に周りを包囲されていた

「でもチャラいよ　コイツら　返り討ちだ！」

しかし…

―スッ…

「ん？」

突如包囲していた管理局員が後退していく

「！上だっ」

上空には魔法を展開していた魔導師…クロノがいた

（しまった！さっきのやつらは囮か！？）

「スティンガーブレイド　エクスキューションシフト！」

―ブォンブォン

クロノは無数の魔力刃を放った

「チィ！！」ザフィーラはとっさにシールドを展開し…

―ブォン！ドカドカドカァァァ！！

「ハァハァ…少しは通ったか？」

多少攻撃を通したのか魔力刃を数本腕に食らったザフィーラがいた

「！ザフィーラ！？」

「気にするな　この程度でどうにかなるほど…ヤワじゃない！！」

―パキン！

ザフィーラが力を入れると、魔力刃は砕け散る

「上等っ！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――アースラ駐屯指令室――

「武装局員　配置終了！　ＯＫ　クロノ君」

〔了解〕

「それから今現場に助っ人を転送したよ」

エイミィがそう告げると、クロノがビルに二つの人影を見る

「えっ？あ、なのは！フェイト！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――市街地、ビル屋上――

なのは、フェイトＳｉｄｅ

「レイジングハート！」

「バルデッシュ！」

「「Ｓｅｔ　Ｕｐ!!」」

―ピカァ！

二人が光りに包まれたが、いつもと様子が違った

《Ｏｒｄｅｒ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｓｅｔｕｐ　ｗａｓ　ａｃｃｅｐｔｅｄ…》

《Ｏｐｅｒａｔｉｎｇ　ｃｈｅｃｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｎｅｗ　ｓｙｓｔｅｍ　ｈａｓ　ｓｔａｒｔｅｄ…》

「…え!?これって？」

「今までと違う?」

〔二人とも落ち着いて聞いてね！　レイジングハートとバルデッシュも新しいシステムを積んでいるの！〕

「新しい…システム?」

〔その子たちが望んだの　自分の意思で…自分の想いで呼んであげて　その子達の新しい名前を〕

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルデッシュ・アサルト！」

《《Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》》

―パァーン！

ヴィータがなのは達のデバイスの変化に気付き

「あいつらのデバイス…　あれってまさか！？」

―ガチャ

《Ａｓｓａｕｌｔ　ｆｏｒｍ》

《Ａｃｃｅｌ　ｍｏｄｅ　Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ》

新たな力を手に入れた魔導師…なのはとフェイトが降臨した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

右手に剣、左手に希望

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――市街地、結界表層部――

キョウスケ、シグナムＳｉｄｅ

「強装型の捕獲結界　ヴィータ達は閉じ込められた　か…」

《Ｗａｈｌｅｎ　ｓｉｅ　Ａｋｔｉｏｎ！》

〈行動の選択を〉

「レヴァンティン、お前の主はここで退くような騎士だったか？」

《Ｎｅｉｎ》

〈否〉

「そうだレヴァンティン　今までずっとそうしてきた！」

「あ～…盛り上がってる所悪いが…」

僕も居るんですよ～

「む、すまん。それで何だ？」

「結界には僕が穴を開けるからシグナムはヴィータ達の援護に行っ

てくれないか？」

「神代はどうするのだ？」

「僕はシャマルの援護を…ね。大丈夫、後で駆け付けるから」

確か…シャマルがクロノに見つかって、ピンチの所をあの仮面の男（猫姉妹）が介入してくるんだが…

その時【闇の書】の頁を消費して結界を破壊するのが原作なんだが…悪いが頁は使わせない！てか、猫は廃除する！

…以前警告はしたから歴史が変わって来ないかもしれないが…

「分かった、シャマルの事　頼んだぞ」

「それと今日は、すずかが遊びに来る日だからな。みんな遅れないようにしないとな」

「ああ、主が楽しみにしているのだしな」

原作では間に合わなかったか…

「…はやての笑顔、護ってみせるさ」

僕は【細雪】を取り出す

「…その刀、ヴィータに聞いた【細雪】とやらか？」

「…うん、でも…」

―ドクン！

僕は細雪を構え【リミッター】を解除する

―ギュン！

細雪は、刀の姿から光の刃そのものに姿を変えた

「なっ！？」

「貫けぇぇ！」

―ガシュ！

リミッターを解除した細雪は結界を貫通し大穴を開けていた

「さ、シグナム」

なんかビックリしてるようだが？

「あ、ああ。では行ってくる」

―シュン！

さて、僕はシャマルを探して…と

―シューン！パシッ！

もちろん細雪は回収していくよ？

自動帰還付きだし～

想いを力に

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――市街地、ビル屋上――

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない　まずは話しを聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

フェイトとなのはは、ヴィータ達を説得をしようと話し合いを求めていた

「…あのさぁ　ベルカの諺にこーゆーのがあんだよ　【和平の使者なら槍は持たない】」

「「…？？」」

「話し合いをしようってのに武器を持ってやって来るヤツがいるかバカ！って意味だよバーカ！」

「なっ…い、いきなり有無を言わさずに襲って来た子がそれを言う！？」

「…それにそれは諺ではなく小話のオチだ」

「うっせー！　いいんだよ　細かい事は」

―ドカァァァ！

突如、結界を破り上空から現れた人影…

「っ！シグナム」

突如現れたシグナムに驚くフェイト

「ユーノ君　クロノ君　手ぇ出さないでね　私あの子と一対一だから！」

なのはは、ヴィータを見据えてクロノ達を制する

「ちっ…」

ヴィータは不愉快そうになのはを睨んでいた

「…マジか？」

「マジだよ」

クロノとユーノは苦笑混じりで答える

「（アルフ…私も、彼女と…）」

フェイトは先程現れたシグナムを見つめてアルフに念話をおくる

「…ああ　私も野郎にちょいと話しがある」

フェイトに答え、アルフはザフィーラを睨み付ける

「…ん？」

ザフィーラもその視線に気付き身構える

ここに前回の闘いの第二ラウンドが開始されようとしていた…

――ビル群屋上――

クロノ、ユーノＳｉｄｅ

「（ユーノ　それなら調度いい　僕と君で手分けして闇の書の主を捜すんだ）」

「（闇の書の？）」

「（連中は持っていない　おそらくもう一人の仲間か主かがどこかに居る　僕は結界の外を捜す　君は中を）」

「（わかった）」

―ヒュン！ヒュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのは、フェイトＳｉｄｅ

《Ｍａｓｔｅｒ》

「うん？」

《Ｐｌｅａｓｅ　Ｃａｌｌ　ｍｅ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ》

〈カートリッジロードを命じて下さい〉

「うん、レイジングハート！　カートリッジロード！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

《Ｓｉｒ》

「うん　私もだね

バルデッシュ！カートリッジロード！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

「デバイスを強化してきたか…気をつけろ　ヴィータ！」

「言われなくても！」

―シュン！

Side Out

To Be continued

純白の天使

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――市街地、ビル群上空――

なのはＶＳヴィータＳｉｄｅ

―ヒュュン

上空を飛んでいるヴィータ、その後を追うようになのはが飛んでいた

「ふん、結局戦んじゃねーかよ」

「私が勝ったら話しを聞かせてもらうよ！いいね！？」

「やれるもんなら…やってみろよ！！」

《Ｓｃｈｗａｌｈｅ　ｆｌｉｅｇｅｎ》

―バシュ！

ヴィータは魔力弾をなのはに目掛けて撃ち込む

《Ａｘｅｌ　ｆｉｎ》

―ヒュン！

なのははは上空に上がり回避する

「アイゼン！」
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》
《Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ》
ヴィータは、なのはに向かい突進する
―ビュュュ！
ブースト加速をし、回転しながらなのはに攻撃を向ける
「あっ！」
《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ》
―ガキン！！バチバチバチ！！
レイジングハートはプロテクションを張りヴィータの攻撃を防御する
―ギィィィィン！
「か、堅てぇっ！」
「あ、ホントだ」
《Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ》
―ギィィィン…ドカーーーン！！
プロテクションは爆発し、なのはとヴィータは爆風によりお互い吹き飛ぶ

「ぬぁぁぁ！？」

なのはは体制を立て直したが、ヴィータは不意を付かれた為バランスを崩して落下していく

《Ｌｅｔｓ　Ｓｈｏｏｔ　ｉｔ　Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

〈アクセルシューターを撃って下さい〉

「うん！アクセルシューター！」

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

「シュート！！」

―ドゴァァァン！！

「えっ！？」

カートリッジで強化された砲撃は、なのはの想像以上の魔力弾数を生み出した

その数１２発

「ぐっ…なっ！？」

体制を立て直したヴィータだが、その数に驚いた

《Ｃｏｎｔｒｏｌ　ｐｌｅａｓｅ》

〈コントロールをお願いします〉

「ん…！」

なのはは目を閉じ意識を集中、アクセルシューターをコントロールする

―ギュン！ギュン！ギュン！

ヴィータの周りを囲むようにアクセルシューターが回っている

「アホか！こんな大量の弾、全部制御出来る訳が…」

―バッ！

ヴィータが言いながら腕を振ると、先程放った魔力弾が四方からなのはに接近する

《Ｉｔ　ｃａｎ　ｂｅ　ｄｏｎｅ　ａｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

〈出来ます　私のマスターなら〉

「ん…」

―ギュン！ギュン！ギュン　…パーン！

なのはのアクセルシューター４発は軌道を変え、ヴィータの弾を迎撃した

「ああ…」

複数個の魔力弾を制御しているなのはを驚愕したヴィータ

「約束だよ　私達が勝ったら事情を聞かせてもらうってアクセル…」

「くっ！」

《Ｐａｎｚｅｒ　ｈｉｎｄｅｒｎｉｓ》

ヴィータは自分の周りに全包囲防御魔法を張った

「シュート！！」

―ヒュン！ヒュン！ヒュン！

しかしなのはは、お構いなしにバリアごとヴィータに攻撃

―ガンガンガンガン！

ヴィータのバリアになのはの攻撃が連続で当たり、徐々にバリアに亀裂が入っていく

「あっ…このぉ…！」

ヴィータは低い声で呟いた…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

漆黒の女神、暁の牙

――ビル群――

フェイトＶＳシグナムＳｉｄｅ

―ガン、ガン！

フェイトとシグナムはお互い攻撃をしながらビルを駆け上がっていく

「はぁぁぁぁ！」

「ぬぁぁぁぁ！」

―ガキン！…バキン！

フェイトとシグナムはデバイスでぶつかり合い、お互いを弾くと体制を整える

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

―バチバチバチ！

「プラズマランサー　ファイア！」

―ギュン！ギュン！

フェイトはシグナムに向かって魔力弾を放つ

「はぁぁ！」

シグナムはレヴァンティンを振りフェイトの攻撃を振り払う

―ブォン！

振り払らわれたフェイトのプラズマランサーは四方八方に散り空中に静止した

「ターン！」

―バチバチッ！

―ギュン！

フェイトの命令によりプラズマランサーは向きを１８０度変え、再びシグナムに襲いかかる

「はっ！」

シグナムは襲い掛かってくる魔力弾を上昇してかわすが、さらに魔力弾は追尾してくる

「レヴァンティン」

《Ｓｔｕｒｍ　ｗｉｎｄｅ》

シグナムはレヴァンティンからを衝撃波を放つ構えを取る

《Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ》

バルデッシュは加速魔法をかけ魔力弾のスピードをさらに上げる

「てぇぇい！」

―ザシュザシュ！ドカーン！

シグナムの魔力が篭った衝撃波でフェイトのプラズマランサーを全て迎撃した

「はぁ！」

《Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ》

その隙をついて、フェイトはバルデッシュをサイズフォームにしてシグナムに接近して攻撃

《Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ》

シグナムもレヴァンティンを連結刃形態にして迎撃する

―ドカーーーン！

お互いの攻撃が交差し爆発が起こる

二人は爆煙を挟んで距離を置く

フェイトは左腕に

シグナムは胸に傷を負っていた

「…強いなテスタロッサ…
《Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ》
それにバルデッシュ！」

《Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ》

「貴方とレヴァンティンも…　シグナム」

《Ｄａｎｋｅ》

「この身に成さねばならぬ事が無ければ心踊る戦いだったが…仲間たちと我が主の為、今はそうも言っていられん
…殺さずに済ませる自信はない　この身の未熟を許してくれるか？」

そう言うと、シグナムは居合いの構えをとる

「構いません…勝つの私ですから」

フェイトは笑いながら答える

「フッ…」

シグナムもまた口元に笑みを浮かべていた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――市街地内――

アルフＶＳザフィーラＳｉｄｅ

―ドカァ！ドカァン！

「デカブツ！あんたも誰かの使い魔か！」

アルフは拳を繰り出すが、ザフィーラは受け止めながらそれに答える

「ベルカでは騎士に仕える獣を使い魔とは呼ばぬ」

「んん？」

アルフは一瞬興味が出たように次の言葉を聞いていた

「主の牙、そして盾…守護獣だー！！」

「おんなじような…もんじゃんかよー！！！」

―ドカーーーン！！

アルフの攻撃が爆発し、二人を爆心地から吹き飛ばした

「ぬっ…ちぃ！」

ザフィーラは何とか持ちこたえ、戦況を分析していた

（…状況はあまり良くないな。シグナムやヴィータが負けるとは思わんが、ここは引くべきだろう…シャマル、何とかできるか？）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

不意打ちは主人公の特権だね♪

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――結界外、表層部――

シャマルＳｉｄｅ

「（…ここは引くべきだろう…シャマル、何とかできるか？）」

ザフィーラは念話で結界外にいるシャマルに話しかけた

「（何とかしたいけど　局員が外から結界維持してるの
私の魔力じゃ破れない　シグナムのファルケンかヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ…）」

「（二人とも手が放せん…やむをえん【アレ】を使うしか…）」

「（解ってるけど、でも…）はっ！」

―ジョキ！

背後からクロノがデバイスをシャマルに向けていた

「（シャマル？どうしたシャマル！？）」

ザフィーラの念話にシャマルは答える事ができないでいた

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します
抵抗しなければ弁護の機会が貴方にはある…同意するなら武装の解除を…」

―ビュン！タッ！

「えっ！？」

―ドカッ！
―ガシャァァ！

クロノは突如現れた仮面の男に蹴飛ばされてしまい、金網に激突してしまった

「…くっ！仲間！？」

クロノは何とか立ち上がりながら仮面の男を睨む

「貴方は…？」

シャマルは仮面の男に尋ねるが

「…使え」

「えっ！？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

仮面の男は闇の書の力を…蒐集した魔力を使って結界を破壊するよう促す

「でもあれは…」

「使用して減った頁はまた増やせばいい…仲間がやられてからでは遅かろう」

「あっ…」

シャマルはそう言われ闇の書を見つめ考える…そして、

「（みんな！今から結界破壊の砲撃を撃つわ　上手くかわして撤退を）」

「「「「おうっ！」」」」

シャマルは決意し、ヴォルケンリッター達はそれに答える

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケSide

――数分前、シャマル付近――

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します
抵抗しなければ弁護の機会が貴方にはある…同意するなら武装の解除を…」

あ～やはりクロノに見つかったか…
この場面でリンディさんとエイミィさんが「う～ん♪」とか「ナイスクロノ君！グッドショブ♪」なんて影で喜んでいる事だろう…

ん？僕は見つからないのかと？
今僕は光学迷彩【プリズムファントム】（魔力反応も遮断）で隠れているから見つからないですよ～

『ぶっちゃけミラージュコロイドでは？』

…まあ、否定はしないけどさ。

―ドカッ！
―ガシャァァ！

ふむ、どうやら仮面の男は介入してきたか…

『マスターこれからどうしますか？』

ん～とりあえず…

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

って展開早っ！

「使用して減った頁はまた増やせばいい…仲間がやられてからでは遅かろう」

その瞬間、プリズムファントムを解除

【ヘイスト】を唱え瞬動で一気に仮面の男に接近

「良いわけねーだろ！！」

―ドカァ！グシャ！！

その勢いで仮面の男の腹におもいっきり蹴りを入れた

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ツッコミは徹底的に！

――結界外、ビル群――

キョウスケＳｉｄｅ

「良いわけねーだろ！！」

―ドカァ！グシャ！！

その勢いで仮面の男の腹におもいっきり蹴りを入れた

「えっ！？キ、キョウスケ君？」

いきなり現れたからシャマル驚いているな～

「ふぅ　シャマル、闇の書は使うな　あの結界は僕が「動くな！！」…ん？」

ああ、復活したのかクロノ…

「…ああ、そういえば忘れてた…【ストップ】」

僕はクロノにバインドならぬ【ストップ】をかけて拘束した

「なっ！？か、身体が動かない！？」

あ、ストップ中も喋れるんだ

「執務官殿はそこで惨めに腐っていて下さい」

「な、き、貴様っ！一体僕に何をした！？」

はぁ…うるさいな～　ん？

―タッ！

「…貴様っ！」

あ～　仮面の男もまだ居たんだ

「まったく…今日は予定があるってのにって、いきなり【クロックマネージャー】！！」

僕は不意打ち気味にクロックマネージャーを発動！　不意をつかれた為仮面の男は見事に停止中

え？卑怯？　いやだな～　戦闘において油断するのが悪いってどっかの誰かも言ってたぢゃん♪

『マスター、クロックマネージャータイムリミットまで後１０秒ですが…』

おっと　さっさと済ますか…

「インフィニティ　モード１ｓｔ！」

『１ｓｔ　ルシファーＳｅｔ』

使うの久々だな～

「チャージ！」

《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

―シュュュュウ

「吹っ飛べ！ブラストシグヴァーン！」

―ザンッ！

「バースト！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

―ドカァァァン！

かなりの爆風により、仮面の男は勢いよく遥か彼方に吹っ飛んでいきました

「さて、後はそこのＫＹ執務官殿か…」

「っ…！き、貴様っ何をする気だ！？」

僕はルシファーを振りかざし…

「…カートリッジロード」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ザンッ！

―ガシャァァ！

クロノはまた金網に吹っ飛びました～

「安心しろ…みね打ちだ」

「あ、あの～キョウスケ君　その刀って両刃じゃ…」

「……非殺傷だから」

僕はシャマルから目線を外して言った…まぁ一応生きてる…はず？

『一応ですか！？』

…気にするな、インフィ君

「シャマルはあそこの黒いＫＹから蒐集して　その後ここから離脱してくれ」

「えっ！？でも…まだ皆が」

「今日は急いで帰らないといけないんだからチャッチャとやることを済まそうね。シグナム達は僕が脱出させるから」

「あ、はい　解りました。気をつけてね下さいね、キョウスケ君」

「ああ、じゃあ」

―シュン！

To Be continued

さあ合流だ！さあ逃げよう？

――結界表層部――

結界は毎度お馴染み【細雪】で突破！

―シュン！

「っと　皆は…【ハイパースキャン】！」

…見つけた！　1番近い魔力反応は…ここか！

―シュン！

―タッ！

「無事かシグナム？」

「なっ！？」

「…あなたは！？」

いきなり現れたからシグナムもフェイトも驚いているな～

「話しは後だ　脱出するぞ！シグナムは離脱してくれ。結界は僕が

破壊する（今日は、はやての友達のすずかと食事する約束があるんだから早く帰るぞ）」

「あ、ああ解った」

「すまんテスタロッサ…この勝負あずける」

「シグナム！？」

―シュッ！

行ったか…さて

「と、言う訳で少し付き合ってもらいますよ（ヴィータ！ザフィーラ！聞こえるか！？）」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

ヴィータＳｉｄｅ

「（ヴィータ！ザフィーラ！聞こえるか！？）」

（ん？恭介からの念話？）

「（ああ、恭介！？聞こえてるよ）」

「（今から結界を破壊するから離脱してくれ！…解除されると同時に転移を）」

「（な！？、おめーはどうすんだ？）」

「（破壊した後、魔導師を足止めしてる）」

「（な、無茶だろ！？私やシグナムと互角の奴らを二人同時に相手にするなんて！）」

無茶苦茶もいいとこだ！

だが、アイツは…

「（ま、時間稼ぎくらい問題ないよ～

今日は大事なイベントがあるんだ　後で駆け付けるからさ）」

「（ヴィータ…ここはキョウスケに任せよう）」

ザフィーラ？…ちっ、仕方ない

「（…解ったよ。本当に大丈夫なんだよな？）」

「（何？心配してくれるの？　ヴィータも可愛い所があるな）」

「（なっ／／／んなわけねーだろ…さっさと結界ブチ壊せ！）」

「（はは、じゃあそうするよ）」

（ったくアイツは…さて、）

ヴィータはなのはを見ると

「…ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータ　あんたの名は？」

「なのは…高町なのは！」

「高町なぬ…なぬ…ってええい！呼び難いッ！！」

「逆ギレ！？」

「ともあれ勝負は預けた！次は殺すかんな！ぜってーだ！！！」

―ドカァァァァ！

その瞬間、地上から巨大な桃色の砲撃が上空に放たれ…

―パリィィィン

！！

結界は粉々に砕け散った

「覚えてろよ！バーカ！」

―シュン！

ヴィータはその場から離脱した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはＳｉｄｅ

「あ、えと…ヴィータちゃん」

なのはは暫くヴィータがいた空間を見つめていたが

《Ｍａｓｔｅｒ》

「は、レイジングハート！　…そうだ！フェイトちゃんは！？」

慌ててフェイトが戦っている場所に向かった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

誰がための銃口

――結界内ビル群、数分前――

キョウスケＳｉｄｅ

「（はは、じゃあそうするよ）」

ヴィータとのやり取りを終えて、目の前に…フェイトに目を向ける

「さて、悪いがまずは用件を済ませよう…インフィニティ、２ｎｄモード」

『２ｎｄモード【ジリオン】Ｓｅｔ　Ｕｐ』

僕がジリオンを構えると、フェイトもバルデッシュを構える

「何をするつもりです？　あなたの行っている行為は公務執行妨害にあたります。無駄な抵抗は止めて武装を解除して下さい」

「…なら無駄な抵抗ではなく有効な抵抗ならいいんですね

インフィニティ【てきのわざ】セット」

―カチャ

インフィニティに【てきのわざ】のマテリアをセット
ジリオンを上空に向け

「…貫け！スターライトブレイカー！」

「…なっ！？」

―ドカァァァァ！

ジリオンから桃色の砲撃が放たれ結界を破壊した

「な、なのはのスターライトブレイカーを…何故？」

フェイト、パニック中だね～

「これで僕の一つ目の用件は済んだ…あとは　むっ？」

―シュン！

「フェイトちゃん！大丈夫？」

なのはも来たか

「一応はじめまして、と言った方がいいのでしょうか？」

「あ、あなたは！？」

なのはがこちらをジッと見ているが？

「あ、あのっ　この間は手当てしてくれてありがとうございますっ！」

―ペコッ

「「……」」

僕とフェイトの時間が止まった

「ふぇ？ど、どうしたの二人とも！？」

「はっ！　な、なのは…彼は一応敵なんだし…」

「ま、まぁ　アレはこちらの都合で勝手にやっただけだ　気にするな」

いきなりお礼言われるとは思わなかったわ～

「それで、あの　あなたたちの事情を聞かせてほしいんですが…」

「…何故かな？」

答えは予想はつくが…一応聞いてみよう

「えっと…何で闇の書の完成を目指しているのか…
事情を聞かせて貰えれば、私たちも協力出来る事があるんじゃないかなって」

…いや、闇の書を使っている時点で管理局は即封印！か即捕獲！って思ってるだろうし、一般局員レベルの二人じゃ無理だろ

「フェイトも同じ考えか？」

「えっ！？は、はい　そうです」

？…急に話しを振ったからビックリしたか？

「理由ね…以前フェイトには【闇を天に…】って言いいましたよね
それが理由ですよ」

「それって…どうゆう意味なんです？」

「さあね　それに…」

―カチャ

「…事情を説明しても君達には何も出来ないし、ね」

僕はジリオンの銃口を二人に向ける…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

「そ、そんなことないよ！！」

「そうだよ！私たちはきっと力になれるよ！」

って、なのはとフェイトは言っているが…はぁ　縦社会が解らない人はこれだから…ま、小学生だから仕方ないけど

「…【ヘイスト】」

―ヒュッ！

「えっ！？」

「き、消えちゃった！？」

―カチャ

僕は二人の上空に回りこみジリオンを構え…

「…【クラッシュレイ】！」

―ビッ！ビッ！

二人のデバイス目掛けて赤い光線を放った

―バシュ！バシュ！

赤い光線は二人のデバイスに命中し、コア部分が激しく点滅しだした

「!?バルデッシュ？」

「レ、レイジングハート!?どうしたの？」

《《…Ｅｒ…ｒ…ｏｒ》》

「君達のデバイスの機能を一部破壊させてもらったよ…今回の目的は戦闘ではなく足止めですから…
デバイスがそんな状態では追撃は無理ですね。それでは失礼します
小さなお嬢さん方々…」

僕は立ち去ろうと二人に背をむけると

「ま、まって下さい！　私は高町なのはっ！あなたのお名前はっ？」

んん～　毎日会っている神代恭介です　とは言えんし…

「私はフェイト…フェイト・テスタロッサです！」

フェイトさんまで自己紹介すか～

しゃあない…偽名でいいか

僕は振り返り二人をジッと数秒見つめる

「「……／／／」」

え、何赤くなっていらっしゃるのですか？二人して…

「僕は…スコールです」

『某　傭兵ＳｅｅＤの名前ですか？』

ネタバレは止そうよインフィニティ君！

「スコール…さん」

「スコール…」

「それでは…」

―シュン！

僕は二人の前から消えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはＳｉｄｅ

あの人…スコールさんは行ってしまいました

何だろう…敵って感じがしない…　前から知ってるような、そんな感じ…あの人が闇の書の主なのかな?…見つめられ時ドキッとしちゃったけど／／／

「フェイトちゃん　大丈夫?」

「うん…バルデッシュもそんなにひどいケガじゃないみたい」

レイジングハートもそんなに傷ついてないみたい…よかった

「フェイトー!なのはー!　無事かい?」

「あ、アルフさん、私達は大丈夫です　相手の人は逃がしちゃいましたけど…」

「アルフ…クロノやユーノは?」

「…クロノが魔力を奪われちまってね…今ユーノが治療してるよ」

「闇の書…完成に近づいていくね…」

レイジングハートもバルデッシュも頑張ってくれたのに…ごめんね

一体闇の書が完成したらどうなっちゃうんだろう…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトＳｉｄｅ

あの人、スコールと名乗った人…クロノ達の話しだと、闇の書の主の可能性が高いって事だけど…なんか前から知っているような…

でも、スコールに見つめられたら顔が熱くなって…すごく胸がドキドキして／／／

それに…何で私の名前知っていたんだろう？　スコールにはまだ名乗ってなかったのに、すごく自然に呼んでくれたな…どうしてだろう？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

これってネギま!?

キョウスケＳｉｄｅ

さて、前回の戦闘での収穫

闇の書の頁の消費阻止

クロノからの蒐集

まぁ原作よりは進んでいるはず

そうそう　はやてとすずかの食事会（鍋パーティー）は結果から言うとシグナム達は間に合って、はやて達と過ごしたらしい…

そう　この【らしい…】とは、僕は間に合わなかったのです…帰って来たのは深夜０時過ぎ

管理局にロックでサーチされたらヤバイから色んな場所をランダムジャンプで中継していったから時間かかってね～

で、こっそり玄関を開けたら…彼女がいたんだよね～

しかも…あんな展開になるとは…

――回想――

――八神家玄関、ＡＭ０：２３――

―ガチャ…

（ただいま～…）

もうみんな寝ているよね～

―バタ、ン

あ～真っ暗で何も見えないな…スイッチは、と

―パチッ

「って、うわっ！　…ってヴィータ…さん？」

ヴィータは玄関に居た…というより膝を抱えて座り込んでいる

「…遅かったな恭介」

うっ！　こ、この地を這うような低い声は…かなり怒ってる＝拷問フラグ…

「う、うん　追跡されないように色んな場所を中継してきたんで…」

「……」

な、なに!?この沈黙は!

「あの～それで皆は?」

恐る恐る聞いてみる。まぁ無事なのは確かだろうが

「……と…」

ん??なんだって?

「え?何ヴィータ?よく聞こえなかったんだけど…」

「……け、……ぱ……だ」

う～ん　やはり聞こえん…

ちょい耳を近づいてみると、

―ガバッ

「どんだけ…心配したとおもってんだよ!」

ヴィータがいきなり抱き着いてきて涙声で…って抱き着きぃぃぃ!?

「うぐっ…ひっく…」

いやいやいや　ヴィータさん！　多分ですが、あなたのキャラ間違ってますよ！？

「恭介…ひっく…無事で…よかった…」

あ～　これって悪いの僕なんだろうな～

「…ごめんヴィータ　心配かけて」

―ギュッ

僕の胸で泣きじゃくっているヴィータを優しく抱きしめてあげた…

…ここにはやてが居たら…よそう、考えるのは。

不死身だけど…恐い…

――――１０分後――――

ようやく落ち着いたのか、ヴィータは泣き止み僕を見上げている…

だから捨てられた子猫みたいなその目はやめて～　理性がぁ～！！

「…恭介……」

「ヴィータ…」

な、なんだ!?この雰囲気は～

ハッ!そうだ!　いつものパターンなら誰かが乱入してきて、

―し～～～～ん

来る気配がないっ!?

―スッ

あああああ～!!

ヴィータが目を閉じて接近してくる!?

後5センチ…2センチ…

うう!息がかかっ…んっ!?し、舌をっ!!

「…んっ…んんっ」

「んっ…んくっ…」

―パァァァッ!

ヴィータとキスしたら突如、僕とヴィータの上に【カード】が現れていた

ヴィータの絵柄が書いてあるカードが…

――5分後――

長いキスの後、ヴィータが

「…はやてには、黙っておくから…／／／」

…なんか月9みたいな展開!?

「う、うん／／…ん?」

僕は上空にあるカードに気付いた…

えっ!?パクティオー??

「このカードは?」

僕はカードを手に取って見る

ヴィータの絵柄が書いてあるな…でもネギま!の仮契約カードとは微妙に違ってるし…　魔法系統が違うからかな?

「…どうした?」

ヴィータが心配そうに見ているな…

「あ～　その、ヴィータと…したら、なんかカードが現れてね」

再び思い出したのか真っ赤になったヴィータ

「キ！？…／／／　か、か、カードって！？」

一応唱えてみるか…

「Ｄｉｖｉｄｅ」

〈分割〉

―パァァ！

予想道理コピーできましたよ

「じゃあこれ、ヴィータが持っててね」

一応ネギまの様にコピーをヴィータに渡す…アーティファクト出せるのか！？

「…私が写ってるカード…ありがとう恭介！大切にするよ」

なんかヴィータ口調も変わってきた？

「なぁヴィータ…ちょっとカード持って【アデアット】って唱えてみてくれないかな？」

これでアーティファクトが出たら…

「あ、うん…アデアット！」

―シーーーン

あり？何も出ない？？

「恭介…私、何か失敗したか？」

不安げに見つめるヴィータ

ホンット性格変わった？

「あ、いや　大丈夫　だよ　とりあえずそのカードはヴィータが持っててていいから　僕も同じカード持ってるから」

そう言い、僕はオリジナルのカードをヴィータに見せる

「…うん　ありがとう／／／」

――回想終了――

てな展開が数時間前にあったんですよね～

まさかヴィータとキスするとは…

いや　だからロリコンじゃないって！

魂が体の年齢に引っ張られたんだ～！！

ゴ、ゴホン！

ともかく…あのカードの事は、結局何なのか解らないし…

仮契約カードの類だと予想はしているのだが…

…てかカモいなくても仮契約可能か…

ハッ！ま、まさか僕がカモ属性付いているとかじゃないよね！？

ん？そんなことよりあの後どうなったのか？

いや　普通にヴィータは、はやての部屋で寝たよ

…変な想像した？

だって僕まだ子供だし～（笑）

『中身は二十歳過ぎのロリコンのくせに』

イ、インフィニティさん！？…あ…そういやコイツ大人しかったな…

『気をつかったんですよ　空気くらい読みますし』

…あ、そう？

『（バッチリ録画しましたから何かのネタに使いましょうか…）』

何か言った？

『イエ　ナニモ』

何故カタコトに？

想いの交差

『前回までのあらすじ…
ついにマスターはハーレム街道まっし「をい…」…ハイ？』

誰がハーレム街道まっしぐらだぁぁ！！

『自覚なしですか？』

…ないって否定できない自分が恐いっ

――八神家　リビング――

今朝早く、ヴォルケンズの方々が僕の部屋に乱入してきてた

昨日の…戦闘の方に関して

「神代は無茶しすぎるっ！　」や

「キョウスケ君…心配したんですよ」に

「キョウスケ…少しは我々を頼れ」

と、上からシグナム、シャマル、ザフィーラと言われました～
いや～チートだから大丈夫なんだけど
ヴィータは昨晩のアレを気にしてか何も言って来なかったが、チラチラ視線を感じまくった
目が合うと
「っ！？／／／」
―ボンッ！
…真っ赤になりオーバーヒートしていた　シャマルが心配して治療しようとし聞いていたら
「な、なんでもね～よ／／／」
と、そっぽを向いていた
昨日のと言えば、はやてに鍋パーティーに遅れてごめんと謝ったら
「ええんよ　気にしてへんから」
笑顔で許してくれたが…やっぱり寂しそうだった
ちなみにシャマルに聞いたのだが、すずかには僕の事は言っていないらしい
「ねえ　はやて、すずかに僕がここに住んでいる事言ってないんだって？なんで？」

「う〜ん…やっぱサプライズで、すずかちゃんをビックリさせたいんよ〜
その方が面白そうやしな♪」

まぁ　すずかにバレたら確実に白と金の魔導師にも情報が行って、ココが修羅場になるだろうな…いろんな意味で…

「ん？どないしたヴィータ？　ご飯あんま食べてへんけど？」

「べ、べべべつに何でもないよ　はやてっ！」

「そうか？」

こっちは…まぁいいか

「ご馳走様はやて！じゃあ学校に行ってくるよ」

「ほなこれお弁当っ♪いってらっしゃいキョウスケ君」

「ありがとうはやて　いってきます」

――八神家玄関――

さて、行くか

「恭介っ！」

「ん、どうしたヴィータ？」

「あ…その…（ボソッ）いって、らっしゃい…／／／」

「あ、ああ　行ってきます」

―ガチャ　バタン

『いや～マスター一途って感じでしたね～ヴィータ嬢は』

ホント理性を保った自分を褒めたいよ

『さあ　この調子でどんどん女の子を落としていきましょう♪』

いやいやいや　そんな鬼畜王みたいな真似はしないよ

多分…

携帯って何買うか迷うよね～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校、昼休み――

授業？書いてもつまらないでしょ？

いつものごとく、アリサ経由でフェイトに捕獲され、お弁当をみんなで食べました

で、アリサが以前言っていた携帯のパンフレットを持ってきたのでフェイトと一緒に見ています

「な、何だかいっぱいあるね」

「まぁ　最近はどれも同じような性能だし…見た目で選んでいいんじゃない？」

「でもやっぱメール性能の良いやつがいいよね」

「カメラが綺麗だと色々たのしいんだよ」

「う～ん…」

フェイト悩んでるな～

てか　なのは達よ、買う本人より盛り上がってどうするよ！？

「でもやっぱ、色とデザインが大事でしょ？」

「操作性も大事だよ～ぉ」

「外部メモリ付いていると、いろいろ便利でいいんだけど…」

「そうなの？」

「うん♪写真とか音楽とか沢山入れておけるし…そうそう、メールに添付してお友達に送ることもできるの」

「あ～そうだよね～」

「けっこう使えるよね～」

「ぅわ～いいよね～」

…だから買う本人より盛り上がるなよ…

「キョウスケはどんなのがいいの？」

よくぞ聞いてくれたアリサよ！

「軽量＆コンパクト、ハイスペックなのが！」

「…聞いた私がバカだったわ…」

どーゆー意味だ?

「にゃはは…キョウスケ君も使いやすい方がいいよね〜」

「まぁ、操作性とかはサンプルとかを実際触ってみないと分からないけどね」

「キョウスケ…携帯はどんな色にする?」

「そうだな〜…やっぱ黒とかかな」

男でピンクとか痛いし

「…そっか♪」

なんなフェイトが嬉しそうだが?何かしたかな??

「ん?今フェイトが見ているページの携帯…」

―ヒョイ

僕がフェイトの見ていたページをフェイトの肩越しに覗き込む

「…!?///」

「あ、この携帯、結構趣味かも。フェイトはこれにする…の?」

フェイトの方を向くと…フェイトの顔が近っ!!

そうですよね～
僕の顎がフェイトの肩に乗る位置でパンフ見ていて、その位置からフェイトの顔を見ようとすると…

「%$@&;＼!?／／／」

―ボンッ！

至近距離でフェイトと目が合った
顔の距離…5センチ

そりゃテンパってオーバーヒートするわ…！？

な、なんだ!?この混沌の海は!?

―ゴぉぉぉぉお

うっ！　なのは、アリサ、すずかから闇がっ…混沌の言語を教えたら、確実に金髪の魔王を喚びだせる力を感じるぞっ！

「…キョウスケ君…ちょっといいかな?かな?」

「…なのは、私も手を貸すわよ」

「…キョウスケ君、私たちとちょっと来てくれるかな?」

ヤバイ!本能が警笛を鳴らしている!!

「い、いや　これは…「「言い訳はあっちで聞くよ」」」…ハ、

ハイ」

に、逃げ道がぁ～

―キーンコーンカーンコーン♪

おお、神の救いか！

「ほ、ほら　次の授業の準備しないと」

「「「（…ちっ）」」」

ねえ!?今ちっ　とか言ったよね!?

「…まぁいいわ、放課後じっくり話しあいましょ！後…」

まだあるのかよ～

「放課後にフェイトとキョウスケの携帯買いに行くから一緒に行くわよ!!」

ホントいきなりだな～

携帯は危険が危ない？

――携帯ショップ店内――

あれから下校し、途中リンディさんと合流
携帯ショップに直行した…

リンディさん、一応保護者なんだから、下校中の寄り道を容認っていいのか？

店員「ありがとうございました」

「はいどうも～
フェイトさん、ハイ♪」

「ありがとうございます　リンディ提督」

―ペコッ

リンディさんから携帯の入った袋を嬉しそうに受け取ってるな～

「キョウスケ君の保護者の方は？」

「あ、僕はこのカードで多分大丈夫ですよリンディさん」

そう、あの黒いカードで携帯を購入しました～
黒いカードって威力あるな～

―ただ、

「ふふっ／／／キョウスケとお揃いだね♪」

フェイトさん…同じ機種で色まで同じってどうよ…
確かに黒ってフェイトの好きな色だが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「お待たせ」

「ううん」

「いい番号あった？」

「うん」

「へ～何番？」

「えっとね…これ」

「「「うわぁ～」」」

「キョウスケ君の番号は？」

「えっと…こ…れ！？」

何？番号見せようと携帯いじってだら…急に殺気が！？

「さ、三人とも…どうかした？」

「「「なんでフェイト（ちゃん）とお揃いなの（かな）（よ）」」」

細部は違うが内容は見事にハモったな…てかそこかよ！

「何で、って言われても…欲しい機種がたまたま同じだったんじゃない？　ねぇフェイト？」

「えっ！？う、うん！そそそうだよ～いやだなぁみんな　ぐ、偶然だよ　うん！偶然っ／／／／！！」

「嘘つきなさい！フェイトあんた…狙ってたわね！？」

アリサがバッサリ切った！

「…ずるいよ～フェイトちゃん～」

いや、お揃いの何がずるいの？なのはさん…

「今度私もその機種に変えようっと♪」

あ、あの…友達みんなで同じ機種ってのも紛らわしくないですか？

すずかさん？

「えっ？大丈夫だよ　それに同じ機種なら簡単にキョウスケ君の携帯チェックできるでしょ？」

すずかさん…心を読まないでくださいよ～　てか　サラっと恐い事言ってない！！？　あんたは僕の彼女か！？

「へへっ♪／／／」

ハッ！また心読んだのか！？

「はは、…とりあえず…アドレス　交換しよか…」

「「「「うんっ♪」」」」

で、みんなとアドレス交換をした

…無駄に疲れた…

その後、

「今日はフェイトちゃんとちょっと用事があるから」

と、なのは＆フェイト＋リンディさんは帰宅

アースラ関連でミーティングだろうか

「私も今日はお友達のお家にお呼ばれしてるから」

と、すずか

「私はこれからバイオリンのお稽古があるから」

と、アリサ

平たく言えば現地解散したのでした

まぁ僕もこれから蒐集に行く予定だったからちょうどいい

「（シグナム　聞こえるか？）」

「（ああ、神代か　どうした？）」

「（これから蒐集を手伝うから合流してほしいんだ…後、僕の部屋からインフィニティを連れて来てくれないかな？）」

「（分かった　では後ほど合流しよう）」

さて、いくか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

すずかＳｉｄｅ

―ピッ　ピピッ

「メール送信っと。ちゃんとお土産も買ったし、喜んでくれるかな？」

すずかの携帯には

―はやてちゃんへ

これから時間通りにそちらに行けます。

楽しみにしてるね♪

すずか

という送信履歴があった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

写メって証拠残るよね～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家――

はやてSide

―ピンポーン

「はぁーい」

―ガチャ

「こんにちはー♪」

「あーいらっしゃい　すずかちゃん♪
寄ってくれておーきになー」

「こちらこそおじゃましますっ♪」

今日はすずかちゃんが家に遊びにきてくれた
友達があんまりおらへん私にとっては一大イベントやっ！

――リビング――

「あ、このケーキ美味しいなー♪」

「駅前商店街の翠家さん　私のお友達のご両親が開いているお店なんだ～友達みんな大ファンなの」

「へー　えーなぁ　すずかちゃん
ステキなお友達たくさんやなー」

「みんなにはやてちゃんの事紹介したいんだけど…なかなかタイミングが合わなくって…」

「みんな塾とかお稽古とかあるもんなー」

すずかちゃんのお友達の中に…キョウスケ君もおるんやろな～

…今日はキョウスケ君、帰り遅くなるって言ってたし　どうせやったら居る時にすずかちゃんにビックリサプライズで紹介したいしな～

「せやけどまーあんまり気にせんでー」

「うん　そういえばシグナムさんとかご家族の皆さんも結構忙しいんだよね？」

「んん…まーいろいろとー」

「ヴィータちゃんはゲートボールやってるんだよね～　今度教えてもらおうかな」

「あはは　ヴィータ喜ぶよ」

「ほんと？」

「ほんまや」

それにしても…すずかちゃんはほんまにすごく優しいなー
基本的にはどう見ても怪しい我が家の家族構成のことも…それに、
私の車椅子やその理由の事も　出会ってから今まで一言も聞かない
　せやけど、私が話したらきっと静かに聞いてくれて…全部受け入
れて笑ってくれるような気がする

なんやろなー　そんな気がするんよ」

「？なに　はやてちゃん？」

「あ、あはは　なんでもー　あ　お茶のお変わりどーやー？」

「うん！いただこうかな」

「ちょっとまっててな♪」

「そういえば今日ね、お友達二人の携帯買いに行ってきたんだよ～
　フェイトちゃんとキョウスケ君の」

―ピクッ

な、なんやて！？携帯電話を？　そんな話　聞いてへんけど…ま、
まぁ携帯くらい今時普通やしな

「へ、へ～　そうなんや～」

「それでフェイトちゃんったらね、キョウスケ君とお揃いの携帯買ったんだ～　なのはちゃんやアリサちゃんが羨ましがってたよ～…私もちょっと羨ましかったな～」

―コポコポッ

お、お揃いの携帯!?　なんや　お揃いって!?ラブラブカップルみたいやんか!!

「は、はやてちゃん!　お茶!こぼれてるよ!?」

「あ、あかん!　ついボーってしてもうた」

「だ、大丈夫?」

「うん、ありがとうすずかちゃん」

「あ、それでね　この前みんなで写メ撮ったんだ～」

すずかちゃんにその写メを見せてもらったら…

キョウスケ君が皆に抱き着かれれている所の写メが写ってた…てか皆、キョウスケ君に顔近づけすぎや!!

「へへっ／／これ待受にしてるんだよ♪」

こ、これはキョウスケ君に詳しく別荘でジックリお話し聞かなあかんな…フッフッフッ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

女性の勘は恐ろしい…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

キョウスケＳｉｄｅ

―ゾクッ！

「！！？　な、なんだ？今の寒気は？」

『どうかしましたかマスター？』

「いや　何か寒気が…」

『どうでもいいですが…ターゲットがこちらに突進してきますよ？』

「■■■■■ッ！」

おまっ、それを早く言えよ！！

「ッ！【だいち】マテリアセット！【クエイガ】！」

―ドカァ！

クエイガにより大地が盛り上がり、でっかい岩亀？をひっくり返した

「インフィニティ２ｎｄモード！」

『モード２ｎｄ　Ｓｅｔ！』

「コズミックブラスター！！」

―ズガガガガァン！

―――

――

―

「で、こうなったと…」

「ちょっと手加減間違えちゃった　テヘっ」

「まったく…蒐集する身にもなってくれ」

いや～　岩亀？の真上から砲撃したら勢い余って地面に大穴空けながら埋まっちった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――同時刻　管理外世界――

シャマルＳｉｄｅ

「（ヴィータちゃん　そろそろ時間よ　首尾はどう？）」

「（でかいの一匹と小さいのを二匹仕留めた　たぶん５頁分くらいだ）」

「（こっちは３頁分と少し…
少し足りないけど今はここまでにしときましょう）」

「（まだ大丈夫だよ！あともう少し…）」

「（帰りが遅くなるとはやてちゃんが心配するわ　晩ご飯までに帰るって約束破るの嫌でしょう？）」

「（…わかった…）」

「（戻ったら老人会にも少し顔を出しておかないとね）」

「（うん…ちょっとだけ寄ってく　じーちゃん達には悪いけど、１０分くらいで切り上げるから）」

「（了解　協力するわ）」

「（そ、それと…その…恭介と念話が繋がらないんだけど…）」

「（あ、シグナムとキョウスケ君は、ちょっと遠くまで行っているからかしら？）」

「（そ、そうか…シグナムと一緒なんだ…）」

「（？ヴィータちゃん？どうかしたの？）」

「（い、いや　なんでもねーよ　通信終わりっ！！）」

―プツッ

「…どうかしたかシャマル？」

「ん～　ヴィータちゃん…もしかしてキョウスケ君と何かあったのかしら？」

「何か…とは？」

「なんか最近ヴィータちゃんって、キョウスケ君を見る目が…ハッまさかヴィータちゃん　そうなの！？」

「…シャマル？」

「え、うそ！　いつの間に？　いや～ん　／／／」

―クネクネッ

シャマルは身体をくねらせて妄想を爆発的に膨らませていた

後にザフィーラが

「シャマルが…壊れた…」

そう呟いていたそうな…

人の不幸（恋愛話し）は蜜の味！？

――夕方、八神家――――

―ガチャ

「はやて　ただいま！」

「ごめんなさい　ちょっと遅くなっちゃった」

「シャマル　ヴィータ　おかえりー」

「あ、おじゃましてまぁす」

「「いらっしゃーい」」

「ヴィータは今日もゲートボールクラブかー？」

「うん、じーちゃんばーちゃん話長いんだよ～　もう帰るって言ってるのにー」

「まー人気者さんでええことやんか
シャマル　シグナムは？」

「ああ、お稽古が少し長引いてちょっと遅くなるそうですよ」

「そーかぁー　まーシグナムなら心配ないかなー」

「すずかちゃん、これから晩ごはんにするけど一緒にどう？」

「すみません　これからお稽古なのでそろそろおいとまします」

「えー」

「シャマル　送ってってあげてなー」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

シグナムＳｉｄｅ

―ドカァァァン！

「ふう　少々数が多かったな…大丈夫かレヴァンテイン？」

《Ｊａ》

「さて、今日の蒐集は…ヴィータが５頁半　神代が６頁半、シャマルとザフィーラが３頁　そして…」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ》

シグナムは闇の書を取り出し蒐集させる

「私が６頁か　焦っても詮無いことだが、素早い蒐集とは言い難いな…」

―ピカッ

闇の書が僅かに点滅した

「気にするな　別におまえのせいではないだろう　頁蒐集によってしか力を発揮できないおまえの性質も…おまえがやむなく主にかけてしまう負担も　おまえのせいなどではない　気にするな」

―ピカッピカッ！

「おまえも主はやてのお気に入りの様子だ　おまえに主を殺させるようなことは我々がしない…それより前に必ずおまえを完成させる」

―ピカッ！！

「いましばらく時はかかるが信じて待っていろ　きっと大丈夫だ」

「（もしもしシグナム…こちらシャマル　すずかちゃんを送った帰りに迎えに行くわ…座標を出せる？）」

「（ああ、今出す）」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―キィィィン

その後合流したシャマルはシグナムを治療していた

「闇の書と何かお話してた？」

「なに　ただの世間話さ…一刻も早く主はやてに平穏な暮らしが戻ったら良いなと」

「…そうね　そうなった後、私たちも闇の書もはやてちゃん達と一緒にいられたらいいわね」

「ああ　そうなれたら…幸せだな」

「はい　治療おしまいっと　そういえばキョウスケ君は？　今日は一緒だったのよね？」

「ああ、神代なら…」

―ドゴォォォン！！

「きゃっ!?　な、何?」

「ああ、神代だ」

「キョウスケ君?」

―シュン!

「よっ…と　あ、シャマル　来てたんだ」

「キョウスケ君、さっきの物凄い音は?」

「あぁ　向こうで一匹倒してた　後で蒐集お願いね」

「なら私が行ってこよう」

―シュン!

「あ、シグナム…場所わかるかな?」

「ねぇ　キョウスケ君…」

「何?シャマル?」

…凄く嫌な予感が…

「ズバリ聞いちゃうけど…ヴィータちゃんと何かあったでしょ?」

―ギクッ!

「ななな、何モナイデスヨ　しゃまるサン」

「…動揺してるのが丸解りよ？」

「うっ…」

「さあ　どうなの？キョウスケ君っ！？　お姉さんに話してみなさい」

シャマルさん…ずごく目が輝いてますね～

「い、いや　ホント何もしてない『私が一部始終録画してありますよ　お見せしましょうか？』ってオイ！！」

「えっ　やっぱり何かあったのね♪　インフィニティ　見せて♪」

『ハイ　わか「そろそろデバイス新型創るかな…」スミマセンスミマセンスミマセンスミマセン…』

とりあえずインフィニティを黙らすのに成功…後で画像処分しなければ…

「ん～　残念っ　…でも、何かあったのは確実ね♪今度はヴィータちゃんに聞いてみましょ」

ず、ずいぶん楽しそうですね…

―シュン！

「今戻った…ん？どうかしたか？」

「い、いや　なんでもないよシグナム
さぁ　夕飯に遅れるから早く帰ろうか
シャマル　転移魔法お願いね」

「はい　分かりました」

―シュン！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――八神家――――

「「「ただいま～」」」

「おかえり　三人とも　」

「すずかちゃん送って帰る途中で二人に会ったので一緒に帰ってきました～」

「えっ？　すずかが来ていたのシャマル？」

「ええ、少し前まではやてちゃんと一緒でしたよ」

すずかが友達の家に行くって言っていたのは…はやての家に行くことだったのか…ハッ！　殺気!?

「…キョウスケ君、すずかちゃんに聞いたんやけど、今日携帯電話買ったん？」

「は、はい　買いましたが…」

…携帯料金心配してるのかな？　だったら僕の口座からだから家計に負担はかからないが…

「別に携帯買った事はええんよ…　ただ、その時一緒に携帯買った【女の子】の友達とお揃いってどーゆー事や？」

ええっ！　はやてさん　貴方もそこにツッコミ入れますか！？

「た、たまたま同じ機種になっただ「恭介とお揃い！？おい、どーゆー事だよ！！？」って　落ち着けヴィータ　今説明中だから　ね」

ヴィータが乱入してきた…
だから何で皆お揃いに過剰反応するんだぁぁぁ！？

「すずかちゃんにな、写メも見せてもろうたんやけど…キョウスケ君　【可愛い女の子】４人に抱き着かれる写メが写っとったのは何や？」

『…死亡フラグ確定ですね』

不吉な事言うな！
妙にリアルすぎだ！！

「いや　あの　それは、僕に真ん中に立ってほしいって言われて立っていたら…皆抱き着いて来…いってぇぇぇぇ！？」

ヴ、ヴィータ、足踏んでます！！

「フン！！」

あ～　ヴィータが頬膨らましてそっぽ向いてるし～

…ちょっと可愛いって思ってしまった

「キョウスケ君、ちょっと別荘に行こか…　あそこならた～っぷり時間あるしな」

はやてさんが、とても素敵な笑顔で微笑んでます…笑顔の裏に黒い何かが見えますが…ここは助けをシグナ「すまん神代　無理だ」

って助け求める前に断らないでくれ～

じゃあシャ「ごめんなさい　でも手当は任せて下さいね」

あなたもか～！！

「……」

ザフィーラに至っては目を合わせないでいるし～

「はやて…」

あ、ヴィータが止めてくれる？

「私も行っていいか？」

…前言撤回

ヴィータも凄くいい笑顔でいらっしゃる…って何故グラーフアイゼンを起動してる!?

「気にするな…さ、いくぞ恭介！」

今日解った事…

ヴォルケンリッター達は心が読める…

その後　はやてとヴィータを除くヴォルケンリッター達に見送られ
僕たちは別荘に入っていった…

「さて　じゃあ夕飯の支度しなくちゃ」

「ハッ！、しまった！　主や神代が居ない今、食卓に危険が！」

「シグナムひっどーい！　これでも上達しているのよ？」

そしてシャマルは台所に向かった

「ま、まてシャマル！　お前は主と一緒でなければと止められているだろう！？」

その時、別荘の中と外でいろんな意味の修羅場が展開されていたという…

食事会と負のフラグ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

あれから別荘内で、はやてとヴィータの事情聴取…

―ガクガクガク！

…お、思い出すのも恐ろしい…

で、で丸一日（別荘内時間）かかり、別荘から出ると…

「あ、おかえりなさ～い　夕飯の支度はもう出来てるわよ？」

とシャマルが発言っ！

食卓を覗くと…既にザフィーラは天に召されていてシグナムが介抱していた

こ、これはマズイ！

「よし　みんな！別荘で食事会だ！」

―コクコクコクッ！

シグナム　ヴィータ　はやてが物凄い勢いで首を縦に振っている

いや　首の骨痛めるぞ？

シャマルが何か言っていたが…スマン！無理だ！

そのまま今度は皆で別荘へ…

余談だが、ザフィーラは前々から作っていた万能薬改で一命を取り留めた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内――

「ふう、一時はどうなるかとおもったぞ」

「はは…とりあえず料理は今はやてが作ってくれてるからね」

「はやての料理はシャマルと違ってギガうまだしな」

上からシグナム・僕・ヴィータは命の危機の回避話をしながら別荘内のカフェテリアではやての料理を待っていた

ちなみにシャマルは落ち込みモード全開で、別室にてザフィーラを治療していた

…今度多めに万能薬改を大量に作っておくか…保険で

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「「「「「いただきま～す」」」」」

今はやてが作ってくれた料理を皆で頂いています♪

…さすがにザフィーラは復帰はまだかかりそうだった為ダウン中

ちなみに和食　肉じゃがに焼き魚　冷奴にごはんと味噌汁　あとサラダが今夜のメニューだ

「でもはやて、あまり食材なかったのによくこれだけの夕飯作れたね～」

「無かったって…キョウスケ君の別荘の冷蔵庫の中、ぎょうさん入っとったよ？」

あれ？そうだったか？

「モグモグ、はやてお代わり！」

ヴィータ食べるの早っ！

「はいヴィータ　ちゃんと噛んで食べなあかんよ？」

「主　また腕を上げられましたね」

「ありがとなシグナム♪」

「シャマルもこの位腕上げねーとな」

「ううっ…ごめんなさい～」

確かにはやての料理は美味しいよな～　料理の上手い子は貴重な財産だ

「キョウスケ君、お代わりは？」

「ありがとうはやて、いただくよ」

こうして夕飯は和やかに過ぎていく筈だった…

…シグナムがあのセリフを発するまでは…

「そうだ神代　聞きたい事があるのだが…」

「モグモグ…ゴクン！　ん？何？」

「ヴィータが持っているカードは神代が作ったのか？」

…シグナムは最重要機密に関わる爆弾を投下した

次回！　主人公に明日はくるのか！？

「明けない夜は…ないんだぁー！！」

つづく

主人公補正に女難は必須！？

前回までのあらすじ…

シグナムが、いらんことを言った…

『いや！ザックリ言い過ぎですよ！？』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「え？カードって何や？」

はやてが食いついた！　出来ることなら即リリースしたいっ！

「ヴィータが肌身離さず持っているカードなのですが…どうしたのかと聞くと神代に貰ったと」

ヴィータさん！喋っちゃったのですか！？　ヴィータを見ると

「…／／／」

赤くなって完全に俯いていた

「どんなカードなんや？」

「あ～　まぁ　ヴィータの絵柄が書いてあるカードなんだが…」

作成条件が…キスとは言えんよな～

「ヴィータ　ちょっと見せてくれへんかな？」

「う、うん／／／」

「？どないしたヴィータ？顔が真っ赤やよ？」

「な、なんでもないよ！」

「そか？　…へ～、ほんまヴィータの絵柄が描いてあるんや～　かわええなぁ～」

はやてがかなり食いついている！　こ、この流れは…

「ええなぁヴィータ、なぁキョウスケ君　できれば私も欲しいんやけど…」

やはりそうきたか～！！

「あら？このカードから魔力を感じるわね？　何か特殊な物なの？」

う、ジャマルさん、マジックアイテムだって瞬時に見抜きやがった

「神代が作ったのか？」

「ま、まぁ　作ったと言うか出てきたというか…」

ヤバイ！言い訳が思い付かん！！

「なんやハッキリせえへんな…何か隠してへんか？」

「い、いやだな～はやて　何も隠してないですよ？」

「ふ～ん…何隠してるんヴィータ？」

「べ、べべつに何もっ！　恭介とキスしたなんて隠してな…ぁ！」

「「「……」」」

この瞬間、世界が静止した…

「「「えええええ～～ッ！？」」」

別荘内に悲鳴が響きわたった…

―パチン！

うぉ！耳が～！鼓膜がぁ～

『ギャグ補正付いてますから次のシーンで治りますから』

こ、こいつ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…説明してくれるかな？キョウスケ君？」

はやてさん、今までで1番素敵な笑顔ですね…

殺気がこもってますが…

「う、ハイ…」

こうして僕ははやてに仮契約の説明（ネギま仕様の）をした

まぁキスの前後はごまかしたが…

ちなみにヴィータの方はシャマルが弄りまくっていた…

シグナムは顔を真っ赤にしてパニック中だった

続く

「まだ続くの！？この流れは！？」

キスと仮契約とポイズンクッキング！？

前回までのあらすじ…
ヴィータとのキスがバレた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…それじゃ【帰りが遅くなったキョウスケ君をヴィータが出迎えてくれて、家に入ろうとしたらキョウスケ君が玄関で足を滑らせヴィータがそれを助けようとしたら勢いが強く二人は衝突…キスしてもうた】と？」

「は、はい。かい摘まんで言うと…
まぁ事故みたいな物で、その時に仮契約が成立してしまいそのカードが現れたました…」

まさか玄関でディープなキスをしてました　とは言えんしな～

「…ずるい（ボソッ）」

はい？

「ヴィータばっかずるいやん！

私もキョウスケ君とキ…じゃなく、仮契約したいっ！」

一瞬はやてさんの欲望が垣間見えたような…

「お、落ち着けはやて！」

「いややいやや～！」

はやてキャラは崩壊した！

「それに仮契約っても詳細はまだ詳しく判らないなんだ…
せめてカード効果が詳しく判ってからでも遅くないし…ね？」

なんとかはやてを説得する
…まぁ、はやてとのキスが嫌な訳ではないのだが…皆の前でってのがちょっと、ね～

い、いや！だから石を投げないで！？

「…ぶ～っ」

渋々だが、とりあえずはやてとの仮契約は保留となった…

「…そういえばそろそろクリスマスやな…そのロマンチックなシチュを利用して…（ボソッ）」

何かはやてさんから負のオーラが！？

「…何か言った、はやて？」

「い、いや！何も言ってへんよ！？」

…何事もなければいいが…

―クイクイッ

ん？誰か服を引っ張って？

「恭介…その、ごめん…」

う゛！　ヴィータさん！その涙目で謝らないで～！！罪悪感が～良心が～ぁ！

「う、うん　大丈夫だよヴィータ　別に怒ってないから」

そう言いながらヴィータの頭を撫でた

「ん…／／／ありがとう恭介／／／」

ヴィータの顔がフニャフニャになっ「キョウスケ君…」しまった…

恐る恐る声の方を見ると…

「…ほんまに仲ええなぁ」

微笑んでいる鬼神（はやて）が…笑ってはいるが…目が単色になってる～！？

「あ、いや　これは…」

「…シャマル、キョウスケ君がシャマルの手料理食べたいらしいん

よ…【シャマル一人】で作ってな♪」

はやてさん！それは死刑宣告ですか！？

「は、はい！判りました！」

―タッタッタ

シャマルは、はやての覇気？に気圧され別荘のキッチンへ…

よし！逃げよう！

『現実逃避もいいですが、一日経たないと別荘から出れませんよ？』

くっ…だ、だがこのレーベンスシュルト城は伊達に馬鹿広くないのだよ！

隠し部屋の一つや二つある…ような気がする！

『造った本人が知らないんですかっ！？』

いや～　テキトーに構築したからね～

レーベンスシュルト城って把握しているのって１／１０くらいだし

「…キョウスケ君、何処に行こうとしとるん？」

しかし、はやてに回り込まれた！

「いや、逃げ…じゃなくて…「おまたせ～キョウスケ君♪」シャマル早っ！？」

―ポンッ

誰かが背後から肩を叩いてくる
振り返るとシグナムが…

「神代…これを…」

そのシグナムが手渡してくれたのは…

「…胃薬？」

「まぁ…気休めだが…」

シャマル料理＞越えられない壁＞その他諸々＞胃薬くらいの気休めだぞ！？

「さあキョウスケ君…たくさんたべてな♪」

教訓

周りの視線には気をつけよう

そしてここから記憶が途切れた…

…恐るべしシャマル料理

―バタッ

「ああ!?恭介!しっかりしろ~!!!」

「ふん!乙女の純情蔑ろにしたバチや!」

「あ、主…さすがにやり過ぎでは?」

「ううっ…どうせ私の料理なんて…シクシクシク…」

『相変わらず平和ですね~』

どこがだっ!

留守番って暇だよね～（前書き）

すみません　特に短いです…

留守番って暇だよね～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シャマルのポイズンクッ…いや、手料理を食べ…奇跡の生還を果たした僕

目を覚ましたらヴィータが介抱してくれが、その現場をはやてに見つかり…はやても介抱に参戦！

それはいい！

だが…はやての手にあった…

「はい、キョウスケ君、あ～ん♪」

先程のシャマルの料理がぁぁぁ～

…別荘内で2日寝込んでいました…

そして別荘から出て…

――八神家、ベランダ――

「じゃあ、三人とも気をつけてね」

「ああ、神代　シャマル　主の事頼むぞ！」

「ヴィータちゃんは一人で大丈夫なの？」

「へっ、大丈夫に決まってんだろ！」

「…ではゆくぞ！」

―シュン！

「行っちゃいましたね。さ、キョウスケ君　私達ははやてちゃんの所に行きましょ？」

「そうだねシャマル」

さて、本日はシグナム・ザフィーラコンビとヴィータが蒐集に行き僕とシャマルは、はやての護衛の為に残りました

理由は…以前現れた仮面の男！

僕が、

「あの仮面の男は信用できないから敵と認識して間違いないね…てか確実にはやてに危害加える存在だな！」

って、つい力説したら…

「主の身が心配だな…これからは戦闘ができる者と、サポートとしてシャマルが残るようにしよう」

とシグナムが決定
それはいいんだけど…

「なら今回は恭介が残れ」

とヴィータ嬢が
何故？

「オメー前回ムチャしまくったからだ！
鍋パーティーにも間に合わなかったし、はやては顔には出してなかったけど淋しがってたんだかんな！！」

うっ！やっぱそうだったか…

『ヴィータの精神的ダイレクトアタックで７００ポイントのダメージ』

あ～はいはいそうだね～インフィ

『ノリ悪いですよマスター』

「まぁそう言うことだ神代　今回は我々に任してもらおう」

まぁ、シグナム達の事は信頼してるし大丈夫か

――回想終了――

と言う訳で、はやての護衛兼自宅待機になってしまった…

…アレ？でも何か忘れているような？？

日常と戦闘と…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――マンション（フェイト部屋）――

フェイトＳｉｄｅ

今日はなのはと私の部屋でお話し中です　この前買った（キョウスケとお揃い）の携帯の使い方や、アリサやすずかの事とかお話中です

「そっか　アリサとすずかはバイオリンやってるんだね」

「うん　メールでよくお稽古の話しとか教えてくれるんだよ」

「そうなんだ」

やっぱり携帯って便利だな

キョウスケともそんな風にメールとか出来たらいい…かな／／／

―ガチャ

「たっだいま～」

あ、エイミィが買い物から帰って来たみたいだ

――キッチン――

私となのはエイミィが買ってきた食材を冷蔵庫に収納するのをお手伝い

―ガサガサ

「艦長　もう本局に出掛けちゃった？」

「うん　アースラの武装追加が済んだから試験航行だって　アレックス達と」

「武装って、えと…アルカンシェルか～　ハァ…あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど…」

…そんなに危険な武装をアースラに付けないといけないのか…

「クロノ君も居ないですし　戻るまではエイミィさんが指揮代行だそうですよ
」

「（責任重大～）」

アルフはエイミィにプレッシャーかけて…

「うっ…それもまた物騒な～」

そう言いながらエイミィはカボチャを片手で掴んだ

…エイミィ、意外と握力あるんだ…

「まぁ　とあいえ、そうそう非常事態なんて起こるわけが…」

そう言った瞬間

―ビー！ビー！ビー！

「あ…」

部屋中に非常事態のアラートが鳴り響いた…

――マンション、モニター室――

私はモニターを確認したら、そこにはシグナムと　この前アルフと戦った使い魔の男の人が映し出されていた

「文化レベルゼロ　人間は住んでいない砂漠の世界だね

結界を張れる局員の集結まで最速で４５分…ううん　マズイなぁ～」

相手はシグナム…なら！

「エイミィ　私が行く」

「私もだ」

私とアルフが出動を志願した。シグナムが居るのなら私が行かないと…

「…うん　お願い」

「うん」

「おう」

私は自分の部屋にバルディッシュを取りに行った

「なのはちゃんはバックス　ここで待機して」

「はい」

――フェイト部屋――

机の上に置かれた待機状態のバルディッシュを手にする

「行くよバルデッシュ」

《Ｙｅｓ　Ｓｉｒ》

バルディッシュ…私に力を貸して

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

桜花幻影

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理世界、砂漠――

シグナムＳｉｄｅ

「ハァ…ハァ…ハァ…ヴィータがてこずる訳だな　少々厄介な相手だ」

シグナムは目の前の魔法生物（ワーム）を見据えていた

―ズカァ！

「■■■■■ッ！」

「ぬっ！？」

突如背後からもう一匹、地面から魔法生物（ワーム）が現れた！

―シュルシュル！

「しまった！」

シグナムはワームの触手に捕まり縛られてしまう

「■■■■ッ！」

―ギリギリ！

「ぬぁぁぁ！」

シグナムは全身を締め付けられ身動きがとれない

「■■■■■ッ！」

ワームはそのままシグナム襲い掛かってきた

《Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｂｌａｄｅ》

―ズカァ！バチバチバチッ！

突如上空から雷の剣が無数に飛んできてワームに突き刺さる！

「■■■■■ッ！」

上空には先程サンダーブレイドを放った主…フェイトがいた

「…ブレイク！」

―ドォォォォン！

フェイトが唱えると雷の剣は爆発しワームは崩れ去った

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

アルフＳｉｄｅ

アルフはフェイトと別れ、ザフィーラの元に現れる

「ご主人様が気になるかい？」

「…おまえか」

「ご主人様は一対一　こっちも同じだ」

そう言い、アルフは構える

「シグナムは我らが将だが…主ではない」

ザフィーラも身構え臨戦体制に入る

「あんたの主は、闇の書の主…って言う訳ね…」

「……」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

フェイトＳｉｄｅ

〔フェイトちゃん！助けてどうするの！？捕まえるんだよ！〕

通信でエイミィからツッコミが入った

「あ、ごめんなさい　つい…」

「…礼は言わんぞテスタロッサ」

「お邪魔でしたか？」

「…蒐集対象を潰されてしまった」

―ジャキ！カチャカチャ…

シグナムはそう言いながらデバイスに弾丸を込めていく

「まぁ…悪い人の邪魔が私の仕事ですし…」

「そうか…悪人だったな私は…」

―ガチャ！

弾丸を込め終え、シグナムはレヴァンテインを構えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――マンション、モニター室――

―ビッビッビッビー！

突如アラートが鳴り響く

「な、もう一カ所!?」

エイミィがモニターを見ると、そこには闇の書を持ったヴィータが別世界を飛行している姿があった

「本命はこっち？なのはちゃん！」

「はい！」

なのはは力強く頷いた

フェイトＶＳシグナム

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理世界――

フェイトＶＳシグナムＳｉｄｅ

「預けた決着は、出来れば今暫く先にしたいが…速度はおまえの方が上だ　逃げられないのなら戦うしかないな」

「はい…私もそのつもりで来ました」

―ジャキ！

お互いにデバイスを構え

―タッ！

―ガキッ！

「てい！」

「ふっ！」

―バチバチバチ！

お互いの攻撃を2，3度デバイスで受け、すれ違い様に攻撃するが、お互いの障壁によって阻まれる

「てっ！」

―ヒュン！

フェイトは着地と同時に高速移動で瞬時にシグナムの背後をとり攻撃を仕掛ける

「ハァァ！！」

シグナムはその攻撃に反応、レヴァンテインを鞘に納め瞬時に背後のフェイトの攻撃を受け止める

―ガキッ！

「はぁぁ！」

受け止めたままシグナムは鞘からレヴァンテインを抜き攻撃する

―ガチィ！ズザザザッ！

フェイトも防御するが後ろに吹き飛ばされる

《Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ》

「はぁぁ！」

シグナムはレヴァンテインを連結刃にしフェイトに追撃を放つ

「っ！」

フェイトは何とかシグナムの攻撃をジャンプし回避した

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ》

―ガチャ！バチバチ！

フェイトもバルデッシュをハーケンフォームに変型させ構える

「ハーケンセイバー！！」

「はぁぁぁ！」

シグナムは連結刃をフェイトの周りを囲むよう螺旋状態にする

「はぁぁ！」

―ズバァ！

フェイトはハーケンセイバーの魔力刃を連結刃の隙間を抜いて撃ち出す

「てぇぇい！！」

シグナムも魔力を込めると、フェイトの周りを囲っていた連結刃が一気にフェイトに迫る

《Ｂｌｉｔｚ　ｒｕｓｈ》

バルデッシュは加速魔法をさらに掛ける

―ヒュン！

―ドカァァァ！

シグナムは上空に飛び加速された魔力刃をかわす…が

「はぁぁぁぁ！」

上空には、シグナムの攻撃をかわしたフェイトがバルデッシュを振り下ろしてきた

《Ｈａｋｅｎ　ｓｌａｓｈ》

―ガキッ！

しかしシグナムはフェイトの攻撃を…

「さ、鞘っ！？」

鞘で受けた

「はぁぁぁぁ！」

―ドカッ！

そのままシグナムはフェイトに蹴りを入れ吹き飛ばした

《Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ》

―バチバチ！

フェイトは何とか障壁で防御、落とされながらもバルデッシュはプラズマランサーを撃ち出す

「ハッ！？」

シグナムは予想しなかった攻撃に一瞬反応が遅れてしまった

―バチバチ！ドカァァン！

プラズマランサーはシグナムに直撃し、フェイトは空中で体制を立て直し着地した

《Ａｓｓａｕｌｔ　ｆｏｒｍ》

フェイトはバルディッシュをアサルトフォームに変型させ構えた

―ドカァァ！

攻撃を受け、落下したシグナムは体制を立て直し着地した

《Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ》

シグナムもレヴァンテインを構える

「ふっ！」

フェイトの足元に魔法陣が現れ
―バチバチバチ！
フェイトは左手に電撃を貯める
「プラズマ…」
同時にシグナムの足元にも魔法陣が現れ、レヴァンテインを上段に構え魔力を集中
「飛竜…」
「スマッシャー！！」
―ドカァァァ！
フェイトはプラズマスマッシャーを撃ち出した
「一閃！！」
―ズカァァァ！！
同時にシグナムもレヴァンテインに込めた魔力で連結刃を撃ち出した

―ドカァァァン！！！

お互いの攻撃はぶつかり合い、お互いに打ち消しあった

―ヒュン！

その瞬間、二人は上空に飛び上がり

「はぁぁぁぁ！！」

「はぁぁぁぁ！！」

―ガキィィィ！

空中で再び激突した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

おまけ――

――八神家リビング――

―ズズズズッ

「はぁ～…キョウスケ君が入れてくれたお茶って何でこんなに美味しいんやろな～」

「本当ですね～…私が入れると緑茶が紫茶になっちゃうんですよ…何でかしら？」

「「あはははは…」」

（（そりゃお茶にソースやら醤油やら、あまつさえどこぞの通販で入手した怪しさ大爆発な物体いれるからだ（や））

キョウスケとはやての魂の叫びは同調したそうな…

護るべきもの

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――上空――

アルフＶＳザフィーラＳｉｄｅ

―バキィィィ！

アルフとザフィーラはお互いの拳をぶつけ合い攻撃をしていた

「てぃ！」

「っん！」

―ドカッ！バキ！

「ハァ…ハァ…あんたも使い魔、守護獣ならさ！ご主人様の間違いを正そうとしなくてもいいのかよ！？」

アルフはザフィーラを説得しようと語りかけるが、

「…闇の書の蒐集は我らが意志　我らが主は…我らの蒐集については何もご存知ない！」

「な、なんだって！？そりゃ一体！？あのスコールって奴が主じゃないのかい！？」

―ギュッ

ザフィーラは拳を握り絞めて否定する

「スコールは我らの為…自ら汚名を着ているに過ぎん！」

「じゃあ…あいつは…主じゃない？」

「それに、主の為であれば血に染まる事も厭わなず　我と同じ守護の獣よ　お前もまたそうではないのか？」

ザフィーラは拳を構える

「…そうだよ、でも…だけどさ！」

アルフは悲しみの混じった表情でザフィーラを見つめていた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別管理世界――

ヴィータSide

「（シグナム達が！？）」

「（うん、砂漠で交戦してるの　テスタロッサちゃんと、その守護獣のコと）」

ヴィータはシャマルと念話でシグナム達の事を聞いていた

「（う～ん　長引くとマズいな　助けに行くか）…ん！？」

何かを見つけ空中で急停止するヴィータ

その先には…

「（ヴィータちゃん？）」

「（クソッこっちにも来た！例の白服）…高町なんとか！」

ヴィータの目の前には高町なんとかが…

も、もとい【高町なのは】が居た

Side　Out

なのは、ヴィータＳｉｄｅ

「ふぇ！？なのはだってば！な～の～は～ぁ　もう…
ヴィータちゃん、やっぱりお話し聞かせて貰う訳にはいかない？もしかしたらだけど、手伝える事とかあるかもしれないよ」

「…っ！うるせぇ！！管理局の人間の言う事なんて信用できるか！！！」

ヴィータはなのはを拒絶…だがなのはは、

「私　管理局の人じゃないもの　民間協力者」

そう言い、なのはは両手を広げ優しく微笑んでいた

（闇の書の蒐集は魔導師一人につき一回　つまり、コイツを倒しても頁にはなんねーんだよな…カートリッジの無駄遣いも避けたいし）

「ヴィータちゃん！」

なのははヴィータを説得しようとするが、

「ぶっ倒すのは…また今度だ！」

ヴィータの足元に魔法陣が現れヴィータは魔力球を構える

「あっ！？」

―キィィィン！

ヴィータの掌に魔力が集中する

「吠えろ！グラーフアイゼン！」

《Ｅｉｓｅｎｇｅｈｅｕｌ》

ヴィータは作り出した魔力球をグラーフアイゼンで叩き付けた

―ドカッァァァ！

「きゃあ！」

なのはは突然の衝撃に驚き、目をつぶり両手で耳を塞いでしまう

辺り一面は光や衝撃に覆われた

「脱出！」

その隙にヴィータはなのはとは逆方向に飛んでいく

「…っく　ああ！？」

衝撃が収まり目を開けると、遠くを飛んでいくヴィータを見つける

《Ｍａｓｔｅｒ》

「うん！」

レイジングハートの呼び掛けになのは頷いた

―――――

――――

―――

――

―

「よし　ここまで離せば攻撃もこねぇ…次元転送っ…ん？」

ヴィータが何かに気付く　その目の先には…

《Ｂｕｓｔｅｒ　ｍｏｄｅ　Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

レイジングハートを砲撃モードにかまえたなのはいた

「いくよ！久しぶりの長距離砲撃！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ガチャ！ガチャ！

レイジングハートはカートリッジを2発ロードし魔力を高める

「まさか！撃つのか！？　あんな遠くから！！？」

―キィィィン！

レイジングハートに魔力を集中させる

《Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》

「ディバイーン、バスターァ！！！」

―ドカァァァァ！

放たれた巨大な砲撃がヴィータに襲いかかる

「あっ…」

ヴィータは驚きの余り身動きができず、

―ドカァァァァン！！

砲撃はヴィータに直撃し爆発した

「あ…」

なのはは自分で自身の砲撃に驚いていた

《Ｉｔｓ　ａ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ》

〈直撃ですね〉

「ちょっとやり過ぎた？」

《Ｄｏｎｔ　ｗｏｒｒｙ》
〈いいんじゃないんでしょうか〉

そして砲撃の爆煙が晴れるとそこには…

「…ふぅ、間一髪だな」

「あ、き、恭介…？」

「スコール、さん？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

出現場所は確認しないと！（前書き）

気付いたらＰＶ８９００００、ユニーク１０００００越えてました
みなさんありがとうございます～！

出現場所は確認しないと！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――数分前、八神家――

キョウスケＳｉｄｅ

「（ヴィータちゃん？）」

「（クソッこっちにも来た！例の白服）」

「えっ！？キョウスケ君！大変よ！ヴィータちゃん達がっ！！」

「ああ！シャマル、済まないがはやての事を頼む！」

「はい、分かりました」

さて、ヴィータ達がいる世界に転移…と行きたい所だが、ちょい距離があるな…シャマルにサポートしてもらって転移して…間に合うか？

―ピカッ！

「な、これは!?」

突如僕の胸から光が…いや、正確には胸ポケットに入れていたヴィータとの仮契約カード

「キョウスケ君…そのカードって…」

「あ、ああ　これはヴィータとの仮契約カードなんだが…何故急に…うっ!これは!?」

カードを見つめていると急に僕の知らないカードの機能の【一部】が頭に浮かんで来た

「…なるほど、これなら!」

「どうしたの?キョウスケ君?」

「ん、大丈夫だよシャマル　これならすぐヴィータの元に行けるよ」

そう言い僕はカードを掲げ

「…転送!」

―シュン!

「えっ!?キョウスケ君?…これって超長距離転移!?」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―シュン！

よし！カードの転移機能で一瞬でヴィータの元に来れたのはいいが…

なのはの砲撃射線上ぢゃね～か！！

「くっ！【ファイヤーウォール】×５重障壁！！」

―ブォン！

―ドカァァァン！！

くっ…！障壁が持たない！？

「インフィニティ！カートリッジロード！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ガチャ！ガチャ！

くっ、２発カートリッジ使っても３つ目まで破壊してくるとは…

「…ふぅ、間一髪だな」

「あ、き、恭介…？」

「スコール、さん？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「大丈夫かヴィータ？（すまないがここではスコールって呼んでくれないかな？）」

「あ、ああ…大丈夫だ。すまねぇスコール　助かった」

しっかし、なのはのあの砲撃…あれ非殺傷設定してあるのか？

「ヴィータ、ここは一旦退くぞ！」

「おう！」

だが、なのはさんも素直に見逃す訳ないよな～仕方ない…

「ヴィータは次元転移の準備を！僕があっちの相手をしているから」

「…大丈夫か？」

って心配そうに見てる…ヴッ！お持ち帰りした…ぢゃなくて！

「大丈夫だよ…ヴィータ　それよりも今はこの場を乗り切らないと」

「ああ、まかせたぜキョ…スコール！」

さて、後は…

「ディバイーン…」

って容赦なく砲撃ッスか！なのはさん！？

回避する？いや、後ろにヴィータがいるから却下　受け止める…微妙だったからな…なら、

―ギュ！ドンッ！

僕は足に魔力を集め、虚空瞬動で一気になのはに詰め寄った

To Be continued

説得はまず誠意をみせないと！

前回までのあらすじ

虚空瞬動で一気になのはに詰め寄った！

《Ｍａｓｔｅｒ！》

「…はっ！？」

一瞬で距離詰められたら砲撃主体の魔導師は手も足もでないしね～

「インフィニティ【ふういん】セット！【フリーズ】！」

―グォン！

―ピキ、パキパキッ！

「こ、拘束魔法！？そんな…し、しかもあんな距離を一瞬で接近して！？」

多少バリアジャケットのお陰でレジストしたのか氷漬け…とはいかないが、なのはの身動きを封じるには十分か…ん？そういえば…原作ではたしか、僕じゃなくあの仮面の男が介入したが…今日は影も形も見えないのは…？

そう考えていたら

「ス、スコールさん、何であなたは闇の書を完成させようとしてるんですか!?何か訳があるならお話し聞かせて下さい!
もしかしたら私達にお手伝い出来る事があるかもしれないですし…」

【フリーズ】中のなのはが話しかけてきた
…ったく、話しを聞かせてって言いながら…

「…あなたは相手と解り合おうとする時に、あんな極悪極太魔力砲撃をぶっ放して相手を潰してから解り合おうとすんですか?」

ったく、あんな非殺傷設定にしても食らった方はトラウマに成り兼ねない程の凶悪砲撃放って「訳を聞かせて」って…タチの悪い当たり屋と同じぢゃね~か

…未来じゃティアナがオーバーキル食らってたし…この辺も後々改変しないとな…

「あ、その…」

なのははバツが悪そうに視線を反らしているが…今か!

「(ヴィータ、先に戻っててくれ!僕はこれからシグナムのフォローに行くから!)」

「(…絶対大丈夫だよな?恭介…)」

「(ああ、ちゃんとヴィータの元に帰ってくるよ)」

「（っ！？ぜ、絶対だかんなっ！／／／）」

―シュン！

よし、ヴィータは逃げたか…しかし、何故ヴィータは顔を赤くしてたんだ？

『マスターがあんな天然ジゴロ発言したからでは？』

は？いつそんな発言した？

『だから天然なんです！…ってか、マスター！なのは嬢が…』

「…んんんっ！」

フリーズを（魔）力づくで破ろうとしているし！

長居は無用だな…

「（シグナム、聞こえるか？）」

―シーーーン

あれ？念話が通じない？…何か嫌な予感が…

「インフィニティ！シグナム達の現在地座標は分かるか？」

『ハイ、シャマル女史に座標は頂きましたから』

「よし、すぐに転移を」

『イエス　マスター』

「ま、まってスコールさんっ！」

いやいや、待てませんよ？

―シュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはＳｉｄｅ

―パリィィィン！

私はスコールさんが転移すると同時に拘束を解いた

でも…スコールさん、氷は冷たいよ～っ！せめて普通のバインドをっ！

《Ｓｏｒｒｙ　ｍａｓｔｅｒ》

「ううん　私の油断だよ…」

私はレイジングハートにそう言い、二人が居なくなった空を見つめていました…

次こそお話し聞かせてもらうのっ！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

緊急事態

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別管理世界――

シグナムＶＳフェイトＳｉｄｅ

―ガキッ！

シグナムとフェイトは長時間攻撃を繰り返していた

「ハァ…ハァ…ハァ…」

（此処にきてなお速い　目で追えない攻撃が出てきた…早めに決めないとマズイな…）

―カチャ

シグナムはレヴァンテインを鞘を構える

「ハァ…ハァ…ハァ」

（つ、強い　クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ
今はスピードでごまかしてるだけ…まともに喰らったら叩き潰される！）

―カチャ

フェイトもバルディッシュを構える

（シュツルムファルケン…当てられるか？）

（ソニックフォーム…やるしかないかな？）

お互い静止し構えいた…そして

「ッテイ！」

「ハァァ！」

お互い相手に向かっていったその時

―ズブッ！

「あ…」

フェイトの背後から仮面の男がフェイトの胸を腕で貫いた

「テスタロッサ…」

「あ…あああああ！！」

男の腕から魔力か放たれ苦しみ出すフェイト

「貴様ぁ！」

シグナムが仮面の男に怒りをぶつけると
―スッ

仮面の男は掌を広げる
そこにはフェイトのリンカーコアが輝いていた

「はっ！？」

シグナムの目が見開かれる

「…さあ　奪え」

仮面の男は冷酷に呟いた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

―シュン！

ふう、長距離転移って結構魔力食うんだよな～

さて、シグナムは何処に…

「【ハイパースキャン】！」

『…マスター、2時の方向に反応あり』

よしっ！

―シュン！

―タッ！

「シグナム！無事…っ！貴様は！」

目の前にはフェイトを抱えたシグナムと…

「貴様か　イレギュラー…」

仮面の男が居た

「…シグナム、フェイトから蒐集したのか？」

「……ああ」

辛そうな顔してるなシグナム…
恐らく誇りを賭けた戦いを仮面の男に邪魔されて…って所か

「ふっ…早く闇の書を完成させろ」

―シュン！

そう言い残し仮面の男は消えた…　こりゃそろそろ…

「うっ…」

「テスタロッサ！？」

「どうしたシグナム？」

「テスタロッサの容態が！？」

は？リンカーコアから魔力奪っただけではないの？

「分かった…インフィニティ！【フルケア】マテリアセット、【フルケア】！」

―ピカッ！

よし、これで「神代！テスタロッサがまだ苦しんで！！」って何っ！？

「インフィニティ！魔法は効いてないのか！？」

『いえ、魔法は効いていますが…フェイト嬢のダメージが深く、回復魔法だけでは追い付かないようです』

な、なに!?　原作とちがうぢゃねーか!?

「…っく!ゴホッ!」

「テスタロッサ!しっかりしろ!!」

…何この展開?フェイトが吐血!!?

これってかなりヤバイ?

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

これは不可抗力！？

前回までのあらすじ…

「…っく！ゴホッ！」

フェイトが吐血して緊急事態っす

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

これってかなりヤバイ？

…なら、コレを

―ゴソゴソ

僕は収納空間から液体の入ったビンを取り出す

「神代　それは？」

「これは、以前精製した【エリクサー】だよ　最高級クラスの回復薬だ　これをフェイトに飲ませれば…さ、しっかりしてフェイト　この薬を飲んで」

フェイトにエリクサーを飲ませようとするが…

「…駄目だ　テスタロッサに薬を飲み込む力がもう…」

ヤバイヤバイヤバイ…原作ブレイクにもコレはＢＡＤ　ＥＮＤ過ぎるだろ！

し、仕方がない…ごめんフェイト！

僕はエリクサーを口に含み…

「神代？何を…っ／／／／！？」

「…んっ…」

―ゴクン

―パァァァッ！

…緊急事態だったので、…く、口移しでエリクサーを飲ませたのだが…

姉さん大変です

仮契約カードまで出ましたよ…

「…とりあえずフェイトの顔色も良くなったし、これで大丈夫」

「う、うむ／／／　テスタロッサが無事で何よりだ…神代、そのカードはもしや？」

やっぱり気付くか～！！

「うん、か「フェイト！無事かい！？」ってアルフか…」

―タッ！

「…フェイトに何をした！？」

うわっ　睨んでますね～

「…言い訳はしない、テスタロッサに済まないと伝えてくれ」

フェイトを抱き抱えていたシグナムはアルフにフェイトを預ける

「…行くぞ、スコール」

「…アルフ、フェイトはさっきまで重体だったんだ。一応手当はしたけどそちらでも医療機関で診てもらってくれ…」

そう言い僕もシグナムの後を追ってこの場を去る

アルフが何か言っていたようだが…封鎖される前に撤退
まぁアースラもこっちをモニターしているから詳細の説明はいいか

あ、もちろんカードは回収済みだよ

分割はしていないけど

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シグナムＳｉｄｅ

なんとかテスタロッサは一命は取り留めた…

これも神代のお陰だ。主の為とはいえ、相手の命まで奪ってしまえばあのお優しい主は心を傷めてしまう…

しかし神代には驚かせられてばかりだな
あの魔法や力もそうだが、我等守護騎士が主以外にここまで心を許してしまうとは…ヴィータは特にだったな

…そういえば先程テスタロッサを助ける為とはいえ…その、結果的にとはいえキ、キスの現場を目の当たりにしてしまった

…以前ならあの程度でうろたえる私ではなかったのだが、今の主と神代に出会ってから私は…いや、我等は変わったのだな…

我等を受け入れてくれるあの温かな主の笑顔…

我等を包み込んでくれる神代の優しさ…

初めは驚いたが、今は心地よい…

こんな気持ちが続く日々がいつまでも…と願ってしまうな

その為には主を呪いからお救いせねば！

…神代の場合は、当面テスタロッサとキスをした事を主やヴィータにバレた時どうするかが目下の課題だな

しかし仮契約か…

「私も…」

って、わ、私は何を考えているんだ／／／！？

騎士とあろう者が！！

しかも神代はまだ子供ではないか！？

…いかんな、キスを目の当たりにしたせいで思考が鈍っているようだ

少し落ち着かなければ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？？？Ｓｉｄｅ

『フッフッフ…またフラグが立ちそうですよマスター』

「何のフラグだよインフィニティ…」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

作戦会議：アースラSide

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――アースラ、会議室――――

会議室には、なのは・クロノ・アルフ・リンディ・エイミィ・アレックス・リーゼ姉妹が居た

「フェイトさんはリンカーコアにダメージを受けていたようだけど、命に別状はないそうよ」

ホッとする一同

「私の時と同じように闇の書に吸収されちゃったんですね」

リンディの報告になのはは自分と同じ状態だと確認する

「アースラが稼動中でよかった　なのはの時のように救援が早かったから」

「だね…」

と、クロノの発言にロッテ相槌をうった

「二人が出動してしばらくして、駐屯場の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって…それで指揮や連絡がとれなくて…ゴメンね、私の責任だ」

エイミィは深々と頭を下げ落ち込んでいた

「んなことないよ　エイミィがすぐシステムを復帰させたからアースラと連絡がとれたんだし…仮面の男の画像も残せた」

そう言い、モニターに映る仮面の男を確認するロッテ

「でもおかしいわね、向こうの機材は管理局で使っているの物と同じシステムなのに…それを外部からクラッキング出来る人間なんて居るものなのかしら？」

リンディは疑問に思い考えていた

「そうなんですよ　防壁も警報も全部素通りで…いきなりシステムをダウンさせるなんて…」

「ちょっと、有り得ないですよね」

エイミィとアレックスは信じられないと言う顔でいた

「ユニットの組み替えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ」

エイミィは力強く意気込みを入れていた

「それだけすごい技術者が居るって事ですか？」

「うん」

なのはの問い掛けにアリアは頷く

「もしかして組織だってやってんのかもね…」

ロッテの言葉に場は沈黙した…

「君の方から聞いた話しも状況や関係がよく判らないな」

クロノはアルフに現場の状況を聞いてみた

「ああ、私が駆け付けた時にはもう仮面の男は居なかったけど、アイツが…スコールとシグナムが居て…シグナムがフェイトを抱き抱えてて「言い訳は出来ないが済まないと伝えてくれ…」って」

「それと、こちらのモニターで確認したんだけど…仮面の男にリンカーコアを無理矢理抜き取られた時のダメージが大きくて、フェイトちゃんのバイタルがレッドゾーンギリギリまで下がって危険な状態だったのが解ったわ」

エイミィはモニターを切り替え皆に説明した

「で、このスコール君だっけ？この子がフェイトちゃんに何か飲ませている映像があるんだけど、この後フェイトちゃんのバイタルが通常値まで回復したのも確認できたわ」

エイミィはその【飲ませている】画面に切り替えた

「…エイミィさん、これってやっぱり…／／／」

なのはは、顔を赤くしてモニターをみている

「まぁ…その、状況から判断して口移してフェイトちゃんに飲ませている…ぶっちゃけキスしてるわよね～」

「あぅぅ／／／」

エイミィの答えになのはは更に赤くなった

「ゴ、ゴホン！とにかくだ！闇の書が完成する前に闇の書の捕獲、または主の確保が最優先になるな」

クロノは今後の活動方針を語る

「…アレックス！アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

「うん　では予定より少し早いですがこれより指令部をアースラに戻します

職員は所定の位置に！」

「「「「「「ハイッ！」」」」」」

リンディ提督の号令にアースラクルーは頷いた

「と、なのはさんはお家に戻らないとね」

「あ、はい　でも…」

なのはは何か言いたげにリンディを見ている

「フェイトさんの事なら大丈夫　私達でちゃんと看ておくから」

「…はい」

なのはは迷いながらも頷いた…

「さて、フェイトさんが目を覚ましたら説明しないといけない事が沢山あるわね…」

作戦会議ヴォルケンリッターＳｉｄｅ　そして…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家リビング――

キョウスケＳｉｄｅ

今、八神家では前回現れた仮面の男について会議がひらかれてますまぁ、正体も目的も黒幕も誰か知っているが…

「やはり奴は闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれんな…」

「ありえねー！だって完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん！！」

上からシグナム・ザフィーラ・ヴィータがそれぞれの意見で論議していた

「完成した時点で主は絶対的な力を得る…脅迫や洗脳に効果がある筈はないしな」

…やはりみんな闇の書の歴代主や自身がどうなったか覚えてないみたいだ…

「まぁ　家の周りには厳重なセキュリティを張っているし、万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶとはないと思うけど…」

…追記すると家の中にあった監視カメラ等も僕が全て潰したが…ん？どうやってって？ハイパースキャン使えば一発ですよ♪

…某○○ＮＯＴＥのＬじゃね～んだからあんなに設置するか！？って位あったが…あのジジイはロリコンか！？

「やはり今後もシャマルと戦闘が可能な者一人、主の元を離れん方がいいな」

「そうね…」

原作では八神家自体襲撃って展開はなかったが…万が一があるとも限らないし、はやての安全を第一に考えないと…

「ねぇ…闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになってさ　…それではやては幸せになれるんだよね」

「なんだヴィータいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る　守護者である私達はそれを誰より知っている筈でしょ？」

「そうなんだよ…そうなんだけどさ…私は何か…何か大事な事を忘

れている気がするんだ…」

…ヴィータは何か違和感に気付いているのか？

「なぁ皆…【夜天の書】って魔導書知ってるかな？」

もしかしたら少しは覚え「いや、聞いた事がないな」ってシグナムさん！貴方たちの大元ですから！！

「…他のみんなも？」

「はい、ヴィータちゃんやザフィーラは？」

「私も聞いた事ねー」

「…我もだ、それがどうかしたのかキョウスケ？」

「あ、いや…なんでもないよ　気にしないで」

やっぱ覚えてないか…

「じゃあ今後も今までどうりはやての護衛組と蒐集組に分か

―ガシャン！！

って、なんだぁ！？」

何か倒れたような大きな音が…っ！しまった！もうその時期だったか！！

「ハッ！今の音、はやての部屋から！？」

―ダッダッダッダッ！

ヴィータは慌ててはやての部屋へ
皆も後を追うように急いではやての部屋へ向かった

――はやての部屋――――

―バタン！

「はやて！」

「はやてちゃん！」

「ああ…くっ…！」

部屋に入ると、はやてが胸を押さえて倒れ込んでいた！

「はやて！はやて！病院！！救急車！！！」

「ああ！」

「動かすな！そっとしておけ」

でも、そのままって訳にもいかないよな…かなり苦しそうだし…よし！

「インフィニティ！
マテリア【かいふく】セット！【リジェネ】！」

―ピカァァァ！

リジェネの虹色の光がはやてを包む

「恭介！？それは？」

「回復魔法の一種かな　一定時間常に回復魔法がかかり続ける…多少は楽になるはずだ」

「見て！はやてちゃんの顔色が！」

皆がはやての顔を見ると、先程まで苦しそうにしていたのが嘘のように落ち着いていた

「ふぅ…応急処置だがこれでとりあえずは大丈夫だ」

ホントに【とりあえず】だけど…

―ピーポーピーポー！

「救急車が来たみたいだな」

こうして僕たちは病院へと向かった

フェイトの受難？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――アースラ、病室――

フェイトＳｉｄｅ

「う、ううん…」

フェイトはベッドの上で目を覚ました

「フェイトさん…目、覚めた？」

「リンディ　提督…？」

「うん」

目の前に居る人物…リンディに気付き呟くと、リンディはそれに応えた

「んん…ん？アルフ？」

ベッドから起きようとして傍らにいたアルフに気付いた

「アルフも夕べからずっとあなたの側にいたから」

「…えっ？あれ？私…？」

ようやく状況が把握出来てきたのかフェイトは少しパニックになってしまった

「ここはアースラの艦内、あなたは砂漠での戦闘中に背後から襲われて気を失っていたの」

「あ…」

そう言われ、フェイトは何があったか思い出した

「リンカーコアを吸収されてるけど…すぐ治るそうよ　心配しないで」

「私…やられちゃったんですね…」

フェイトはそう言い落ち込んでしまった

「管理局のサーチャーでも確認出来なかった不意打ちよ　仕方ないわ」

リンディはフェイトの手に自分の手を重ね慰めた

「あ…／／／」

フェイトはリンディが自分の手を握っているのに気付き顔が赤くな

った

「あ、ごめんなさい！嫌だった？」

慌ててリンディはフェイトから手をはなした

「いえ、嫌とかではなく…その…／／／」

「少しうなされているようだったから…でもよかったわ　あなたが無事で」

「すみません…ありがとうございます／／／」

フェイトは顔を赤くしながらリンディにお礼を言った

「学校には家の用事でお休みって連絡してあるからもう少し休んでいるといいわ」

「はい、」

「お腹減ってるでしょ？何か軽い食事と飲み物を持ってくるわ　何がいい？」

そう言いリンディはドアに向かいながらフェイトに聞いた

「あ、いえ　そんな…」

フェイトは遠慮しているようだったが、

「いいから」

リンディの一言で押し切られてしまった

「えと…お任せします」

「うん」

―シュー、バタン

リンディはそう言い一旦部屋から退室した

フェイトは、リンディが握ってくれた手を見つめていた

「ん、フェイトぉ～…」

ベッドの脇でうたた寝していたアルフが寝言を呟いた

フェイトはそんなアルフを見つめながら微笑んでいた

――数分後――

―シュー、バタン

「お待たせフェイトさん」

トレイにはサンドイッチとドリンクが乗せられていた

「えと、ありがとうございます」

フェイトはリンディならトレイを受け取り、

「いただきます」

サンドイッチを食べ始めた

「ねぇ　フェイトさん、不意打ちを受けた後の事って何か覚えてるかしら？」

「えっと…意識が途切れ途切れだったけど、シグナムの声とスコールの声が聞こえたような…ごめんなさい　その位しか…」

再び顔を俯かせるフェイト

「あ、いいのよ！こちらでモニターしてたし、バルデッシュのデータを解析してあの時何があったか確認できているし」

リンディは慌ててフォローする

「何かあったんですか？」

「ん～　実はフェイトさん、仮面の男に無理矢理リンカーコアを取り出された時のダメージがかなり深刻なレベルだったのよ…」

「えっ！？」

フェイトはリンディの発言に驚いていた

「でもね、あの男の子…スコール君がフェイトさんを助けてくれたようなのよ」

「…スコールが私を？」

再びフェイトは驚いた顔をした

「ええ、フェイトさんはかなり危険な状態で…スコール君がフェイトさんに薬を飲ませたら一瞬で回復したからこちらも驚いたけどね…ただ」

「？ただ…何です？」

フェイトは恐る恐る聞いてみた

「フェイトさん…薬が飲める体力もなかったみたいで、緊急事態だったんでしょうね…その…スコール君はフェイトさんに口移しで薬を飲ませたのよ～」

「……」

フェイトはリンディが言ったことを頭の中で処理中…

（口移し？口移しって口と口で移すって意味？　え？え？それって…）

そして数分後…

―ボンッ！！

「きゅゅゅゅゅ～／／／／」

―バタン！

フェイトはオーバーヒートした

「フ、フェイトさん！？しっかりして！！」

フェイトの頭から煙が出ていた…

「／／／／／／～！？」

フェイトが再起動したのはそれから数時間後だったそうな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

入院

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――海鳴大学病院前、病室――

「さあ　大丈夫みたいね　よかった」

「はい　ありがとうございます」

主治医の石田先生に診てもらいとりあえず落ち着いたはやての容態…

「ああ　ホッとしました～」

「せやから、ちょ目眩がして胸と手ぇがつっただけやて言うたやん…　もう、みんなして大事にするんやから」

いやっ！手はともかく、胸つるって…

「…キョウスケ君、どこ見とるん／／？」

しまった！ついはやての胸を凝視してしまった…

「あ～いや～あはは…」

「…恭介のスケベ！！フンッ！」

―ゴン！

いててて！ヴィータさんっ！スネは蹴らないで～

「でもはやてちゃん…頭、打ってましたし…」

「何かあっては大変ですから」

「はやて！よかったぁ…」

みんな安堵してるな～はやてかなり痛がってたからな…実際マジでヤバイと思ったし

「まぁ来てもらったついでにちょっと検査とかしたいから…もう少しゆっくりしててね」

「はぁい…」

どうやらはやては検査は嫌いらしいな…

「さて、シグナムさんシャマルさん　ちょっと…」

「はい…」

「ん？」

シグナムとシャマルが石田先生からの呼び出し…このフラグって…

はやて入院の時期か…急いでアレを創らないと…

とりあえずシグナム達の話しを一応聞いておかないと
調度はやてはヴィータと話し中だし…

『盗み聞きですか？』

うっ…現状把握だよ！

とりあえずドア越しに聞き耳を…

『やっぱり盗み聞きですか』

だから違うってば！

――病室外、廊下――

「今回の検査では何の反応もありませんが…つっただけ　という事はないと思います」

「はい…かなりの痛がりようでしたから」

「麻痺が広がりはじめているのかもしれません、今までこういう兆候はなかったんですよね？」

「と、思うんですが…はやてちゃん痛いのとか辛いのとか隠しちゃいますから」

「発作がまた起きないとも限りません…用心の為にも少し入院して

もらった方がいいですね　大丈夫でしょうか？」

「…はい」

やはりはやては入院になるか…

To Be continued

蝕む呪い…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「入院！？」

「ええ…そうなんです」

「……」

はやて落ち込んで…いや、不安なのかな？

「でも検査とか念のためとかですから心配ないですよ　ね？シグナム？」

「はい、ですから主は心配なきよう」

「いや　それはええねんけど…私が入院しとったらみんなのご飯は誰が作るんや？」

「んぐっ！」

ヴィータがコケた

そりゃ論点がズレてるしな～

「そ、それはまぁ何とかします」

「そうですよ　大丈夫です　多分…」

そう言ったシャマルの発言に、シャマル以外の皆の心が一つになった…

―いや、あんたが作らなければ…―と

「ん～…」

「だ、大丈夫だよはやて！みんなのご飯は僕が作るし、家事も学校休めば何とかなるし」

「あかんよ！キョウスケ君、気持ちは嬉しいけど…学校にはちゃんと行かな…」

ううっ…そんな悲しそうな目で見ないで～ピュアすぎますよはやてさん！

「う…分かったよはやて」

はやてのお願いなら仕方ないな～

「私が、毎日会いに来るよ！だから…大丈夫！」

「ヴィータはええコやな　せやけど、毎日やのうてもええよ　やることないしヴィータ退屈やん」

「はやて…」

「う～ん　じゃあ　お言葉に甘えて、私は三食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ～
…ッ！あかん！すずかちゃんがメールくれたりするかも！」

あ、すずかとメル友だったよな～

「ああ　私が連絡しておきますよ」

「うん…お願いなシャマル」

「では戻って着替えと本を持ってきます　ご希望がありましたら」

「う～ん　何にしようかな～」

そうして僕たちは一時家に戻る事になった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院、正面入口――

僕たちが病院から出ると…

「ん？」

ヴィータがはやての病室を見上げている…やっぱ心配だよな～

「ヴィータ！」

「あ、ああ…」

ヴィータはシグナムに呼ばれ、僕たちは家にむかった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――病室――――

はやてＳｉｄｅ

「うっ！…ううっ…」

（あ、あかんな…みんなに心配かけないようちょ無理したかな…ううっ！）

胸を押さえて苦しんでいた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

お見舞いに行こう！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――朝、マンション前――

なのは、フェイトＳｉｄｅ

「おはよ～フェイトちゃん！」

「おはよう、なのは」

「体調大丈夫？」

「うん、魔法が使えないのはちょっと不安だけど…身体の方はもうすっかり（当面、私となのはは呼び出しがあるまではこっちで静かに暮らしててって）」

「（出動待ち…みたいなカンジかなぁ？）」

「（うん、武装局員を増員して追跡調査の方をメインにするみたい）」

「（そっかぁ）」

―プップー！

「あ、なのは！バスが来たみたいだよ」

「うん！行こうフェイトちゃん」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校、教室――

なのは、フェイト、アリサ、すずかＳｉｄｅ

「入院！？はやてちゃんが？」

「うん、昨日の夕方に連絡があったの…　そんなに具合が悪くないそうなんだけど、検査とか色々あってしばらくかかるって…」

「そっかぁ…じゃあ放課後みんなでお見舞いとか行く？」

「え、いいのアリサちゃん！？」

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話しだったしさ、お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいんじゃない？」

「う～ん　それはちょっとどうかと思うけど…」

「でもいいと思うよ　ねっ、すずか」

「うん　ありがとう。じゃあはやてちゃんの家族の人に聞いてみるね！」

「あっでも、もし面会出来なかったらどうしようか？」

「ん～…じゃあ私達の写メも送っておく？お見舞いの代わりにこれを見せて下さいって」

「あ、アリサそれいいかも」

「じゃあ…あれ？そういえばキョウスケは？アイツも可哀相だから入れてやらないと…」

「ふふっ、アリサちゃん素直じゃないんだから」

「な、なによすずか！別にそーゆーんじゃないんだか「朝から元気だね～アリサ」ってキョウスケ！？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

はやてに学校行けって言われたから来たはいいが…こんな暇そろそろないんだけどな～…まぁ下準備は別荘とか使えばなんとかなるか…

―ガラッ

「じゃあ…あれ？そういえばキョウスケは？アイツも可哀相だから入れてやらないと」

ん？僕の事言っているのか？

…脅かしてやるか

「な、なによすずか！別にそーゆーんじゃないんだか「朝から元気だね～アリサ」ってキョウスケ！？」

「おはよみんな！どうしたの？」

「あ……キョウスケ……」

ん？フェイトどうしたんだろう？元気がないような…

「ちょうどいいところに来たわね！アンタそこに立って！」

「って、アリサ！説明なしかい！」

「にゃはは、あのねキョウスケ君、皆で写メ撮ろうって事になったの」

「写メ？前撮ったような…」

「えと…すずかの友達が入院して、お見舞いに行く前にまず写メ送ろうって事になったんだ」

へ～お見舞いね～…ん？すずかの友達？

……あ”

「じゃ撮るわよ～　タイマーセットして…っと」

っていつの間に！？
しかもいつの間にか皆が周りに！？

―ピッピッピッ…カシャ！

「ちゃんと撮れたかな？」

「うん、ばっちりだよ～」

「じゃあすずか、メメールお願いね」

「うん！」

やっぱはやてに送るんだろうな～
…あれ？病室って携帯禁止だから持って行ってないよな？
…ああ、シャマルに預けたんだっけ

…ん？何か忘れているような…？

まぁ、思い出せないからたいしたことないか…

「ねぇ、キョウスケ君もお見舞いに来てくれるよね？」

まぁ…はやては、なのは達と僕が友達って知ってるし…

「キョウスケ君…何か用事とかあるならいいよ」

すずかさん！貴女もその上目づかいを使うんですか！？くっ！しかも板に付いてるし！

「あ、いや別に用事はないし…いいよ」

「本当？ありがとうキョウスケ君！はやてちゃんもたくさん人数居た方が喜ぶよ！」

さっきとは打って変わって嬉しそな笑顔ですね～

「すずかちゃんも…だから、それはちょっとどうかと思うよ～っ！」

「なのは！そこは気にしちゃ負けよ！！」

「アリサちゃ～ん…」

「すずか、はやてにはもうメール送ったの？」

「うん、さっきの写メもちゃんと付けたよフェイトちゃん」

―ブーブー！

ん？携帯から電話？

「ちょっとゴメン」

「あ、キョウスケ君どこ行くの？もうＨＲ始まっちゃうよ？」

「ちょっと…トイレに　なのは、悪いが代返よろしく」

―ガラガラ！

「に、にゃぁぁ！？む、無理だよ～！」

なのはが何か言っているがスルーするぞ　さて、誰から…ってシャマルからの着歴？何だろう？

―ピッ！トゥルルル…ガチャ！

「もしも〔キョウスケ君！コレはどういう事！？〕ってシャマル、声がでかい！…ってコレって何だ？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

お見舞いに行こう！シャマルのテンパり！？編

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前話より少し遡り…

――八神家、キッチン――

シャマルＳｉｄｅ

「♪～♪～？～よいしょっ　と、はやてちゃんのお弁当こんな感じかな」

【※シャマル女史は、ただお弁当を詰めているだけです。おかずはマスターが作って行きましたインフィニティ談】

―ピーピーピー♪

「ん？あ、すずかちゃんからメールだわ」

―ピッ！

［シャマルさんへ

こんにちは月村すずかです
今日の放課後友達と一緒にはやてちゃんのお見舞いにいきたいんですが行っても大丈夫でしょうか？」

「すずかちゃん、いい子ね…」

―ピッ

「えっ？ええ！？ええええ～！！！？」

［もしご都合が悪いようでしたら、この写真をはやてちゃんに見せてあげて下さい］

メールに添付されていた写真には…なのは・フェイト・すずか・アリサ・キョウスケが写っていた

「な、なんで管理局魔導師とキョウスケ君が一緒に…？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

シグナムＳｉｄｅ

「なに!?テスタロッサ達がどうしたって?」

「(だから!テスタロッサちゃんとなのはちゃん　管理局魔導師の二人が今日はやてちゃんに会いに来ちゃうの!!すずかちゃんのお友達だからっ!ああ!どうしよう!!どうしよう!!!」

「いやまてシャマル落ち着け大丈夫だ!幸い主はやての魔法資質はほとんど闇の書の中だ　詳しく検査されない限りバレはしない」

「(それはそうかもしれないけど…)」

「つまり、私達と鉢合わせる事が無ければいいだけだ」

「(う~ん　顔を見られちゃったのは失敗だったわ…　出撃した時変身魔法でも使ってればよかった…)」

「今更悔いても仕方ない…　御友人のお見舞いの時は私達が外そう」

「(うん…)」

「後は主はやて、それから石田先生に我等の名を出さぬ様にお願いを」

「(はやてちゃん変に思わないかしら?)」

「仕方あるまい　頼んだぞ!」

「(待ってシグナム!実はテスタロッサちゃんとなのはちゃん達が

写っていた写真に…キョウスケ君も一緒に写っているのよ！）」

「なんだと！？…どういうことだ？シャマル、神代は何か言っているのか？」

「（ううん…でもキョウスケ君、あの認識阻害魔法がかかったメガネ掛けているから正体は隠しているみたいだけど）」

「…転校した先にテスタロッサ達が偶然居た…というのが妥当か…」

「（あ、そうだわ！キョウスケ君にそのメガネを借りればいいんだわ！）」

「いや、確か神代はメガネは一つしか作っていないと言っていた…我々の分を作ってもらうとしても今回は間に合わないだろう…変身魔法を使っても主はやてが不信に思われてしまう…それに万が一バレるという事があるかもしれないことだし、やはり我々は極力鉢合わせしないようにしよう」

「（うん…そうね、分かったわ）」

「後、一応神代に確認しておいてくれ勿論念話ではなく携帯で…念話だとテスタロッサ達に気付かれてしまうかもしれん…」

「（分かったわ）」

「では頼んだぞ！シャマル」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――再び八神家――

シャマルＳｉｄｅ

「さて、キョウスケ君に事情を聞かないと…ヴィータちゃんがこの写メ見たらどうなるかしら～フフフッ」

シャマルは黒い笑みをうかべていた…

「ご、ごほん！とりあえず電話ね～」

―ピッポッパッ！

―トゥルルルル…ガチャ！

〔もしも「キョウスケ君！コレはどういう事！？」ってシャマル、声がでかい！…ってコレって何だ？〕

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

その日の出来事はその日の内に報告しなきゃ（笑）（前書き）

ヤバイ…一日一回更新が滞りそうな…

その日の出来事はその日の内に報告しなきゃ（笑）

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

現在に戻り…

――学校内――

キョウスケＳｉｄｅ

「もしも〔キョウスケ君！コレはどういう事！？〕ってシャマル、声がでかい！…ってコレって何だ？」

ったく携帯から声がダダ漏れだぞ！？

〔何でキョウスケ君が管理局魔導師のなのはちゃんとテスタロッサちゃんと一緒に写メに写っているのよ！？〕

…は？

「なんで、って…クラスメートて（強制的に）友達にさせられたから…かな？」

〔友達って…聞いてないわよ～！？〕

「え!?言ってなかったっけ?」

確か転校した日になのは達に会って、その日の夜にその事をシグナム達に一応言っ……あ”っ!

確か…帰ったら何故かはやてとヴィータに正座させられ【お話】の為に【別荘】に強制連行されたんだ…　恐怖の余り記憶を封印してたんだ…ガクガクガクっ!

「…悪いシャマル、言おうと思った日にはやてとヴィータに別荘に拉致られて忘れてた…」

〔あ~…、それは…仕方ないわよね~
キョウスケ君　命の危機だったみたいだし…〕

判ってくれるかシャマルっち!

「とりあえず管理局の方には僕の正体はバレてないと思うよ。認識阻害メガネもちゃんとかけてるしね」

〔今日すずかちゃん達がはやてちゃんのお見舞いに来る時、キョウスケ君も来るの?〕

「…まぁ、みんなと同伴で行くことになったけど…」

〔シグナムとも話したんだけど私達は顔がバレているから、はやてちゃんのお見舞いに来ている時は鉢合わせしないように席を外そうって事になったのよ
で、キョウスケ君はもしはやてちゃんが私達の名前出しそうになったらフォローしてほしいのよ…勿論後ではやてちゃんや石田先生に

私達の事は言わないよう言っておくけど…」

まぁ　原作では大丈夫だったが…何があるか分からないしな～

「わかったよシャマル　何とかフォローするよ」

〔お願いねキョウスケ君　それじゃ」

―ガチャ、プープープーッ

さて、教室に戻るか…

放課後はやてのお見舞いイベントか～

別に変な事はなかったよな～

…シャマルが怪しさ大爆発な服装で居た以外は…

…あれってシャマルの趣味だったのだろうか？

密談は静かにしてこそ意味がある

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――教室前廊下――

キョウスケＳｉｄｅ

さて、やっぱ授業中だな～…

よし！サボろう！

屋上で昼寝でもして…

―ガラッ！

「遅いわよキョウスケ！！」

アリサに捕まった…ちっ！

「キョウスケ君！授業に遅刻は感心しないわね　高町さんにまで迷惑かけて」

なのはに代返頼んだのがバレたか…

やはりなのはには荷が重かったか～

…今度超ネクタイ型変声機でも作って渡しとくか…

「さ、はやく中に入りなさい」

「ハイ、先生　すみませんでした」

教室に入ると、なのはがゴメンとジェスチャーしていたが…まさかホントに僕の声真似して代返したのか？
僕が席に座ると

―ツンツン

ん？フェイトか

「キョウスケ、どこに行ってたの？（ヒソヒソ）」

「どこ…って家の人から電話があったから（ヒソヒソ）」

「家の人ってキョウスケがお世話になってる？（ヒソヒソ）」

「うん、姉さんみたいな人かな？（ヒソヒソ）」

「何かあったの？（ヒソヒソ）」

「いや　帰りに夕飯の食材買ってきてと（ヒソヒソ）」

それは言われてないが、はやてが居ない食卓は死守しないと…特にシャマルとか、シャマルとか…って一人しかいないか～

――八神家――

「はくちゅん！　…風邪でも引いたかしら…？」

――教室（授業中）――

「ね、ねえキョウスケ…よかったら私も付いていっていいかな？私もリンディさんにお買い物頼まれていたからその…ね？（ヒソヒソ）」

何が【ね？】なのかはわからんが…

「まぁ、別に構わないよ（ヒソヒソ）」

「ホント！？約束だよキョウスケ！！」

あ～フェイトさん…周りの視線独り占めですよ？

「どうかしましたか？テスタロッサさん？」

そりゃいきなり大声出して席立てば目立つよな～

「あ、いえっ…な、何でもありません／／…／」

恥ずかしそうに座るフェイト…顔真っ赤だな～

「さ、授業を続けるわよ」

そしてその後は何事もなく授業が続いた…

…だが僕は、その時気付くべきだった…

殺意が篭った視線が３つあったことに…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

まとめてエンカウント！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――海鳴大学病院――

キョウスケＳｉｄｅ

とうとう来てしまった…
この４人娘と一緒にはやての元へ…
こりゃ一悶着ある予感が…

―コンコン！

ってまだ心の準備がぁ～！！

「はぁ～い　どうぞ」

―ガラガラッ

「「「「こんにちは～」」」」

「こんにちは、いらっしゃい」

「お邪魔します　はやてちゃん大丈夫？」

「うん、平気や！　あ、みんな座って座って！」

「ありがとう」

「コート掛けそこにあるから」

「うん」

とりあえず僕は存在感を消して…

「ん？そんな所で何隠れてるんキョウスケ君？」

いきなりサラッと何バラすんすか！この子狸は！？

「えっ？はやてちゃんキョウスケ君の事知ってるの？」

とうとうこの瞬間が…

「すずかちゃんには言ってへんかったけど…キョウスケ君、家に居候してるんよ」

「「「「「……」」」」」

こりゃ耳塞いでおかないと

「「「「「えええええ～～～～！！！！？」」」」」

みなさん、病院では静かにしようね～

「ほ、ホントなのなの?キョウスケ君!?」

パニくり過ぎだなのは

「…まぁ、一応家主です」

と、はやての方を指指す

「はい、家主さんやで~♪」

と何故ピースをしているはやてっ!

「え?え?でも、この前私が遊びに行った時にキョウスケ君の話しをしたのに…はやてちゃん何も言ってないよね!?」

「ごめんなすずかちゃん…キョウスケ君とすずかちゃんが友達って事は前から聞いとったんよ
でも…」

「「「「…でも?」」」」

「面白そうやし、驚かそうと思て秘密にしとったんよ　テヘッ♪」

「「「「テヘッ♪じゃな~い!!」」」」

みんな息ピッタリだな~

「そこっ!変な感心しないの!!」

だから心を読むなぁ～

「…ねぇキョウスケ君…キョウスケ君は私がはやてちゃんと友達って知ってたんだんだよね？」

うっ、すずかから妙な気配が…

「まぁ…はやてからすずかと友達になったって聞いた時は驚いたが…ホントは以前の鍋パーティーの時に話す予定だったんだけど、僕だけちょっと参加できなくて…ごめんすずか」

そう言いながら僕はすずかの手を両手で握って謝る

「えっ！？う、ううん／／／も、もう怒ってないからっ！だ、大丈夫だよキョウスケ君！／／／」

「ありがとう…すずか（ニコッ）」

「…っ！！？う～…／／／」

すずかが許してくれたのはいいが…顔が真っ赤になっている…病院に来て風邪引いたらシャレにならないよな…ッ！？

「「「「「じーーーっ」」」」」

こ、これは！？どす黒いオーラが病室を！？さらに殺気が篭った視線が５つ…って５つ！？

え～と…なのは・フェイト・アリサ・はやて・すずか…は顔真っ赤にしている最中だから違うよな？

じゃあもう一つは…誰？？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――はやて病室、外――

？？？？Ｓｉｄｅ

「…恭介のヤロー、はやてとならともかく…他の女とイチャつきやがって～！！」

「ヴ、ヴィータちゃん落ち着いて…」

答えは病室をこっそり覗いているヴィータだった…

「私だって…私だって、恭介にあんなことやそんなことされてーのにーっ！！！」

ヴィータの理不尽な叫びがこっそり響いた

「落ち着いてヴィータちゃん！声が大きいわよ！！それにこの作品、年齢制限ないから不用意な発言は控えないと！！」

「うるせー！！作者の都合なんてしるかー！！キスだって仮契約以来してねーのにっ！！こーなったら…」

ヴィータは病室のドアに手をかけようとするが…

「だから落ち着いてってヴィータちゃん！
今入って行ったら私達の事があの二人にバレちゃうわ！！」

「ガルルルル…ッ」

「どうどう…」

「って！私は馬かっ！！フンッ！」

そう言いヴィータは立ち去ろうとする

「ヴィータちゃん？どこにいくの？」

「……狩り（ギロッ）」

「あ、し、蒐集ね？が、がんばってね」

シャマルはヴィータの目が据わっている事に気付き恐怖した…

（キョウスケ君…帰って来たら色々あぶないかもしれないわね…）

心の中で合掌するシャマルだった

後に確認すると、ヴィータの蒐集ペースがいつもの3倍だったとか…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――再び病室内――

キョウスケSide

うっ！…この黒い空間を打破しないと…

「な、なのは…確かお土産があるんだったよな？」

「あ、そうだった！これね家のケーキなの♪」

【ケーキ】の単語で何とか場の黒い空気は薄まった…ホッ

「そうなん！？」

「すっごい美味しいんだよ～」

「ね～♪」

「めっちゃ嬉しいわ～」

「じゃあ僕は紅茶でも入れてくるよ」

そう言い僕は部屋を出ようとドアの前に…シャマルの気配はないな

たしか石田先生と話し中イベントか…

「あ、キョウスケ！私はミルクティーだから」

「あ、私も～」

「私も同じのお願いしてもいいかな？」

「私はレモンティーがいいかな」

「ほな私はアップルティーな～」

上からアリサ・なのは・すずか・フェイト・はやての順でオーダーが…

てか手伝えよ女性陣！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

支える想いとパシリ君？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

数分前

――病室前――

シャマルＳｉｄｅ

シャマルはヴィータを見送った後も病室の様子を伺っていたが…

「シャマルさん？何やってんですか？」

はやての担当医の石田先生に声をかけられていた

「はっ！その、ちょっと気になりまして…」

…シャマルは例のサングラスにコートという某笑っていいとも（火）のコーナーに出て来る外人と同じ怪しさ大爆発の恰好をしていた…

「中に入ればいいじゃないですか…というのは禁句なんですかね？」

「あの～…ええっと～…」

「フフッ」

――――病院、待合室――――

シャマルと石田先生は待合室の椅子に並んで座り語りだした

「変な言い方かもしれないですがはやてちゃんの主治医としてシャマルさん達には感謝してるんです　皆さんと暮らすようになってからはやてちゃん…本当に嬉しそうですから」

「……」

「はやてちゃんの病気は正直難しいですが、私達も全力で戦ってます」

「…はい」

「1番辛いのは、はやてちゃんです　でも皆さんやお友達が支えてあげる事で勇気や元気が出てくると思うんです　だがら支えてあげて下さい　はやてちゃんが病気と戦えるように」

そう言いながらシャマルの手に自分の手を乗せる石田先生

「は、はいっ！…う、ううっ」

その言葉にシャマルは涙した…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

シャマルと石田先生の感動の話の間、主人公のキョウスケは…

「ホントに誰も手伝いにこないし…」

キョウスケの手にはトレイに乗った紅茶が６つ…

早い話がパシられていた

「うるさいよ作者！」

ナレーションにツッコムとは…まぁがんばれ！主人公っ

「あ～はいはい…ったく」

―コンコン！

―ガラッ

「お待たせ～、お茶持ってきたよ」

「おそいで！キョウスケ君っ！」

開口1番それか…

「なら誰か手伝いにこいよ～！」

「あかんて！お客様にそんな事させるわけにはいかへんよ」

「お客って…まぁ一応そうだが…」

「そんな事より早くお茶にしましょ！せっかくキョウスケが入れてくれたんだし」

「にゃはは、そうだね～、キョウスケ君はケーキどれがいい？」

「あ、キョウスケ私手伝うよ」

「あ、フェイトちゃん、私も」

みんななんだかんだ言って一応気を遣って手伝ってくれた…アリサは口だけだったが…

「あんた今何か失礼な事考えてなかった？」

「イエナニモ」

ちっ、相変わらず鋭いな

暴かれるキョウスケのスキル…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「あ、この紅茶美味しい～」

「ホントだ…すごく美味しいよ！キョウスケ」

「うん、普段飲んでるのと一味違うってかんじだね」

「ま、まあまあね！」

「そんなんよ～キョウスケ君が入れてくると、お茶全般に及んですごく美味しくなるんよ♪」

上からなのは・フェイト・すずか・アリサ・はやてと（アリサは微妙だが）褒めてくれた

まぁ…特に紅茶に関してはこだわりがあるしね～

「へ～なんか意外だね～」

「そうだね。ねぇはやて、キョウスケって家ではどうなの？」

をい、プライベートを聞くか！？フェイト～

「そやな～…家事全般手伝ってくれたりして助かってるな～」

「へぇ～何か意外な一面ね」

「キョウスケ君ってそうゆうイメージないから」

「失礼な！居候なんだからその位当たり前だろ？それに…」

足が不自由な女の子に家事丸投げって…人としてどうよ？

「どうしたの？キョウスケ君？」

「いや　なんでもないよ、なのは」

―コンコン、ガラッ！

「はやてちゃん、そろそろお薬の時間よ」

「あ、石田先生。もうそんな時間やったんや～」

「じゃあ私達もそろそろ…」

「そうだね」

「はやてちゃん、またお見舞いにくるから」

「お大事に、はやて」

「みんな、今日はホンマにありがとな～」

「あ、はやて　僕も一回家に帰って夕飯の支度するから後でまた来るから何かリクエストある？」

「ほんなら…キョウスケ君特製のスィーツを♪」

さっきケーキ食べたばかりなのに！？

「甘い物は別腹や！！」

「はぁ…たしか前に作っておいたシャルロットケーキがあったな～それでいい？」

「うん♪楽しみやな～」

「「「「……」」」」

ん？どうしたみんな？鳩が豆鉄砲くらったような目をして

「えっと…キョウスケ君ってスィーツも作れるの？」

翠屋としては気になるか？なのは

「ああ、作れるぞ？」

「あ、ちなみにキョウスケ君の料理もプロ顔負けやで！」

はやてよりは劣るけどな～

「…今日はキョウスケの意外な一面のオンパレードだね」

「あんた…もはや何でもアリね」

「キョウスケ君の手料理…食べてみたいな～」

「ん？まぁ機会があれば「「「ホント！？絶対(だ)よ！！」」」って全員かい！？」

「あらあら、キョウスケ君人気者ね～（はやてちゃん頑張らないとキョウスケ君盗られちゃうわよ）」

「！！？…な、な、／／／」

？何かはやてが顔真っ赤にして口をパクパクさせているが

「どうしたはやて…風邪か？」

ん？石田先生が何やら驚いているな

「はぁ…はやてちゃん、苦労しそうね」

「？？？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「じゃあ後はお願いしますねシャマルさん」

―ガラッ、バタン

石田先生と入れ代わりに入って来たシャマル

「お友達のお見舞いどうでしたか？」

「うん　みんなええコやったよ　楽しかった　また時々来てくれるて」

「それはよかったですねぇ」

「ただな…」

「どうかしましたか？はやてちゃん？」

「薄々気付いてたんやけど…みんなキョウスケ君の事が…」

「はやてちゃん…」

「…すずかちゃん達には悪いけど…負けへんで！！」

はやてから覇王並のオーラが放出された

「ふふっ　キョウスケ君って意外と鈍感にですからね～　積極的にアプローチしないと♪」

「せせせ積極的に！？」

そうシャマルに言われ何やら考えているはやて…すると

考え中…

脳内演算終了

―ボン！

「きゅうぅ～っ／／／」

「は、はやてちゃん!?しっかりして！」

何を妄想したか今までで1番真っ赤になり気絶したはやてだった…

「あ、あかん…あかんよキョウスケ君、そんなトコ触ったら…デヘヘヘッ／／／」

気絶したはやてが、ヨダレを垂らしながらアブナイ発言をしていたと後にシャマルは語ったとか語らないとか…

「しっかりして～!!ああ、石田先生ッ　早く来て～!!はやてちゃんが越えちゃいけない一線を越えちゃう～!!!」

制服デートと告白と

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――商店街――――

キョウスケＳｉｄｅ

はやてのお見舞いの後、

「あ～　私これから塾行かなきゃ！」

と、アリサ

「き、奇遇だねアリサちゃん！私も今日はこれから塾があるんだ」

と、すずか

「ふ、二人とも大変だね～　あ、私もお店のお手伝いしないと～」

と、なのは

アリサの迎えのリムジンで三人は一緒に帰っていって、今は僕とフェイトだけなのだが…なのは達、明らかに挙動不審だったよな…

「どうしたの？キョウスケ？」

「あ、いや何でもないよ」

「そっか、じゃあ早く行こう♪」

―ギュ！

フェイトは僕の手を握って歩いていく

フェイトの横顔が赤かったのは気のせいかな？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――商店街――

さて今現在の状況を確認しよう

学校帰りの為二人とも制服

スーパーの買物カートを僕が押している

フェイトは何故か…そう！何故か僕の腕にピッタリくっついている…

端から見たら制服デートすか！？
しかしこの状況…周りの視線が痛い！
ご近所の奥様たちは何やらヒソヒソ話しているし…

「あ、あのフェイトさん？なぜ腕を組んでいらっしゃるんで？」

「え？　だって、今日はスーパー混んでるし…それにこうすると何か安心できるから…キョウスケは嫌だった？」

いや、そんな悲しそうな目をされると～！！

「い、いや　フェイトみたいな可愛いコに腕を組まれるなんて光栄かな（ニコッ）」

フェイトを安心させる為に言った台詞なんだけど、

「あぅ…／／／不意打ちは反則だよ…キョウスケ／／／」

何が反則かは解らないが…フェイトの顔が真っ赤になった…スーパーの空調の調子が悪いのかな？

「そ、それでキョウスケは何を買うの？」

「そうだな～…今日はシーフードカレーとサラダにするかな。自家製のピクルスはまだあったし、後デザートにフルーツのカクテルゼリーでも作るかな」

「な、なんか凄く豪華そうだね？」

以前からデザート系は、はやてとヴォルケンリッター（女性陣）が必ず作ってくれって懇願されたからな～

「フェイトは何を買うの？」

「えと、確かリンディさんからメモ貰ったんだけど…」

メモを見せてもらうと…牛乳　食パン　玉子等など

まぁ明日の朝食用かな？

こうしてフェイトと買物をしていたのだが…

「…ん？」

「どうしたの？キョウスケ？」

「いや、何か…視線を感じたんだけど…気のせいかな？」

「私は何も感じなかったけど？」

まぁ小学生男女二人で普通に食材買っている光景って珍しいからな～

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？？？Ｓｉｄｅ

「あぶなかったわね…危うくバレる所だったわ」

「キョウスケ君って何気に鋭いからね～」

「乙女心には鈍いかも…」

「にゃはは…そうだね」

「あ！、フェイトったらまたキョウスケにくっついて！？」

「ずるいなフェイトちゃん…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ、しないといけないね…」

「な、なのはちゃん…？」

「あ、二人が移動したわ！行くわよっ！なのは、すずか」

「アリサちゃん！バレないように気をつけないと」

「キョウスケ君もＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなの…」

実はあれからキョウフェイの後をこっそり尾行していた３人だったり

「まったく…学校からフェイトの様子がおかしいとは思っていたけど、こーゆー展開になっていたとはね」

「あ、フェイトちゃんが腕組みながらキョウスケ君の手を繋いだ！！」

「しかもあれって恋人繋ぎってやつだよね…お兄ちゃんが忍さんとしてた…」

―ブチ！×３

何かが切れる音がした

「「「ふっふっふっ…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだね（よ）（なの）」」」

三人の心は一致した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

買物も終り帰宅中

―ゾクッ！

な、なんか寒気が！？

―ガクガクガクッ！

ん？フェイトの顔が真っ青に…

「どうしたフェイト？顔色悪いぞ？」

「あ、うん…何か急に寒気がして…」

「風邪か？…少し公園で休んでいこうか」

「…うん」

――――公園――――

僕はフェイトをベンチに座らせる

「ちょっとゴメンね～」

「えっ？」

そう言い僕はフェイトに熱がないか額に手を当てて計る

「あぅ…／／／」

ん～…少しあるかな？

「…ちょっと熱っぽいかな？今日ははやてのお見舞いや買物で疲れたせいかな～」

「そ、そうかな／／／（これはキョウスケのせいだよ～）」

さて…と

―パチン！

僕は周囲に認識阻害魔法を展開した。（ネギまＶｅｒ）

「っ！？結界？」

まぁイキナリだから焦るよね～

「フェイト…大事な話しがあるんだ…聞いてくれるかい？」

「き、キョウスケ？」

僕は認識阻害メガネを外す…

「えっ…！？ス、スコール！？え、ええっ！？？」

さらにパニック状態だな～

「うん…見ての通り僕はスコールとして君達の前に現れた…」

「キョウスケが…スコール…」

「驚いたでしょ…それでどうする？…捕まえるかい？」

フェイトはジッとこちらを見つめて一言…

「…訳を聞かせてくれるかな？」

「…ああ」

そして僕はフェイトに色々と話した…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

協力者と乙女心…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――公園――

キョウスケSide

あれからフェイトと色々と話した

「はやてが闇の書の主…」

「うん、はやて本人は知らないけど、今はやてはその闇の書の呪い…っていうよりバグのせいで身体を蝕まれているんだ…最終的には命が…」

「そんな!?何とか助けられないの？」

「ヴォルケンリッター達は闇の書が完成させればはやてを救えると思っているが…完成された闇の書は主を飲み込み全てを破壊し、また転生する…」

フェイトは黙ってこちらを見ている

「だが…かなり分の悪い賭になるが、救う方法はある！」

原作でもはやては命は救われたが…それだけじゃ足りない！

「ならアースラの皆にも「ダメだ」っ、なんで！？」

「…ハッキリ言うが、僕は管理局は信用できない」

「ッ！？」

フェイトは驚いてるね～

「理由が知りたいかい？…インフィ！」

『…よろしいのですか？』

「えっ！？声が？」

僕はポケットから指輪を取り出しフェイトに見せる

『初めまして…ですかね？マスターのデバイス…インフィニティです　以後よろしくフェイト嬢』

「あ、うん　こちらこそ…」

「さて、インフィニティ…今回の【闇の書】に関する管理局側の裏の情報を」

『はい』

インフィニティはある人物のデータを表示した

「グレアム提督!?」

「そ!で、この人の良さそうな顔をしている人が今回の黒幕さ」

「ええ!?」

「まぁ、正確には…」

一旦言葉を区切り…

「はやてを殺そうとしている人物だ」

その言葉にフェイトは今日1番の驚いた顔をした

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「そんな…グレアム提督が、闇の書をはやてごと封印しようとしてるなんで…」

証拠なら以前こっそりハッキングしたからかなり出てきたよ～　以前別荘で製作した高速演算情報処理〈ハイパーカリキュレーション〉システム【A-K】と、次元ネットワークコンピュータ【ORACLE】、こいつを使えばハッキングなんて朝飯前の晩飯さっ

…調べたら、管理局が知られたくない情報が山のように出てくるわ～

…今回の事後処理の取引材料に使えるな

「ついでに言うと、この前フェイトを襲った仮面の男ってその男の使い魔…ロッテかアリアだから」

フェイトは信じられないといった感じで目を見開いていた

「あちらさんのプランは闇の書を完成させて、闇の書を覚醒した主ごと氷づけにし異次元に封印ってカンジかな　そうすれば闇の書の転生機能も作動しないから」

「そんな…」

「アースラはグレアムと繋がりがあるからね　だから信用できない…でも」

「でも？」

「僕はフェイト・テスタロッサという女の子は信用しているよ（ニコッ）」

「あ…／／／」

「それにフェイトは…一方的にとはいえパートナーになったからね」

「えっ！？パパパートナー！！？／／／」

フェイトがかなりテンパッているが？なんでだ？

『…いつか女性に刺されますよ』

…何か妙な電波が届いたような？

なんとかフェイトを落ち着かせ、僕は一枚のカード…フェイトの絵柄の仮契約カードを見せる

「私の…絵が？キョウスケこれは？」

「これが仮契約の証…パクティオーカードだよ」

フェイトはマジマジとカードを見つめる

「このカードには色々と能力があるんだけど、僕もまだ詳しく解らないんだ…分かっているのは、
カードに描かれている人物の所に転移出来る【転送機能】と呼び出す【召喚機能】…距離は持ち主の魔力によって左右されるけど…分かっているのはそのくらいかな。それじゃ…」

僕はカードを掲げ…

「Ｄｉｖｉｄｅ」

〈分割〉

―パァァ！

カードを複製っと

「これをフェイトに…」

分割したカードをフェイトに渡す

「…ありがとうキョウスケ／／／」

「どういたしまして」

「ね、キョウスケがこのカード作ったんだよね？」

あ～まぁ　作ったというか…

「…この仮契約カードってある条件を満たせば作れるんだが…」

「条件？どんな？」

「以前砂漠で倒れた時の事って聞いてる？」

そう聞いた途端フェイトの顔がまた真っ赤に

「う、うん…／／／リンディ提督が教えてくれた／／／」

「仮契約の条件って…キスだったんだ
ごめんねフェイト」

「あ、そ、そんな！謝る事ないよ！！あの時は私が危険な状態だって聞いたし、キョウスケは私を助けてくれたんだよね」

「う、うん」

「そ、それに…初めてがキョウスケでよかったし（ボソッ）」

「ん？何？聞こえなかったけど」

「あ、ううん！なんでもないよ！」

凄い勢いで首をブンブン横に振っているフェイト…頭取れないか心配だ…

「それで、キョウスケ…キョウスケは…はやてを助けるんだよね」

「…うん、必ず」

「なら私も手伝う…友達が危険なのを放っておけない！」

「ありがとうフェイト…」

「それで、キョウスケはどうやってはやてを助けるの？」

まぁ　基本は原作と同じかな～　前々から仕込みはしているが…

「…闇の書を完成させる」

「えっ！でもさっき…」

「完成させると主は闇の書と融合…【ユニゾン】状態になる…僕たちはその【闇の書の意志】と戦闘になると思う…」

「はやてと戦うの？」

「正確には闇の書の暴走した防衛プログラムとね…ここからが賭なんだが、闇の書の意識内にいるはやてに闇の書の管理者を説得してもらう
で、説得して管理者権限発動したはやてに闇の書と暴走した防衛プログラムを切り離してもらい同時にはやてを救出！
そして最終フェイズ…僕らでその暴走プログラムを消滅させる」

大まかな流れは変わらないな～不確定要素がなければ

「…完成前に何とかならないの？」

「…闇の書には転生機能があってね　完成前に何とかしようとしたらその時点ではやてを飲み込み転生してしまう…まったく誰だよ！あんな風に改変したのは！」

たしか…旅する機能を転生機能に、修復機能を無限再生ってどんなマ改造だよ！？

「キョウスケ…私は何をしたらいいかな？」

……アレ？

「…いや、特にないな」

―コテッ！

あ、フェイトかコケた

「ち、ちょっと！何もないって…」

「あ～…最終的にはフェイトにも協力してもらうよ？ただ、それは【フェイト達とスコールが協力】って形にしたいんだ」

「？？？」

「フェイト、君は【ジュエルシード事件】で裁判を受けたよね…一応無罪になったけど」

「えっ！？何でキョウスケが知ってるの？」

原作で…とは言えんから

「ハッキングした時ちょっとね…それで、一応管理局に保護監察受けているフェイトがここでまた敵側の僕に表立って協力したら…管理局から裏切り者扱いされ立場悪くなるでしょ？」

「……」

「だから、今後もスコールとしてフェイト達の前に現れても今まで道理敵同士って振る舞って…
まぁ最終決戦時に協力関係にってカンジがベストなんだけど」

「…うん、分かった」

多分その時になのは達にも正体バラす事になりそうだしな～

「キョウスケ…一つお願いがあるんだけど…いいかな？」

「お願い？まぁ無茶じゃなければ…で、何かな？」

「えっと…その…／／／」

なにやらフェイトは指先で自分の髪をモジモジさせているが？しかもなぜか顔を赤くして…

「あの…ね／／／…キョウスケとちゃんと仮契約したいの！！」

…はい？

「え？仮契約はちゃんと出来ているが？」

カードもちゃんとあるしね～

「ちがうの…今度はちゃんと…自分の意志でキョウスケとしたいの／／」

『くくっ！ホントモテモテですねマスター』

え～と…これってやはり

『そうですよマスター』

…マジ！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

追跡者とキスと仮病と？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

少し時間を遡り…

――公園前――

？？？Ｓｉｄｅ

「あの二人…相変わらずべったりくっついて～！！！」

「あ、アリサちゃん！二人が公園に入っていくよ！」

「ぬぁんですって！？なのは！すずか！いくわよ！！」

「もちろん！」

「なの！！」

相変わらず尾行を続けていた三人娘でした

――公園内――

「ああ！！キョウスケがフェイトのおでこに手を当ててる！？」

「いいなぁ～フェイトちゃん…ね、なのはちゃんもそう思…」

「……」

すずかは見てはならない友人の姿をみたそうな…

―パチン！

「ん？今何か音しなかった？」

「えっ！？そ、そうかな？気付かなかったけど…」

「フェイトちゃんとキョウスケ君…何話しているんだろう？」

「こっそり近付くわよ…」

「ええ！？だ、大丈夫かな？」

「なのは！あんたは気にならないの！？」

「うっ…気になる」

「だったら行くわよ！」

「アリサちゃん…そーっとだよ？」

こうして三人娘は二人に接近中…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「ちがうの…今度はちゃんと…自分の意志でキョウスケとしたいの！！／／／」

「え～と…それって…」

―コクン

フェイトは頷きジッと見つめてくる…

「キョウスケ…」

―スッ

目を閉じてフェイトが顔を近づけてくる…ってこのパターン前にあ

ったような…

って考えている内にフェイトの唇まで後数ミリって…っん！？

「ん…んっ…」

「んん…んっ…ん！？」

フ、フェイトも舌を！？

「んむっ…んっ…」

「んくっ…んんっ…！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――数分後――

「……／／／」

「……／／／」

な、なんか気まずい…冷静に考えてみれば小学生があんな…深いキスするのって変だろ！？

別にロリコンじゃないって～！

『マスター…余韻に浸っている所まことに恐縮なのですが…』

別に浸ってない！

『なのは嬢達が接近中ですよ？』

……は！？なんだって～！！？

『一応認識疎外魔法を強化しましたからフェイト嬢とのキスシーンは見られてませんよ』

「あぅ…／／／」

インフィの台詞に更に赤くなるフェイトさん

「まぁ…いろんな意味で助かったが…ハァ…」

この場をどう乗り切るか

『では結界を解除します』

―スッ

「…そこの三人娘！出てきたらどうだい？」

―ガサガサッ！

「なんだ、バレてたのか」

「にゃはははは…」

「だからそーっとって言ったのに～」

公園の植え込みからアリサ・なのは・すずかが現れた…ホント間一髪だったな…

「で、三人とも…塾や家の手伝いはどうした？」

「「「うっ…」」」

「まさか…後をつけていた？」

ジト目でなのは達を見る

「た、たまたまよ！たまたま三人とも予定が無くなって、たまたま一緒になってたまたまアンタ達を見かけただけなんだから！」

アリサよ…もう少し考えて発言しようよ～

「あれ？フェイトちゃん…何で顔が赤いの？」

―ギクッ！

「なななんでもないよなのはっ！」

うわ～…動揺しまくりだよ

「…キョウスケ、アンタ何かしたの？」

―ギクッギクッ！

「…ナニモシテナイヨ？」

「なんで片言なのよ！？しかも疑問形！？」

ここはごまかさないと！

「フェイトの体調が悪いみたいで…少し休憩していたんだ」

「えっ！？大丈夫フェイトちゃん？」

「う、うん…大丈夫だよ、すずか」

「フェイトちゃん、今日は早く休んだ方が…」

「そうだね、荷物は僕が持つから。悪いけどなのは達はフェイトの付き添いお願いできるかな？…尾行するほど暇だろうし…」

「「「うっ…はい…」」」

こうして僕らはフェイトを送っていくことになった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

アマゾネスな少女たち？（前書き）

書いてて砂糖吐きまくったな～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――マンション、フェイト部屋――

キョウスケＳｉｄｅ

おかしい…

確かフェイトを体調不良（嘘）で送っていったが…

「はい、次は私の番だよ♪」

「あ、ああ…じゃあはい…あ！」

「揃った～あがりだね♪」

「くっ…ババがぁ～」

現在フェイトの部屋にてなのは達とババ抜きをやっています…

――――回想――――

―ガチャ

「ただいま～」

「「「「お邪魔しま～す」」」」

「…やっぱりまだ誰も帰って来てないみたい」

「アルフさんはいると思ったんだけど…」

「フェイトちゃん、早く横なった方がいいよ」

「ありがとうすずか…もう大丈夫だから」

「う～ん…私達が帰ったらフェイト一人になっちゃうし…よし！私達でフェイトを看病しましょ！！」

「えっ、そんな！？悪いよアリサ」

「友達なんだから気にしない！」

「そうだよフェイトちゃん」

「あ、私お買い物した物を冷蔵庫に入れておくね　キョウスケ君、フェイトちゃんの買い物袋貸して」

「…ああ、じゃあこれ」

…なんか大事になってきたな…まぁ　フェイトとキスしたのがバレるのに比べればマシだけど

――――フェイト部屋――――

「本当に大丈夫？フェイトちゃん…」

「うん、大丈夫だよなのは…元々大したことないし」

「ねぇ　せっかく皆いるんだし…何かして遊ばない？」

「そうね…フェイト、何かある？」

「たしかトランプならあるけど…」

「じゃあみんなでババ抜きでもしようか？」

「まったすずか！ただババ抜きするんじゃつまらないわ！…そうね、ビリだった人は勝った人の言う事を何でも聞くってのはどう？」

「うわ～なんか面白そうだね♪」

「決まりね…じゃあやりましょうか」

――回想終了――

で、結果僕が負けました…

「さぁて…ビリになったキョウスケに何をお願いしようかしら～」

くっ…アリサの口元が悪魔のように三日月型につり上がっている

「なるべく穏便に…」

「じゃあ…わ、私を抱きしめなさい！／／／」

「「「「……」」」」

はい？

「えっと…ゴメンアリサ、耳がおかしくなったみたいだ…悪いがもう一回言ってくれないか？」

「だ、だから！私をギュって抱きしめなさいって言ってるのよ！！／／／」

「「「ち、ちょっと待ったー！！！」」」

うぉ！？なのはたちが凄い形相でアリサに詰め寄ってる！

「な、なな何言っているのアリサ！？」

「そうだよ！アリサちゃん！！」

「アリサちゃん、抜け駆けはずるいよ～」

フェイト・なのは・すずかがアリサを説得中…頑張れみんな！アリサの野望を阻止してくれっ！

「何言ってんのよ！アンタ達も頼めばいいじゃない！」

「「「あ、そっか～」」」

速攻で懐柔された！僕に味方はいないのか～！！？

「じゃあ…キョウスケ　は、はやくしなさいよ／／／」

はぁ…どうせ拒否権なんてないんだろうな…　サクッと済ませよ…

―ギュ！

「あ…／／／」

しばらくアリサを抱きしめ…

「「「ハイッ！終～了～！！」」」

なのは達が乱入した

「ちょ…早いわよ！？」

「「「持ち時間一人３０秒！」」」

「いつ決まったのよ！？そんなの！？」

「「今だよ！！」」

…はぁ、数時間前のシリアスは何処へ…

「じゃあ…次は私だねキョウスケ君…／／／」

そう言いなのはが前に出てきた…てか、みんなお願い同じかいっ！？

「あ、ああ…じゃあ」

―ギュ！

「ん…／／／」

…こうするとなのはって華奢なんだってよくわかるな…

「「「ハイッ！終～了～！！」」」

「え～まだ早いよ～」

「「「早くないっ！！」」」

「ぶ～…」

渋々なのはは従ったが…ああ、僕の理性が削られていく…

「じ、じゃあ次は私だねキョウスケ君…／／／」

すずかがモジモジしながら僕の前に立つ

「うん…」

―ギュ！

「っ…／／／」

緊張しているのか小刻みに震えてる…恥ずかしいなら頼まなければいいんじゃ？

「「「ハイッ！終～了～！！」」」

「……／／／」

うっ、すずかの顔が真っ赤だ

「じゃあ…最後は私だねキョウスケ／／／」

フェイトとは、ついさっきキスしたばっかりだから…なんか変な感じだな…

―ギュ！

「あっ…／／／」

…フェイトの匂いっていい香りだな…ってヤバイ！理性がぁぁ！

―チュ！

「「「あーーー！！！」」」

「フ、フェイト／／！？」

「えへへ／／／」

フェイトが僕の首筋にキスを！？つかフェイトってこんなキャラだったっけ！？

「フ、フェイト！！ああああんた何してんのよ！？」

「ず、ずるい！フェイトちゃんばっかり～！！」

アリサとすずかが猛抗議…ってあれ？なのはは？

「…フェイトちゃん…ちょっといいかな…？」

なのはの感情がない表情に戦慄した…

「え…な、なのは？ち、ちょっと！？」

―ガクガクガク！×２

背後でアリサとすずかが恐怖で震えてる…ってこれはさすがにマズイか…仕方ない、背に腹はかえられない…

「…なのは」

「ナニカナ？キョウスケクン…？」

僕は人差し指を自分の唇に当て、その当てた場所をなのはの唇に触れさせた

―ピトッ

「ふぇ／／／！？」

まぁいわゆる間接キスですね

『（流石！我がマスターです。ようやくハーレム作る決心が！？）』

電波はスルー！

「キ、キョウスケー！！あんたドサまぎで何してんのよ！！？」

「そ、そうだよ！いきなりなのはちゃんに…その…／／／」

…だって、あのまま放っておいたらフェイトの命が危なかったし…マンション半壊させる訳にもいかないぢゃんか…

「……／／／」

なのはからはダークオーラは消えた…が、

「わ、私達にもしなさいよ／／／！！」

「なのはちゃんやフェイトちゃんだけはずるいよ～／／／」

今度はアリすずの二人からダークオーラが…

「キョウスケ…」

「な、何かな？フェイ…」

―ドンッ！ドサッ！

痛つつ…フェイトがいきなり抱き着いて来た！？
僕は態勢を崩しフェイトのベットに押し倒され…って、なにぃぃぃ！？ベットにだと！？

「「「あー！！」」」

三人娘が大声で叫んだ！　てか何この状況って！？

「キョウスケ…一緒に寝よ♪」

そう言いながら体を密着させてくるフェイト…ってフェイトの目が普通じゃない！？

「ち、ちょっと待てフェイト！まず落ち着こ「「「私と一緒に寝るのよ！！」」」ってあんたらもまず落ち着けー！！」

―ドサッ！ドサッ！ドサッ！

「ぐっ！？」

く、苦しい…みぞおちにクリーンヒットした…

―ガチャ

「ただいまフェイトさ…ん？」

「「「「「……」」」」」

リンディさんご降臨…

「どうしたんです艦長…あら、これはこれは…お邪魔だったかしら？」

エイミィさんも降臨しました

「エイミィ、今日はお赤飯にしなくちゃ♪」

「ハイッ♪艦長！」

「ち、ちょっと待って下さい！二人ともー！！」

「「ごゆっくり～」」

―バタン！

ああ…二人とも出ていってしまった…

「「「キョウスケ～（君）／／／」」」

「よ、四人とも落ち着け！！そしてなのは！服を脱ごうとするな～！フェイトも僕の服を脱がそうとするな！！」

その後しばらく、四人にもみくちゃにされてました…精神的ダメージが～ぁ！！

もちろん何もしてないですよ？基本の身体小学生ですから

『小学生でなければ何かしたと？』

「……多分」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

家事能力と花婿要素？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

何とか…あのカオスな部屋から脱出した僕が見たのは…

――――キッチン――――

「あら、意外に早かったわね？」

ホントに赤飯作っていたリンディ＆エイミィが居た…ｏｒｚ

「てか止めてくださいよ！二人とも一応保護者でしょ！？」

「だって面白そうだったから（笑）」

（笑）じゃないっすよ！！リンディさん！！！危うく１８禁になる所だった…

『（十分に１８禁では？）』

否！断じて違う！！…多分？

「キョウスケ君、フェイトちゃん達はどうしたの？」

「ああ、みんなら…」

―バタン！

「「「「キョウスケ（君）ひどいよ～！！！！」」」」

「…なるほど…プッ！」

四人娘の姿を見たエイミィさんは納得した

「フェイトさ…ププッ！！」

「エイミィ！リンディさんまで…笑わないで下さい／／／／！！」

「だ、たって…ねぇエイミィ？」

「そ、そんな恰好で笑うなって方が無理だよ！アーハッハッ！だ、ダメ！お、お腹がねじれるッ！」

え～　皆さんに四人娘の状況を説明すると…

布団で簀巻きになってます

「キョウスケ！いいから解きなさいよ！」

まぁそろそろ大丈夫だろ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――リビング――

「まったく…酷い目にあったわ」

「キョウスケ君ってあーゆー風に縛る趣味があるの？」

「いやいや！無いって！！」

誰だ！？なのはに変な知識入れたのは！？

「さあ、とりあえずお茶を入れたからどうぞ」

リンディさんがお茶を入れてくれ……

まてよ…

もしかして、あの緑茶に砂糖が入ったあの伝説の『リンディ茶』か！？

「キョウスケはお砂糖いくつ？」

って、フェイトさん！何普通に緑茶に砂糖入れようとしてるの！？

「さ、砂糖は遠慮しておくよ…」

そう言うとフェイトは残念そうな顔をしていたが…すまん！さすがに無理だ！

「じゃあ…なのはは？」

「ふぇ！？わ、私も大丈夫だから」

「じゃあアリサ…」

「私もいらないわ！」

「すずかは…」

「大丈夫だよ～フェイトちゃん」

全員に拒否られた

「…美味しいのに（ボソッ）」

とりあえずリンディ茶の洗礼は受けずに済んだ

「そういえば、さっきはやてちゃんの所でキョウスケ君が入れてく

れた紅茶すごく美味しかったよね～」

「…たしかにね、悔しいけど家のメイドが入れるのより美味しいかもね」

すずかとアリサはそう言っているが…別に普通と思うが？

「あら、もしかしてキョウスケ君は家事得意なのかしら？」

興味深々でリンディさんが聞いてきた

「まぁ、得意かどうかは分かりませんが人並みにできますよ？」

「キョウスケ君～…」

ん？どうした？なのは

「それって私達が人並み以下って聞こえるよ～！」

「え！？なのは達も炊事洗濯くらいできるだろ？」

特に女の子なんだからそーゆーのは…

「アンタの場合、スペック高すぎんのよ！！」

アリサが怒りながまら叫んだ…家事なんて、はやてに比べたら僕なんてまだまだだよ？

「ふふ、これは優良物件ね　そう思わない？フェイトさん？」

「な、ななに言ってるんですか／／／！？」

フェイトが赤くなり凄く動揺してる…優良物件って何だ？引っ越すの？

「リンディさん…キョウスケ君はフェイトちゃんの…じゃありませんカラ…」

―ゾクッ！

な、なんか部屋の温度が5度下がったぞ！？

「そ、そうね…ごめんなさいね、なのはさん」

なのは以外は冷や汗ダラダラだった…

…これってなのは魔王化進行中！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

しばらく平和的な談笑をした後…

「さて、僕はそろそろ…」

「えっ！？もう帰るのキョウスケ？」

「家族のみんなの食事の準備やはやての所にもまた行かないといけ

ないからね」

食事に関しては最優先事項だな…シャマルが絡んだら…入院人数増えるし

「そっか…仕方ないね」

「あ、キョウスケ君！私の家の車で送ろうか？」

「あ、大丈夫だよ　すずか。」

こっそり転移していくからね

「キョウスケ君、はやてちゃんによろしくね～」

「また今度お見舞いに行くって伝えておきなさいよ！」

「はやてちゃんに早く元気になってねって伝えてね」

「ああ、伝えておくよ」

そう言い、僕は席を立ち…

―ポン！

「あ、キョウスケ」

フェイトの肩に手を置いた

（フェイト、聞こえる？）

（えっ！？念話？）

（正確には接触念話かな？これなら念話を傍受されないからね）

（そっか…ふふっ、今日はキョウスケに驚かされっぱなしだね）

（まぁ、そうだね。…闇の書の事だけど…）

（うん、分かってるよ　みんなには秘密にしておくね　…キョウスケ、もし私に出来る事があったら何でも言ってね？私…キョウスケの力になりたいんだ…）

ううん、カワイイ事を言ってくれるね～…お持ち帰りしたくなる…ハッ！？僕は一体何を！！？

（…うん、その時は頼りにしてるよ）

（うん！まかせて／／／）

フェイトとの協力は取り付け…ん？

―ジーーーッ

何か視線が…

「キョウスケ君…？何さっきからフェイトちゃんと見つめ合ってるのかな？かな？？」

しまった！？端から見たらジッと見つめ合ってるようにしか見えな

かった！！
し、しかもなのはの目が単色に！？

「ふ～～ん…キョウスケ君とフェイトちゃん…いつの間に」

すすかの目も単色に…って、今すずかの口元からキバみたいなのが一瞬見えたぞ！？

「キョウスケ！ちょっとアンタ説明しなさいよ！！」

アリサは目は単色になっていないが…仁王が背後に見えます…

「「がんばって～」」

リンディ＆エイミィさんは助ける気ゼロで手を振っていらっしゃるし～！？

「アハハ…し、失礼しました～！！」

僕は脱兎の如く逃げ出した…一瞬本気で瞬動を使おうかと考えた…

ホント、超怖い…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトＳｉｄｅ

キョウスケが凄い勢いで出ていってしまった…
確かに今のなのは達は怖い…

「キョウスケ君、凄い早さで逃げちゃったね」

「大丈夫よすずか…こっちにもう一人居るから…ねぇフェイトぉぉぉ？」

えっ！？わ、私！？

「…そうだね、キョウスケ君には逃げられちゃったけど…フェイトちゃん、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ…　聞かせてくれるかな？」

「アハ、ハハハ…」

…超怖い

キョウスケ…私ダメかも…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「艦長は誰がキョウスケ君の彼女になると思います？」

「そうねぇ…私としてはフェイトさんを応援したいけど…地域によっては【一夫多妻制】って許可している世界もあるのよね～…」

「…あ～…キョウスケ君見ているとそんな未来がリアルに想像できるから怖い…」

「まぁ…それはそれで面白そうね♪」

「アハハ…」

「ところで、エイミィはキョウスケ君争奪戦には参加しないの？」

「わ、私ですか！？流石に年下すぎるというか…手を出したら犯罪っぽいですし～…でも、優良物件なのは確実ですからね～…」

そんな談話がフェイトと覇王三人とのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩの裏で行われていたそうな…？

ナデナデは程々に〜

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家――

キョウスケSide

―ガチャ！

「ただいま〜」

―シーーーン

誰もいない？

あ、そうか！シャマルは確かはやての付き添い、シグナム・ヴィータ・ザフィーラは蒐集に行っているんだっけ。

まぁ今日はみんなも一度戻るって言っていたからな…夕飯の支度でもしてるか

――キッチン――

「♪〜？〜っと、カレーはこれでいいかな？後は…ブロッコリーのピクルスの瓶詰めをカートに乗せてっと　ゼリーは後は冷やすだけ

だからな～」

―ガチャ

「「ただいま～（帰りました）」」

「お帰り！シグナム、ヴィータ」

ってシグナムが凄い勢いで迫ってくる！？

「神代、病院ではどうなった？」

あ～…シグナム達は詳細は知らないんだよな

「ああ、とりあえず管理局にはバレないようにしたよ」

…そう【管理局】にはね～　フェイトの事はまだ秘密にしないとね～…

「そうか…なら良いのだが」

「恭介！今日の夕飯はカレーか！？」

速攻食欲か！？ヴィータさん！

「ああ、今日はシーフードカレーだよ…もちろん辛さ控えめにしてあるから」

ヴィータ用に合わせてね

「こ、子供扱いすんじゃねー！！」

「おや？誰もヴィータに合わせてとは言ってないが？」

まぁ　実際はそうなんだけど

「くっ…／／　ま、まぁ私は大人なんだ、その位許してやるか」

なんかシグナムが笑いを堪えているが…

「じゃあ大人のヴィータさんにお願いがあるんですが、食卓に食器並べるのをお願いできるかな？（ニコッ）」

「お、おうっ！任せとけ！…／／／」

胸を張って答えるヴィータ…何故か顔が真っ赤になっていたような？

「あ、シグナム　悪いが少し留守番頼むね」

「それは構わんが…どこか行くのか？」

「はやてに届け物をね　ケーキを持っていくって約束したから」

「何！？ケーキもあんのか！？」

ヴィータが凄い早さで戻って来た

「あ～昨日作ったシャルロットケーキだよ…まだ冷蔵庫にあるから食後にね。後さっき作ったフルーツのカクテルゼリーもあるよ」

「うっしゃ！今日は豪華だな！」

ヴィータがえらくご機嫌だ

「それはそうだろう。神代の作るスイーツは主も認める美味しさなのだ…」

シグナムもどこかご機嫌なような？

「そう言ってくれると作り甲斐あるよ。さて、じゃあはやての所に行ってくるね」

「あ、そーいえばシャマルもはやてに付き添ってるんだよな？」

あ、忘れてた…

「はは…じゃあもう病院も消灯時間だし、ついでにシャマルも迎えに行ってくるよ」

僕は転移魔法を展開…

「ち、ちょっと待て神代！　転移魔法で行くのか？」

そうだけど？

「管理局に転移反応でバレないのか？」

「ああ、僕の術式は特別製だから大丈夫だよ」

プリズムファントムの応用で隠密性は高いっすよ？

「そ、そうか…いや　今更だったな」

「シグナム…恭介に私らの常識は通用しねーよ」

それは褒めてるのか？ヴィータ？

「じゃあ…すぐ帰ってくるから」

―シュン！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――はやて病室――

―シュン！

「きゃ！？」

「な、なんや！？」

あ、急に現れて驚かせちゃったか？

「や、はやて！数時間ぶり♪」

「き、キョウスケ君…もう驚かせないでくださいよ～」

シャマルのサーチに引っ掛からず現れたからね～

「キョウスケ君…病人なんやから気ぃつけてな…心臓に悪いわ」

「あはは　ごめんはやて。あ、これ頼まれてた本と御所望のシャルロットケーキです。オマケでフルーツのカクテルゼリーもあるよ」

「ホンマか!?ありがとなキョウスケ君♪」

「夕飯はもう食べたの？」

「うん…ただ、病院食ってあんま味気のうてな～…」

「味にこだわるはやてシェフとしては物足りないと？」

「うん、そやね～…って　ちょいまち!半分はキョウスケ君の作る料理のせいでもあるんやで!?」

「おや　なら責任取ってそのスイーツは回収しないと？」

「う゛…　いやや!後生やからそれだけは～!」

まぁ、はやて弄びはこのくらいにして…

「冗談だよはやて」

「ほ、ほんまに？」

「ホントだよ…まったく大袈裟な」

「そんな事ない！キョウスケ君が私の為に作ってくれたんや…そん位の価値あるんよ」

うっ／／／　カワイイ事言うな～…思わずグッときてしまった…

…ただ、はやての為だけではないんだが…水をさすのも悪いか…

「…ありがとう、はやて（ニコッ）」

「ど、どういたしまして…／／／」

…？はやての顔が真っ赤に？…風邪も併発か？

「あの～　二人してラブラブ空間に入らないでください～　一応私も居るんですけど～？」

あ、すっかり忘れてた…

「ご、ごめん！ってかラブラブ空間って何さ！？」

「そそそやシャマル！何言ってるんや／／／」

「あら、私を空気にして二人仲良くしていたからてっきり♪」

「……／／／」

シャマルもはやて弄びまくってるし…

『（マスターも弄びの対象なのですが…）』

―コンコン、ガラッ！

「はやてちゃん、そろそろ消灯時間だから…あらキョウスケ君？いつの間に来ていたの？」

「あ、石田先生　さっきですよ。はやてに届け物があったので」

「…はやてちゃん、甘い物は程々にね」

「はぁい…」

「シャマルさん、キョウスケ君　そろそろ消灯時間ですから後は我々に任せて下さい」

「あ、はい　わかりました。　はやてちゃん…それじゃ私達は帰りますね　明日また来ますから」

「うん…」

う～ん…はやてのテンションがた落ちだな～

「はやて、なのは達もまたお見舞いに来てくれるって。もちろん僕も来るから安心して、ね」

―ナデナデ

そう言い僕ははやての頭を撫でた…

はやての髪って撫でると気持ちいいな…

「ん…絶対やで／／／」

「ねぇシャマルさん、彼はいつもああなの？（ヒソヒソ）」

「え、ええまぁ…キョウスケ君、鋭いようで鈍いですから（ヒソヒソ）」

「「……はぁ」」

何か後ろで深いため息が聞こえた…ような？

まぁいいか　僕ははやての頭から手を放すと

「あ……」

って何故この世の終わり見たいな顔するんです！？

…もう一回

―ナデナデ～

「あっ…／／／」

…放す

「あっ……」

もう一回…

―ナデナデ～♪

「あん……／／／」

…やべぇ、はやての反応見てるの楽しくなってきた♪

「キョウスケ君…／／／」

ん？はやての目がとろんとしてきた…

「ゴホン！二人とも、そーゆーのは二人っきりの時にしなさいね」

石田先生のツッコミで現実に引き戻された

「！……ッ／／／」

はやては我に帰ったのか俯いてしまった…頭から煙りが出ているが…撫ですぎたか？

「はは、すみません。つい…」

シャマルも真っ赤になってこっちを見ていた…何故？

「何故って…キョウスケ君って…ハァ」

何故そこでため息を！？

「じゃあはやてちゃん、私達は家に戻りますね」

「う、うん…ほならまた明日な　キョウスケ君も…／／／」

「？ああ、また明日」

―ガラッ！

僕とシャマルは病室が出て帰宅（転移）の準備をした

「なぁシャマル、はやての顔が真っ赤だったが何かあった？」

「…キョウスケ君、少しは自覚しましょうね…」

と呆れ顔で言われた…

まぁ　いいか

「じゃあシャマル、家に帰るか。ヴィータ辺りが「お腹空いた」って騒いでいそうだし」

「ふふ、そうですね」

―シュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

スイーツ争奪戦と活動方針

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――八神家――――

―シュン！

「ただいま～」

「ただいまかえりました～」

僕とシャマルが転移で家に着き、目の前で見たものは…

「恭介～…腹減った～…」

「ヴィータ！はしたないぞ！」

「……」

予想道理の発言をしたヴィータに注意するシグナム、無言で犬モー

「…狼だ」…狼モードのザフィーラが居た

「お腹空いたなら先に食べててもよかったのに」

「いやなに　ヴィータが神代と一緒に食べ「わーわー！な、なに言

ってやがる！シグナムッ！！」…どうしたヴィータ？事実ではないか？」

「う～…／／／」

ヴィータが真っ赤になってるな～

「はは、ありがとうヴィータ（ニコッ）」

「そ、そんな事より早く飯にしようぜッ／／／」

「？ああ、そうだね」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――リビング――

「「「「「いただきます」」」」」

テーブルにはシーフードカレーとサラダ、自家製のピクルスにフルーツのカクテルゼリーが人数分並んでいる

ザフィーラはい…狼モードのままで良いとの事だったが…ホントに犬化してないか心配だ…

「カレーの出来はどうかな？」

僕は感想を聞いてみる…まぁ全員の顔が嬉しそうに輝いているのが答えだと思うが

「ああ、ギガうまだぜ！」

「辛過ぎないかな？」

「ん、ちょうどいいぜ」

ヴィータには好評だ

「シグナム達は？」

一応辛さ控えめに作ったからな～

「いや　ちょうど良い。大丈夫だ」

「ええ、私もこの位で大丈夫ですよ」

「……（コクッ）」

みんなにも好評のようだ

「神代の料理はいつも美味いな。すまんがブロッコリーのピクルス、まだあるか？」

「ん、まだあるよ　…はいシグナム」

「すまんな」

「恭介っ！ドレッシング！」

「あ～はいはい、ちょっと待ってね～」

「うふふ、何かキョウスケ君がお母さんみたいね」

シャマル…それは多分褒め言葉ではないぞ？

「あら　そうね」

―――――

―――

――

―

「このゼリーもメチャクチャうめーな！」

「ホントね～　…キョウスケ君、今度作り方教え「「やめろ！シャマル！！死人が出る！！」」酷いわ！シグナム、ヴィータちゃん…グスッ」

シグナム達の制止にシャマルは涙目だ…

まぁ…シャマルが作るとゼリーがバブルスラ○ムになりそうだから怖い…

「はい、まだお腹の空いている人は？」

僕がそう言うと

「はい！はいはーい！！」

ヴィータが勢い良く手を挙げだ

「ヴィータちゃんったら…実は私も…」

シャマルの手も控えめに上がった

「じゃあ昨日のシャルロットケーキが残ってるけど、食べるよね？」

―コクコクコクッ！

ヴィータとシャマルは勢い良く頷いた…

「シグナムも食べるよね？ザフィーラはどうする？」

「……我はいい」

う～ん…男性だから甘い物は苦手なのかな？

ちなみに僕は激甘党だから平気だけど…でもリンディ茶は例外だから！

「うっし！じゃあザフィーラの分は私がもらうな！」

「ヴィータちゃん、ずるいわよ。ここはジャンケンで…って何シグナムもサラッと参加しようとしてるの！？」

「い、いや…勝負事となれば私も参加したくてな…別に神代のケーキ目当てではなくてだな…／／／」

その後三人でジャンケンを繰り返していた…

「うっしゃあー！！勝ったぜ！！」

「あ～あ…」

「くっ…無念！」

結果的に勝ったのはヴィータだった

「んじゃザフィーラの分もーらいっ！」

ヴィータは美味しそうに食べていた

残り二人も自分の分を食べていたが…

「「……スイーツの怨みは…（ブツブツ）」」

…何か物騒な空耳が聞こえたが…気のせいだろうと自己完結した

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「さて、みんな…現在はやては入院している。これはある意味好都合と言えるだろう」

夕食も終わり、僕はシリアスモードで今後の活動について話し合っている

「なっ！神代！！主が入院したのに好都合とはどういうことだ！？」

シグナムが今にも掴みかかろうとばかりの勢いで突っ掛かってきた

「落ち着けシグナム、別にはやてが入院して嬉しいって訳じゃないよ…シグナム、今までの蒐集はどうやって活動してた？」

シグナムは睨みながら僕の問いを聞いた

「…どうやって？別世界に行って魔法生物から蒐集…だっただろう。神代が人間からは蒐集するなと自分で言ったのではないか？」

いや、要点はそこじゃないんだが

「……なるほどな」

お、ザフィーラは気付いたか？

「ザフィーラ？何がなるほどなの？」

「シャマル…我々は主に秘密で蒐集を行っていた。故に活動は主に気付かれぬよう昼間外出する時と主がお休みになられる夜から目覚められる朝方までと時間が限られていた」

「……そういうことか」

シグナムも分かったようだな

「？？なんだよ？どーゆー事だよ？」

…ヴィータはイマイチ理解してないようだ

「ごめんなさい…私も分からないんだけど…」

シャマル！？貴女は一応参謀的なポジションなんだから分からないとマズイだろ！？

「……主が入院している現在、蒐集に行ける時間が格段に増えるという事だ…こちらに戻らなくても長期に蒐集活動できる」

ザフィーラさん、正解っす　ただの犬にならずに済んでよかった～

「そーゆー事だよ

まぁ、今まで道理はやての護衛には最低二人は付くけどね。それは交代で代わればいいしね…ただ、管理局…なのはとフェイトと鉢合わせしないようには気をつけないと…それは僕がになのは達と一緒に行動を共にすれば情報は得られると思うけど」

まぁ、なんだかんだでいつも一緒にいるかならな～…最悪フェイトに協力してもらえば何とかなるかな

「いや、主の護衛には神代とシャマルが適任だろう。蒐集活動は私とヴィータ・ザフィーラで行う」

「…理由は解るが…一応聞いていいかな？」

「神代は認識阻害魔法でテスタロッサ達に正体はバレていないし、一緒に居ても怪しまれない…シャマルは顔はバレているが、不測の事態にすぐ対応出来るだろう。何より神代個人では闇の書は使えない…分担で蒐集するなら扱える我らの方が適任だろう」

まぁ…予想道理の答えだな～

「はぁ…分かったよ、確かに筋は通ってるしね」

「じゃあ蒐集は私らに任せてくれ！恭介ははやての事を守ってくれよ？」

「ああ、だが無茶はしないでくれよ…特にシグナムとヴィータ！」

「な、なんで私らなんだよ！」

「そうだ神代！無茶と言うならお前も大概無茶するだろう！？」

抗議を上げる二人…だってなぁ…

「シグナムはバトルになると夢中になりそうだし…」

「うっ…！」

「ヴィータは頭に血が上ると見境なくなるし…」

「ううっ…」

二人とも自覚はあるようだ

「…まぁ、シグナムは引き際をわきまえてるからまだ大丈夫だと思うけど…」

そう言いヴィータの方を見る

「な、なんだよ恭介!?」

「…ヴィータはすぐ戦闘で熱くなるからな～」

「だ、大丈夫だって!私は、はやての為以外で無駄に戦う気はねーし」

「…まぁヴィータに関しては仮契約カードが有るからね。何かあったら直ぐに駆け付けられるけどね」

カードの転送機能使えば一瞬だからな～

『ならシグナム卿とも仮契約してみては?』

「「「……は?」」」

僕とシグナム・ヴィータの思考は一時停止した…

「あら、だったら私も仮契約しないといけないわね～♪」

シャマルさんはなぜか乗り気ですし！

「ち、ちょっと待て！！別に私は仮契約しなくても大丈夫だっ！！」

「そ、そうだぜ！シグナムは強ええし、恭介の手助けなんて必要ねーよ！！
シャマルだって結局恭介と一緒に行動すんだしもっと必要ねーだろ！！」

…ヴィータがえらく力説しているな～…

「まぁ、無理に仮契約しなくてもいいだろインフィ？」

『……ちっ』

今コイツ確実に舌打ちした！？デバイスなのに舌打ち！？

「と、とりあえず仮契約は置いといて、今日はゆっくり休んで明日朝から分担で蒐集に行こう！」

「ああ　分かった」

「わかりました～」

「任せとけ！」

「……（コクッ）」

こうしてミーティングは終った…のだが…

To Be continued?

真夜中のドキドキ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――深夜、キョウスケ部屋――

キョウスケSide

なぁ…何故こうなっているんだ？

「すぅ…すぅ…ムニャ…」

みなさん深夜にこんばんは。神代恭介です…

さて、僕は今ベットの中に居るのですが…全く眠れません…その原因は…

「ん～…恭介ぇ…」

―ギュッ！

…まぁ、勘のいい方なら分かると思いますが…平たく言うとヴィータと一緒に寝ているからです…

しかもヴィータはガッチリ抱き着いてきてホールド中です…

――数時間前――

―コンコン！

「ん？どうぞ～」

―ガチャ

扉が開くとそこにはパジャマ姿のヴィータが居た

「どうした？ヴィータ？」

「あ、あのさ…その…うう～／／／」

……？

「何か相談事？まぁ廊下は寒いし中にどうぞ」

「あ、ああ…／／／」

―そう、思えばこれが始まりだったような…

僕は椅子に座り、ヴィータは僕のベットに腰掛けた

「で、どうしたんだい？」

さっきの説明で解らない事でもあったかな～？

「あのさ恭介…き、今日はやていないじゃんか…」

…まぁ入院中だからね

「それで…その、はやてのベットで一人で寝るのは…ゴニョゴニョ…／／／」

…？寝るのは？

「だ、だから…その…今日は一緒に寝ていいか？／／／」

「……は！？」

え～と…要約すると、ヴィータは僕と一緒に寝ようと言っているのか！？

「…ああ／／／」

ってまた心読まれた！？

いやいや！そんな事はどうでもいい！

「ち、ちょっと待てヴィータ！さすがにそれ「…駄目なのか？」う

ぐっ！」

そんな涙目で見つめるな～！！？

「…解ったよ。ヴィータ」

涙目に屈服しましたよ…貴方は断れますか！？

「じ、じゃあ寝ようか？」

「あ、ああ…／／／」

そう言うとヴィータはベットの中に潜り込んで、布団をスッポリと被って目元だけ出して僕の方を見て

「へへっ…恭介の匂いがするな／／／」

うっ…！理性に５００ポイントのダメージがぁぁ！

お、落ち着け僕っ！ＣＯＯＬになれ！！

とりあえず僕は落ち着き？布団に入った

途端にヴィータが身を擦り寄せてきて、少し冷えたいた身体を体温で温めてくれた…ってそれヤバイだろ！

さらに理性に８００ポイントのダメージが！！

「なあ恭介…手、繋いでいいか？」

「あ、うん…」

―ギュッ

「へへ、こうしてると何か落ち着くな／／／」

…こっちは全然落ち着きませんよ～

――――回想終了――――

てな事がありまして…まぁヴィータは寝たのですが、僕は全く眠れない状況ですよ…　ヴィータは僕を抱き枕にでもするかのように抱き着いてきているし…

ああ…ヴィータの温もりが心地いい…

…ハッ!?ぼ、僕は一体何を!?しかも僕の手が無意識にヴィータの胸元にぃぃ!?

…本格的にコレはヤバイ…このままだとヴィータに…

『…お困りのようですねマスター』

イ、インフィニティ？

『眠れないようなら…睡眠魔法をご自分にかけてみては？』

おお！そうか～！

「よ、よし！マテリア【ふうじる】セット！【スリプル】！」

―ピカッ！

僕はスリプルを自分にかけて、意識を手放し―。

「……Ｚｚｚ」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ヴィータＳｉｄｅ

「……インフィニティ、寝たか？」

『はい、ヴィータ嬢…作戦通りです』

「そうか…」

実はヴィータは寝てはいなかった！

『こちらのお膳立てはバッチリですよ。後は…』

「あ、ああ…そういう【取引き】だったな…は、恥ずかしいけど…こんなチャンス滅多にねーし…／／／」

『私個人のデータフォルダに保存しますのでマスター以外には見られませんからご安心を…』

「恭介は面と向かって言ってもなかなかしてくれねーし…」

『まぁ、その為に私が手助けをしたんですが』

「でもお前、恭介のデバイスだろ?マスターを守らなくていいのか?」

『もちろんマスターの身は護りますよ?…女性関係は面白そうですから別ですが♪』

「…はぁ、じゃあ…約束どうり…」

『ハイ!もうどんといっちゃって下さい。バッチリ録画しますから』

「ああ、…恭介／／」

ヴィータは布団の中でキョウスケに覆いかぶさるような状態になりジッと顔を覗き込む…

「ん…」

一瞬キョウスケからうめき声がしてヴィータの肩はビクッとなったが、意を決するように顔を近づけていく…そして

「……ん…っ……んんっ」

ヴィータは熱くて、甘い、長いキスをした

唇を離し、そっとキョウスケの顔に手を置くヴィータ

「お、オメーが悪いんだからな！他の女とイチャつくから不安になるじゃねーかぁ…」

そしてヴィータは再び唇を重ねた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

『これでマスターのハーレム日記に新たな１ページが…フッフッフッ』

ちなみに取引とはヴィータがキョウスケとキスするのをインフィニティが手伝う代わりに、その模様をインフィニティに記録させるとの事でした…ヴィータは赤くなりながらだが了承したのは言うまでもない…

「イ、インフィニティ…録画した画像、後でコピーしてくれ／／／」

とヴィータが後に言ったとか

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――朝――

キョウスケSide

「ん、んん～…よく寝た…」

あれ？身動きが…？

…あ！確かに昨日ヴィータが来て一緒に寝たんだっけ…

ふと横を見ると、

「スースー…」

ヴィータが寝ていた。しかもガッチリ抱き着いて来てるので動けない！？

てか顔近っ！？

しかしこのままって訳にもいかないしな～…起こすか

「おーい、ヴィータ～」

―つんつん

ヴィータの頬を突いてみた

「ん…」

あ、起きたか？

「すぅ…すぅ…」

「朝だぞ～ヴィータ」

―つんつんつん

「ん…あん…んん」

ちょっ…へ…っ変な声だすなよ…っ

「ん……あ…オハヨ、恭介ぇ」

「あ、ああ…おはようヴィータ…とりあえず先ず腕を放してくれないかな？起きられないからさ」

「ん～…」

な、なんかまだ寝ぼけてるのか？

―ギュッ！

ってらさに力を込めていらっしゃるし～！！？

「ちょ！？ヴィータ？」

「へへ…恭介だぁ／／／」

―スリスリ

ちょ！？頬を擦り寄せて！？てか絶対起きてるよなコレ！？

―コンコン！ガチャ

「キョウスケ君～朝ですよ～起き……きゃ／／／」

きゃ／／／　ぢゃない！

「し、シャマル！？いや…これはだな…」

「あらあら、お邪魔さまでした～／／／」

―バタン…ギィィ

「シャマル！何ドアの隙間から覗いてんだ！？てか助けてくれ～！！」

その後、何とかヴィータを起こし脱出した僕

その後、何を思ったかヴィータがいきなりここで着替えようと服を脱ぎはじめたのを何とか制止し「別に恭介なら見られてもいいんだけどな／／」…ゴホン！

とりあえずヴィータを自分の部屋で着替えるように促して、朝のドタバタ騒動は収束した…

「あ、朝から疲れた…」

あ、朝食を作らなくちゃ…

そうして僕はキッチンへと向かった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

女子力ＵＰマニュアルは必要か！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――リビング――

キョウスケＳｉｄｅ

「「「「「いただきまーす」」」」」

今朝はごはんにみそ汁、アジの開きにきんぴらごぼうと肉じゃがと和食系でまとめてみました

…手伝おうとキッチンに入ろうとしていたシャマルをシグナムとヴィータが食い止めていた事を一応記載しておこう…

「神代、この後の予定だが…」

「モグモク…ん？ああ、とりあえずこの後、僕とシャマルがはやてのお見舞いにいくよ。シグナムとヴィータ、ザフィーラは蒐集活動を行ってくれ…ある程度集まったら戻ってはやてに顔を見せに来てくれよ…」

「ああ、分かった」

「キョウスケ君、学校はどうしますか？」

「……本音を言えば蒐集に行きたいけど、なのは達の様子を見ないといけないしね」

「テスタロッサ達と行動を共にしないと我々が鉢合わせする事があるしな」

「モグモク…じゃあ恭介は学校の後にはやての所にいくんだよな？」

「…なのは達も一緒に行く可能性があるけどね　その時はシャマルに携帯で連絡するよ…念話だとバレるからね～　シャマルはその後シグナム達に状況を連絡してくれ」

「はい、分かりました　私もキョウスケ君から連絡があったら席を外しますね」

「…なぁ恭介…闇の書が完成したら、はやては助かるんだよな？はやてと恭介…それに私達…みんな一緒で幸せに暮らせるんだよな！？」

「ヴィータ…」

「ヴィータちゃん…」

「……」

シグナム・シャマル・ザフィーラはヴィータを見つめている…

―ナデナデ

僕はそっとヴィータの頭を撫でた

「ひゃ！？」

いきなりだからビックリしちゃったか？

「大丈夫だよヴィータ…みんなその為に頑張ってるんだから」

「…うん／／」

ヴィータは目を細めて嬉しそうにしてるな～

「ゴ、ゴホン！二人とも…いいか？」

「あ、ごめんシグナム」

「うっ…／／　わ、わりぃシグナム…」

「仲がいいのは良い事だが…我々が居るのを忘れるな」

シグナムは苦笑しながら注意した

…人目は気にしないとな～

「……キョウスケ、そろそろ主の所に行かないと学校に遅れるぞ」

あ、もうそんな時間か～

「じゃあ僕とシャマルはお見舞いに行くけど…三人とも気をつけてよ」

「ああ」

「心配すんな恭介！」

「……心得た」

「じゃあシャマル、悪いけどはやての着替えを準備してくれ」

「はい　分かりました」

さて、学校まで時間ないから病院までは転送で行くか

「シャマル、準備はいい？」

「あ、はい　いつでも大丈夫です」

「じゃあ僕に捕まって　転送で行くから」

「はい♪」

―ギュッ！

シャマルは後ろから抱き着いて来た。僕の後頭部から柔らかい感触が…ってヲイ！

「ってシャマル！頭に胸が当たってるって！」

「あ、気にしないで下さい～当ててるんですから」

なぜに！？

「ほらキョウスケ君、早くはやてちゃんの所に行きましょ」

「…ハァ、最近こんなんばっかだから微妙に耐性ができてる自分が怖い…」

そうして僕は頭に胸の感触を感じながら転移魔法を発動させた…

―シュン！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院、はやて病室――

―コンコン

「はい、どうぞ～」

―ガラッ！

「おはよう、はやて」

「おはようございます　はやてちゃん」

「あ、キョウスケ君にシャマル　おはようさん」

「はやて、具合はどう？」

「ん～大丈夫やで～…でも暇すぎってのも考えもんやな」

「そうだろうと思って…はい、はやてちゃん　新しい本を何冊か持ってきましたよ」

「ホンマか！？ありがとな～シャマル」

シャマルははやてに数冊の本を…って

「ちょっと待てシャマル！」

「あ、あら　どうかしましたかキョウスケ君？」

僕はシャマルの持ってきた本を確認…

「…【誰でも解る男の落とし方】【男を刺激する１００の仕種】【夜のテクニックＢｅｓｔ５０】ってナニカナ？シャマルサン？」

「いや、それは～…何と言いましょうか…てへ♪」

「…ちょっと廊下に来てくれるかな～」

―ガシッ！

僕はシャマルを引きずるように出ていく

「ちょ！ご、ごめんなさいキョウスケ君！！ちょっとした茶目っ気…」

―ガラッ…バタン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

キョウスケ君が黒い笑顔を浮かべながらシャマルを連れていった…

ごめんなシャマル、あのキョウスケ君にはさからえへん…

私はさっきシャマルが持ってきた本を手に取り…

―パラパラ…

何気なくページをめくってみた

「…これは／／…こうすればキョウスケ君が…あかん、刺激が強すぎや～／／／」

私が本を熟読していると…

―バキドカ、ガシャーン！ギィィィン！ドンドン！……グチャ！！

い、今ありえへん音と最後に何かが潰れた音がしたような…

―ガラッ

「あ、おまたせはやて♪」

…凄く笑顔の眩しいキョウスケ君が入って来た……シャマルは？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「あ、おまたせはやて♪」

「あ…キョウスケ君…」

ん？はやての様子が…って

「あ、だめだよはやて　そんな本読んじゃ」

はやては先程の痴女の持って来た本を持っていたので回収した

「あ、こ、これは…シャマルがどんな本持って来てくれたんかな～って…／／」

とりあえず僕はその中からはやてが見ても問題ない本を選んで…

「ん～　とりあえずコレとコレとコレは大丈夫かな」

「あ、うん…ところでキョウスケ君、シャマルは？」

「その辺に転がってるから大丈夫だよ♪」

「ちょ！何！？転がってるって！！？」

「あ～そのうち復活するから～」

うん、ちゃんと手加減したしね～

『…あれで手加減したのですか？』

勿論だよインフィ♪

―ガラッ

するとシャマルが身体を引きずるように入ってきた

「ひ、ひどいわキョウスケ君…もうお嫁に行けない体に…ううっ…」

「キョウスケ君！？一体シャマルに何したん！！？」

僕ははやての肩に手を置き…

「はやて、世の中には知らない方が幸せって事があるんだよ？」

「そ、そか…」

はやてを（無理矢理？）納得させた

あ、ちなみにシャマルには魔王式の注意をしただけですから～

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―――？？？―――

？？？Ｓｉｄｅ

「…ようやくここまで完成したようじゃな」

「…まったく、本当ならとっくの昔に完成して彼に渡せたはずでしたのに…」

「まぁ　当初の予定よりは遅れたが…」

「その原因は貴方なんですから！少しは反省して下さい」

「ふぉふぉふぉ…」

「てか反省の色無しですか！？…しかもその原因が【ＴＯＵＴＯＹＡで暇潰しに借りたＤＶＤに影響されて】って…」

「いや～アレを見たら『これだ！』って思っての～」

「ハァ…頭が痛いですわ…」

「ま、当初の予定とは違ってしまったが…」

「…と言うより、かなり彼の発注とは掛け離れていますが…」

「「……」」

「…どう見ても小学生…ですね」

「…初期設定は８才位ぢゃよ」

「…確か「外見は１７歳位で超高性能かつスタイル超抜群な方でロングヘアーで顔も超美人でっ！」って彼は言ってましたよね？」

「…超高性能ぢゃよ？」

「てかそれ以外真逆！？超美人と言うよりも超可愛いし！」

「だっての～…なんだかんだでオリジナルで造っては既に他の小説とネタが被って何回も頓挫しての～…もうオリジナルは断念し既存の作品をクロスオーバーさせてユニゾンデバイス作るしかなかったんじゃよ～…」

「って作者のネタバレですか！？神様！？」

「しかも以前に決めた名前まで他小説で結構同じのを使われていたそうじゃし…」

「えっ！？ま、まさか神様…以前付けた名前まで変更を！？」

「…スクルド君はどう思うかの～？」

「…もう勝手にして下さい」

二人…神とスクルドは目の前にあるケース見ながら口論を繰り返していた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？？？Ｓｉｄｅ

ケース内にいる【少女】の目の前で神とスクルドが口論している中…

『……私……すたー…何処……さ……で……』

【少女】は目覚めの時を迎えようとしていた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトを救え！…って何から？？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校――

キョウスケＳｉｄｅ

はやてのお見舞いの後、急いで学校に移動（転送って便利だね～）
遅刻はせずに済んだのですが…

「……」

隣の席のフェイトの口から魂が抜けていた…

「ふ、フェイトさん？一体何があったの？」

「あ……キョウスケ……大丈夫…だから…」

いやいやいや！明らかに大丈夫じゃないっしょ！？
…昨日あれから何かあったか！？

「おはよーキョウスケ君！」

「あ、おはようなのは…」

―ギュッ！

僕がなのはとあいさつをしたらフェイトが僕の腕を掴み…

―ガタガタガタガタ

フェイトが壊れていた…

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「なのは…昨日フェイトに何をした？」

聞くのが怖いが、なのはに尋ねると

「ふぇ！？い、いやだな～キョウスケ君。私はフェイトちゃんとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしただけだよ～」

…ああ、魔王降臨したんだな…ったく

「フェイト…昨日大変だったんだね…ごめんね」

―ギュッ！

僕はフェイトの震えた手をそっと握って落ち着かせようとした

「あー！キ、キョウスケ君！？何フェイトちゃんの手握ってるの！？」

「ん？だってフェイトこんなに怯えてるんだし…」

「あ…／／／キョウスケの手…温かい／／」

お、フェイトの震えが止まった

再起動したようだな

「ち、ちょっとキョウスケ君？いつまで手を握ってるの？」

なんかなのはが必死に抗議しているが…まぁ確かに再起動したなら大丈夫か

僕が握った手を離すと

「あっ……」

凄く残念そうな顔をしたフェイトがいた…いや　昨日も長時間握っていたんだし、そんな残念そうな顔されても…ねぇ

「…あれ？そう言えばアリサとすずかは？」

いつもならなのはと一緒に乱入してくるハズだが？

「あ、二人は今日は少し遅れるから自分のお家の車で行くってメールあったの」

―ガラガラ

「「おはよう！」」

お、噂をすれば…

「おはようアリサちゃん！すずかちゃん！」

「二人ともおは…」

―ガタガタガタガタ

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

フェイトは再び壊れていた…

こ、こいつら一体フェイトに何したんだ！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――昼休み、屋上――

一気に昼休みまで来ました～

何とかフェイトのトラウマ？を取り除き、いつもの仲良し四人娘にもどったみんなとお弁当を食べてます

「すずか、今日ははやてのお見舞いにいくのよね？」

「うん、そのつもりだけど…みんなは都合悪いかな？」

「あ、私は大丈夫だから」

「うん、はやてちゃんとまたお見舞い行くって約束したしね～」

「私も大丈夫。はやてのお見舞いに行くよ」

今日もどうやらみんなではやてのお見舞いに行くことが決定したようだな～

フェイトは事情知ってるから当然か…

「キョウスケ君、はやてちゃんの具合どうかな？」

すずかが僕にはやての体調を聞いてきた。

「ん～…今朝も病院に行ってきたが体調は安定してたよ　本人は「暇すぎや～！」って騒いでたけどね」

…ついでに痴女も殲滅したな～

「にゃはは、はやてちゃん元気そうだね」

「じゃあ今日の放課後みんなでお見舞いに行きましょ！」

「「「おー！！」」」

…いや、お見舞いはいいんだが…みんなテンション高くない？

―キーンコーンカーンコーン

「あ、お昼休み終わっちゃうね」

「じゃあ教室に戻りましょ」

こうして昼食を食べ終わり…あ、一応痴女…ぢゃなくシャマルに連絡しておくか

「キョウスケ君?どうしたの?」

「あ、ごめんすずか　先に教室に行ってて~後で行くから」

「?うん、わかった。授業に遅れないようにね~」

―バタン!

さて、なのは達は先に行ったか…

僕は携帯を取り出し…

―ピッ!ピッポッパ!

―トゥルルルル…ガチャ

〔もしもし?キョウスケ君?〕

「あ、シャマルか?キョウスケだけど、今日の放課後にみんなではやてのお見舞いに行く事になったから鉢合わせしないように気をつけてくれ

後、シグナム達にも連絡してこちらから連絡しない限り病院には近

づかないように伝えてくれ」

〔ええ、分かりました。キョウスケ君も気をつけて下さいね〕

「ああ、分かった。シャマルも気をつけてな。…ちなみにはやての容態はどうだ？」

〔…正直良くはありませんね…はやてちゃん、顔には出しませんけど…辛そうにしているみたいですし…〕

「そうか…分かった。シャマル、はやての容態に変化があったら最優先で連絡してくれ…はやての事頼んだよ」

〔はい、はやてちゃんの生命…私達で救ってあげないと…ですよね〕

「そうだね…じゃあ後はよろしく」

―ピッ！

…そういえば…暴走プログラムどう倒すか考えてなかったな～

原作と同じなら問題ないが…手札は多い方がいいし、う～ん…

―バタン！

「キョウスケ！アンタ遅いわよ！早くしないと授業始まるわよ！！」

…とりあえずアリサの怒りを買わない為に早く教室にいくか

謎の食通降臨！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――放課後、病院――

キョウスケSide

学校が終わり僕たちは速攻ではやてのお見舞いの為病院に来ました

あ、もちろん着く前にシャマルにメールして隠れてもらったよ

―コンコン

「はい、どうぞー」

―ガラッ

「「「「こんにちは～」」」」

「あ、みんな　いらっしゃい」

ん…シャマルの気配は…屋上か

「みんな　おおきにな～」

「はやてちゃん、具合はどう？」

「あはは　大丈夫やなのはちゃん　元々ただの検査入院やし」

「でも、それでも心配だよ～」

「すずかちゃん…優しいなぁ」

「すずかの場合、心配性なだけって感じもするけどね」

「え～っ！アリサちゃん　そんな事ないよ～…そう思うよね？なのはちゃん」

「ふぇ！？　そ、そうだね～…」

…なのはよ、動揺したら内心そう思ってるって事になるぞ？

「あ～！！なのはちゃんまでそう思ってるの？」

「そ、そんな事ないよ？」

「…フェイトちゃんはそう思ってないよね？」

「……」

「フェイトちゃん？」

…ん？フェイト…はやての事ジッと見てるな

「ん？フェイトちゃん　私の顔に何か付いとる？」

そりゃそんなに凝視したらはやても気付くよな～

「えっ！？う、ううん　なんでもないよ」

…フェイトは状況把握してるからな～　気になるか…

「？ならええんやけど」

「フェイトちゃんどうかしたの？」

「あ、ごめんすずか。何でもないよ…」

「そう？」

フェイトに気にするなって言う方が無理かな～…少し空気かえるかな

「あ、そうだ！実は今日もお菓子作ってきたんだ　みんな食べる？」

「「「「「もちろん（や）」」」」」

即答かい！　しかもさっきの空気も無くなってるし！！

「でもキョウスケ君、今日は手ぶらだったよね？」

―ギク！

「あ～…今朝はやてのお見舞いに来た時に持ってきてたんだよ　で、

石田先生に預かってもらってたんだ」

「へ～」

「じゃあ持って来るからまってててね」

「あ、キョウスケ君　手伝うよ」

あ～…今回はそれマズイんだよな～

「ありがとうすずか　でも大丈夫だよ　ホラ、お客様に手伝わせるとはやてがうるさいからね～」

「なんやて!?」

「アハハ、冗談だよ　じゃあ待っててね」

―ガラッ…バタン

とりあえず人目が無い所に行って…

――給水場――

よし　ここなら目立たないな…

確か以前に作り置きして異次元空間に収納していたお菓子が…

―ガサゴソ―

あ、あった

え?腐ってないかって?

異次元空間の中は時間が止まってるから大丈夫さ　ハッハッハ！

さて、このお菓子にはやはり紅茶かな

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――病室――――

―コンコン！ガラッ

「お待たせ～持ってきたよ」

僕はトレイに紅茶とお菓子をのせて部屋に入った

「「「「「おお～～」」」」」

みんなテンション高っ！

「キョウスケ君、そのお菓子は何?」

よくぞ聞いてくれたなのはさん！

「これはアップル・ストゥリューデルっていうお菓子だよ　さあ！綿々と伝えられてきたウィーン菓子の真髄を堪能してくれたまえ！」

「な、なんかキョウスケの性格変わってない？」

「う、うん…」

「キョウスケ君…料理になると性格変わるんよ…」

「変わり過ぎじゃあ…」

「そ、そうだね」

上からアリサ・なのは・はやて・すずか・フェイトと何か言っているが…気にしない～

「そしてこの紅茶…みんな、まずは香りを楽しんでくれそして、次は色合いを…　そうすれば心が落ち着いてくる　産地であるヒマラヤ山岳地帯の景色がまぶたの裏に浮かんでくる…　そうして初めて、‥紅茶のシャンパン‥を堪能することが出来るのだ」

紅茶を極めるためにはこの位はしないと～！

「「「「「アハハ…」」」」」

乾いた笑いが聞こえたが…スルーだぁ！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

みんなとお見舞いという名のお茶会&談笑を過ごし…

「そういえばそろそろクリスマスだね」

「そうね…あ、みんな今年はみんな一緒にクリスマス過ごさない？」

「あっ！アリサちゃん、それいいかも～」

「でしょ？フェイトは何か予定ある？」

「えと…多分大丈夫」

「キョウスケは？」

「まぁ、はやての外出許可が取れればね」

「え！？キョウスケ君、私の事は気にせんといてみんなで楽しんで
「何言ってるのよはやて！アンタの参加は決定事項よ！！」ってア
リサちゃんなんでやねん！」

「さすが関西人！ツッコミがうまいわね！」

「いや～…ってちゃうわ！私もって…？」

「はやてちゃん…これは前からみんなで話し合っていたんだけど、
せっかくみんなお友達になれたんだし…私達みんな、はやてちゃん
やキョウスケ君とクリスマス過ごしたいんだよ…」

「すずかちゃん…」

「そうだよはやてちゃん…私もみんな一緒に過ごしたいな」

「うん、私もはやてとクリスマス過ごすの楽しみなんだ」

「なのはちゃん…フェイトちゃん…」

「と言う訳で全員強制参加よ！いいわね！」

「アリサちゃん…もうしゃあないな～」

「「「「アハハハ～」」」」

「でもみんな…ありがとう」

それからクリスマスパーティーの打ち合わせをして…

「あ、もうこんな時間だわ」

「あ、ホントだ～」

「じゃあはやてちゃん、私たちそろそろ…」

「そか…」

「あ、でもまたお見舞いに来るから大丈夫だよ　はやて」

「うん　みんな…ありがとな」

「キョウスケ君はどうするの？」

ん？…まぁはやての護衛もあるしな～

「僕はもう少し居るよ。食器も洗わないといけないし」

「あ、じゃあ私手伝うよ」

ん～…シグナム達と定時連絡したいしな～…

「あ、大丈夫だよなのは。そんなに手間はかからないし」

「でも…なんか悪いし…」

ううっ、なんていい子なんだ！このコが数年後の魔王とは信じたくない！

「ありがとうなのは、優しいね（ニコッ）」

「ふぇ！？／／／　そ、そんな事ないよっ／／／」

なのはは凄い勢いでアワアワしている…ん？

―ガシッ！

フェイトがなのはの肩を掴んだ…前髪で目元が見えないが…

「…さ、なのは…早くイコウカ…」

「ひっ！？」

ここからじゃ見えないが…何かなのはがフェイトの目を見た途端に顔色が真っ青に…

―ガクガクガクガク×2

ちょうどアリサとすずかはフェイトの目元が見える位置にいたが…二人とも震えてる…

「「「「（ヤバイ！今のフェイト（ちゃん）に逆らったらヤられる！！）」」」」

三人の心が一致した瞬間だったそうな

「じ、じゃあキョウスケ君…私達はこれで失礼するね！」

「う、うん　そうねなのは」

「じ、じゃあはやてちゃん　お大事にね」

なのは・アリサ・すずかは怯えるように挨拶をしていた…

このカオスの中心のフェイトは…

―トン

僕の肩に手を置いた…？　あ！接触念話か！！

（…フェイト？）

（あ、キョウスケ！接触念話だっけ？これなら念話は盗聴されない

んだよね？）

（ああ、そうだよ）

（キョウスケはこれからシグナム達と何かするんでしょ？）

鋭いな～このコ

（今シグナム達は蒐集中だから定時連絡しようかと…後ははやての護衛だね…）

（…そっか　はやて、グレアム提督達に…）

（まぁしばらくは大丈夫だと思うけど念の為だよ）

（そっか…じゃあ私達は帰るね）

（ああ、フェイト…ありがとう）

（ふふ、どういたしまして）じゃあキョウスケまたね」

―ガラッ、バタン

「…みんな行ってもうたな～」

「やっぱ寂しいかい？」

「ん…そやね」

ああ！はやてが悲しそうな顔を！

「大丈夫だよはやて、元気になったらみんなともっと遊べるんだし…まぁ先ずはクリスマスパーティーだね」

―ナデナデ

僕ははやての頭を撫でながら励ました

「…ん、そやね／／／」

はやては気持ち良さそうにしていた

「…なあキョウスケ君」

「何、はやて？」

「……ううん、何でもない」

そう言うとはやては何も言わず、僕に身を寄せてきた

僕はそのはやての温もりを感じていた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

―接触―

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病室――

キョウスケSide

―ナデナデ～♪

はい、あれからずっとはやての頭を撫でてます
相変わらずはやての髪の触り心地はいいな…

―ガラッ！

「はやてちゃん、お友達は…あらあら」

「「……」」

僕とはやての時間は停止した…

「お邪魔だったかしら？ね、キョウスケ君はやてちゃん」

「あ、いやこれは…」

「シシシャマル!?これはな…えーと…な、何でもないんや!!／／／」

僕はともかく…はやては動揺しまくっていた
…このままだとシャマルに絡まれそうだな

「あ、じゃあ食器洗ってくるから」

そう言い残しこの場を脱出!
…背後からシャマルがきゃーきゃー言っていたが気にしない事にする!

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

シャマルＳｉｄｅ

「お友達のお見舞いどうでしたか?」

「う、うん　楽しかったで　また来てくれるて」

「それはよかったですねぇ」

「そやけど、もうすぐクリスマスやな　みんなとのクリスマスは初

めてやから、できればそれまでに退院してパァーっと楽しく出来たらええねんけど…」

「そうですね…出来たらいいですね…」

「うふふ♪楽しみやな～」

――

――

―

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院、屋上――

シャマルは今屋上に来ている…

「（闇の書がはやてちゃんを侵食する速度が段々上がってきてるみたいなの　このままじゃ持って一月…もしかしてもっと短いかも）」

シャマルは念話でシグナム・ヴィータ・ザフィーラにはやての現状を伝えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

ヴィータＳｉｄｅ

ヴィータは嵐の中、海上を飛んでいた

（…何かがおかしいんだ…こんなはずじゃないって私の記憶が訴えてる…）

ヴィータは自身の記憶の違和感を感じつつ、蒐集対象を探し飛行していた

「…でも、今はこうするしかないんだよな　はやてが笑わなくなったり、…死んじゃったりしたら…嫌だもんな！！」

《Ｊａ》

―ズバァァァン

その時、突如海中からタコ型魔法生物が浮上してきた

「やるよ！アイゼン！！」
《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》
「ギガント！ぶっ潰せー！！！」
ヴィータはグラーフアイゼンを握り魔法生物に突撃した…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――時空管理局――
――オフィス――

ディスプレイをジッと見つめている一人の老人…グレアム

「父様　あんま根を詰めると体に毒ですよ」

「そうだよ」

グレアムの使い魔、リーゼロッテ・リーゼアリアはグレアムの身体を気遣う

「ロッテか　どうだい様子は？」

「まぁボチボチですね～」

「クロノ達も頑張ってますけど…闇の書が相手ですから一筋縄では…」

「そうか…すまんな、お前達まで私の計画に付き合わせてしまって…」

「何言っていんの父様！」

「私達は父様の使い魔　父様の願いは私達の願い！」

「うん　大丈夫だよ父様　デュランダルももう完成してるし」

「闇の書の封印、今度こそきっと大丈夫ですよ」

「うん！フフフフッ」

「フフフフッ」

「ああ…」

笑うロッテとアリアにグレアムは頷く…

―パチン！

突如、何かが弾ける音がした途端周囲の景色が灰色に染まった

「な、何!?」

「父様!?これは…」

「…結界か?しかしミッド式のとは違う…」

―キィィン!ジャキィィン!

突如ロッテとアリアに蒼く光る鎖が巻き付き二人を拘束した

「ぐっ!こ、これは!?」

「バインド!?一体誰が!?」

「ロッテ!アリア!」

グレアムはバインドで拘束された二人に駆け寄ろうとするが…

―カチャ!

グレアムは【何もない空間】から銃口を突き付けられた…

「父様!!」

「だ、誰だ!?そこに居るヤツ!」

「…プリズムファントム解除…」

―ヴォン!

「…よぉ、三流小悪党共…不吉を届けにきたぜ…」

「お、おまえは！？」

「イレギュラー！？」

「…君はスコール…いや、神代恭介…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

少し遡り…

――病院、屋上――

キョウスケＳｉｄｅ

シャマルの弄ぶオーラから脱出した僕は、実は食器洗いではなく屋上に来ていた

『…マスター、座標確認しました』

「じゃ、黒幕に挨拶にいくか…プリズムファントム展開！」

―ヴォン！

これで僕は、あらゆるサーチに引っ掛からない！

「インフィニティ、転位！！」

―シュン！

――時空管理局――――

―シュン！

っと…目的地についたな

…プリズムファントム正常稼動中

僕の目の前では使い魔姉妹とグレアムが居る…

「闇の書の封印、今度こそきっと大丈夫ですよ」

「うん！フフフッ」

「フフフッ」

「ああ…」

コイツラ…やはり原作通りにはやてごとの封印が目的か…

―パチン！

僕は無言でここの空間に結界を張る
ちなみにこの結界はネギまの認識阻害Ｖｅｒをアレンジして組んだ術式である。だから…

「…結界か？しかしミッド式のとは違う…」

…となる訳です

後は使い魔姉妹を封じるか…こいつら笑いながらはやてを封印する計画話しやがって…

「（シグ・ガルバリー！）」

僕の両手から魔法陣が現れ、

―キィィン！ジャキィィン！

蒼く光る鎖が二人を拘束した

そして二人に駆け寄ろうとしている老人…グレアムに

「（インフィニティ２ｎｄモード！）」

『２ｎｄモード！ジリオンＳｅｔ　Ｕｐ！』

―カチャ

銃口を突き付けた

「父様！！」

「だ、誰だ！？そこに居るヤツ！」

「…プリズムファントム解除…」

―ヴォン！

「…よぉ、三流小悪党共…不吉を届けにきたぜ…」

「お、おまえは！？」

「イレギュラー！？」

「…君はスコール…いや、神代恭介…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「貴様！父様に何をする！？」

「くそっ！こんなバインドすぐに…」

猫姉妹が騒いでいるが…

「…オートプレッシャー！」

―ズゥゥゥゥン！バキバキ！

「「ぐわあああ！！」」

バインドされた上からオートプレッシャー！…超重力を二人にぶつける　まぁ手加減はしてるから骨の二、三本で済むはず

「…さて、グレアム提督…僕が何しに来たかお分かりですか？」

僕は冷ややかにグレアムに語りかける

「「……」」

だんまりか…

―グン！

僕はオートプレッシャーの出力を上げた

「「ぐはっ……」」

出力が上がった為、息も出来ないくらい苦しむ二人…

―バキバキバキ！

骨の三、四本は折れたかな？

「！？ま、まってくれ！八神はやての事だな！」

その瞬間、僕はオートプレッシャーの出力を下げる

え？人質なんて卑怯？ソンナコトナイヨ～手加減シテマスシ

「…僕の用件は、闇の書に関して起こった事件の揉み消し…早い話が八神はやてやヴォルケンリッター達は無罪放免にって事ですよ」

「な、なにを言っている！　既に被害が出ている事件を揉み消すなど…」

「あなたなら無理ではないでしょ？それに…」

僕はある資料をグレアムに見せる

「…な！こ、これは！？」

「時空管理局の闇の部分ですよ…僕の特技の一つにハッキングがありましてね…勿論、貴方の考えた八神はやてごと闇の書を凍結封印って情報もありますよ
これに比べたら無罪にするくらい軽いでしょう…ああそうだ、これをミッドチルダはもちろん全世界にバラまいたらどうなりますかね～？」

…まぁ、出所不明の情報なんて信憑性はないかもしれないが…スキャンダル満載だから公表されれば管理局もタダでは済まないのは確実だけど～

「…ああ、ついでに言うと　もし断れば…」

僕は一旦区切り…

「マテリアセット【バハムート零式】！…いでよ！バハムート零式

！」

―グォォォォン！

突如、宇宙空間に6枚の翼を持った巨大な龍が現れた

「なっ…！？」

「…ここの建造物が宇宙のチリとなりますよ？」

自分で言って何だが…今回悪役っぽいな～

「……解った」

長い沈黙の末グレアムは了承した

「ほぅ…いやに素直ですね。」

そう言いながら僕はバハムート零式を解除！オートプレッシャーも解除した　バインドはそのままだが

「まぁ僕としては今回は挨拶に来ただけですし、貴方の計画は阻止しますよ」

「……」

「ついでに言うと【闇の書】を【夜天の魔導書】に戻しますから邪魔はしないようお願いしますね…特にそこに転がってる猫姉妹は！」

僕は微かに意識が残っていた猫姉妹に殺気を叩き付ける

「「ひっ！？」」

一瞬悲鳴をあげた二人だが、気を失ったようだ…まぁ気にせず帰ろうとすると

「ま、まってくれ！闇の書を夜天の魔導書に戻すとは！？」

「…そのままの意味ですよ…では」

―シュン！

僕が転移すると同時に結界は解除され、残ったのは気絶した猫姉妹と呆然としているグレアム…後、バハムート零式が撒き散らした膨大な魔力反応やその神々しい姿を目撃し、混乱した管理局員たちだった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

『本当に今回は黒すぎですね～』

まぁたまにはね～

『…ギャップ萌え狙い？』

いや！ちがうぞ！？

イヴ前夜と…（前書き）

リョウリュさん　前話での誤字のご指摘、ありがとうございました

イヴ前夜と…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

シグナムＳｉｄｅ

山岳地帯の広がる世界…その空を飛びながらシグナムはシャマルと連絡をとっていた

「（ええ、ここまでは上手くいってるわ）」

「ああ…そっちに戻らなくなった分、管理局もこちらを追いきれていないようだ。主はやては淋しがっていないか？」

「（私には一言も…でも、お友達はよく来てくれてるみたいなのすずかちゃん達）」

「そうか…だが心配させてもいけない。数日中に一度戻る」

「（うん、気をつけて）」

「ああ」

シャマルとの通信を終え、シグナムは山岳に降り立った

―パラパラパラパラ

シグナムは手に持った闇の書のページをめくる

「残り、後６０頁…」

頁を確認し、静かに呟くシグナムだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――高町家――

なのは＆ａｍｐ;フェイトＳｉｄｅ

高町家の夕食のテーブル。そこには高町一家となのはに夕食に招待されたフェイト＆ａｍｐ;アルフ（犬モード）が揃っていた。

「はい、どうぞ～」

料理を次々と食卓に置いていく桃子さん

「おお！旨そうだな～」

「「「はぁ～すご～い　ねぇ～」」」

みんな桃子さんが作った料理に絶賛だった

「いただきま～す×６」

「フェイトちゃんも沢山食べてね」

「はい、ありがとうございます」

「はい、なのは　取り皿」

「ありがとう…　はい、フェイトちゃん」

なのはは兄の恭也からお皿を受け取りフェイトに渡した

「ありがとう」

「フェイトちゃんは今年のクリスマスイヴはやっぱりご家族とご一緒なのかい？」

士郎はフェイトにクリスマスの予定を尋ねた

「はい、えと…　イヴはリンディさん達と過ごして…２５日は、なのはや友達と過ごす予定です」

「そう」

「ウチは今年のイヴも地獄の忙しさだな」

「私、今夜の内に値札とＰＯＰ作っておくから」

「お願いね！私達は今夜しっかり寝とかなきゃ！」

「ん？？？」

フェイトは士郎・なのは・美由希の会話がよく分からないようで首を傾げていた。それに気付いたなのははフェイトに…

「あ、翠屋のクリスマスケーキ　人気商品だからイヴの日はお客さん一杯なの」

「それにね、イヴを過ごす恋人同士とか友達同士とかの為に深夜まで営業してるんだよ」

なのはと美由希はフェイトに説明した

「そうなんですか」

なのは達の説明でフェイトは納得といった顔をした

「恭ちゃんはいいよね～店の中で忍さんとずーっと一緒だし」

「それは別に関係ないだろ」

美由希と恭也の会話聞いていたなのはとフェイトは…

「「いいな～…私もキョウスケ（君）とイヴ過ごせたら…」」

その台詞に反応した士郎・恭也は

「「なっ！？イヴを男女で過ごすなどなのは（達）にはまだ早い！！」」

と、勢いよく言い放った

さらにその台詞を聞いた美由希・桃子は

「あら恭ちゃん、あの子の何処が気に入らないの？」

「…二人とも、乙女心を理解していないようね…？」

美由希の抗議と桃子の（恐怖の）笑顔を受けた

もちろん男性二人は（主に桃子の）威圧に恐怖しながら冷や汗をかいていた…

「あ、アリサちゃんとすずかちゃん家の予約分はちゃんとキープしておくからね」

先程までのダークスマイルとは打って変わって桃子はいつもの笑顔でなのはに話しかける

「うん」

「リ、リンディさんからも予約頂いてるからな～　お楽しみに」

ダークスマイルから解放された？士郎もフェイトに話しかけた

「あ、はい　ありがとう…ございます」

フェイトも若干引きつつも士郎に御礼を言った

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――月村邸――

すずかＳｉｄｅ

すずかはベットの中でなのは達にメールを送っていた

〔明日の終業式の帰りの件　みんな大丈夫ですか？〕

―ピッ！

〔はやてにプレゼント渡しにいくんだよね？〕

―ピッ！

〔でも、内緒で行って大丈夫かな？〕

―ピッ！

〔まっ、もし都合が悪かったら石田先生に渡してもらえばいいし〕

―ピッ！

〔じゃあ　そうゆう事でまた明日ね　おやすみ〕

「送信…っと」

―ピッ！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――軌道上、アースラ――

クロノＳｉｄｅ

―ピッ　ピピピッ

クロノはアースラのコンピュータであるデータを調べていた

―プシュー

ドアが開きエイミィが入って来た

「ん？あれ？どうしたのクロノ君？」

その瞬間、クロノは調べていたデータを慌てて消した

「う、うん…ちょっと調べ物」

言葉を濁し答えるクロノ

「なんだ　言ってくれればやるのに」

「いや、いいんだ…個人的な事だから…」

そう言いながらドアに向かうクロノ…

「ああ、闇の書についてのユーノのレポート　なのは達にも送っておいてくれたか？」

途中で振り向きエイミィに確認をとった

「なのはちゃん達も闇の書の過去については複雑な気持ちみたい…」

「…そうか」

そのまま沈黙する二人だった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院、はやて病室――

キョウスケＳｉｄｅ

今日はシグナム・ヴィータ・シャマルが揃ってはやてのお見舞いに来ていた
ザフィーラは留守番（人型モードは耳が目立つし、狼モードだと病院側から許可が下りないだろうとの事で）をしてくれている

…う～ん、予定ではクリスマスイヴ前に防衛プログラム戦を終わらせたかったんだが…どうやら魔導師をターゲットにしなかった為に頁が効率よく蒐集できなかったと最近気付いたんですよね～…ｏｒｚ
結果的に差し引きゼロですよ！

…過ぎたことは仕方ない、確か原作ではイヴになのは達がサプライズで来るんだよな～…一応今日は認識阻害メガネは外して【スコールＶｅｒ】で居るが…

「はやて…ごめんね　あんまり会いにこれなくて」

「ううん　元気やったか？」

「めちゃめちゃ元気！」

ヴィータははやてにべったり甘えモードだな～

―ピピピピピ！

ん？なんの音だ？

「キョウスケ君？なんやその指輪から音してへんか？」

えっ！？

『マスター、通信が入っています』

ええっ！？誰から？？？

『（神様からです）』

……何？

今頃なんだろう？

「はやて、ちょっと席はずすね」

「キョウスケ君、どないしたん？」

「え～～～と……ト、トイレだよ」

うわ！我ながら苦しい言い訳を…こんなの今時信じる人いる訳…

「あ…／／そ、そか～…」

居たよ！？
しかも顔が赤くなっているのは何故や！？

「…じゃあシグナム・ヴィータ・シャマル、はやての面倒よろしくね」

「ああ」

「ったりめーだ！」

「はい、わかりました～」

―ガラッ！バタン！

「とりあえず屋上に行くか…」

しかし神って…あの神（仮）だよな～
…何だろう通信って？？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ユニゾンデバイスは魔法少女！？（前書き）

はじめに…

すみませんでした～ｏｒｚ

ユニゾンデバイスは魔法少女！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院、屋上――

キョウスケＳｉｄｅ

さーて　屋上には…よし、誰もいないな

「インフィニティ、通信を繋いでくれ」

『解りました…』

―ザザザザーッ…

〔おお、キョウスケよ　全滅してしまうとは情けない…〕

ドラ○エの王様ネタかよ！？

「…切るぞ」

〔じょ、冗談じゃよ〕

「ったく…で、何かあったのか？」

〔いやの～　以前頼まれた物が完成間近なので取りに来てほしいんじゃよ〕

…はて？　何か頼んでいたっけ？

〔おぬし…ユニゾンデバイス頼んどったろうが！〕

あ！…そうそう！いや～　すっかり忘れてたな～

〔…忘れておったな〕

「イエイエ…いやー楽しみにシテマシタヨ？」

〔…まあよい、ではこちらに【召喚】するぞい！〕

えっ！？いきなり！？

「ちょっとま〔ではいくぞい！カーーッ！〕人の話しを聞けー！」

―シュン！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―――？？？―――

―シュン！

「っと…ここは？」

「キョウスケ君！久しぶり～」

―ギュッ！

「ス、スクルドさん！胸っ！胸が当たってます！」

いきなりスクルドさんが抱き着いて来てその胸をおもいっきり押し付けてくる！？

「あら　いいのよ？女神と人間の禁断の愛を「ゴッホン！」あら…神様～」

「スクルド君…そーいうのは人目がない所でお願いしたいんじゃが…」

人目なかったらいいんかい！？

「あら　これは失礼しました…（チッ））」

「…今何か聞こえたようじゃが…？」

「きゃ　神様っ　気のせいですよ」

…いや　僕も今（チッ）って聞こえたぞ！？

一応スクルドさんは離れてくれた

「キョウスケよ…久しぶりだな　お前の活躍は（面白おかしく）見とるぞ！」

…今なんか、聞き流せない単語が聞こえたような？

「ゴホン！…とにかくまずはこっちじゃ！ついてまいれ！」

と神が別空間へと移動していくのでついていった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ここじゃここじゃ」

って何もないよな？

―ギィィ！

突如空間に亀裂が入り扉のように開いていく

「この中じゃよ…」

「へ～　随分厳重だな～…ってこれは！？」

僕の目の前には子供一人分入りそうな大きなカプセルがあり、その

中には…

「…女の…子ぉ！？」

なのは達位の女の子が居た

「このコがおぬしのユニゾンデバイスじゃよ」

いや…まぁ　状況的にはそうだとわかるが…

「…何故に木○本桜なん！？！？」

神の方を振り向くと、神は目を反らした

「…？スクルドさん、これは？」

スクルドさんは申し訳なさそうな顔である方向を指差した

…その先には何やら大量の本やＤＶＤが置いてあった

僕は恐る恐る近づき確認すると…

「…なぁ神よ、この明らかに全巻揃ってそうな本やＤＶＤは何だ？」

「ん？おぬしが元居た世界のアニメ【カードキャプターさくら】ではないか」

何当たり前のように言ってるんだ？

「すみませんキョウスケ君…あの神は今度はそのアニメにハマってしまい…」

「はぁ！？」

「貴方のユニゾンデバイスは…本来ならなのはさんやフェイトさん達がカートリッジシステムをデバイスに組み込む時期に渡せたのですが…神がそのＤＶＤを見て「これだ！」とほざいて作り替えてしまったんです…」

な、なんだそりゃ～！？

「それと…「まだあるんかい！？」ハイ…キョウスケ君、仮契約カード持ってますよね？」

ああ、何故かキスしたら仮契約カードでてくるみたいだが…ってこの流れは…

「それも神が勝手に追加した能力なんですよ…このユニゾンデバイスの能力の一つ【シンクロユニゾン】の媒体として」

シンクロユニゾン？普通のユニゾン・イン！的なのじゃなく？

「それは後でこのコに聞いていただければ…すみませんキョウスケ君、貴方の希望は【外見は１７歳位で超高性能かつスタイル超抜群な方で　ロングヘアーで顔も超美人でっ！】という希望だったのに…」

…いや…まぁ…今思うとかなり恥ずかしいな～

「ゴホン！まぁ多少の誤差はともかく…後は微調整で完成じゃ」

「…なぁ、ちなみに名前は決まってるのか？」

「勿論！　ここまで再現させたんぢゃから名前は【さくら】しかなかろう」

「いやまてよ！以前作者と話した時、エリスにするとか言わなかったか！？」

すると神が一枚の手紙を渡してきた

「ん？手紙…なになに

―ゴメン！名前は他作品の作者と多数かぶってた。なので既存の作品とクロスさせました―作者より―

ってご都合主義かよ！？」

作者〔すみませんｏｒｚ〕

今また電波が聞こえたな…

「はぁ…もういいや。それで微調整ってすぐ終わるのか？」

「後はおぬしの魔力を注ぎ込むだけじゃよ…早速作業に取り掛かろうかの」

「はぁ…で、どうすればいいんだ？」

「な～に簡単じゃよ　そこの水晶におぬしの魔力を送り込めばいいだけじゃ」

ふ～ん…じゃあさっそく

―ブォン！

「くっ…！？結構キツいな…」

水晶に触れた途端に僕の魔力が吸い取られていくのが解る…

「まぁの～　普通のユニゾンデバイスとは違い神様製作の特注品じゃからの～　ほとんど人間と変わらん仕上がりじゃよ…」

…チート仕様って訳ね

―ガチャ！プシュー…

などと神の自慢話しをしているうちにカプセルが開いた

「おお！目覚めるぞい」

「……」

あれ？無反応…？

「ん…ふみゃー！！よく寝た～！」

開口1番寝起きセリフかい！？

「あ！はじめまして！さくらです！あなたがますたーですね？」

「あ、ああ…神代恭介です。よろしくね（ニコッ）」

僕はさくらの頭を撫でると…

「…はにゃ～ん／／／」

はにゃ～…ん？？

「ど、どうかしたか？さくら？」

えっ！？何か変な所触っちゃった！？

「い、いえ／／！その…嬉しくって、はにゃ～んってなっちゃったんです／／／」

そ、そうなんだ…

「ふむ…早速デバイスにフラグ立ておったか…」

「あ～…私も撫でてほしい…」

後ろの二人が変な事言っているが気にしないようにしないと…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

人生いろいろや！うっしゃあ！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「で、何故ここでもこうなる？」

「♪～♪～？はう～／／／」

現状を説明すると…ユニゾンデバイス…いや　さくらが「手…繋いでいいですか／／？」って上目づかいで聞いてくるもんで…繋いでいます

「ますたーの手って温かいですね／／♪」

嬉しそうにしてるから無下にはできないし…はぁ

「さてキョウスケよ、ラブラブ中の所を悪いんじゃが…」

いやいやいや！これは違うっしょ！？

「冗談じゃ…さて、そのコは基本的には【カードキャプターさくら】の魔法が使えるようにしてあるからの　その為スタンドアローンで活動も十分可能である。さらに、おぬしとユニゾンする事でおぬし

自身もそのさくらの魔法が使用可能になるのじゃ」

「へ～　そりゃ便利だな～」

魔法戦のバリエーションが増えると便利だしな

「私、ますたーの為に頑張りますね（ニコッ）」

うっ…か、可愛い…

「そ、そうださくら　とりあえずその敬語はいいから…ね」

可愛い女の子にマスターって言われると…何か背後から刺されそうな気が…

「あ、はい…じゃなくって、うん！キョウ君♪…テヘヘ／／」

えらく速攻で砕けたな～

「ではさっそくユニゾンしてみてはどうかの？」

あ、一応機能確認だね

「じゃあまず…インフィニティＳｅｔ　Ｕｐ！」

『…マスター私の事忘れてたなかったんですね…覚えていてくれて嬉しいです！』

あ～…前回出番少なかったからね～…いいからＳｅｔ　Ｏｕｔを…

『オーライ！バリアジャケット展開！！』

―ピカァァァ！

…えらく力入ってるなインフィニティさん…

とりあえずいつものバリアジャケット姿になり

「じゃあいくよ　さくら！」

「うん！ユニゾン・イン！」

―ギュュュン！

僕とさくらがユニゾンすると、黒が基調だったバリアジャケットがメタルブルーの色に変化し瞳の色も蒼色から碧色に変化し髪も明るめの茶髪に変化していた

「…へ～　ユニゾンってこんな感じなんだな～」

「（どうかな？キョウ君。何かおかしな所ある？）」

ん？この声は

「さくらか？いや大丈夫だよ」

「（よ、よかった～　初めてだから上手くいくか心配だったんだ～）」

「そか　あ、さくらの魔法ってどんなのがあるの？」

「（えっと、今記憶をリンクさせるね　それで解ると思うから）」

さくらがそう言うと頭の中に知識が流れ込んで来る―ふむ、クロウカード系の魔法か…まずはコレか

「…闇の力を秘めし鍵よ！新たな姿を我の前に示せ　契約者さくらの名のもとキョウスケが命じる　封印解除！《レリーズ》」

―パァァァァ！

封印（レリーズ）解除と共に僕の両腕にはブレスレットが装着された

「…これでクロウカードが使用可能になったんだよね？」

「（うん　そうだよ！試しにウインデイ使ってみる？）」

「そうだね…じゃあ…」

僕は右腕を前に出し

「ウインディ！（ＴＨＥ　ＷＩＮＤＹ）」

―ゴォォォォォ！

おお！ホントに出来た！しかも精霊姿で　じゃあ…

今度は左手を前に出し

「ウオーティ！（ＴＨＥ　ＷＡＴＥＲＹ）」

―ザバァァァン！

こちらも精霊姿で出現した！…が

「…け、研究室がぁ～…」

「風はともかく水びたしですね～」

やべっ　室内って忘れてた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

ウオーティでびしょ濡れになった研究室の掃除を部下の天使たちに丸投げした神が

「まぁ　とりあえず不具合はないようじゃな」

「後はさくらちゃんが貴方のサポートをしてくれるから解らない事は彼女に聞いてね」

「はぁ　じゃあとりあえず…ユニゾン・アウト！」

―パシィィ！

「ふう…さくら、身体に異常はないか？」

「うん、大丈夫だよ」

「…あら？キョウスケ君、胸の辺り光ってない？」

え？…あ、ホントだ

何が光って…えっ！？光っていたのはヴィータとの仮契約カード…

だが、

「ヴ、ヴィータとの仮契約カード…ヴィータの絵柄が…消えた…？」

なんで！？

「なんじゃと！？…しまった！闇の書が覚醒しておる！！」

「なっ！？　なんだって！？」

「こちらでも調べましたが…ヴォルケンリッター達が闇の書に蒐集され、それを目撃したはやてちゃんが…」

…ショックのあまり暴走したのか…だけど！

「誰がヴィータ達を蒐集したんだ！？…ま、まさか？」

「うむ…どうやら仮面の男…いや、リーゼ姉妹らしいの」

…あいつら…忠告を無視か…

「…いくぞ、さくら！　闇の書の暴走を食い止め…いや、家族を助

けにいくぞ！」

「…うん！キョウ君の家族は私の家族でもあるもん！」

「と言う訳だ　神様、現場に転送してくれ」

「うむ　解った…では行くぞ！」

「キョウスケ君…ご武運を」

「ありがとう神様、スクルドさん」

―シュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「…神様、キョウスケ君達は大丈夫でしょうか？」

「正直原作と違ってきた世界じゃからの～　ま、大丈夫じゃろ」

「軽っ！」

To Be continued

守るべきもの

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

時間はキョウスケが屋上に行った所まで遡り…

――――はやて病室――――

―コンコン

「こんにちは～」

「「っ！？」」

シグナムとシャマルは聞き覚えのある声に驚いた

「あれ？すずかちゃんや　はい　どうぞ～」

はやても声の主に気付き招き入れた

―ガラッ！

「「「「こんにちは～」」」」

「あっ！」

ヴィータは入って来た人物の中の2人を見て驚いた

「あっ！今日はみんなお揃いですか？」

すずかはヴォルケンズ達とはやてが一緒に居る所を久々に見たので少し嬉しそうにしていた

「こんにちは　初めまして」

アリサはヴォルケンズ達とは初対面なので礼儀正しく挨拶をし、

「あっ！」

「あ」

「あ…」

入って来たなのはとフェイトはシグナム達がいる事に驚き、シグナムはなのは達を睨み、シャマルはその様子を交互に見て困惑していた

「あ、すみません　お邪魔でした？」

アリサは場の空気やシグナムやシャマルの反応を見て邪魔してしまったか聞いてみたが、

「あ、いえ…」

「いらっしゃい　皆さん」

シグナムは表情を戻し、シャマルは普段と変わらず柔らかい物腰で招いてくれたが、やはり二人とも少し複雑な表情をしていた

「なんだ　よかった」

「ところで今日はみんな　どないしたん？」

はやては突然来たみんなに尋ねると…

「「うふふふ」」

「ん？」

アリサとすずかの意味ありげな笑いにはやては？と思っていると、二人は手に持ったコートに手を掛け…

「「せーの！」」

―バッ！

「「サプライズプレゼント！」」

「うわぁ！」

コートの下に隠してあったプレゼントをはやてに見せた

「今日はイヴだからはやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「うわ～ホンマか～ありかとうな～」

「みんなで選んできたんだよ」

「後で開けてみてね」

はやて・アリサ・すずかの会話中、シグナムとシャマル　なのはとフェイトは複雑な視線をお互いに交わしていた

―ギッ！

はやての傍らに居るヴィータは特になのは達を睨み付け、

「あ…」

なのははその視線に気付き肩を竦めてしまっていた

「なのはちゃんフェイトちゃん、どないした？」

なのはの様子に気付き、はやてはどうしたのか尋ねると

「あ、ううん…何でも」

「ちょっとご挨拶を…ですよね？」

「アハハハ…」

なのはとフェイトは何とかごまかし、

「はい…」

シグナムもなのは達の話しに合わせ返事をした

「あ、みんな　コート預かるわ」

「「はーーい」」

―ガチャ、ギィィィ

シャマルはみんなのコートを預かるとクローゼットの中に掛けている…この時シャマルは念話妨害を周囲に施していた

シグナム・フェイトＳｉｄｅ

シグナムとフェイトは二人並んではやてに背を向けて気付かれないように会話をしていた

「…念話が使えない　通信妨害を?」

念話が使えない事に疑問を持ち、もしかしたら…とシグナムに尋ねる

「シャマルはバックアップのエキスパートだ　この距離なら造作もない…」

シグナムは当然のように答えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ヴィータ・なのはＳｉｄｅ

「クッ……ッ！」

ヴィータの方は、なのはを敵意剥き出しで睨み続けていた

「えっと、あの…そんなに睨まないで…」

なのはは脅えたような困ったような感じでヴィータに言ってみたが、

「睨んでねーです　こーゆー目つきなんです！」

なのはの主張はヴィータにバッサリ切った！

「ぅ～ん」

困ったなのはだったが…

「ヴィータ！嘘はあかん！なんや悪い子はこうやで！」

―ムズッ！

「んーんー！！」

はやてはヴィータの態度を注意しながら鼻を摘んでお仕置き？をした

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「お見舞い、してもいいですか？」

フェイトはシグナムに警戒されながらも、はやてのお見舞いの許可を貰おうとし、

「…ああ」

シグナムはフェイトの方に視線は向けなかったが許可してくれた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――夜、病院外――

「「さよーなら～」」

アリサとすずかは手を振りながら出口まで見送ってくれたシグナムとシャマルに挨拶をしていたが、なのはとフェイトは…

「「……」」

ただ黙ってシグナム達を見ていた

――――病室――――

はやてＳｉｄｅ

「ん？どないしたヴィータ？」

「…なんでも、ないよ…」

ヴィータははやてに抱き着きながら目を閉じ、はやての温もりを感じていた

「そっかぁ？」

はやてもヴィータの頭を優しく撫でていた

「…ん　今夜は雪になるかな？」

はやては部屋の窓から空を見て呟いた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病室、屋上――

「はやてちゃんが闇の書の主…」

なのはは闇の書の主がはやてだった事に驚いていた

「悲願は後僅かで叶う…」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも！」

シグナムとシャマルは臨戦体制となりなのは達に迫った

「待って！ちょっと待って！！話しを聞いて下さい！！！ダメなんです！闇の書が完成したらはやてちゃんは…」

なのはがそう言いかけたその時！

―ビュュュ！

「はぁぁ！！」

グラーフアイゼンを振りかざしたヴィータがなのはに襲いかかってきた！

―バチィィィ！

なのははとっさにプロテクションを貼り不意打ちを防いだ…が、

―バキィィ！

「きゃあああああ！」

―ガシャャン！

なのはは吹き飛ばされ金網に激突してしまった

「ッ！なのは！？」

フェイトは慌ててなのはの方を向くが…

―ビュン！

「はぁぁぁぁぁ！！」

レヴァンティンを振りかざして来たシグナムに攻撃された

―ガキィ！

間一髪シグナムの攻撃をかわしたフェイト　レヴァンティンはコンクリートに傷を付けただけだった

―キィィン！

フェイトは咄嗟にバルデッシュを起動させ構える

「…管理局に我等が主の事を伝えられては困るんだ！」

シグナムはレヴァンティンを握り絞める

「…私の通信防御範囲から出すわけには…いかない！」

シャマルも普段から想像出来ないほど拳を握り絞めた

ヴィータ・なのはＳｉｄｅ

「ヴィータ…ちゃん」

吹き飛ばされたなのはは、近づいてくるヴィータに話しかけた

―キィィン

ヴィータはバリアジャケットを展開しながら、なのはに近づき…

「邪魔…すんなよ、もう後ちょっとで助けられるんだ！
はやてが元気になって私達の所に帰ってくるんだ！
必死にがんばってきたんだ…もう後ちょっとなんだから…クッ！」

ヴィータは目に涙を浮かべ怒りで震える程強く握ったグラーフアイゼンを振りかぶり…

―ブォン！

「邪魔すんなーーーっ！！！」

―ドカァァァン！

カートリッジで強化した一撃を振り下ろした

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」

ヴィータの一撃で発生した爆炎の中…

―コツ　コツ　コツ…

足音が聞こえ、炎の中バリアジャケットを纏ったなのはが悲しそうな表情で現れた

「…悪魔め…」

その姿を見たヴィータは目に涙を溜めながらそう呟いた…

「…悪魔で…いいよ」

―キィィン！ドキュ！

なのははレイジングハートを起動させカートリッジをロード

《Ａｃｃｅｌ　ｍｏｄｅ　Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

「…悪魔らしいやり方で話しを聞いてもらうから！」

なのはは強い意志を込め、レイジングハートをヴィータに向けた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

To Be continued

現れた『影』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「シャマル、お前は離れて通信妨害に集中していろ」

「うん」

―キィィン

シグナムに言われシャマルはバリアジャケットを纏い通信妨害を周囲に施した

「…闇の書は悪意ある改変を受けて壊れてしまってる…今の状態で完成させてもはやては…」

フェイトはそう言いかけるが…

―ジャキ

シグナムはレヴァンティンをフェイトに向け

「我々はある意味で闇の書の一部だ！」

―ズガァァァン―バチバチッ！！

そしてその上空でヴィータとなのはは激突していた

「だから当たり前だ！私達が1番闇の書の事を知ってんだ！」

ヴィータは攻撃しながら叫んだ

「じゃあ、どうして！」

《Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ》

なのはの足元に魔法陣が現れ、複数の魔力弾が現れた

「くっ…！」

それに気付きヴィータは距離をとる

「どうして【闇の書】なんて呼ぶの！？」

「！？」

「なんで…本当の名前で呼ばないの？」

「ホントの名前…？」

ヴィータはなのはの言葉に動きを止めた

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

フェイトＶＳシグナムＳｉｄｅ

フェイトはバルデッシュを構え…

《Ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ　Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ》

―バチバチ！

フェイトはバリアジャケットを纏い

《Ｈａｋｅｎ》

―ドキュ！ガチャ！

カートリッジをロードしバルデッシュを構えた

「薄い装甲をさらに薄くしたか…」

シグナムはフェイトの姿…ソニックフォームの特徴を瞬時に理解した

「その分、早く動けます」

「緩い攻撃でも当たれば死ぬぞ　正気かテスタロッサ？」

「貴女に勝つ為です！強い貴女に立ち向かうには、これしかないと思ったから！」

「…ッ！」

シグナムはフェイトのその闘う者の覚悟に心打たれ…空を仰ぎ…そして、

―キィィン

シグナムはバリアジャケットを纏った

「…こんな出会いをしていなければ、私とお前は一体どれほどの友になれただろうか…」

「まだ、間に合います！」

―ジャギ

だがシグナムはレヴァンティンを構え

「…止まれん！」

涙を流しながら呟いた…

―ドキュ！

シグナムはカートリッジをロード

その足元に魔法陣が現れ、そしてレヴァンティンを再び構えた

「我ら守護騎士、主の笑顔の為ならば騎士の誇りさえ捨てると決めた…もう止まれんのだ！！」

「止めます！私とバルデッシュが！」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ》

フェイトの足元にも魔法陣が展開された

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトＳｉｄｅ

フェイトはバルデッシュを構えながらシグナムの動きを見る…

（…キョウスケは今後もスコールとして私達の前に現れても今まで道理敵同士って振る舞ってって言ってたし…
今は…戦うしかないかな
…それにしてもキョウスケは何処に…？）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのは・ヴィータＳｉｄｅ

「ホントの名前が、あったでしょ！？」

「闇の書の…ホントの名前…」

「うん…」

ヴィータは自身が抱いていた闇の書の疑問もあった為その事を考えていた

（闇の書の本当の名前……ハッ！？そういや前に恭介が何か言ってたな…たしか…なんとかの書とか…なんだっけ！？や、やて？）

ヴィータが思考の海に落ちていたその時、

―ブォォォン！

「ハッ！？」

突如なのはの周囲に青色の魔力が集中し…

―ガチィ！

「ああっ！バ、バインド！？」

なのははバインドに囚われてしまった

「ああ！？」

その様子にヴィータは驚いた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトＳｉｄｅ

「ッ！？なのは！」

シグナムと鍔ぜり合いをしていたフェイトもなのはの異常に気付き、
シグナムとの距離を何とか取り…

《Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ》

―バチィバチバチ…

１発の魔力弾を精製
周囲の気配を感じ取り…

「っ！そこっ！！」

―バチィィ！

上空に向かって打ち出した

―ドォン！

フェイトの打ち出した魔力弾は何かに当たり空間が歪めた
フェイトはそれを見極めると、

「はぁぁぁぁぁ！」

―ガチィガチィガチィィ！

フェイトは上空に向かって行き、その空間をバルデッシュで切り裂いた

「ぐっ…」

フェイトが切り裂いた空間からは仮面の男が現れた

「この間みたいには…いかない！」

―ドキュ！

フェイトはカートリッジをロードし構えていたが…

―ヒュ！

「フッ！！」

―ドカッ！

横から現れたもう一人の仮面の男に飛び蹴りの一撃を受けてしった

「うわぁぁぁ！」

フェイトはそのまま落下していき

―シュ！

仮面の男の手から一枚のカードが現れ…

―シュ！ガチィィ！

フェイトはビル激突寸前で仮面の男のバインドに拘束されてしまった

「うわぁぁぁ！」

フェイトはそのまま落下していき

―シュ！

仮面の男の手から一枚のカードが現れ…

―シュ！ガチィィ！

フェイトはビル激突寸前で仮面の男のバインドに拘束されてしまった

「うっ…あああ！」

そして囚われのフェイトの悲鳴が響いた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ふ、二人!?」

なのはは仮面の男が二人居る事に驚いた

―シュ!

仮面の男はさらに複数のカードを自身の周りに展開し魔法を発動した

―ブォォォン!ガチィ!

「ああ!?」

「なっ!?ぐぅぅ」

「うわぁ!くっ…」

仮面の男が発動させた魔法でシャマル・シグナム・ヴィータまでも拘束されてしまった

「ん、んん…っ!」

「くっ…!」

「これって一体!?」

「…この人数だとバインドも通信防御もあまりもたん…早く頼む」

「ああ…」

―スッ

仮面の男が手を掲げるとそこには…

「ああ!?いつの間に!?」

闇の書が現れた…

―キィィィィン

「うわっ!ああっ!あああ!!?」

闇の書が輝くと同時に苦しむヴィータ
その胸からヴィータのリンカーコアが抜け出してきた

―キィィィィン

「ぐっ…ぐわぁ!」

「あ、ああ…あああ!」

同様にシグナム・シャマルからもリンカーコアが抜き取られ闇の書に蒐集されていく

「…最後の頁は不用となった守護者自らが差し出す」

「ぐぁぁ…」

「これまでも幾度かそうだった筈だ」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ》
〈蒐集〉

―キィィィン

「あ…あ…あああ！」

―壊れ呪われたロストロギア

「ああ…」

「ぐっ…ぐぁ…あああ！」

―こんな物で誰も救える筈もない

「ッ…ああ！」

闇の書にリンカーコアを蒐集されシャマルとシグナム消えてしまった…

「シャマル！シグナム！何なんだ…何なんだよ！テメーは！！？」

ヴィータは仮面の男に向かい叫ぶが

―キィィィン！

「ぐぁぁ…ああ…」

「プログラム風情が知る必要もなかろう」

ヴィータもまたリンカーコアを吸収され消えかかる

―ヒュン！

「てぇぇぇぃ…はぁぁ！！！」

その瞬間、上空から駆け付けたザフィーラが仮面の男に向かい拳を振りかざした

―バキィ！バチバチィィィ！

だが仮面の男のプロテクションに阻まれしまった

「…そうか、もう一匹いたな」

―キィィィン！

「ぐっぐぐぐ…」

仮面の男はザフィーラからもリンカーコアを抜き取り蒐集しようとするが、

「ぐっ…ぐぉぉぉ！」

ザフィーラは血の吹き出した拳に力を込め…

「…奪え！」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ》
〈蒐集〉

再び仮面の男は闇の書を使用した

「ぐっ…てえりゃぁぁぁ！！！」

リンカーコアを抜き取られながらもザフィーラは仮面の男に再び拳を振りかざした

―バキィ！バチバチバチィィィ！

だが、再び仮面の男のプロテクションに阻まれてしまった…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

悲しみの『覚醒』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病室――

はやてSide

「ハッ！？」

はやては何かに弾かれるように目を覚ました

―ドクン！

「っ！？」

はやての中で何かが覚醒しようとしていた…

Side Out

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――屋上――

？？？Ｓｉｄｅ

「他の二人は…なのはとフェイトは大丈夫か？」

「４重のバインドにクリスタルケージだ　抜け出すまで数分はかかる」

仮面の男たちの上空には、なのはとフェイトを閉じ込めたクリスタルが浮かんでいた…

「十分だ…闇の書の主の…

―フィィン！

目覚めの時だな…」

「いや…

―フィィン！

因縁の…終焉の時だ」

そう言いながら仮面の男の姿がなのはとフェイトの姿に変わっていた

―キィィィン！

変身した偽なのはと偽フェイトたちの目の前に魔法陣が展開され、

その中心に
―シュン！
はやてが強制転送され現れた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「あ…くっ…なのはちゃん？…フェイトちゃん？…なんなん？なんなんコレ！！？」

はやては目の前に吊されてるように浮かんだヴィータ、目の前に倒れたザフィーラを見て混乱していた

「…君は病気なんだよ　闇の書の呪い、って言う病気」

偽なのはは淡々とはやてに話しかけた

「…もうね、治らないんだ」

偽フェイトもまるで残忍に笑い、楽しそうにそう言い放った

「えっ…？」

「闇の書が完成しても助からない」

「君が救われる事はないんだ…」

偽なのはと偽フェイトは、はやてを絶望に落とそうと画策していた

「くっ…そんなんええねん…ヴィータを放して…ザフィーラに何したん？」

はやては胸の苦しみに耐えながら家族を…ヴィータやザフィーラを心配していた

「このコ達ね　もう壊れちゃってるの…私達がこうする前から…」

「とっくの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えると思いこんで…無駄な努力を続けてた」

「ッ！無駄って何や！？シグナムは？シャマルは？」

悲痛な叫びをあげるはやてに偽フェイトは顎ではやての背後を示す

はやてが後ろを振り向くと…

「……ああっ！！」

…先程まで着ていた服が、そのまま着ていた人だけ消えてしまったかのように床に落ちていた…

「壊れた機械は役に立たないよね」

「だから壊しちゃおう」

二人がそう言うと構えた手に魔力が集中しだした

「いやっ！…ちょ…やめてーーー！！！」

はやては偽なのは達が何をしようとしているか気付き止めようとするが…

「やめてほしかったら…」

「力ずくでどうぞ」

その想いは砕かれてしまった…

「なんで、なんでやね！！　なんでそんなん！！？」

はやては涙を流し懇願するが

「ねぇはやてちゃん…」

「運命って残酷なんだよ」

「ダメっ！やめて…やめてぇーーーー！！！」

―ズカァァァァン！

…偽なのはと偽フェイトの攻撃はヴィータやザフィーラを飲み込み
……消滅させた…

―――――

―――

―

「…ぐわぁ…うう…」

―ドクン！

家族を目の前で奪われ苦しむはやての足元に白い魔法陣が現れ、そして目の前には闇の書が現れた

《Ｇｕｔｅｎ　ｍｏｒｇｅｎ　Ｍｅｉｓｔｅｒ》
〈お早うございます　ご主人様〉

そして白い魔法陣はみるみる悲しみの闇に染まっていった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのは、フェイトＳｉｄｅ

―ピシピシ…パリィィィン！

その時、捕われていたなのはとフェイトが結界を破り脱出した

「はやてちゃん！？」

「はやてっ！？」

「く…く…わあああああああ

はやては魔力柱の中に居た

「…我は闇の書の主なり…この手に力を…」

するとはやての手に闇の書が現れ

「…封印、開放…」

《Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ》

〈開放〉

すると闇の書が反応し、はやての身体を成人に変化、銀髪長い髪

黒いバリアジャケットそして…４枚の漆黒の翼が現れた

「「ッ！」」

その変貌になのはとフェイトは驚いていた

「…また　全てが終わってしまった…一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい…？」

「はやてちゃん！」

「はやて！」

「我は闇の書…我が力の全ては…」

―スッ

はやて―闇の書がその手をかざし

《Ｄｉａｂｏｌｉｃ　ｅｍｉｓｓｉｏｎ》

―キィィィィン！

闇の書の掲げた手の平に巨大な魔力球が現れた

―バチバチバチッ

「あっ！？」

「ああっ！？」

なのはとフェイトもその魔力に驚くしかなかった

「…主の願いをそのままに…ディアボリックエミッション…」

「あっ！」

「空間攻撃！？」

なのはとフェイトはその攻撃の特性に気付いたが、それと同時に…

「闇に染まれ…」

闇の書の魔法が放たれた

―ズカァァバチバチィィィ！

ディアボリックエミッショが広域に拡大する中、なのははフェイトの前に立ちレイジングハートを構えた

《Ｒｏｕｎｄ　ｓｈｉｅｌｄ》

―キィィィン！

―バチィ！ズカァァバチバチ！

「ううっ！くっ…」

なのはとフェイトはシールドごと闇の書の魔法に飲み込まれてしまった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

遠く離れた場所で仮面の男達はその様子を観察していた

「持つかな　あの二人？」

「暴走開始の瞬間までは持ってほしいな…」

仮面の男が二人話していると突然、

―シュゥゥゥ

突如仮面の男から光の粒子がもれ…

「なっ！」

「クッ！？」

そして

―ガチィ！

仮面の男達はバインドによって拘束された

「…ストラグルバインド…相手を拘束しつつ強化魔法を無効化する…あまり使い所のない魔法、けどこういう時には役に立つ…」

仮面の男達の前にクロノが降り立ち…

―シュルシュルシュル…ガチィ！

「「ぐわぁ！…クッ！」」

そしてクロノがデバイスを地面に突き立てると仮面の男からさらに粒子が漏れ出した

「変身魔法を強制的に解除するからね」

「「ぐわぁぁぁぁ！」」

―パァン！

変身魔法が解除され、そこに現れたのは…

「クロノッ！コノォ！！」

「こんな魔法、教えてなかったんだがな…」

仮面が剥がれ落ちた二人の女性…

「一人でも精進しろと教えたのは君達だろう…アリア、ロッテ」

クロノの仲間…いや師匠と言うべき人物がいた…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

悲しみの『覚醒』（後書き）

次回　やっと主人公が戻ってきます！

キ「ホントか？」

イ『一応主人公なのに出番なかったからですね～』

キ「…気にしている事を…」

さ「ねぇキョウ君、もしかして…私のせいかな…？（ウルウル）」

キ「い、いや！さくらのせいじゃないから！あんの無計画な神のせいだから！さくらは気にするな！」

さ「うん…ありがとうキョウ君♪」

イ『こうやってフラグ立てるんですね～…修羅場の数も増えそうですね』

キ「……妙に説得力あるな」

イ『作者に聞きましたから　ＳｔｒｉｋｅｒＳ編なんか特に…』

キ「と、特に…なんだ？」

イ『いや～　見事な天然鬼畜っぶりだったと』

キ「鬼畜!?ぼ、僕の未来って…（ガクッ）ｏｒｚ」

さ「キョウ君！わ、私は何があってもキョウ君の味方だから　元気だして」

キ「あ、ありがとう　さくら！」

イ『（これで一つはフラグ確定ですね…フッフッフ…）』

あ、色々バレた？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

（隠れたか…）

ディアボリックエミッションを放った闇の書はそう呟きただ佇んでいた

――ビル群――

何とか闇の書の攻撃を回避した【3人】

今は身を隠すようにビルの陰に隠れて様子を伺っていた

「なのはごめん…ありがとう。大丈夫？」

「うん…　大丈夫」

「よかった～間一髪だったね」

「あの～…あなたは？」

なのはは目の前にいる見知らぬ少女に話し掛けた

「私は…さくら！

よろしくね！なのはちゃんにフェイトちゃん」

「さくら…？貴女は一体？」

「えへへっ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――数分前――

キョウスケＳｉｄｅ

―シュン！

「っと…ここは…病院近くのビル屋上か…ん？」

あれは…ッ！クロノと猫どもかっ！？

「キョウ君キョウ君！あれ…」

「ん？なんだ…ってあれは…ディアボリックぅ！？」

しかも目の前になのはとフェイトが！

「さくら！なのはとフェイトを頼む！こっちも後から行くから！」

「う、うん！わかった！…フライ《翔》！！」

―キィィン！

―バサッ

おお！さくらの背中に羽根が現れて…意外と速く飛べるんだな～…
って関心している場合じゃないか…
まぁ、なのは達はさくらに任せれば大丈夫か…

まずは…はやての心を踏みにじったであろう猫に対価を支払ってもらわなければ

…え？そんな暇あったらはやてを助けろ？
…まぁ、原作での知識があったからこういう状況も想定していたんでちゃんと手は打ってあるからね…それにグレアム達は最終回に責任取って辞職したけど…それではやて達にした事が許されると思って呑気にイギリス隠居生活しているのがムカつくんだよね～

「って訳で…インフィニティ、マテリア【ハーデス】セット！」

『オーライ、【ハーデス】セット！』

さあ、宴のはじまりだ…

『…マスター、セリフが悪役ですよ？』

イヤダナ～セイギノミカタデスヨ～

―シュン！

――ビル屋上――

―タッ！

っと…まずはクロノさんに…

「（クロックマネージャー！）」

―バチィ

クロノさんにクロックマネージャーを使用して少し休んでもらい…

―タッ！

「お、おまえは…！」

「カ、カミシロ…ひっ！？」

お～二人とも顔が真っ青だな～

『殺気あてまくりのクセに…』

気絶しない程度だよ～

「さて…猫姉妹よ…自分勝手な都合ではやてを苦しめた報い…受けてもらうぞ！

」

―カチャ

僕は２ｎｄモードで銃口を向け…

「召喚！【ハーデス】」

―バシィィィ！

マテリアを発動させ、猫姉妹の背後から大釜と供に現れた死神…【ハーデス】

―シュウウウウ…

その釜からは怪しげな煙りが立ち込め猫姉妹を包み込んだ

「ゴホッ…！な、なんだ…この煙りは…ゴホッゴホッ！」

「ゴホッゴホッゴホッ！…くっ…うわあああ！？」

二人の断末魔？が聞こえ、ハーデスの釜から発生した煙りが消えていきそして…二人の姿はなかった…

いや…正確には…

「…使い魔とはいえ命まで取ると後がめんどいからな…」

足元に仰向けになりピクピク痙攣し泡を吹いている小さな【カエル】が二匹いた

【ハーデス】は相手にダメージを与えると同時に一定確率で毒・混乱・睡眠・沈黙・ミニマム・カエル・スロウ・マヒを起こすのだが…全ての状態異常になったようだ…ざまぁ！

―バチィ！

「な、おまえはスコール！？いつの間に！！？」

クロックマネージャーの効果が切れたので時は動きだした

「…ああクロノ提督、お久しぶりですね。あ、コレどうぞ」

僕はいつの間にか持っていた虫カゴ？をクロノに渡した

その中には…

「…カエル？」

「はい、そのカエルは貴方が捕らえた猫姉妹ですから♪」

「なっ！？そ、そういえば二人がいない！？」

「当分は（半永久的に）その姿のままですから…それとグレアム提督によろしくお伝えくださいね…約束は忘れずにと」

そして僕はさくら達と合流する為立ち去った

―シュン！

クロノが何か言っていたが…まぁスルーっすね

『半永久にカエル…ギ○ュー隊長みたいな末路ですね…』

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――同時刻――

なのは＆ａｍｐ；フェイトＳｉｄｅ

「闇に染まれ…」

闇の書の魔法が放たれた

―ズカァァバチバチィィィ！

ディアボリックエミッションが広域に拡大する中、なのははフェイトの前に立ちレイジングハートを構えた

《Ｒｏｕｎｄ　ｓｈｉｅｌｄ》

―キィィィン！

―バチィ！ズカァァバチバチ！

「ううっ！くっ…」

なのはとフェイトはシールドごと闇の書の魔法に飲み込まれてしまった…

―シュン！

突如なのは達の後に一人の少女が現れ…

「盾よ！彼の者の力より我らを守れ！シールド！《盾》」

―キィィン！

なのはのラウンドシールドの前方にさらに巨大な翼を象った盾が現れた

―ズカァァン

「なっ！？」

「シールド！？誰っ！？」

なのはとフェイトは後ろを振り向くと、ピンクの杖をもった少女…さくらが居た

「二人ともこっち！」

「「だ、誰！？」」

困惑するなのは達であったが

「いいから早くっ！」

「「う、うん！」」

さくらに促され脱出した

―ヒュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――現在――

「私は…さくら！

よろしくね！なのはちゃんにフェイトちゃん」

「さくら…？貴女は一体？」

「えへへっ」

―シュン！

「みんな！無事か？」

僕はみんな合流…

「あ、スコールさん！」

「あ、キョウスケ！」

「あっキョウ君！」

「「……ぇ？」」

約2名様が変な声を上げた

「フ、フェイトちゃん？今スコールさんをキョウスケって…？」

「さくら…貴女キョウスケの知り合い？」

「えっ！？フェイトちゃんまたキョウスケって言ったよね！どういう事！？ねぇフェイトちゃん！！？」

「な、なのは！そんな事より今はこのコの事だよ！」

「ほえぇぇぇ～！？わ、私！？」

…なんかえらく大混乱中だな～…仕方ない…

「あ～…まずなのは、コレならわかるか？」

僕は懐から出した認識阻害メガネをかけ…

「ふ、ふぇぇぇーーっ！？？？キ、キョウスケ君！？！？」

なのは、声でかい！闇の書にバレる！

「うう～っ…だって…」

まぁビックリするのは解るが…

「で、フェイト…このコ【さくら】は僕のユニゾンデバイスだよ」

「「ユニゾンデバイス？」」

二人とも首を傾げているけど…あ、この時期まだユニゾンデバイスの知識はまだなかったのか？

「あ～…平たく言うと、僕と融合してサポートしてくれるデバイスだよ」

「…ふ～ん…でも、キョウスケのパートナーは私だよね♪キョウスケ？」

…今それを言うんですか！？フェイトさん…

「パートナー！？フ、フェイトちゃん！どーゆー事かな？かな？」

「どうもこうもないよ…なのは、ホラ」

フェイトが何故か優越感たっぷりの表情で、なのはに仮契約カードを見せて

「…フェイトちゃんの絵の書いてあるカード？？」

「これは…キョウスケとキスすると貰えるパートナーの証のカードなんだよ♪」

フェイトさんはサラっと爆弾投下した…

「……」

あ、時が止まった

「えええええええええええーーー!!!!!??キキキッスぅ??」

だからなのはよ…声でかいって…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

爆弾発言って処理が大変！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「キキキキョウスケ君！？フェイトちゃんとキスしたって…ホントなのかな？」

パニック中の割に何故冷静にレイジングハートをこちらに向ける？

あれか、魔王の血が成す技か！？

「あ～…ホラ、以前フェイトがリンカーコア抜かれた時に…」

「あっ！そういえば…」

エリクサー飲ます際に口移しでしたので仮契約カード発生したからな～

「でも、その後キョウスケと【またちゃんと】キスしたんだ！」

…またフェイトさんは火にガソリンを注ぎ込むセリフを…

「…ふぅん…レイジングハート…カートリッジフルロード…スター

ライトブレイカー発射シーケンス…」

ってちょい待てい！

「な、なのは！落ち着け！今ははやてを助けないと！」

僕がなのはを必死に説得していると…

「あ、でもキョウ君の仮契約って二人いたような…」

さくら！なんで知ってるのさ！

「私、仮契約のシステム管理もしてるからだよ♪」

そんなん聞いてないぞ！？

「…キョウスケ…私以外にも…キスしたんだね…」

フ、フェイトさん…？

「…バルディッシュ…カートリッジフルロード…プラズマスマッシャー発射シーケンス…」

あんたもかい！

「だから落ち着けーーー！！」

ハァ…ハァ…ハァ…　つ、疲れる…

「キョウスケ君…／／」

「な、なにかな？なのはさん…」

嫌な予感しかしないんだが…

「私と…仮契約してなの！／／／」

はい　嫌な予感的中！

「なっ、ダメだよ！なのはにはユーノが居るじゃない！？」

フェイトは必死になのはを止めている

…そーいやユーノって居たな～　キレイさっぱり忘れてたよ

「えっ？ユーノ君はお友達だよ？
何でユーノ君に悪いの？フェイトちゃん？？」

ああ、ユーノが報われない…

「あの～、二人とも…はやての事忘れてない？」

「「……あっ！」」

その【あっ！】って…忘れたたんだな…はぁ…

「キョウ君…ファイトだよ！」

ああ…さくらに癒される…って、半分はアナタのせいでは！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…あのコ　広域攻撃型だね、避けるのは難しいかな…バルデッシュ！」

《Ｙａｓ　ｓｉｒ　Ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ　Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｆｏｒｍ》

―ブォォォン

フェイトはバリアジャケットを変更した

「はやてちゃん…ねぇキョウスケ君、はやてちゃんは…」

「…闇の書の管理人格と融合して暴走中だな…」

「キョウスケ…これからどうするの？」

そうだな～…ん？

―ヒュゥゥ

「なのは！」

「フェイトぉ！」

おっ、淫獣とアルフ！

「…君、変な事考えなかったかい？」

「いや…事実しか考えなかったが」

「なんだと！？」

「てかさぁ…何でスコールとフェイト達が一緒にいるんだい？」

「あ、それはね…」

――説明中――

「と言う訳なんだ」

フェイトがアルフ&ユーノに説明してくれた。

「へぇ～、スコールの正体がキョウスケだったんだ…よかったじゃないかフェイト。ファーストキスが好「わーわー！ア、アルフ！な、何言ってるの！？」きな…って…わ、解ったからバルディッシュを向けないでおくれよ～」

「うう～／／アルフったら…」

フェイトが真っ赤になってバルディッシュを振り回しているが…あれって誤射とかないよな？

―ジィィィ…

な、何か視線が…

「……」

「何かな…ユーノ・スクライア？」

ユーノがあからさまに敵意剥き出しで睨んでた…ユーノに何かしたかな？

「……いえ」

いえ…って言われても、ねぇ…

「スコール…いやキョウスケ、アンタはフェイトの味方でいいのかい？」

「…まぁ、フェイト個人でなら…

―カチャ

って、オイなのは…だから何故レイジングハートを向ける？」

しかもなのはの目に光がない単色に！？

「…フェイトちゃん個人ってどういうコトカナ？」

怖っ！このコやっぱ魔王かも…

「あ～…それはフェイト個人なら味方だけど、管理局の味方をする

気はないって事だよ」

「えっ！？なんで？」

「…はやてをあんな目に遭わせたのは誰だと思う？」

「それは…仮面の男の人だよね？」

「ではなのは、その仮面の男の正体は？」

「えっ！…ユーノ君分かる？」

「え！？…ぼ、僕も分からない…アルフは？」

「私が分かる訳ないじゃないか！」

なのは・ユーノ・アルフはまだ知らないか…

「クロノはもう気付いて捕まえてる頃だろうが…黒幕はグレアムて実行犯は使い魔の猫姉妹だから」

「「「なっ！？」」」

一応民間協力者の立場でも自分の上司にあたる人がはやてをあんな目に遭わせた張本人ってのはショックかな～

「…ほ、ホントなのかい？」

「そんなのデタラメに決まっているだろ！そんなヤツの言う事なんか信じなくていい！」

「ユ、ユーノ君…」

「君！キョウ君が嘘言っているっていうの！？」

さすがにさくらもユーノの発言にカチンときたのか、珍しく怒っているな

「…ユーノ、キョウスケの言っている事は本当だよ」

「「「フェイト（ちゃん）？」」」

「前にキョウスケに証拠も見せてもらった…グレアム提督は…はやてごと闇の書を凍結封印しようと…」

フェイトもその事を聞いてショック受けていたけど…大丈夫かな？なのはも根は優しいから、かなりショックだろうな…

「そ、そんな…そんなのってないよ！！はやてちゃんが何したっていうの！？そんなの…はやてちゃんは一生懸命生きているだけなのに…そんなの酷ずぎだよ！！」

…やはりというか、なのはは目に涙を浮かべて叫んだ

「なのは…」

―ギュッ

そんななのはを僕は優しく抱きしめた

「キョ、キョウスケ君!?」

「…ありがとう、なのは…
はやての為に泣いてくれて…」

「…友達だもん　当たり前だよ／／」

―カチャ

「…フェイトさん、とりあえずバルディッシュを納めてほしいんだが…」

そう！　フェイトがハーケンフォームでバルディッシュの魔力刃を首に突き付けて…って軽く刃が食い込んでいるんですが!?

「…なのはを放したら…」

何コレ…超怖っ!?

―ギュ！

「痛っ!?さ、さくら?何故つねる!?」

急にさくらが手の甲をつねってきた…なんでさ?

「…あれ?何でだろう??何かモヤモヤして…」

しかも無意識かい！

「で、キョウスケ…なのはを…放さないの？」

ヤバイ…フェイト、目が危ない…

「あ、ああ…そうだね。ごめんねなのは　急に抱きしめて」

そう言い、なのはを放すと

「あっ……う、ううん／／む、むしろ…ゴニョゴニョ…／／／」

？最後の方が聞き取れないが…まぁいいか

「ゴホン！…まぁ　とりあえず当面は…はやてを助けないとね

なのは達も聞いたと思うけど、闇の書の意識がある内に助けないと…はやては完全に取り込まれて【闇の書】は転生機能使ってしまうから…」

「うん…はやてちゃんを助けないと…」

「はやては私達の友達だからね…」

なのはとフェイトはデバイスを強く握りしめ、決意を秘めた目をした…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

「あ、キョウスケ君仮契約は？」

…覚えてたんですね　なのはさん…

「「む～～～っ！」」

その横でフェイトとさくらがむくれていたが…とりあえずなのははスルーしよう…

ＳＬＢは封印指定に！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――ビル屋上――

「主よ…アナタの望みを叶えます…」

―キィィン！

闇の書の足元にベルカ式魔法陣が現れる

「…愛おしき守護者達を傷つけた者達を…今、破壊します」

《Ｇｅｆａｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ》

―ゴォォォォ…

闇の書を中心として結界が拡がっていった

キョウスケＳｉｄｅ

「あっ！」

―ゴォォォォ…

これは…結界か！？

「くっ…何？」

「前と同じ閉じ込める結界だ」

フェイトの問いにアルフが答えた

親切な解説ありがとうアルフさん！

「やっぱり、私達を狙ってるんだ！」

そりゃー、あの猫姉妹がなのは達に変身してはやてを苦しめたんだから…闇の書から見たらなのは達を目の仇にしてるだろうな～

「今クロノが解決方法を探してる　援護も向かってるんだけど、まだ時間が…」

たしか…解決方法っても…原作では、あまり活躍しないデュランダル持ってくるだけだったような…援護もアースラだけだったよな…よく考えたら役にたたねぇ～！！

「それまで私達で何とかするしかないかな？」

「いや、フェイト…解決方法なら一応あるぞ」

前に話したの忘れたか？

「えっ!?ホント?キョウスケ?」

「…もっとも予定していた計画は、あのボケ提督やバカネコ姉妹のせいで邪魔されたけどね」

「そ、そうなんだ…」

そうなんだよまったく、はた迷惑な…ん?

「なのは…どうした?」

なのはが闇の書の方を見ているが…?

「あっキョウスケ君…ううん、大丈夫だよ」

ならいいけど…

「…スレイプニール、羽ばたいて」

《Ｓｌｅｉｐｎｉｒ》

―バサッ!

闇の書は４枚の漆黒の羽根を羽ばたかせ空に舞った

―バサッ、ビュュゥ…

「キョウ君!闇の書が来るよ!」

「キョウスケ君、どうしたらいいの？」

「…とりあえず、闇の書を取り押さえないと…みんな！手伝ってくれ！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―バチィ！バチィィ！！

闇の書とフェイトは上空で激突していた

「ハッ！」

―ジャラジャラ！

ユーノはその隙を付いて闇の書の足元にバインドを掛ける

「ふん！」

―シュルシュル、ガチィ！

アルフもバインドで闇の書の右腕を封じ、

「風よ！戒めの鎖となれ！ウインデイ！《風》」

―キィィン！
―ゴォォォッ！
さらにさくらもウインデイで闇の書を捕まえた…が、
「…砕け」
《Ｂｒｅａｋ　ｕｐ》
―バチィ！
一瞬にして3人のバインドを破壊してしまった
「ちっ、フェイト！なのは！同時攻撃だ！！」
「「うん！！」」
《Ｐｌａｓｍａ　ｓｍａｓｈｅｒ》
―シュウウウバチバチッ！
「ファイヤ！」
―ドォォン！
《Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ　ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ》
―シュウウウ…

「シューーート！」

―ドォォォン！

一瞬のスキに上からフェイト、下からなのはが同時に砲撃を放った

「インフィニティ！２ｎｄモード！コズミックブラスター！！」

―ドカァァァン！

僕は正面から、合計３方向からの砲撃が闇の書を狙う…が、

「…盾」

《Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ》

―バキィィ！

闇の書は３人分の砲撃を受け止めた

「くうっ…！」

「くぅぅ！」

「ちっ！カートリッ…」

さらに僕はカートリッジをロードしようとすると…

「…刃持て血に染めよ…」

《Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ》

「あっ！？」

なのはも闇の書が防御しながら魔法詠唱しているのに気付いた…

「てか、その体制からかよ！？マテリアセット【バリア】＋【ぜんたいか】！【マバリア】！！」

―キィィィン！

とっさに【マバリア】をなのはやフェイトにも展開！

…

「穿て、ブラッディダガー」

闇の書の周りに紅く光る無数の魔力刃が

―キィィン

―ドカァァン！

一瞬にして魔力刃は僕やなのは、フェイトを襲った

「なのは！フェイト！大丈夫か！？」

「くっ！な、なんとか…」

「くぅ…！だ、大丈夫…」

爆煙からフェイトとなのはは現れた
…ったく、なんか原作より威力強くなってないか！？

「キョウ君！大丈夫！？」

さくらが心配そうにこちらに駆け付けてくれた

「さくら…とりあえず大丈夫だ。だが、このままじゃジリ貧だな…
何とか近づいて魔力を…」

と、さくらと話していると…

「咎人たちよ　滅びの光を」

―キィィン

闇の書が手を掲げると【桃色のミッド式魔法陣】が展開された

「おいおい…」

「キ、キョウ君…あれって確か…」

―キィィィィン

魔力の粒子がその手に集中していく

「まさか！」

「あれは！？」

アルフとユーノもソレに気付き驚愕した

「…星よ集え　全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライトブレイカー…？」

なのはがつぶやく

さすがになのは自身の魔法だからそりゃ気付くか～

―シュゥゥゥ…

さらに闇の書に魔力が集まる

「キョウスケ！さくら！アルフ！ユーノ！」

「ああ！」

「う、うん！」

「うん」

「あいよ！」

フェイトの掛け声で僕とさくらはなのは達と、ユーノとアルフは別方向へ速攻で離脱していった

「…貫け　閃光」

闇の書の詠唱はさらに続いた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

アルフ、ユーノＳｉｄｅ

アルフはユーノを担いで高速飛行で距離を取っていた

「なのはの魔法を使うなんて」

「なのはは一度蒐集されてる　その時にコピーされたんだ」

そして二人はさらにスピードをあげ闇の書から離れていった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

僕は、なのは・フェイト・さくらと共に超特急で離脱中です

「ちょ！？フェイトちゃん、こんなに離れなくても…」

なのははやや抗議気味にフェイトに詰め寄っていた

…コイツ、自分の魔法の非常識さに気付いてないんかい！？

「至近であんなの食らったら防御の上からでも落とされるっ！回避距離を取らなきゃ！」

さすが体験者…無印版でよくフェイト無事だったと今でも思うよ

「なのは、自分の魔法の破壊力くらい把握しとけよ！…非殺傷でも致命傷レベルのダメージ食らうって何処のバグ技だよ！…ったく、その威力…ホントに【アクまた】かもな！」

「…そんなに凄い魔法なんだ…でもキョウ君、【アクまた】って何？」

「ん？どこかの魔導士の名称にならって僕が命名した【悪魔すら恐ろしくてまたいで通る】って意味での二つ名」

「あ～…それ納得かも…」

フェイトはそれを聞いてどこか納得した顔をしていた

あ、でもさくらがドン引きしてるよ…

「ちょっと～！キョウスケ君もフェイトちゃんもヒドイよ～！？」

なのははかなり抗議の雄叫びを叫んでいたが…

「いや酷くないぞ？あんな非常識な魔法組んだ大元なんだし」

そりゃツッコミたくなるよな～

「ううっ～…」

なのはは若干涙目だった

あ、いや…決してSではないから

事実を述べたダケダヨ？

『あれですかマスター？好きなコ程いじめたくなるって…』

―ミシミシッ！

「あ～急に握力計りたくなったな～」

『す、すみませんマスター！

ヒ、ヒビが！？ホントマジすみませんっ！許して下さいっ！！』

口は災いの元だよ？

キィィィ…

ふと後方を見ると、さらに闇の書は魔力を集めていた

てかどんだけ魔力集束する気なんだ！？

「みんな！飛行速度上げるぞ！」

「「「うん！」」」

―ビュュュン！

さらにスピードアップして闇の書との距離をとっていると…

《Ｓｉｒ　ｔｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｎｏｎｃｏｍｂａｔａｎｔｓ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｌｅｆｔ　ａｔ　ｔｈｒｅｅ　ｈｕｎｄｒｅｄ　ｙａｒｄｓ》

〈左方向３００ヤード、一般市民がいます〉

「「えっ！？」」

バルディッシュの言葉になのはとフェイトは驚いた

一般市民？

……あ”っ

…あの二人…忘れてた……

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

To Be continued

なのは達もバレた！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

アリサ、すずかＳｉｄｅ

道路に一人佇むすずか

「はー…っ」

結界内に閉じ込められ、辺りの様子に呆然としていると…

―タッタッタ

「やっぱり誰もいないよ！　急に人が居なくなっちゃった…」

辺りの様子を見てきたアリサがすずかの元に駆け寄って来た

「……」

「辺りは暗くなるし、何か光ってるし…一体何が起きてるの！？」

「うーん…」

困惑するすずか

「とりあえず逃げよう！なるべく遠くへ！」

「う、うん…」

―ガシッ！

そう言い、二人は手を取り合い走り出した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

―キィィィ…

さらに闇の書のチャージは続いていく…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―ビュュュュ

≪Ｄｉｓｔａｎｃｅ：Ｓｅｖｅｎｔｙ　ｓｉｘｔｙ　ｆｉｆｔｙ．．．≫

バルディッシュが民間人…まぁアリサとすずかなんだけど、二人の所まで誘導してくれている

「キョウスケ、なのは、さくら…この辺」

「うん」

なのははそう頷くと一気に急降下…って急降下ぁ!?

「くううっ…!」

―ヒュゥゥ…ズザァァァ!!

なのはは空から降下、スライディングし煙りを撒き散らしながら派手に着地した

…この頃から結構ムチャするんだ…

―ヒュゥゥ、タッ!

フェイトは信号機の上に着地

まぁ、なのはに比べたら穏便だ…日常で信号機に乗ったらアウトだな…

僕とさくらは上空で待機しているよ?

上からの方が見渡せるし~

《Ｔｗｅｎｔｙ　ｅｉｇｈｅｅｎ》

「えっ！？う～ん…（キョウスケ、すぐ近くに居るみたいなんだけど…そっちからはどうかな？）」

どうやらこちらに近付いているようだな…てか、

「（なのは！…煙り撒き散らすなよ！視界が悪くて見えん！）」

念話でなのはにツッコミを入れた

「（ふえぇぇ！？こ、これは…その、緊急事態だったし…）」

「（まあいい、とりあえず視認でアリ…一般市民を探すぞ）」

「（う、うん！）」

…危なくネタばれする所だった～

たしか、原作だとあそこからアリサ達が出てくる…ん？気配が…

―コツ、コツ…

なのはは煙の中歩きながら辺りを見回し、そして…

―タッタッタッ

路地から出て来る人影を発見…あ～やっぱあの二人か～

「あっ！あの、すみません！危ないですからそこでジッとしてて下さい」

なのはは走っている二人に話しかけた

「えっ？」

「今の声って？」

アリサとすずかがその声に気付き振り返ると煙りは晴れ…

「なのは？」

「フェイトちゃん？」

バリアジャケットを纏ったなのは達を見つけて、アリサとすずかは驚いた

…なのははともかくフェイトは一般人からみたらコスプレだからな～…違う意味で驚いてたり…まさか、ね

「あ…」

ちなみに、なのはとフェイトもアリサ達の姿を見て驚いていたん？僕はバレてないのか？

ほら、今認識阻害メガネかけてないから【スコールＶｅｒ】なんですよ～

この姿で会った事ないからバレてませんよ～

…ん？たしかこのタイミングって…ヤバッ！闇の書の…

―シュゥゥゥ…

「スターライトブレイカー…」

―ドゴォォォォン！！！

なのは達が出会ったと同時に、闇の書のスターライトブレイカーが６人に放たれた…

「あっ！？」

「「ああ！？」」

アリサとすずかは迫ってくる光に驚いていた

―ゴォォォォ！

「（フェイトちゃん、アリサちゃん達を）」

「（うん！）」

―カチャドキュ！

フェイトはカートリッジを一発ロード

「二人とも、そこでジッとして！」

フェイトに言われ二人は抱き合うように佇んだ

《Ｄｅｆｅｎｓｅｒ　ｐｌｕｓ》

―キィィィン

アリサとすずかを包むようにバリアが貼られた

―タッ

「ふっ！」

―キィィィン

フェイトは二人の前に着地し守るように自身の前に障壁を展開

「さくら！シールドを二人に！！」

「うん！、盾よ！彼の者達を守りたまえ！シールド！《盾》」

―キィィン！

―ブォン！

フェイトが張った結界の前にさくらのシールドが現れた

「レイジングハート！」

―ドキュドキュ！

なのはもカートリッジを2発ロード

《Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

―キィィィン

「んっ！」

なのははフェイトの前でプロテクションを展開した

「ファイヤーウォール５重展開！！」

―ヴォォン！

さらになのはのプロテクションの前に僕のファイヤーウォールを５重に展開…原作より強固な防御になったが…

―ドゴォォォォ！バチィバチ！

そしてスターライトブレイカーが僕たちを飲み込んだ

「くっ！？なんて魔力嵐だ！！」

さすが基が魔王様の魔法だな…

「（…キョウスケ君、今何か失礼な事考えてない？）」

念話でなのはが話しかけてきた…余裕あるな、なのはさん…

「（…いや、それより気を抜くなよ。アリサ達が後ろに居るんだからな）」

「（わ、分かってるよ～）」

ま、こんだけ防御固めれば大丈夫とは思うがね

「（なのは、なのは大丈夫!?）」

「（フェイト!?）」

ん?ユーノのアルフからの念話か?

「（んっ!、大丈夫ではあるんだけど…）」

「（アリサとすずかが、結界内に取り残されてるんだ）」

「（なんだって!?）」

「（くっ!エイミィさん!）」

――アースラ――

―ピピ、ピピッピッピッ!

素早い動きでコンソールを打ち込むエイミィ

「余波が収まり次第すぐ非難させるっ!　何とか堪えて!」

「「（ハイッ!）」」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

To Be continued

安請け合いは罪なのか？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――交差点――――

キョウスケＳｉｄｅ

ようやく砲撃が収まり…

「「うう…っ…」」

アリサとすずかは、二人抱き合いながらしゃがみ込んでいた…

そりゃ一般市民がいきなりアレな砲撃に襲われたからな～　怖がって当然だな

「もう大丈夫…」

「すぐ安全な場所に運んで貰うから、もう少しジッとしててね」

フェイトとなのはが二人に話しかけた

「あの…なのはちゃん？、フェイトちゃん？」

「ねぇ！ちょっと…」

二人がなのは達に話しかけようとすると…

―キィィィン

二人の足元に転送魔法陣が展開され

「あっ！？」

「ああっ！？ああ…」

―シュン！

そして二人は転送された

「…見られちゃったね」

「うん…」

「…二人とも、後でアリサ達にちゃんと話さないとな」

「うん、そうだね…って！キョウスケ君もだよ！？」

何を言うのか？なのはさん

「いや、僕はこの姿でアリサ達に会った事ないからバレてないよ？」

「うう～っ…なんかズルい～っ！」

「キ、キョウスケ、私達もバレちゃったんだし…その、ね？」

ね？　って言われても…ねぇ？

「あ、だったら記憶消す魔法あるけど…使う？なのはちゃん？フェイトちゃん？」

あ～…さくらの言っている魔法は…たしかイレイズ《消》だったかな？

「…なんか、そーゆーのはちょっと…」

「うん、なんか人の記憶を勝手にいじくるってのは…抵抗あるかな」

「だそうだ、さくら…ハァ　仕方ない、話す時は僕も付き合うよ」

アリサやすずか達には、いずれ話す事になったと思うから別に問題ないし

「ホント！？」

「ありがとう！キョウスケ！」

―ギュッ！

いや、お礼言われる程でもないんだけどさ…

「二人とも…なぜ抱き着く？」

「「抱き着きたいからだよ♪」」

うわっ、ストレートですね～

「…なのはちゃん、フェイトちゃん…今はそんな事してる場合じゃないよ？」

な、なんかさくらが怒っているような…

「べ、別に怒ってないもん！」

いや…怒ってるぢゃん…

「…とりあえず、離れよっか…二人とも」

二人は残念そうな顔で離れてくれた

「なのは、フェイト　アリサ達の事をアルフ達に…」

「うん（ユーノ君、ごめん　二人の方を守ってあげてくれるかな？）」

「（アルフもお願い）」

僕の意図が分かった二人は、念話でユーノとアルフに二人の護衛を頼んだ

…また二人のいる方にスターライトなんぞぶち込まれたら…

「（でもフェイトぉ）」

それでも食い下がるアルフ…ったく

「（ご主人達なら僕が守るから大丈夫だよアルフ）」

「（キ、キョウスケ！？…そうだね、アンタにならフェイトを任しても大丈夫だね）」

「（…スクライアもそれでいいな？…大丈夫だ、なのは達は必ず守るよ）」

「（……ああ）行こうアルフ」

…なんか言葉にトゲがあるよな～…淫獣って言った事で根に持ってる？

「あ、ああ…（キョウスケ、二人を頼んだよ）」

―ヒュン！

後にアルフから聞いた話しだと、この時のユーノの顔が恐ろしかったと語っていたが…だから別に変な事は言ってないよな？

『（…なのは嬢がマスターの事ばかり見ているから嫉妬してるって気付かないのでしょうかね～…ドロドロな多重関係は面白いからいいですが）』

…なんか変な電波が？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「さて、これで二人の安全は確保されたが…どうした?なのは?フェイト?」

そう、アルフ達との念話が終わってなのは達を見ると…

「「……／／」」

二人とも顔が真っ赤になって頭から煙りが…?

「さくら、二人はどうしたん…」

訳を聞こうとさくらの方を見ると…

「む～～～～っ!」

頬を膨らませたさくらが現れた!

…なんとなく逃げてみるか?

「キョウ君!わ、私も守ってくれるよね!?」

なんか凄い勢いで迫って来たさくら…てか顔近っ!?

「あ、ああ…勿論さくらも僕が守るよ」

「あ、ありがとう…キョウ君／／／」

さくらもなのは達同様に顔が真っ赤になって…

…訂正

なのは達から急に黒い覇気が！？

「「キョウスケ（君）…なんでそう節操なく他の女の子に優しくするかな…？」」

―カチャ！

「ち、ちょ待て！？何故に二人してデバイスをこっちに向ける！？」

「それは…」

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆する為だよ…キョウスケ君」

「い、いや…今はそれより闇の書を…」

「「問答無用！！」」

ヤバイ…二人とも目がマジだ…

何とか切り抜けないと…

「（なのはちゃん、フェイトちゃん　クロノ君から連絡！闇の書の主に…はやてちゃんに投降と停止を呼び掛けてって」」

あ、エイミィさんからの通信？…！

「ほ、ほら！エイミィさんもああ言ってるんだし！」

何とかなのは達を説得！

「…うん」

「そうだね…」

助かった…エイミィさんが女神に見えるよ

「じゃあＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆は後でしようねっ♪キョウスケ君！」

結局するんかい…

「（なのはちゃん？フェイトちゃん？どうかしたの？）」

「（あ、いえ分かりました
…はやてちゃん、それに闇の書さん…止まって下さい！ヴィータちゃんを傷つけたの私達じゃないんです！）」

「（シグナム達と私達は…）」

二人は闇の書の管理人格を説得してるが…無理だろうな～

「我が主は、この世界が自分の愛する者達を奪った世界が悪い夢であってほしいと願った…我はただ…それを叶えるのみ　主には穏やかな夢の内で永久（とわ）の眠りを…そして、愛する騎士達を奪った者には…永久（とわ）の闇を！」

―キィィン

闇の書が手を掲げ、足元に魔法陣が現れた

「闇の書さん！！」

なのは…その名前は逆効果だ…

「…お前もその名で私を呼ぶのだな…」

闇の書は悲しみの表情で呟いた…

「あっ…」

―ゴォォ…ドカァァァ！

突如、道路の下から蒐集した魔法生物の触手などが現れなのはやフェイトを絡め捕った

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

消失する金色

前回までのあらすじ…

「闇の書さん！！」

なのはが真名ではなく、呪われた名で呼んで管理人格の地雷を踏んだ…

「…お前もその名で私を呼ぶのだな…」

結果…

―ゴォォ…ドカァァァ！

突如、道路の下から蒐集した魔法生物の触手などが現れなのはやフェイトを絡め捕った…

「あっ！あぁっ！」

「くっ！あああ！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

僕とさくらは何とかツタは回避できたが、地面から伸び出た甲殻獣の首？に襲われてなのは達と分断されていた

「なのは！フェイト！」

二人を助けに行こうとするが…

「■■■■■■ッ！」

―ズカァァ！

「きゃあ！」

「ッ！さくら！？大丈夫か！？」

「う、うん…なんとか」

くっ！なんて数だ！？

原作でもこんな数いなかったぞ！？

「ジャマだ！インフィニティ１ｓｔモード！」

『１ｓｔモードルシファーＳｅｔ　Ｕｐ！』

―キィィン！

「マテリア【いかずち】＋【ぞくせい】セット！【サンダガ】」

―ズカァァァ！

さらに僕は、サンダガを剣に掛け…

「さくら！雷を！」

「うん！…雷よ！彼の者の力となれ！サンダー！《雷》」

―ズカァァン！

さくらの雷も僕の剣に宿り…

―バチ！バチバチッ！！

剣に宿ったサンダガと《雷》が激しく放電した

「カートリッジロード！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！ドキュ！

さらにカートリッジを2発ロード

「いくぞ…！崩魔…雷刃！！」

僕は剣を突き出し…

―タッ！

「【ブロー・ガ・ルーン】！！！」

甲殻獣の群れに突撃

―ドカドガァァ！ドカァァン！！

甲殻獣を猛スピードで次々と貫通していった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「…ハッ！！ま、まってよキョウ君～！

フライ！《翔》」

―キィィン！

―バサッ！

…あ、さくらの事…忘れてた
大丈夫…だよね？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのは・フェイトＶＳ闇の書Ｓｉｄｅ

「…お前もその名で私を呼ぶのだな…
それでもいい…」

―ギュッ！

なのはとフェイトに絡み付くツタは二人を締め付けた

「くっ…くぅ…！」

「ああ…！」

「私は、主の願いを叶えるだけだ…」

「願いを叶えるだけ？そんな願いを叶えて、それではやてちゃんはホントに喜ぶの！？
心を閉ざして何も考えずに、主の願いを叶える為の道具でいて…貴女はそれでいいの！？」

「…我は魔導書、ただの道具だ」

「だけど…言葉を使えるでしょ！？心があるでしょ！？そうでなきゃおかしいよ…
ホントに心がないんなら…泣いたりなんかしないよ！！」

そう言われ、闇の書は頬を伝う涙に触れた…

「この涙は主の涙…私は道具だ　悲しみなどない…」

「ッ！…バリアジャケットパージ！！」

《Ｓｏｎｉｃ　ｆｏｒｍ》

―ガチャ！ドキュ！
―バシィィィ！

フェイトはバリアジャケットパージの余波で締め付けたツタを吹き飛ばしなのはと共に脱出した

「くっ…」

「…悲しみなどない？　そんな言葉をそんな悲しい顔で言ったって…誰が信じるもんか！！」

「貴女にも心があるんだよ！？悲しいって言っていいんだよ！？貴女のマスターは、はやてちゃんはきっとそれに応えてくれる優しい子だよ！？」

「だからはやてを解放して！武装を解いて！お願い！」

フェイトとなのはは闇の書に呼び掛けるが…

「……」

闇の書は沈黙したままだった

―ドカァァァ！！

「な、何！？」

「なのは！何か後ろから向かってくる！？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

―タッ！

「なのは！フェイト！大丈夫か！？」

「キョウスケ君！！…おどかさないでよ～！」

「キョウスケ…うん、こっちは大丈夫…。な、なんか後ろが凄い事になってるね…」

後ろ?…ああ、【ブロー・ガ・ルーン】で突破攻撃したから甲殻獣の残骸が散乱してるだけぢゃん!

「「だけぢゃん…って…」」

なんか二人が呆れ顔しているが、二人はとりあえず無事か…後は

「闇の…いや、夜天の魔導書…」

「…あの包囲網を突破するとは…さすがだなキョウスケ…」

「…そりゃどうも」

やっぱりなのは達と分断されたのは意図的にか…

―バサッ!

「ハァ、ハァ…キ、キョウ君!置いてくなんてひどいよ!!」

「あ~さくら…ゴメンゴメン　でも障害はなかったでしょ?」

殆どブロー・ガ・ルーンの雷の放電の余波で吹き飛んでたからな~

「それでもだよ!!む~~~!」

さくら…ご機嫌斜めだな~

「ゴメンさくら、埋め合わせに今度何か奢るからさ」

「ホント!?絶対だよキョウ君!!」

速攻で機嫌が治ったよ…女の子ってゲンキンだなぁ…

―ジィィィ…

「「……」」

な、なにか凄い勢いで二人分の視線で射抜かれているんですが!?

「ど、どうした?二人とも?」

視線の先に居る二人…なのはとフェイトに恐る恐る聞いていると…

「さ、さくらちゃんばっかりズルーイ!!」

「そ、そうだよ!キョウスケ!!私達にも何か…その…」

二人が（なのはは特に）騒いでいるな～

「わ、分かったよ、二人にも何か奢るよ…この件が片付いたらね」

「「約束だよ!キョウスケ（君）!!（ニコッ）」」

えらく素敵な笑顔で二人は嬉しそうに笑った

―ゴゴゴゴゴ…

突如地響きがし…

―ドォォン！ドォォン！ドォォン！ドォォン！

あちこちの地面から火柱が噴き出た

「…早いな、もう崩壊が始まったか…私もじき意識を無くす…そうなればすぐに暴走が始まる　意識のある内に、主の望みを叶えたい…」

《Ｂｌｕｔｉｇｅｒ　Ｄｏｌｃｈ》

―キィィィン

闇の書が手を掲げると

―キィン！

「はっ！？」

―キィン！

「ああっ！？」

―キィン！キィン！

「囲まれたか？」

「きゃ！？」

なのはとフェイト、僕とさくらの周りを囲むようにブラッティダガ

ーが囲んだ

「闇に…沈め」

―キィィィ…

ダガーが紅く光はじめ…

―ドゴォォォン！

二人を囲んだダガーが爆発した

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「……ッ？」

爆煙がはれ、その中から出てきたのは…

「あ～ヤバかった～」

「あ、ありがとうキョウ君…でもこの体制は…はずかしいかな／／」

瞬動で爆発の瞬間にさくらを脇に抱えて脱出した僕と

「ありがとうフェイトちゃん」

「大丈夫？なのは？」

なのはを抱いたフェイト…フェイトはソニックフォームのスピードで爆発を回避しなのはを助けたようだ

フェイトは闇の書の方を向き

「このッ…駄々っ子！！」

《Ｓｏｎｉｃ　ｄｒｉｖｅ…》

「言う事を…」

《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

―タッ！

「聞けーー！！」

そのままフェイトは闇の書に突撃していった

「まて！フェイトッ！」

僕はフェイトを制止したが…遅かった！

「…お前も我が内で、眠るといい」

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

―ガチン！

しかしフェイトの一撃は闇の書の防御壁に阻まれ…そして、

「あっ…！？」

―キィィィィ…

フェイトの身体が金色に輝き、

「あ……」

フェイトは力無く落下していきながら…

「！？フェイトちゃん！！」

「フェイト！！」

「フェイトちゃん！」

―キィン！！

弾けるように消えてしまった…

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ》

〈吸収〉

―バァン！

「すべては、安らかな眠りの内に…」

「ああ…」

「…フェイトちゃんが…消えちゃった…」

To Be continued

闇の中の虚像

前回のあらすじ…

フェイトが闇の書に飲み込まれました…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「あ…ああ…」

「なのは！しっかりしろ！」

「…！！キ、キョウスケ君…」

僕の声で呆けていたなのはがすぐに我に帰った

「フェイトはまだ無事だ！…そうでしょ？エイミィさん」

どうせこちらをモニターしてる筈だしな～

〔状況確認！…フェイトちゃんのバイタル、まだ健在！闇の書の内部空間に閉じ込められただけ。助ける方法…現在検討中！…ってホントにキミ、あのキョウスケ君なんだね〕

「まぁ、そうですね。…それにしても闇の書の内部空間か…」

「我が主も、あの子も覚めることない眠りの内に終わりなき夢を見る…生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

「…永遠なんてないよ…みんな変わってく…変わっていかなきゃいけないんだ。　私も…貴女も！！」

なのははレイジングハートを強く握り構えた

あ、ゴメンなのは。僕一応不死身なんだよね～…ある意味永遠？…ま、まぁ冗談はこの位にして

「なのは、ここじゃ万が一にも被害が大きくなる…海上まで押し出すぞ！さくらもいいか？」

「「うん！」」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

フェイトSide

―チュン、チュンチュン

「……んっ」

小鳥のさえずる声でフェイトは目を覚ました

―ガサッ

フェイトは何故かベットで寝ていた
ベットから起きて隣を見るとそこには…

「すぅ…すぅ…」

子犬モードのアルフと、フェイトと同じ金髪の少女が寝息をたて眠っていた

「えっ!?」

その少女は本来なら居ないはずの少女…

「ここは…?」

辺りを見回し、フェイトが見覚えのない部屋で戸惑っていると…

―コンコン

「フェイト、アリシア、アルフ　朝ですよ」

「まさか…」

フェイトが聞き覚えのあるその声の主…母、プレシアの使い魔で、既に消えてしまった筈の人物に驚いていると…

―ゴソッ

隣で少女が目を覚まし

「ん…んん　おはよ、フェイト」

「あ…」

フェイトは目覚めた少女…過去の事故で命の灯を消したアリシア見て呆然とした

―ガチャ

「みんなちゃんと起きてますか？」

「は～い」

「ん～っ眠い～」

部屋に入って来た女性…リニスにアリシア・アルフは返事をした

「二人ともまた夜更かししてたんでしょ？」

「ちょっとだけだよ～」

「ね～」

「早寝早起きのフェイトを見習ってほしいですね～アリシアはお姉さんなんですから」

「ぶ～～～っ！」

「ふふっ」

三人の会話を呆然と聞いていたフェイトだったが、

「あの…リニス？」

「はい、なんですか？フェイト」

そしてフェイトはアリシアの方を向き

「…アリシア？」

「ん？」

確認するように二人の名を呟いた

「ふぅ　前言を撤回します　今朝はフェイトも寝ぼけ屋さんのようです」

「フフフッ」

「さっ着替えて　朝ご飯です　プレシアはもう食堂ですよ」

「ッ！？」

フェイトは驚愕した

「かあさん…」

ＰＴ事件…虚数空間に落ちて消えてしまったその母の名を聞いて…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「母様おはよう～」

「おはよう～プレシア」

「アリシア、アルフおはよう」

「プレシア、今日は困りましたよ　今日は嵐か雪になるかもしれません」

「ん？」

「ホラ、フェイト」

リニスに呼ばれたフェイトは柱の物影から戸惑いながら出てきた

「あ……」

「フェイト、どうしたの？」

「どうも何か怖い夢でも見たらしくて、今は夢か幻だと思ってるみたいですよ？」

「フェイト、勉強のし過ぎとか？」

「有り得る！」

アリシアとアルフは冗談気味で話しあっていた

「フェイトいらっしゃい」

「あ……」

優しく微笑む母プレシアに呼ばれフェイトは顔を俯きながら側に寄った

―スッ

プレシアはフェイトの頬を両手で触れると

「…はっ！？」

フェイトは目を見開くほど驚いてしまい一歩下がってしまった

「怖い夢を見たのね？でも、もう大丈夫よ　母さんもリニスもアリシアもみんなあなたの側にいるわ」

「プレシア～私も～」

「そう、アルフもね」

「まぁ、朝食を食べ終わる頃には悪い夢も覚めるでしょう」

「さぁ席について頂きましょ」

「は～～～い」

（違う…これは夢だ　母さんは私にこんな風に笑いかけてくれた事は一度もなかった　アリシアもリニスも今はもういない…でもこれは…

私がずっと…欲しかった時間だ
母さんが居て…アリシアが居て…リニスやアルフと一緒に笑って過ごす。
何度も…何度も夢に見た時間だ…）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「…眠い…眠い…ん？」

はやては目の前に居る銀髪の女性に気付く

「そのままお休みを…我が主　貴女の望みは全て私が叶えます…目を閉じて、心静かに夢を見て下さい…」

その言葉に促され、はやては眠りの海に落ちかけていた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――海上――

キョウスケＳｉｄｅ

「ふんっ！」

―キィン！

なのはは障壁を張り

―ドカァァン！バチバチバチッ！

闇の書の攻撃を防いでいた…が

―パリィィィン！

「あっ！？」

障壁は破られ

《Ｓｃｈｗａｒｚｅ　Ｗｉｒｋｕｎｇ》

―ドカァァン！

「きゃあああ！」

―バシャァァァ！

なのはは海に落とされてしまった

「ッ！？さくら！なのはのフォローを！」

「うん！」

―バサッ！

海中に落ちたなのははさくらに任せて…気になる事が…

「…なぜ、なのはにだけ攻撃する？」

「……」

そう、闇の書はなぜかなのはにだけ攻撃対象にしている

「…キョウスケ、貴方の事は騎士達を通して見ていた…特に紅の鉄騎は貴方に深い愛情を持っていた…

私は、主や騎士達が愛した貴方とは戦いたくない…それに…」

海面を見ていた闇の書

―バシャァァン！

「大丈夫!?なのはちゃん？」

「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…う、うん　ありがとう　さくらちゃん」

なのはは息を切らしながら浮上してきた

「（リンディさんエイミィさん、戦闘位置を海の付近に移しました

市街地の火災をお願いします）」

〔大丈夫、今災害担当の局員が向かっているわ〕

「（それから闇の書さんは駄々っ子ですが何とか話しは通じそうで

す　もう少しやらせて下さい）
いくよレイジングハート！！」

《Ｙｅｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

「…それに…あの者は…主の心を脅かす者…」

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

安全確認はしてくれ～！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

（私は…何を望んでたんやっけ？）

「夢を見る事…悲しい現実は夢となる安らかな眠りを…」

（そう…なんか？
私の…ホントの望みは…）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケ、なのはＳｉｄｅ

―ガチャ、ドキュ！

《Ｒｅｌｏａｄ》

なのははレイジングハートにマガジンを差し込んでる

「…マガジン残り三本　カートリッジ１８発…キョウスケ君とさくらちゃんは？」

「ん？あ～…そーいやインフィニティ、カートリッジの弾丸ってどうなんだ？」

『今更ですか？…カートリッジは自動精製されますから…実質無限です』

うわ～今更だけど僕らってチートだよな～

「私は魔法形体が基本的に違うからカートリッジシステムはないんだよ」

まぁ、本々ユニゾンデバイスだからな～さくらは

「…なんかズルイよキョウスケ君…

…う～ん、スターライトブレイカー撃てるチャンスあるかな？」

《Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｍｅｔｈｏｄ》

〈手段はあります〉

「えっ！？」

《Ｃａｌｌ　ｍｅ　Ｅｘｅｌｉｏｎ　ｍｏｄｅ》

「ッ！ダメだよ！あれは本体の補強するまで使っちゃダメだって私がコントロールに失敗したらレイジングハート壊れちゃうンだよ！」

《Ｃｏａｌ　ｍｅ》

「…ッ」

《Ｃｏａｌ　ｍｅ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

「…なのは、使ってやれ」

「えっ！？」

「レイジングハートはお前を信じてるんだ、だからマスターであるお前もレイジングハートを信じてやれ」

「キョウスケ君…」

「そうだろレイジングハート？」

《Ｙｅｓ》

「…レイジングハート…うん！分かった！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…お前は、もう眠れ」

「いつかは眠るよ　だけどそれは今じゃない　今は、はやてちゃんとフェイトちゃんを助ける
…それから貴女も！」

―ドキュ！ガチャ

なのははレイジングハートのカートリッジを一発ロード

「レイジングハート！エクセリオンモード、ドラァーイブ！！」

《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

―キィィン

―ガキッ！ガチャ、ガチャ！

レイジングハートはその姿を変えた

「さくら！ユニゾンいくぞ！」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！！」」

―キィィン！

僕とさくらはユニゾンし、

「ふぇ！？キョウスケ君…何か雰囲気変わった！？」

「ん?ああ、ユニゾンすると見た目の色彩変わるんだよ」

「へ〜、そうなんだ〜」

「ま、詳しい説明は後でお茶でもしながらするよ…いくぞ!なのは」

―カチャ

僕はルシファーを構える

「うん!繰り返される悲しみも、悪い夢もきっと終わらせる!」

―スッ

闇の書が手を掲げ魔法陣が現れる

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　ｇｅｎｏｃｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ》

―バチバチバチ!

闇の書の周りに無数の魔力弾が現れた

「ってフェイトの魔法かよ!?」

「（フェイトちゃんも蒐集されちゃったんだよね?）」

まぁ、なのはのスターライトぶっ放したんだからフェイトの魔法使えて当然か

「…ッ！」

―キィィン！

なのはの足元にも魔法陣が現れレイジングハートを構えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

フェイトＳｉｄｅ

フェイトとアリシアは草原で一緒にいた…が、

―ゴロゴロゴロ

空が曇りカミナリが鳴り響いた

「あれ？雨になりそうだね　フェイト帰ろう…フェイトってば！」

「…ごめんアリシア、私はもう少しここに居る」

「そうなの？じゃあ私も、一緒に雨宿り♪」

―ザァァァ

アリシアがフェイトの傍らに座ると同時に雨が降ってきた

「…ねぇアリシア、これは夢、なんだよね？」

「……」

「私と貴女は、同じ世界には居ない…貴女が生きていたら私は生まれなかった…」

「…そう、だね」

「母さんも私にはあんなに優しくは…」

「…優しい人だったんだよ　優しかったから壊れたんだ…死んじゃった私を生き返らせる為に」

「…うん」

「ねぇフェイト、夢でもいいじゃない　ここに居よう　ずっと一緒に　私ここでなら生きていられる　フェイトのお姉さんでいられる　母さんとアルフとリニスと皆と一緒に居られるんだよ？」

「……」

「フェイトが欲しかった幸せみんなあげるよ？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「私が、欲しかった幸せ？」

「健康な身体　愛する者達とのずっと続いてゆく暮らし
…眠って下さい　そうすれば夢の中で貴女はずっとそんな世界に居られます…」

しかしはやては首を横に振った

「せやけど…それはただの夢や！」

はやては強い意思の瞳で答えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケ、なのはＳｉｄｅ

―ガチィ！バキィ！バキィ！ガキィィン！

「うわぁぁぁ！」

なのはは闇の書の攻撃で吹き飛ばされた

《Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ　ｇｅｎｏｃｉｄｅ　ｓｈｉｆｔ》

―バチバチバチ！

「…行け」

―スッ

闇の書が落下するなのはに向かって追撃

「なのはッ！くっ、インフィニティ！フェアリーを！！」

『フェアリースフィア展開！ターゲットロック！』

「さくら！フェアリーのコントロール頼む！」

「（うん！）」

―ヒュンヒュン！

「ショット！（いけー！）」

―ドカドカドカァァァ…

フェアリースフィアの放つ魔力弾で闇の書の放ったプラズマランサーを迎撃、辺りは爆煙に包まれた

「なのはは!?」

「…くっ!」

―カチャ!

なのははなんとか踏ん張り、レイジングハートを構えた

「（キョウスケ君!闇の書さんに同時攻撃いくよ!）」

「（ああ、わかった）」

「一つ覚えの砲撃…通ると思ってか?」

「通す!レイジングハートが力をくれてる!!命と心を賭けて答えてくれてる!!」

―ドキュ!ドキュ!

カートリッジを2発ロード

「泣いてる子を救ってあげてって!」

《A.C.S. standby》

―キィィン

「インフィニティ！さくら！ブロー・ガ・ルーン、シーケンス！」

『Ｂ．Ｇ．Ｒ．　ｓｔａｎｄｂｙ』

「（雷よ！《ＴＨＥ　ＴＨＵＮＤＥＲ》）」

―バチ！バチバチッ！！

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム！」

《Ｏｐｅｎ》

―ジャキ！

レイジングハートの先に光の刃が現れる

「エクセリオンバスターＡ．Ｃ．Ｓ．…ドライブ！！」

―ギィィィン！

「崩魔…雷刃っ！」

『刀身に余剰魔力強制集束！』

「（魔力集束１２０％！雷力はコントロールするから大丈夫だよキョウ君！）」

「（よし頼む！）…ブロー・ガ・ルーンッ！！」

―タッ！

―ドカドガァァ！ドカァァン！！

なのはと僕の攻撃は闇の書のシールドに突撃した！

―キィン！バキィィィン！！

闇の書がシールドを張ると同時になのはと僕が激突、お互い拮抗していた

―バキィィィィィィン！！

「届いて！！」

―ドキュドキュドキュドキュ

さらになのははそのままカートリッジを数発ロード

「クッ！撃ち貫く！」

―ドキュドキュドキュドキュ

僕もカートリッジを数発ロード！

―ピキピキッ！

貫通威力を増し闇の書のシールドに亀裂が入る…もうちょい！…すると

「ブレイク…」

―キィィン！

エクセリオンの桃色の翼が広がり…

「まさか！？」

闇の書が驚愕して…って

「ちょ！ま、まてなの…」

「シューーート」

―ドカァァァァン！！！

僕の声は掻き消え、なのはは近距離砲撃を放った…

―ガシャ、プシュュゥ…

レイジングハートは多数カートリッジを使用した為、排熱中

「ハァ…ハァ…（ほぼゼロ距離、バリアを抜いてのエクセリオンバスター直撃

これでダメなら…」

《Ｍａｓｔｅｒ！》

レイジングハートに呼ばれ上空を見上げると…

「……」

ほぼ無傷で佇む闇の書が居た

「…もう少し頑張らないとだね…」

《Ｙｅｓ》

「…ゲホッ…頑張るのはいいんだけどさ～…なのはぁ！！」

「キョウスケ君！？どうした…あ！！」

「…僕が隣にいたの忘れて撃ったろ！！？」

あんなゼロ距離砲撃ぶっ放す隣にいればこっちにもダメージくるのは必須…

「あっ……その……にゃはは～…ごめんなさい」

《Ｉｍ　ｖｅｒｙ　ｓｏｒｒｙ》

〈どうもすみません〉

ハァ…魔王ッ娘が…

To Be continued

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「私、こんなん望んでない！あなたも同じはずや！ちがうか？」

「私の心は騎士達の感情と深くリンクしています　だから騎士達と同じように私も貴女を愛おしく思います　…だからこそ貴女を殺してしまう自分自身が許せない…」

「……」

「自分ではどうにもできない力の暴走、貴女を侵食する事も暴走して貴女を食らいつくしてしまう事も止められない…」

「…覚醒の時に今までの事、少しは分かったんよ…
望むように生きられへん悲しさ…私にも少しは判る！シグナム達も同じや！ずっと悲しい思い、淋しい思いしてきた！」

「……」

「せやけど忘れたらあかん！」

―スッ

はやては車椅子から銀髪の女性の頬に手を伸ばし…

「あなたのマスターは今は私や　マスターの言う事は、ちゃんと聞かなあかん」

―キィィン

そして、はやての足元に強く輝く純白の魔法陣が現れた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

フェイトＳｉｄｅ

「…ごめんねアリシア…だけど私は行かなくちゃ…」

「そう…」

―スッ

そう言うとアリシアはフェイトに左手を差し出した

その手に握られていたのはフェイトの愛機…

「…！バルデッシュ…」

アリシアはフェイトにバルデッシュを渡すと、フェイトに抱き着いた
フェイトもアリシアの背に腕を回し優しく抱きしめた

「…ありがとう、ごめんねアリシア…」

「いいよ、私はフェイトのお姉さんだもん。待ってるんでしょ？優しくて強いコ達が…」

「うん…」

「…それにフェイトの彼氏さんもね」

―ボンッ！

「ア、アリシア！？
いや、その／／キョウスケとは…まだそんなんじゃ／／／」

フェイトはアリシアの【彼氏さん発言】に軽くパニックになった

「ふふっ、【まだ】なんだね。じゃあこれからフェイトの彼氏さんになるのかな？」

「～～～ッ／／」

フェイトの顔は真っ赤になった

「フェイトが好きになった人か…ふふっ、じゃあ将来はお義弟になるのかな？」

「アアアアリシア！！？」

「…会ってみたかったな…」

アリシアは寂しそうな表情で呟いた…

「あ……」

「ねぇフェイト…あなたの好きになった人ってどんな人？」

「…キョウスケは、とっても優しい人だよ。近くにいると心がポカポカして…アリシアもきっと好きになるよ」

「そっか…」

「でも、優しすぎて…他の女の子と仲良くしすぎて、ライバルが増えるのが結構大変かも…」

「フェイトも苦労しそうだね」

「そうだね…でも負けないよ！」

「うん、フェイトなら大丈夫。お姉さんが保証するよ」

「うん」

「…じゃあいってらっしゃいフェイト」

「うん…」

「現実でも、こんな風に…居たかったな…」

―シュュュン…

アリシアの体は金色の光りになり消えていった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「名前をあげる　もう闇の書とか呪いの魔導書とか言わせへん…私が呼ばせへん！」

「…ッ」

その言葉に管理人格の女性は涙した

「私は管理者や　私にはそれができる」

「無理です、自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っていますが、それも…」

管理人格は涙声ではやてに首を振る

しかし、

「…止まって」

―キィィン

はやてがそう強く願うと、足元の魔法陣の輝きが一層増した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのは・キョウスケＳｉｄｅ

―ギギギッ！

「…ん？」

闇の書の体が人形みたいに軋む音を立てた

「（外の方！えと、管理局の方！こちらえと、そこに居る子の保護者、八神はやてです！）」

「はやてちゃん！？」

「（ぅそ…なのはちゃん！？ホンマに！？）」

「（うん、なのはだよ　色々あってキョウスケ君と一緒に闇の書さんと戦ってるの！）」

「（えっ！？キョウスケ君もいるん！！？）」

「（いるぞ！はやて…なんか久しぶりだな）」

「（キョウスケ君…あの…）」

「（まぁ、言いたいことは沢山あるだろうが…）」

「（うん…ごめん二人とも、なんとかその子を止めてあげてくれる？魔導書本体からはコントロールを切り離したやけど…その子が止まらんと管理者権限が使えへん…　今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから！）」

「え？？？」

あ～…なんかなのはには難しすぎてパニックしてるな～

「（なのは！分かりやすく伝えるよ！
今から言う事をなのはができれば、はやてちゃんもフェイトも外に

出られる！）」

ユーノからの念話…おい、まさかユーノ…魔王フラグを立てる気か！？

「（どんな方法でもいい！目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！！全力全開！！手加減ナシで！！！）」

やっぱ魔王フラグや～

「…！さっすがユーノ君！分っかりやすい！！」

《Ｉｔｓ　ｓｏ》

〈まったくです〉

―キィィン

なのははレイジングハートを構え…

「ちょい待ち！！」

―バシッ！

僕はなのはの頭にチョップと言う名のツッコミを入れた

「イタッ！…うう～、なんなの？キョウスケ君！？」

「なんなの？じゃない！！何物騒な事をサラッとしようとしてんだ！？

つかスクライア！！お前も女の子に何させようとしてんだ！？」

「（な、何って…）」

「どこの世界に友達助けるのに、その友達目掛けて全力全壊手加減なしの悪魔法砲撃ぶっ放すヤツがいる！
特になのはのは非殺傷にしても十分殺傷能力あるってのに！！」

「うう…なんかヒドイ言われようなの…しかも字が【悪魔砲】や【全壊】になってるし…」

事実だからあきらめろ…

「（くっ…ならどうするんだ！？）」

「フッフッフッ…こんな事もあろうかと、そう！こんな事もあろうかと準備していたアイテムがあるのだよスクライア君！」

「キ、キョウスケ君？」

若干なのはが引いていたような気がしたが…スルーって事で

「ゴホン！…（はやて、前にプレゼントしたペンダント、肌身離さず今もしてるか？）」

「（えっ！？…うん、キョウスケ君がくれたプレゼントやし／／大切に持っとるよ。今もちゃんとココにあるよ）」

そか～……あれ？今何か違和感が…？

「（よ、よし！はやて…実はそのペンダントは、僕の魔力と共鳴さ

せ一時的に身につけている人の魔力を増幅する作用があるんだ。で、これから僕の魔力をはやてに送るから増幅されたその魔力で防御プログラムから主導権奪っちまえ！！）」

「（えっ！？うん！あ、でも魔力送るってどうやって？私は今闇の書の中やし…）」

……中？

……あ！

「（大丈夫だよはやてちゃん。キョウスケ君の事だからちゃんと考えが…）ってキョウスケ君？」

「……あ～」

「キョウスケ君…まさか…」

「…い、いや～　ホントは…はやてと一緒に闇の書起動させて、その時にその【魔力増幅で一気に管理者権限発動！速攻で暴走プログラム分離作戦】ってのをしようと考えてたんだけど…
…バカネコが邪魔したから前半から頓挫して…」

ホント迷惑な猫だ！

「えっと…」

なのはが冷や汗を流しながら困った顔をしている…

「…で、仕方ないから作戦変更して…闇の書に取り込まれても基本はやての身体だから、闇の書の姿になってもペンダントは胸元にあるかな～と思って今まで何とか近づいて、僕の魔力を直接ペンダントに送ろうとしてたんだけど……」

「（…ペンダント…私の手元って事は…）」

「…はやてちゃんと一緒に闇の書さんの中に？」

「（キョウ君どうしよう！？このままじゃなのはちゃんに砲撃で魔王フラグが！）」

そうだよな～…って慌ててる割に、さくらの中でもしっかりなのは は魔王候補か…

「……仕方ない、外からじゃダメなら中に直接送るしかないか～…」

「中に？どうやって？」

「……まぁ、なのはは僕が闇の書に近付くのを援護してくれ」

「？う、うん！分かった！」

「（さくらもなのはと一緒に援護してくれ）」

「（うん！）」

「「ユニゾン・アウト！」」

―パシィィ！

僕とさくらはユニゾンを解除して…

「じゃあ二人とも、援護お願いね」

「「うん！まかせて（なの）」」

―タッ！

僕は闇の書の方へ飛んでいった…

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

『？？マスター、顔が赤いですが？』

きききのせいですよ！インフィさん！

救いの光

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―ザバァーン！ザバァーン！

闇の書の足元の海中から闇の書が生み出した魔法生物のツタが現れた

「…キモッ！」

『開口１番それですか！？』

だってさ～…あのウネウネ～ってなんか苦手で…

―シュルシュルシュル！

って言ってる側から来たし！…ん？

―ドゴォォン！

―バァァン！

―バシィイ！

「■■■■■！」

後ろから砲撃が放たれツタの魔法生物は次々と薙ぎ倒されていった

「（キョウスケ君は早く闇の書さんの所に！）」

「（道は私となのはちゃんとで切り開くから！）」

お、二人の連携バッチリじゃんか！

…じゃあ急ぐか！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのは、さくらＳｉｄｅ

「なのはちゃん！次いくよ！」

「うん、エクセリオンバスター　バレル展開！中距離砲撃モード」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　Ｂａｒｒｅｌ　ｓｈｕｔ》

―バサァ！

レイジングハートから桃色の光の翼が現れ、レイジングハートの先端に魔力が集中していく

―ドコォォン！
―ガチィ！
衝撃波が放たれ、同時に不可視型のバインドが魔法生物のツタを捕らえ身動きを封じた
―キィィィィン！
レイジングハートに魔力が集束していく
「矢よ！敵を撃ち抜け！アロー！《矢》」
―キィィン
―ヒュン…ズカァァン！
さくらの放った魔力の矢は無数に分裂し、次々と魔法生物を撃ち落としていく
「エクセリオンバスター！フォースバースト！」
―ドキュドキュドキュドキュ！
その隙になのははカートリッジ４発ロード！
―キィィィィィ…
レイジングハートに巨大な魔力が集まり…

「ブレイクシューーート！！」

―ズカァァァァン！

なのはの砲撃が、全ての敵を包みこんだ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

―ズカァァァァン！

うおっ！あぶね～

もう少し飛ぶスピード遅かったら…ゾッ！

『まぁ塵も残らず消え去ってますね～…あ！マスター、そろそろ目標に接触します』

こいつもサラッと怖いことを…っと

―タッ

「……」

あ～、もう完全に防御プログラムが表にでて絶賛暴走中だな～

―ギギギッ

とりあえずはやてが何とか動きを止めてくれているけど…

「（はやて、今から魔力を送る…準備はいいか？）」

「（うん、ええよ。私はどうしたらええの？）」

「（ま、ペンダントを握って祈っててくれ。乙女の祈りは奇跡を呼ぶっていうしな）」

『クサッ！マスター、台詞がクサすぎます！』

「……さ、はじめるか」

『何ですかその間は！？明らかに編集点的な間は！？それでスルーですか！？』

「…なのはに頼んでＳＬＢの的になる？」

『す、すみませんでしたァァァー！！』

判ればよろしい

「コホン…じ、じゃあ…／／」

―スッ

僕の両手が闇の書の頬を包み、僕は顔を近付けていき…そして…

―お互いの唇が重なり、二人は光に包まれた―

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

私はキョウスケ君に言われた通り、ペンダントを握って祈ってる…

（乙女の祈りは奇跡を呼ぶっていうしな…）

ううん、キョウスケ君…ホンマ恥ずかしいセリフをいいよるな～／／

―キィィィン

「ッ！？ペンダントが光っとる！」

―フワッ

ペンダントは私の手からゆっくりと浮かび上がり私達を照らしてく…

「…温かい光、ですね…」

「そうやね…これがキョウスケ君の光…なんや力が湧いてくる…私もがんばらなあかんな」

―スッ

私はこのコの頬を両手で優しく包みこむ…

「…夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る…強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール…リインフォース。」

―キィィン

はやてが優しく名を告げるとリインフォースの体が光に包まれた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

フェイトＳｉｄｅ

「バルデッシュ、ここから出るよ…　ザンバーフォーム、行ける？」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ》

「いい子だ」

―カチャ

フェイトがバルデッシュを掲げ、バリアジャケットを展開した

《Ｚａｍｂｅｒ　ｆｏｒｍ》

―ドキュ！ドキュ！

バルデッシュはカートリッジを2発ロード

―ガチャガチャ！ブォォン！

バルデッシュの姿が大剣に変化した

―バチバチバチッ！

―キィィン！

「疾風、迅雷！！」

―カチャ！バチバチ！

フェイトは剣を掲げた…

―ブォォン！バチバチ！

フェイトが剣を振る度に雷が舞う

――ドゴォォン！バチ！バチバチッ！！

そしてバルデッシュを構え…

「スプライト、ザンバーーーッ！！」

―バチィ！…パリーーン！！

フェイトが剣を振るうと、今まで居た闇の書の中の世界が砕け散った

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

光に包まれたはやては今、闇の空間から光の空間に包まれていた

（新名称…リインフォース認識、管理者権限の使用が可能になりま

す…）

（うん…）

（ですが、防御プログラムの暴走は止まりません…管理から切り離された膨大な力がじき暴れ出します。）

（う～ん、まぁ何とかしよ）

―キィィン

はやての前に魔導書が現れる

（行こか、リインフォース…）

はやては魔導書を優しく抱きしめた

（はい、我が主…）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

おまけ

（…なぁリインフォース）

（…なんでしょう？）

（なんや唇に温かい感触があるんやけど…？）

（…はい、私も唇にそのような感触があります）

（…なんやすごく胸がドキドキしてるんやけど…何か解るか？）

（…キョウスケが我らに魔力を送る際、唇同士を接触させてましたが…）

（ああ、そうなんや…って／／　そそそれってキ、キキスしてもうたって事！？）

（はい、そのようです）

（う～……／／　な、なんか微妙なファーストキスや…／／…キョウスケ君、どうせやったら私が私の時に…／／）

（主？顔が真っ赤ですが？）

（ふぇ！？そ、そんな事あらへんよ！？…リインフォースはどうなん？）

（…私、ですか？…悪くない気分、ですね…／／）

あ、あかん…リインフォースの顔、綺麗や…これ以上ライバル増えたら…

…よし！キョウスケ君に責任取ってもろうて、まずちゃんと私に…キ、キスしてもらわなアカンな～／／

そや、今のキスはノーカンや！

ファーストキスはちゃんとしてもらうから覚悟しいや～キョウスケ君！！

夜天、闇を切り裂いて…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―パァァァァ

「……ん…ぷぁ！」

なんとか魔力共振はうまくいったか／／

『いや～…見事なキスシーンでしたよ♪あ、仮契約カードがありますよ…２枚も』

こ、このデバイス…いつかバラしてや……は？

「…２枚？」

僕は頭上を見ると…あ、ホントだ

「……なぁ、インフィニティ…」

『なんですマスター？』

「これは…どゆこと？」

1枚ははやてとの仮契約カード。まぁ、これは解っていたよ？
…だがもう1枚…これは…

「…リインフォースやんか！？」

ナニコレ？融合状態って、二人分なの！？どっかの某Wなライダーみたいなカンジだった！？

『まぁ、一気に2枚ゲットですね』

…まぁ…いいけどさ…

あ、そういえばはやては…

―キィィィン…

『はやて嬢はマスターの目の前の光の中です…光の中から魔力反応、これは…フェイト嬢ですね…来ます！』

―シュン！

純白の光の中から一筋の金色の光が飛び出た
その光の先には…

「フェイト！！無事だったか？」

「あ、キョウスケ！うん、大丈夫！」

どうやら無事だったようだ

―ヒュュュ

「フ、フェイトぉ～！！」

―ギュ！

アルフはフェイトに抱き着いた

「アルフ！？…ごめん、心配かけちゃったね」

「ううん、いいんだよ…フェイトが無事なら！」

「アルフ…」

―ヒュュュ

「キョウスケ君～！」

「キョウ君～！」

お、なのはとさくらもこっちに合流……気のせいかな…二人の後ろから黒い瘴気が…

―カチャ

「「キョウ（君）スケ君、さっきの【アレ】は何なのかな？」」

にこやかに微笑み、二人して杖をこっちに向けてらっしゃるし～！！

【アレ】ってやっぱ…アレだよな～

「なのは！さくら！どうしたの？」

何も知らないフェイトもこちらに合流

…あ、ちなみにユーノもいつの間にか居た…ような？

「フェイトちゃん、キョウスケ君が闇の書さんと…その…キ、キスしたんだよ！…（ボソッ）私だってまだしてないのに／／」

最後の方が聞こえなかったが…ゾクッ！

さ、寒気が！？

「…キョウスケ…どういうこと？」

フ、フェイトさん？バルデッシュの切っ先をこっちに向けないで～！！

「は、はやてやフェイトを助ける為だったんだよ…ね？」

これはホントだよ！？

「…それなら仕方ないか…」

そう言いフェイトはバルデッシュを納めてくれた…助かった～

「…まぁ人命救助って事だったから…」

さくらも杖を引いてくれた…って僕的には、何故あなたもなのはと一緒に杖向けるかが疑問なんですが！？

「！！～～ッ…／／な、なんでもだよ！」

いや、言ってる意味解らないし…

「…じゃあキョウスケ君…／／わ、私とも…キ、キスし…

―ゴゴゴゴゴ！

〔みんな気をつけて！闇の書の反応まだ消えてないよ！〕…ううっ…エイミィさ～ん…」

なんかなのはが泣いているが…そういや何か言ってたような…？

「……ホッ」

後ろの方でユーノが安堵感たっぷりの顔をしていたが…？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――アースラ指令室――

リンディＳｉｄｅ

「さて、ここからが本番よ…クロノ！準備はいい？」

〔はい！もう現場に着きます！〕

リンディはモニター越しにクロノに指示を送った

―チャラ

「…ハァ、アルカンシェル…使わずに済めばいいけど…」

リンディの手の中には最終兵器…アルカンシェルの起動キーが握られていた…

「闇の書の主、防衛プログラムと完全に分離しました」

「解ったわ！」

「みんな！下の黒い澱みが暴走が始まる場所になる！クロノ君が着くまでむやみに近づいちゃダメだよ！？」

〔…はい！〕

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「管理者権限発動…」

（防衛プログラムの進行に割り込みを掛けました…数分程度ですが、暴走開始の遅延ができます）

「うん、それだけあったら十分や…」

―キィィィン…

はやての周りに４色の光の球が現れる

「リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復…」

―キィィィン

光の球はその輝きを増し…

――ビル屋上――

―キィィィン

地面に４色のベルカの魔法陣が現れ、その中からシグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラが現れた

―――

――

―

「…おいで、私の騎士たち…」

はやては優しく呟いた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―キィィン…ズガァァァン

目の前のはやてが中にいる光の球から突如、爆発的に光があふれ出した

「「「「うっ！？」」」」

その光にみんなは目を覆った…

その光が収まると…

「ああ！？」

光の周りには、それを守るよう４人の騎士たちがいた

「ヴィータちゃん！」

「シクナム！」

二人とも縁がある二人の復活して喜んでるな～

「…我ら夜天の主の元に集いし騎士」

「主有る限り、我らの魂尽きる事なし」

「この身に命ある限り、我らは御身の元にあり」

「我らが主、夜天の王…八神はやての名の元に！」

シグナム・シャマル・ザフィーラ・ヴィータは完全復活したみたいだな

「リインフォース…私の杖と甲冑を…」

（はい！）

―パリッパリ…パリーン！

光の球は砕け、中からはやてが現れた

「はやてちゃん！」

「（ニコッ）」

はやてはなのはの声に笑顔で答えた

「夜天の光りよ！我が手に集え！祝福の風、リインフォース…セーットアップ！！」

―キィィィン

はやてはバリアジャケットを纏い…うっ、はやてのミニスカ…／／

『惚れ直しましたか』

「…ああ、…ってイイインフィニティ！！？な、何をオッシャッテイラッシャルヤラ？」

『動揺しまくりですね』

「…後でコイツのメモリー消去しなければ…」

『怖っ！！』

To Be continued

初顔合わせは…グダグダだった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

「…はやて」

「うん…」

「すみません…」

「あの…はやてちゃん　私達…」

ヴィータ・シグナム・シャマルは、はやてに謝った…まぁ隠れて蒐集してたからな～

「ええよ、みんな解ってる。リインフォースが教えてくれた…そやけど、細かい事は後や　今は…おかえり、みんな」

「うっ…う…うわぁぁぁん！！」

ヴィータは泣きながらはやての胸で泣きじゃくった

はやてもヴィータを優しく抱きしめて受け止めた

「はやてっ！はやて！はやてぇ～！うわぁぁぁん！」

「ヴィータ…」

―ポンッ

僕ははやてとヴィータの頭に手を乗せる

「…キョウスケ君」

「ひっく…恭介ぇ…」

「はやてもヴィータも無事でよかった…」

僕は二人の頭を撫でた

「き、きょうすけ～！うっ…うわぁぁぁん！！」

―ガバッ！

ヴィータは今度は僕に抱き着き、泣きじゃくった

「キョウスケ君もごめんな…私のせいで巻き込んでしもうて…」

「はやて…気にするな、好きでやった事だし」

「それでも…ありがと…／／（ニコッ）」

ヴッ…はやて、その笑顔…反則だろ／／

―ヒュュュ

ん、なのはとフェイトがこっちに…ってあれ？何故か寒気が…？

「あ、なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな～ウチのコ達が迷惑かけてもうて…」

「ううん…」

「それは平気…」

―カチャ

「あ～…二人とも…一応お尋ねしますが、なぜ僕にデバイスを向けていらっしゃるのでしょうか？」

「えっ？…もちろん、何でヴィータちゃんと…」

「…抱き合ってるかって事だよ…キョウスケ…」

いやいやいや、抱き合うって…

「うぐっ…ひっく…」

あ～…まだ泣いてるか～

しかし説明せんと命が危険だな…

「これは…「キョウ君～！！」さくら？」

―スタッ

「キョウ君！みんな無事だったんだね～よかった～」

「ああ、さくらも援護ありが…痛っ！」

「…恭介…この女…誰だ！？」

ヴィータさん！？爪！爪が胸に食い込んでるんですが！？

「奇遇やな～ヴィータ…私も気になったんよ～
…キョウスケ君、その娘…誰や？」

はやてが笑顔（目は笑ってないが）で聞いてきた…

「さ、さくらは僕の…グホッ！」

「僕のぉ！？どーゆー関係だ！オイ恭介ぇ！！」

だからヴィータさん！爪が食い込んで…って爪が刺さってますから！！

「キョウスケ君…ヴィータちゃんと仲いいんだね…」

なのはよ…これが仲いいように見えるか！？

「…キョウスケ、ヴィータとはどういう関係…？」

フェイトも笑顔で聞いてきたが…やはり目は単色であった

「だ、だから…シ、シグナム・シャマル・ザフィーラ助けてくれ！」

僕は他３人の方を見ると…

「すまない…無理だ」

「流石にこの修羅場には…ちょっと」

「……すまん」

ってちょっとぉぉぉ！？

「さあ、キョウスケ君…」

「どーゆー事か…」

「ＯＨ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ…」

「聞かせてくれるかな？」

はやて、ヴィータ、なのは、フェイトが黒いオーラを放ちながら迫ってくる

…超怖い…

「だから…まず、はやてやヴォルケンズは知らないと思うが…さくらはユニゾンデバイスなんだ」

「ほぅ…そうなのか？」

「シグナム知っとるん？」

「はい、たしか古代ベルカで生み出された技術だと…」

「てか…はやて、今リインフォースとそのユニゾン状態なんじゃ…？」

「え!?そうなん!?」

…気付かんかったんかい!?

「えっと…はやてちゃん、さくらって言います。よろしくね」

「あ、うん。私の方こそよろしく…さっきはごめんな…怖がらせてもうて…」

「えっ!?ううん!大丈夫だよ!キョウ君の家族なら、私にとっても家族なんだし」

「家族…」

はやて…ビックリした表情してんな～

「…だめ…かな?はやてちゃん…?」

さくらの涙目＋上目づかいコンボ発動!

…誰だ、さくらにあの技教えたのは?

『美少女の標準装備みたいですよ』

…あ～…なんか納得、心当たりメチャクチャありますよ…

「……か……」

…か？

「かわえぇぇぇ！！さくらちゃん！めっちゃかわええな～！！」

「あ、あの…？」

―ギュ！

「ホンマめっちゃ萌えるで～！」

はやて…なんかキャラ違う…

…さっきの僕の胸のドキドキを返せ～！！

「さくらちゃん、私の事は【はやてお姉ちゃん】って呼んでな？」

「えっ！？う、うん…はやてお姉ちゃん…」

はやては妹を手に入れた

…あの～はやてさん、一応僕のデバイスなんですが？

「あ、でもキョウスケ君の事をパパって呼んで、私の事をママって呼んでもええよ？…キャ／／」

「「「は～や～て～（ちゃ～～～ん）？」」」

主になのは、フェイト、ヴィータから黒いオーラが放たれた！

「い、いややな～…じ、冗談や…だから皆…落ち着こな…？」

第一パパって歳じゃないんだがな…

「で、なのはにフェイト、ヴィータもかぞ「パートナーだ!!」く…ってヲイ」

ヴィータはパートナーと言い切った!

…まぁ確かにそうなんだけどさ~…この状況では嫌な予感しかしないんだが…

「「パ、パートナー!?」」

なのはとフェイトはハモった!

「そうだ!…これを見ろ!!恭介と私のパートナー（仮契約）の証だ!!」

そう言いヴィータは仮契約カードをなのは達に見せた!

「あ!?それって仮契約カード!?」

「ヴィータちゃんもカード持ってるの!?…って事は…ヴィータちゃんも、キョウスケ君と…キスを!?」

「なっ!?【も】って…まさか…」

ヴィータは恐る恐るなのは達に尋ね…

「うん、私もキョウスケと仮契約したから…カード持ってるよ」

そう言いフェイトもヴィータにカードを見せる

「た、確かに同じカードだ…じゃあお前も…恭介と…？」

「うん…その…キス、したかな／／」

…これは…本気で修羅場！？…よし！逃げよ…

―ガシッ

…しかし、なのはに捕まった…ってなのは！？

「……」

「あの～…なのはさん？」

「…キョウスケ君」

「な、なにかな？」

「な、なんで！なんでフェイトちゃんやヴィータちゃんとはキスして、私とはキスしてくれないの！？」

なのはは涙目で僕をガクガク揺らしまくった

…涙目で言われると何故か罪悪感がぁぁぁ！

「な、なんで…って言われても…」

ほとんど事故と偶然と人命救助ってのが重なっただけだし～

「こ、こうなったら／／ん～～っ！」

ってなのはは唇を近づけてきて…って

「まてまてまて！落ち着けなのは！」

「ん～～！！」

落ち着く気配なしかい！

「な、なのは！？何してるの！？」

「テメー！恭介から離れろ！！」

修羅場寸前のフェイト&ａｍｐ;ヴィータがこちらに気付きなのはを引き剥がそうとした

「フェイトちゃん！ヴィータちゃん！は、放して～！！！」

「「放(さないよ)すか！！」」

ヴィータ達の活躍で何とかなのはを取り押さえた…

「キョウ君～！」

「…あ、さくら…とはやて？」

はやての顔が若干赤いような

「キョウ君！忘れ物だよ！！」

そう言いさくらはある物を差し出した

「あ、仮契約カード…」

こ、このタイミングで出しますか！？

「キョウスケ君…／／その…このカードは…私らの愛の結晶やな♪」

「「「なっ！？」」」

はやてさ～～ん！？何色々問題がありそうな発言を！？

「か、神代！！どういう事だ！？…ま、まさかもう主と…／／」

「あらあら～じゃあ私達、はやてちゃんの他にキョウスケ君にも仕えないと♪」

「…キョウスケになら、主を任せられるな」

「ちょ！３人とも…」

「「「あーーー！！！？」」」

こ、今度はなんだ！？

「そ、そういえば…はやてちゃんも…キョウスケ君とキスを……ｏｒｚ」

「な、なんではやての仮契約カードが…ま、まさかキョウスケ！？」

「恭介…はやてともキスしたのか…まぁ、はやてだったら…でも…

う〜〜っ！」

後で乱闘していたなのは、フェイト、ヴィータもこちらに気付いて

各々な反応をしていた

…なのはは目に見えて落ち込んでいるが…

―ツンツン

ん？さくら？

「（キョウ君、もう一枚のカード…リインフォースさんとの仮契約

カードは、はやてお姉ちゃんにはまだ見せてないから…まだ皆には

言わない方がいいんだよね？）」

まぁそうだが…はやてお姉ちゃんって呼ぶの確定なんだね…

「（ああ、リインフォースに関して後々考えがあるし…それに…）」

この修羅場でさらにもう一人仮契約しました♪　なんて言った日に

は…物理的に潰される…

「（ありがとな、さくら　気をつかってくれて）」

「（ううん、だって私はキョウ君のパートナーだしね…で、その〜

…／／）」

ん？さくらの顔も赤くなって？

「（あの…ね、後でていいんだけど…お願い聞いてほしいな～なんて／／）」

「（お願い？まぁいいけど？）」

「（ホントに！？ありがとうキョウ君！！）」

まぁ、さくらが喜んでくれるなら

「キョ～スケく～～ん！！」

「うわっ！？な、なのは？」

復活したなのは…な、なにか鬼気迫る雰囲気が…怖っ！

「私とも……キスをしてなのーーー！！」

「だから落ち着けーーー！！！」

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

倒し方って難しい！？

前回までのあらすじ…

暴走プログラムをほったらかして、なのはが暴れていた…

「ちょっと～！暴れてないもん！！」

…電波はスルーしよう…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―スッ…タッ

「済まないな、水を差してしまうんだが…時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

お前…もっと早く来いよ…絶対今の修羅場静観してたろ！？

「ゴホン！…
スコール…いや、キョウスケ…言いたい事は沢山あるが…今は時間がないので状況を簡潔に説明する」

うわっ！コイツ、スルーしたよ！

「…あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する…僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない　停止のプランは現在３つある…
１つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる
２つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる
３つ、キョウスケの未知の魔法で殲滅させる…
これ以外に他に良い手ないか闇の書の主とキョウスケ、それと守護騎士の皆に聞きたい」

と、クロノは僕と夜天Ｓｉｄｅに有効な手を聞いているが…

「ええっと…最初のは多分難しいと思います…主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいな物ですから…」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん…」

シャマル・ザフィーラにより１つ却下！

「アルカンシェルも絶っ対ダメッ！！こんな所でアルカンシェル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

「そ、そんなにスゴイの？」

「発動起点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲…って言うと大体わかる？」

「あの！私もそれ反対！！」

「同じく！絶対、反対！」

はい、２つ目もヴィータ・なのは・フェイトにより却下！

「僕も艦長も使いたくないよ…でも、アレの暴走が本格的に始まったら被害がそれより遥かに大きくなる」

「暴走が始まると、触れた物を侵食して無限に広がっていくから…」

「「……」」

クロノとユーノの説明を聞き押し黙るなのはとフェイト…

〔ハーイみんな！暴走臨界点まで後１５分切ったよ！！会議の結論はお早めに！〕

エイミィさんは通信で残り時間を教えてくれた

「後は…キョウスケ、君の未知の魔法で何とかならないか？」

「ん～…アレを消し去る手段ならいくつかあるにはあるが…」

「何！？本当か！？」

「ただ…地球の地形、変えていいなら…？」

「……は！？」×１０

あ、やっぱりみんなア然としたか…

「だ、ダメー！！キョウスケ君！それフツーにダメだから！？」

「そ、そうやキョウスケ君…流石にそれは…あかんよ」

「……なあ、やっぱ恭介って…」

「……言うなヴィータ…今更だ…」

なんか皆疲れ切った顔をしているが…なぜ？

「ちなみに地形変えるって…どの程度だ？」

「そうだな～仮に【バハムート零式】ってのを使ってアレを消滅させるとしたら…地球の１／１０削り取る程度？」

―ピシッ×１０

あ、完全無比に硬直してるよ

「も、もう少し穏便な手段はないのか？」

「穏便って…そうだな～」

暴走プログラムの無限再生がなければまだ穏便な手段があったんだ

がな…

「…君達は？何かないか？」

クロノはシグナム達に（穏便な）手はないか聞いていた

「すまない…あまり役に立てそうにない」

「暴走に立ち会った経験は我らにもほとんどないのだ」

「でも、何とか止めないと…はやてちゃんのお家がなくなっちゃうのイヤですし！」

「…いや、そういうレベルの話しじゃないんだがな…戦闘地点をもっと沖合にできれば…」

「いや、沖合でもアルカンシェルの空間歪曲の被害は出る…キョウスケのバハムート零式とやらは、地球自体に危機的ダメージを与えそうだし…」

「う～～ん…」

皆で考え込んでいると…

「…あ～～ッ！なんかゴチャゴチャうっとうしいな～！！みんなでズバッとぶっ飛ばしちゃう訳にはいかないの！？」

「ア、アルフ…」

「これはそんなに単純な話しじゃあ…それにスバっと倒すだけなら

とっくにキョウスケに頼んでいるし…」

「地球破壊の特典付きだけどね」

「キョウスケ…それは特典とは言わないんじゃ…」

フェイトが不安そうな顔でツッコミを…

まぁ…ここは原作道理に進めるか

「…エイミィさん、アルカンシェルって宇宙空間でも発射可能ですか？」

〔フッフッフ…キョウスケ君、管理局のテクノロジー舐めてもらっちゃ困りますな～

撃てますよ～宇宙だろうがどこだろうが！〕

「と、言う訳で喜べクロノ　手間は掛かるが攻略方が見つかったぞ！」

「攻略方って…ハッ！？おいっ！？ちょっと待て！！今の話しの流れ…ま、まさか！？」

「そ、なのは・はやて・フェイト、比較的安全にズバッとアレをぶっ飛ばすにはどうしたらいいでしょう？

ヒントは宇宙空間！

さぁ、シンキングターーイム！」

後は、なのは達に丸投げっと！

「ふぇぇ！？…えっと…ズバッとぶっ飛ばす…」

「ここで撃ったら被害が大きいから撃てへん…」

「でも、ここじゃなければ…ヒントは宇宙空間…」

「「「…ッ！ああ！！」」」

てか、ほとんど答え言ってたしな～

「…答えは解ったみたいだね。」

「「「うん！！」」」

三人は力強く頷いた

「ほえぇぇぇ！？キョウく～ん…私、解らないよ～っ！」

…さくらの頭から煙が出ていたのは…きっと気のせいだろう…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

アリサ、すずかＳｉｄｅ

二人は海岸沿いの道で海の向こうを見ていた

「…光、収まった…」

「…うん、海にまだ黒いのがあるけど…」

「一体何なの？まさかこんなのがこのままずっと続いたりしないよね？」

「何となくだけど…大丈夫な気がするの」

「ん？」

「きっと戦ってくれてるから…」

「…なのはとフェイトが？」

「うん…それと一緒にいた人達も」

「…すずかに真顔で言われると、なんかそんな気がするから怖いわ」

「はは……」

「まぁ、それにしてもよ…ああもう！！訳分かんない！！！楽しいクリスマスイヴに一体どういう事態なの！？夢なら覚めて～～一刻も早く覚めてよ～～～！！！」

「ア、アリサちゃん　落ち着いて！」

アリサも軽く暴れてた

「うるさいうるさいうるさい！！」

「ア、アリサちゃん！どうしたの！？」

「…ハッ！？な、何故かは分からないんだけど…急に言わなきゃいけないような気がして…」

「？？？」

次回！アリサは炎髪灼眼の討ち手に…

「ならないわよ！！」

「ア、アリサちゃん……？」

「あー！！また変な電波受信したじゃないの～！！まったく誰のせいよ！！」

「（作者…じゃないかな？）」

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＣＯＡＬ　ｏｒ　ＤＲＯＰ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――アースラブリッジ――

リンディ・エイミィＳｉｄｅ

「何ともまぁ…相変わらず物凄いというか…」

頭を押さえながらリンディは呆れてたようにため息をついた

―ピッピピ…ピッ…

エイミィはコンピュータで計算中…

「計算上では実現可能ってのがまた怖いですね…クロノ君！こっちのスタンバイは準備ＯＫ！暴走臨界点まで後１０分！」

エイミィは最終決戦のタイムリミットをクロノ達に伝えた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「実に個人の能力頼みでギャンブル性の高いプランだが…やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合５層式、まずはそれを破る！」

…ん？

「はやて、バリアって４層じゃなくて５層なのか？」

「えっ！？うん、そやよ…確かに５層や」

…原作より１層増えてるが…まぁそのくらいの誤差は許容範囲だからいいか…

…だが僕は、その時気付かなかった…

その１層の違いの原因が…【アレ】だという事に…

「それで、バリアを貫いたら本体にむけて私達の一斉攻撃でコアを露出！」

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に転送！」

〔後は、アルカンシェルで蒸発…と〕

〔うまくいけばこれがベストですね〕

「…キョウスケ、この作戦の指揮は君が統ってくれ」

「はあ！？いやいやいや！こーゆー場合、指揮権ってクロノにあるんじゃ？」

「…今作戦を考えてくれたのは君だ、それに…僕は君にはやられっぱなしだったからな…君が指揮を統ってくれた方が上手くいくような気がしてね…」

うわっ！暗っ！…知らない所でクロノの性格改変したのか！？

『マスターがやり過ぎた結果では？』

うぐっ…確かに…

「ハァ…分かったよ…」

やることは変わらないしね

「みんな、この一戦に僕たちの命と地球の命運を賭けるっ！クロノの言った通り、ギャンブル性の高いプランで外れれば無一文

どころか全てが終ってしまう…
だけど、当たれば億万長者だ！全賭けでいくぞ！！」

「ああ、言われるまでもねぇ！、こっちは最初からそのつもりだ！
！恭介！！」

「勝手に賭けられても困るが…よかろう神代！！私も騎士の誇りと
魂を賭ける！！」

「うん！その賭け、私も乗るよ！キョウスケ！！」

「せや、もちろん私もキョウスケ君の賭けに乗るで！！」

「わ、私の全部キョウスケ君にあげるの～！」

「私達もキョウスケ君に…ね？ザフィーラ？」

「…ああ」

「私もフェイトが乗るなら乗るよ！ユーノも乗るんだろ？」

「……これしか方法がないなら…僕も！」

みんな…ありがとう…1人、問題発言していたような気がしたけど
…？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

クロノＳｉｄｅ

「…グレアム提督、見えますか？」

〔ああ、よく見えるよ〕

「闇の書は呪われた魔導書でした…その呪いは幾つもの人生を喰らい、それに関わった多くの人の人生を狂わせてきましたアレのおかげで僕も母さんも…他の多くの被害者遺族も、こんなはずじゃない人生を進まなきゃならなくなった　それはきっと貴方もリーゼ達も…
無くしてしまった過去は変える事は出来ない」

《Ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

―バシィ！カチャ

クロノはデュランダルを起動させた

「だから今を戦って未来を変えます！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

―ゴゴゴゴゴ…

〔暴走開始まで後2分！〕

「あ、キョウスケ君にさくらちゃん、なのはちゃんフェイトちゃんも」

「「「「？？？？」」」」

「シャマル！」

「はい、４人の治療ですね…クラールヴィント、本領発揮よ」

《Ｊａ》

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

―キィィィン

緑の光が僕たちを優しく包み込み

「あ…わぁ！」

「ええ…っ」

「ほえぇぇ…」

僕たちの傷を回復してくれた

「湖の騎士シャマルと風のリング、クラールヴィント　癒しと補助が本領です」

「ん…さんきゅ、シャマル」

「すごいです」

「ありがとうございますシャマルさん！」

「シャマルさん！ありがとうございます」

「ふふ…どういたしまして」

「さくら、ユニゾンいくぞ！」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！！」」

―パシィィ！

「…ユニゾンすると、はやてと雰囲気が似てるねキョウスケ」

「ん？ああそっか、なのは以外は僕のユニゾン姿は見るの初めてだっけ」

「うん…なんか髪や瞳の色まで変わってるね」

「フフフフッ♪」

「ん？どうしたはやて？なんか嬉しそうだけど？」

「えっ！？…私とキョウスケ君、同じユニゾンでお揃いやな～って／／」

いや…それは過大解釈じゃ…

―ゴゴゴゴォ…

な、凄いプレッシャーが！？

―ジィィィ…×３

プレッシャーの正体は…

「…なのは、フェイト、ヴィータ…視線が痛いんですが…」

「「「……フン！」」」

だから一体僕が何をしたっていうんだよ…

「はぁ…みんな、今は気持ちを切り替えて行こう…」

『…逃げましたね』

…今度ＡＩユニット、丸ごと交換してやる…

「じゃあすまないが、アルフ・ユーノ・ザフィーラは周りの触手を廃除してくれ…僕たちが攻撃に専念できるように」

「ああ、私達サポート班に任せな！　二人とも、あのウザいバリケードを上手く止めるよ」

「うん」

「ああ」

アルフを初め、ユーノ・ザフィーラは頷いた

―バシャァァン！

―ゴゴゴゴゴ！

タイムリミットが迫り、そのウザいバリケードの触手が活発に活動し始め…

「始まる！」

―バシャァァン！バシャァァン！

黒い球体の周りからエネルギーが柱のように立ち上った

「…夜天の魔導書、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…闇の書の闇…」

―キィィィ…バシャァァ！

闇の球体が割れ、中からはおぞましい巨大生物…色々な生物を掛け合わせたようなキメラが現れた

「■■■■■■■ッ！」

頭部から闇の書の管理人格に似た銀髪の女性からは、さなざらローレライの歌声のような声が響いた…

「よし、こちらのコールは済んだ！…あと出来る事は伏せたカードをめくるだけだ…いくぞ！みんな！！」

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

闇の最後と影の胎動

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

―バシィィィ！

アルフとユーノのバインドで暴走プログラムの周りにあるバリケード…魔法生物の足（ヘビみたいな）を捕まえ、切断していく

「縛れ！鋼の軛！でぇぇぇぇや！！」

―ゴゴゴッ！

ザフィーラから放たれた魔法はその足を薙ぎ払った

「■■■■■■ッ！」

その攻撃に暴走プログラムはさらに声を上げた

―カチャ

その上空にデバイスを構えたなのはとヴィータ

「ちゃんと合わせろよ！高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

―ブォォン！

「鉄槌の騎士ヴィータと黒鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

―ドキュ！ガチャ！

《Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ》

グラーフアイゼンはその鉄槌を巨大なハンマーに変形させた

「轟天爆砕！ギガントクラーーーケンッ！！」

―ドォン！！！

―バリ…ガシャァァァン！

ヴィータの強烈な一撃（別名ゴル○ィオンハンマー）でバリアの一枚を破壊

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン！いきます！！」

―キィィィン

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》
―ドキュドキュドキュ！
「エクセリオンバスターーーッ！！！」
《Ｂａｒｒｅｌ　ｓｈｏｔ》
―ドォォン！
不可視のバインドをまず放ち、触手を払いのけ…
「ブレイク…」
―キィィィィィン
魔力を集束…
―ドォォン！
「シューーート！！！」
―ドォォォォォン！　―バリィィィン！
なのはの放った砲撃攻撃でさらに一枚破壊した
「■■■■■■■ッ！」
「次！シグナムとテスタロッサちゃん！」

シャマルの指示が、暴走プログラムの背後に陣取るシグナム達に伝えられた

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン！刃と連結刃に続くもう一つの姿…」

―ガチッ！ドキュ！

シグナムは剣の柄と鞘を併せ

《Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ》

その姿は弓に変形した

―ギィィ…ドキュ！

シグナムが弓を引くと矢が現れ、カートリッジが弓から2発ロードされた

「翔けよ！隼！！」

《Ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ》

―キィィィン！

魔力を集中し…

―シュン！！

一気に放った！

―ドォオオオォン！

シグナムの攻撃でさらにバリアを一枚破壊

「フェイト・テスタロッサ　バルデッシュザンバー！いきます！！」

―ブォォン！キィィィン！

―ドキュ！ドキュ！

「はあああ！」

―ブォォン！

フェイトがバルデッシュを一降りすると、不可視の物理破壊衝撃波が暴走プログラムに命中した

―ドゴォォォン！バチバチィ！

フェイトはバルデッシュを上に掲げ…

「撃ち抜け！雷神！！」

《Ｊｅｔ　ｚａｍｂｅｒ》

フェイトが振り下ろした魔力刃…長く伸びたその一刀は暴走プログラムのバリアを砕いた

さすが別名【斬艦刀】！！断てぬものなし！だな～

「■■■■■■■ッ！！」

暴走プログラムも応戦しようと触手から砲撃を放とうとしていた

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃なんぞ撃たせん！！」

―キィィィン！！

ザフィーラの魔法によりその触手は刃に貫かれた

「次！キョウスケ君！！お願い！」

暴走プログラムの上空に待機していた僕…

「…神代恭介と無限の力、インフィニティ…これが僕のジョーカーだっ！！」

―カチャ！

僕は剣を上に掲げ―

―シュゥゥゥ…

魔力を集束…

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！ドキュ！

カートリッジをロード！

「重閃…爆剣！」

―キィィィィン

「メテオ…ザッパーーーっ！！！」

振り下ろした剣から無数の魔力弾が降り注ぐ！

―ドガドカドカァァァァン！！！

「■■■■■■■■ッ！！！」

最後のバリア破壊し、本体にもダメージを与えた

「はやてちゃん！！」

シャマルは僕の反対側の上空にいるはやてに声をかけた

「彼方より来たれ…やどり木の枝　銀月の槍となりて撃ち貫け！！」

―キィィィン

「石化の槍！ミストルティン！！」

―ドォンドォンドォン！！

―パリ…パリパリ…

はやてより放たれた魔力槍は暴走プログラムを貫き、さらにそのまま暴走プログラムを石化させていった

「■■■■■■■…」

―バリィン！

暴走プログラムは石化していき、女性を象っていた姿は崩れ落ちた

―バァン！グチャ…ズズズズ…

しかし暴走プログラムは再生していき、その姿をさらにおぞましく変貌させた…

「うわっ！まぁ…」

「なんだか、スゴイ事に…」

そのおぞましい変貌にアルフとシャマルは嫌悪感をあらわにした

…僕だけだろうか…あの恐竜みたいな顔…デジモンじゃね？って思うのは…

『マスターから電波とは珍しいですね』

…ゴホン！…

〔やっはり並の攻撃じゃ通じない、ダメージを入れたそばから再生

されちゃう！」

「だが、攻撃は通っている…プラン変更なしだ！！…いくぞデュランダル！」

《Ｏｋ　Ｂｏｓｓ》

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ！」

―キィィィ…

クロノから放たれた冷気は海をも徐々に凍結させ、暴走プログラムも凍結させていき…

「凍てつけ！！」

《Ｅｔｅｒｎａｌ　ｃｏｆｆｉｎ》

―パキパキィ！！

一気に暴走プログラムを凍らせた

―バリーン！

しかし一瞬で暴走プログラムは氷を破壊し復活し再生していく

「いくよ、キョウスケ君！フェイトちゃん！はやてちゃん！」

「ああ！」

「うん！！」

「うんっ！」

―カチャ

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

―キィィィン…

「全力全開っ！スターライトー…」

―ゴォォン！バチバチ！

「雷光一線！！プラズマザンバーーッ…」

―シュゥゥゥ…

「…ごめんな…おやすみな…
…響け！終焉の笛、ラグナロク…」

―バチィィィ！

「「「ブレイカーーー！！！」」」

―ドゴォォォォン！！！

なのは達のトリプルブレイカーが暴走プログラムに命中した

「…最後の審判、黙示の光…」

―キィィィィ…

僕は剣をかかげ…

「ファルネーゼ・アポカリプス！！」

剣を振り下ろし、広域殲滅魔法を放った！

―ドコォォォォン…！！

暴走プログラムに４人分の攻撃が直撃し、残骸があたりに散らばった

シャマルは旅の鏡を使い、暴走プログラムのコアを探っていた

「…本体コア、露出…捕まえ…たっ！！」

「長距離転送！！」

「目標軌道上っ！！」

―キィィィン

「「「転送っ！！！」」」

―ゴゴゴゴゴ…シュン！！

暴走プログラムのコアはシャマル・アルフ・ユーノ達により転送された

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

アースラＳｉｄｅ

「コアの転送来ます！転送されながら生体部品を修復中！！凄い速さです！！」

「アルカンシェル、バレル展開！！」

―シュュュュュ…

「ファイアリングロックシステム、オープン！！」

―ブォン！

リンディの目の前に立体キューブ…アルカンシェルの発射スイッチが現れた

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します！準備を！」

「了解！」

―カチ…ブォン

リンディはアルカンシェルの起動キーを差し込み発射体制に入った

―シュン！…グチャグチャグチャ…

それと同時に、転送されてきた暴走プログラムがアースラの目の前に現れた

…その身体をおぞましく再生させながら…

「アルカンシェル…発射！！」

―カチッ

―ブォォォォン！バチバチバチィィ！！

アルカンシェルの主砲が放たれ、暴走プログラムに命中！

―シュュュュュ…バァァン！！

暴走プログラムは空間歪曲により消滅した

「効果空間内の物体…完全消滅、再生反応…ありません！」

「ふぅ…準警戒体制を維持、もうしばらく反応区域を観測します」

「了解！…ふぅ…」

エイミィは椅子にもたり掛かり安堵した

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

〔という訳で現場の皆、お疲れ様でした～！状況、無事に終了しました～！！
この後まだ残骸の回収とか市街地の修復とか色々あるんだけど…皆はアースラに戻って一休みしていって〕

「あ、あのアリサちゃんとすずかちゃんは？」

〔ああ、被害の酷い場所以外の結界は解除してるから、元いた場所に戻ってもらったよ。大丈夫！〕

「そうですか、よかった」

「キョウスケ、お疲れ様」

「ああ…フェイトも頑張ったな。」

―ナデナデ

僕はフェイトを労う意味で頭を撫でた

「あうっ…／／」

…相変わらず頭から煙が出てるが…

―ドサッ

「はやて！！」

「はやてちゃん！？」

「はやて…はやてーーっ！！！」

「どうした！？…ってはやて！？」

はやてがシグナムの腕にもたれ掛かり気絶していた

「恭介！はやてが…はやてがぁーー！！」

「…これは…急激な魔法消費による疲労で気を失ったみたいだ…」

「じ、じゃあ…はやては大丈夫なのか？」

「十分な休息をとれば大丈夫だろう…シャマル、はやての容態は？」

「ええ、極度の疲労によるものね…急に身体を酷使したせいね…でも命に別状はないから大丈夫よ」

「そ、そうか～…よかった…はやて…」

ヴィータがこれでもかという位、安堵していた

「はやてちゃん…大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ、なのはちゃん。」

「じゃあアースラではやてを休ませて…」

フェイトが言い終わる寸前で…

―ゴゴゴゴゴ…

突如地響きがした！

「な、なんだ！？」

「み、みんな！？アレを！」

「そんな…暴走プログラムの残骸が…」

「…一カ所に集まっていく？」

なっ！？こんなの原作になかったぞ！？

『マスター、前方に高エネルギー反応！！』

「（キョウ君…何か…怖い…）」

―ドクン！

「な、なんだ…何なんだよ！！暴走プログラムは破壊したじゃんか！！」

―ドクン！

「まだ終わっていないのか…」

―ドクン…グシャ！

脈打つ闇の書の暴走プログラムの残骸…その残骸の塊から現れたのは…

「…な、なんでアレがこの世界にいるんだよ…」

僕はそう呟いた…

現れたのは…

僕がよく知っている…異形の存在…

この世界に存在しないはずの…

「…アインスト…レジセイア…」

To Be continued

新たな力

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

…アインスト・レジセイア…

スーパーロボット大戦のゲームのキャラが…な、なんで闇の書の残骸からアレが出てくるんだ!?

…もっとも大きさは少し小さいが…

「なんだ!?アレは?エイミィ!!」

〔わ、分からないよクロノ君…闇の書の防御プログラムのコアは消滅したのに…〕

アレが本当にアインストなら…結構ヤバイ?

《…コレハ…アラタナ……ウツワ……》

「ん?声…?」

「どうした?ヴィータ?」

「シグナム、なんか声みたいなのが聞こえたんだけどよ…」

「声？…いや、私には何も…」

「あ！シグナム、私も変な声が聞こえた…念話とも違ったような…」

「本当か？テスタロッサ…シャマル、ザフィーラは聞こえたか？」

「ううん…私達には…」

「…ああ」

《…ミライ…ゲート…ナリエル…》

「あ、また聞こえた！」

「ああ、私も聞こえた！」

「…私には聞こえないけど…キョウスケ君は聞こえた？」

なのはは聞こえないようなので僕に尋ねた…声ってこの声だよな…

「…ああ、聞こえた…」

「えっ！？ホント！？キョウスケ君？」

「…ミライ・ゲート・ナリエル…だろ？フェイト・ヴィータ？」

「うん！」

「ああ！」

「しかし、何で君達だけがあのアンノウンの声が聞こえるんだ？」

「何でって…僕とヴィータ・フェイトの共通点…」

「…美少女とか？」

ヲイ…

「いやフェイト…それだとキョウスケには当てはまらないのだが…」

「うーん…」

僕ってフェイトの中では美少女扱い！？

―ゴゴゴゴゴ…

〔皆！アンノウンに動きあり！…これは…市街地に移動を開始している！？〕

「なんだって！？エイミィ！結界は！？」

〔ダメ！張り直すのに時間がかかっちゃう！！〕

ちっ…あのまま市街地に上陸され暴れられたりしたら…！

「皆は、はやてを連れてアースラに！」

「恭介はどうすんだ！？」

「…あのアンノウンをなんとかする！」

「なっ！？君一人でか！？ムチャだ！タダでさえ防御プログラムとの戦闘でかなり消耗してるのに！？」

「大丈夫…【インフィニットレイヤー】！！」

―パァァン

僕を中心に光が辺りを包み込む

「あ、魔力が…」

「回復していく…」

「…これは一体！？」

「この光…前にキョウスケがなのはを治療した時に見た光だよね？」

「ああ、この光には魔力を回復させる作用がある…はやての酷使したリンカーコアも回復させる作用も少なからずある筈…シャマル、はやてを頼む」

「…はい、分かりましたキョウスケ君！」

これで皆を退避させて…ん？

―ザッ！

「…私は残るぞ！！」

「ヴィータ？」

「…そうだな、なら私も残ろう…シャマルは主を退避させてくれ」

「ちょ…シグナムまで！？」

「キョウスケ、私も残るよ…私はキョウスケのパートナーなんだし…」

「フェイト…」

「私も残るよ、キョウスケ君」

「なのは…」

「…そうだな、ここまで来て君にだけ背負わせる訳にもいかないしな」

「KY…「クロノだ！！」…冗談だ、気にするな」

「私はフェイトが残るなら付き合うよ！」

「アルフ…」

「僕も…なのはが残るなら…」

「ユーノ君…」

なのははユーノを見つめ…

「無理しなくても大丈夫だよ?私は、キョウスケ君がいるから大丈夫だよ♪」

―グサッ!

「うぐっ…」

なのはは見えない言葉の刃でユーノを攻撃!

…哀れだ、哀れすぎるぞユーノ…せめて今後淫獣って呼ぶのはやめてあげよう……多分

「なぁ…恭介…高町なのはって…」

「……鈍感は罪だな……」

『それをマスターが言いますか!?』

えっ!?なんで?

「……ハァ……」

ヴィータも何故ため息を!?

「…な、なのは?」

「だからユーノ君もアースラでシャマルさんとはやてちゃんの治療お願いね?」

「…分かった、いきましょうシャマルさん…」

「え、ええ…じゃあ皆、気をつけてね」

―シュン！

シャマルとユーノははやてを連れてアースラへ帰還、ユーノの顔が絶望に染まっていたのは言うまでもないが…

「後は…アレか…」

―ズゥゥゥン…ズゥゥゥン…

「アンノウンの移動速度が思ったより遅いのが救いだったな…少しは対策を練る時間がある」

「対策って…クロノ、何かいい案があるの？」

「…まず情報が欲しいな…」

情報って言っても…アインストだからな～…あ、闇の書から産まれたから新種のアインストかもしれないし…

「だったら私にまかせてなの！」

「なのは？何をするんだ？」

「まかせてキョウスケ君！
まずは様子見で！ワンショット！
レイジングハート！」

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

―ドォン！

っていきなり砲撃ですかい！？

…しかし

―パシュゥ…

「ふぇ！？消えちゃった！？」

なのはのアクセルシューターは本体に当たる事なく消えてしまった

「も、もう一回！レイジングハートお願い！！」

《Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ》

―ドゴォォォン！！

って威力上げてかよ！？

―パシュゥ…

「ま、また消えたの…な、なんでぇ～～！？」

「…どうやらあのアンノウンには砲撃を無効化するバリアが貼られているみたいだな…」

レジセイアなら…確かビームコートだと思ったが…その魔力版…って

「ＡＭＦかよ！？」

ＡＭＦってたしかＳｔｒｉｋｅｒｓでガジェットが搭載したのが初登場だったんじゃ？

「ＡＭＦ？何それ？キョウスケ君！？」

「アンチマギリングフィールド…魔法結合を消し去るフィールド…だったっけ？クロノ？」

「そこで僕に振るのか！？…まぁ大体そんな感じだ…付け加えるのならＡＡＡランクの魔法防御だ」

「ＡＡＡ！？」×６

そりゃ驚くわな～この高ランクなら

「確かにありゃあ完全に無効化してたな…ったく、せっかく恭介が回復してくれた魔力、無駄遣いしやがって」

「うう～っ…」

なのはは涙目になってスカートの裾を掴んでた

「まぁヴィータ、一応なのはのお陰で相手に魔法無効化バリアがあるって分かったんだし…」

「…恭介が言うなら…まぁ今回は許してやるよ」

なんかヴィータとなのはって…相性悪いのか？…Ｓｔｒｉｋｅｒｓではあんなに仲良かったのに…

『…マスターが原因では？』

…？？だからなんでさ？

『……ハァ……』

だから何で皆してため息を！？

「…だが、これでは我々の魔法が奴には効かないと分かっただけだ…神代、何か手があるのか？」

「ん…魔法が無効化されるなら、それを上回る攻撃をぶつけるしかないかな～」

スパロボだったら敵エネルギーをゼロにして、バリア発生できない状態にしてフルボッコなんだがな

「（ハイ！ハーイ！！キョウ君、だったら新機能使ってみる？）」

「（新機能？どんなの？）」

「（えっとね…キョウ君の新ユニゾンだよ！）」

「新ユニゾン！？」

To Be continued

〔皆～！アンノウンの上陸まで後10分切ったから急いでよ～〕

あ、はい！すみません！！

剣神降臨

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「（新ユニゾン？ってどんな？）」

「（え～と…簡単に説明すると、キョウ君と仮契約した人とユニゾンできるの！名付けで【シンクロユニゾン】！）」

なにそのインチキ仕様は！？

「（ただ、ユニゾンデバイスでない人とのユニゾンだから…持って約１０分が限界なの）」

ま…そのくらいの制限はあるか…

「…おい、キョウスケ…」

「どした？クロノ？」

「何か手があるなら早くしてほしいのだが…アンノウンが陸地に近づくと、さすかに結界張っていない市街地で派手な攻撃は出来なくなるのでな…」

ああ、そっか！

「（で、さくら　どうやってユニゾンするんだ？）」

「（それはね……）」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「と、言う訳でヴィータ、フェイトに白羽の矢が立った訳だ」

「恭介と…」

「一つになる…」

…その表現、いろいろ誤解を招きそうなんでやめてもらえますか…

「正確には僕とさくら＋仮契約者って事なんだけど…」

「「私とユニゾンするんだよ（な！？）ね！？」」

と二人が詰め寄ってきた…ふ、二人とも顔近い！

「…今回は僕が剣に慣れているのを考慮して…フェイトと…」

「ホント！？あの…初めてなんで…その…やさしく…ね／／」

だからその表現から離れて下さいフェイトさん…

「な、な、な…ｏｒｚ」

「ヴィータ…まぁ…何だ、これは戦略的な事なんだから…気にするな」

「な、なんで私のは…ハンマーなんだぁぁぁ！！！」

隣でおもいっきり落ち込むヴィータをシグナムが励ましていた…すまんシグナム、フォローは任した…

「……いいな～フェイトちゃん…こうなったらキョウスケ君を襲っ…ゲフンゲフン！…お願いして仮契約してもらうの！！」

何か…物騒な台詞が聞こえたが…

うっ！悪寒が…

「それで…どうすればいいの？キョウスケ？」

「えーと…仮契約カードを掲げて【シンクロ・イン】って唱えればいいみたい」

「わかった…じゃあいくよ」

僕とフェイトはカードを掲げ…

「「シンクロ・イン！！」」

―キィィィン！

僕とフェイトが光に包まれ…光が収まると…

「…うわぁ！」

「ほぅ…」

「…何でアタシとじゃねーんだ…ハンマーの何がいけないってんだ…ブツブツ…」

若干の悶着はともかく…僕の今の姿は髪は金髪に変化し、瞳は赤く、バリアジャケットは元々の黒に戻り、金のラインが入ったカンジに変化した…早い話し、フェイト要素がプラスされたって事ですね

「ん…うまくいったかな…さくら？」

「（うん…魔力補助、ダメージコントロール、セーフティー管理、融合者フェイト・テスタロッサの体調…オールグリーン！）」

「フェイトは？」

『（うん…なんか変な感じがするけど…大丈夫！）』

どうやらユニゾンは上手くいったようだな

「（次にデバイスをコネクトして）」

※デバイスコネクト…インフィニティと融合者のデバイスを一つに

合成する事

「インフィニティ！バルデッシュ！コネクト！！」

―ガチャ！ガキッ！

「…イフト・バルデッシュ！」

「「「「おお～～～！！！！」」」」

デバイス合成が上手くいき、女性陣から歓声が上がった

「…だからキョウスケ…出来る事なら早く対応を…流石に彼一人で防衛しているのも限界だ…」

ん？彼って…

僕はアインストの方を見ると…

「ぬおぉぉぉぉ！！ここは通さん！！！」

―ガキィィィィ！

―シュルシュルュルシュル！

「はぁぁぁぁ！！」

―バキィィィィ！！

「「「「「……あ」」」」」

ザフィーラがアインストを足止めしていた…すまん
てか、皆も気付けよ！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「よし！いくぞ！イフト・バルデッシュ！ザンバーフォーム！！」

『ザンバーフォーム！』

あ、デバイス音声はインフィニティがメインなんだ…

―ガチャ！ガチャ！

イフトバルデッシュをザンバーフォームに変形…って

「フェイトの使っていたのと違う…てかこの形って…」

「（うん、キョウ君のイメージを参考にして再現してみたんだよ）」

イメージとしては長大な柄に鍔の部分からは…

「ハァァァァ！」

―ブォン！バチバチバチ…

長い魔力刃を形成（※スパロボ、スレードゲルミルの斬鑑刀参照）

…ってＡＭＦで魔力刃って効いたっけ？

「（まかせてキョウ君！…刀身固定！）」

―ピキィ！

さくらが魔力刃を物質化してくれた

…ホント何でもアリだな…

「（これならＡＭＦも関係ないよ！）」

たしかにこれなら効果あるな…

「よし皆！あのアイン…アンノウンの相手は僕がするから手は出さないでくれ！！…いくぞ！フェイト、さくら！」

「『（うん！）』」

―シュン！

僕はアインストに向かって行った

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「な！？消えた！？」

「にゃぁぁぁ!?キ、キョウスケ君何処に行ったの!?」

「…見ろ!神代はもうアンノウンの所にいるぞ!」

「バカな…あの距離を一瞬で…」

「はぁ～～…キョウスケ凄いね～」

ヴィータ、なのは、シグナム、クロノ、アルフがあまりのスピードの為ついていけなかったそうな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

―タッ!

「って、うおっ!?瞬動も使わず一瞬でここまで移動スピードあるのかよ!?」

「(フェイトちゃんとユニゾンした事での効果だよ!…特性は超スピードみたいだね)」

なるほど…人によって特性が色々か変わるんだ…フェイトはさしずめ超高機動戦タイプって事かな

「ザフィーラ！」

「ぬ…キョウスケか？」

「ああ、後は僕らに任せてくれ！」

「…そうか、だが油断するなキョウスケ」

―タッ！

ザフィーラは皆が居る所まで下がっていった…

さて、何でアインストがこの世界に現れたか気になるが…

―カチャ！

「…立ち塞がるなら者は全て破砕する！！」

「……！！」

―グォォォォ！

アインストはその鋭い爪を振りかざして来た！

「させるか！」

―ガキィ！

僕は刀でその攻撃を受け止め…

「はぁぁぁぁ！」

―ザシュ！

そのまま一気に振り抜きアインストの腕を切り落とした

「……！」

―グチャ…グチャグチャ！

だが、アインストはその傷口をすぐさま再生した…

『（うっ…）』

「（気持ち悪い…）」

た、たしかに…闇の書の暴走プログラムの再生もおぞましかった…

これも…

「……ココハ……ナリエ……ナイ…」

『（キョウスケ！また声が聞こえた！）』

「こいつの目的は…！？」

―ギィィィィン！

刹那、アインストは腕を掲げ上空にエネルギー球体を作り出した

『（キョウスケ！危ない！！）』

判ってるってフェイト！

―ズガァァァン！

―シュン！

―ドガァァァァ！！

「ふう…」

瞬動で回避…ってこのスピードほとんど瞬間移動だな…

「（キョウ君！ユニゾンリミットが後５分だよ！）」

「分かった！…一気に決めるぞ！」

「『（うん！）』」

―カチャ

イフト・バルデッシュを構え…

「…再生するなら、それ以上のスピードで攻撃を続けるまでだ！！」

―シュン！

―ザンッ！キュ…ザンッ！…ガガガガガガガンッ！！キュ！ガガガガガン！！

瞬動で移動し、すれ違い様に相手を切り裂く

それを繰り返す単純な作業だが…これを超高速移動で繰り返せば…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのは他Ｓｉｄｅ

「……すごい」

「…私やテスタロッサのスピードを遥かに凌駕しているな…」

「……てか、私には光の線しか見えねーんだが…」

「……これが彼の力か…」

「……はぁ～…私には全然見えないよ」

「……」

なのは達はキョウスケの戦いぶりに圧倒されていた
なのは達から見れば、アインストの周りを高速で飛び回る光しか見えていなかった…

「ふっ…この圧倒的スピード…神代……興味深い…」

ポニーテールの人だけが、口元に不敵な笑みを浮かべ…

「「「「「（バトルマニアだ！）」」」」」

他の皆の心が一致した瞬間でもあった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

―ザンッ！タッ！

斬撃を繰り返す事数十回！

「……！」

『（キョウスケ！相手はかなりのダメージを負ってる！）』

「ああ、次で最後だ！カートリッジロード！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！ドキュ！

「イフト・バルデッシュ！バーストモード！」

『オーライ！バーストイグニッション！！』

―パリン！

―ブォォォォン！

バルデッシュの固定された刀身が砕け、中から膨大な魔力刃が一気に噴出、高エネルギーが天を貫く光の柱となった

「…斬艦刀、星薙の太刀！！」

―バチバチ…バチィィ！

激しく噴き出る魔力の刃を…

「ハァァァァ！！」

―ブォォン！

そのままアインスト目掛け振りかざした！！

「……カンサツ……セカイ…シュウエンノ…」

―ブォン！！

「なっ！！？」

―バシャァァァン！！

僕の太刀は…海を切っただけだった…

『（…消えた？）』

「（……目標、ロスト…キョウ君…）」

「……ああ、逃げられた…な」

僕の太刀が当たる寸前に、アインストは転移して消えてしまった…

「（クロノ…どうやら逃げられたみたいだ…アースラで追跡できたか？）」

「（ちょっとまってくれ……駄目だ、こちらでも反応が追跡できなかった）」

こうして闇の書の暴走を始めとする戦いは終わった…

残ったのは…アインストの謎の言葉と、

「……ここで倒せきれかなった事が後に影響しなければいいが…（だけど何でアインストがこの世界に…？）」

答えが帰ってこない疑問だった……

Site Out

夜天の心

△▼△▼△▼△▼△▼△

――――アースラ病室――――

ここはアースラの病室。ベットには、はやてが眠っている

その周りにヴォルケンリッター達と…リインフォースが心配そうにはやてを見ていた

ヴォルケンリッター、リインフォースＳｉｄｅ

「…やはり破損が致命的な所まで至っている…防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ…私は、夜天の魔導書本体は遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう…」

「やはりか…」

リインフォースが自身の現状を話し、それを聞いたシグナムは、予想していた事態が的中してしまった事にため息をついた

「修復はできないの？」

シャマルがリインフォースに尋ねるが、

「無理だ…管制プログラムである私の中からも夜天の書本来の姿は消されてしまっている…」

「…元の姿が解らなければ戻しようもないと言うか」

「そういう事だ」

リインフォースの絶望的な答えにシャマルは肩を落とし、ザフィーラは冷静に状況を把握した

「主はやては大丈夫なのか？」

「何も問題はない、私からの侵食も完全に止まっているしリンカーコアも正常作動している　不自由な足も、時を置けば自然に治癒するだろう…」

「そう…じゃあ、それならまぁ…よしとしましょうか…」

「ああ、心残りはないな」

シャマルとシグナムは、少なくてもはやてが助かる事に安堵した

「防御プログラムがない今、夜天の書の完全破壊は簡単だ…破壊しちゃえば暴走する事も二度とない…代わりに私らも消滅するけど…」

…夜天の魔導書の破壊…

それは、夜天の魔導書から生まれたヴォルケンリッター達の消滅をも意味していた…

「…すまないなヴィータ」

「何で謝んだよ！いいよ別に…こうなる可能性があった事位みんな知ってたじゃんか…ただ…」

「ただ？」

「…恭介と、もう会えなくなると思うと…」

「…ヴィータちゃん…」

ヴィータは今にも泣きそうな顔で俯いた…

「いいや違う…」

「「「「えっ！！？」」」」

リインフォースのその言葉に皆の視線が集まった

「お前達は残る…
逝くのは…私だけだ…」

そう言い、リインフォースは悲しみを含んだ笑みを浮かべていた…

△▼△▼△▼△▼△▼△

――アースラ食堂――

キョウスケSide

現在僕とさくら、なのは・フェイト・アルフは、クロノとユーノからリインフォースの話を聞いています

「夜天の書の破壊!?」

「どうして!?防御プログラムはもう破壊したはずじゃあ…」

「そうだよ!確かにあの時、みんなでやっつけた筈じゃあ!?」

なのはとフェイトとさくらはクロノとユーノを問い詰めている

…まぁせっかく助けた相手を破壊って言われれば当然か

「闇の書…夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

「管制プログラムって、なのは達が戦っていた?」

「ああ」

「防御プログラムは無事破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度は、はやてちゃんも侵食される可能性が高い…夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消

えないんだ…」

「だから闇の書は防御プログラムが消えている今の内に、自らを破壊するよう申し出た」

「そんな…」

「でも、それじゃシグナム達も…」

―カツッ…

「いや、私達は残る」

「シグナム!?」

「シャマルさん!?」

「…防御プログラムと共に我々守護騎士プログラムも本体から開放したそうだ」

「それで、リインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって…」

「お願い?」

「ええ…リインフォースが最後はあなた達3人の手で送り出してほしい…って」

「3人?私とフェイトちゃんと…キョウスケ君?」

って僕かよ!?

「ああ、リインフォースが神代にも…と」

「……そうか」

ん～…色々準備があるんだよな～

…よし、さくらに頼んでアレ使うか

「それとキョウスケ」

「何だ?クロノ?」

「君には少し聞きたい事があるのだが…」

「……なにかな?クロノ執務官殿?」

ここは下手な事は言えないからな…気をつけないと

「……君は一体何者だ?こちらで調べたが戸籍などは確かにあるが、不自然すぎる所が多々あるのだが」

いきなりそこツッコムか～…ま、今更どうこう言っても仕方ないか…

「そうだな…シグナム達には話したが…僕はこの世界とは違う世界…平行世界から来たみたいなんだ」

「「「「「平行世界!?」」」」」

――説明中――

「…なるほど、つまり君は平行世界での事故で、こちらの世界に迷い込んだと言う訳か…」

「ま、本来なら僕はこの世界に居ない存在って事かな」

何か、なのはとフェイトが不安そうにこちらを見ているが…？

「じゃあ君が使っていた魔法も…その平行世界の物なのか？」

「……ああ」

正確には、居た世界のゲームやアニメの魔法なんだけどね

「では君のデバイス…さくらも平行世界から？」

「…ああ、一応こっちに来た時は未完成だったんだが、こっちに来た時にシグナム達に会い、シグナム達が使うデバイス…カートリッジシステムに興味が出てね…古代ベルカ式魔法を調べていき、その時の知識で先にインフィニティを造って…さらに調べていく内に融合デバイスの記述も発見したので、未完成だったさくらにその融合のノウハウを注ぎ込んで改修し…完成したのが今のさくらさ」

…かなり嘘なんですが（笑）

まさか神様から貰いました♪…って言えないしね～

「なるほど…」

クロノは何か考え込むように何かの資料を見ている…

「キョウスケ君…居なくなったりしないよね？」

「えっ？」

なんでそこまで話しが飛躍する？

「だって…キョウスケが…本来はこの世界に居ない存在なんて言うから…」

あ～…なるほど…

「大丈夫だよ二人とも…だからそんな顔しないでほしいな…二人には笑顔が似合ってるんだから…な？」

「「う、うん！／／」」

「…まぁ…クロノが僕を捕まえようとしたら逃げるが…」

僕が言ったその瞬間、少女二人からクロノに向かって強烈な殺気が放たれた…

「「クロノ（君）…キョウスケ（君）に何かしたら…」」

「な、なんだ！？二人とも…」

「…その口にレイジングハート突っ込んで、零距離スターライトブレイカーぶっ放すの♪」

「…バルデッシュザンバーで足元から細切れにするよ?クロノ…」

怖っ!二人ともそれはフツーにクロノの生命が…ま、いっか♪

…後ろでシグナム達がドン引きしているが…

「ひっ!?ふ、二人とも落ち着いてくれ!?」

クロノの顔色が真っ青になって必死に説得してるな~

「…神代、テスタロッサ達を止めないのか?あの目は本気だと思うのだが…」

「ん?まぁ正直な話し、管理局が僕らをどうするか解らないからね

…その牽制の数は多いに越した事はないからね」

一応グレアムを脅…ゴホン!…お願いしたけど、どうなるか解らないしな

「ゴホン!…で、では次に、闇の書の残骸から生まれたアンノウンについて…君はアレが何か知っているのか?」

知ってますが…アレは僕にとってもイレギュラーだからな~

「…闇の書の残骸から現れたのだから…闇の書の暴走プログラムの一部だったのでは?」

「いや、リインフォースから聞いたのだが…あのアンノウンについては知らないらしい…」

「ええ…」

シグナムとシャマルがクロノの代わりに答えてくれた

「…それに戦闘中に君とフェイト、それに魔導書の守護騎士のヴィータだけにあのアンノウンの声が聞こえたらしいし…君らの共通点は【仮契約を交わした】事だと僕は思うんだが…君は何か知っているのでは？」

鋭いな…伊達に執務官名乗っている訳じゃないか…

「いや、あのアンノウンがどういう存在かは僕も知らない」

別にこれは嘘ではない。

闇の書の残骸から産まれたアインスト…アレがどんな存在で何が目的かは知らないからな～

「そうか、解った…」

何か腑に落ちない感じだが、一応納得した…かな？

「そういや…シャマル、はやての様子はどう？」

「はやてちゃん…今はグッスリ眠ってますよ。ヴィータちゃんが傍らに着いているから大丈夫よ」

「そっか…」

「フフッ…キョウスケ君、はやてちゃんやヴィータちゃんが気になる？」

「そりゃあ気にな…」

―ジィィィ…

ヴッ…な、なんか視線が刺さる感覚が…後ろを振り向くと…

「「「む～～～～！」」」

白と金とピンクがホッペタを膨らまして睨んでました…

「…頼むからアースラは破壊しないでくれよ」

クロノ！！それはこの3人に言ってくれ！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――アースラ病室――

ヴィータＳｉｄｅ

「はやての幸せが私達の1番の幸せ…だからリインフォースも笑って逝くってさ…」

ヴィータは、はやてに布団をかけ出入口に向う

―キィィ

ドアを開け、部屋を出ようとするが…はやてのベットの方を振り向き、

「…夢の中でいいから、褒めてあげてね…あの子の事」

―キィィ…バタン

眠っているはやてにヴィータは一言伝え、部屋を後にした…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

裏でこっそり活動中？

△▼△▼△▼△▼△▼△

――海鳴市、とある丘――

―ザッザッザッ…

雪が積もる中、４人の少年少女達が歩いている…
その先には、長い銀髪をなびかせ…一冊の魔導書を持った女性…

「…ああ、来てくれたか」

リインフォースが居た

キョウスケ？Ｓｉｄｅ

今私…僕は、なのはさんとフェイトさん、それとマス…さくらさんと一緒にリインフォースさんの所に来ました
その目的は…

「リインフォース…さん」

「そう呼んでくれるのだな」

「……」

「貴女を空に還すの私達でいいの？」

「お前達だから頼みたい…お前達のお陰で私は主はやての言葉を聞く事ができた　主はやてを食い殺さずに済み騎士たちも生かす事ができた…感謝している。だから最後は、お前達に私を閉じてほしい…」

そう…はやてさんを暴走プログラムから救う為に、リインフォースさん…夜天の魔導書を破壊する為です…

「はやてちゃんと…お別れしなくていいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないんだ…」

「リインフォース…」

「でもそんなの…何だか悲しいよ…」

「お前達にもいずれ解る…海より深く愛し、その幸福を護りたいと思える者と出会えればな…
フッ…いや、もう出会っているのかもな…」

リインフォースさんは僕に視線を送ってきました…

「「ぅ……／／」」

なのはさんとフェイトさんが顔を赤くしてしまいました…

「……むぅ」

あ…さくらさんが何だか不機嫌そうです…

―ザッザッザッザッ…

「あ…」

後ろからヴォルケンリッターの方々が来ました…

やはりみなさん表情は優れないですね…

「そろそろ始めようか…夜天の魔導書の…終焉だ」

リインフォースさんはそう言い、空を見つめ続けていました…

…頼みますよ、ご主人様…

『（大丈夫ですよ、ああ見えてもマスターは頼りになりますから）』

私の指にある指輪…インフィニティさんがら念話が…

そうですねインフィニティさん…私もご主人様を信じます…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――遡ること数時間前――

キョウスケＳｉｄｅ

「…と言う訳でさくら、お願いな？」

「うん…って何がと言う訳でなの！？」

ノリツッコミとは…さすが神監修のデバイス…高性能だな

「いや、このままだとリインフォース消えちゃうじゃんか？
だから助けようとね」

「だったらみんなに話しても…」

いや～それだと今後リインフォースツヴァイが作製されなくなっちゃうし…

「あ、リインフォースツヴァイちゃんが居なくなっちゃうからか！」

な、なんでさくらはその未来ってか原作知識を！？

「もぅ…忘れちゃったの？以前ユニゾンした時に記憶をリンクしたでしょ？その時にキョウ君の記憶も私に流れてきたんだよ！」

あ…そうなんだ…まてよ…

「じ、じゃあ…シンクロユニゾンしたフェイトにも…？」

それは…ちょっとヤバイかも…

「あ、それは大丈夫だよ！フェイトちゃんとは記憶までリンクしてないからキョウ君フェイトちゃんの記憶何か見えた？」

「いや…ないな～」

「だから大丈夫だよ！」

そうですか～

「じゃあさくら…」

「うん、レリーズ（封印解除）！」

―パァァァ

さくらは封印の杖を出し…

「鏡よ！彼の者の姿を映し、もう一人の彼の者となれ！ミラー《鏡》！」

―キィィン！

カードから少女が現れ…

―シュルルル

その姿を僕に変えた

「ほ～…実際目の当たりにすると…ホントそっくりだな～」

「あ…あの…初めましてご主人様…」

なんか…凄く緊張してる？

「あ～…そんな緊張しなくていいよ！…えっと、ミラー…でいいのかな？」

「は、はい…ご主人様のお好きなようにお呼び下さい」

「じゃあミラー、さくらとも話したんだけど、今回お願いしたいことは…」

―――――

――――

―――

――

―

「はい、分かりました。私はご主人様の代わりに、なのはさんやフェイトさんと一緒に行けばいいんですね？」

「ああ、後これを一応渡しとくよ」

僕は指輪…インフィニティをミラーに渡した

「インフィニティ、ミラーのサポートを頼むよ？」

『それはいいのですが…マスターは私がいなくて魔法使えますか？』

「ま、基本魔法も出来なくはないけど…っと！」

―ふぁ…

「気のコントロールで飛行も出来るから大丈夫さ」

まさに舞○術！

「ほえぇぇ～」

「ご主人様凄いです！」

『相変わらず何でもアリな方ですね』

何でもアリは否定しないが

「それに予備で簡易デバイスも造ったから補助魔法も出来るし、インフィニティ通してそっちの音声も聞こえるしね」

「でもキョウ君、どうやってリインフォースさんを救うの？」

「それは…これを使うのさ」

僕は収納空間から一冊の本を取り出す

「それは…魔導書？」

「そ、僕が造っていた魔導書…名付けて…」

「「『名付けて？』」」

「天空の魔導書だぁー！！」

――そして現在――

現在僕はリインフォース達の上空に待機中です

辺り一帯、天空の魔導書を中心にした術式を複数展開…っと、

あ、下の準備がどうやら出来たようだな…

「…術式起動、対象…リインフォースの……」

Side Out

To Be continued

Ｓｎｏｗ　Ｒａｉｎ

△▼△▼△▼△▼△▼△

―――病院―――

はやてＳｉｄｅ

「……ん？」

ベットの上で目覚めたはやて

上半身を起こし、辺りを見回すが…

―ドクン！

「うっ…ぐっ…」

はやては胸を押さえ苦しみだした

―ドクン！

「ハッ！？…リイン…フォース…」

呟くはやてのその瞳の色は、碧く輝いていた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

△▼△▼△▼△▼△▼△

――鳴海市、とある丘――

キョウスケ？改め、ミラーＳｉｄｅ

リインフォースさんの足元からはベルカ式魔法陣が展開され、陣の中心にはリインフォースさん…周りの小さな円には、なのはさんとフェイトさんと私がデバイスを起動させ待機しています
…さくらさんやヴォルケンリッターの皆さんは少し離れた場所で見守っています

《Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｓｅｔ》

《Ｓｔａｎｄｂｙ》

『準備はよろしいですか？』

「ああ、短い間だったが…お前達にも世話になった」

《Ｄｏｎｔ　ｗｏｒｒｙ》

〈気にせずに〉

《Ｔａｋｅ　ａ　ｇｏｏｄ》

〈良い旅を〉

『貴女の行く道に祝福を…』

「ああ、ありがとう…」

リインフォースさんはデバイス達に御礼を言い、目を閉じて自らの存在を消し去ろうとするその時…

「リインフォース！！みんなー！！」

車椅子に乗ったはやてさんが、息を切らしてこちらに駆け寄って来ました

「ハァ！ハァ！ハァ…」

「はやてちゃん…」

なのはさんとフェイトさんは驚いて

「はやて！」

ヴィータさんは、はやてさんに駆け寄ろうとしますが…

「動くな！！動かないでくれ、儀式が止まる…」

リインフォースさんに一喝され、みなさんその場に留まりました…

「あかん！やめて！！リインフォース止めて！！破壊なんかせんで

ええ！！私がちゃんと抑える！！大丈夫や！こんなんせんでええ！！」

「…主はやて、良いのですよ」

「いいことない！！いいことなんか、何もあらへん！！」

「随分と永い時を生きてきましたが、最期の最後で私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました…騎士達も貴女の傍に居ます。何も心配はありません」

「心配とかそんな…」

「ですから、私は笑って逝けます」

「……ッ！話し聞かん子はキライや！マスターは私や！話し聞いて！！私がきっと何とかする！暴走なんかさせへんって約束したやんか！！」

「…その約束は、もう立派に守っていただきました」

「リインフォース！！」

はやてさんは何とかリインフォースさんを引き留めようとしますが…

「主の危険を払い、主を護るのが魔導の器の勤め…貴女を護る為の最も優れたやり方を私に選ばせて下さい」

やはりリインフォースさんの決意は固いみたです…

「…せやけど…ずっと悲しい思いしてきて、やっと…やっと…救われたんやないか…」

「私の遺志は貴女の魔導と騎士達の魂に残ります…私はいつも貴女の傍にいます」

「そんなんちゃう！！そんなんちゃうやろ！リインフォース！！」

「…駄々っ子はご友人に嫌われます…聞き分けを、我が主」

「リインフォース！」

はやてさんが、リインフォースさんに駆け寄ろうと車椅子を勢いよく運転していますが…あ、危ない！

―ガタッ！

「きゃ！」

―バタン！

はやてさんは転んでしまい、車椅子から放り出され倒れてしまいました…

「あっ…！」

なのはさんは一瞬はやてさんに駆け寄ろうとしましたが…リインフォースさんに言われた通りその場に留まりました

「ひっく…なんで…これから…やっと私が…これから、うんと幸せ

にしてあげなあかんのに！」

「大丈夫です、私はもう世界で1番幸福な魔導書ですから」

「…リインフォース…」

「主はやて、1つお願いが…私は消えて小さく無力な欠片へと変わります。もしよければ、私の名はその欠片ではなく貴女がいずれ手にするであろう新たな魔導の器に贈ってあげてくれますか？祝福の風、リインフォース…私の魂はきっとその子に宿ります」

「…リイン…フォース…」

「はい、我が主」

リインフォースさんは、はやてさんの呼び掛けに優しく応えると振り返り、再び魔法陣に戻りました

「主はやて、守護騎士達、それから小さな勇者達…ありがとう…そして、さよなら…」

―キィィィィン

「ッ！」

―シュゥゥゥ…

リインフォースさんの姿は光の粒子となり消えていきました…

―キラッ

「あ…」

―ヒュゥゥ…

上空から何か光る物が落ちて来て、はやてさんがそれを受け取りました

「う…」

「はやてちゃん…」

「はやて…」

「はやてさん…」

はやてさんは空から落ちてきたリインフォースさんの欠片…剣十字の紋章を握りしめ泣いていました…

ご主人様…後はお願いします…はやてさんの為にもリインフォースさんを…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

祝福の風…再び

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内――

キョウスケＳｉｄｅ

こんにちは、神代恭介です

…なんかこのフレーズ久々だな～（笑）

あ、失礼…僕の前には一冊の本があります…

タイトルは…

【天空の魔導書】

現管理人格…

【リインフォース】

消える筈のリインフォースを助ける事には成功しました…

まぁ…多少の問題はありますが…

「ねぇ、キョウ君…リインフォースさんはどうなったの？」

今別荘には僕とさくら（ついでにインフィニティ）だけです。

はやては現在病院に戻っています…

石田先生に無断で外泊って事になっていたので…ヴォルケンズ共々

説教喰らっている頃でしょう…僕は速攻逃げましたけど

『…マスター、シャマル女史からのメールをお忘れで？』

ハテ？

「キョウく～ん…はやてお姉ちゃん、外の時間で今日すずかちゃんの家に行くから迎えに来てほしいって…」

ああ、一応みんなとクリスマスパーティーする予定だったっけ

『その時にきっと、先生からの説教がマスターにも必ずありますね』

……ハァ、でしょうね～

「で、キョウ君　リインフォースさんは？」

「ああ、起動してみるか…天空の魔導書よ…我が声に応えたまえ！」

―ピカッ！

魔導書から光が溢れ、その中から見知った女性が現れた…

「……ん…ん、ここは…？」

「目が覚めたかい？リインフォース？」

僕の声に反応し、リインフォースの目が一気に見開かれた

「ッ！？…キ、キョウスケ…ですか？」

「ああ、久しぶり…と言う程時間は経ってないか」

「私は…主はやてを救う為、消え去った筈…

…ハッ！ダメだ！！私が存在したら防衛プログラムが暴走し、主はやての命をうばってしまう！！」

あ～…リインフォースでも混乱してるか…

「落ち着けリインフォース！」

「これが落ち着いていられるか！　また私は…私は、主を不幸にし

てしまう！！」

「あ～…すまんが、リインフォースとはやての契約…と言うかリンクは切れてるから…」

―ピタッ

あ、リインフォースの動きが止まった

「キョウスケ…そ、それは一体…？」

「今のリインフォースの現状を説明しよう…落ち着いてちゃんと聞いてくれよ？」

「は、はい…取り乱してすみません」

「まぁいいって…さてリインフォース、君がなのは達に消してもらった後に何があったか説明すると……」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

――とある丘、上空――

キョウスケSide

今リインフォースの消滅を確認…っと
リインフォースの光の粒子が、僕の術式に導かれ集まり…僕は魔導書を開き

「…アブソルプティオーニス！！」

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎｉｓ》

―キュゥゥン！

光の粒子は僕の張った術式の魔法陣をフィルターにして、すり抜けて天空の魔導書へと吸収されていく…

―シュゥゥゥ…バタン！

「リインフォースの人格データ回収完了…っと。後は…」

―ジュゥゥ…

魔法陣のフィルターには黒い塊が張り付いていた

「…これが、改悪されたデータ…」

僕は黒い塊を見つめ…収納空間から一降りの刀を取り出した

―カチャ…

その刀の刀身は冷たく輝き、触れる物を一瞬で消してしまう…無慈悲なほど一瞬で…

「…消え去れ！」

―ヒュ！

僕は刀を…【細雪】を黒い塊に向かって振り下ろした

―ザァァ…

黒い塊はその名の通り細雪となり消え去った…

「後は…リインフォースの取り除いたデータ分を再構築してインストールしないとな…」

とりあえず天空の魔導書は収納空間に閉まっておいて（中の時間は止まっているので保存には最適？）ミラーと入れ代わらないとな～

…ミラーって礼儀正しいから口調でバレそうだしな

僕は事前に打ち合わせした通り、さくら達との合流地点…といっても少し離れた場所だけど、簡易ステルス結界を張りながら向かった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―スタッ

っと…着地成功っと。さて、さくらとミラーは…あ、いたいた

「さくら！ミラー！」

「あ、キョウ君！こっちこっち！」

「ご主人様、お急ぎを」

「ああ！…ご苦労様だったねミラー」

「ありがとうございます…では失礼します」

―パァァァァ

ミラーはカードに戻り、さくらの手元に

「じゃあさくら、はやて達の所に行こうか」

「うん！」

―タッタッタッ！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「うう…」

「はやてちゃん…」

「はやて…」

―ザッザッザッ…

「…はやて、ベットに戻ろう…はやてが風邪引いたらリインフォースも悲しむよ…」

「ぐすっ…キ、キョウスケ君…」

「シグナム、悪いがはやての車椅子を…」

「ああ、解った」

シグナムに車椅子を持って来てもらい、はやてを乗せようと抱き抱えると…

「キョウスケ君…リインフォースが…私、リインフォースに何もしてあけられへんかった…ダメなマスターや…」

あ～…一応無事なんだけど…今後の為とはいえ、なんか少し良心が痛むな…

「…そんな事はないよ、はやてはリインフォースを闇の呪縛から救ってあげたんだ…立派なマスターだよ。だから胸を張って自信もっていいんだよ。

…でも、今だけは無理しないで、僕の胸を貸してあげるから…」

「キョウスケ君……う、う、うわぁぁぁん！！」

「はやて…」

僕の胸で大声で泣くはやてを僕は抱きしめていた…

余談だが、さすがに刺すような視線は今回はなかった…いつものパターンならダークなオーラが満ちていたが…
空気読んだか…黒い執務官にも見習ってほしいものだ…

――――数分後――――

「落ち着いかい？はやて」

「う、うん…／／ごめんな…みっともない所、見せてもうて…服も私の涙で…」

「ああ、大丈夫だよ　さ、はやて…とりあえず車椅子に乗って」

「うん」

「じゃあシグナム、はやてを病院に」

「ああ、解った」

「で、その後…悪いんだけど…石田先生に言い訳をしておいて」

「「「「えっ!?」」」」

いや…えっ!?って…

「はやては一応入院していたんだよね?それが無断で居なくなったって病院は大騒ぎだろうしね~…はやての事だから、病院抜け出して急いでココに来たんでしょ?」

「うっ…せやかて…リインフォースの事があったんやし…」

まぁリインフォースが消えるって時だったしな

「そうですね…石田先生怒ってるかしら…」

あの先生なら確実に…

「ん?言い訳をしておけって…恭介は来ないのか?」

ヴィータさん鋭い!

「ああ、僕とさくらはちょっと用事があるから一旦家に帰って別荘に入るよ」

「…さくらと一緒に?な、なんでだよ!!」

「…事後処理をね、さくらは初起動でいきなり過酷な戦闘をしたか

ら調整しないと…な、さくら」

と僕はさくらにアイコンタクトを送る

「ほぇ!?そ、そうなんだよヴィータちゃん!」

「そっか…さくらちゃん、迷惑かけてもうたな…」

あああああ~!!はやてがまた凹みモードに入ろうと!!

「ううん!そんな事ないよ!!はやてお姉ちゃんが無事なら私も嬉しいし!!!」

「…ありがとな、さくらちゃん」

ナイスフォローだ!さくら!!

「「別荘??」」

あ…少し空気になっていたなのフェイコンビを忘れてた

つづく…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「回想なのに続く、なのですか？」

「すまん…リインフォース。ま、とりあえずお茶でもどうぞ」

「は、はい…では、いただきます」

「あ、お茶菓子もある～！食べていいかな？」

…シリアス感がないな～

少年に祝福された風

前回までのあらすじ…

「…たしか回想中なのでは？」

「…はい、すみません…まだ回想続きます」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「「別荘？」」

なのはとフェイトがハモって首を傾けながら聞いてきた

「ああ、恭介が魔法で造ったミニチュアだ」

いやヴィータさん…それじゃ説明足りませんよ

「あ～…簡単に言えば特殊な結界だよ。結界中で1日過ごしても、外では1時間しか経ってないって仕様の」

「しかも中には、お城や一年中入れるプールとかもあってリゾート気分満載な所や！」

「ふぇぇぇ！？な、何か凄い所なんだね…」

「それもキョウスケが造ったんだよね…キョウスケって何でも作れるんだ…」

まぁ神様から貰ったチートパワーでだけどね

「ま、機会があったら今度見せてあげるよ」

「「ホント！？」」

な、何だろう…二人の目が凄くキラキラしているが…

「あ、ああ…」

二人の妙な迫力にただ頷くしかできなかった…

「「（キョウスケ（君）の別荘…プールもある…水着で悩殺…そしてそのまま…キャ／／）」」

二人が人様にはあまりお見せ出来ないだらし無い顔をしていたが…ちょっと怖い…

「じ、じぁあはやての事、頼むよシグナム・シャマル・ヴィータ・ザフィーラ」

―シュン！

僕とさくらは一旦家に転移した…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シグナム・ヴィータＳｉｄｅ

「…なぁシグナム」

「何だ？ヴィータ？」

「…アレはどうすんだ？」

【アレ】を見てシグナムは困り果て…
結果シグナムはシャマルの方を向き、

「シャマ「さあはやてちゃん！早く病院に戻りましょ」ル、」

「そ、そやねシャマル！石田先生が心配しとるから超特急でもどらなあかんな！」

「はい！」

―シャァァァ

…シャマルは、はやての乗った車椅子を猛スピードで押してその場を立ち去った…

「…逃げたなシャマル」

「ああ!!何気にザフィーラも居ねぇ!?」

ザフィーラも影が薄い（？）為、はやて達と共に立ち去っていた

「何!?…では、我らだけでアレを何とかするしかないのか!?」

二人の目の前のアレとは…

「あっ…そんな…／／だ、駄目だよ～キョウスケ君／／」

「…キョウスケが望むなら…あっ／／」

「「……」」

未だ妄想の中にドップリ浸かって色んな意味でヤバい二人だった…

「……ほっといていいんじゃねーか？」

「……我らは主はやての下に行かねば」

「ああ…」

―ザッザッザッ…

二人はそのままはやて達の下に向かった

ちなみになのは達が正気を取り戻したのは1時間後だったそうな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家、キョウスケ部屋――

キョウスケＳｉｄｅ

っと…部屋に入るのも何か随分久しぶりに感じるな…

―シュン！

「ここがキョウ君のお部屋か～　ちゃんと綺麗に片付いてるんだね」

そりゃ毎日はやてやヴィータが入り浸ったりするから…女の子が来るのに汚くはできないよな～

…別に僕の部屋に居たって面白くもないのに…

『（……ハァ、お二人が報われませんね）』

「さて、別荘はこっちの部屋だから、そこの魔法陣の上に立って」

「ほえぇぇぇ…何かフラスコみたいなのが沢山あるね～」

「修行用とかもあるからね…じゃあ、いくか」

「うん！」

―シュン！

―シュン！

―――別荘内―――

―シュン！

「到着っと…どうだいさくら？」

「ほえぇぇぇ！！お、お城だよ！！お姫様が住んでるようなお城があるよ！！」

お姫様…吸血鬼（エヴァ）が住んでたお城のレプリカだけどね

「さ、中の研究室に行って天空の書の調整しないとな」

「あーー！！おっきなプールだ～！！うわーー！！」

…テンション高っ!?このコ、本当にデバイス?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

ーーー城内、研究室ーーー

僕とさくらは、地下に作られた研究施設にいます

「ねえキョウ君…何で研究室の出入り口が地下で、しかも隠してあるの?」

「ん〜〜　強いて言うなら…」

「言うなら?」

「お約束?」

ーズコッ

あ、さくらがコケた(笑)

「お、お約束って…」

いや～秘密研究所は地下に作るって規則が国際法で決定してるぢゃん

「そんな規則ないよ～～！！」

…ちっ、久々に心を読まれたよ

「ゴホン…ま、まぁともかく調整作業を開始しようか」

「調整ってどうやるの？」

「…元々闇の書は夜天の魔導書を書き換えて作られたんだ。で、今回闇の書から暴走したプログラムを取り除いて夜天の魔導書に戻した…だが、基礎構造は改変されたままなので再びバグ付き防御プログラムが夜天の魔導書の中で再生されてしまう…」

「うん…」

「で、それを避ける為にリインフォースは自ら消え去る…筈だったんだけど、僕がリインフォースをこの【天空の魔導書】に回収する際に、僕が構築した魔法陣を通してリインフォースの管理人格や無傷なデータのみを抽出して回収した」

「でも回収しても、さっき基礎構造とかが改変されたままって…」

「うん、だから…リインフォースの人格と夜天の書の基礎構造と切り離しちゃった♪」

「そ、そんな事して大丈夫なの？」

「あ～…多分ね。夜天の魔導書本来の姿が解らないから元に戻せな

い…それならいっそ別の魔導書を基礎にして管理人格を上手く移し、不足したデータは新たに再構築してリインフォースにインストール…で、基礎構造をこっちの魔導書にすれば大丈夫かな～？って」

「なんで疑問系なの！？」

いや～正直、不安要素と穴だらけの理論満載だからね～

正直、かなり分の悪い賭けだな…

「天空の書にリインフォースの人格が無事そのまま保存されているから大丈夫…とは思うんだけど…とりあえず今からリインフォースの調整だ。手伝ってくれ！さくら」

「うん！まかせて！」

――回想終了――

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「と言う訳なんだよ」

「…つまり、私は…」

「ま、転生？みたいなカンジになるのかな？ん～…初期起動も問題ないみたいだし…なんとか成功かな」

「キョウ君、一週間も別荘で作業に集中してたもんね～」

「そうか…すみませんキョウスケ…ってあれから一週間経ったのですか！？」

「ああ、別荘内時間がね。外じゃまだ7時間位しか経ってないよそれにリインフォースを助けたいから僕が勝手にした事だし気にしないでね…ただ…」

「ただ…なんですか？」

「かなり強引な手段使った為に…色々と問題が…」

「問題…とは？」

「まず、夜天の書から天空の書に人格の移動…言い換えれば生まれ変わりだから…はやてとのリンクは切れた」

「…はい、確かに主はやてとは繋がりが感じられません…」

ううう…そんな悲しそうな顔されるど…

「さらにリインフォース…」

僕はリインフォースを同じ目線で真正面から見つめ…

「な、なんでしょう…／／」

【真正面】から見つめても気付いてないかな？

「リインフォースの修復に、同じ融合デバイスのさくらを参考にしてプログラムを組んでインストールしたんだけど…何か違和感ないかな？」

「…違和感、ですか？」

やっぱり気付いてないか…

「…さくらに聞いたんだけど、さくらは僕とリンクしているから僕が成長すると、それに合わせて外見が成長するんだって…」

体が成長するデバイスってどんなだよ…

「は、はい…そうなんですか？」

そうなんですよ

「で、僕はさっきリインフォースを修復する時に、さくらを参考にしたって言ったよね？…だから、その…」

「……？」

「…さくら、鏡を」

「ハーイ！　じゃん！リインフォースちゃん♪この鏡見てごらん？」

さくらが持った鏡をリインフォースが覗くと…

「……なっ！な～～～っ！！？」

別荘内にリインフォースの声が響いた…

次回、リインフォースの問題点が明らかに！！

『…読者の方にはバレまくりでは？』

女性の魅力は…？

前回までのあらすじ…

鏡を見たリインフォースが…

「……なっ！な～～～～っ！！？」

別荘内でリインフォースが絶叫していた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「キ、キョウスケ…これは一体…？」

リインフォースは自身の姿を見て驚愕していた…

「…私の姿が…縮んでるのですか？」

そうなのです！リインフォースの姿が、なのはやフェイト達と同じ位に縮んでしまったのです！

「…おそらく原因は、さくらのデータを参考にしたプログラムのせいかな」

僕とリンクして同じように成長するルーチンが組み込まれたようだ…

「だ、大丈夫だよリインフォースちゃん、キョウ君が成長すれば元の姿に戻れるよ！！」

「ほ、本当ですか？」

リインフォースは上目使いで僕を見てくる…クッ！リインフォースもこの技を使ってくるとは…

「…多分」

元々さくらを元にしたデータだからな…多分大丈夫とは思うが…

「だったら試してみようか？」

はい？何を言ったのかな？このコは…

「あ！そっか、キョウ君に言ってなかったけど…年齢変化の封印は解除されてるよ？」

「……はあ！？」

あの転生初日に、いきなり封印された能力が！？

「てかいつの間に！？」

「ん～…私がこっちに来てからかな？」

結構前ぢゃねーか！

…まぁ、すぐ戦闘だったし…年齢変化は戦闘にはあまり意味ないしな…

「まぁ、ツッコミたい所は満載だが…試してみるか」

とりあえず２０歳前後…僕がＳｔｒｉｋｅｒｓ時期の姿に…っと

―ボンッ！

「…ゲホ…浦島太郎じゃあるまいに煙かよ…」

一瞬白い煙が僕から吹き出たで、姿を確認すると…

「ん～まぁ予想どうり容姿はクラウドに似てるかな。さくら、リインフォースはどう…」

僕が二人の姿を確認すると…

「ほえぇぇぇ！！こ、これが私！？」

「確かに元に戻りましたね。しかし…／／」

リインフォースは元の姿に、さくらは…外見は【ツバサ】のサクラ姫依りに成長していた
…若干リインフォースの僕の見る目が熱っぽかったのは…気のせいだろう…うん

「見て見て！！キョウ君！！！私こんなに背が伸びたよ！！」

…さくらは中身は子供のままだった…
ま、経験値を積めば中身もそれなりに成長するだろう…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

とりあえず、リインフォースの悩み？は解消され、僕はまた子供Ｖｅｒに戻っている
それに合わせて、さくらとリインフォースも子供Ｖｅｒになった

「これで大丈夫ってわかったよね？リインフォース」

「はい、色々とありがとうございます…キョウスケ」

―ギュ！（ムニュ）

嬉しさのあまり、リインフォースは僕に抱き着いてきた

…リインフォースは確かに身体的には小学生まで縮んでいる…【一部】を除いては、だけど…

「ちょ！？リ、リインフォース！！む、胸が当たってるって！！」

そうなのです…リインフォースの【胸】だけは…かなりの大きさなのです！！

…小学生の身体には不釣り合いなくらいの大きさですよ

…まったく、第一次成長期を無視した法則です

「あっ／／し、失礼しました！」

リインフォースも慌てて離してくれた

「……むぅ」

さくらが自分の胸を触りながら難しい顔をしています…

「どうした？さくら」

「…成長した私って、胸があんまりなかったんだもん…」

成長したサクラは、確かに容姿は美人で体型は…まぁスレンダーでしたね

「ほ、ほらさくら…女性は胸が全てじゃないし」

これってデバイスに言う台詞ではないよな～

「…でもキョウ君、大きい胸が好きみたいだし…」

…なんでさ？

「だって、なのはちゃんとフェイトちゃん、はやてお姉ちゃんも将来胸大きくなるのは解ってるし…」

何で確定事項に…あ、そっか　僕の原作知識を見てＳｔｒｉｋｅｒｓのなのは達の事知ってるんだっけ

「なのは達はなのは達、さくらはさくらだろ？　さくらだって魅力的で可愛いんだしさ」

…なんだろう、デバイスを口説いているような気がするのは気のせい？

「ほ、ほぇ！？そ、そうかな／／」

おっ、ともかく機嫌が治ってきた？…後一押しかな

「そうだって！だから自分に自信を持たないと！」

「そっかぁ…私…可愛いんだ…／／」

さくらは指をモジモジさせながら内面世界に旅立ち、何か呟いていた…

「…ゴホン！…それでリインフォース、君は天空の魔導書の管理人格になった訳だが…まだ魔導書とリインフォースの適合率が完全じゃないんだ」

「そ、そうなのですか？」

例えるなら高性能なソフト入れたが、容量が重くなって処理速度が重くなってしまったコンピュータ位に？

「それでまだ調整が必要なんだけど…少し時間が掛かるんだ…いいかな？」

「そうですか…わかりました。本来なら私は消え去る筈だった所をキョウスケに救われました…感謝しています」

「リインフォース…」

感謝なんて…僕が勝手にした事なんだから気にしなくていいのに…

「…なら私の全てはキョウスケの物ですね／／あ、貴方の望むようにしてください／／」

ってヲイ…

何故顔を赤らめながら、あからさまに妙な方向に持って行こうとする発言を！？

「新たなマスターである貴方になら…私は全てマスターに捧げます／／」

う〝おぉぉぉい！？

さっきまで（ほんの少しだが）あったシリアシな空気は何処に！？

―ゾクッ

な、なんだか寒気が…恐る恐る振り向くと…

「キョ～ぉく～～～ん…」

後ろにはジト目でこちらを見つめる人物…内面世界から帰還したさくらが居た

「…や、やあさくら…おかえり。どうした？」

「リインフォースちゃんに全て捧げてもらって…どうする気かな～？」

「い、いや…どうするも調整を…」

「わ、私……て…」

はい？

「私だって…／／
キョウ君に全て捧げてるんだからー！！」

な、何口走りまくってるんや！？

『ククッ、デバイスまで落とすとは…流石マスター！！将来が楽しみです』

別に誰も落としとらん！！

「キョウスケ、私は別に2号でも…／／」

てかリインフォースも何を言って…ってリインフォースの性格ってこんなんなの！？

『…マスター、私やさくらを創ったのは誰ですか？』

誰って……あ〃っ

「…あのアニオタ神か…」

『そのアニオタ神…もとい、神様がお造りになられたデバイスデータをリインフォースに入れたんですから…性格がこうなるのは当然の結果ですね』

くっ…！！迂闊だった…

その後二人を落ち着かせるのに半日かかったそうな…

「ふ、不幸だぁー！！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「はーっくしょん！！ちきしょー！！」

「か、神様…風邪ですか？」

「いや、誰かがワシの噂をしとるような…」

「そうですか？…それでは神様、例の件はキョウスケ君に一任という事でよろしいので？」

「…うむ、彼には申し訳ないがの…」

「…誰のせいでこうなったと思っていらっしゃるんですか？」

「う〝っ…ま、まあ今回の件はワシも間接的にとはいえ支援せねばならぬな」

「では…」

「諸々の調整を頼むぞ　スクルド君」

「我々はあくまでも支援だけですね」

「うむ、我々神は物語に直接介入はできん掟だしの」

「今回の支援も掟ギリギリですからね」

「そうじゃな…まぁとりあえずは、この書類を【向こう側】のワシ経由でアースラに送らねばな」

「…しかし、また無茶しますね」

「…アレをほっといておいたら、他の神々の管轄区域まで影響がでるしのぉ…」

「わかりました、では早急に…」

「頼んだぞ…さて、これから忙しくなるのぉ…」

少女の想い

キョウスケ達が別荘で漫才をしていた時間より…外の時間で数時間前…

「誰が漫才だっ！！」

…ゴホン…作者にツッコミは入れないで下さい

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―ザッザッザッ…

妄想の中から復活し、雪の降る中なのはとフェイトは二人ならんで歩いていた

なのは・フェイトＳｉｄｅ

「…事件、終了かな？」

「うん…」

「でも、ちょっと寂しいかな」

俯くなのはを見て、フェイトはそっとなのはの手を握る

「クロノが言ってた…ロストロギア関連の事件はいつもこんな感じだって。大きな力に引かれて、悲しい事が連鎖していく」

「…うん」

「私、局の仕事続けようと思うんだ　執務官になりたいから…母さんみたいな人とか、今回みたいな事を少しでも早く止められるように…なのは？」

「ん…？」

「なのはは何か考えてる？これからの事…」

「私は…執務官は無理だと思うけど、方向はたぶんフェイトちゃんと一緒。ちゃんと使いたいんだ…自分の魔法」

「そっか…」

お互い見つめ合い、フェイトとなのはは笑い合った

―ザッザッザッ…

「あっ…」

なのは達の前から街中をアルフ（仔犬モード）を散歩に連れていたユーノが居た

「あ、なのは！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのは・ユーノＳｉｄｅ

合流したユーノは、なのはと共にフェイトをマンションに送った後、なのはを家まで送っている

「ユーノ君、せっかく戻って来てくれたのに殆ど一緒に居られなかったね」

「はは、ずっと調べ物だったからね」

「ユーノ君、これからどうするの？」

「うん、局の人から無限書庫の司書をしないかって誘われてるんだ。本局に寮も貰えるみたいだし、発掘も続けていいって話しだから決めちゃおうかな…って」

「本局だとミッドチルダよりは近いから私は嬉しいかな」

「本当！？」

『嬉しい』と言うなのはの発言で一瞬喜ぶユーノだったが…

「うん！だってお友達が近くに居ると嬉しいよ！！」

「はは……」

…微妙な『お友達』発言をしたなのはを、ユーノも微妙な顔で苦笑していた

――――高町家前――――

「…じゃあ僕はこれで」

「えっ？」

「仕事が決まるまでアースラに居ていいって話しだから」

「そうなんだ…」

「うん」

「ユーノ君、年末とかお正月とか時間あるようなら一緒に居ようね話したい事たーくさんあるから」

「えっ…？は、話したい事？」

「うん！ユーノ君には色々相談に乗ってほしいし…」

「…相談？」

「ユーノ君は数少ない男の子のお友達だから、色々聞きたいんだ～。ユーノ君くらいの男の子ってどんなのが好きか？とか―」

勘がいいユーノはそこで気付いてしまった…

「なのは…それって、もしかして…キョウスケの事？」

「ふぇ！？…う、うん…そうかな／／キョウスケ君ってどんなのが好きなのかってあまり話してくれないから…同年代の男の子に聞いたら解るかな？って」

「そっか…うん、僕に出来る事なら協力するよ」

「うわぁ！ありがとうユーノ君！」

なのはは嬉しそうにユーノにお礼を言うが…

「（…僕の入り込む余地は…もうないみたいだな…）」

ユーノは心の中でそんな事を思いながらなのはに笑いかけていた…

「（…うん、なのはが幸せなら…僕はそれで…）じゃあなのは…僕はこれで」

「うん！本当にありがとうなの！！ユーノ君！じゃあまたね～」

なのははお礼を言いながら手を振り、ユーノはそんななのはを見ながら雪の降る中、帰路についた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――――なのは部屋――――

なのはＳｉｄｅ

部屋に戻り、なのはが携帯を見ると

「ん？」

メールが来ている事に気付いた

内容を見てみると…

〔明日ちょっと時間あるかな？午前中アリサちゃんと一緒に、はやてちゃんのお見舞いに行ってそれから家でクリスマス会をしようかなって思っています

フェイトちゃんも誘ってます　来てくれると嬉しいな〕

すすかからのメールを見つめ…

「ちゃんと話さないとね…今までの事」

なのはは友達に魔法の事を話す決心を改めてした

「あ、フェイトちゃんは勿論キョウスケ君やはやてちゃんも一緒にアリサちゃん達に魔法の事話さないと…」

知らぬ所で、キョウスケ&はやても魔法関係者だと言う事を話さなければならないことが改めて決定した瞬間でもあった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――翌日――

―ブォォォン！

なのはとフェイトは、はやてを迎えに行く為バスで向かっている最中です

「はやて、病院に戻ったんだ？」

「そういえば、入院中に抜け出しちゃったんだもんね」

「確かキョウスケ君もそう言ってたよね。先生に怒られるとか…」

「うん、キョウスケはそれを察して別荘に行ったんだよね」

「にゃはは…キョウスケ君らしいよね～。でも、キョウスケ君の別荘か～。どんな所か楽しみだねフェイトちゃん♪」

「ふふっ、そうだね…なのは、抜け駆けはなしだよ？」

「フェイトちゃんもね…水着後で一緒に買いに行こうね！」

「うん」

何やら以前話した計画を進行中の二人だった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院・はやて病室前――

―ガラッ

なのはとフェイトはドアを開け、

「「おはようございます」」

「あ、おはよう！なのはちゃんフェイトちゃん」

はやてはシグナムに抱えられながら車椅子に乗る所だった

「あれ？もう退院？」

「残念、もうしばらくは入院患者さんなんよ」

「そうなんだ」

「まぁもうすっかり元気やし、すずかちゃん達のお見舞いはお断りしたよ　このままクリスマス会に直行や！」

「うん！」

「…昨日は色々あったけど、最初から最後までほんまありがとう」

はやてはなのはとフェイトにお礼を言うと

「ううん」

「気にしないで」

二人はそう返事をした。

ふと、はやての首にかかっているペンダントに目を向けるなのは

「あっ！それリインフォース？」

はやてになのははは尋ねると、

「うん、あの子は眠ってもうたけど…これからもずっと一緒やから新しいデバイスも、このコの中に入れるようにしようと思って」

はやてはペンダントを大事そうに触れながら答えた

「はやて、魔導師続けるの？」

「…あのコがくれた力やから、それに今回の件で私とシグナム達は管理局から保護観察を受ける事になったし」

「そうなの？」

なのははヴィータに尋ねた

「まーな」

「管理局任務の従事という形での罪の償いも含んでます」

シャマルがなのは達に説明していると…

―シュン！

「…実際は別に罪なんてないんだがな」

「「「「「キョウスケ（神代）（恭介）（君）！？」」」」」

皆の声がステレオ効果で同時に色々ハモった

…って耳がぁ～！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

アースラでの邂逅…か？（前書き）

気がつけばお気に入り登録が１０００件越えてました
ありがとうございます！！

アースラでの邂逅…か？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院・はやて病室内――

キョウスケＳｉｄｅ

「キョウスケ…いつの間に？」

「ああ、ついさっき転移してきたんだよ。それにしても…みんな久しぶり！」

「久しぶりって…キョウスケ君、昨日会ったばかりじゃ…」

なのはは僕の変な発言に困惑している

「あ、もしかしてキョウスケ君…今までずっと別荘におったんか？」

はやては気付いたみたいだな

「ずっとって訳でもないけど…別荘から出た後、クロノから連絡があったからアースラに行っていたんだ

ちなみに、別荘内で過ごした時間は…大体一週間とちょっとかな？」

「え？キョウスケ、アースラに行ったの？」

「ああ…それではやて、クロノに聞いたんだが…せっかく無罪になるってのに自ら志願して罪を償うって言ったそうだな？」

「「ええ！？」」

なのはとフェイトが驚いた顔ではやてを見ていた

「うん…無罪って言うても、このコらが私の為に皆さんにご迷惑かけたんは事実やし…」

「主…」

「はやて…」

「はやてちゃん…」

「……」

ヴォルケンリッター達がはやてを見つめている

「そやから…その罪を皆で背負って、時間をかけて償ってかなあなんなって」

「そっか…はやてがそう決めたなら…」

結局原作どうり罪の償いを選択したか…まぁ多少はその罪も軽減されたからいいんだけど…僕の苦労がぁぁ！

「保護観察もクロノ執務官の取り計らいで形だけという事にしてくれたようだ」

…まぁその事で若干クロノとモメたがね～

「それに任期もそんなになくて、私達もはやてちゃんと一緒にいられるんですって」

まぁ…任期に関しては実際少し違うんだけど

「そうですか」

「私は嘱託扱いやからなのはちゃん達の後輩やね」

「ええ!?別にそーゆーのは気にしないよ～」

「フフッ、そうだね」

「そういえば…キョウスケ君も嘱託魔導師になるの？」

「ん？ああ、実はその事でクロノに呼ばれたんだが…」

僕が少し言い淀むと…

「どないしたん？何かあったん？」

「あ、いや…大した事じゃ…」

ないんだけど…と言い終わる前に

「…ハッ！まさかキョウスケ！！クロノが何かされたの！？」

フェイトが妙な勘違いをした！

「えっ！？そうなのキョウスケ君？…まったくクロノ君はあれほど言ったのに…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩが必要だね…」

それを発端になのはから黒いオーラが…

「手伝うよなのは…私のキョウスケに手を出したらどうなるか教えてあげないと…」

あ～…クロノ、骨は拾ってやるから迷わず成仏してくれ…

「フェイトちゃん？キョウスケ君はフェイトちゃんの物じゃないよ…間違えないでくれるかなぁ…」

…何このカオス時空は！？

妙な殺気に当てられたのか、珍しくシグナムがたじろいでいた

「（か、神代！！早くテスタロッサ達を止めてくれ！！）」

ごめんシグナム…多分無理っす…

「…なのはちゃん？フェイトちゃん？キョウスケ君は私らの家族やで？

なら私らの物に決まっとるやんか？おかしな事言うな～

そう思わへん？ヴィータ？」

「…ああ、恭介は私とはやてのモンだ！！誰にも渡さねー！！」

はやてさん、ヴィータさん…貴女達も参戦ですか！？

しかもいつの間にか僕は物扱いに！？

「…神代、それで実際クロノ執務官に何を言われたのだ？」

シグナムも諦めてスルーすると決めたようだ…

「ああ、実は……」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――――

――アースラ――

「なんだって！！それは本当なのかクロノ！？」

「ああ、八神はやては自らの意志で罪を償いたいと申し出た。」

可能性はあったが…ハァ…はやては人一倍責任感あるからな～。精神が老成しているというか何というか…

「こちらとしても無罪になるよう手回ししたが、それでも納得しな

い局員や他の部署との摩擦がかなりあったので…一応これで示しはつくのでこちらとしては有り難いのだが…」

…ブチッ

「よしクロノ、文句言ってきた奴らのリストよこせ！今から生まれてきた事を後悔させてくる！！あとお前も潰す！！」

何が有り難いだ！どうせそんな事言う奴らはロクなやつらじゃないだろうし…無能な管理局員は今後の為にも早めに抹消しなければ…

「ま、まて！！落ち着けキョウスケ！！僕も君の要望を忘れた訳ではない！これは形だけの措置だと思ってくれ！！てか頼むからデバイスをこちらに向けないでくれ！！」

「…形だけ？納得のいくよう説明してくれるよな？クロノ執務官様？」

「あ、ああ…」

――クロノ真っ青になりながら説明中――

「…なるほど、では保護観察も名目だけで任期もあってないような物だと…」

「ああ、だが彼女が自分から罪を償いたいと言ってきたのは正直驚いたが」

はやては人一倍迷惑かける事を嫌うからな～

「…まぁ、はやて自身がそう望んだのなら僕はそれを尊重しよう」

これではやて達も管理局入りか…今後あの脳みそ達をどうにかしないと…

「それでキョウスケ、君の処遇なんだが…」

処遇？

「はて、管理局には大きな貸しが多々あるはずだか？」

闇の書の暴走したプログラム破壊・アンノウン（アインスト）の迎撃（逃げられたが）・さらにグレアム&猫姉妹のはやて殺害未遂・それの公表を公にしないなど…細かく上げればキリないけどな～

「うっ…ま、まぁ確かにそうなのだが…実は当初上層部は君の力に着目し、君や八神はやてを無罪にする代わりに君達を管理局に入局するよう司法取引を…」

―カチャ

「ま、まて！それはあくまで当初の話しだ！！落ち着いてくれ！！剣を喉元に当てないでくれ！てか少し切れてる！？」

管理局ってのは…自分達の闇は棚上げで、舐めた真似しやがって…

…ま、僕も人の事は言えないが

「で、当初と言うと今は違うのか？」

僕はクロノの喉元に剣を当てたまま問い質した

「ああ、僕としても八神はやてを盾に君を脅す勇気…ゲフン！…そんな卑怯な真似はしたくないし、どうするか悩んでいたら…」

「…いたら？」

「…アースラに命令書が届いたんだ。〔今回の件は当事者である八神はやてと神代恭介の意見を尊重するように〕と…」

…は？なにそれ？確かにこちらとしては都合がいいが…

「君が不信に思うのは解る。だが、この書類を出した人物は信用に足る人物なんだ…」

…誰だっていうんだ？

「…かの伝説の四提督の一人、【ダイテツ・ミナセ】特別名誉副元帥からだったんだ…」

へ～…ん？どっかで聞いたような名前…って、その名前って！？しかも…

「クロノ、今【四提督】って言ったのか？」

「？ああ、言ったが…あ、君は平行世界から来たのだから知らないのも無理はないか…四提督と言うのはだな…」

クロノは四提督について話してくれたが…原作では三提督だったの

に…？しかもダイテツ・ミナセってスーパーロボット大戦のハガネの艦長の名前だよな？これは一体…？

「それで君には一度本局へ出頭して会ってほしいと…ダイテツ名誉副元帥直々のご指示なのだが…聞いているのか？」

「あ、ああ悪い…分かった」

…一体誰だ？

まぁ直々の呼び出しだ…何者か正体暴いてやる！

「…キョウスケ、頼むから副元帥にケンカは売らないでくれ…」

それは相手次第だ…フッフッフ…

――――回想終了――――

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

つづく…

病院での1コマ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病室――

キョウスケSide

「…と言う訳でなんだ…」

僕はシグナムにアースラであった出来事を話した

「そんな事があったのか…しかし大物からの呼び出しだな」

シグナムもさすがに驚いているな

「…もしや我々に手を貸した為にそのような事に！？」

…いや、多分違うな。

それなら、わざわざ呼び出して会おうとする意味がない。それこそリンディさん達に命令すれば済む事だし…

「大丈夫、シグナム達のせいじゃないよ。恐らく相手は僕個人に用があるようだ」

じゃなきゃ、あんな書類まで寄越してこちらの要望に沿うようになんて指示ださないだろう…

「しかし神代…」

それでもシグナムは申し訳ないような顔をしていた

「僕の事は大丈夫だよ。それよりはやての事を…」

「…解った。だが何かあったらいつでも力になるぞ！」

何とか納得したシグナムは僕の手を両手で握り…って、シグナム顔近っ！

「む…ゴホン／／す、すまん神代…それでいつ管理局へ行くのだ？」

「クロノが年末年始は忙しいだろうからって…三が日過ぎてからでいいってさ」

そーいや、ミッドチルダにも正月ってあったかな？

「そうか…たしか主はやても、そのように言われた筈だったな」

「じゃあみんなと一緒に本局に行く事になりそうだな」

「そうだな。主もお喜びになるだろう。」

…行く先が管理局本局ってのがどうかと思うがな…

「キョウスケ君、シグナム…そろそろすずかちゃんのお家に行く時間なんだけど…」

「あ、そうだな…ん？どうしたんだシャマル？」

何故かシャマルは怯えたような雰囲気がある？

「…キョウスケ君、はやてちゃん達の事…忘れてない？」

「「……あ！」」

すまんシャマル…すっかり放置してたわ

しかも、はやて達は睨み合いで互いに牽制してらっしゃるし！？

…女の子の友情なんてはかないな…

『…マスターが主な原因ですよ？』

そうかぁ？主にクロノが普段から人徳ないからすぐ疑われるってのが原因じゃ？

『「「（本人に自覚なし！？）」」』

シグナム・シャマル・インフィニティが心の中で突っ込んだ瞬間だった…

「仕方ない、みんな！そろそろ出かけないと…」

と、その時！

―コンコン！ガラッ

「はやてちゃんいる？って、あなた達！何しているの！？」

石田先生がご降臨されました～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「まったく…ここは病院なんですから、ケンカはダメですよ！」

「「「「…は～～～～い」」」」

石田先生が仲裁に入ったお陰で、とりあえず４人は鎮圧された…あれ？何か忘れているような…

「それとキョウスケ君！シグナムさん達にも注意したけど、はやてちゃんは病人なんですから許可なく外出させないように！！」

…ああ、忘れてた。石田先生のお説教タイム…

「大体許可なく外泊までさせるなんて！！はやてちゃんの容態が急変したらどうする気！？まったく…」

うぅっ、説教から逃げるタイミングを逃したぁぁ！！

「（だ、誰か助けてくれ！！）」

念話で助けを求めたが…

「（我々も石田先生には散々言われたのだ…神代も諦めろ）」

シグナムからの念話で希望は断たれた…こうなるのがわかっていたから避けていたんだが…てかシグナム微妙に笑ってないか！？

「聞いているの！？キョウスケ君！？」

「ハ、ハイッ！」

はぁ…長い説教になりそうだ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院、ロビー――

何とか石田先生からの有り難～いお説教が終わり、僕たちは外出する為ロビーにいます…精神的ライフが０っすよ～

「はやてちゃん、今日はちゃんと帰ってきてね！約束よ？」

「はい、約束です！」

石田先生に念押しされているはやて…

「いつもお返事はいいのにね～ではくれぐれも無理はしないように」

「はい、分かってます」

「じゃあ約束の指切りげんまん！」

「はい！フフフッ」

「ありがとうございました」

はやての指切りの後、シグナムは石田先生に御礼を言いこちらに来た

「気をつけてね～」

「はい！」

はやては石田先生に返事をし手を振っていた

「…ヴィータちゃん、夕べとか今朝やっぱり大変だった？」

なのははヴィータに昨日の事を尋ねると

「ああ、無断外泊だったからシグナムとシャマルがめちゃくちゃ怒られてた」

「…怖い先生なんだ」

それを聞いたフェイトは若干引いていた…僕も説教喰らうのが解っていたから別荘に非難したんだが…リインフォースの件があったからすっかり忘れてたよ…

「でも…いい先生だ」

「そうみたいだね」

ヴィータは勿論シグナムやシャマルも石田先生を信頼しているしね～
…確かに美人だし、芯がしっかりしている女性だからな～
僕も何だかんだ言っても信頼してるし…あの説教がなければもっと
いいんだがな…

「…ッ」

ん？ああ、こちらに目を向けたシグナムと目が合ってフェイトが表
情を強張らせてるのか…

「お待たせ」

「ううん」

「じゃあすずかの家に行こうか。アリサを待たせると「何してんの
よ！遅いじゃない！！」ってキレまくりそうだしね」

「にゃはは、そうだね～」

「じゃあ早よいかんとな～」

なのはとはやて達は出口に向かっていくが、シグナムはフェイトの
前で立ち止まったままだった…
まぁ…大丈夫だよね？

「…テスタロッサ」

「はい、シグナム」

「預けた勝負、いづれ決着をつけるとしよう」

「はい、正々堂々これから何度でも」

「フッ…」

一瞬驚いたシグナムだが

―ナデナデ

シグナムはフェイトの頭を撫で

「…んっ」

フェイトもうれしそうな表情をしてシグナムに撫でられていた

…もしかしてこれがフェイトのバトルマニアフラグだったか？

「キョウスケくーん！！早く行こうよ～」

「早くせんとアリサちゃんに怒られるで～！！」

ヴッ…それは遠慮したいな…

「フェイト、シグナム、早くはやて達の所へ行こう」

「うん！」

「ああ」

こうして僕たちは病院を後にした…

「そういえばキョウスケ、さくらは？」

「ん？ああ、さくらは初起動でいきなりフル稼動させたから、やっぱり少しメンテナンスが必要みたいなんだ…」

なのは達にリインフォースの調整の為に別荘に行く口実でついた嘘だったんだが…ホントにメンテナンスが必要なくらいムチャしたみたいだからな…

「そうなんだ…さくら大丈夫かな？」

「今は冬眠モードに切り替えて眠ってるよ。」

リインフォースの調整もあるし、さくらのメンテナンス…まぁ別荘中なら時間は大丈夫だけど…

「ねぇキョウスケ…今度さくらのお見舞いに行ってもいいかな？」

へっ！？

「そうだな…さくらは我々にとってももう家族みたいな物だ…神代、私もさくらのお見舞いに行きたいのだが…」

…あれ？何気にピンチ？
このままじゃリインフォースの事もバレる？

「あ～…そ、そうだね。機会があったら…」

…さくらとリインフォースって同じ場所にいるから…急いでさくらの治療場所を変えないと…

「どうしたのキョウスケ？何か考え込んでるけど？」

「我々が行ったら問題でもあるのか？」

「あ、いや…何でもないよ　さ、急がないとはやて達に置いていかれる…早く行かないと！」

「？う、うん」

「？あ、ああ…」

ヤバイ、顔に出てたのかな？
フェイトとシグナムが？顔でこっちを見てる…

「キョウスケ～君！！何しとるん？はよ行こ～！！」

…先ずはアリサ&すずかの所に行かないとな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

月村家へ行こう！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

さて、僕となのは・フェイト・はやてはすずかの家に少し遅れたクリスマスパーティーにお呼ばれした為、向かっている…というのが表向きの理由…

実際は、アリサとすずかに魔法の事を打ち明ける為に僕がなのは達に付き合っているというカンジかな？

え？シグナム達は一緒じゃないのか？

まぁ一応、子供同士のクリスマスパーティーって事だからね～　シグナムやシャマルが一緒だとすずか達の家族にどう思われるか…ヴィータは見た目的には大丈夫だったが、アリサと会わしたら…嫌な予感しかしないんだよね～

例えるなら…核弾頭に核弾頭をぶつけるようなカンジ？

ヴィータは一緒に行きたがっていたが、僕がある条件を出したら…

「ッ！ホントか！？分かった！じゃあ今回はいいや！！」

と、喜んで辞退してくれた…

しかし、ただ単に「埋め合わせに今度遊園地に連れていくから…」ってこっそり言っただけで簡単に了承してくれるとは…
ヴィータって遊園地好きだったっけ？

『（マスター…世間一般ではそれをデートというんですが…）』

…なんな変な電波が？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――月村家――

今僕たちは、すずかの家の前にいます…すずかの家がかなりのお金持ちってのは原作で知っていたが…実際に見ると…

「…さすがお嬢様、広い屋敷だな～」

何ていうか…お金って、ある所にはあるんだな～

「あ、キョウスケ君はすずかちゃんの家見るの初めてだっけ？」

「ああ、しかしデカイ家だな～」

「何言うとるんや？キョウスケ君の別荘の方が大きいやん！　てか別荘がお城って…」

僕の別荘ってある意味非常識だからな～

「そうなの？はやて？」

「そうやでフェイトちゃん。ここの数百倍は大きいで～」

「…はやて、さすがにそこまでは広くないぞ？」

何を過大評価してるんだ？この狸は…まぁ拡張すれば可能だけどさ…

「ホラ、キョウスケ君　はやくしないとアリサちゃんとすずかちゃんが待ってるよ？」

そうだな…すずかはともかくアリサは確実に仁王立ちして…

―バンッ！ドカッ！！

「遅かったじゃない！！…ってアンタ誰？」

イテテ…アリサの奴、いきなり扉勢いよく開けるから扉に激突したじゃんか！！

「てか扉開けて第一声がそれかい！？」

「アーーー！！アンタ確か、なのは達と一緒にいた男の子じゃない！？」

てか僕だと気付いてない？

あ、そっか　今認識阻害メガネかけてないからか

「ア、アリサちゃん、彼は…」

なのはが僕の事を説明しようとすると…

「あ、いらっしゃい、なのはちゃん・フェイトちゃん・はやてちゃんに…キョウスケ君♪」

アリサの後から出て来たすずかに…って

「えっ!?すずか、今何て言ったの!?何処にキョウスケが居るのよ!?」

アリサがすずかの発言に戸惑っていた

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――月村家、テラス――

あの後僕の事を説明し、納得してくれたアリサ…だが、

「へ、へ～…これがアンタの素顔って訳なのね……こ、これもアリかも…（ボソッ）」

等と言っていた。

後半何か言っていたようだが、聞き取れなかった…

ちなみに、すずかに何で僕だと解ったかとなのはが尋ねたら…

「えっと…女の勘かな？」

と言っていたが、すずかは僕の耳元で

「…ホントは（血の）匂いでわかっちゃった♪（ニコッ）」

…さすが吸血鬼の血筋というか…一歩間違えたら怖いぞ？すずか…

で、今僕たちはテーブルを囲い、ティータイムを楽しんでいる…のだが、

「さぁなのは！！フェイトもはやても、どーゆー事か説明してくれるんでしょうね？」

現在アリサが尋問中です。

「落ち着けアリサ、なのは達はその事を含めてちゃんと説明するから」

「キョウスケ！！アンタもよ！！特にアンタは変装紛いなマネしてたんだからソコもキッチリ説明してもらうわよ！？」

…うわっ、火に油そそいだか…

「ま、それは置いといて…僕の事を話す前に、まずはなのはとフェイトの事から話したほうがいいかな？

二人ともいいかな？」

順番的には無印からの出来事から説明した方が分かりやすいだろうし

「えっ!?…う、うん。それはいいけど…フェイトちゃん、いいかな?」

なのははフェイトに確認した

…なのははともかくフェイトにとっては辛い思い出だからな…

「…うん、大丈夫だよなのは。それにいい機会だからキョウスケにも聞いてほしいし…私の事」

あ…一応原作で何となく知っているんだけど…

「もしかしてなのはちゃんとフェイトちゃんの出会いから?」

まぁそうなんだが…すずかの想像しているような出会い方じゃないけどな

「うん…なのはと出会った時は、私達…敵同士だったんだ」

こうしてまず、フェイトの口からなのはとの出会いが語られた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

魔法の世界

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

フェイトがジュエルシード事件の事を話し出した

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

魔法の存在

願いを叶えるジュエルシード

それを集めていたフェイトとアルフ

その時に出会った白い悪ｍ…魔導師なのはとの戦い

母親であるプレシアテスタロッサから語られた自身の秘密…

最終決戦で虚数空間に落ちていくプレシアとアリシア…

その話しを黙って聞いていたはやて・アリサ・すずかは驚きを隠せないでいた…

「…その後、私は裁判の為…なのはと別れてリンディさん達と一緒にいたんだ」

「「「……」」」

フェイトの話しを聞いていた三人は言葉を失っていた
あまりにも衝撃的だったのだろう
そして…

「…私が魔法と出会ったのはユーノ君との出会いが始まりなの…」

今度はなのはが語り出した

ユーノとの出会い

託された魔法の力

ユーノの手伝いでジュエルシードを回収していた事

その中で出会ったフェイト…

自分の思いをフェイトに何度もぶつけた事

…その中でアリサとケンカしてギクシャクした事

それを聞いたアリサは

「…あの時そんな事があったワケね…」

と呟いていた

そして最終決戦後…フェイトに

「友達になりたいんだ…」

とフェイトとリボンを交換して一時別れた事を話した

「…なのはちゃんとフェイトちゃんにそんか事があったんだ…」

すずかは呟くように言葉をもらした

「次は私やな…」

はやてもなのは達の話しに驚いていたが、自分の事を語り出した

自分の足の事

僕との出会いの事

魔法の本　闇の書の事

ヴォルケンリッター達の事

自分の家族が自分の為にした過ちの事…
闇の書の暴走…
そして…リインフォースとの別れの事
「…ってなカンジや。」
「じゃあはやてちゃん…足の方は?」
「うん、時間がちょかかるケド、ちゃんと歩けるようになるんよ」
長い間使ってない足の筋力を取り戻す為のリハリビ…別荘使えば時間は何とかなるな
僕がそんな事を考えていると…
「さあ!!後はアンタの番よ!ちゃーーんと説明してもらおうかしら?」
アリサの顔が目の前に…って!?
「アリサちゃん!!キョウスケ君に顔近づけすぎなの!!」
「そや!!離れや!!」
「アリサ…キョウスケに何する気?」
なのは・はやて・フェイトが間に割って入ってきた
…てか最後の人、特に目が恐いんですが…

「うっ…わ、わかったわよ!!」

さすがにアリサもなのは達の覇気（殺意）にたじろいて一歩引いた

「落ち着け三人とも…アリサ・すずか、僕は…この世界の人間じゃないんだ」

「「えっ!!?」」

僕は二人に語りだした

と言ってもクロノ達に話したのと同じ事だけどね

…さすがに転生者とは言えないよな～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

僕の事を聞いた二人の反応は

「……」

「……」

無言…というか

「二人とも、何故にあきれ顔なんだ!?」

二人とも口を開けてポカーンとしていた

「…なのは達から魔法の事を聞いた時も驚いたけど…」

「さ、さすがに平行世界ってのにも予想外で驚いちゃって…」

「にゃはは…やっぱりそうだよね～」

「うん、私達もキョウスケから聞いた時は…」

「ほんま、今の二人みたいな顔で驚いたもんや～」

…まぁそうだろうけどな

「で、何でアンタは変装していたのよ？」

「正確には認識阻害だよアリサ
ま、その時期はシグナム達がなのはとフェイトと一戦した後だったから…僕もその場にいたから正体バレるのを防ぐ為だよ」

「…キョウスケ君、言ってくれれば…」

となのはは言いかけたが、

「私は教えてもらったよ♪」

……ヲイ

「えっ！？ど、どうゆう事！？フェイトちゃん！！」

フェイトよ…サラっと何爆弾落としてんだよーー！？

「私はキョウスケとパートナーになった後に告白されたんだ／／」

「「「「こ、告白ーーぅ！！？」」」」

テラスになのは達の絶叫が響いた…って

「おい、フェイト…そーゆー誤解を招く言い回しはするな。」

「「「「えっ！？誤解！？」」」」

…しかし、見事にセリフがハモるな

「フェイトとは仮契約した手前、ちゃんと説明しとかないと思ったからね」

…実際は不測の事態に備えてと、後は僕の正体はアースラ側に秘密にしてほしいと頼んだだけだけど

「キョウスケ君、仮契約って何？」

すずかが首を傾け？顔で尋ねてくる

「すずか、コレだよ」

と言い、フェイトはカードをすずか達に見せる

「これって…フェイトの絵が書いてあるカード？」

「あ、私も貰ったで！」

はやても（あの時さくらがコピーした）カードを二人に見せた

「これも、はやてちゃんが描いてあるカードだね…いいな～」

すずかは少し羨ましい視線を送る

「……の」

ん？

「どうした？なのは？」

「……るの」

―ゾクッ

な、なのはから不穏なオーラが…

「ど、どうしたのよ？なのは？」

恐る恐るアリサが近寄ると…

「私も…キョウスケ君とキスするの～！！」

なのははトンデモナイ発言をしやがった！？

「な、なんですって～！！！？」

当然の如く、アリサが般若の如く髪を逆立てて叫びまくっ…怖っ！！

「な、なのはちゃん…私もって…、まさか」

…しかもすずかは冷静に分析&ツッコミを入れるし…

『これはまた一波乱ありそうですね』

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

白い悪魔と赤い幸運

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

前回、なのはの欲望という名の叫びのせいで仮契約についてアリサとすずかに説明中です…

「…つまり、仮契約って…その…キ、キキスする事って訳ね…／／キョウスケ、アンタはやてとフェイトとキスしたって事かしら？」

…現在僕はアリサ主導での取り調べを受けています…
後ろではやてとフェイトに取り押さえられている姿が見えるなのは…まぁスルーしよう…

「アンタ！！人の話し聞いてるの！？」

「ア、アリサちゃん…キョウスケ君が可愛そうだよ」

ああ…すずかが女神に見える

「すずか！！アンタはいいの！？キョウスケが…その…キ、キスしたって…」

「…私だって…でも、キョウスケ君の事だからきっと何か訳があると思うんだ」

「……はぁ、解ったわよ　確かにすずかの言う通りよね。キョウスケが節操なくキスする訳ないし…で、そこん所ちゃんと説明してくれるんでしょうね？キョウスケ？」

「あ、ああ…」

何とかアリサの怒りは少しは収まった…のかな？

「んん～！！　こ、今度こそキョウスケ君とキスするの～～！！放してフェイトちゃん！！はやてちゃん！！」

「ちょ！な、なのは！！落ち着いて！！」

「そうや！！…ってなのはちゃん！？何デバイス起動しようとしとるんや！！」

「えっ！？なのは！？ちょっと落ち着いて！？」

「レイジングハート…セーット…」

「あかん！！フェイトちゃん！！バインドや！！！」

「う、うん！！」

―ガチィ！ガチィ！

「なっ！？バインド！？は、放してー！！今日こそキョウスケ君の唇をー！！」

「いい加減に…」

「おちつかんかーい！！」

―スパーン！！×２

はやてとフェイトがどこからか取り出したスリッパでなのはを鎮圧

……まぁ、なのはの事は２人に任せよう…

「きゅぅぅ…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…なるほどね、フェイトやはやては助ける為にね…」

「ほらアリサちゃん　キョウスケ君にそんな事情があったんだかし…」

アリサとすずかにフェイト達と仮契約した状況と経緯…というか人口呼吸的な措置をしたら結果的に仮契約が成立したという事を話した

…え？ヴィータの時は違うだろ？

…ま、まぁアレは事故というか…

スミマセン、二人にはヴィータとも仮契約した事は秘密です
…ヴィータに関しては免罪符が見つからなくて…ｏｒｚ

「…まぁいいわ
じ、じゃあキョウスケ／／わ、私とも仮け「アリサちゃん…」ひっ
!?な、なのは?」

地を這うような声が聞こえ、そちらを振りむくと…

「…アリサちゃん、何を言っているのかな?」

デバイスを起動させたなのはが立っていた…ハッ!?フェイトとはやてがいない!?どうした!!?

「…ああ、フェイトちゃんとはやてちゃんはお花摘みにいったの…
フフ」

こ、怖っ!?
しかもレイジングハートとなのはのバリアジャケットに、赤い何かが付着しているような…き、気のせいだよね?

「…アリサちゃん…ちょっと向こうでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ…しようか?」

あ…なのはの目がハイライトと言うか…単色になってます…

「な、なのは…ちょ、ちょっと…」

さすがのアリサも今のなのはの前では無力でした…

―ガシッ

「…さぁ…イコウカ…」

―ズルズル…

「い、いやーーー！！！た、助けてーーー！！！」

…アリサはそのまま猫のように襟元を捕まれ…

―ガチャ…バタン！！

別室に消えていった…

「キ、キョウスケ君…アリサちゃんは…？」

「……すずか、アリサの事は…」

僕たちはただ、冥福を祈るしかできなかった…

―ガチャ

「いや～、危うくシミになる所やったわ」

「うん、でも中身がほとんどなくなっちゃったね…あ、キョウスケ！どうしたの？」

…アレ？

「フェイト、はやて、何処に行っていたの？」

「ん？ああ、なのはちゃんが（レイジングハートを持って）暴れた時に、そこにあったジャムが私らにかかってもうてな～」

「うん、それで服にシミが着いちゃうと大変だからはやてと洗面所に行って洗っていたんだ
…なのはも一緒にいたと思ったんだけど、気付いたらいなくなっちゃって…」

じゃあ…さっきのなのはのバリアジャケットとかに付着していた赤いのは…ジャムだったのか～
おどかすなよ…

「あれ？そういえばアリサちゃんはどうしたん？」

「…魔王に拉致られた」

「あ～…アリサちゃん、大丈夫やろか？」

多分トラウマは確実だと思うな…

「魔王って…ああ、なのはの事か～」

「…フェイトちゃん、それなのはちゃんの前で言わへん方がええよ」

「うん…分かってるよ　はやて」

…もはやなのはの代名詞だな　魔王って…

―ガチャ

「あ、みんな！！」

噂の魔王様が現れた

「なのは…アリサは？」

恐る恐るなのはに尋ねると

「アリサちゃん？お話が終わったら疲れて寝ちゃったみたいなの♪」

…いや、それは多分…恐怖で気絶したんだろう

なのはよ、友達は大切にしような

その後、メイドのノエルさんとファリンさんがアリサを発見・保護してくれたらしい

アリサは目を覚まし戻って来て、なのはを見た瞬間…

「…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

…トラウマを持っていた…

トラウマの原因なのはは、

「ん～～このケーキ美味しいね♪
はい、キョウスケ君あ～～～んして♪食べさせてあげるの！」

…という状況です

他の3人は…まぁアリサを見て固まっていた

「む～～～！！キョウスケ君！！早くあ～～～んてしてなの！！」

ヤバイ！！なのはの目が段々単色に！？

「あ、あ～ん…」

―パクッ

「美味しい？キョウスケ君？」

「あ、ああ」

「じ、じゃあ私ももう一口／／」

と言い、なのははそのまま手に持ったフォークを使いケーキに自分の口元に…

「「「あああああーー！！！？」」」

急にフェイト達がいきなり大声をだしたが？

―パクッ

「ん～～／／美味しいの～♪」

その光景を見たフェイト・はやて・すずかは崩れ落ちていた

…なんでだ？ケーキならまだあるのに？？

『……ハァ、マスター…少しは気付きましょう』

その後、妙な空気と化した部屋でクリスマスパーティーを楽しん…

だのかなぁ？

ちにみに後日、さくらの魔法『イレイズ』でアリサのトラウマの記

憶を消したので何とか持ち直した…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――同時刻、商店街――

ヴィータＳｉｄｅ

「なぁシャマル、買い物ってまだあんのか？」

私は今シャマルと二人で買い物に来ている

いつもなら恭介が行ってくるんだけど、今日ははやてと出掛けちまったから私とシャマルできてるんだが、

「うん、後は…ここのお店で最後よ
ごめんなさいねヴィータちゃん　お買い物の荷物持ちお願いしちゃって…」

「しょーがねーよ
シグナムも忙しそうだったしな」

シグナムは、たまに顔を出している道場に用があって外出しちまってたしな

「あ、じゃあヴィータちゃんにコレあげるわね」

そう言うとシャマルが数枚の紙を渡してきた

「…何だコレ？」

「さっきお買い物した時にくれたんだけど、商店街の福引券ですってあそこで福引やってるみたいだからヴィータちゃんやってみたら？」

福引、ねぇ…

「ま、せっかくだし…いっちょやってみっか！」

「私はここで買い物しているから、行ってきていいわよ」

「ああ、じゃあ行ってくんな！！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「いらっしゃ～い、おっ！お嬢ちゃん福引かい？」

「ああ、これ福引券」

私は店員のおっちゃんに福引券を渡した

「…じゃあ3回分だ。このガラガラを回してくれ」

「ああ、コレか…」

―ガラガラ…

「あ～残念、ハズレだ～　これ景品のティッシュだよ」

ちっ…ハズレかよ。次こそは…

―ガラガラ…

「おっ！！こいつは…大当り～！！
3等のお菓子詰め合わせセットだ！！」

…うっし！！はやてと恭介と一緒に食べるか♪

さあ…ラスト1回！！

―ガラガラ…

「…ん？こ、こいつは…大当りだ！！
特等の遊園地フリーパスのペア券だ！！」

…なっ！？遊園地ぃ！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

遊園地に行こう！～準備編～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――県外、某所――

キョウスケSide

「へ～　僕が居た世界と同じ名前の遊園地がホントにあるなんでな～」

「向こうと同じだったか？恭介？」

「ああ、遠出した甲斐があったかな…懐かしいな～向こうとあまり変わらないな」

「……そん時は誰と来てたんだ？」

「…ん？何か言ったヴィータ？」

「な、何でもねー！！さ、早く行こうぜ恭介！！」

「？？ああ…あ、その前にヴィータはこの年齢詐称薬・改を」

「ん？ああ、そっか…ゴクッ」

みなさんこんにちは、神代恭介です

さて、今僕はヴィータと二人で遊園地に遊びに来ました

以前ヴィータと約束した遊園地行き…まさか次の日に速攻行く事になるとは思わなかったけど…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

――昨日夕方、八神家キョウスケ部屋――

「明日に？…まぁ予定はないからいいけど…じゃあチケットを手配しないとな」

「あ、チケットならあんぞ！！さっき福引で当てたんだぜ！！」

あの魔境と化した（元）月村家から帰って来て部屋に戻ると、ヴィータが勢いよく部屋に入って来て「明日遊園地に行くぞ！！」的な話しをしてきた

「どれどれ…えーっと…東〇動物公〇一日フリーパス！？

なんだ、こっちにも東〇動物公〇ってあるんだ！？」

「恭介、ココ行った事あるのか？」

「ああ、と言っても向こう（平行世界）でだけどね」

「向こうでか…向こうだとどんな所だったんだ？」

「ん？遊園地と動物園が一緒になった所だよ…ちょっとまって…」

―ピッピ…ピピ

僕は携帯でこの遊園地の事を検索してみると…

「あ、殆ど向こうと変わらない施設みたいだな
でも久しぶりだな～遊園地なんて何年ぶりだろ～」

「何年振りって…そんな昔なのか？」

…まぁ元々の年齢からだけどね

「じゃあ明日ココに行こうか？」

「あ、ああ／／」

「あ、でも…子供だけで遊園地入れたっけ？」

確実に係員に止められそうな…あ、そうだ！！

「ヴィータって変身魔法使えたっけ？」

「変身魔法？あ～…使えなくはねーけど…あんま得意じゃねーんだよな」

「そっか…たしか以前作ったアイテムの中に…」

―ガサゴソ

収納空間にしまっておいたアイテムの中に確か…あ、コレか

「あったあった」

「何だソレ？」

「これは前に作った【年齢詐称薬・改】だよ　これを飲めば見た目の年齢が変わるんだ」

ネギまの面白アイテム…作ったのはいいが実際使うタイミングなかったからな～

「何か犯罪ッポイ名前だな…コレを飲むと成長できんのか？」

「実際は認識阻害の効果でそう見えるだけだけどね…試しに飲んでみる？安全性は保証するよ」

「いいのか？…じ、じゃあ…ゴクン！」

そういえばヴィータって殆ど成長しなかったんだよな～

―ボォン！

「あ、何か視線が高い…
き、恭介…どうだ?」

年齢詐称薬の効果は成功で、僕の目の前には成長したヴィータが居た
年齢的には１５才位だろうか?髪は縛ってなくロングで、スラッと伸びた手足
スレンダーかと思いきや、意外と胸は成長していた…（Ｃカップ位?）
その顔は幼さがまだ残っていたが…

「……」

「ど、どうした?恭介?な、何か変な所あったか!?」

「えっ!?い、いや…何でもない／／」

ヴィータに見とれてました…なんて言えないな…／／

「へ～…こ、これが私か～」

ヴィータは僕の部屋にあった鏡を見て、自身の姿を確認していた

「恭介はコレ飲んだらどうなんだ?」

「あ、僕は自分で年齢変化できるから…と」

―ボンッ!

僕は前に解禁になった年齢変化で１８才位になった

「ほら、これなら遊園地に堂々と入れ…どうしたヴィータ？」

「……／／」

返事がない…？
それに顔が真っ赤だし…

「お～い！ヴィータ～？」

「ハッ！？キ、キ、恭介だよな／／？」

「？ああ、そうだよ…どうしたんだヴィータ？何かボーッとしてたけと…」

「なっ、何でもねーよ／／（見とれてたなんて…言える訳ねーだろ／／）」

…？？

「まぁいいか　元に戻る時は、こっちの方の薬を飲めばいいから」

「あ、ああ　分かった…なぁ恭介、明日の遊園地の事は…」

「皆には内緒だろ？解ってるよ」

特になのはに知られた日には…ゾクッ！…昨日の悪夢が…

そ、それに…たしか明日は、シャマルが病院に行ってはやての看病、シグナムはまだ道場の用事が終わっていないって言っていたから明

日も行くみたいだし…
なのはとフェイトは今頃家族会議で魔法の事を話している頃だな…
説得には明日までかかるかな…主にシスコンのせいで…
はやてはあのまま直で病院に送ったし、ザフィーラは…どうすんだろう?やっぱシャマルと一緒に病院に行くのかな
…よくよく考えたら、明日って皆予定あるんだな…

「じ、じゃあ明日に備えて早く寝ねーとな!!じゃあおやすみ!恭介!!」

―バタン!

ヴィータは慌てて部屋を出ていった…

「…明日の何時に行くか決めてないんだが…」

まぁ、いつもより早く起きれば大丈夫か…同じ家に住んでるんだし

…寝るか

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―――次の日の朝―――

―トットット…

いつもより一時間は早く起きたな
少し早いが皆の朝食の準備でもするか
などと考えながら階段を下り、リビングに入ると…
―ガチャ
「わっ！！？だ、だだだ！？」
キッチンで慌てふためくヴィータがいた
「おはようヴィータ…珍しいな　僕より早く起きてるなんて」
「おおおう！！ま、まーな」
『おはようございますマスター』
ん？
「あれ？インフィニティ？」
ヴィータの指にはめられたインフィニティが挨拶してきた
「あ…ワリィ恭介、コイツちょっと借りてたぞ」
「いや　まぁ別にいいんだけど…所でヴィータ、キッチンで何してたの？」
「なっ！？いや…その…／／」

？ヴィータはしどろもどろしてるが…

『マスター、ヴィータ嬢は皆さんの朝食の支度をしていらしたんですよ。はやて嬢が居ない間、マスターが皆さんの料理を一人で作ってらっしゃるので少しでも負担を減らそうとヴィータ嬢がマスターの代わりに朝食位はと…』

「（お、おい！インフィニティ！？）」

『（任せて下さい。ヴィータ嬢は私の話しに合わせて下さい）ですが、さすがに経験がないので私がサポートしているのですよ。私の中にはマスターやはやて嬢の料理のレシピも記憶してあるので』

「へ～そうなんだ。ありがとうヴィータ（ニコッ）」

「！？べっ別にどーって事ねーよ…私もコレ位はできねーと…／／」

慣れない事をしてるから照れているのか…ヴィータの顔が真っ赤だった

「き、恭介　そんな事より早く顔洗ってこいよ！こっちは私が準備しとくからさ！！」

「あ、そうだね」

キッチンはヴィータに任せ僕は洗面所に向かった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ヴィータSide

「……あ、あぶなかった～」

危うくバレる所だった…

「……インフィニティ、とりあえずオメーには礼を言った方がいいのか？」

一応コイツの機転で恭介にバレずに済んだんだが…

『まぁヴィータ嬢の作ったお弁当の残りを朝食に回した分、半分位はネタバレした感がありますが…向こうに着くまで内緒にできたので良しとしましょう…大丈夫、マスターはヴィータ嬢がお弁当作っていた何て気付きませんから！！何たってマスターなんですから」

…何気に酷いな、このデバイス

「でもよ…初めて作ったんだけどよ…美味くできてっかな？」

私は料理なんかしたことねーからダメ元でインフィニティに聞いてみたら…

『料理のレシピ？ありますよ』

って事でコイツに頼んだんだけど…

『大丈夫、はやて嬢やマスターに比べたらまだまだですが…シャマル女史に比べたら遥かに美味しい筈です』

…それは喜んでいいのか！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

遊園地へ行こう！～出発編～

前回の回想のつづきです

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――八神家、ダイニング――――

キョウスケＳｉｄｅ

「「「「いただきまーす」」」」

「モグモグ…あら、今日はキョウスケ君が作ったんじゃないの？」

「確かに…いつもの神代の味とはちがうな」

今朝の朝食を食べて、味が何時もと違う事に気付いたシャマルとシグナム

「ん？ああ、今日の朝食はヴィータが作ってくれたんだよ」

「何っ!?コレをヴィータが!?」

シグナムが驚いた顔をしていた

「シグナムの口に合わなかったか?」

「いや…少し驚いてな…」

「ええ、ヴィータちゃん　とっても美味しいわよ♪」

「そ、そうか…?／／」

ヴィータのやつ褒められて照れているみたいだな

「ああ、シャマルのとは比べようがない程に」

「ちょっ!?シグナム～～!!私だって練習して腕を上げ「上がったのか?シャマル?」うぅ～…」

どうやらシャマルの料理の腕は相変わらずのようだ…

「今日はシグナムとシャマルは用事があるんだっけ?」

「ああ、道場の方でまだ用件が済んでいなくてな…終わり次第、主の様子を見に行く予定だ」

「私もすぐに、はやてちゃんの様子を見に行くわ

ザフィーラはお留守番してくれるみたいよ」

「神代は今日はどうするのだ?」

「僕もちょっと用事があるからな～　ザフィーラが留守番してくれるのは助かるよ」

「ヴィータちゃんは？」

「わわわ私も…あ～…うん、じーちゃん達とゲートボールしようかなっと」

ヴィータさん…あからさまに動揺しすぎですよ…

―キラン！！

？何か光ったような…？

「じゃあ今日は皆別行動になりそうね」

「そうだな～　あ！シャマル、コレをはやてに飲ませてほしいんだけど…」

そう言うと僕はシャマルに液体が入った瓶を渡す

「これは……惚れ薬？」

「なんでやねん！！」

あ、はやての関西弁が感染したか…

「ウフフ…冗談ですよ。キョウスケ君の存在自体惚れ薬みたいな物ですからね♪」

「だからなんでやねん！！　…ったく、それは僕が作ったエｒ「ほ、惚れ薬何か何で作ったんだ恭介！！！？」…いや、作ってないからヴィータ…」

シャマルが変な事言うから…

「ホントに違うんだろーな？」

「違うよ…これはエリクサーって言う上位クラスの回復魔法薬だよ。飲めば魔力も体力も回復するから…」

今思ったが、エリクサー1本でもロストロギアになるんぢゃね？…ま、今更か

「じゃあコレを飲めばはやてちゃんの足も…」

「確証はないけど…少なくても、はやての足の回復も早くなると思うよ」

闇の書の呪縛がない今ならエリクサーも効くと思うからな

体力回復＝足の筋力回復…となればいいんだが

「解ったわキョウスケ君、後ではやてちゃんに渡しておくわね」

「ああ、お願いねシャマル」

足の回復は原作より前倒しにしても問題ないしね

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――玄関――

「じゃあいってくるわね」

「ザフィーラ、留守はまかせたぞ」

「…ああ、心得た」

「いってらっしゃい～」

「はやてによろしくな！！」

僕とヴィータ・ザフィーラは、外出するシャマルとシグナムを見送っています

「さて、僕…も出掛けてくるか」

「あ、ああ　私も出掛けるから…ザフィーラ留守番よろしくな！！」

「…うむ、二人とも楽しんでくるのだぞ」

「「なっ！？」」

ザフィーラさん、気付いている？

「…フッ我はただ留守を守るのみだ」

そう言い残し、ザフィーラは家の中へ消えていった

「…恭介、ザフィーラって」

「…まぁザフィーラなら問題ないだろう。さ、僕らも支度して行かないと」

「ああ…そうだな」

――――10分後――――

玄関でヴィータを待つこと10分…あ、来た！

「わりぃ恭介！少し手間取っちまった」

慌てて来たヴィータ。何時もの服装と違い、ベージュ色のコートに身を包み、赤い髪に合うような白いマフラーに白のイヤーマフラーその手にはバックを持って、それに膝上までのスカート姿だった

「…この服…ど、どうかな恭介？」

「えっ！？…あ…うん、似合ってるよヴィータ」

いつもと違うヴィータの私服姿…何か新鮮だな

「そっか…／／あ、ありがとな　恭介／／」

「う…うん、じゃあいこうかヴィータ」

「ああ！！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「♪～♪～♪」

…道中ヴィータが嬉しそうに僕の腕を組んで歩いているんですが…

「な、なぁヴィータ　そんなにくっついて歩きずら「歩きずらくないぞ？」…そうですか」

まぁ　ヴィータが楽しんでるならいいか

…しかし

「ん？どうかしたか恭介？」

「いや、何か視線を感じるというか…妙な寒気が…」

「ふ～ん、寒気か…なら私が暖ったためてやるよ…おりゃ！！」

―ギュッ！

ヴィータが組んでいた腕にさらに力を込めて体を密着させてきた！？

「ちょ！？ヴィータ！？」

「へへへッ／／どーだ？これで暖かくなっただろ？」

「はぁ…ま、いっか…」

こうして僕とヴィータは遊園地にへと向かって…

「そういや遊園地って、ここからどの位かかるんだ？」

「ん…電車で乗り継ぎして…2時間かな」

「なっ！？そんなにかかるのか！？…仕方ねぇ…恭介！！転移魔法でいくぞ！！遊ぶ時間が減っちまう！！」

「な！？、ちょっと待て！ヴィータ！！」

電車代わりに転移魔法使うって…

「ホラ！急ぐぞ！！」

「…せめて人目の付かない所で魔法は使おうな…」

…ま、まぁともかく遊園地に向かいました…

―シュン！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケとヴィータが転移した場所近く…物影に隠れて二人の動向を観察していた人影があった…

つづく…

遊園地へ行こう！～暗躍編～

前回までのあらすじ…

キョウスケとヴィータが遊園地に行く為に魔法で転移した場所近く…物影に隠れて二人の動向を観察していた人影があった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

？？？Ｓｉｄｅ

「…やっぱり、今朝のヴィータちゃんの様子がおかしいと思っていたけど…予想道理だったみたいね」

「（はやてちゃん、聞こえる？）」

「（聞こえるでシャマル…そっちの様子はどやった？）」

「（予想道理よ…ヴィータちゃんが昨日当てた遊園地のフリーパス券（※ヴィータは当たった事を秘密にしています）を持ってキョウスケ君とデートするみたい）」

シャマルは昨日の買い物の後ヴィータの様子が普段よりハイテンシ

ョンだったのを不審に思い、福引きの店員にこっそり聞いて発覚したのだった

「ふふ、説明ありがとう作者さん」

作：いえいえ、どういたしまして

「（シャマル？誰と話しとるんや？）」

「（何でもありませんよ？はやてちゃん　それでどうします？）」

まぁ　はやてちゃんの事だから…

「（勿論尾行や！！…私も行ければよかったんやけど…）」

…あれは…タイミングが悪かったですしね～…

――シャマル回想――

――病室――

―シュン！

「はやてちゃん！！」

「わっ！？シ、シャマル…！！？

も～おどかせへんといて～…転移魔法でいきなり現れんのは～」

「ウフフ、ちょっとキョウスケ君の真似をしてみちゃいました」

はやてちゃんの驚く顔って可愛いわね～　キョウスケ君もコレが見たいから毎回驚かせてるのかしら？

「あ、そうだわ！はやてちゃん　キョウスケ君から薬を預かってきたんですよ」

「薬？キョウスケ君の事やから…またとんでもない薬やろうな～」

「たしか…エリクサーって言う上位クラスの魔法薬だそうですよ　これを飲めば、はやてちゃんの足が早く治る可能性があるっていってました」

「ホンマか！？」

「ええ、さ　どうぞ」

「…見た目はリ○ビタン○みたいやな。どれどれ…そういえばそのキョウスケ君はどうしたん…ゴクゴク」

「キョウスケ君はヴィータちゃんとデートみたいですよ？　ヴィータちゃんは私達に隠しているようですが…」

「ブーーッ！？な、なんやて！？ホンマかシャマル！？」

「…はやてちゃん、はしたないですよ…私が家を出る時はまだお家に居ましたけど…今頃は」

「こ、こうしちゃおられへん!!ヴィータはキョウスケ君の2号って事で容認しとるが…二人っきりのデートやて!?う～…気になるで～!!」

…はやてちゃん、2号なんて言葉…何処で覚えたのかしら?

「そんなん昼ドラにきまっとるやんか?伊達に休学しとった訳やあらへんよ!!ちなみに正妻は私や!!」

…はやてちゃん…ホントに将来が不安だわ…

「…ってはやてちゃん!!足の方は?」

興奮している為か、はやてちゃんが私の目の前で自分の足で立って歩いていた

「…あ!!わ、私自分の足で立っとる…」

はやてちゃん自身驚いて…さっきのキョウスケ君の薬が効いたのかしら?

「って感激しとる場合ちゃうな、シャマル!キョウスケ君達の後を追うで!!」

そう言うと、はやてちゃんがドアに手を伸ばして…

―ガラッ

「はやてちゃーん、具合はど…」

石田先生が目の前ねはやてちゃんを見て驚いている…

「は、はやてちゃん!!あ、あ、足の麻痺はどうしたの!!?」

石田先生が勢いよくはやてちゃんを揺さぶって興奮しています…あ
あ、石田先生!!はやてちゃんが目を回しちゃいます!!

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…なるほど、朝起きたら足の調子が良かったから歩いてみたら…
歩けたと」

「はい、そんな感じです」

はやてちゃんが石田先生に説明してますが…

「…はやてちゃん、今日は一日かけて検査しましょうか?」

「ええ!?…あの～私これから行くところが…」

「何言ってるの!!?今まで動かなかった足が急に治るなんておか
しいわ!!
ちゃんと検査しないと何があるかわからないじゃない!!」

「うぅ…そやけど…」

魔法の事が話せればいいんですけど…仕方ありません

「（はやてちゃん？キョウスケ君達の事は私に任せて下さい）」

「（！？シャマル？）」

「（石田先生もはやてちゃんの事を思ってああ言って下さってるんですから）」

「（シャマル…わかった！　でもな…何かあったらすぐ念話で私に教えてな？）」

「（ハイ！わかりました）」

――回想終了――

と言うイベントがあった為、はやてちゃんは現在病院で検査受けながらこちらの様子を伺ってる次第なんです

「（シャマル？キョウスケ君達はどうなったん？）」

「（はい、今…あっ！！転移魔法で遊園地に向かったみたいです！！）」

「（なんやて！？シャマル！！急いで追跡や！！見失ったらあかんで！！！）」

「（はい！わかりました）クラールヴィント…追跡お願いね」

《Ｊａ》

Side Out

つづく……

遊園地に行こう！～撮影偏～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

これまでのあらすじ…

キョウスケとヴィータは遊園地に来ています

…シャマルが尾行しているとは知らず…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「さ、早く行こうぜ恭介！！」

「ああ…あ、その前にヴィータはこの年齢詐称薬・改を」

「ん？ああ、そっか…ゴクッ」

―ボンッ！

ヴィータは年齢詐称薬・改を飲み、見た目を１５才位に変化させた

「じゃあ僕も…ん！」

―ボォン！

僕も見た目が１８才位に変化させた

…え？なんで１８才かって？

ヴィータとのバランスを考えて…かな？

「さ、これで準備ＯＫだな！！早くいこーぜ！！」

ヴィータは僕の腕を掴み入口へと急いで向かった

「わ、分かったから引っ張るなって…」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

キョウスケ君とヴィータちゃんが変身魔法で姿を変え、遊園地に入っていくのですが…

「……／／」

ヴィータちゃんの姿にもビックリしちゃいましたが…キョウスケ君

もなかなか…／／

「（…ル、聞こ…？…シャマル！？どないしたん！？）」

「（ひゃ！！？は、はやてちゃん…も、もう…びっくりさせないで下さい！）」

「（さっきから何度も呼んどるんやけど…どうかしたん？）」

「（い、いえっ！！何もないですよ？あ、今二人とも遊園地に入っていきましたから追跡しますね！！）」

「（あ、うん　お願いな　シャマル）」

…ふぅ、まさかキョウスケ君の大人Ｖｅｒに見とれてました　なんて言えないし…まだ顔が少し熱いわ…／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――遊園地内――

キョウスケＳｉｄｅ

さて、遊園地内に入った僕とヴィータ

「…ん？なぁ恭介、あっちに人だかりが出来てっけど…何だ？」

「ん？…ホントだ　アトラクションの行列…って訳じゃないよな」

パンフレットを見てもここには何もないし…

「…何か面白そうなのがあんのかも…行ってみようぜ恭介！！」

そう言うと行動が早いヴィータは、僕の手を掴み引っ張っていく

「ち、ちょっとヴィータ！？」

ヴィータに引っ張られ、人だかりの中を掻き分けると…

「……テレビ撮影？」

目の前ではカメラ数台と、その前でコメントしている女性（モデル風）がいた

「……では…あ！そこのカップルさんたちに聞いて見ましょう！！すみませーん！！ちょっといいですか～？」

なんだろう、こっちにカメラクルーが向かって来ているような…

「なぁ恭介…何かコッチに来んぞ？」

…あ、やっぱり…

「すみませ～ん…わぁ～　彼氏の方…カッコイイですね～
彼女さんもとっても可愛いですし…もう絵に書いたような美男美女のカップルですね～。
お二人はお付き合いしてどの位なんですか？」

インタビューしてきた女性が何かとんでもない勘違いをしてきた！！

「あ、僕たちはカップ「ハイ！！私達付き合い始めたばかりなんです！！」…ってオイ！！」

ヴィータさんも何かとんでもない事を口走った！！しかも外行用の口調ですか！？

「（お、おいヴィータ！！）」

「（ま、まぁ今だけだし…いいじゃねーか／／
…それとも、私とじゃ…イヤか？）」

うぐっ！！久々に目を潤ませて＋上目使いコンボを発動させたヴィータ…
こ、これは…

「（はぁ…嫌じゃないよ…少し照れるけどね）」

「（ホ、ホントか！？…よ、よかった／／）」

「あの～…どうかしましたか？」

インタビューしてきた女性がこちらの様子を見て何かあったのかと尋ねてきた

「あ、いえ　そうですね～　彼女とは付き合い始めたばかりで照れちゃって（ニコッ）」

「!?そ、そうですか～／／（うわ～…このコ凄くカッコイイ…この彼女、羨ましいわね～）

コホン!

実は、遊園地に来るカップルの中からベストカップルを選ぼうって事で、今沢山のカップルの方にインタビューしているんですよ～

あ、コレ今生放送中なんですが…撮影いいですか?」

いいですかも何も…既に撮影してんぢゃん!!

「はぁ…まぁいいですけど」

「ありがとうございます!!まずお名前宜しいですか?」

「…キョウスケです」

「ヴィータだ…です!!」

一瞬、地が出たな…まったくヴィータも馴れない敬語使うから

「キョウスケ君にヴィータさんですか～

ヴィータさんは外国の方なんですか?綺麗な赤毛ですね～」

「あ…ありがとうございます…／／」

インタビューしてきた女性に褒められ、顔が赤くなったヴィータ

「キョウスケ君の方もカッコイイですね～。今までインタビューしたカップルの中で断トツですよ♪」

「あはは…そ、そうですか」

それから色々と聞かれ、インタビューは終了した

後にスタッフの方に粗品を頂いたり、インタビューしてきた女性からは…数字や英文字が書かれた紙をコッソリ渡され…

「彼女にはナイショよ…（ボソッ）」

と、耳元で囁かれた…

これを一体どうしろと!?

「どうした?恭介?」

「ふぇ!?い、いやなんでもないよ…さ、やっとインタビューから解放されたんだ!遊びにいこうかヴィータ?」

「ん…ああ!!もちろんだ!!」

さて、まずは何に乗ろうか…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――少し時間を遡り……――

――フェイトのマンション――

フェイトＳｉｄｅ

昨日なのはの家族の人達に、私達の魔法の事…そしてこれからの事を話した

さすがに魔法の事を話した時は驚いていたな…

なのはが管理局に入りたいって言った時は、初めはみんな反対していたけど（特にお兄さんが）リンディさんの話を聞いてくれてやっと許してくれた

今はリンディさんとなのはのご家族と話を詰めていて、私となのははマンションの方で休んでいます

「ふぁ…お父さん達の説得に朝までかかっちゃったね」

「うん…でも将来の事だから仕方ないよ」

「うん…そうなんだけど…特にお兄ちゃんの説得が大変だったよ～！！」

「アハハ…確かに」

私でもちょっと引いたかな…

「あ、もうお昼だね～　フェイトちゃん、テレビ付けていいかな？」

「あ、うん　いいよ」

―カチッ

なのははテレビを見てるみたいだし…

「なのは、お昼は私が作る「フ、フェイトちゃん！！」よ…って、どうしたの？なのは」

なのはがテレビを凝視したまま何か驚いているけど…？

「このテレビに出てる人…キョウスケ君とヴィータちゃんに似てるんだけど…」

…えっ！？

「ど、どれ！？…って、なのはぁ…キョウスケは私達と同じ年齢だよ？

この人は似てるけど、大人の人だよ」

テレビに写っている人は、確かにキョウスケに似ているけど…キョウスケも成長したからこんな風になるのかな…／／

「でもでもっ！！キョウスケ君なんだよ！？キョウスケ君ならちょっと大人になる位、朝飯前の晩御飯だよ！？」

…なのは、少し落ち着こう…ね？

「それに！！隣の女の人！！！どう見たってヴィータちゃんだよ！！？」

…確かに言われてみれば、女の人はヴィータの面影が…というより…思いっきりヴィータだよね？

私がそう考えていると…テレビから

『ありがとうございます！！まずお名前宜しいですか？』

『…キョウスケです』

『ヴィータだ…です！！』

……あ、コレ間違いなく本人たちだ

私となのははテレビに近づきキョウスケ達の声を聞くと

『キョウスケ君にヴィータさんですか～

ヴィータさんは外国の方なんですか？綺麗な赤毛ですね～』

「ねぇ…フェイトちゃん…ヴィータちゃん褒められてるね…」

「う、うん…そうだね…」

私から見ても…今のヴィータは綺麗で可愛いらしいし…胸も…
だ、大丈夫!!私だってまだまだ成長するはず…!

『キョウスケ君の方もカッコイイですね～。今までインタビューしたカップルの中で断トツですよ♪』

『あはは…そ、そうですか』

このインタビューしてる女の人っ!何キョウスケとヴィータをカップルなんて言ってるんだろう!!
キョウスケも否定しないで何かデレデレしてるしっ!

「ねぇなのは…何か私、凄くイライラするんだけど…」

「奇遇だねフェイトちゃん…私もなの…」

…これはキョウスケが悪いんだよ?
私に黙って浮気なんてするから…

二人の手には、おもいっきり握り締められたレイジングハートとバルデッシュが

―メリメリッ!!

と、音を起てていた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

―ガチャ

「たっだいま～　なのはちゃん！フェイトちゃん！
お腹空いたでしょ？エイミィさん特製チャーハン作っちゃ…うわっ
！？な、なに？この負のオーラは！？」

帰宅したエイミィが見た物は…

「「…フフッ…フッフッフ…」」

テレビを見ながら不気味に笑う少女二人だった…

つづく…

遊園地へ行こう！～激甘編～

これまでのあらすじ！

キョウスケとヴィータは遊園地に入ってインタビューを受け、やっと解放された

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

しばらく遊園地内を歩く僕とヴィータ

「さて…と、ヴィータ何処いこうか？」

「う～～ん…あ！アレなんかどうだ？」

そう言いヴィータが指差した先には…

「…ゴーカート？へぇコレは二人乗りなんだ」

「面白そうだな！一緒に乗ろうぜ！！」

「ああ、いいよ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「運転は恭介がしてくれよな。わ、私は隣でしがみ着いてっから／／」

「？…そんなにスピードでないぞ？」

「い、いいんだよっ！／／」

そう言うとヴィータは僕の隣に座り腕をガッチリ組んできた

「…じゃあいくよヴィータ？」

「ああ♪」

僕はハンドルを握り、アクセルを…踏んだ！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ヴィータＳｉｄｅ

―ブォォォン！！

恭介がアクセルを踏んだ瞬間、カートが急発進した

「わっ!?ちょ?恭介っ!?」

お、思ったより速い!?

「キ、恭介!!前!!カーブだぞ!!」

こんなスピードで曲がれんのか!?

「しっかり捕まってヴィータ!!
…イナーシャルドリフト!!」

―ザザザザッ!!

カートが横に滑りながら向きを変え…

―ブォォン!!

急カーブを一気に駆け抜けた!?

「いくぞ!!アス○ーダ!!」

ア、ア○ラーダって誰だよ～!!?

「…次のカーブで勝負だ!!リフティングターン!!」

―ブォォォン!!

なっ!?カートがジャンプして空中で向きを変えっ!?

―ドォン！！

「うおっ！？」

カートが着地した反動で車体がかなり揺れた

「キ、恭介！？安全運転ーー！！」

…この時私は思った…

恭介には車のハンドルは持たすまいと…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

いや～カートとはいえ久々の車の運転、面白かった～…ん？

「どうしたヴィータ？疲れた顔して？」

何かヴィータがグッタリしているが？

「…いや、何でもねー…」

と言ってもな～…

「あ、ヴィータ　何か飲み物買ってくるよ！ヴィータはそこのベンチで待ってて」

「ん…ああ、ワリィな」

そう言って僕は売店に行き、コーラとオレンジジュースを購入。

「おまたせ！ヴィータはオレンジでいいっけ？」

「ああ、サンキュ～…ん」

―ゴクゴクッ

「ぷはぁ～生き返る～」

美味しそうにジュースを飲むヴィータだった

「ゴクゴクッ…次は何処行こうか？」

「う～ん…おっ！？あそこ何だ？」

「あそこ…？」

ヴィータの目線を辿ると…

「…えーと、メリーゴーランド？」

「恭介！！あの馬に一緒に乗ろうぜ！！」

う〝…正直あれは…ハズイかも…

「…どうしても？」

無駄だと判っているが…一応尋ねるが…

「ああ！！面白そうじゃん！！」

説得失敗…仕方ないか～

「じゃあコレ飲んだらいこうか」

「ああ♪」

ま、ヴィータが楽しんでくれればいいか

「そういや恭介が飲んでんのは何だ？」

「ん？コーラだけど…あ、こっちがよかった？」

「あ～…なぁ、それ一口貰っていいか／／？」

「ん？いいよ　ハイ」

やっぱコーラ飲みたかったのかな？

「あ、ああ…ありがと…ゴクゴクッ…／／」

何かストローを口にしてから顔を赤くして飲んでるが…？

「あ、じゃあ僕もヴィータのオレンジジュース一口貰うね」

―ゴクゴクッ…

「ん～果汁１００％だったんだ…ってどうしたヴィータ？そんな驚いた顔して」

こっちを見て目を見開いているが

「なっ！？い、いいいや！？なんでもっ…／／あ～…恭介、その…美味しい…か？／／」

「ん…ああ美味しいよ（ニコッ）」

基本的に甘いものは好きだからね～

「そ、そっか…／／」

ヴィータの顔が更に赤くなった…風邪？

―パシャ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

今僕は、ヴィータのリクエストでメリーゴーランドの馬に乗っているんだが…

「…なんでさ」

「へへっ／／この方が心地よくてな♪」

皆さんに説明すると…僕はフツーに馬に跨がっているんですが、ヴィータはその僕の前に足を揃え、横向きにちょこんと座り…

―ギュッ

そのまま僕の身体に抱き着き密着してきた

「…ん～、恭介の匂いって何か落ち着くんだよな／／」

そんな事を言うヴィータに離れてとは言える訳もなく…ハァ

そうこうしているうちにメリーゴーランドが回りだした

…しかし、何処からか刺すような視線が…？

―パシャ

ん？何かさっきから音も聞こえるような？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

メリーゴーランドから下り…

「ふぅ…あ！もうお昼か～ヴィータお腹空いてない？」

いつの間にかお昼過ぎてるし

「あ、ああ…そそそうだなっ！！」

「じゃあ…どこかのレストランにでも入ろ「き、恭介!?」う…ってどうした？」

「あ～…き、今日私がお弁当作ってきたんだけどよ…よ、よかったら…その…／／」

そう言いながらヴィータは手に持ったバックを僕に見せる…

「えっと…じゃあ貰おうかな」

「ああ／／」

「じゃあ向こうのカフェエリアで食べようか」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

テーブルに着き、ヴィータは持って来たお弁当を出し…

「じ、じゃあ開けるな…／／」

ヴィータが持ってきたお弁当は二段重ねで一段目にはご飯が、二段目にはおかずが入っていた

…あれ？このおかずって最近見たような？

「実は恭介にナイショで今朝作ってたんだけどよ…　いきなりバレそうになっちまったからインフィニティがごまかしてくれて…今朝の朝食は、この弁当の余りだったんだ」

ああ、だから見覚えあるおかずがあるのか～

「そっか～　お弁当作るのって大変だったんじゃない？」

「レシピとかはインフィニティが教えてくれたんだけどよ…」

『ヴィータ嬢の包丁の手つきが危なっかしかったですね～
手の平に極薄のプロテクションを常時展開しなかったら…ヴィータ嬢の指は絆創膏まみれでした』

「イ、インフィニティ！？」

あ…そういやすっかり存在忘れてた…

『あ、大丈夫です。すぐスリープモードに戻りますから…では』

…コイツ、出番がないから出てきたのか！？

「…とりあえず、お弁当頂こうかな」

「お、おう…あ！恭介、ちょっと待った！！」

ヴィータがくいっと僕の袖を引っ張り、箸の動きを止めた

「ん？どうした？」

「あ、その…ち、ちょっといいか／／」

？何やら緊張した感じでヴィータが僕が食べようとしていたおかずを箸で取ると…

「あ、あ～～ん／／」

「……」

ナンデスカ？コレハ？

「あ、あ～～～ん！／／」

「……あ～ヴィータさん、これは？」

「こ、これはだな…その…／／

…お弁当を食べる時には、こうした方が恭介が喜ぶからって…インフィニティの奴が言ってたんだけどよ…／／」

…こんのデバイスは～！！

「あ…もしかして嫌だったか？」

そう言うとヴィータの表情が悲しみに染まって…
いや！別に【あ～ん】自体はいいんだが（えっ！？いいのか僕！？）
周りの人目がちょっと…／／

そうして悩む事1秒…

「じ、じゃあ…あーん／／」

意を決し、ヴィータの持つ箸の方に向け口を開けた

「あ、あ～ん／／」

―パクッ

「モグモク…うん美味しいよヴィータ！」

「そ、そうか！？じゃあ今度はこっちのから揚げを…」

って、あ～んは続くんですか！？

それから何度も【あ～ん】をされつつ、ヴィータの手料理を食べた…

しかし、僕もやられっぱなしって訳でもなく…

「ほらヴィータも、あ～ん」

「い、いいって！私は自分で食べるから！！」

「あ～ん」

「だ、だから…／／」

「あ～～～ん！」

「…あ、あ～～ん／／／／」

―パクッ

というように僕もヴィータに【あ～～ん】攻撃をしていた

「…ん？ヴィータ、ぼっぺたにご飯粒がついてるぞ」

「えっ？どこだ？ここか？」

ヴィータは自分のほっぺたを触って探しているが

「あ、そっちじゃないよ　こっち…」

僕はそっと手を伸ばしてヴィータの頬についた米粒を取り

「とれたぞヴィータ」

「あ、ありがと恭介／／」

「どういたしまして…パクッ」

「あっ！？…／／」

ヴィータが本日二度目の驚き顔

「ん…？どうかしたかヴィータ？」

「うぅ…／／」

顔を真っ赤にしてヴィータは俯いてしまった

……屋外だからやっぱ風邪か？

―パシャ

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

遊園地へ行こう！～発見編～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

ヴィータとの（恥ずかしい？）昼食後、僕たちは散歩がてら遊園地内にあった大きな池に来ていた

「恭介！！あそこで売ってんの何だ？」

「ん？ああ、この池に居る鯉の餌だな」

「…コイって何だ？」

あれ？知らなかったのか？

「ザックリ言うと魚だよ」

ホントにザックリ説明した（笑）

「へ～…ちょっと見ていこうぜ！なっ？」

「いいけど…あ、じゃあせっかくだしエサを買っていこうか」

「おう！！」

と、いう訳で僕たちは鯉のエサを買い、池に向かってエサを投げると…

―バシャバシャバシャ！！

「うぉ！？す、すげーな…」

うん、正直引くくらい…

エサをちょっと撒いたら…鯉の大群が水面に顔を出して口をパクパクさせている…それはもう水面を隙間なく…

「これはまぁ…凄いというか…」

正直圧倒された

「すげー…コイってメチャクチャ食うんだな」

いやいやいや！！多分ここが特殊すぎるんすよ！！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「は～…すごかったな恭介～」

「あの食欲は確かにね～…」

だがヴィータ、順調に物語を進めれば数年後にもっと凄い食いっぷりを目の当たりにするんだぞ？
…スバルとかエリオとか…たしかギンガもだったな～…ん？

「あっヴィータ、ここから先は動物園ゾーンみたいだぞ？」

そう、ここの遊園地は動物園もあるのです

「動物！？　なぁ恭介、ウサギもいるのか！？」

「ウサギは…あっ、居るみたいだね
パンフレットによると直接触れるみた「いくぞ恭介！！」い…って、おわっ！？」

ヴィータは僕の手を引っ張りながら、凄いスピードでウサギゾーンまで一直線に向かった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ふぁ～…モコモコだぁ～」

ヴィータはウサギゾーンに到着するや否や

「ウ、ウサギだぁぁーー！！すっ…げーカワイイーーー！！」

目の色を変えウサギに抱き着く…というよりは抱擁している…
以前あげたウサギのヌイグルミ（ゴスロリＶｅｒ？）がお気に入り

で、常々本物に触りたかったらしい…

「な、なあ恭介　コレ持ち帰ってもいいのか!?」

いや　ダメだろ…?

「動物園の動物だからダメだよヴィータ」

「ええ～～～!?なんでだよ～～～!?」

それからヴィータを説得するのに数十分かかった…

「さ、ヴィータ　せっかく動物園ゾーンに来たんだから他の動物も見ていこ?」

「…うぅ～仕方ねぇ…」

名残惜しそうにして…と言うか、そろそろ移動しないと…飼育員の視線が痛いんですよ!?

あんだけ騒げば当然かぁ…

―――――

―――

――

―

と言う訳で、僕たちは園内を歩き回ってます

―テクテクテク…

「恭介!!アレは何だ!?」

「あれはキリンだよ」

―テクテクテク…

「あっちの動物は何だ?」

「あれは象だよ」

―テクテクテク…

「あっ!?あれは何だ?」

「ん?ああ、あれはミジュマルだよ」

―テクテクテク

…ん?今、何か有り得ない動物の名前言ったような?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

動物園ゾーンも一通り見て回って来た僕たちは、再び遊園地ゾーンに戻って来た…のだが…

「ヴィータさん…どうしてもコレに乗りたいと？」

「おうよ！！この乗り物おもしろそーだしなっ！」

…正直、遊園地に来てから初めに目に着いたアトラクションであった…

だからこそ見なかった事にしてスルーしてきたのだが…

「…もしかして、恐いのか？」

ギクッ！

「いいいやだな～ヴィータさん！！恐い訳無いですよ～ただ嫌いなだけですヨ？」

…僕の目の前にある乗り物…それは…

「だよな～！！普段からメチャクチャな飛行魔法で空を飛んでる恭介が【ジェットコースター】が恐い訳ないよな～！！」

……ジェットコースター【レ○ーナ】です…

しかも木製のコースターってナメてる？ねぇナメてますよね！？こんな安全性要素わざわざ減らした乗り物考えた奴誰！？今すぐバハムートの餌食にしてやる！！

「…おっ私達の順番だ！早く乗ろうぜ？」

「…そだね」

…もう行くしかないのね…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―カタカタカタカタッ

コースターが徐々にレールを上っていく…

よ、よりにもよって1番前とは…

「いよいよだな！恭介っ」

ヴィータはワクワクが止まらないようだ…

「…な、なぁヴィータ…実は…」

僕が言いかけたその時…！

―ゴォォォォ！！

一気に急降下した！！

「いやっほーー！！」

「¢£&@?!?」

…グッ、このフワッと感が…ッ!!

―ゴォォォォ!!

―ゴォォォォ!!!!

―ゴォォォォ!!!!!

―――――

―――

―

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ヴィータＳｉｄｅ

カタカタカタカタ…

「いやー面白かったな～」

結構迫力あったし

「恭介、面白かっ…」

隣の恭介を見ると

「……」

って！真っ白に燃え尽きてる！？

つか、口から魂が抜けかけてねーか！！？

「き、恭介ーーー！！？しっかりしろー！？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「……ん…」

なんか…後頭部に柔らかい感覚が…

「あ、気がついたか恭介？」

…目の前にヴィータの顔が……？

「ヴ、ヴィータ？…ああ…僕は…」

気絶してたのか…

「よ、よかった～…驚かすなよ恭介～…心配しちまったじゃねーか！！」

「ごめん…ヴィータ、実は…どうも絶叫系はちょっと苦手でさ…」

転生前から苦手だったからな…

「でもよ、いつもアレ以上のスピードで飛んだりしてんのに…？」

「あ～…自分で飛んでる分には大丈夫なんだが…ホラ、アレだよ。車酔いする人が車運転しても酔わないって現象？」

自分でコントロールすれば大丈夫って事かな？

「そっか…まったく、言ってくれればよかったのによ…

でも、恭介の意外な弱点発見だな♪」

「はは、皆にはナイショな…ところで」

「ん？どうかしたか？まだ気分が悪いのか？」

「いや…それは大丈夫なんだが、ヴィータ…僕のこの状態って…」

まさかとは思うが…

「あ～…その…何だ／／恭介が気絶しちまって…やっぱ横にした方がいいと思ってさ…ひざ枕ってヤツを…ちょっとな／／」

やっぱり！？

「わ、悪いヴィータ！重かったろ？今どくよ」

僕が体を起こそうとすると

「あ！？わ、私なら大丈夫だ！！…それより…もうちょっとこのままでいろよ…な？／／」

と、ヴィータに頭を押さえられてしまった…

「…つか、コレ結構恥ずかしいんだが」

ベンチに横になって、なおかつヴィータにひざ枕されてる光景って…かなり目立つんですが…

「へへっ、心配かけた罰だ♪」

そう言うとヴィータは僕の頭を優しく撫でていた

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

さっきからキョウスケ君とヴィータちゃんのデート現場をクラールヴィントで盗さ…じゃなくて記録してるんですけど…

「……ヴィータちゃん、何時にも増して積極的ね～。…はやてちゃんもウカウカしていられないかも…」

…でも…なんでかしら？

ヴィータちゃんにひざ枕されてる大人Ｖｅｒのキョウスケ君の姿を見てると…胸がもやもやするような…

「……キョウスケ君……」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

遊園地に行こう！～嫉妬編？～

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

僕たちが遊園地に来て結構時間が経ち夕方…

「なぁ恭介、最後にアレに乗らないか？」

ヴィータが指差す先にあるのは…

「観覧車に？別に構わないよ？」

「よっし！早く行こうぜ！」

ヴィータは僕の手を引っ張りながら走り出した

「あ、恭介は高い所は大丈夫だったか～？気絶すんなよ？（笑）」

くっ！前回のネタを引っ張ってるし！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「おー！！こんな高くまで！！なぁ恭介、はやてん家って…こっから見えっか？」

僕とヴィータは現在観覧車に乗っています…つか

「ヴィータ、流石に見えないって！」

一応ココから海鳴市って電車で2時間かかる場所だし

…しかし観覧車の順番待ち中、カップルしか列んでなかったな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

…まったく、なんで観覧車に列んでいるのがカップルばっかりなのよ！！

私一人列んでかなり肩身が狭い思いだったわ！！

…コホン！

え～と、ヴィータちゃん達が乗ろうとしている観覧車…パンフレットによると、【夕日の映える景色を眺める恋人達のスポット】！？
…ハァ、だからカップルばっかりだったのね…

とりあえず二人のすぐ後ろの観覧車には乗れましたけど…べっ、別に寂しくなんかないもん！ぐすん…

「……ヴィータちゃん楽しそうね……」

ヴィータちゃんのあんな顔、キョウスケ君達に会うまでは見たことがないわ…
ホントに不思議な人ね…

「……キョウスケ…」

―ボンッ！

な、ななな何で！？／／
名前呟いただけで顔が赤くなっちゃう！？

だ、ダメよ！！キョウスケ君はまだ子供なんだし…でも、今のキョウスケ君の姿を見てると…／／

…えっ！？クラールヴィントに反応？…こ、これは！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

ヴィータは外の風景を魅入っていた

「…すげー眺めだな…」

「僕はジェットコースターの時は、風景を見る余裕がなかったもんな」

「そーだな、まさか気絶するとは思わなかったけどな」

「アハハ、僕も思わなかったけどね」

僕はヴィータと顔を見合わせ笑った

…つか笑うしか出来ないよな…ｏｒｚ

「なぁ恭介、…ありがとな」

不意にヴィータがそう呟いた

「えっ？僕、何かしたっけ？」

「今日は…私と遊園地に来てくれてって事だよっ！／／」

向かい合わせで座っていたヴィータは、そう言うと僕の横にそっと座って頭を僕の肩に預けた

「…今日はすっげー楽しかった」

「そっか、それなら来た甲斐があったよ」

僕もそれなりに楽しめたしね～

「……恭介／／」

ヴィータはそう呟き僕を見つめてきた

「ヴ、ヴィータ!?」

ヴィータの顔は年齢詐称薬・改で、いつもと違う雰囲気を持っていた

それに加え、夕日に照らされてヴィータを神秘的に魅せていた…

それに…何だろう、ヴィータからとても甘い香りが…僕の思考を…

―スッ

「……ん／／」

そしてヴィータは目を閉じて顔を僕に近づけて…

「……ヴィータ」

―スッ

僕の顔も無意識にヴィータに近付いていき…

―ザンッ！！

…僕とヴィータの間に…よ～く見覚えがある金色の魔力刃が通過した…

「…ミツケタヨ、キョウスケ…」

ゴンドラの外には…狂戦士と化したフェイトが飛んでいた…つか恐っ！！

「フ、フェイト！？」

「……やっぱりキョウスケだったんだね…」

「…あっ！！ヤベッ！！」

し、しまった～！！！　今はヴィータ共々大人Ｖｅｒだから、上手くいけばごまかせた可能性が～！！！

「……ほらフェイトちゃん、やっぱりキョウスケ君とヴィータちゃんだったんだよ？」

フェイトの反対側…つまり僕の後ろからよ～～く知っている声が…

振り向くと…

「……キョウスケ君にヴィータちゃん…少し頭、冷やそうか？」

レイジングハートをかまえたなのはが…って！な、なのは！？その台詞はまだ早いぞ！？
あと数年後に言う予定の台詞ぢゃあ…

「と、とりあえず飛ぶぞヴィータ！！」

「お、おう！！」

僕たちはゴンドラから脱出し…

―ガチィ！

「…はっ？バインド！？」

ゴンドラから出た瞬間に拘束された！？いつの間に！！？設置型バインドなんて、この頃のなのはやフェイト使えたか？

「…ああ、そのバインドは…そこに居たシャマルさんに協力してもらったの」

なっ！？シャマルだって！！
なのはが指差す先…って僕たちが乗っていた…つか僕らのゴンドラのすぐ後かよ！！

「あっ、シャマル！テメー恭介を放しやがれ！！！」

ヴィータがシャマルを睨みながら叫ぶが…

「ご、ごめんなさ～い！！こうしないと…私がなのはちゃんに…（

ガクガクッ！）」

シャマルが顔を真っ青にして震え出した…軽くなのはにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ済みか～…

「ああ…それと…シャマルさんがこんな写真持ってたんだけど…ナニコレ？」

目を単色にしたなのはの手には数枚の写真…っ！

「なっ！？それって僕とヴィータの！？」

「どうした恭介？…んな／／！？」

ヴィータも例の写真を見て絶句した

そりゃーヴィータと一緒に遊園地や動物園で遊んだ写真…つかいつの間に撮ったんだよ！？

…しかし、端からよく見たら…結構恥ずかしい事してたんだな／／

「…キョウスケ、ヴィータの飲んでいたジュースを飲んだんだ…コレなんかヴィータに…あ、あ～んなんかされて…（わ、私だってキョウスケにあ～んってしたいのに！！）」

「…コレは逆にキョウスケ君がヴィータちゃんにあ～んなんかしてるね…

あ！！こ、これなんか…キョウスケ君にひざ枕ぁ！？（ヴ、ヴィータちゃんばっかりズルい！！わ、私だってキョウスケ君にあ～んってされたり、ひざ枕だってしたいの～！！）」

…なんか今、フェイトとなのはの妙な副音声が聞こえたような…

「べっ別にそん位いいじゃねーか／／！！」

ヴィータがなのは達に反論するが…

「…そうだね、あ～んやひざ枕位は別にいいよ…」

いいんですか！？なのはさん！！

「…でもねヴィータ…コレはダメだよ」

フェイトが手にした写真には…先程のキス寸前のショットが納められていた

「あぅ…／／そ、それは…その…／／」

ヴィータが赤くなり撃沈された…

「キョウスケ君…私とはキスしてくれないのに…なんでヴィータちゃんとはキスしようとしたのかな？」

―カチャ

「い、いや…どうやら年齢変化で大人Ｖｅｒになったせいか…精神が肉体年齢に引っ張られた影響で…」

ついフラフラ～って…とは言えないよな～…てかなのはサン？何気にレイジングハートを向けてらっしゃるし！？

「…ふぅん…（これは…イイ事聞いたの♪）」

「…そうなんだ…（じゃあ、キョウスケを大人Ｖｅｒにして誘惑すれば…あ、でも私…変身魔法はちょっと…後でリンディ提督にきいてみよ♪）」

「（そ、そうだったのか！！だったらまた恭介から貰った年齢詐称薬・改で大人のデートをすれば…恭介と今度こそ…／／／）」

…なんか副音声でとんでもない事が起こっている！…ような気がする！？

「…でも、まずは…」

「…頭、冷やそうか？キョウスケ君？ヴィータちゃん？」

「「い、いやーーー！！！！！」」

―ドカァァァン！！！

その後なのはとフェイトと遊びに行く事を（強制的に）約束させられ意識を手放した…

後にシャマルに聞いた話しだと、観覧車のゴンドラが一つ無くなって園内が大騒ぎになったそうだ

だが、そこの遊園地はバニングス家の傘下だったらしく…なのはがアリサに事情を説明して事態を収拾してくれたようだ…

※この頃はまだアリサはトラウマ中だった為、素直に従ったとか…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院――

はやてＳｉｄｅ

「…う～ん」

「主？どうされました？」

「シャマルとの念話が通じへんのよ…」

「シャマルは確か…神代とヴィータの後を付けているのでしたね…」

「そうなんよ～…何かあったんかな？」

「…あ、それと関係しているかは解りませんが…先程、テスタロッサと高町が凄ざましいスピードで飛行していましたが…」

「えっ！？…あ～…それはキョウスケ君…ご愁傷様や」

あの二人がそんな行動するって事は…キョウスケ君とヴィータの事がバレたんやな～

「主は妙に落ち着いてますね？」

「なんやシグナム…私やって大人のレディやで？この位で取り乱したりはせえへんよ？」

よくよく考えたら、あの二人と違って私とキョウスケ君は一つ屋根の下に暮らしとるんやから…チャンスはいくらでもあるしな～

…ヴィータは…まぁ私の次ならええか…

それに、二人かがりならキョウスケ君も落ちやすそうやしな…

フッフッフ…覚悟しいや～

「あ、主！？」

シグナムは、はやての笑みを見て顔を引き攣らせたそうな…

Side Out

続・別荘へ行こう！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――別荘内――――

キョウスケＳｉｄｅ

―シュン！

「さ…初めて来る人もいるけど…ようこそ別荘へ」

「おお～～～～！！」×７

「どや？キョウスケ君の別荘を見た感想は？」

「す…凄い！！フェイトちゃん！！見て見て！おっきなお城があるの！！」

「…うん、ホントおっきい…」

皆さんこんにちは

神代恭介です…

さて今僕たちは久々に別荘にいます

気付いている方もいると思いますが、今回はなのはやフェイトも一緒です

…まぁ以前連れてくると約束したから別に良いんですが…

「…つか、何故あなた達もいるんです！？」

此処にいるのは八神家全員となのは・フェイト

後…どこから嗅ぎ付けたのかリンディさん・エイミィさん・クロノ・ユーノ・アルフという最終決戦メンバー勢揃いなのですよ…

事の始まりは数時間前…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

「…ふぅ、まっ…こんな所かな？」

僕は今、年末のイベント大掃除で自分の部屋を掃除しています
まぁ元々こまめに掃除していたから手間はかからなかったが

―ガチャ

「キョウスケ君～こっちはもう終ったんか？」

「ああ、はやて　こっちは終わったよ～。はやての方は？」

「うん、こっちも大分片付いたで
…やっぱ自分の足で歩けると楽や～」

はやてはエリクサーのお陰で日常生活はほぼ支障なく出来るレベルまで回復した。病院の検査でも問題なしとの事で年末年始は家で過ごす許可が下りたのだ
…流石にまだ走ったりはまだ無理だが

「…これもキョウスケ君や皆のお陰や…」

「別にいいって　僕たちは、はやてを…家族を助けたかったから助けたんだしね」

「…それでも…ありがと／／」

「フフッ　どういたしまして」

「あ、家族って言えば…キョウスケ君、さくらちゃんは大丈夫なん？」

「…そうだな、ちょっと様子見てくるかな」

さくらはボディの方の負荷が結構あったのでメンテ中だったが…細かい調整は僕がしないといけないしな～…

―ピンポーン

ん？誰だろう？

「あ、ごめーん！シグナム！！代わりに出てくれへんか？」

一階にいたシグナムにはやては頼んだ

「はい、分かりました主」

そう言うとシグナムは玄関に向かったようだ

「じゃあはやて、大掃除が終わっ…」

―ガチャ

「「キョウスケ（君）、はやて（ちゃん）掃除手伝いにきたよ～」

なのはとフェイトが突貫してきた！

「二人ともどないしたん？」

「はやてちゃん、まだ足が完全に治ってないんだよね？」

「それで、なのはと相談したんだけど…私達も大掃除手伝った方がいいかな？って」

一応二人ははやての事を心配して来てくれたのか

「…ってのは建前で…ここがキョウスケ君のお部屋か～♪」

…前言撤回します

なのはさん、目的駄々漏れです…

「ま、まぁキョウスケ…なのはとお掃除のお手伝いに来たのはホントだから…ね？」

そう言うフェイトさんの目線も、キョロキョロと部屋の隅々まで観察しているように見えますよ？

「あ、キョウスケ君のベット発見～♪じゃーんぷ！！」

―ドォン！

なのはは僕のベットにダイブした

「あーーー！！？なのはちゃん！？何してるん！！！？」

「あ、なのはずるいよ！！わ、私だって…したいのに／／」

「ん～～～♪キョウスケ君の匂いなの～♪」

やれやれ…

「なのはぁ…掃除手伝いに来てくれたんだろ?だったら…」

そう言い、僕はなのはに近づき頭に手を置く

「にゃ!?／／」

一瞬なのははびっくりするが…

「とっとと手伝わんかーーい!!」

―メリメリ!!

「きゃーー!!?い、いたい!!痛い!!?」

なのはの頭を締め付けた

「ヒィィィト!!エン…「わ、分かったの!!掃除しまーーす!!あ、頭!!あたまわーれーるーの～～～!!!」そうか…」

僕はなのはの頭から爆熱ゴッ○フィン○ーを離すと…

「…うぅ…酷いよキョウスケ君～～」

人の部屋着て、いきなりベットにダイブかます人には言われたくない…ま、流石に少しやり過ぎたかな…

「…ま、少しやり過ぎたか…お詫びに掃除が終わったら別荘で生き抜きしようか?」

「え…別荘ってキョウスケ君の?」

「ああ、はやてにも話そうとしたんだけど…大掃除が終わったらいこうかなって思ってさ
さくらの経過も見たいし…向こうには温水プールや露天風呂もあるから、はやての足のリハリビにもいいかなって」

あ、ちなみにリインフォースは別室に移動してさらに厳重に結界をはったから大丈夫！

「い、いく！行くの～！！」

なのはがおもいっきり手を挙げた

「私も行っていいんだよね？キョウスケ？」

フェイトも控えめながら尋ねて来た

「勿論だよ　さ、そうと決まったら早く掃除終わらせようか？
はやて、後残っている場所はどこかな？」

「あ、うん…後はシグナム達に頼んどったリビングが終れば大掃除終了や！！」

「ん、了解～　じゃあ下に行ってシグナム達を手伝うか」

「「「おーーー！！！」」」

しかし…えらくテンション高いな…

その後、なのは&ａｍｐ;フェイトのコンビネーションで大掃除は予定より早く終わり…

「あっ！！キョウスケ君、別荘には温水プールもあるんだよね？私一回帰って水着持ってくるね？」

「あ、キョウスケ…私も水着持ってくるから一回戻るね？」

そう言うとなのはとフェイトは…って！！

「レイジングハート！！」

「バルデッシュ！！」

「「セーットアーップ！！」」

―ピカァァァ

「「じゃあ急いで行ってくるね！！」」

―ヒュュュン！！

「…なのはちゃん達、空…飛んで行ってもうたな…」

いや…まぁ、別にいいですけど…

「そーいや、はやて達は水着持ってたっけ？」

ふとそんな疑問が浮かんだが…

「その事なんですが…キョウスケ君、ハイ♪」

そう言うシャマルから受け取ったのは…

「…ファッション雑誌？」

僕が疑問に思っていると…

「キョウスケ君、たしか魔力を固定化して服を精製してましたよね？今回もお願いします♪」

あ～…そういやそんな設定あったな～

「…はぁ、解ったよ…で、希望とかはあるんでしょ？」

「あ、もうチェックが入ってますから～」

えらく手際いいな…

そーゆー訳で僕はファッション雑誌を見ながら水着を創った…

…シャマルやシグナムはビキニ系なのは…まぁスタイル良いし似合いそうだからいいんだが…

はやてやヴィータまでビキニ希望とは…

――――３０分後――――

ようやくなのはとフェイト達が戻って着た

「じゃあ別荘に行くから足元の魔法陣に入ってね～」

「はーーい」×7

…何か人数増えているような…

と言う訳で別荘の中へ入り、冒頭に戻るのだが…

――――回想終了――――

「で、何で居るんです？」

と後ろにいた集団様に聞いてみると…

「ふふっ、フェイトさんがキョウスケ君の別荘に行くっていうから保護者は必要と思って…ね～エイミィ」

「はい、私達もフェイトちゃん達の事が心配で♪」

「アタシはフェイトが行く所なら着いてくよ」

…貴女方、おもいっきり浮輪やらビーチボール持ちながら言っても説得力ないですよ！？

―ガシッ！

「なんだ!?…ってクロノ?どうした?」

何故かクロノはやつれた顔で

「キョウスケ…この別荘は中の1日が外では1時間だそうだな…」

「あ、ああ…そうだが…?」

「頼む…キョウスケ!!この別荘にしばらく居させてくれ!!」

「…は?」

クロノは必死な形相で懇願してきた

なぜに!?

「あ~…キョウスケ君、クロノ君は今年中に提出しないといけない報告書が山のようにあるんだよ~　とてもじゃないけど後数日中に全部終わらせるなんて無理なんだ~

んで、フェイトちゃんから聞いた時間の流れが違うキョウスケ君の別荘を頼ろうとしてるんだよ♪」

横でエイミィさんが事情を説明してくれた

「頼む!!親友よ!!!」

…いつから親友になったかな?

「ま、まぁ別に構わないけど…」

「すまないキョウスケ…恩に着る」

貸し一つと思っとくか

「で、スクライアも何か仕事関係でか？」

後ろの方にいたユーノに聞いてみると

「あ…僕は後学の為に、ここの魔法を見学したいんだ…それと僕の事はユーノでいいよ」

なんか…吹っ切れた感の顔だな？

「まぁ、別に見学はかまわんが…多分役に立たないぞ？」

「えっ！？どうして？」

「どうしてって…一応異世界の魔法だし、こっちとは術式すら違うからね　僕が使う魔法はこっちの魔導師には使えないよ」

「そっか…でも見学してもいいんだよね？」

「…立入禁止区域以外はな」

「立入禁止？」

「そこには何があるんだ！キョウスケ！？まさかロストロギアか！？」

クロノが詰め寄ってきたが…ハァ

「…創った本人が把握してない区画だからだよ　装備なしで入ったら最後…出られなくなるぞ？
それでも良ければ止めないが…」

まぁ半分は嘘だけどね～　立入禁止区画の隠し部屋にリインフォースがいるからな～

「…あ、いや…」

「それに前々から言おうと思っていたが…ロストロギアの定義って失われた技術で作られた～…　ってのだろ？別に僕の所有している魔法や道具は失われた技術でもなんでもないからな！
ただ異世界の知識で作ってこっちの人間には理解できないだけだし…理解できない＝ロストロギアって何！？ねぇバカなの？バカなんだね管理局は？」

「いや…その…」

こうして暫く僕は、疲労困憊のクロノにトドメをさした（笑）

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

その頃はやて達は…

「ねぇはやて、はやては此処に何度も来た事があるんだよね？」

「そやで、シグナム達も一緒に来て遊んどるよ～」

「っても、シグナムは此処の訓練施設を借りて修行したり、私やはやてはお城の探検、シャマルは…何してんだ？」

「私はキョウスケ君にお願いして図書室でお料理の勉強よ」

「……何か、こえーな」

「ヴィータちゃん酷い！？」

「にゃははは…あれ？誰か来るよ？」

「何！？本当か高町！？この別荘には我ら以外いないはず！？」

「…あ、まってシグナム！あの娘は…」

つづく

乙女の戦い…？

前回までのあらすじ…

なのは達の前に一人の少女が現れた！！

『誰かは読者にバレバレですよ？作者さん』

…作者にツッコむとは…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

さて、クロノを弄ぶのにも飽きたし…ん？

「みんな～！！」

お、来た来た

「さ、さくらちゃん？」

なのは達がさくらを見てビックリしてるが…なんで？

「なんで？って…私達はキョウスケからはまだ治療中って聞いたからだよ！！」

あ～そうか…まだアレは言ってなかったな～…つか心読むなよ…

「…ん？何かさくらの身体…透けてねーか？」

ヴィータが気付いたようだ

「えっ！？…も、もしかして…ゆ、幽霊っ！？」

なのはが変な事を口走って顔を真っ青にしてた

「いやなのは、一応幽霊じゃないから安心し…」

と言いかけた途端

「い、一応なの！？でも幽霊じゃないよね！！？違うよね！？ね！？ねーーーぇ！？」

パニック状態のなのはは僕の足にしがみ付き涙目だった

…なのはって幽霊ダメだったのか？

「な、なのは！？落ち着いて！！」

「つかキョウスケから離れろ！！」

「ヴィータ！！主の命令や！！かまへんからなのはちゃんを引っぺがし！！」

何この物語開始数分のカオスは！？

「ほえぇぇぇぇ～！？　キ、キョウ君どうしよ～？」

ハァ、説明するしかないだろうな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「つまり…今のさくらは立体映像という訳か？神代？」

と言う訳で皆に説明中です

「そうだよシグナム、さくらのＡＩプログラムは無事だったからね～

で、ボディのメンテナンス中はＡＩプログラムをこの別荘のメインコンピュータ内のネットに入力して…ついでに別荘の管理を臨時でさくらに頼んでおいたんだ～」

一応ちゃんとした管理ＡＩプログラムを組んでいるんだけど…まだ未完成だからな～

「それで私はそのコンピュータ内から別荘内の好きな場所に自分の姿のＣＧを出して、皆とコミュニケーションを取れるようにしたんだよ♪」

僕とさくらの説明を皆が聞いていると…

「？？？」

数名がまだ？顔だった…

「まぁ、普段のさくらだと思ってくれ」

しかし…何気に約一名様が何かブツブツ言ってるみたいだな

「…デバイスのＡＩプログラムのみをＣＧ化…ねぇキョウス「断る！」って頼む前に断られた！？」

「エイミィさん…どうせこの技術を教えてって言おうとしました？…残念ながら教える事は出来ません」

「え～！？この技術があれば色々できそうなんだけどな～」

そりゃこの技術…改良すればインテリジェントデバイスみたいな複雑なプログラムも人型にも実体化とか可能だけど…

「こちら側の技術に慣れてない方が触れると危険ですからね」

まぁホントは…管理局に技術を提供した日には、上層部が悪用するだろうし…極力技術提携とかはしたくないよな～

「はぁ～…仕方ない、今回は見送るか～」

って諦めてないんすか！エイミィさん！？

「はぁ…じゃあさくら、僕たちは温水プールに行くから女性陣を更衣室に案内してくれ。クロノとユーノとザフィーラは僕が案内するから」

「あ、うん！じゃあ皆、着いて来てね」

そう言いさくらに皆が着いていった

「さて、じゃあ行くか…ユーノ、フェレットモードになって覗きにいくなよ？」

「なっ！？し、しないよ！！そんな事！！」

っても前科があるしね～

「…温泉旅行・露天風呂…（ボソッ）」

ユーノの耳元で呟くと

「なっ！！なななんで君が知ってるんだ！！？」

無印の頃だったよね～…フェレットなのをいい事になのはやアリサ・すずか達が入った温泉に堂々と入ったのは～

「さてね、じゃあ行くか」

「ああ、だがユーノはどうしたんだ？」

「淫獣は気にするなクロノ」

「あ～…なるほどな」

「そこ！！何を納得しているんだよ！？」

だって…事実だしな～

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはＳｉｄｅ

私達はさくらちゃんに案内されて更衣室にむかってるの…その前に…

「ヴィータちゃん、ちゃんとアレは持って来てくれた？」

私は以前にヴィータちゃんにお願いした物を持ってきたか確認してみると

「…分かってるよ！！ちっ、はやてと二人で使おうと思ってたのによ…」

「まぁヴィータ、今回はしゃあないよ…それにしてもこれがそうなんや～」

ヴィータちゃんは渋々といった感じだったけど…今回の作戦にはアレが必要なの！！だって…

「これがあれば…この前のヴィータみたいに？」

フェイトちゃんの言う通り！！
この薬があれば…

「ああ…恭介からケースごと受け取ったままだったから、まだ沢山あるな」

「見た目はただのタフ○ッ○やけどな～」

ヴィータちゃんの手には…

「この年齢詐称薬・改があれば…私だって…」

この前のヴィータちゃんみたいに大人っぽく変身できるの！！…む、胸だってきっとヴィータちゃん以上になるのっ！！」

「な、なのは…途中から声が出てるよ？」

「ふぇ！？嘘！？」

「…ほぉ～　高町なのは…私と胸で勝負しよってのか？」

ヴ、ヴィータちゃん？目つきがちょっと怖い…

―キラン

「それなら私が判定するで～♪」

は、はやてちゃん…何か手の動きが怖いの…

「な、なのはにヴィータも!!何でそんな話しになったの!?」

「止めんなフェイト…これは私と高町なのはの…女の闘いだ!!」

「うっ…わ、分かったよヴィータちゃん…この勝負受けて立つの!!」

ここまで来たら…後には引けないの…

「どうしたの４人とも？もう皆更衣室に入っちゃったよ？」

「あ、さくらちゃん…実は…」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

さくらＳｉｄｅ

皆を更衣室に案内したんだけど、何かなのはちゃん達がケンカしているみたいなので訳を聞いてみると…

「ほぇぇぇ～…そ、そうなんだ～」

胸の大きさの勝負…しかもキョウ君が作った年齢詐称薬・改で成長

後の姿で勝負って…あ、そういえば…

「たしかキョウ君…胸が大きい人が好きじゃないかって疑惑が前に出たんだっけ…？」

―ピシッ

あ、なんか空気が凍り付いた？

「…なのは、ヴィータ…その闘い…私も参加するよ！！」

フェイトちゃんから物凄い覇王色の何かが…

「…私も参加するで！！」

はやてちゃんからも覚悟の炎的な何かが！？

「それじゃあ…」

「ああ…判定は」

「キョウスケに…」

「…揉んでもらって決めてもらうって事でええな？」

ほえっ！？何か違う方向に話しがズレてない！！？

こ、これは色んな意味でマズかも…

こ、こうなったら大人の人に止めてもらって…

「あらあら…これは面白い事になったわね～♪」

「艦長は誰に賭けますか？…私はフェイトちゃんに！」

「あら、じゃあ…色んな意味で押しの強さでなのはさんにしようかしら」

「あたしは勿論フェイトだな！」

「……まったく何をしてるんだ」

「いいじゃん～　それでシグナムは誰に賭ける？」

「……勿論主です…ヴィータには悪いが……」

ってダメダメだ～この大人達…ｏｒｚ

ま、まぁ…キョウ君なら誘惑に負けないと思うけど…

大丈夫…だよね？

…わ、私も参加しようかな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シグナムＳｉｄｅ

「ん？…どうかしたかシャマル？先程から何やら難しい顔で自分の胸を触っているが…？」

いつものシャマルなら、悪ノリしてくると思ったのだが…珍しいな

「えっ！？う、ううん！！何でもないわよシグナム…」

「…そうか？ならいいが」

まったく珍しい日もあるものだな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

キョウスケ君が胸の大きな人が好き…（まぁ疑惑ですけど）だったら……私にも？

そ、そりゃシグナムには負けちゃうけど…私だってそれなりに胸はあるんだし…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

キョウスケSide

「はーーくしょん!!」

『マスター、風邪ですか?』

「いや、誰かが僕の噂をしているような」

しかも何か…嫌な予感しかしないんだけど…

Side Out

つづく

乙女の闘い時々暴走中！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

なのは・フェイト・はやてはヴィータから年齢詐称薬・改を入手した！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘――

キョウスケＳｉｄｅ

「……遅い」

なのは達が更衣室に行ってからすでに２０分近く経っている

「…エイミィが言っていたが、女性は支度に時間がかかるそうだぞ？」

いや、まぁそうだろうけど…

「その前にクロノ…仕事はどうした？」

「…いや…こうして時間が出来たのだし…気分転換をと」

「…通訳すると、【皆の水着姿が見たい】と？」

「なっ！？／／」

クロノは真っ赤になり慌てている

「クロノ…君って奴は…」

ユーノはそんなクロノを見下して見ているが…気付いているかユーノ？君もクロノと同類だぞ？

…いや、前科がある分クロノ以下か？

「おまたせーキョウスケ君♪」

噂をすれば…この声はなのはか…

振り向きなのはの方を見ると…

「遅かったな、なの……はぁ！？」

「にゃはは…ど、どうかなキョウスケ君／／？」

薄いピンクのビキニ姿のなのは…しかも明らかに成長した姿…って

「なのは！おまっ…まさか年齢詐称薬・改を？」

そういやヴィータに渡したままだったな

「うん！飲んじゃった♪」

今のなのはは…１５歳位かな

「ぐはっ！？」

何か後ろでユーノが鼻血を出して倒れているが…気のせいだな…うん

「じゃあ…キョウスケ君も飲んでね！」

「えっ？何を…！？んぐっ！？」

―ゴクン

有無を言わさずなのはに何かを口の中に入れられた！！

―ボォン！

「…ゲホッ！なのは、いきなり何するんだ…ってこれは！？」

なのはに飲まされたのは、僕が作った年齢詐称薬・改だったようだ

変化した姿は、なのはと同じ１５歳位だろうか？

…別に年齢詐称薬は年齢設定してなかったんだが…何か１５歳になるな

「あーーー!!なのはズルイよ!抜け駆けなんて」

その後ろから聞こえる声は…

「フェイト…お前も飲んだ訳ね」

黒のビキニを着たフェイトが居た。多分フェイトもやはり15歳位の姿だった

「ぐぉ!?」

また後ろでクロノが鼻血を出して倒れているように見えるが…うん、気のせいだ!!

「あの…どうかなキョウスケ…?／／」

「私達のこの姿は?／／」

どう…って言われても…つか二人とも何で胸を強調させながら近づけてくるんです!?

「あ、あいつら…やっぱ抜け駆けしてやがった!!」

「ずるいで!!なのはちゃんにフェイトちゃん!!　急ぐでヴィータ!!突撃や!!」

「おう!!まかしとけはやて!!」

…ヴィータとはやても年齢詐称薬・改を飲んでいるのか…

ヴィータは赤いビキニを、はやては白をベースに水色のストライプ

柄のビキニを着ていた

…あれ？二人とも凄い勢いで向かってくる！？

「キョウスケ君～！！」

「恭介～！！」

―ドォン！

「「きゃ！？」」

「うおっ！？」

―ムニュ

フェイトとなのはの短い悲鳴と共に僕の方に倒れ込んで来た！！

…何か身体のあちこちから柔らかい感触が…？

「むぐっ！？むーー！？」

しかも何故か息が出来ない！？

…顔にも何か挟まったような？

とりあえずこの状態から脱出しないと…　僕は顔に挟まった物体を退かす為、右手を伸ばしソレを掴むと…

―ムニュ

「あ…んっ…／／」

……今の声、フェイトだよな？何か妙に艶っぽいというか…？
左手も動かそうとすると…

―ムニュ

「あん…っ／／」

…左手は動かないが、何か柔らかい物が手の平に…それに今の声はなのはだよな…

…今度は両足を動かしてみると

―ムニュ

「んっ…あっ／／」

「あ…んんっ／／」

…はやてとヴィータの…いつもとは違う声が…
共通して言えるのは…僕が触れたりした物は柔らかい感触……
…えっ！？

「キ、キョウスケ？／／あまり動くと…その…／／」

「にゃはは／／キョウスケ君のえっち♪」

「あ、あかんよキョウスケ君／／こ、こんな初めてで多人数でなんて／／」

「うっ…ん／／恭介ぇ…／／」

…とりあえず視界を確保する為、目の前の物体から顔を強引に離「…あっ／／」ゴホン…離すと

「……」

目の前には黒い布と…

「キョウスケ…んっ／／そ、そんなに強く揉まれると…あっ…／／／」

―ムニュムニュ

……え～～と、これは……フェイトさんの…む、胸！！！？

「っ！？フフフェイト！？こ、ごめん！！／／今離れるから…」

何とか顔を真っ赤にしたフェイトから離れようと…って動けない！？…そういえばさっき、手足を動かそうとしたらなのは達の声もしたが…ま、まさか…

「ヴィータ、もう少し上の方に胸を押し付けるで？」

「お、おぅ／／」

右足にはやて、左足にはヴィータがしがみついていた…って！？ちょいまち！？それ以上、上の位置に移動するといろいろヤバイ！！

「もう…／／しょうがないな～キョウスケ君…今度は…じ、直に触っていいよ／／」

な、なのはも何僕の手を掴んでビキニの中に入れようとする!?

「い、いい加減に…放してくれ～～!!!」

色んな意味で理性がヤバイ!?

くっ!こんな事なら普通の年齢詐称薬を作りべきだったか!?

※年齢詐称薬は幻術の一種で外見をそのように見せるのだが、この年齢詐称薬・改…幻術というより変身に近い薬の為、このように実際に触れたりするのだった…類似魔法・聖王モード等、ＶｉＶｉｄ参照

「（って、そんな設定だったのか!?）」

作：伊達に改は付いていないのだよ…おっ、ようやくタマゴ技のばかぢから覚えたポカブが産まれた♪

「（のんきにポケ○ン育成してんなー!!）」

その後、遅れて来たさくらによって何とか解放されたが…

「キョウ君!わ、私に言ってくれれば…その…がんばるよ?／／」

いや…何をさ?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

リンディＳｉｄｅ

ふふ、やっぱりココに来て正解ね♪
彼…やっぱり面白いわ～

「あ～…やっぱりこうなってますね～」

「ええ…でもフェイトさんから話しには聞いていたけど…キョウスケ君のあの姿は…」

「あ～…かなり反則ですよね～／／」

かなりのイケメンよね～…エイミィも何だか彼を見て顔を赤くしちゃってるし

「あら、エイミィ…あなたも参戦するのかしら？」

「えっ！？／／い、いや～流石にオッズが高そうなんで…まぁ勿体ない気もしますが」

エイミィも参戦すれば面白いのにね～

「でも、彼女は後一押しで参戦しそうね」

「彼女って…誰ですか？」

「まぁ、後のお楽しみよ♪」

彼女のあのキョウスケ君を見る目…ふふ、楽しみね～♪

「そういえばクロノ君達は？」

「キョウスケ君の後ろで転がってるわよ…まったく我が子ながら情けない」

もう少し甲斐性があればねぇ…ハァ

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

私達が温水プールに向かうと…年齢詐称薬・改で成長したはやてちゃん達がキョウスケ君に迫っているわね

…キョウスケ君もあの薬を飲んだのかしら？成長した姿になってるわ…／／／

「……はぁ」

「どうしたシャマル？ため息などついて」

「シ、シグナム！？ううん！！何でもないわ！！！」

「そうか…ん？主達は神代の所か」

「ええ、はやてちゃん達楽しそうね」

「フッ、神代は大変だろうがな…主やヴィータがあんなに楽しそうに出来るのは神代のお陰だ…彼には感謝の言葉もないな」

「そうね…私達もキョウスケ君やはやてちゃんのお陰で救われて…」

彼は「家族だから当たり前だろ？」って言うでしょうけど…

「さ、シャマル　我々もそろそろ行くぞ…流石に神代がアレでは」

「フフッ…そうね」

でもキョウスケ君…そんな貴方だから皆が好きになって…私も…／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

―ピキーーーン!!

「「「「…はっ!?」」」」

「ど、どうした?」

何とか4人から解放されたけど…4人ともどうしたんだ?

「…感じた?みんな?」

「…ああ」

「…うん、感じた!」

「…この感じ…」

な…何?

「「「「…ライバルが増えた……ような気がする!!!!」」」」

…だから何の?

くづり…

お色気作戦継続中！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ

年齢詐称薬・改をの飲んだなのは達が暴走した…

「…いや、ホント勘弁してくれ…」

『よく理性が持ちましたねマスター』

「……まぁ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

ヤバイ…

ヴィータとの遊園地の時からだろうか…薄々気付いたのだが年齢を

変化させると、魂や精神も年齢に引っ張られるようだ…

…そうなると健全な成人男性の精神と同じになるわけで…

―ムニュ

「ねぇ、どうしたの？キョウスケ君♪」

「うっ／／いや…何でもないよ」

―ムニュ

「何か悩みがあるなら私に話してね？キョウスケ」

今僕は温水プールの中に居るのですが…両腕になのはとフェイトが密着してきています…

しかも結局あのまま年齢変化したままなので…ううっ、両腕に柔らかい感触が！？

「おい！交代の時間だぞ！」

「次は私らが教えて貰う番やで！」

「えーー！？もう！？」

「ちょっと早くない？はやて」

「何言うとるん！？キッカリ３０分経ったで！！」

「ちゃんと約束は守れよ！！」

「うぅ～…フェイトちゃん」

「……仕方ないよ、なのは」

なのはとフェイトが離れると…

「じゃあ…あ！足が～／／（棒読み）」

―ムニュ

「へへっ…恭介～／／♪」

―ムニュ

交代で今度は、はやてとヴィータが腕にくっついて来た！！

「てか何でいきなり腕にしがみつく！？」

「いや～私は足が滑ってもうて
まだ足は万全やないしな～」

「わ、私は…その…なんとなくだ！／／」

なんとなくって…

「「む～～～～～っ！！」」

案の定、なのはとフェイトとは先程とはちがい頬を膨らませて睨んできた…

つかはやての理由はまだ解るが…ヴィータの「…私はダメなのか？恭介ぇ…」うっ…そんな捨てられそうな子猫みたいな目で見ないでくれ！！

一体何故こんな展開になったのかと言うと……

――――回想――――

数十分前…

「で、何で皆してその姿に？」

さくらのお陰で何とか助かった？僕は何で年齢詐称薬・改を皆が飲んだのか尋ねると…

「にゃはは～…こ、この前のヴィータちゃん見て私も大人っぽくなりたいかな～って（成長した姿でキョウスケ君を誘惑するの！！）」

「う、うん…何か憧れちゃって（成長した私なら…うん、胸もヴィータは勿論なのはやはやてにも勝った！！
こ、これならキョウスケと…／／）」

「私らもちょっと背伸びしたくなったんよ～（ヴィータに聞いた話しやと、キョウスケ君は大人Ｖｅｒになると精神もそっちに引っ張られるって話しやったし…誘惑したら…お、大人の関係に…はうっ

！！／／／）」

「わ、私はこの姿…結構気に入ってんだ！（この前はジャマが入っちまったが…こ、今回は…はやてと二人で協力すりゃ…キ、キス位は…／／）」

…今猛烈に副音声にツッコミ入れたくなったな…

「はぁ…別にいいけどさ、何で僕まで？」

「えっと…ホラ、キョウスケ君の成長した姿がまた見たいかな～って　ね？フェイトちゃん？」

「えっ！？う、うん！そうなんだよ」

「しかし…今の神代達は１５歳ぐらいなのだろ？見違えたな」

「そういえばシグナムは初めて見るんでしたっけ？キョウスケ君はこの前はもう少し年齢が上でしたけど…（ボソッ）これはこれで／／」

「…シャマル、顔が赤いがどうかしたか？」

「な！？な何でもないわよ！？」

「…ならいいが」

「（…シャマルさん、キョウスケ君の見る目が…ま、まさか！？）」

「（シャマル…まさか貴女も！？）」

「（まさか…シャマルまでキョウスケ君狙うとるん…？う～ん…なのはちゃんやフェイトちゃんに盗られる位なら、シャマルもこっちに取り込んでヴィータと3人掛かりで…手数は多い方がええし…勿論シャマルは3号やけど）」

「（ちっ…シャマルも恭介なのか！？
…シャマルの奴、胸は私よかデケーし…高町はともかく、フェイトの胸もかなり…マ、マズイ！！このままじゃ…何とかしねーと！！）」

…何か微妙な空気になってるな～

あ、ちなみにさっきまで後ろに転がっていたクロノ&ユーノはリンディさんの指示の元、エイミィさんとアルフが引きずっ…ゲフン、治療しています…

「ふぅ…ダメね～。シャマルさん、悪いんですけどこっち手伝ってくれるかしら？」

「あ、はーい解りました～」

シャマルはリンディさんに呼ばれ治療に参戦しに向かった…
…シャマルが何故かチラチラこちらを見ていたが？

「ところでキョウスケ君、お願いがあるんやけど…」

「ん？何はやて？」

「私に泳ぎ方教えて欲しいんやけど…」

あ～…はやて足を動かせなかったからな～

「いいよはやて、元々はリハリビを兼ねて来たんだしね」

「えへへ／／ありがとキョウスケ君♪」

「「「ちょ…ちょっと待って（なの）！」」」

フェイトとヴィータとなのはが慌てた感じで叫んだ？

「ど、どうした3人とも？」

僕が尋ねると、3人が一瞬お互いにアイコンタクトをとると

「あの…ね、キョウスケ…」

「私達にも…その…」

「お、泳ぎ方教えてくんねーか？」

「えっ！？3人も泳げなかったっけ？」

なのはは…まぁ運動音痴だから解るが…フェイトやヴィータは抜群だと思うが…

「わ、私はその…そう！前になのはのＳＬＢ受けて海に墜ちた時に…泳ぎが苦手になっちゃって…」

「ふぇ!?わ、私のせい!?（フェイトちゃん酷い！」）

「わ、私もだ!コイツの砲撃食らっちまってその衝撃で泳ぎ方忘れちまったんだ～」

「ヴィータちゃん更に酷っ!?」

「…ふむ、そうだったのか…大変だったんだな…　よし分かった!!フェイトとヴィータにも泳ぎ方教えるよ!!」

「キョウスケ君も普通に納得しないでよ～～!!」

…だってアノ魔王の砲撃だからな～…リアルにありそうだし

「まぁ、教えるとして「ねぇ!スルーなの!?」も流石に全員は見れないか「ちょ!?ねぇ聞いてなの～!」ら３０分交代でいいかな？」

「「「は～～～い」」」

じゃあ温水プールに向か「か、神代…」どうしたシグナム?」

「いや…流石に高町が哀れでな…」

ま、弄ぶのはこれくらいで

「うう～～…み、みんながいぢめるの～…」

「ごめんなのは、冗談だってば」

「……本当？もう…無視しないでくれる？」

涙目でなのははこちらを見てく…うっ！！一瞬ドキッとしてしまった

「じゃあ…お詫びに1番になのはに教えるから…な？」

「ほ、ホントにホント！？　ありがとうキョウスケ君！！」

―ガバッ！

嬉しさの余りなのはは僕に抱き着いて来た！？

―ムニュ

うっ…直に胸の感触がっ！！？

―ガシッ！！

「…なのは、じゃあ早くイコウカ？」

「…そうだな、泳ぎも私が教えてやるよ！」

「フ、フェイトちゃんヴィータちゃん！？い、痛い！指が肩に食い込んでるよ！？てか、私はキョウスケ君に教えてもら…」

「ほな…逝コウカ…」

―ズルズル…

「痛っ！？わ、分かったから引きずらないで～～～！！？」

そのままなのははフェイト達に引きずられながらプールに向かっていった…

なのは…せめて五体満足でいろよ？

「……で、では神代、私はいつも道理修行に行ってくる」

「今日はどのフィールドに？」

「ふむ…今日は重力フィールドに挑戦しよう」

この別荘、基本の砂漠や雪山やジャングル等のフィールド以外にオリジナルを数個製作したのだ！！

…流石に以前ノリで創った【精神と時の部屋】は…あまりにもアレだったから封鎖したが…

「…重力系はかなりキツイぞ？」

「フッ…望む所だ！！では…」

シグナムは不適に笑い重力フィールドに向かって行った

――数分後――

「「おまたせ～キョウスケ（君）♪」

「ああ、なのはにフェイト…あ～…一応聞くが何があった？」

プールに来たなのはとフェイト、だが…はやてとヴィータが物陰がめっさ凝視してるんですが？

「…皆とO☆HA☆NA☆SHIして…私とフェイトちゃんが先にキョウスケ君を襲「な、なのは！？」…キョウスケ君に泳ぎを教えてもらうの♪」

今不穏な単語がなかったか！？

「じゃあ…行こうキョウスケ♪」

「あ、ああ…」

――回想終了――

という訳でまずフェイトとなのはに泳ぎを教えていたのだが…何故かその…密着してくるんだよな／／

で、現在はやてとヴィータに泳ぎを教えている…んだけど…

―バシャバシャバシャ

「その調子だよはやて」

僕ははやての手を掴んで…まぁバタ足の練習中です

「…プファ！…ハァ…ハァ…け、結構水泳って…キツイな～」

「でも泳ぎ方もよくなってきたぞ？」

「ホンマ！？やっぱ才能あるんかな～」

「ははは…じゃあはやては少し休憩して…ところでヴィータ、さっきから何をしているんですか？」

僕がはやての相手をしている時、ヴィータは…

「ん～～？充電中だ／／」

…僕の背後からしがみついてるんです…

「ほなヴィータ、交代や♪」

「ああ、充電完了…っと」

ふう…／／　まだ背中にヴィータの…感触が…／／

―ムギュ

「…って！はやて！？お前も何してるん！？」

ヴィータが離れたと思ったら、すぐさまはやてがしがみついて来た！？

「交代やって言ったやろ？…私も充電や♪えいっ！」

って、しかも抱き着いたまま上下に動く！？

ヤ…ヤバイ!?おもいっっきりはやての双丘の感触が!!?

「恭介!!いくぞ!!」

「な、何／／?…うおっ!?」

―ガバッ!

油断していたらヴィータが前から抱き着いて来て…その…サンドイッチ状態に…／／

「…ん～／／や、やっぱまだ充電がたりねーな／／」

『…ククッ、久々のハーレム状態ですねマスター』

そのはやてとヴィータの充電は暫く続き、僕は身動きがとれない…というか動いたらやばかった…

勿論、とある方向から刺すような視線があったのは言うまでもないよな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「…はやてちゃんにヴィータちゃん…やりすぎなの…」

「…そうだね…なのは、アレは無いね…キョウスケもデレデレして！！」

「フェイトちゃん…もう我慢出来ないの！！」

「うん、いくよ！！なのは！！」

「うん！！」

―ダッ！！

「キョウスケ君！！私も充電するの！！」

「キョウスケ！！私も！！」

「おわっ！！なのは！？フェイト！？」

「ちょ！？二人ともまだ時間やないで！！」

「テメーらさっか散々くっついてたろーが！！」

「はやてちゃんやヴィータちゃん程じゃないよ！？というか…そんなに密着なんで…ず、ズルイのー！！」

「そうだよ！！わ、私だってキョウスケと…その…もっとくっつきたいよ！！／／」

「ぐっ…た、助けてくれーーー！！」

その後、キョウスケの精神的ライフは０を通り越してオーバーキルを喰らったとか…

つづく…

「な、何!?つづくのか作者!?」

新たな契約者…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

ハーレム状態？

「な、なんじゃそりゃー！？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「……」

「キ、キョウスケ君？大丈夫？」

「……シャマル、これが大丈夫に見えるか？」

「……ごめんなさい」

何とかなのは達の…アレから解放されたが…うぅ／／

もう理性を司るライフが０を越えてマイナス振り切ってるよ…

流石にあれ以上やられてたら…

『手を出してましたか？』

「ブッ！？イイイインフィニティサン！？ナ、ナニヲイッテラッシャルノデスカ！？」

※ちなみにまだ年齢詐称薬・改の効果はつづいてます

『マスター、動揺しすぎですよ』

お前のせいだろ！？

「はは…そういえばなのはちゃん達は？」

「なのは達ならさくらの案内で別荘の探検に行ったよ」

さくらが一緒なら…まぁ迷子にはならないだろう…多分

「ふぁ…何か眠くなったな…シャマル、悪いけど少し寝るから何かあったら起こしてくれ」

「あ、はい　解りました」

「…じゃあ…（－．－）ＺｚＺ」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

シャマルＳｉｄｅ

はやてちゃん達の猛アタック？から脱出したキョウスケ君は…流石に疲れたのかもう寝ちゃったわ

はやてちゃんもヴィータちゃんも…段々アプローチが凄い事になってるわね～

それに触発されてか…なのはちゃんもフェイトちゃんも…

もう少しでキョウスケ君、脱がされる所だったわね～…

「……Ｚｚｚ」

そ、それにしても…キョウスケ君の寝顔…か、かわいい…／／

…あっ！？そう言えば…今この場には私とキョウスケ君しか…

「す～す～…」

…プールサイドとは言え…床にそのまま寝るのは…ねぇ

この前ヴィータちゃんがやった…ひざ枕してみようかしら／／

「…よいしょ…っと」

キ、キョウスケ君が私の膝に！！／／

「…はぅ／／」

…さ、最高です～／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――城内――

エイミィＳｉｄｅ

さっきまでクロノ君とユーノ君の治療…（かなぁ？）をしていて、シャマルさんのお陰で二人とも何とか復活したんだけど…

「…しっかし…男の子なのに情けないな～二人とも」

なのはちゃんとフェイトちゃんの水着姿みただけなのに…

「「男だからだ（よ）！！」」

クロノ君とユーノ君が声を合わせて講義してるが…

「あ～はいはい、要するに二人ともムッツリなんだね～」

「なっ!?エイミィ!!僕をそこの淫獣と一緒にするな!!」

「なっ!!君なんてムッツリな上にＫＹじゃないか!!」

二人とも…どっちもどっちだよ…

「ハイハイ!とりあえずクロノ君は仕事しようね～
ユーノ君もここの見学するんだよね?」

「…ちっ、勝負はお預けだ!!」

「ふん…」

はぁ…二人とも子供なんだから…

「じゃあユーノ君にはこれを」

「これは?」

「さくらちゃんから預かった【誰でも解る別荘案内図・今年度下半期版～】!…だってさ～」

「そ、そうなんだ…」

「あ、クロノ君の分もあるよ～
ただし!キョウスケ君も言ってたけど、立入禁止区域にはいかないでって。それ以外なら施設を適当に使っていいってさ～。解らない事があったら、さくらちゃんを喚べは来てくれるって」

「ああ、解った…じゃあ僕はこの図書館に行ってくるよ」

「じゃあ僕は…適当にぶらついてるよ。エイミィさんは？」

「私？私はここの露天風呂にいくよ～
艦長達も先に行ってるし、なのはちゃん達も後で行くって言ってたしね～…二人とも覗くなよ？」

「なっ／／！？」

「し、しないよ／／！！」

お～お～、二人とも赤くなっちゃって

「人をからかうなエイミィ／／…じゃあ行ってくる！！」

「ぼ、僕も行きますね／／」

「は～い、いってらっしゃ～い」

さて、私も行きますか♪

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

シャマルＳｉｄｅ

「……ん」

「……／／」

キョウスケ君の寝顔って可愛いわね～／／

そういえば今この場には誰もいない二人っきり…これは…／／だ、誰も見てないし…いいわよね？

「…キョウスケ君……／／」

―スッ

「……ん…／／」

―パァァァ！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内、城内――

さくらＳｉｄｅ

「……ほぇ！？」

今感じたのって…まさか仮契約！？
でも、なのはちゃん達はここに居るし…誰と！？

「…さくら？どうしたの？」

「フ、フェイトちゃん！？ううん！！何でもないよ！？」

で、でも…調整中だから本当に仮契約かどうかまだ解らないし…なのはちゃん達にはまだ黙っていた方がいいよね…？

「なぁさくら、この部屋は何だ？」

「えっ？ここはキョウ君のプライベートルームだよ」

「なっ！？ホントかさくら！？」

ヴィータちゃんが一気に目の色を変えた…こ、怖いよ～！

「ここがキョウスケ君の…」

「うん、プライベートルームと言っても別荘に居る時はほとんど研究室に篭っちゃってるんだけどね～」

「アハハ…キョウスケ君は凝り性やからな～」

はやてちゃんも心当たりあるのかな？

「…で、さくらちゃん…さっき何かあったの？」

「ん～何かキョウ君が誰かと仮契約した反応が…あ〝っ」

し、しまった～～！！なのはちゃんの誘導尋問に引っ掛かっちゃった！？

「な、なんだって！？おい！さくら！！本当か！！！？」

凄い剣幕で私に掴みかかろうとしているヴィータちゃん…あ、でも…

―スカッ

「なっ！？うおっ！？」

―ガシャァァン！

「…ヴ、ヴィータちゃん…大丈夫？今私の姿ＣＧだから…」

触れないんだよ？

「…つつ…すっかり忘れてた」

「そ、そんな事より本当なの！？キョウスケ君が…仮契約したって！！？」

「う、うん…正直今の私の状態じゃハッキリは解らないんだけど…

多分」

「でも一体誰が…ハッ!?ま、まさか…」

フェイトちゃんが何かに気付いた様な表情をした

「…可能性があるんはシャマルやな」

「シャマルさん?」

「あのヤロー…私の恭介に…」

「…ヴィータ、キョウスケは私のだよ?」

「んだと!?」

ほ、ほぇぇぇ!?

フェイトちゃんとヴィータちゃんが一触即発!?

「…う~ん、でもまだそう決まってへんのやろ?」

「そ、そうだよね!?うん、ぜーったい違うよ!!大体、私を差し置いてシャマルさんが先に仮契約なんて…私が先なの!!」

「…なのはちゃん…欲望がダダ漏れやで?」

「なら…急いでキョウスケの所に行って確認しよう!!」

「…そーだな　まずは確認しねーと…」

冷静になったのかフェイトちゃんとヴィータちゃんが…

「…つーわけで、さくら!!最短距離で恭介の所に案内しろ!!」

「…さくら、急いでね？」

…うぅ…二人とも怖いよ～…

「ほな…いこか…」

「…うんソウダネ…（もしシャマルさんとキスしてたら…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなの…）」

…なのはちゃんも…もっと怖いよ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

…ん？何か唇に柔らかい感触が？

「……ん」

しかも何か息苦しい！？

「…ぷはぁ！？な、なんだ！？」

意識を覚醒させ定まる視線の先には…

「…えへ♪／／」

ほとんど唇が触れ合うそうなくらいの距離でシャマルの顔があった

「えっ！？シャマル、何を…？」

「えっと…キョウスケ君の寝顔が可愛くて…その…／／」

シャマルは照れたように視線を泳がせていたが…僕の視界の端に映った一枚のカード…ってカードぉ！？

「これは…シャマルの…仮契約カード！？えっ！？まさかシャマル…」

「はい♪キスしちゃいました／／」

何軽いノリで言ってんだー！！？

「な、なな何でさ！？」

「キョウスケ君の寝顔が可愛いかったから…こうやって／／」

「な！？…んっ！？」

シャマルが…唇を重ねて来て…／／

「……んんっ／／」

「……ん……っん／／」

「ん……どう？大人のキスは／／」

「……シ、シャマル…あの…／／」

僕が混乱しているその時…

―カラン！

「な、なななななっ…！？／／」

僕たちに近付いてきた人影が顔を真っ赤にして驚いていた

「あら、見られちゃった？」

「な…っ！？シャマル！！お、お前！？」

その声の人物は…

「…あ～…シグナム、とりあえず…お互い落ち着こ…な？」

修行から帰って来たシグナムだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「さくら！！ここさっき通ったろ！！」

「ほぇぇぇぇ！？」

「ま、まさか…さくらちゃん…迷ったん？」

「……ソ、ソンナコトナイヨ？」

「って、何で片言なの！？」

「は、早くキョウスケの所に行かないと…」

「ほぇぇぇぇ！？こ、ここどこ～～～！？」

…迷っていた…

つづく

バレて拉致られさあ大変！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シャマルとキョウスケは仮契約をした…

「だから…なんでさ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「コホン…ではシャマル…お前は神代と…その…／／キ、もとい！仮契約をしたのだな？」

「ええ…だって～！キョウスケ君のあの寝顔見てたらつい♪」

こんにちは…神代恭介です…

僕とシャマルのキスしている現場をシグナムに目撃され…ただ今シ

グナムに説教されています…つか何で僕まで!?

「……はぁ、主やヴィータが知ったら…いや、あの二人は家族の絆を大切にしているから…大丈夫だろうが…」

「はやてちゃんはヴィータちゃんの事を2号って言って許してるし…なら私は3号って事で許してくれるかしら?」

…何か今シャマルがとんでもない単語を言ったような気がするのは気のせいか!?

「…ま、まぁ後は…神代、テスタロッサや高町はどうする?」

「あ…やっぱそうなるか…」

でもまぁ…当面の問題は…なのはだな…

仮契約しているフェイトは…まだ今回の件、理由を話せば何とか許してくれそうだけど…(ヤンデレ化しそうで十分怖いが…)

正直…なのはの方が…まさに魔王だからな…仮契約を迫りながら「~なのー!!」とか言いながらオーバーキルで砲撃ぶっ放し続けそうだからな…

いや、別になのはが嫌いって訳でもないんだが…

「…ん~、どうすっかな~」

バレたら…O☆HA☆NA☆SHIだしな~

そう思案していると

―シュン！

「…っと、やっと着いた～！！」

「始めっからこーして自前の魔法で転移してればよかったな…」

「にゃははは～」

「すっかり忘れてた…」

「ん…あっ！？居たでキョウスケ君！！」

…噂のなのは達が現れた…どうする？

「シグナムに…シャマル…ま、まさか二人とも！？」

「…つかシャマル…何で恭介の腕にしがみついてんだ！？」

なのは達が現れた瞬間、シャマルは驚き僕の腕にしがみついたんだが…僕の腕が何かに挟まれた…／／

「何って…いきなりヴィータちゃん達が現れたから驚いちゃって♪」

…シャマル、♪じゃ説得力ないぞ…

「じゃあさっさと離れ……なっ！？」

「？どうしたんやヴィータ？」

ヴィータはこちらを見て硬直してるけど…

「……キョウスケ君、その手にあるカードは何かな？かな？」

えっ？手にある？そりゃ仮契……え〝

「ふ～～ん…キョウスケ、それじゃシャマルとキスしたんだね？」

フェイトさん…相変わらず目が怖いっす…

「あ、いや…これは…したというかされたというか…」

うん、僕は悪くない…よな？

「…ハァ…やっぱシャマルもそうなんか～」

はやてはそう言いながらシャマルに近付く

「は、はやてちゃん…」

―ポン

近付いたはやてはシャマルの肩に手を置き…

「シャマル…言うとく事があるからよー聞き…な？」

「は、はいっ！」

えっ…こ、これって…八神家崩壊!?ヤ、ヤバイ!?

「……正妻は私やで?そこを忘れんとったら3号でＯＫや!!」

…はやてさん…それは色々と人道的問題なくね?

「は、はい!わかりました　はやてちゃん!!」

いやいやいや!?そこ!!あきらかに問題発言のオンパレードだから!?

「…ねぇはやて…さっきから何言ってるの?　…キョウスケの妻は私だよ?」

フェイトも何かとんでもない事言いながら参戦してるし!?

「…いやだな…二人とも…どうしちゃったの?キョウスケ君は私のだよ?」

さらに魔王…もとい、なのはも緊急参戦!?…そのまま三人は三竦み的な睨み合いを続け…

「…おい、恭介…」

「うわっ!?な、何だヴィータか…脅かすなよ…」

背後からいきなり声かけると驚くんだから…

「……ちょっと手ぇ出せ…」

「？？…なぜ」

「い、いいから出せよ！！／／」

「あ…ああ…」

僕は言われるがままヴィータに右手を出すと…

―ガチッ

いきなりヴィータは僕の腕を掴み…

―ムニュ

そのまま自分の胸に押し付け…ってえええええ！！？

※ヴィータ達はまだ年齢詐称薬・改の効果は続いてます

「ヴ、ヴィータ！？な、何を…っん！！？」

いきなり有無を言わさず、ヴィータが唇を重ねてきた！？

「……ん…／／」

「「「「ああああああーー！！！！？」」」」

それを目撃したなのは達が絶叫！！

「…ぷはぁ！？ちょ…ヴィータ…／／」

いきなり何を！？

「へへ…／／この前出来なかったかんな／／（…はやて！！）」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

私がなのはちゃん達と睨み合いしとる最中…ヴィータがキョウスケ君にキスしとった！！…な、何しとるんやっ！！あんの２号は！？…ゴ、ゴホン！…

と、と思うとると…

「（はやて！！）」

２号…もとい、ヴィータからの念話が…

「（ヴ、ヴィータ！？な、何しとるん！？）」

わ、私かて…キョウスケ君とキスは１回しかしてへんのに…しかもアレは微妙な状況やったから…カウントしてええんやろか…

「（このままアイツらと話しても埒があかねー！！恭介連れて転移するぞ！！場所は…）」

なるほど…キョウスケ君を拉致ってトンズラやな…でも…

「（…分かったで…でもなヴィータ…）」

「（な…何だはやて…？）」

「（いきなりキスはあかんな～…後で…ええな？）」

「（う〝…ご、ごめんはやて…）」

まぁ後でヴィータには協力しともらって借りは返してもらうで～

「「ちょっと!!ヴィータ（ちゃん）!!な、何してるの!!!?」」

案の定なのはちゃんとフェイトちゃんがヴィータに詰め寄って行っとる…今のうちに…

―シュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「「ちょっと!!ヴィータ（ちゃん）!!な、何してるの!!!?」」

物凄くダークなオーラを放出しながら二人が近付く…いやホント怖

っ！！

「……恭介…転移すっぞ（ボソッ）」

へっ！？今なんて…うわっ！！

―シュン！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――別荘中、？？？室――――

―シュン！！

「…っと、ヴィータ！いきなり転移っ「キョウスケ君！！」て…はやて！？…あれ？この部屋って…」

おもいっきり見覚えがある部屋…って

「僕の…部屋！？」

「ああ、さっきさくらが案内してくれたからな」

…さくら…人の部屋勝手に観光スポットにすんなよ…

「まあ…とりあえずあの場からは脱出できたから助かったけと」

今のうちに何か対策を…

―ムニュ

「…時にはやてサン…君は何をしているのかな?」

「何って…抱き着いとるだけや♪」

なんだそっか~…ぢゃなく!!

「は、はやて…／／密着されると…その…／／」

※しつこい様ですが、はやて達はまだ年齢詐称薬・改の効果は続いてます

「さくらちゃんから聞いたで?キョウスケ君は大きな胸が好きやって…い、言ってくれれば私かて／／」

…さくら、僕の中で君の好感度ガタ落ちだよ

「ち、ちょ!!それは…っ!」

「ん~~」

はやては抱き着いたまま目を閉じて顔を近づけてくる!?なんでさ!?

「…だって、シャマルやヴィータはかりズルイやん／／」

だから心を読まないでくれ…じゃない！！何とかしないと！！
僕は何とかはやてから離れようとするが

―ガチッ！！

へ？…ガチッ？…なっ！？身動きが！？

「ふふっ、ナイスやヴィータ」

ヴィータ！？ってバインドが！！

「私だけキスしたってのは…やっぱはやてに悪りーしな…それに…
うりゃ！！」

―ガシッ！！

そう言うとヴィータは僕の背後からしがみついてきた…当然バイン
ド中の僕は身動きできないので…

―ムニュムニュ

「へへ…／／今の私だって、今のはやて位あんだろ？／／」

※ホントしつこい様ですが、ヴィータ達はまだ年齢詐称薬・改の効
果は続いてます

うっ…た、確かに…／／って今はそれ所じゃ…ん！！？

「……ん…っ／／」

一瞬のスキをついて、はやてが唇を重ねてきた

「…ん……んっ！？／／」

し、しかも舌を絡ませて！？…や、ヤバイ…思考がぁ…／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――その頃……――

フェイトＳｉｄｅ

「…ヴィータ、何処に転移したのかな？」

キョウスケに…キ、キスしたのも…ムッとしたけど…

「さくら、ヴィータが何処に行ったかわかる？」

「え…っと…ほえ！？キョウスケ君の部屋に魔力反応が…３つ！？」

…え！？３つ？キョウスケとヴィータと…後は誰！？

「フェイトちゃん！！さっきからはやてちゃんの姿が見えないの！！」

…そういえば…いつの間にかはやてが居なくなっ…！！ま、まさかはやても一緒に！？

「…フフ…はやてったら…また抜け駆けするんだね…」

「フ、フェイトちゃん？」

「フェイトちゃん…こ、恐いの…（ガクガク！！）」

「…なのは、さくら…行くよ…」

「「は、はいっ！！」」

この瞬間…金色の魔王が誕生したと一部者は語ったとか…

「（…い、今のテスタロッサには近付かん方がいいな…主よ…どうかご無事で）」

シグナムは胸元で十字を切って天に祈ったとか…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのは、ついに動く（笑）

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

はやとキョウスケがキスをした…ていうか真っ最中？

「どっかのアンゴル族のモ○ちゃんか！？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「……ん…ん／／」

「ん……プファ！？は、はやて…／／」

はやてと数分唇を交わし、顔を離すと…

「…キョウスケ君…／／」

トロンとした瞳で僕を見つめ…／／

―スッ

再びはやてが目を閉じて顔を近付けてきた

…あ…、はやての甘い香りが…

「…はやて」

―スッ

甘い香に誘われるように、僕も…はやてに顔を近付け…

と、思っていたら

―バタン！！

「「ちょ、何してるの！！！？」」

なのはとフェイトが乱入してきた！！

「な、なのは！？フェイト！？」

二人の乱入で何とか理性を取り戻せた…も、もう少し遅かったら…

やばかった～…って今の状況もかなりヤバッ！？

「…ちっ、もう来よったか…」

…はやてさんが少し黒くなった！？

「もう来やがったか…どさくさで恭介を押し倒そうとしたのによ（ボソッ）」

ヴィータが何かとんでもない事を言っている…ほ、本気であぶなかった～…

「…はやてちゃん？ヴィータちゃんも…キョウスケが困ってるよ…」

「…そうだね、二人とも…キョウスケ君から離れよっか？」

なのはとフェイトが…こ、怖ぇぇぇ！！

「…フフッ、ええよ…キョウスケ君とはキス出来たし…／／」

な、何爆弾投下してるんですか！？

「っ！？……ねぇ…ホント？キョウスケ君…」

ひぃぃぃ！？な、なのはが目を単色にして向かってくる！？

「あ…えっと……」

…ヤ、ヤバイ…なのはの目がいつも以上にヤバイ！？

「お、おい！！高町な「ヴィータちゃん…少し離れてくれるかなぁ？」ひぃぃ！！」

ヴィータですら怯むなのはの威圧感…　…マジで魔王降臨!?てかヴィータ!!!逃げる前にバインド解除してくれ!!!

―ガクガクガクッ!?×2

…はやては勿論、なのはの後に居たフェイトですら涙目で震えてるし…

「ねぇ…キョウスケ君、キョウスケ君は私の事…嫌いなのかなぁ？（ニコッ）」

…目を単色にてニッコリ微笑んでも…マジで震えが!?…某ス○ールデ○ズのヒロインみたいに包丁もってないよな？

「い、いや…そんな事はないが…」

う…うん！嘘はいってないよな?…ただ、魔王化が怖いが…

「そっか…じゃあ問題ないね♪」

「へっ?…問題って…んっ!?」

突然、柔らかい感触のなのはの唇が僕の唇に触れて…そのまま塞がれた

「……ちゅ……んっ／／」

「…んん!?…んくっ!!」

し、しかも舌を深く入れて!?つか、なのは!?力入れ過ぎ!?

「んんー!!」

―パァァァァ!!

…そして、勿論カードが現れましたよ…

「……ハッ!?な、なのは!!何してるの!?キョウスケから離れて!!」

「…そ、そうだ!!テメー離れやがれ!!」

「…ハッ!?こ、こうしちゃおれへん!!ヴィータ!!いくで!!フェイトちゃんも一時休戦や!!」

「う、うん!!」

…その後、なのははフェイト・はやて・ヴィータによって取り押さえられました…

…うぅ／／1日で4人とキスって…僕って…鬼畜？ｏｒｚ

『流石マスター!!感服しました!!』

…こいつ…やっぱマ改造すっか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――夜・城外・テラス――

「♪～♪～～にゃはは♪／／」

なのははカードを見て超ご機嫌だ…

「……神代、高町だが…何かあったのか？」

「ああ…シグナム…じ、実は…」

僕の部屋でのドタバタ騒動が一段落？して、城外に戻ってきたんだが…なのはは…あれから終始ご機嫌だ…魔王モードよりはマシだけどさ…

「…はぁ、シャマルに続き高町ともか…」

訳を話すと、ため息つくシグナム…まぁそうだよな～

「…しかも主やヴィータとも…その…したのか…／／」

「…うっ…まぁ…／／」

はやてとヴィータはあの後、何とか落ち着いてくれたが…フェイトが…

「…私だけしてない私だけしてない私だけしてない私だけしてない

私だけしてない私だけしてない…」

とエンドレスに呟いていた…はぁ、後でフォローしとこ

あ！ちなみに今、夕食ではやてやリンディさん、それにエイミィさんが作ってくれているんです

…シャマルは只今ヴィータとザフィーラが見張ってますよ…相変わらず料理の腕が違う方向に上達しているからな…

「…あれ？そういやＫＹと淫獣は？」

なんかずっと姿が見てないけど…

「あの二人なら先程さくらが呼びに行ったぞ。何でも二人とも迷子になってさくらが喚ばれたとか…」

…あ～…一応マップがあったと思うんだが…重要施設には結界を張ってあるからそこは大丈夫だと思うが…

つか、ＫＹとか淫獣でもう誰か解るんですねシグナムさん…

「まっ、さくらが行ったなら大丈夫か」

そうしていると…

「お～～～い！！キョウスケ～！！」

犬耳…もとい、アルフがこちらに来る…そーいや何してんだ？アイツ

「はぁ…はぁ…探したよキョウスケ！！」

「ん？何かあったか？」

「…フェイトを何とかしておくれよ！！あれからずっと部屋の隅に座ってブツブツ呟いて…痛たまれないよ…」

えっ！？フェイトまだそんな凹みモード中だったんか！？

「…はぁ、流石にこのままじゃマズイか…シグナム、ちょっとフェイトの所に行ってくるよ」

これ以上壊れたら…流石にな～

「ああ、解った…神代、頼むぞ！！私としてもテスタロッサに何かあったら…」

シグナム…やっぱフェイトの事が心ぱ「私の対戦相手が減ってしまうからな！！」…ハァ…でしょうね～シグナムの場合は…相変わらずのバトルマニアめ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内・客間――

―コンコン…ガチャ

「フェイト～居るか～入るぞ…って部屋暗っ！？」

「私だけしてない私だけして……えっ？キ、キョウスケ？」

暗闇でフェイトの声が…つかまだ変な呪詛唱えてたんかい！？

えっと…明かりは…と

―パチッ

「フェイト、大丈夫か？」

まぁ色々な意味で…

「キョウスケキョウスケキョウスケキョウスケキョウスケキョウスケキョウスケキョウスケ…」

…めっさ怖いんですが…フェイトの目も明らかに異常だし…とりあえず…

「フェイト…目ぇ食いしばれーぇ！！！」

―バシッ！！

フェイトの頭を叩いてみた

「！？…い、痛い…ハッ…！？キ、キョウスケ？わ、私…今まで何を！？」

とりあえずフェイトは元に戻ったが…叩けば治るんかい！！

――――

―――

――

―

「落ち着いた？」

「うん…ごめんね、心配かけて」

「とりあえずこれから夕飯だけど…」

―グゥゥゥ…

「…食べにいこうか？」

「あうぅ…／／」

何の音だったかは、本人の名誉の為にツッコミはやめとこう…

「…あ、あの！！キョウスケ…」

「ん？どうした？」

さっきの音は皆には秘密にしとくが？

「…キョウスケは…その…な、なのはの事…す、好きなの？」

……え？

「えっと…何でいきなりそんな話しに？」

「だって…さっきなのはの事…嫌いじゃないって…」

……ああ、アレか

「まぁ、好きだよ」

「そ…そうなん…だ」

「…それに、はやてやヴィータそれにシグナムにシャマル…さくらやリイ…ゲフン、…勿論フェイトの事も好きだよ」

「…えっ…み、みんな…なの？」

「ああ、みんな僕にとっては大切な人達だしね…あれ？可笑しかったかな？」

「う、ううん！…そんな事ないよ！！（そっか…じゃあキョウスケは、なのはの事が特別好きって訳じゃないんだ…だったら…／／）ね、ねぇ…キョウスケ、お願いがあるんだけど…／／」

「えっ？まぁ、出来る事なら…」

何かフェイトが顔を赤くしてジモジしてるが…

「あ、あの…わわわわわたっ…イタッ！？」

…おもいっきり舌噛んだな…

「プッ…」

「キ、キョウスケ!?笑うなんてヒドイよ～」

思わず吹き出してしまった

「ゴメンゴメン！つい…」

「む～～～～っ／／」

顔を赤らめて、頬を膨らませてるフェイト…怒っているんだろうが、可愛く見えてしまうな～

「で、お願いはいいの？」

「あっ！！…えっと…あのね、キョウスケ…今度私と…お出かけ…してほしいんだけど…ダ、ダメかな？」

お出かけ？…ああ、買い物の荷物持ちか何かを頼みたいのかな？

「分かった、別にいいよ」

「ホ、ホントに!?よかった…断れたらどうしようかと…（で、でもこれで…キョウスケとデートの約束が出来た…／／）」

フェイトは思いっきり安堵しているが…大袈裟だな～　荷物持ち位は引き受けるのに

『（…何でしょう…物凄くマスターとフェイト嬢の意見に行き違いを感じるのは…？）』

「で、フェイト　買い物っていつ行くの？」

「あっ、うん…キョウスケの都合のいい日でいいよ」

「そう？じゃあ都合が付いたら連絡するよ」

「…うん／／」

フェイト…凄く嬉しそうだな

「じゃあ…とりあえず行こうか。皆お腹空かせて待ってるしね」

「ふふっ、そうだねキョウスケ♪」

「さて…今日の夕飯は、な～にかな～…あれ？」

「どうしたの？キョウスケ？」

「あ、いや…何か忘れてるような…？」

まぁ思い出さないって事は大した事はないかな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「ねぇさくら…また行き止まりだよ？」

「…そ、そうみたいだね～…」

「…さくら、まさかとは思うが…」

「ち、ちがうもん！！迷ってなんかいないもん！！」

「「（ま、迷ったな…）」」

…また迷っていた

1度あることは2度目もある！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――別荘内・オープンテラス――――

「いただきま～す」×多数

こんばんは　神代恭介です

僕たちは今、はやて達が作ってくれた夕飯【カレーライス】を食べてます

「さすがはやて！ギガうまだな！！」

「うん…美味しいよ、はやて」

「さすが主です！」

「はやてちゃん、お料理上手なの…」

「あはは　ありがとな～みんな

でも、今日のは私だけやなくて、リンディさんやエイミィさんとの合作やからな～」

「でもはやてさん、ホントに料理上手ね～　いいお嫁さんになるわよ？…よかったわね～キョウスケ君♪」

「ぶっ！？な、何言っているんです！！リンディさん！！子供相手に言う台詞じゃないですよ？」

まったく…このオバハンは

―ピクッ

「ん～？どうしたの？なのはちゃん？フェイトちゃん？」

「ヴィータもどうしたのだ？急に手を停めて…」

「「「……いえ、な、何でも…」」」

急にテンション下がったな？…別にカレーの味には問題ないし…？辛口だったか？

ちなみに隅っこの席で、何故かシャマルが泣きながらカレーを食べていたが…うんスルーだ！

「（うぅ…はやてちゃん…お料理上手なの…わ、私も頑張らないとなの！！）」

「（キョウスケに私の手料理…食べてほしいな…／／）」

「（うぅ…どうしよう…私は料理はあんま得意じゃねーし…この前の弁当も苦労したしな…本格的にはやてに習うか？）」

…？何か微妙な空気が…？

「ところでキョウスケ君、今日私達が寝る部屋ってどこかな？」

あ、そーいや別荘に着いた早々更衣室に向かったからな…部屋に案内はしてなかったな

「大丈夫ですよエイミィさん、全員に【個室】が用意されてますか…ら？」

―ピクッ

…な、なんだ？今一瞬、妙な邪念を多数感じたが…？

「へ～　個室か～　ねぇキョウスケ君、みんなの部屋って場所は近いの？」

「えっ？まぁ同じ階ですから近いですよ。僕の部屋がある階の住居フロアなんですよ
ああ、もちろん談話室とかもありますから」

エイミィさん…皆とパジャマパーティー的な気分でガールズトークでもしたいのかな？

…と、この時の僕は思っていたが…まさか後に…あんな事になるとは…

あ、そういや…さくら…クロノ達を迎えに行ったままで戻って来てないな…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――夜　キョウスケ部屋――

夕食後、皆を部屋に案内して僕は自分の部屋でのんびりと読書中です

「…ん～　そろそろ寝るかな」

―コンコン

ん？誰か来たみたいだな…

「どうぞ、鍵は開いてるよ」

―ガチャ

「「「「お邪魔しま～す」」」」

部屋に入って来たのは…

なのは・フェイト・はやて・ヴィータだった

あ、ちなみに年齢詐称薬・改の効果はなくなってるので

「やあ　どうしたの？皆して？」

昼間あんな騒ぎの後、４人揃って行動ってのも凄いな…

「もちろん夜這いに来たんや！！」

……あれ？

「あ～……悪いはやて、どうやら疲れて幻聴が聞こえたみたいで…何と言ったのかな？」

「せやから！皆で夜這いに来た言うとるんや！！」

何か更に変な単語増えてね！？

「は、はやてちゃん…／／」

「さ、さすがにそんな…ストレートに言うのは／／」

「別にいいじゃねーか！事実なんだしよ！」

…つかソコの３人！否定しないんすか！？

「ホンマは私とヴィータだけでキョウスケ君の部屋に忍び込も思ったんやけどな～…運悪くなのはちゃんとフェイトちゃんに見つかってもうてな…」

「はやてちゃん！だからそーゆー抜け駆けはダメなの～！！」

「…なのは?確かなのはも自分の部屋コッソリ抜け出す所だったよね?…どこに行こうとしてたのかな?」

「ふぇ!?…フェイトちゃん…見てたの?」

皆、同じ事を考えてたって事ね…

「…色々とツッコミ所満載だが…何がしたいんでしょう?」

「「「「一緒に寝たい（の）（んや）（な）（だよ）!!」」」」

……なんでさ?

「折角のお泊り会なんやし…そーゆーイベントは必須や♪」

…お泊り会って…まぁ確かに似たような物だけどさ…

「キョウスケ君…ダメなの?…グスッ」

「キョウスケ…グスッ」

うっ…なのはとフェイトが涙目でこちらに訴えかけて…っ!

「…はぁ、なら僕はソファで寝るから皆はベットで…「いややな~、キョウスケ君も同じベットで寝るんや」って!?」

……だからなんでさ!?

「そうだよ…私、一緒にキョウスケ君と寝たいの／／」

「わ、私も…一緒がいいかな…／／」

「なぁ、いいだろ～恭介～ぇ」

何この４対１みたいな不利な状況！？

『ちなみにマスター、５対１ですよ　私も一緒に寝る事を推奨します』

「はっ！？なんでだインフィニティ！？」

『面白いからです！！』

うわっ…コイツ言い切ったよ…　てか僕に味方なし！？

「…はぁ、分かったよ…」

「「「「やったーーー！！」」」」

…どうせ拒否権なんて…ないんだろうな～　仕方ない、腹括るか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…ええか皆？恨みっこナシの一回勝負や！！」

「うん…でも負けないよ！」

「私だって負けねーからな！！」

「それじゃ…いくよ！」

…ただ今はやて・フェイト・ヴィータ・なのはが一触即発の状態です…

まぁ…原因は【誰が僕の隣で寝るか】という事なんだが…

まぁ、唯一の救いは…

「「「「最初はグー！！！！」」」」

…勝負方法が平和的なジャンケンでって事だな～

…バトルロイヤルとかだったら…別荘半壊しそうだし

「「「「じゃーんけーーん……ポイ！！」」」」

―――――

―――

――

―

「じゃあ、明かり消すから」

「うん♪／／」

「キョウスケ君、温いな～／／」

結果…なのは・フェイト・僕・はやて・ヴィータ　という位置になりました

「…な、なんてあそこでグーを…」

「…くっ…はやてはいいとして…フェイトかよ…」

なのはとヴィータは悔しがってました

しかし、両隣にフェイトと…はやてか～…う〝っ、はやてとの昼間のキスの事思い出すと…／／

何か変に意識するな…あ、そうだ！！

「…インフィニティ、マテリア【ふうじる】セット、【スリプル】」

―ピカッ

僕は自分自身に魔法を掛けた

これで…前みたいに…ゆっくり眠れ……Ｚｚｚ

…後にこれが過ちとなったのだが…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

ん？今何か光ったんは何や？

「……す～す～…Ｚｚｚ」

「…キョウスケ君、もう寝てもうたん？」

「…キョウスケ？」

「すぅ…ん…」

フェイトちゃんもキョウスケ君に話しかけてるみたいやけど…寝るの早っ！？

『皆さん、マスターは睡眠魔法を使って寝てしまいました…まったくヘタレなマスターです』

なら、さっきの光はキョウスケ君の魔法？…ちゅうか、インフィニティ辛口やな～

「なっ…魔法で寝ちまったのか？この前と同じだな」

…この前？

「…ヴィータ？この前って何や？」

私はキョウスケ君の寝顔を眺めながら、ヴィータに背中を向けたまま…振り返らずに尋ねてみると

「あ…いや…そのぉ…アハハ」

「…ヴィータちゃん？Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを聞かせてくれるかな？」

「…まさか、キョウスケに何かしたんじゃ？」

なのはちゃんもフェイトちゃんも当然ヴィータの発言は気になっとるようや

「お、おやすみ！！」

―ガバッ！

「ちょ…ヴィータ！？」

「す～す～…むにゃむにゃ」

…はぁ、まあええ…明日じっくり聞かせてもらうから覚悟せいな？

「じゃあ…なのはちゃん、フェイトちゃん…おやすみ…」

私も今日は…疲れてもうたしな～

ふふっ、でも今日はキョウスケ君に抱き着きながら寝れるんや…最

高や／／

「……ん」

あ、キョウスケ君が寝返りうってフェイトちゃんの方を向いてもうた…

―ガサゴソ…

ん…？何やきぬ擦れの音？

「……ね？」

この声は…フェイトちゃん？

「……ん／／」

―チュッ

…ま、まさか…

「ちょ！？フェイトちゃん！？何しとるん！？」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

フェイトＳｉｄｅ

『皆さん、マスターは睡眠魔法を使って寝てしまいました…まったくヘタレなマスターです』

キョウスケが自分の魔法で眠った事をインフィニティが教えてくれた…もっとキョウスケとお話（あ、もちろん普通のです）したかったな…

「なっ…魔法で寝ちまったのか？この前と同じだな」

この前って…？

「…ヴィータ？この前って何や？」

はやてがヴィータを問い詰めてるけど…ま、まさかヴィータ、前にキョウスケと一緒に寝た事あるの！？

「あ…いや…そのぉ…アハハ」

ヴィータは笑ってごまかしてるけど…

「…ヴィータちゃん？Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを聞かせてくれるかな？」

うん…私も聞きたいかな…

…ハッ！？ちょっと待って！！もし前に一緒に寝たとしてヴィータは【前と同じ】って言ったよね？

魔法で眠っちゃったキョウスケ＝無抵抗…ま、まさか！？

「…まさか、キョウスケに何かしたんじゃ？」

無抵抗なのをいい事に…変な事してないよねヴィータ？

「お、おやすみ！！」

―ガバッ！

「ちょ…ヴィータ！？」

「す～す～…むにゃむにゃ」

ヴィータは逃げるように眠っちゃった…フフッ…ヴィータ、明日じっくり聞かせてもらうからね？

「じゃあ…なのはちゃん、フェイトちゃん…おやすみ…」

はやても特に追求せずに寝ちゃうみたい…あ、はやて…キョウスケに抱き着いて…わ、私だって／／

「……ん」

抱き着こうとしたら…キョウスケが寝返りをうって…わわわ私の目の前にキキキョウスケの顔が／／

…今日だけで、シャマルやはやて・ヴィータやなのはとも…その…したんだし…／／

―ガサゴソ…

皆に気付かれないようにキョウスケの顔に近付けて…／／

「私だけしてないし…いいよね？／／」

―チュッ

「……ん／／」

…何か久しぶりの…キョウスケとのキス…／／

「ちょ！？フェイトちゃん！？何しとるん！？」

……あ、はやてにばれちゃった…かな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

暴走する愛情！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

みなさん、こんにちは　フェイト・テスタロッサです

えっと…キョウスケなんですが、今寝ちゃっているので…今回は私があらすじをお伝えますね…

えっと…前回わ、私は…キョウスケと…その…キスを……あうぅ／／

―ボンッ

「きゅうぅぅぅ…／／」

―バタン

『あ～…フェイト嬢はオーバーヒートてしまいましたね～

まぁ…つづきをどうぞ』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

はやてＳｉｄｅ

「ちょ！？フェイトちゃん！？何しとるん！？」

キョウスケ君がフェイトちゃんの方に寝返りをうった思うとったら…あの金髪は私のキョウスケ君の唇奪いよった！！！

ま、まぁ…フェイトちゃんは既に仮契約しとるから…初めてちゅう事じゃないんやろうけど…

「はやてぇ～、どーしたんだ～？」

「フェイトちゃんがどうしたの？はやてちゃん？」

ヴィータとなのはちゃんも私の声で起きたようや…

――――で、只今説明中――――

「…フェイトちゃん…また抜け駆けなの？」

「だ、だって…今日は皆ともキョウスケとキスしたのに私だけ…してなかったから…」

あ～…言われてみれば…今日はシャマル・ヴィータ・私・なのはちゃん…４連続でキスやったしな…まぁ気持ちは解るでフェイトちゃん

「…しかし、こんだけ騒いでもホントに起きねーな～恭介は……な、

なぁ…はやて／／」

「ん？どないしたヴィータ？」

ヴィータはキョウスケ君の頬を指で突きながら…キョウスケ君の頬ってやわらかそーやな～／／

「…今の恭介に…何しても大丈夫なんじゃねーか？／／」

「「「……」」」

い、いわれてみれば…最近はキョウスケ君なかなか一緒に寝てくれへんし…

こ、こんなチャンスもう滅多にないかも…

「いただきま～す／／」

「って！ちょい待ち！！なのはちゃん！？」

人が考えて事をしとる時に…この魔王は～

「…もう、何？はやてちゃん？せっかくのチャンスなのに～…後、何か失礼な事考えてなかった？」

そ、それは気のせいや！なのはちゃん…

「コホン…ええか、なのはちゃん…キョウスケ君を襲いたいんはみんな同じや！！でもな…今みたいに抜け駆けしようとしてみ？残りの3人が確実にジャマするやろ？」

ここは確実性を優先せな…このチャンスを有効利用せなな…

「はやて？どういう事？」

「それなんやけど…皆、ここは一つ停戦協定を結ばへんか？」

「「「停戦…協定？？？」」」

「そや、まぁ早い話し…４人掛かりでキョウスケ君に色んな事を…／／」

それなら…まぁ一人に抜け駆けされるよりはマシやしな

「…は、はやてちゃん…何か大人なの／／」

「…う、うん…でもそれなら…キョウスケと…／／」

「…じ、じゃあ…先ずは恭介の服を…／／」

フッフッフ…今夜は寝かせへんで～キョウスケ君？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――早朝――

キョウスケSide

…ん…朝か…

「…ん…ふぁぁぁ…痛ッ！？」

何か腕の感覚が！？痺れたか？
しかも何か…身動きがとれない…？

「…痺れた…かぁ！？」

な…なんだ！？

「すー…すー…むにゃむにゃ…」

「…ん…くぅ…」

「…す～す～…」

「…ぐへへへっ…」

…あ～…なにこの状況！？
なのは達が僕の両腕を枕代わりにして寝てるし…ご丁寧に右腕になのは・フェイト、左腕にはやて・ヴィータ…こりゃ痺れる訳だわ…

さて…このままって訳にもいかないし…起きよ…

僕は、なのは達を起こさない様に注意して布団から出るが…

―バサッ

……寒ッ!?

おかしいな?別荘内は気温は適温に設定されてるんだが…

…だが、その理由はすぐに分かりました…

「……あれ?パジャマ…何で着てない…なっ!?なんじゃこりゃーー!!!?」

早朝1番、別荘内に僕の悲鳴が響き渡った……

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「あ、お早うキョウスケ君～」

「キョウスケ…おはよ」

「おはようさん～キョウスケ君」

「オハヨ恭介…ねみぃ…ふぁぁ…」

僕の叫びで目をさましたなのは達…

「ああ、皆おは…じゃなくて!!何なんだよコレは!!?」

僕は自分の身体のあちこちに着いている【キスマーク】を指さしてなのは達に問いただすと…

「えっ?あ、それはね~にゃはは／／」

「私らの愛の証や♪」

…いやまぁ…こーゆーのはそーゆーカテゴリーに入ると思うけど…

「…はぁ、まったくいつもの事とはいえ…」

「気にしたら負けや♪…それにキョウスケ君、なんだかんだで段々と抵抗がなくなってきとるで~

…このままスキンシップを続けとったら…堕ちるのも時間の問題やな（ボソッ）」

う〝っ…確かに最近…状況に流される事があるような…

「ゲフン…し、しかしパジャマ脱がしたままって…よく僕は風邪引かなかったな~」

上半身だけとはいえ裸で寝てたのに…

「えっと…キョウスケが風邪引かないように…皆で抱き着いてたか

ら／／」

「へへっ／／私らも恭介の温もりで風邪ひかなかったかんな～／／」

「温もりで…ってヴィータ達はパジャマ着てたんだから大丈「私らもパジャマ着てへんよ？」…なん…だと！？」

はやてがトンデモ発言を！？

よく見たら…ベットの周りに散乱している皆のパジャマ（上半身）

…ナニコレ？

「…ミナサン…マサカ服キテナイノデスカ？」

言われてみれば…４人ともシーツを身体に纏ったままだし…

「なんや？中見たいんか？…私は別にええよ／／」

「わ、私だって…キョウスケになら…あうぅ／／」

はやて、フェイトさん…も少し恥じらいを持とうよ…

「何ならキョウスケ君もキスマーク…付けてもいいよ？／／」

「まて！！高町なのは！！それは私が先だかんな！！／／」

なのはとヴィータはそれに加え、羞恥心という言葉覚えようね…

…はぁ、４人が何やら言っているが…このままこの場所に居たら…

シャレにならん事が起きそうだ…

とりあえず逃げ…ゲフン、顔洗いにいこ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「ヴィータ、勿論私が先やで？」

正妻や先なんは当たり前やしな…ま、安心しぃヴィータ。ちゃんと順番は守るで～

「はやて…昨日言っていた停戦協定を破るの？抜け駆けは無しだよ？」

「フッフッフ…甘いでフェイトちゃん！！砂糖に練乳かけて食べる位に甘々やで！！停戦協定は朝までや！！こっからは早い者勝ちや！！！」

「え～～！！ズルイはやてちゃん！！」

「これが世界の真理や！！いくでヴィータ！！」

「ああ！！恭介にキスマーク付けてもらうんは私達だよなっ！！はやて！！」

「もちろんや！！ヴィータ！！」

「というか、いつの間にかキョウスケが居ないよ!!?」

「ホ、ホント!?フェイトちゃん!!?」

なんやて!?これからって時に!!?

「ど、どこや!?何処に行ったん!?キョウスケ君～!!!」

「キョウスケ君…乙女に恥をかかせないでほしいの…」

「恭介…私が1番に見つけてやんかんな!そ、そんでもって…／／」

「キョウスケ…逃がさないよ?フフッ…」

皆、考えとる事は同じやな～　でも、負けへんで!!

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―ゾクッ!

「な…なんだ？今寒気が！？」

『なのは嬢達が何か企んでいるのではないですか？』

「まさか～こんな朝っぱらから…」

…十二分にありえるな…

「あ、おっはよ～キョウスケ君！」

と不吉な事を考えていたら…あれはエイミィさん

「あ、おはようございます　エイミィさん」

「ん…ああっ！？キョウスケ君…とうとう大人の階段を／／」

？？大人の階段？……あ〝ヤバッ！！キスマークか！？

「や、これは…ちがうんですよ！？　僕が寝ている間になのは達が勝手に…」

「ええっ！？なのはちゃん【達】！？

そんな…複数でなんて…キョウスケ君のエッチ！！／／」

てか、話し聞けよ！耳年増！！

「…キョウスケ君、今とーっても失礼な事考えてなかった？」

…この人も心読めるんかい！！

「考えてません！てか話しを聞いて下さいよ！！」

この後、事情説明にかなりの時間を費やす事となった…

そう…致命的なタイムロスを…

「見つけたでー！！」

「よっしゃ！！バインドォ！！」

―ガチィ！！

「…はいぃぃ！？」

いきなりヴィータからのバインドで捕獲されてしまった…

「いくでヴィータ！！なのはちゃんやフェイトちゃんに見つかる前に！！」

「ああ！！何か知らねーがアイツらが足止め食らってる今しかチャンスはねーしな！！」

「ほな…行こか？キョウスケ君？　大丈夫や　別に痛くないんやし…ただ、らぶらぶちゅっちゅとキスマーク付けてくれるだけでええんやで？／／」

そ、それがマズイんだろー！！

「ほな体育倉庫へＧＯ！や」

そして、そんな施設ないし！！

「なに、ただのノリや♪」

だから何で心が読めるんだ！？

「さ、いくぞ恭介…　あ…そ、その…痛くしないでくれよな…／／」

頬を赤らめ可愛い…って！じゃなくて！！

「あ、私は…く、首筋に…頼むな／／」

「ヴィータは大胆やな～♪　じゃあ…私も…まずは…／／」

まずはって何さ！？他にもあるんかい！！

そして僕はそのまま個室に連れ去られてしまった…

エイミィさん…笑ってないで助けて下さいよ！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

その少し前…

「フェイトちゃん!!はやてちゃん達が先に行っちゃったよ!?」

「うん…ヴィータが足を引っかけなければ…」

「急ごうフェイトちゃん!!まだ間に合うよ!!」

―タッタッタッ…

二人が通路を走っていると…

―ドン!!

「きゃ!?」

「なのは!?大丈夫!?」

「…痛たた…う、うん大丈夫だよフェイトちゃん…」

なのはのぶっかった人物…それは…

「ってクロノ!??」

「ゆ、ユーノ君も!?ど、どうしたの!!?」

「…なのは…フェイト…」

「た、助かった…遭難するかと思ったよ…」

―バタン×2

そう言いながら二人はなのはとフェイトにもたれかかった…

「ちょ!?ちょっと!!ユーノ君!!私、急いでるから…」

「ク、クロノも!!…は、早くしないと…キョウスケが…」

という具合に足止めを食らっていました…

「「お…お腹すいた…」」

―ブチッ

「…ユーノ君…私、物凄く急いでいるから…どいてくれるかな…?」

そう言いながら…なのはの手にはレイジングハートが…

「…クロノも…ジャマ…しないでくれる?…だからKYなんだよ?」

フェイトの手にもバルデッシュが握られ…

―ドコーーーーン!!

「…もう！二人ともいきなりいなくなるんだから！案内はちゃんとわた…し…が」

二人を探していたさくらが駆け付けた時には…

…黒焦げになった通路と…消し炭と化した物体が２つ転がっていた…

「ほ、ほえぇぇぇぇ！？」

キスマークパニック！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――別荘・個室――――

キョウスケＳｉｄｅ

はやてとヴィータに拉致られ…

「さ、キョウスケ君♪ここならジャマは入らへんから…／／」

そう言いながらはやては、その白い首筋をこちらに露出して…って！！

「はやて！？さ…さすがにそれは…マズイんじゃ…」

何とかはやてを説得しようとするが…

「今更やな～　キョウスケ君、あんだけぎょうさんキスしまくったんや…ちょちょっとキスマーク付ける位問題あらへんよ～」

う゛…そ、それを言われると…

「…まったく返す言葉もございません…ｏｒｚ」

昨日だけで４人とキスしたし…

※フェイトの事は寝ている時だった為、気付いていません

「それとも…胸に付けてくれてもええ「く、首筋にします！！」そか～♪じゃあヴィータもそれでええか？」

「う、うん…いいよはやて…キ、恭介…／／」

ヴィータは熱っぽい視線を送ってくるし…

ああ…段々と引き返せない所に足を踏み入れていくような…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――別荘・キッチン――――

…はやてとヴィータから何とか解放され、朝食を作る為キッチンに向かうと…

「あら、おはようキョウスケ君。エイミィから聞いたわよ～大人のか「おはようございます、そしてそのネタもういいですから！リンディさん！」あら、そう？面白いのに～」

朝食を作っていたリンディさんが居た

…てか、そーゆー話は自分の息子さんでして下さい！！

「…ってそういえばクロノ達…昨日の夕飯の時も見てませんが…」

夕飯食べていなかったよな？

「あら、そーいえばそうね？まぁ大丈夫でしょ、１日位食べなくても」

…まぁ一応あれでも執務官なんだし…下手な事はない…よな？

後でさくらに聞いてみるか

…そーいやさくらも昨日から見てないけど…？

「あ！キョウスケ君、もうすぐ朝食ができますからそこの食器運んでくれるかしら？」

「あ、はい　わかりました」

僕はリンディさんが作ってくれた料理を外のカフェテラスに運び…

「あーー！！キョウスケ君！！見つけたのー！！」

「キョウスケ！！はやてに変な事されなかった！！？ま、まだ清い体！！？」

なのはとフェイトが現れた…フェイトは若干暴走気味だが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ふ～～ん…それでキョウスケ君、はやてちゃんとヴィータちゃんにしたんだ～（ニコッ）」

「キョウスケ…はやてやヴィータばかり相手にしなくても…」

結果…只今なのはとフェイトに尋問されてます…

…二人とも目がとても素敵なハイライトで怖いんですが…

「あ、キョウスケ君～！！」

「恭介ー！！…って、オメーら、恭介に何やってんだ！！」

そこにはやてとヴィータがやってきた！！…もう誰でもいいから助けてくれ…

「ヴィータちゃん…ッ！？そ、その首の跡は…もしかして！？」

「はやて…そ、その首にあるのは…やっぱり…キョウスケに？」

なのはとフェイトは二人の首筋にある赤い跡を指差しながら問いただした…

「えっ？いや～バレてもうたか～。キョウスケ君、激しくてな～／／」

う〝をををい！！はやてさん！！何言ってるんですか！！？

「フフン！どーだ！！いいだろ～！！恭介からの愛のこもった証だぜ♪／／」

ヴィータも…もう少し自重してくれると助かるんですが…

「ううぅ…こ、こうなったら…キョウスケ君！！私にもキスマークプリーズなのー！！」

「あ、なのは！！ずるいよ！！キョウスケ！！わ、私も付けてほしいな…／／」

「ちょ！？落ち着け二人とも！！」

「落ち着いてなんていられないの！！はやてちゃんやヴィータちゃんばかりズルイの！！」

「そうだよキョウスケ！！はやて達だけなんて…不公平だよ！！」

いや…そーゆー問題か？

「「そーゆー問題（だよ）なの！！」」

だから地の文にツッコムなよ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――朝食後――

「ご馳走様でした～」×多数

朝食を食べ終わり、僕たちは帰りの支度をしています…と言っても、外の時間は1時間しか経ってないが…

え？あの後どうなったかって…？

うっ…し、仕方ないぢゃんか！！あのままじゃ収拾つかなかったんだし…／／

『その割にはキッチリ綺麗にお二人にキスマーク付けてましたけどね？マスター♪』

……はいｏｒｚ

…結果としては4人ともとても上機嫌…というか…アレは…と顔を引き攣らせながら考えていると…

「キョウ君～！！」

ん？あの声は…さくら！？

「キョウ君～、やっと見つけた～！！」

「さくら！今までどうしてたんだ？」

昨日から全く姿が見えなかったが…

「えっと…ちょっと医務室の施設を使ってて…と、ところでキョウ君…なのはちゃん達…何があったの？」

あ…やっぱり気付いたか…

なのは達の今の状態…

「「「「えへ…えへへぇへぇぇぇ～／／」」」」

…鏡を見ながら首を見て笑っているという…見事な壊れっぷりをしているんですよ…

とりあえず今のなのは達に関わるのは恐すぎるからスルーしとこ…

「ゴホン…と、ところで医務室って何かあったのか？」

「えっとね…クロノ君とユーノ君が消し炭になって倒れてたから…何とか治療してたんだよ～」

…は？何？消し炭って…

「…なのはちゃんとフェイトちゃんの残留魔力が残ってたけど…」

「あ～…それは…何というか…」

悪魔砲喰らった訳か…二人とも、迷わず成仏してくれ…

「き、キョウ君…まだ生きてるよ…一応」

…一応なんだね…

「…とりあえず帰りの支度しよ…
さくら、悪いけど…なのは達を再起動しておいて」

「う、うん…でもなのはちゃん達…大丈夫かな？」

「……多分」

「あはは～……」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――出入口魔法陣付近――

そして、なのは達も無事にさくらのおかげで再起動に成功？して、
別荘から出る為に出入り口の魔法陣の所にいるのですが…

「クロノ…生きてたのか…」

「勝手に殺すな！！というか開口１番それか！？」

「いや～無事でよかったな～」

「…何か大元の原因はキミって聞いたけど…」

「ま、まぁユーノ…そこは気にしたら負けだ！」

僕は…悪くないよな?多分…

「まったく…まぁいい、それでキョウスケ　さっきの話しだが…」

「ん?ああ、クロノとユーノ・エイミィさんがここに残るって話しだろ?別にいいぞ?僕たちは外に出たら数時間後に再会って感覚だからな　ただ…」

「ああ、分かっている　立入禁止区域には入らないさ」

「そうしてくれ
さくら、3人の身の回りの世話を「「い、いや!!それはもう遠慮する!!」」…って、どうした2人とも?」

2人は顔を真っ青にしているけど…?

「そうだよ~クロノ君!ユーノ君!さくらちゃんがせっかく手伝ってくれるっていうのにさ~　ね~♪さくらちゃん?」

「あ、はい!私頑張ります!!」

「んん~♪　さくらちゃん!!なんていい子なの~!!可愛いし~…2人とも!!こんな可愛いさくらちゃんに何の不満があるの!?」

エイミィさんは、さくらに萌え萌えだった…

「いや…それは…」

クロノは何か言いたげだったが

「…クロノ、エイミィさんもいるし…大丈夫だよ　きっと…」

「…あ、ああ…そうだな」

ユーノに説得され納得したようだ…つかウチのさくらに何か文句あるんかい！！？

「キョウスケ君もさくらちゃんに甘々だね～」

…エイミィさん、あなたも地の文にツッコムんですね…

「…ハッ！？殺気！？」

僕の背後からえぐるよな視線が…

「「「「むーーーー（怒）」」」」

…な、なんかめちゃくちゃ睨まれてるんですが…何かした？

「…キョウスケ君、まだ年末年始の準備終わっとらんし…早よう帰って準備せんとな…？」

…はやてさん、目が笑ってませんよ？

「恭～介ぇ～！！罰として、この後の買い出しに付き合えよな！！」

罰って何さ！？

「あっ！！ヴィータずるいよ！？」

「ズルくねーよ!!恭介は家族なんだし!!」

「うっ…そ、それは…」

「じゃあキョウスケ君は…買い物の後にウチに来てなの♪シュークリームご馳走するの!!…あ、ヴィータちゃんは先に帰っていいよ？」

「んだと!?テメー恭介に何する気だ!?」

「えっ!?ただお父さんとお母さんに【正式に】挨拶してほしいかな～って♪／／」

…何で【正式に】を強調するんですか？

「その点フェイトさんは、義理の母になる私にキョウスケ君を紹介しているから1歩リードね～」

…今サラっと大事な事言わなかったか？

「ふぇ!?リンディさんがフェイトちゃんのお母さん?」

「ええ、フェイトさんにはハラオウンの名前を名乗ってもらおうと養子縁組の話しがあるのよ」

あ～…そーいやそんな事も原作であったな～…

「何ならキョウスケ君もハラオウンって名乗って見る?フェイトさんの婿養子って事でもいいし～」

「えっ！？キョウスケがむむ婿に…あうぅ／／」

フェイトは真っ赤になって俯いているが…そうなるとＫＹが義兄さんに…鬱だ…

「そんなんダメに決まっとるやろ！！キョウスケ君には八神を名乗ってもう予定や！！」

「はやてちゃん…キョウスケ君には高町の姓の方が良いに決まってるよ？」

てか、婿養子なのは確定なんですか！？

「はぁ…大体子供の僕にはまだ早い話しです「な、なぁ恭介…／／」ってどうした？ヴィータ？」

裾を引っ張りながら赤くなってるヴィータが…？

「あ…あのさ…私は、神代ヴィータでも…いいぞ？／／」

「えっ！？／／ヴ、ヴィータさん？」

「ちょ！？ヴィータちゃん！！？そ、それなら私だった神代なのはでも全然全く問題ないよ？キョウスケ君っ！！」

「わ、私だって…フェイト・Ｔ・神代でも全然いいよ？／／」

「ちょい待ち！！だったら神代はやての方が１番に決まっとるで！

！」

…いや　だからまだ先の話しぢゃ…

結局…別荘から出たのはそれから数時間後となったのだった…

おまけ

「…はぁ、あの４人は相変わらずだな」

「フフッ、いいじゃないシグナム　毎日飽きなくて♪」

「…まぁ、な

…ところでシャマルはあの話しには加わらないのか？」

「ねぇシグナム…愛人って言葉知ってるかしら？フフフッ」

「……」

シグナムは顔を引き攣らせて仲間の黒い笑顔を見るしかなかった…

「……我は主達が幸せならそれでいい」

「「……」」

「……どうした？」

「「ザフィーラ居たの（か）！？」」

「……」

すっかり忘れられていたザフィーラだった…

VSシスコン!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

…僕って沸点低かったかな?

あ、どうも…現実逃避気味の神代恭介です
僕は今、木刀を持って高町家の道場にいます…
で、勘のいい方は分かると思いますが…目の前には…

「なのはを傷モノにした不届き者は…オレが叩き潰す!!」

「はぁ…」

…とまあ…シスコン兄貴　高町恭也が息巻いているんですよ…

「キョウスケ君~頑張ってな~!!」

「恭介!!そんなヤツ瞬殺だ!!」

「キョウスケ君!!頑張ってなの~!!」

道場の隅ではやて・ヴィータ・なのはが絶賛応援中だった…

何でこうなったというと…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

数時間前…

「じゃあキョウスケ君また後でお店に来てね？」

「あ、ああ…　時間があったら寄らせてもらうよ」

「チッ、早く帰れ！！私と恭介はこれから忙しいんだ！！」

「ヴィータ～、そんな言い方はあかんよ…確かにお邪魔虫やけど…」

「酷いよ～！ヴィータちゃんにはやてちゃんっ！！」

別荘から出た後、なのは達を見送る為に玄関にいるのだが…2人とも黒っ！？…

「ったく、この忙しい時にシグナムとザフィーラはよ…」

「まぁ、別荘だから数時間で帰ってくるし…」

別荘から帰り際…

「私とザフィーラはもう少し修行していく　数日で戻るので心配ないぞ？」

と言って、別荘に残留中なのです

「ああ見えてシグナムは修行好きですからね～」

まあな～…だが一緒に居たザフィーラから暗いオーラが出ていたのは気のせいか？

「じゃあ私達も戻りましょうか？フェイトさん？」

「あ、はい…」

フェイト達も一度アースラに戻るらしい

「ねぇキョウスケ…」

「どうした？フェイト？」

フェイトは僕の耳元で…

「あの…ね、約束…忘れないでね？／／」

と呟いた。
約束？…ああ、買い物か！！
「ああ、大丈夫。ちゃんと覚えてるから。ね？」
僕もフェイトの耳元でそうつ呟くと…
「あ……うん／／」
フェイトは嬉しそうに…ハッ！！
―ゴゴゴゴゴォォ…
じ、地響きが背後から聞こえ！？
「…キョウスケ君、何フェイトちゃんと内緒話ししてるん？」
「おい恭介！！何話してんだ！？」
何って…ここで話したらまた大変な事になるって本能が警告してるし…
「…キョウスケ君、フェイトちゃんとどんなＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてたのかな？かな？」
って！？なのはさん！！？まだ居たんですか！？
「…今かなり失礼な事考えてなかったかな？キョウスケ君…？」
「イ、イエ…カンガエスギダヨ？」

と、とりあえずこの場は…

「さ、さあ！これから買い出しに行かないと！！　はやて、ヴィータも一緒に行くんだろ？早く準備しないと！！」

「あ、せやな…」

「あ、ああ　分かったよ恭介…」

「なのはも後で翠屋に行くから！シュークリーム楽しみにしてるよ！！」

「う、うん…わかったの！！」

「じゃあフェイト、またな！！」

「えっ！？う、うん　それじゃ…またねキョウスケ」

という風に勢いで乗り切る事に成功しましたよ～

『（珍しいですね…マスターに被害なくその場が収まるとは…）』

いいんだよ！！たまには！！

…しかし、そのツケは後ほどああいう形になるとは…この時の僕は思いもよらなかった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――商店街――――

で、あの後僕は、はやてとヴィータと一緒に買い物に来ています

「あ、キョウスケ君!!あの服カワええな～」

はやては車椅子から解放され、僕たちと一緒に歩いています

「おっ、恭介!!向こうの肉まん旨そうだぞ!!」

「ちょ…ヴィータ!!引っ張らなくてもちゃんと行くから」

「あはは、ヴィータは食いしん坊さんやな～」

「だ、だって…私は育ち盛りなんだしよ～／／」

と言う具合にショッピング中なんですが…

なんかすれ違う人達（特に男）からの視線が…まぁ二人とも可愛いから目立つ…よなぁ…

「何だアイツ…2マタか？」

「男の敵だな」

「ケッ…ガキのくせに」

「くっ…リア充が！」

「お、俺の嫁が～！！」

…うわ～何このカオスっぷり…

つか子供相手にいい大人が殺気立たないでくれよ…
それと最後のヤツは警察に通報しなくては！！

「どうしたん？キョウスケ君？」

「あ、いや　何でもないよ」

「そか？今日は色んな所まわるんやから、ボーッとしとったら日がくれてまうよ？」

「そうだぞ恭介！今日はしっかり付き合ってもらうかんな！」

「あはは、お手柔らかに頼むよ…」

――数分後……――

「お、重い…」

た、たしかに買い出しだから荷物持ちになるのは予想していたが…

「…明らかに一人が持てる荷物の量越えてね！？」

そんな呟きも虚しく…

「後は、新しく出来た雑貨屋さんと…そや！本屋さんにも寄って～それから…」

ま、まだ寄るんですか！！？

「な、なぁはやて…少し休んでいかないか？」

流石にちょっと疲れたし…

「ん～　そやね～　じゃあどっかで休んでこか？」

「そーだな　どこで休むんだ？はやて？」

…確かこの辺りって…

「なのはの家の翠屋が近くにあったな？一応行くって約束したし…顔位は出すか…」

てかむしろ、顔出さないと…魔王が召喚される…

「…はぁ、しゃあないな～　キョウスケ君も律儀やな…」

「別にアイツの約束なんて無視してもいーのによ…」

「まぁ　あそこのケーキとかも美味しいみたいだからさ、行ってみようよヴィータ」

「ケ、ケーキ！？…ま、まぁ仕方ねーな！！」

「あはは、やっぱヴィータは食いしん坊さんやな～」

「じゃあ行こうか2人とも？」

「「うん！！」」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――翠屋――

―カランカラン

「いらっしゃ…あ、キョウスケ君！いらっしゃいなの♪」

僕らが店に入ると、なのはがお店の手伝いでウェイトレスをしていた

…しっかし、なのはのウェイトレス姿…白い半袖ワイシャツに黒い

エプロン…妙に板についてるな～

「ふぇ！？キ、キョウスケ君…そんなに見つめられると…／／」

おっと、つい見惚れて…

―ギュウ！！

「痛っ!?な、なんでつねる?はやて・ヴィータ!?」

「…別に~何でもあらへんよな~ヴィータ」

「ああ、何でもねーよ」

二人とも目が完全に逆三角になってますが…?

「なのは~お客さん?…あら?なのはのお友達かしら?いらっしゃい」

奥から桃子さんがやってきた…そーいや会うのは久しぶりだな~

「はい、八神はやて言います。このコはヴィータです」

「…ども、ヴィータです」

…はやてはともかくヴィータは微妙に人見知りだからな~

「…あら、君は…」

…?ああ、今認識阻害メガネかけてないから解らないのか

「あ、お母さん!キョウスケ君だよ♪」

「えっ!?キョウスケ…君?なんか雰囲気変わったわね?」

…まぁなのは達は既に家族には魔法関係を説明してたと思うし…

「あ、すみません…今までは諸事情で認識阻害魔法使っていたんで

す　今のが素顔ですよ」

「えっ!?君も魔法使いなの?」

「ええ、ついでにはやてとヴィータも関係者ですから話しても大丈夫ですから」

「へ～　魔法って本当に凄いわね～」

直ぐに順応する桃子さんも凄いですが…

「あ、ごめんなさいね　なのは、キョウスケ君達を席に案内してあげてね。」

「はーい！　じゃあお客様、お席にご案内しまーすなの♪」

なのはに席に案内され席に着くき

「じゃあなのは、オススメケーキセットを3つお願いな?」

「うん、すぐ持って来るから～」

オーダーを受け、なのはは厨房へ消えていった

…と、その時

「…ハッ!!殺気!?」

―ヒュン!

―ダン！！

「あぶね！？」

「きゃ！！」

「うわっ！？な、何だ！？」

僕たちが座った席のテーブルにフォークが突き刺さっていた…あれ？これって僕を狙っていた？

「…貴様か…なのはに傷をつけたのは…」

カウンターの裏から現れたのは…

「…誰や？」

あ～…はやては面識ないんだっけ？

「…なのはの兄の恭也だ」

「テ、テメー！！危ねーじゃねーか！！はやてに刺さったらどうすんだ！！」

確かにヴィータの言う通りだ！あと数センチズレてたら…が、

「そんなヘマはしないさ…ちゃんとソイツに狙いを付けていた…」

って僕狙いかい！？

「…で、僕に何の怨みがあって…」

と言うと、さらに殺気が増してきた！！

「…なのはに…しかもなのはの肌を汚したヤツは…消す！！」

って既に抹殺予定かよ！！…つか明らかに原因はキスマークだよな…

「…キ、キョウスケ君…」

はやてはあのバカ兄の殺気に当てられ涙目になっていた…あんにゃろ…

「…ヴィータ、はやてを頼む…」

「お、おう！分かった！！…恭介はどうすんだ？」

決まってるじゃないか…

「…はやてを泣かせた罪を償ってもらうだけさ…恭也さん…ここじゃお店に迷惑がかかるので…道場で…」

「…ああ、いいだろう…ついてこい！！」

――――回想終了――――

とまあ、そーゆー訳で今あのシスコンと対峙してるんだが…ああ、

今思うと冷静さを欠いていたな～…

何とか復活したはやてとヴィータが応援に駆け付け、さらに途中で経緯を聞き付けたなのはも僕側で応援してるし…向こうのボルテージはＭＡＸだ…

「…いくぞ！！」

―ヒュ！！

な！？消えた！！？

…ッ！！

―ガキッ！！

僕は直感で何とか相手の一撃を木刀で受け止め…

「ッ…て、いきなりです…かっ！！」

―ドン！！

「くっ…」

シスコンの腹に蹴りを入れて吹っ飛ばした！

…そーいやこのシスコン、小太刀二刀流…だったか？そんな流派の技を使うという裏設定があったんだよな…今のは…オイオイ…神速か！？子供相手に使う技ぢゃねーだろ！？

「…少しは出来るようだな…が、次は手加減せん！！」

…ダメだコイツ…

さて…どうすっかな～　戦闘民族高町家とはいえ、魔法は使えない一般人…
そんな相手に魔法使うってのは…
別に怨みは……

…あるなぁ…

よくよく考えたら、前から僕に殺気向けてくるわ…今回ははやてを泣かすし…

「…止めだ！！」

―ヒュン！！

シスコンがまた姿を消した…だが、もう僕には迷いが無い！！（笑）

「…オートプレッシャー」

―ドォン！！

「カハッ!?か、身体が…重…い!?」

僕の周囲に範囲を絞ったオートプレッシャーを放つ…別に神速は姿が見えないだけで、居なくなった訳ではない。なら…超重力の結界

モドキを僕の周囲に展開すれば…勝手に突っ込んで自滅してくれる…

「…さてお兄さん、魔法については聞いてますよね？これもその魔法の一種なんで」

「な…貴様…卑怯な…」

「…子供相手に奥義を使ってくる大人に言われたくありません…それに別に剣術のみの勝負とは誰も言ってませんよ？ただ木刀を構えただけで剣術だけと思い込んだ貴方が悪い…」

「くっ…」

「…さて、貴方には罪があります…僕の家族であるはやてを泣かしたという罪が……ああ、大丈夫ですよ。骨が折れようが内蔵が破裂しようが回復魔法で治して差し上げますから…とっとと潰れて下さいね。出力Ｕｐ♪」

―グォン！！

「ぐぁぁぁ！！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「キョウスケ君…めっちゃ怒っとるな～」

キョウスケ君…どす黒いオーラ全開や！！

これは…まさに黒い断罪者やな～

「…ああ…ああなった恭介は止められんね～な」

「キョウスケ君って…怒ると…こうなるの？」

「まぁ…まだマシな方やで？ちゃんと治療はしてくれるんやし…」

「もっとも直した後にまた潰すみてーだが…」

「にゃはは…まぁお兄ちゃんの自業自得だし…」

―グォン！！

「あ、また潰れたみてーだな。まっ、はやてを泣かした報いだ！！」

「てか、なのはちゃん…お兄さん心配やないん？」

「ふぇ！？ううん、お兄ちゃんにはいい薬なの！！

せっかくキョウスケ君か家に来てくれたのに…殺気立ってキョウスケ君に襲いかかるんだし」

まぁ…悪いお兄さんではないんやろうけど…度が過ぎるっちゅう事やな…

―グォン！！

でも…キョウスケ君が私の為にあんなに怒ってくれて…お兄さんには悪いんやけど…嬉しいな…／／

お兄さん…迷わず成仏してな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

意外と知らない設定が…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

キョウスケはシスコン恭也と対決!!

結果は…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「ごめんなさいねキョウスケ君、ウチの恭也のせいで…」

「いえいえ、ちゃんと話し合ったら恭也さんも分かってくれましたよ」

「「「ウ、ウソや（だ）（なの）！！！」」」

変な電波が聞こえましたが…ゴホン！

あの後、潰す↓回復↓潰す↓回復という工程を数回繰り返していると流石にはやてに止められた…まぁ本人が許すと言っているから…仕方ないか。

…ん？シスコンはどうなったって？ちゃんと回復させたましたよ？…ちゃんと心を折った後に♪

その結果…

「…スミマセンスミマセンスミマセン生きててスミマセン生きててスミマセン生きててスミマセン…」

と、僕の顔を見ると土下座しながらそう呟くようになりましたが…何か問題が？

桃子さんは初め不思議がっていましたが、事の経緯を話したら

「この位しないと妹離れ出来ないから調度いいくらいよ♪」

と笑って言ってました

「やあ、済まないねキョウスケ君…息子が迷惑をかけてしまって…」

それと、何処に隠れていたのか父親の士郎さんが現れ謝罪してくれた…出て来る時に、持っていた木刀を慌てて離して隠していたのは…気のせいだろうか？

「いえ…今回は僕もちょっとカッとなってしまって…」

「「「あ…あれでちょっとなんだ…」」」

なのは・はやて・ヴィータが若干引き攣った笑顔をしていたが…だからなぜ?

「はやてちゃんもヴィータちゃんも御免なさいね　貴女達まで恐い思いさせちゃって…」

「い、いえ…私は気にしてませんから…」

「…まぁ私は、はやてが良いって言うなら…」

とまぁ高町家の方々と和解?したのでした

桃子さんからは、

「お詫びに今日は夕飯食べていかない?美由希が買物から帰ってくるし、ご馳走作っゃうわよ~?」

と、誘われましたが　家に残ったシャマルや別荘に残った人達も気になるので丁重に遠慮しました
…なのはは残念そうな顔をしていたが

で、帰宅しようと高町家を出ようとしたら桃子さんが…

「あ、キョウスケ君　私の事はお義母さんって呼んでね?」

と爆弾発言しやがりました…
その瞬間、士郎さんからは殺気が溢れ始めたので早々に転移魔法で帰りました…ったく、リンディさんといい桃子さんといい…似た者同士だな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家――

―ガチャ

「「ただいまー」」

「あ、お帰りなさい～」

「シャマル、シグナム達は帰ってきた？」

「キョウスケ君、それが皆まだなのよ～」

別荘内時間だと…そろそろ1週間くらいだが…

―シュン！

と、噂をすれば…

「主、ただ今戻りました」

「おかえり～シグナム」

「……」

「ザフィーラもお帰りな～」

…あれ？

「なぁシグナム、クロノ達は？」

帰って来たのはシグナムとザフィーラの2人だけだが…

「…クロノ達はまだ書類整理をしていたようだが」

「ふーん…まぁ　その内帰ってくるか」

「はやて～…腹減った～…」

…ヴィータ、翠屋であんだけケーキ食べたのに！？

「甘い物は別腹なんだよ！！」

あ～…そですか

「ふふ、じゃあ急いで夕飯つからなアカンな～
ヴィータ、何かリクエストあるん？」

「鍋がいい！鍋！！」

「鍋か…はやて、材料は沢山あるから大丈夫そうだな」

あれだけ買い込んだんだ　荷物持ったのは僕だけど…

「じゃ今日はお鍋パーティーや！！」

「おーー！！！」

ヴィータはかなりはしゃいでいた

「じゃあ僕とはやてで下ごしらえするから…他の皆はシャマルを確保しといてくれ！！」

「ちょ、ちょっとキョウス「うっしゃ！！問答無用だ！！バインドぉ！！」ってヴィータちゃん！？」

シャマルはヴィータのバインドで確保された。食事が絡むと行動が早いっすね～

「シャマル、悪いが大人しくしていてくれ…レヴァンティンの錆になりたくなければ…」

「ちょ！？シグナムっ！？」

シグナムもシャマルが作る料理は遠慮したかったのか、率先して手伝ってくれた

ま、シャマルの事はシグナム達に任せて…

「さ、はやて　僕たちは調理の支度をしようか？」

「せやな♪」

僕とはやてはそのままキッチンへ…

暫くしてリビングから…

「は、放してー！私だって料理の腕は…」

「グラーファイゼン！！」

《Ｊａ》

―ズドン！！…グシャ！！

「……」

「な、なぁキョウスケ君…今の音…」

…何かが潰れた音がしたけど…

「はやて…気にしたら負けだよ？」

「せ、せやな…」

という具合に２人してスルーした…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

で、鍋が完成！

今日は鳥鍋にしました…

「いただきまーす！！」×多数

「モグモグ…はやてと恭介の料理は相変わらずギガうまだな！！」

「モグモグ…うむ、流石主に神代だ！」

ヴィータとシグナムには好評だ

「……私だって材料切る位は…シクシク」

…シャマルは泣きながら食べていたが…無事だったのか

「モグモグ…ホントに美味しいわ～いいお婿さん&ａｍｐ;お嫁さんになるわよ～」

「モグモグ…はやてはともかく、キョウスケが料理得意とは…意外だな」

「モグモグ…うん、なのはもキョウスケの料理は美味しいって言ってたし…」

「…つか、何ナチュラルに食事に混じってんだ！？クロノ・ユーノ・エイミィさん！？」

いつの間にか3人が食卓に座っているし！？

「や～、ちょうど私達もお腹空いちゃって…」

「ゴホン！…ま、まぁ…その…なんだ…」

「…はは」

「まぁまぁキョウスケ君、ご飯は大勢の方が楽しいんやし～」

「はぁ…別にいいけどさ～　…で、クロノ　ココに居るって事は書類は大丈夫なのか？」

「ああ、お蔭さまでな。」

「そりゃ～ね～　私やユーノ君の手まで借りてやっといて【出来てません】じゃカッコつかないしね～」

…人の手を借りている時点でカッコつかないのでは？僕からも別荘借りてるし…

「わ、悪かったな！！…モグモグ」

「あっ！！クロノ！！肉ばっか食ってんじゃねー！！私が狙ってたヤツじゃねーか！！」

「もう…クロノ君！！野菜とかも食べないと栄養バランス悪いんだよ！？　だから年齢の割に身長が伸びないんだよ？」

「そ、それは関係ないだろ！？」

「年齢の割に…って僕とクロノって背は大差ないし…」

この年齢なら平均では？

「あ～…キョウスケ君、クロノ君と同い年だと思ってた？」

「えっ!?違うんですか?」

「…僕は１４歳だ」

……へ?

「「「「「「えええええええーーー!!!?」」」」」」

本人とエイミィさん&ａｍｐ;ザフィーラを除いた全員が驚いた!!

作：えええええっ!!!?

って作者もかよ!?

作：なのはＴｙｐｅ見て知った…ｏｒｚ

さいですか…

「あ…クロノ…色々スマン」

「謝るな!!寧ろそっちの方がダメージがっ!!」

「…クロノ…僕より年上だったんだ…」

「…そーゆーユーノは…何歳だ?」

「僕は９歳だよ!!」

…ふぅ標準か…

「悪かったな！！チビで！！」

あ～あ…クロノがすねちゃったよ

「…なぁ恭介、コイツに年齢詐称薬、分けた方がいいのか？」

流石に哀れに思ったのか、ヴィータが気を利かた事を

「クロノ…さん？飲んでみる？」

「いやいい…飲んでみて背が変わらなかったら…立ち直れないし…」

…ま、まぁＳｔｒｉｋｅｒｓではそれなりに成長してたし…希望はある…よな？

その後の食卓は、微妙な空気だったのは言うまでもないか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「じゃあ僕たちはそろそろアースラに戻るよ」

あの微妙な夕食後、結構な時間になった為クロノ達は帰る事になりました

「…そうそう、キョウスケ」

「なんだ？」

「今度本局に来る日にちだが…こちらの時間で1月4日でいいか？」

…すっかり忘れてたな…

「ま…別に構わないが…」

学校も冬休みだしな～

「ほんなら私達もその日でええか？クロノ君？」

「ああ、そうしてくれると助かる。」

「クロノ君～行くよ～」

「ほら、エイミィさんが呼んでるぞ？」

「ああ、キョウスケ　今回は助かったよ
この借りは必ず…」

「ま、期待せずに待ってるよ」

「フッ　じゃあ…」

「はやてちゃーん！！今日はご馳走様～！！」

そう言い残し、3人は転移していった…エイミィさん、一応僕も料理作ったんですが？

「さ、明日は大晦日や！！紅白楽しみやな～♪」

「…なぁ恭介、おおみそかとかこうはくって何だ？」

「あ、そか　ヴィータ達は知らないんだよな　大晦日ってのは……」

僕はヴォルケンズ達に大晦日や紅白、正月の事を説明した…

「…お祭りみたいなモンか？」

「ま、概ねそうだよ」

…間違ってないよな？

「あ、キョウスケ君！！」

「どうした？はやて？」

「はい！！」

はやてが僕に渡してきたのは…

「…雑誌？」

…前にもあったデジャヴが…

「これで私や皆の着物作ってな？そんで正月に皆で着るんや！！」

「あはは…ま、いいけど…」

…その後、はやて達女性陣の着物×４を魔力で創ったが…予想以上に時間がかかり徹夜になってしまった…

「着物って…難しい…ｏｒｚ」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

大晦日と新年と…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――八神家・リビング――――

キョウスケＳｉｄｅ

「見てみ！キョウスケ君！！水樹奈々ちゃんが歌ってるで！！」

「う、うん…そだね…」

今日は大晦日、僕たちは紅白を見ています…

というか、こっちの世界にも水樹奈々さん居たんですね…今年は【Ｓｉｌｅｎｔ　Ｂｉｂｌｅ】みたいだ

「ん？…この声…テスタロッサに似ているな」

シグナムさん！！それは禁則事項ですから触れないで！！

「なぁ！！放課後ティータイムは出ねーのか！？」

ヴィータちゃん先生！それ微妙にネタですよね！？

「みんな～お茶が入ったわよ」

シャマルは皆にお茶を入れて…なっ！？

「…シャマル…お前が入れたのか？」

「…飲めんのか…それ？」

「シグナムにヴィータちゃん酷いわ！！わ、私だってお茶を入れる位は…」

しかし僕は見た…そのお茶は緑茶や玄米茶とかの色ではなく…

「…紫色のお茶なんて…あったか？」

色がとてもポイズンクッキング的な色なんだが…

「あら？おかしいわね～？　緑茶入れた筈なんだけど…やっぱりヤモリの粉末入れたのがいけなかったのかしら？」

……ヲイ

「「「お茶にんなもん入れんな！！」」」

リンディ茶よりタチが悪いわ！！

なにそれ！？ク○ハ？○スハドリンクなのか！？

「な、なぁシャマル…普通にお茶…いれよな？」

流石にはやても顔を引き攣らせながらシャマルを注意してた…ヤモ

リは…ねぇ…

「…分かりました。あ、でもザフィーラは喜びの余り失神していましたけど…」

「「「「いや！それ絶対ちがうから！！」」」」

つかザフィーラの命が！！

後にザフィーラは痙攣しながら倒れている所を発見…一命は取り留めた…

恐るべし！！シャマルドリンク！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「「「「「ご馳走様でしたー」」」」」

大晦日恒例の年越しそばを食べ、リビングでまったりしてます

あ、ちなみに蕎麦は僕とはやてが作りましたから

「もう今年も終りやな～」

「後半は特に内容が濃かったけどね」

バトルとか…バトルとかバトルとか…

「私は…家族が増えた事がめっちゃ嬉しかったで…」

「主…」

「はやて…」

「はやてちゃん…」

「……」

「…リインフォースも一緒やったらもっと嬉しかったんやけどな…」

ギクッ！　す、すみません…リインフォースは現在調整中です…

はやてにはせめてツヴァイが生まれるまでは秘密にしないとな…

「…と　ごめんな皆…湿っぽくなってもうたな」

う〝っ…場の空気が!?話題を変えないと!!

「そ、そういえばさ…この後初詣に行くんだろ?はやて」

「うん!もちろんや!!なんたって夜中に外出出来る大義名分ができる日なんやしな!!」

…まぁ基本フリーダムな生活って気もするけど

「なぁなぁはやて!!屋台とかもあるんだろ!?私焼きそば食べて

ー！後リンゴ飴も食べてーな♪」

…だからヴィータ、まだ食べるのか！？

「屋台は別腹だから大丈夫だ！！」

何そのスイーツ感覚は！？

「…私は文化フライという物に興味が…」

シグナム…それはもうないんだ…ｏｒｚ

作者も嘆いていたが…

今なら確実にＢ級グルメグランプリ取れただろうに…

と、考えていると…

―ゴォォォン！

除夜の鐘が鳴り響いた

「明けましておめでとう！」

「おめでとさん♪」

「はやてちゃん、それは？」

…あ～シャマル達は知らないか

「新しい年になって初めての挨拶や」

…間違ってはいないが…まぁいいか

「そうなんですか～。じゃあ…はやてちゃんキョウスケ君、明けましておめでとう！」

「おめでとう！はやて、恭介！」

「おめでとうございます。主はやて、神代」

「……お、おめでとうございます」

と皆が挨拶をしてくれている時、

―ピンポーン！

「ん？新年早々お客さんやな？」

「あ、はやて　僕が出るよ」

「ほなお願いな？キョウスケ君」

僕は玄関に向かって行き…

―ガチャ

「はい、どちら様…」

「「明けましておめでとう（なの）」」

なのはとフェイトが立っていた

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「あ、キョウスケ君　誰やっ…ってなのはちゃんとフェイトちゃん!?」

「にゃはは～　はやてちゃん　明けましておめでとうなの」

「おめでとう、はやて」

「あ、これはご丁寧に…ってちゃうわ!!」

はやてはノリツッコミを発動!!効果はイマイチだった…

「なんやて!?くっ…もっと精進せえへんと!」

…まぁ頑張れはやて!!

と、なのは達の事忘れそうだった

「二人とも家族と過ごすと思ってたけど…?」

「…アースラじゃ正月はあまり関係ないみたいだったから…」

…ま、まぁ　アースラというかミッドチルダに正月とかの風習あるか不明だからな～

「私は…その…新年の挨拶はキョウスケ君に1番にしたかったから…来ちゃった／／」

うっ…ちょっとグッときたかも／／

「残念やったな～なのはちゃん。キョウスケ君への1番の挨拶は私が済ませてもうたで♪」

「ふぇ!?お…遅かった!?」

…いやなのは、普通一緒に居たんだから1番最初に挨拶するのは一緒に居た人じゃ？

「アリサやすずかも来たがってたんだけど…家の人と新年の挨拶で、海外に行かないといけなくなったって連絡が…」

「そうなのか?まぁ二人ともお嬢様だから新年とか社交界的なイベントがあるんじゃ？」

「あ!そーいえば、お兄ちゃんが忍さんの護衛?とかで一緒に行ったんだよ～」

…復活したのか、あのシスコンは

「しかし護衛とは…穏やかじゃないな」

「にゃはは、でも忍さんに強引に連れていかれた感もあるんだよ」

「あ～…そーゆー事か」

一応2人は恋人同士だし…一緒に居たかったって訳ね…

「海外か～ええな～。なぁ、なのはちゃん？アリサちゃんとすずかちゃんは海外って何処に行ったん？」

「えっと…たしか二人とも【ハッピーニューイヤー島】って言ってたような…」

…なにその1年中新年みたいな島は！？

「詳しい場所は企業秘密なんだって～だけど…どこかのお金持ちの人が、新年を過ごす為だけに島ごと買ったんだって～　アリサちゃんやすずかちゃんも驚いてたよ」

「ははは…そら驚くわ～…」

流石のはやても苦笑いしてるな

「何処の金持ちが買ったんだよ、んな島」

ヴィータも事の非常識に口を引き攣らせながら聞いてみてるし

「たしか…【乃木坂家】っていう日本人の財閥が買ったって…」

…乃木坂？

「はやてぇ…知ってるか？」

「う～ん、聞いた事ないな～　ま、私らと住む世界がちゃうしな～」

…乃木坂ねぇ…まさか、な

「それで、キョウスケ達はこれから初詣に？」

「そうだけど…フェイト、地球の風習に詳しくなったな？」

「うん／／…キョウスケといつでも一緒に居たくて…勉強したんだ／／」

何この可愛い生き物！？

「そ、そか～／／ありがとうフェイト（ニコッ）」

僕はフェイトにお礼を言うと…

―ボンッ！

フェイトの顔が真っ赤に？…風邪？

「あぅぅ…／／は、反則だよ…／／」

…えっと、何かした？僕？

「…キョウスケ君、はよ準備せぇな？」

「あ、ああ…」

はやてさんは、あからさまな不機嫌オーラ全開だ！？

「あ、キョウスケ君！私も初詣…一緒に行ってもいいかな？」

「…ハッ！？キ、キョウスケ！！私も一緒に！！」

なのはと復活したフェイトが勢いよく手を挙げた！

まぁ…何となく予想はしたけど…

「ま、せっかく来てくれたんだし…行くか？」

「「うん！！」」

なのはとフェイトは嬉しそうにうなずいたが…

「むぅ～～～…」

「ちっ…」

…はやてとヴィータが若干ご機嫌斜めだった

「ほら、二人ともそんな顔しないで　折角の可愛い顔が台なしだよ？」

「ふぇ！？か、可愛い！？／／」

「なっ！？／／いいいいきなり何言うんだよ恭介っ！？／／」

二人とも…かなり動揺しているけど…？

「あらあら　２人とも真っ赤になっちゃって♪」

「う、うるせーぞシャマル！！／／」

「うぅ…／／不意打ちはズルいでキョウスケ君／／」

不意打ちって…？

まぁとりあえず不機嫌オーラは消えたが…

―ゴゴゴゴゴ…

…だが今度は背後から不機嫌オーラ絶賛解放中だ…

「え～と、じ、じゃあ行こうか？」

「…うん…逝こうかキョウスケ君…」

「…大丈夫だよ、キョウスケ…後で、ね？」

ちょ！？なのはさん！！字が違う！！フェイトさんも後で何をする気なんですか！？

「「ふふふ…」」

怖っ！？な、何！！？

「じゃあ皆、早よう行こか？」

「あ、ああ…」

若干この後が怖いんですが…

「主、外は寒いのでこのコートを」

「ありがとなシグナム」

「さ♪早く屋台いこーぜ♪」

「ヴィータちゃん…屋台じゃなくて初詣よ」

こうして僕たちは屋台に…じゃなく！
初詣に向かったのだが…

このメンバー…まだ嵐の予感が…

つづく…

「ってやっぱ続くんかい！？」

『諦めましょうマスター』

くっ…

女難続きにまた一難！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

僕たち八神家＋なのは＆ａｍｐ；フェイト一行は初詣に行く為に夜中の町を歩いているんですが…

「さ、寒い…」

この前降った雪がまだ残っているので…かなり寒いっす…

「まったく…神代も騎士なのだからシャンとしたらどうだ？」

ってシグナムさん！？僕は別に騎士ぢゃないっすよ？

「寒いものは寒いって…つか、ベルカの騎士のシグナムは完全防寒してるぢゃん！？」

言った本人はマフラー＆ａｍｐ；コート＆ａｍｐ；手袋までしっかり装備してるし！？

「ま、まぁ…コホン…これはこれだ／／」

強引にごまかした!?

「あはは、しゃあないな～キョウスケ君は…えいっ／／」

―ギュ！

「うわっ!?は、はやて?」

はやてが僕の腕に抱き着いてきた!?

「むぅ…キョウスケ君!こんな可愛いコが抱き着いて来たのに…私と腕組むの…嫌なん?」

「い、いや…別に嫌いって訳じゃないけど…」

はやての涙目＋上目使いコンボを喰らっていると…

―ギュ！

今度は反対側の腕にヴィータがしがみついてきた!?

「へへっ／／これで恭介も寒くないだろ?」

ま、まぁそうだけど…ハッ!?

―ゴゴゴゴゴ…

「えーっと…はやて・ヴィータ」

「なんや?キョウスケ君?」

「なんだ？恭介？」

…二人はニコニコ顔をして尋ねてくるが…背後の気配に気付いてない！？

「あ～…こうして密着状態で初詣にいくのは非常に危険というか…既に背後が危険というか…」

そう！背後から感じる黒くドロっドロなプレッシャーが！！

「だってキョウスケ君寒いんやろ？私等は状況を判断し、綿密に計算を重ねた上での最善作や♪こうしとると暖かくなるんやし…な？」

な？って…そんなご満悦な顔で…くっ、可愛いじゃねーか／／

「で、こうすれば…もっと温かくなるで♪」

―ギュッ！

はやては更に密着してきた！？

―ギュッ！

ってヴィータも！？

「どーだ恭介♪暖かいだろ？」

う…／／二人の甘い香りが…

と、

「ねぇ二人とも…そんなにくっついてると歩きづらくないかな?」

「そうだよ?キョウスケ君だって歩きづらそうなの!」

ドロっドロなプレッシャーの発信源…目が笑っていない笑顔でフェイトとなのはが割って入ってきた

「ん?別に問題ないで?なっヴィータ?」

「ああ、全っ然問題ね~」

「「うー…」」

しかし、なのはとフェイトの指摘もカウンターで返された!

「さ、はよ行こか?キョウスケ君♪」

―ギュッ

はやては僕の手を握りながら僕に密着してくる　しかも指と指を絡めあう…まぁ、世間一般でいう恋人握りな訳で…

―ギュッ

…ってヴィータさんも!?

「早くいこ~ぜ恭介♪」

「あ…うん、そだね…」

二人とも激甘えモードだな…うっ!?

背中に刺すような視線が…

「「ぐぎゅうう～…」」

後からなにやら「ばか～」という怨念が篭った視線が…

「あらあら、新年早々賑やかね～」

何楽しそうに傍観してるんです!?シャマルさん!?

「…神代、まぁ…なんだ……頑張れ」

シグナム～!?何を頑張ればいいのさ!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――神社――

…とりあえず何とか神社に到着し、皆でお参りをしたのだが…

「「「「……」」」」

なのフェイとはやヴィタ達は、物凄いプレッシャーを放ちながら何やら超集中しながら拝んでいるが…何を願掛けしてるのだろう？

「「「「……キョ…ケ…私……物…（ボソッ）」」」」

―ゾクッ！

…な、何だろう…寒気が！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「恭介！！向こうにタコ焼きあんぞ！！買っていいか？」

「キョウスケ君、向こうに綿菓子もあるで？」

「あ～！見て見てキョウスケ君！！焼きトウモロコシなの～！！」

「ねぇキョウスケ、向こうのお店で金魚すくい…一緒にやってみない？」

という具合に皆は屋台の夜店に目移り中だ…

「な、なぜ…」

「ん？どうしたシグナム？拳を震わせて？」

「なぜ…文化フライがないんだーーー！！？」

ってまだこだわってたんかい！？

「なあ恭介！！タコ焼き買ってきたぞ！」

早っ！？いつの間に！？

「ふーふー…ほら恭介、あーん♪熱いから気をつけろよ？」

「あ、さんきゅヴィータ…あ～ん。もぐもぐ…」

「じゃあ私も…もぐもぐ…」

「あ、ヴィータ！頬っぺたにソースがついてんぞ…ほら動くなよ？」

ヴィータの頬っぺたに付いたソースをハンカチで拭き…

「あ…ありがとうな…恭介／／」

「ムッ…キョウスケ君！！焼きトウモロコシもあるんだよ！！あ～んして！」

「なのは！？ちょっ…むぐっ！？」

なのはさん！？トウモロコシを口に突っ込まないでくれ！！芯は食えないっすよ！？

「ほなキョウスケ君！食後のデザートや…あ、あ～んしてな？／／」

「ゲホッゲホッ…すまないはやて、その前にそのジュース一口くれないか？喉が…」

僕は、はやてはさっき買ったジュースを貰い一口…

「ゴクッ…プハァ！ありがとはやて、助かったよ」

なのはが強引に口の中にトウモロコシ丸ごと入れるから…ん？

「どうしたはやて？顔が赤いが？」

「な、何でもあらへんよ！？／／」

…そか？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

キョウスケ君が私の飲んどったジュースを…／／しかもピンポイントで私が口付けた場所に…／／

やっぱこーゆーんは照れるな～／／

「キョウスケ君、綿菓子も一口食べてみる？」

「ん…じゃあせっかくだし、一口貰おうかな」

「そか？じゃあ口開けて♪」

私は綿菓子を指でちぎって…

「は、はい、あ～ん／／」

さっきヴィータもやっとったけど…け、結構恥ずかしいな／／

「あ、ああ…あ～ん。パクッ」

うっ／／綿菓子と一緒に私の指までキョウスケ君の口の中に／／

「ど、どう／／？美味しい？」

「うん、甘くて美味しいよ」

…もしかして私の指効果？なんてな～／／

「じ、じゃあもう一口…はい、あーん♪」

な、なんかこーゆーの…ぞくぞくしてきて…／／　癖になりそうやな～♪

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

はやてが綿菓子をつまんで　あ～ん　とやってくるのはいいんだが…

「…キョウスケ君／／もう一口どや？」

はやては指に付いた綿菓子をペロリと舐めながらそんな事を言ってきた

…なんかはやての目がとろんとしているんだが…

…な、なんか色々とヤバくないか？

「「はやて（ちゃん）！！さっきからズルイよ（の）！！」」

なのはとフェイトがはやての手を取り止めに入った！

とりあえず、はやては正気に戻ったようだ…よかった…

「キョウスケ、今度は私が食べさせてあげるよ？／／」

「フェイトちゃん！！次は私だよ！？」

「なのははさっき食べさせてたよね？次は私だよ？」

「うっ…あ、あれはノーカンなの！！」

…訂正、よかったじゃないかも…

と、その時、

―♪～♪～？

「あ、着信だ…すずかからだ」

「えっ！？すずかちゃんから？なんやろ？」

「まぁ　あけおめの挨拶じゃないか？別にメールでもいいんだが」

とりあえず出るか

―ピッ

「もしもしすずか？明けまし《キョウスケ君助けて！！アリサちゃんと春香ちゃんが！！》ってすずか？落ち着いて！」

すずか…随分慌てているけど…

「キョウスケ君…すずかちゃんどうしたの？」

「まさか…すずかの身に何か？」

「ちょっと待って…すずか、何があったんだ？」

すずかを落ち着かせて話しを聞いてみると…

《アリサちゃんとお友達の春香ちゃんが…変な恰好した人に誘拐されたの！！》

……え〝

「キョウスケ君…すずかちゃん何やって？」

「あ～…アリサとその友達が誘拐されたと」

―ピシッ！

あ…やっぱ凍りつくか…

「「「「「「えっ…えええええーーー！！！！！！？」」」」」」

夜中の神社に叫び声が響いた

こ…これは…新年から大変な事になったな…

海外出張！…ここはどこ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

はやて達と初詣で夜店巡りしていたら、すずかからの電話…

〔アリサちゃんとお友達の春香ちゃんが…変な恰好した人に誘拐されたの！！〕

ってＳＯＳが僕にきたのだった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――某国・某所――

さて、僕は今すすが達が来ていた海外…【ハッピーニューイヤー島】って場所に来ています…

「なぁ恭介、すずかとの待ち合わせ場所ってここなのか？」

「ああ、確か指定された場所はここだけど…なのは、すずかから何

か連絡は？」

「…ううん、まだ何にも…アリサちゃん…大丈夫かな？」

アリサ誘拐の一報を受け、当初全員で助けに行こうとなったのだが…

「誘拐事件だから慎重にいかないと…」

という事でとりあえず先発隊として僕となのはとヴィータですずかとの待ち合わせ場所に来たのだが…

「あっ来たみたいだよキョウスケ君！」

僕たちの目の前に一台の車（ロールスロイスか！？）が止まり中からは…

「キョウスケ君！なのはちゃん！ヴィータちゃん！来てくれてありがとう！！」

すずかが中から出てきた

「すずかちゃん！大丈夫？」

「うん…私は大丈夫だけど…アリサちゃん達が…」

「すずか、悪いが何があったか詳しく説明してくれないか？」

「うん…ここじゃ何だから皆車に乗って。私達が宿泊しているホテルに部屋を用意したから…」

「ああ、ありがとう」

僕たちはホテルに向かう車内の中で事の詳細を聞いていた

…すずかの話しを要約すると、パーティー中にいきなり妙な恰好をした犯人グループが侵入してきてアリサと友達になった女の子が掠われたの事…あれ？

「なぁすずか、恭也さんが護衛に付いていたんだよな？」

たしか一緒に行ったって聞いたし…

「…う、うん…」

そう言うと、すずかはなのはの方をチラチラ見て…

「…？どうしたのすずかちゃん？もしかしてお兄ちゃんに何かあったの！？」

さすがに兄の事が心配なのか、なのははすずかに詰め寄った

「…えっとね…恭也さん…真っ先に犯人の人達に向かっていったんだけど…負けちゃって…」

詳しく聞くと、恭也さんは木刀で犯人に向かって一撃を加えたらしいのだが…相手には全くダメージがなく、動揺したスキを付かれ逆にやられてしまったようだ…

「そ、それでお兄ちゃんは大丈夫なの！？」

「うん…怪我も大した事なかったし…今お姉ちゃんが看病してるの…」

どうやら命に別状はないみたいだ…しっかし、何やってるんですかシスコン兄さん!?

「……なぁ恭介、それって役立たずって事なんじゃねーか？」

ヴィータさん!そんな身も蓋も無い事を!?

「…ま、まぁ…その…あはは…」

流石にフォローが思いつかないや…

「…不甲斐ない兄でごめんなの…すずかちゃん」

流石になのはも申し訳なく思ったのか、すずかに深々と謝罪した

「う、ううん!恭也さんは…頑張ってくれたよ……多分」

「うぅ…お兄ちゃん…後で零距離スターライトブレイカーなの…」

…まぁ僕には被害ないからいいけど

「それでね、今アリサちゃんの家の人と春香ちゃんの家の人が捜索隊を結成して犯人を探してるの…」

「なぁすずか、誘拐された友達って…」

「えっと…今回のパーティーを主催した乃木坂財閥の長女で春香ちゃんっていうの…私達と同じ歳で仲良くなったのに…」

……乃木坂……春香!?

ま、まさか…ま、まぁ同姓同名だと思うが…

「…その犯人の目的って…やっぱり身代金かな?何かそーゆー電話とかあったのか?」

「…それが解らないの…お父さんに聞いても、子供の私には「心配ないから」って言うだけで…」

ま、普通はそうだよな~

「…状況は分かった…とりあえずホテルに付いたら僕の探索魔法でアリサ達の居場所を特定して救出に向かうよ」

「あ、ありがとう!キョウスケ君!!」

「うっしゃ!!犯人のヤローをとっととブッ潰してはやてのおせち料理?やお雑煮ってのを食べようぜ!!」

「アリサちゃん…もう少し待っててなの…」

「あ、気合い入っている所悪いが…二人は留守番な」

「「なっ!?なんでだ(なの)恭介(キョウスケ君)!!?」」

…いや…なんでって…

「今回は隠密性が重視されるから…二人ともそーゆー魔法ある？」

僕はプリズムファントムで姿消せるが

「「うっ…」」

…どうやらないようだ…

「それに万が一に備えて二人にはホテルの護衛…というかすずか達の護衛を頼みたいんだ…また奇襲がないとは限らないしね」

「う…わ、解ったの…」

「ちっ…仕方ねーな」

…それに少し気になる事があるしな…

恭也さんはアレだけど…一応達人の域に達しているにも関わらず、その一撃が効かない相手って…

―キキッ！

と、思考の海に浸っているとホテルに着いたようだ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――ホテル・個室――

ホテルに入ると、流石に慌ただしい様子で人が行き交っていたな…
その中の一人のマフィア風の人が…

「必ず犯人を見つけ出し春香を保護した後、犯人を始末しろ!!行け!!黒犬【ヘルハウンド】!!」

…という怒鳴り声がロビーで響いていた…どっかで見たようなマフィアだが…春香って事は…関係者か？

深く追求せず、その横をスルーしながらすずかに個室に案内してもらい…

「さて、インフィニティ！　Ｓｅｔ　Ｕｐ!!」

―ピカッ!!

久々にＢＪ纏った気がするな～

「インフィニティ、ハイパースキャン!!」

※ハイパースキャン…忘れている方もいるかもしれないので…広域探索魔法です

「ど、どうだ恭介？」

「アリサちゃん…見つかった？」

「……見つけた!!って、なっ!?」

「ど、どうしたの？キョウスケ君！？」

「キョウスケ君見つけたの？」

「…見つけたけど…」

なんというか…

「何処にいやがった？」

「……ここ」

「えっ！？ここって…」

「……正確には…ここの地下…」

「「「はぁ！！？」」」

まさか犯人が足元にいるとはな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

とりあえずアリサの居場所が解ったので救出に行く…前に

「すずか、恭也さんはどの部屋に？」

「えっと…向かいの部屋にお姉ちゃんと一緒にいると」

「…なのはも一応兄の安否は確認したいだろ?」

「うん…」

という訳で向かいの部屋へ…

―コンコン

「失礼します…」

―ガチャ

中に入ると…ベットで横になっているシスコンとすずかに似た女性が居た

「すずかに…なのはちゃん!?どうしてここに?」

「えっと…キョウスケ君に付いて来て…それにお兄ちゃんが怪我したって…」

その声に反応したのか、ベットから上半身を起こし

「な、なのは!?何でここにいるんだ!?」

「…僕が連れてきましたよ…恭也さん」

つか僕には気付かなかったのかよ…

「ひっ！？」

…をいをい…なんだよ、人の顔を見るなり悲鳴あげやがって…

「…あなたがキョウスケ君？初めましてになるのかな？すずかの姉の忍です…噂はすずかから聞いているわ」

…噂？魔法関係とか？まぁ別にいいけど…

「はぁ…どうも。なのはは知ってますよね…こっちのコはヴィータっていいます」

僕が紹介するとヴィータは軽くお辞儀をした

「お姉ちゃん、アリサちゃん達が何処にいるかわかったんだよ」

っていきなりバラすか！？

「ホントに！？でもどうやって…？」

…仕方ないな

「…僕の探索魔法でみつけました」

「そう…話しには聞いていたけど…魔法って実在するのね」

やっぱり魔法については聞いていたか…ま、吸血鬼がいるんだし魔法使いが居ても不思議じゃないと思うが…

「場所は解りましたからこれから僕が潜入してアリサ達を助けに行

きます」

「あなた一人で!?だ、大丈夫?」

まぁ端から見たら子供一人で向かいようにしか見えないしな…

「お姉ちゃん、キョウスケ君なら大丈夫だよ。」

「うん、なんたってキョウスケ君はお兄ちゃんに圧勝したし」

なのはの【圧勝】の単語に反応して、恭也さんはベットで精神的ダメージを受けていた…

「ま、とりあえず僕なら大丈夫ですから。後、護衛になのはとヴィータを付けますんで二人の側を離れないで下さいね」

「え、ええ…なのはちゃん達も魔法使いなのよね…」

「はい、ヴィータちゃん共々頑張ります!!」

「ま、まぁ恭介の頼みだしな…それにすずかまで何かあると…はやても悲しむしな」

「…まて、オレも一緒に「却下」って何故だ!?」

言わないと解らないのかな…

「…お兄ちゃん、キョウスケ君の足手まといになりそうだし…」

―グサッ!

「うっ！」

「つか、手も足も出ずにボロ負けだったんだろ？」

―グサグサッ！

「ぐふっ！！」

「ぶっちゃけ邪魔ですから」

―グサグサッグサッ！！

「ぐふぉっ！！！？」

なのは・ヴィータ・トドメに僕のトリプルコンボで恭也さんは撃沈した

「き、恭也！？大丈夫！？」

「…さ、3人とも…容赦なしだね…」

「「「事実だ（なの）（だしな）！！！」」」

「あはは…」

月村姉妹は渇いた笑いを浮かべていた…

だから優しさ？で黙っていたんだけどな～

『マスター…それは微妙ですよ？』

…やっぱ？

影の残照

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シスコン恭也に戦力外通知を勧告した

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

なのはとヴィータをすずか達の護衛に残し、僕はプリズムファントムを展開！

アリサ達が監禁されているホテルの地下に向かっているのだが…

「…なんか妙な気配が…」

地下に下りていくにつれて妙な感覚が…

『マスター、前方の扉の向こうに人間の生命反応が3つ…1つはアリサ嬢のですね…その隣に1つ…離れた場所に1つ…大きさから成人…こちらが犯人のようですね。』

「ん?…犯人は1人なのか?」

『…その他にも反応があるのですが…人であって人でないような…判断しかねますが中に12つ反応が…』

…結構多いな、面倒な

「つか正体不明か…さしずめ目の前のドアはパンドラの箱か…」

…とりあえずアリサ達の保護を最優先にしないとな

「…いくぞ、インフィニティ」

『はい…油断禁物ですよ?…後分かっていると思いますが、ここは地下ですからあまり派手な魔法は控えて下さい…潰れますよ?』

解ってるさ…さて…と!

―ガチャ!

僕はドアを開けると同時に瞬動でアリサ達の元へ…って!?

「なっ!?」

中に入ってすずかが言っていた変な格好の誘拐犯の正体…一目見てすぐ解ったが…どうして?

「…侵入者ハッケン…廃除スル…」

なっ!?プリズムファントムで姿を消しているのに!?

―ダダダダンッ!!

相手からマシンガンで発砲があとたが、直ぐさま回避!!

「ん?どうしたの?サツでもきたかしら?」

奥から主犯格と思われる女が現れた

「…侵入者…数1……応戦中……」

「あら…ちょうどいいわ、退屈していた所だったの。人形ども!そいつを捕まえて私の前に連れてきなさい!」

「……任務…リョウカイ……」

「……侵入者……捕縛モードに……移行…」

…どうやら犯人には僕の姿は見えてないようだ…

しかし…何でアイツらが此処に存在するんだ?

……量産型Wシリーズ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―ダダダンッ！

―キィン！

―バキィ！！

「…これで…最後の1体っ！！」

―ザンッ！！…バタン！！

『敵残存戦力…ゼロですマスター』

まっ…当然と言えば当然か…
Wシリーズ…ナンバーズならともかく、量産型なら問題なく倒せるし…

「な、なんなの！？何なのアンタ！？タダのガキじゃないの！？」

後は首謀者らしき犯人だけか…だがコイツには聞かなくてはいけない事が…

「…アンタ、このW…コイツらをどこで手に入れた？」

―カツ…カツ…

僕は犯人に問い質しながら近付いていき…

「ひっ!?く、来るんじゃないよ!?ひ、人質がどうなってもいいのかい!?」

犯人の女性は、縛られたアリサ達にナイフを突き付け…ってオイオイ…

「こ、こいつの命が惜しかったら武器を捨てな!!」

「んー!!んんー!!」

アリサは口を塞がれていて、ナイフを突き付けられ叫んでいた

…はぁ…一応フェミニストで通しているんだけど…仕方ないな

―キュッ!ダッ!!

「えっ!?消え…?」

僕は瞬動で一気に詰め寄り…

―バキッ!!

「!?グフッ!!」

―ドカッ!!

相手を体当たりでぶっ飛ばした

…いや、ちゃんと加減はしたよ？

「…アリサ、大丈夫かい？」

「ん～！んっんんー！！」

…とりあえず無事のようだ

そういえばもう1人居たんだよ…な…

「……（ウルウル）」

……あれ？何この視線？

…つか小さい？？

そこに居たのは、アリサと同じ位の年齢っぽい少女。しかし…見た目がアノ【乃木坂春香】さんなんですが…

ま、まさか…時間系列的には原作開始前の乃木坂さんですか！？

「うっ…」

おっと、とりあえず犯人を無力化してふん縛らないと

バインド…は、流石に引き渡しの時にごまかせないから魔力で物質創造したロープで縛って…と、

「…さて、もう一度聞きますが…何処であの人形を手に入れたのですか？…正直に答えてくれれば…」

―カチャ

「これ以上手荒な真似はしなくて済むんですが…」

手に持った剣を向け説得（という名の脅迫？）を誠意を込めつつ尋ねると…

「し、知らないわよ！！コイツらいきなり目の前に現れてきたんだから！！しかも私の命令に忠実だったから使ってやったのよ！！」

…拾い物を使うなよ…

「次に…彼女たちを誘拐して、貴女の目的は身代金ですか？」

「ハッ！！それもあるけど、私をクビにした会社に復讐するためよ！！」

…あ～大体の事件の概要は見えてきたな…

「とりあえずアレの出所は判らないみたいですね…解りました…マテリアセット【まどわす】コンフュ！【ふうじる】セット！スリプル」

―シュパッ！

「うっ…」

―バタッ

僕は混乱魔法を強めにかけた後に睡眠魔法をかけ眠らせる

…こうすれば引き渡した後に目が覚めても混乱状態が残ってるはずなので、警察は錯乱状態と判断してくれるハズ…後に混乱状態が解けて僕の事が供述に出ても錯乱していた故の妄想と判断してくれるだろう…

まっ、物的証拠がないんだし大丈夫だろ。

「んー！！んんっんー！！！」

あ、いけね…アリサ達まだ簀巻き状態だった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ぷはぁ！　アンタ！！助けるならもっと早く来なさいよ！！」

「仕方ないだろ、こっちも色々都合があるんだし…」

これでも急いで来たんだし…

―ガシッ！

ってアリサがしがみついて…って？

「…ア、アタシがっ！…どれだけ…どれだけ不安だったか…ひっぐ…」

あ～…やっぱ怖かっんだ…

「…ゴメンなアリサ…怖かったろ？」

「べっ…別に怖くなんて…ひっく…」

―ギュッ！

僕は泣きそうなアリサを抱きしめ…

「無事でよかった…」

「キョウスケ…うっ…うわあああああんっ！！」

アリサは堰をきったように泣き出した

――――数分後――――

「…落ち着いた？アリサ？」

「……うん／／」

おもいっきり泣いて漸く落ち着いたみたいだ…

「わ、悪かったわね…その…服濡らしちゃって…」

「別にいいよ…ところでアリサ…」

「何？キョウスケ？」

「…そちらの方が放心状態みたいだから…」

僕は助け出したもう1人の女の子の方を指差す

「あ…そそそうだったわ！／／」

「……アリサ…忘れてたね？」

「うっ…う、うるさいわね！男がそんな細かい事気にしないでよね！！」

うわ！？理不尽女王様降臨や！！

「えっと…」

僕が少女に話し掛けようとすると…

「あっ…あの…助けて頂いて…ありがとうございます」

「あ～…いや、大した事じゃなかったし…えっと」

「あっ、私【乃木坂春香】っていいます」

や、やっぱりその名前でしたか！？

「？どうかしましたか？」

「いや…何でもないよ、僕はアリサの友達の神代恭介っていいます…それで乃木坂さん、お願いがあるんだけど…」

「はい？何でしょうか？」

「ちょっとアンタ!?まさか春香に何変な事頼もうとしてないでしょうね!?」

「そ、そんな訳ないじゃんか!?
乃木坂さんに魔法見られたから…その事を秘密にしてほしいだけだよ!?」

そう、助け出す為とはいえ…彼女の前で魔法やら人間離れした動きをしてたからな～

「えっと…わ、わかりました。やっぱりあなたは正義の魔法使いさんなんですね?」

…別に正義って訳でもないが…

「わ、私感動しました!!魔法ってホントにあるんですね!!あ、もしかしてお知り合いにドジッ娘アキちゃんとかいらっしゃいますか?」

乃木坂さんは目をキラキラさせ期待に満ちた目を向けている…こ、これは既にあちらの主人公がイノセントスマイス譲渡済み?

「…あ～…いや…残念ながら…」

「そ、そうですか…」

うわっ!?目に見えてガッカリしていらっしゃるし!?

「ちょっとキョウスケ!何そのドジッ娘アキちゃんとかは?アンタ

またフラグ立てたの！？」

またって何さ！？人を無差別フラグメーカーな上条さんみたいに！？

『（マスター…貴方もそのカテゴリーの人種に属している事に気付きましょうよ…）』

「と、とにかくだ！乃木坂さん、僕の魔法の事は…」

「あ、はい　わかりました　任せて下さい！私これでも口は固いんですよ？ばっちぐーです♪」

…♪が気になるが…大丈夫かな？

「あ、ありがとう乃木坂さん。
さて、皆が心配しているし早く戻ろうか？」

「そうね。行きましょ春香！」

「はい！」

さて、後は…

「ん？キョウスケ！何してんのよ？」

「ん？ああ、このダブル…犯人が使っていた人形を回収しようと」

何でWシリーズがこんな場所にいるか気になるしな…

「…それにしてもよく出来たロボットよね…」

正確には人造人間なんだが…

―ガシャ

「い、いま何か音がしませんでしたか？」

確かに…

「キ、キョウスケ！あ、あそこのロボット！！まだ動いてるわよ！！」

「ちっ、まだ動けたか！！」

僕は剣を構えアリサ達を守るように構えると…

「…コード…ＡＴＡ……起動」

……なっ！？

コードＡＴＡ！？自爆する気か！？

こんな所で自爆されたら…ホテルごと崩壊するじゃねーか！？

「クッ！させるかよ！！インフィニティ！！マテリア【りだつ】セット！！デジョン！！」

―グィィン！！

僕はデジョンを発動させ、Ｗシリーズを全て次元の狭間に送り込んだ…

はぁ…とりあえず助かったが…謎は謎のままか…

「キョウスケ…大丈夫なの？」

「キョウスケさん…」

おっと、二人に心配させちゃったかな？

「…ああ、大丈夫。危うく自爆されそうだったけどな…」

「じ、自爆！！？ち、ちょっと！！シャレになってないわよ！！！」

「ああ…でも、もう大丈夫だから安心して」

次元の狭間に捨てたからね～

「それにしても…何で新年早々こんな目に合わないといけないのよ！！！」

「はは…ま、苦情はこの犯人に言ってくれ。後は警察に突き出せば今回の事件は解決だし…アリサも解ってると思うけど…」

「解ってるわよ！私達は誘拐されて、気付いたら助けられたって事にしておくから。春香もいい？」

「あ、はい。アリサちゃん」

「じゃあ…今度こそ戻ろうか？」

「うん！」

「はい♪」

さて…結局Wシリーズの事は分からなかったが…

何が起こっているんだろう…

マフィアと魔王、どちらが怖い？（前書き）

今年最後の投稿になります

年末年始って忙しいっすぃぃ（＋＿＋）

マフィアと魔王、どちらが怖い？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

無事アリサと春香を救出するのに成功したのだった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

アリサ達を救出し、無事にそれぞれの家族の元に送り届けたのだが…

「貴様か！！貴様が春香を誘拐したのだな！？」

…とまあ、春香少女を送っていった途端に乃木坂さんの父親に絶賛威嚇＆殺気をあてられてます…

「お、お父様！違います！！この方は…」

乃木坂さんが誤解を解こうとしているのですが…

「春香はこっちに来るんだ…後は私が始末する…この死屍累々でな！！」

ちょ！？そんな始末って物騒な！？

…と、その時！

「…あなた、少し落ち着いたらどうです？」

穏やかな声と共に現れたのは、小さな女の子を連れた女性…あれ？この人って…

「お、お前…」

驚愕の表情で振り向くマフィ…ゴホン！…乃木坂父

「あ、あの～？」

とりあえず僕は、助けて？くれた女性に話しかけてみると…

「あら、ごめんなさい。はじめまして　わたくし乃木坂秋穂…春香の母です♪で、このコが娘の美夏です。さ、美夏ご挨拶は？」

「はじめまして、おに～ちゃん。乃木坂美夏だよ♪」

…無敵の最終兵器と爆弾娘が降臨した…

つか秋穂さん若っ！？

とても2児の母とは思えねー！？

…10代でも通用すんぢゃね？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…つまり、春香を助けてくれた恩人にあなたは危害を加えようとしたのね…」

乃木坂さんが秋穂さんに事情を説明してくれたお陰で、どうやら僕の誤解は解けたようだ…

「うっ…すまない…」

「謝るのは私ではなくて彼の方にでは？」

…なんだろう…リンディさんの声が似ている秋穂さんから、同等の黒いナニカを感じるが…

「…済まなかった　春香の命の恩人である君に、恩を仇で返すような真似をしてしまって…」

乃木坂父はそう言い頭を深々と下げてきた！

―クイッ

ん?裾を引っ張られて…って美夏ちゃんが!?いつの間に…

「ごめんね、おに～ちゃん。お父さんってお姉ちゃんの事になると見境がなくなっちゃうの～」

…親馬鹿もここまでくると迷惑な…
ま、こうして謝罪している事だし…

「い、いえ…気にしてませんから。後、僕が乃木坂さん達を助けた事は秘密にしてくれると助かるのですが…」

「あら?どうしてかしら?」

「まぁ…余り目立つ事は控えたいんですよ」

…下手に警察に事情聞かれた日には面倒事確定だよな～。

「まぁ、春香の命の恩人ですからその位のお願いは…」

「ありがとうございます」

「それにしても…子供1人で誘拐犯に向かっていくのは関心しませんね…」

う〝っ…今度は秋穂さんからまさかの正論が!?

ま、まぁ確かに普通子供がそんな真似するのは無謀というか…無茶だろうかなら～。魔法があるから大丈夫とは言えんし…

「あ～…まぁ…その…」

僕が言い淀むと…

「…まぁ、今後はあまり無茶はしないようにね？」

「は、はぁ…善処します」

とりあえず秋穂さんからのお咎め無しとなったの…かな？

「じゃあ僕はこれで…」

僕が立ち去ろうとすると…

「待ってくれ！…君は一体何者なんだ？」

乃木坂父が僕を呼び止め、尋ねてきた

何者って言われても…よし！ここは…

「Ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｋｎｏｗ…」

僕は一言そう呟いた

「それは…」

乃木坂父は何か言いたそうだったがスルーして…

「じゃあ乃木坂さん、美夏ちゃん…元気でね（ニコッ）」

乃木坂さん達に挨拶をして早々に立ち去った…

色々とツッコまれたらボロが出そうだからな～

さて、なのは達と合流するか

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

秋穂Ｓｉｄｅ

春香を助けてくれた不思議なコ…何者なのかしらね

Ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｋｎｏｗ…知る必要の無い事って彼は言っていたけど…

―シュタ！

「…葉月さん」

「申し訳ありません秋穂様…私が春香様のお側に付いていながら…」

「まぁ春香が無事でしたし…それでどうでした？」

「ハッ…犯人はウチの系列子会社の社員でしたが…横領が発覚し、解雇処分となっております…おそらく今回の件は解雇された乃木坂グループへの逆恨みかと…」

「そう…予想はしていたけど…バニングス家の方にはウチのゴタゴ

タの巻き添えになってしまったようね…後で謝罪しないといけないわね…」

そう言えば…あのコ、バニングス家のアリサちゃんとも一緒だったわよね…知り合いなのかしら？

「ねぇ春香？さっきの男の子、アリサちゃんとお友達だったのかしら？」

「あ、はい　アリサちゃんと親しげにお話していましたし…うらやましいです（ボソッ）」

あらあら、春香ったら本音がダダ漏れになってるわね～
あの子の事が気に入ったのかしら…？

「ねぇねぇおか～さん、またあのおに～ちゃんに会えるかな？」

あら、美夏まで？
フフフ、かなりのフラグメーカーみたいね彼…

「大丈夫よ、またきっと会えるわよ♪」

彼…とっても面白そうだったし、今度バニングスさんに詳しく聞いてみましょ♪

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――ホテル個室――

キョウスケSide

―ブルッ！

な、なんか今…妙な寒気が…？

とりあえずなのは達がいる部屋へ…

―ガチャ

「ただいまー」

「あ、恭介！　おかえり！」

「キョウスケ君！おかえりなの！」

「キョウスケ君、お帰りなさい」

部屋にはヴィータ・なのは・月村姉妹に恭也さんが居た

「…あれ？アリサは一緒じゃないの？」

「アリサちゃんなら親御さんの所よ…さすがにあんな事があった後

だし…ね」

忍さんが恭也さんの看護をしながら答えてくれた

「そうですか。まぁとりあえず無事でなりよりです」

「ねぇキョウスケ君、これからどうするの？私とお姉ちゃん、これから警察に呼ばれているんだけど…」

そか、一応誘拐事件だからな～

警察も関係者から事情を聞くのも当たり前か…でも、そうなると…

「じゃあ、僕たちは日本へ帰るよ」

「えっ！？帰っちゃうの！？…折角年初めからキョウスケ君と一緒にいられると思ったんだけど…」

正月を海外でっのも悪くないんだけど…

「ごめんなすずか…でも、僕となのはやヴィータは…」

「3人が…ど、どうしたの？」

すずかが若干緊張した面持ちでいると…

「「帰って私とイチャイチャするんだ（なの）！！」」

……ってオイ！！

「そ、そんなぁ～…ｏｒｚ」

「つか、すずかも真に受けるなよ!!ヴィータもなのはも何言ってんだ!?」

「え～っ!!」

え～っ!!　じゃありません!!

「おい、高町なのは…恭介は私んだぞ!!」

ヴィータも何問題発言を!?

「…ヴィータちゃん…だからキョウスケ君は別にヴィータちゃんの物じゃないよね?」

なのはは目をハイライトに変化させヴィータに近付いていく…

「うっ…キ、キスの回数なら私が1番多いんだから別にいいじゃねーか!?」

…あ…何か今…色々と地雷踏んだかも…

「…ふ～ん、ねぇキョウスケ君…ちなみにヴィータちゃんとは何回キスしたのかな?かな?」

…ヤバイ…なのはの変なスイッチが入ってしまった!!

「な、なのはさん?ちょっと落ち着こう!な?」

なのはの迫力に押され、後退りすると…

「…キョウスケ君、ヴィータちゃんとキスしてたんだ～…そんな話し聞いてないけど…何で？」

いつの間にか背後に立っていたすずかに…って貴女も目が恐いんですが！？

「い、いや…それは…あはは…」

「おい！神代恭介！！貴様、なのはを毒牙にかけただけでは飽き足らなず…他の子まで！？」

「ちょ！？恭也さん！？」

シスコンめ…余計な事を…

「な、なのはちゃん…？キョウスケ君と何したの！？」

「ふぇ！？えーと…一緒に寝たり、最近はキスしたりキスマーク付けあったり？」

…なのは、地雷爆発しても踏みっぱなしなんですね…

「ふっふっふ…なんだその位の事！私やはやてだってしょっちゅうしてんぞ？」

……ヲイ

「えっ！？ホ、ホントなの？キョウスケ君…？」

う〝っ…すずかが捨てられそうな子犬みたいな目で訴えて!?

「あ～…したというか…されたというか…」

『でも最近は確かに頻繁にキスしたりしてますよねっ　マスター♪』

う〝おおおい!?インフィニティ!?何いらん事を!?

「な…なのはちゃん達だけずるいよ!!キョウスケ君!!私ともしてくれるよね!!ね!!?」

「ちょっ!?すずか、落ち着いて!!」

「さあしよう♪キョウスケ君、んー／／」

ってすずかは唇を近づけて…

―ガシッ!

「…すずかちゃん…悪ふざけは程々に…しようか?」

…バスケットボールを掴むように、なのははすずかの頭を掴んだ…

「な、なのはちゃん?」

「…ちょっと…隣の部屋に逝コウカ?」

―メリメリ…

「い、痛い!痛いよなのはちゃん!!?」

「お、おい…高町なのは…さすがにやり過ぎじゃ…」

さすがのヴィータもなのはを止めようとするが…

「…ヴィータちゃんも逝く？」

その瞬間、ヴィータは高速で首を横に振り続けた…

「た、助けてキョウスケ君！！」

…すまないすずか…今のなのはは魔王だから無理っす…

「…キョウスケ君、今失礼な事…考えてなかった？」

―ギクッ！

「い、いやだな～…そんなわけナイヨ？」

「…まっいいか…じゃあ…すずかちゃん…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよっか…」

「い、いや～～～！！」

―ガチャ…バタン！

なのはは、すずかを引きずりながら隣の部屋へ消えていった…

「…ハッ！ちょ！？ねえ！！キョウスケ君！！妹は…すずかは大丈夫なの！？」

ようやく再起動した忍さん

「……命だけは多分」

「ちょっと!?何その物騒な表現は!?恭也!!恭也もなのはちゃんを止めて!!」

懇願する忍さんだったが…当の恭也さんは…

―ガタガタガタガタカ…

「あれは魔王…魔王だ…いつものなのはじゃないんだ…」

って、布団被って震えてた!?

「恭也!?ちょっとしっかりして～!!」

部屋中に忍さんの絶叫が響いた…

「な、なぁ恭介…すずかは…」

「ヴィータ…僕らに出来るのは冥福を…じゃなかった　無事を祈るだけだ…」

「うっ…そ、そうだな…」

僕とヴィータはなのは達が消えた扉に向かってすずかの無事を祈った…

『でも、助けには行かないんですね？』

「「う〝っ！！」」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

パニパニック！？（前書き）

明けましておめでとうございます！

今年の目標は…Ｓｔｒｉｋｅｒｓまで行けるように（笑）

パニパニック！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「…じゃあ忍さん、僕たちはこれで…」

「え、ええ…」

誘拐事件が一段落し、僕たちは日本へ帰ろううと帰宅の準備をしているのですが…

「…なのは、やりすぎだろ…」

「にゃはは…反省してるの」

「つか、その反省の色なしかよ…」

すずかをつれさったなのは…扉から出て来て、僕たちが見たものは…

「フフ…フフフッ…光が…光がぁ…」

…絶賛ぶっ壊れ中のすずかだった…

「…ま、まぁ流石にこのままって訳にもいかないし…」

僕は常備している万能薬を取り出し、すずかに飲ま「キョウスケ君…まさか口移しで飲ましたりしないよね？」…ゲフン…

「あ～…忍さん、すずかにこの薬飲ませてあげて下さい！忍さんが飲ませて下さい！！」

「キ、キョウスケ君…2回も言わなくても」

…分かってますが、こうでもしないと背後からの視線が！！

「…ハッ！キョウスケ君…私、今まで何を…」

忍さんがすずかに万能薬を飲ますと、何とか再起動したすずか…僕はすずかに

「すずか…世の中には知らない方が幸せって事もあるんだよ…」

と、力説した

「う、うん…」

すずかは、とりあえず納得してくれたようだ…すまないすずか！なのはのアレは…トラウマ確実になるからな…覚えてないならそれに越した事はないよ

「…キョウスケ君、また失礼な事考えてないかな？」

うっ…相変わらず鋭いな…

「いや…別に何も…」

「ふ～～～～ん…」

なのはがジト目で睨んでるよ！？

「そ、それより2人とも！そろそろ転移魔法で帰るぞ！忘れ物ないか？」

「ああ、大丈夫だぞ！」

「私も…あっ！ちょっと待ってキョウスケ君！」

「ん？なのは、何か忘れ物か？」

「うん、ちょっと待ってて…」

―ガチャ、バタン！

そう言うと、なのははは隣の部屋で寝たままの恭也さんの部屋に…兄妹のあいさつか何かかな？

ん？部屋の中から声が…？

「なのは、どうしたんだ？」

「ちょっと忘れ物があって…レイジングハート！」

「な、なのは！？」

「…お兄ちゃん…忘れ物の…零距離スターライトブレイカーーーッ！！」

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

―ズカァァァ！！

「……なぁ、恭介…」

「…言うなヴィータ、言いたい事は物凄く解る…」

―ガチャ、バタン

「お待たせ～、さ、行こ♪」

部屋から出て来たなのはの肌はとてもツヤツヤしていたそいな…

「…忍さん、後でこれも恭也さんに…」

僕はさらに、忍さんにハイポーションを数本渡しておいた

「え、ええ…重ね重ねありがとうキョウスケ君…」

「いえ…じゃあなのはにヴィータ！僕の手を掴んで！」

「おう♪」

「うん♪」

二人は僕の手を掴み…って、二人とも、何でそんなに嬉しそうなんだ？

…ま、いいか

「じゃあすずか、アリサによろしくね。」

「うん、キョウスケ君」

―シュン！

こうして僕たちは日本に転移した…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家――

「…とまぁコレが向こうであった事件の概要かな」

「は～…キョウスケ君、大変やったんやな～」

帰宅後、家に着くとはやて達が出迎えてくれて…というか入口で速攻拉致られ、アリサ達がどうなったか尋問を受けてます…

「まぁ　神代が行ったんだ。その位は余裕だろう」

…誘拐犯の拘束は簡単だったんだが…問題は…量産型Wシリーズ…

あれも闇の書のアインスト同様、この世界には存在しないんだが…？

「キョウスケ君？どないしたん？」

「あ…いや、ちょっと時差ボケかなって」

…勿論、今の時点ではやて達にはその事は話していない…

とりあえず、謎のロボット軍団（笑）って事にして話はボカして伝えてあります

「…ところではやて…今何時かな？」

「えっ？今夜中の3時過ぎやで？」

…だよなぁ～

「んで、そんな夜遅くまで何でウチにいるんだ？なのは・フェイト？」

そう、事件解決で家に着いたのは2時前だったのだが…まだなのは&フェイトがウチに…

「ふぇ？今日は皆でオールで騒ぐんだよ？」

「うん、アリサ誘拐事件解決の打ち上げも兼ねてだよ？」

何その決定事項的な！？

「まぁ　私らは目が醒めてもうてるから、別にお祭り騒ぎはええんやけど…なぁ皆？」

「はい」

「まぁ…はやてが良いって言うなら…」

「……（コクッ）」

って皆さん賛成なんですね…ザフィーラ、喋らないと犬化するぞ？…あれ？

「そういえばシャマルは？」

いつの間にか居なくなったが…

「えっ？シャマルさんならさっきキッチンに「シグナム！ヴィータ！！急いでシャマルを拘束！！急げ！！！」「「おう！！！」」」…ふぇ！？ど、どうしたの！？」

あ…そういやなのは達は知らないんだっけ？

「なのは・フェイト、八神家には…シャマルをキッチンに入れるなという家訓があるんだ…」

「な、なんか凄い家訓だね…でもどうして？」

「…シャマルの料理は…」

「「…料理は？」」

「…一品料理で一個大団は殲滅可能な威力が…」

…いやマジで！！

「「そ、そうなんだ…」」

「だから命が惜しかったシャマルには料理をさせない様にしないと…」

「恭介！！間一髪間に合ったぞ！！」

「…危うい所だった…」

ヴィータとシグナムがシャマルをバインドで何重にもかけて連れて来た

「ちょ、ちょっと皆！！私はまだ何も…」

「「「してからじゃ遅いんだ！！！」」」

「うう…は、はやてちゃ～ん…皆がいぢめる～！！」

シャマルは涙目ではやてに訴えかけるが…

「…さて　と、ほな料理の準備しないとな～　キョウスケ君、手伝ってな？」

はやてはシャマルをスルーした！！

「あ、ああ…分か「ねえ！！スルーなの！？」った、夜中だからカロリー控えめ「ちょ！？キョウスケ君までスルーなの！！？」な物でも作るか…」

…すまんシャマル、美味しい物が食べたいんだ！！

「…そういや、なのはやフェイトは家族の人達に外泊許可はとったのか？」

「「うん！」」

…フェイトはともかく、なのはは父親の士郎さんがよく許可してくれたな？

「あ、お母さんがお父さんを物理的に説得するから大丈夫って言ってたの♪」

…今何か不穏な単語がなかったか！？

「私はリンディさんに言ったら二つ返事でＯＫだったよ…電話の後の方で、クロノが何か言っていたけど…何だったんだろう？」

うっ…それは養子の話しが進むにつれてシスコン化しつつあるのか！？

「まぁ…それなら大丈夫か。それじゃ、ちょっと待っててな？」

「うん♪キョウスケ君の手料理って何か久しぶりなの～」

「うん…そうだね。」

「はは、そう言ってくれると腕を振るい甲斐があるな。じゃあ待っててね」

僕とはやてはキッチンに…とその前に、

「シグナム・ヴィータ・ザフィーラ！シャマルの監視お願いな？」

「ああ！」

「任せとけ恭介！」

「……心得た！」

3人で見張っていれば…大丈夫だろう…？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ヴィータＳｉｄｅ

はやてと恭介はキッチンに向かっていった…後はシャマルを見張ってれば、2人のギガうま料理が食えるんだ♪

「み、皆!?私の扱い最近酷くない!?」

拘束されたシャマルが抗議してんが…

「はやてと恭介のギガうま料理の為だ!」

「…許せシャマル、私も食事は安全に食べたいのだ」

「……毒味役にはもうなりたくないのだ」

やっぱ皆も美味しい物が…ってシャマルのヤツ…ザフィーラに毒味役やらせてたのか!?

「よく生きていたな…ザフィーラ」

「……お陰で三途の川も顔パスで渡れるようになったがな」

いやいやいや!?その川渡ったらマズいだろ!!?

「と、とにかくだ!恭介とはやてが料理作ってる間は、私らがシャマルを監視してんかんな!」

「うぅ〜…」

「ね、ねぇヴィータちゃん…シャマルさんかわいそうだよ〜」

高町なのはが何か言ってんが…はぁ…コイツは分かってねーな…

「ねぇヴィータ、そんなにシャマルの料理って…その…」

「ああ、シャマルに任せたら…良くてヤモリやイモリの粉末入れる位だが…」

「よ、良くてイモリの粉末なの!?」

「で、最悪は…料理が毒そのものになって食卓に並ぶんだぞ!?」

つか、何で食べられる材料使って毒ができんだよ!!?

「そ…そうなんだ…」

「さ、さすがにそれは…ね」

「だから私らは、シャマルをキッチンに入れないようにしてんだよ!…前までは恭介やはやてと一緒なら入ってもよかったんだがな…」

「えっ!?前までは…って?」

「…シャマルが最近通販にハマって、怪しげな物を取り寄せては料理に混ぜようとしてな…神代や主が何とか気付いて止めさせたからよかったものの…」

「ええ～!!シグナム～　別に怪しげな物じゃないわよ?」

「たわけ!!訳の解らぬ物ばかり買い込んでいるではないか!!しかも以前パニなんて食材を買って、それを見た主が卒倒したではないか!!!」

「あ、あれは私も知らなかったのよ～」

「ねぇヴィータちゃん…パニって何？」

「う〝っ…」

あ…あれは私も思い出したくもねー！！

「…恭介がアフリカ料理だって言ってたが…」

あれは…はやてが卒倒して当たり前だよな

「えっ？じゃあ現地料理としてちゃんとあるんだよね？はやてが卒倒したって…何で？」

「…ああ、そのパニって料理…栄養価は高いんだが……蛾の幼虫、つまり芋虫料理なんだよ…」

「「いいいいっ！！芋虫料理ーっ！！？」」

「あー！！思い出したくもねー！！鳥肌が！！　だからその一件以来、キッチン出入り禁止になってんだ！分かったか！？」

「「……」」

ん？２人の反応がねーな？

「……ヴィータ、２人とも気絶してるぞ」

「はぁ！？ったく…仕方ねーな。
ザフィーラ、コイツらをソファーに寝かせるの手伝ってくれ」

「……ああ」

まぁ…気絶する気持ちもわからなくはねーけどな…

「……確かヴィータも気絶したのだったな。後でキョウスケに看病
されて嬉しそうだったが…」

「なっ！？う、うるせー／／」

変な事ばっか覚えてんじゃねーよ！！

…まぁ確かに嬉しかったけどよ…／／

あ～、早く恭介の料理出来ねーかな～

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

2度目の初詣…えっ？（前書き）

某サイト内の無料ゲーム　【萌えＣａｎちぇんじ！】

アレで何とか、はやてやフェイトやヴィータ似を作成でるんじゃね？と思いつつ軽くハマってます（笑）

2度目の初詣…えっ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

「ごちそうさまでしたー」×多数

「はい、お粗末さまでした」

僕とはやての合作ヘルシー料理を食べ、皆でリビングでくつろいでいます

…料理持ってきた時、なのはとフェイトの顔色が少し悪かったが…

今は大丈夫みたいだな

…相変わらずシャマルから暗く重いオーラが出ているが…

「さて、はやて　今日はどうするんだ？」

徹夜したから、まったり寝正月かな？

「んー？　今日も初詣に行くで？」

……え～と

「はやてさん…初詣は数時間前に行ったのは覚えてます？」

…途中アリサ誘拐事件が起こったが…

「いややな～　ちゃんと覚えとるよ」

ぢゃあ何でさ…？

「そら着物来て行きたいからに決まっとるやんか～」

「…だったら大晦日から着物着てれば…」

「ええ～！！　だって夜中やったら暗くて…その…キョウスケ君に着物ちゃんと見てもらえへんし…／／」

…あ～、でもはやて達の着物って僕が魔力固定化して作ったから…よく見ているんだけど？

つか、はやて達が着物カタログで指定してきたぢゃん！？

『（…マスター、乙女心をもう少し勉強して下さい！！）』

…？？？インフィから電波が？

「な、なら私も一回家に帰って着物着て来るの！！」

「あ、私も急いで帰って着物着てくるから…キョウスケ…その…見てくれるかな？／／」

なのはとフェイトが横から急に着物着てくると発言！？

これは…2回目の初詣（って初じゃないよな～）確定か…はぁ…

「ま、2人の着物姿か～。楽しみにしてるよ」

「「ホ、ホントに!!?／／」」

「ああ、なのはもフェイトも可愛いんだしな（ニコッ）」

「か、可愛いって…あ…あうっ…／／」

「キ、キョウスケ君…その台詞にその笑顔…反則だよ…／／」

ん?二人とも急に顔を真っ赤にして…甘酒でも飲んでた?

『（はぁ…だからマスターのせいなんですよ!?）』

また電波を受信した…ような?

「じゃあ…2人とも支度出来たら携帯に電話してな?現地集合でいいかな?」

「「うん!!じゃあ行ってくるね!!!」」

―ドタドタドタ、バタン!!

って2人とも、物凄い勢いで出ていったな…しかし徹夜だってのに元気だな～

「…あ、送っていけばよかったかな?」

朝方とはいえ、まだ外は薄暗いし…

「…別にいいんじゃねーか？　アイツらなら、たいていの変質者なら返り討ちに出来んだろうしよ」

「…そやね、むしろ変質者の方が心配や…」

…あ、あれ？

「なぁ、はやて・ヴィータ…何か機嫌悪くね？」

「「べーつーにぃ～～！！」」

…いや　確実に機嫌わるいぢゃん…

「それじゃ皆！私達は着物に着替えましょ♪」

…いつの間に復活したんだシャマル！？

「そやね～…あ、キョウスケ君」

「何だ？はやて？」

「別に私の着替え、覗いてもええよ♪」

「ぶっ！？な、何言ってんだはやて！？」

全く…この子狸は！！

「あ、私も見られても…つか言ってくれれば…いつでも…／／」

ヴ、ヴィータ!?

「私もキョウスケ君なら問題ないわよ♪ついでに揉んでもＯＫよ♪」

…シャマルに至っては発言危なくね!?つかドコをだよ!!?

「あら、勿論胸よ♪」

…そして心を読まないでくれ…

「「くっ…私だって、年齢詐称薬を飲めば胸は大きくなるん（だ）や!!」」

はやてもヴィータも触発されるな!!

「…はぁ…シグナム、３人を別室に連れていってくれ…」

唯一暴走してないシグナムにお願いし…ん?何かシグナムの様子が…?

「あ、ああ…分かった。そ、それで神代…覗くのか?」

「だぁぁぁ!!あ、あのなぁ…別に覗かないから安心して着替えてきてくれ」

シグナムもはやて達の言う事を真に受けなくても…

「む…いや…別に私も…見てくれても…（ボソッ）／／」

「ん？何か言った？シグナム？」

「いいいや！！な、何でもないぞ！！？」

「ならいいけど…」

「で、では主！行きましょうか？」

「ほなキョウスケ君、私らの着物姿を楽しみに待っててな～♪」

「じゃあちょっと行ってくるな～…オライくぞシャマル！！」

「あ～ん！！ヴ、ヴィータちゃ～ん！！？引っ張らないで～！！」

はやてはシグナムに連れられ、シャマルはヴィータに引きずりながら連れていかれた…

「…そういやザフィーラは初詣どうすんだ？人型用に紋付袴でも創ろうか？」

「……いや、我はアルフ推奨の子狼モードで…」

「……もしかして、割と気に入ってる？」

「……燃費がいいのでな」

あ…そうですか

―♪～～？～♪

「あ、誰から電話…ってなのはから？…もしもし？」

〔もしもし？キョウスケ君？あなたの彼女さんのなのはだｙ…〕

―ピッ！

「……」

―♪～～？～♪

―ピッ

「…もしもし？」

〔キ、キョウスケ君！？いきなり切るなんて酷いの～ッ！！〕

「…いや、何が幻聴が聞こえたんで…で、どうかしたのか？」

〔あ、そうだった！あのね、着物の着付け終わったから連絡したの♪〕

早っ！？　ついさっきはやて達が着替えに行ったのに！？

〔それはもう早くキョウスケ君に着物姿見せたくて…にゃはは／／〕

…携帯越しでも心は読めるんかい？

〔それでね…キョウスケ君、早く支度出来た事だし…その…よかったら…先に私と2人っきりで……って!?ち、ちょっと!?フェイトちゃん!!?私がキョウスケ君と話してるんだよ!?〕

…ん?フェイトも一緒にいるのか?

〔なのは!!そんなの抜け駆けはダメだよ!!ちょっとなのはの携帯貸して!!〕

〔ちょ!?フェイトちゃん!!き、着物引っ張らないでよ~…って、まってフェイ…ンーーッ!?〕

な、なのは?

「あ、あの~…〔あ、もしもし?キョウスケ?〕ってフェイトか。な、何があったんだ?」

〔ちょっとなのはの携帯借りただけだよ?決してバインドで何重もグルグル巻きなんかしてないから大丈夫!〕

…ぜんっぜん大丈夫じゃねーよな?それ…

「ち、ちなみに何でフェイトもなのはの家に?」

〔えっと…リンディさん達でも着物の着付け分かる人がいなくて…で、なのはのお母さんなら出来るって聞いたから私もお願いしたんだ〕

「それで一緒なんだ…」

なのははおそらくバインド簀巻き状態だろうが…

〔そ、それでねキョウスケ…予定より早く着付け出来たから…予定少し早めでもいいかな？
早くキョウスケに…その…見てもらいたいし…ね／／？〕

「まぁ…僕は別に構わないが…はやて達次第…」

―ガチャ！

「キョウスケ君！どや？私らの着物姿は？」

ドアが開かれ、はやて達が着物姿で立っていた…

「つか速っ！？着物の着付けってそんなに早く出来たっけ！？」

「キョウスケ君…それは禁則事項や♪」

はやては某未来人の朝○奈さんの決めポーズをとって…ん？
後ろの皆の様子が…

「…主にあんな技法があるとは…」

「…はやて…あれは反則すぎんだろ…」

「…というか…あの技は世に出したらマズいわよ…」

シグナム・ヴィータ・シャマルが何かとても気になる事を言っているが…

「…はやて、一体どんな方法で…」

「フッ…それは乙女の秘密や♪」

…ま、それはさておき…

「…キョウスケ君、スルーはあかんよ～」

「…フェイト、はやて達も着物着替え終わったみたいだから8時位に待ち合わせでいいか？」

〔うん、分かった　それじゃまた後でねキョウスケ♪〕

―ピッ

「ほんまにスルーなんやね…で、今の電話はフェイトちゃんからなんか？」

「ん？ああ、フェイト達も着付け早く終わったから早めに集合しようって」

「まぁ…私らも着付けバッチリやし…で、キョウスケ君？」

はやては何か期待にみちた瞳で訴えかけて…やっぱアレだよな～

「…ああ、はやて・ヴィータ　着物姿可愛いね！とても似合ってるよ」

「ほ、ほんまか！？あ…ありがとなキョウスケ君／／」

「うっ…あ、ありがと…／／」

はやてとヴィータはモジモジしているが…？

「シグナムもシャマルも綺麗だよ」

「そ、そうか／／！？世辞でも悪い気はせんな…／／」

「ふふ　ありがとうキョウスケ君♪
御礼に後で帯引っ張って脱がしていいわよ♪キャ／／」

…キャ　ぢゃねーだろ…あ！

「シャーマールーぅぅぅ…！」

「は、はやてちゃん！？どうしたの」

あ～あ…シャマルのやつ、ちょっとふざけ過ぎたみたいだな～

はやてが暴走したシャマルを止め「それは私が先にしてもらうんや！！ええかシャマル！！主命令や！！！」…てはくれなかったてかシャマルの案に便乗！？
ぼ、僕はしないぞ！？

「はぁ…とりあえず眠気覚ましにコーヒー飲も…」

つか、はやて達…よくテンション落ちずに騒げるな～

あ、そーいや僕は紋付き袴にした方がいいのか！？

…ま、いいや　かったるいし…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

初詣とおみくじと…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

なぜか2度目の初詣に行く事に…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

僕たち八神一家は、なのはとフェイトと待ち合わせ場所の神社の入口近くの所で待っているのですが…

…考えてみて下さい。

八神一家…ぶっちゃけ美少女&美人軍団な訳で…

そんな軍団が入口付近で着物姿で立っていると…目立つわ目立つわ…結果…

「……何か視線が突き刺さるんですが…」

そう！通り過ぎる人々からの視線が…特に男からは僕に殺気混じりで！！

中にはシグナムやシャマルをナンパしようと近づく某芸人の藤○風なチャラ男が近づくが…

「…失せろ！」

とシグナム姉様が殺気を浴びせ撃退！

…まぁレヴァンティンを構えないだけマシか…

「…にしても、おせーな…なぁ恭介、アイツらとの待ち合わせ時間ってもう過ぎてねーか？」

「ん…まぁもう少し待ってみようよヴィータ」

「でも…早くなのはちゃん達が来てくれないと…そのうちシグナムに斬られる人が出るかも」

う〝っ…それは有り得る…

「人を何だと思っているシャマル！！」

ふぅ…どうやら分別はちゃんとあるみたいだ…

「私だってこんな往来でレヴァンティンを抜いたりはせん！！ちゃ

んと人目の付かぬ場所で刀の錆にしてくれる！」

…をい…結局斬るんかい！？

「……ん？キョウスケ、どうやら来たようだ」

「ほ、ほんとかザフィーラ！？」

「キョースケく～ん！！」

「おまたせーキョースケ！！」

少し離れた場所に着物姿のなのはとフェイトが…って！！そ、そんな大声で叫ぶとまた…

「…あのガキ…何だ！？」

「チッ、ガキのクセに６股かよ…」

「あ、あんな年上まで毒牙をかけやがって…」

…ああ…通行人（男）の声が駄々漏れだよ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのはとフェイトが合流し、

「ごめんねキョウスケ君、遅れちゃって」

「まぁ…大して待ってないから大丈夫だよ」

実際は約３０分位待ったが…

「なのはちゃんもフェイトちゃんも…何かあったん？」

「えと…ここに来る途中でクラスの男の子に会って…」

「それで…一緒に初詣行かないかって誘われたの！
勿論断ったんだけど…しつこくって！」

あ～…早い話しナンパされて断ったのにしつこく付き纏われて遅れたって事か…確かに二人ともスペック高いからな～　学年…いや学園トップクラスだって前聞いたような…

「んな奴ら、とっととブッ潰してくればいいじゃねーか！」

ヴィータ…一応僕のクラスメイト（らしい？）だから…あまり物騒な事は…

「にゃはは…そうしたかったのは山々だけど…さすがに一般人を砲撃で吹っ飛ばす訳にはいかないよ～…」

…危なかったな、名も知らぬクラスメイトよ

「それで…ねぇキョウスケ君…」

「ん？どうしたなのは？」

何かモジモジと体をくねらせて？いるが…

「この晴れ着姿…どうかな？変じゃない？」

…ああ、なるほど

「そんな事ないよ、とても似合ってるよ（ニコッ）」

「ホ、ホント！？あ…ありがとうキョウスケ君…／／」

「あっ！なのは！抜け駆けはずるいよ！？

キョウスケ！！わ、私のはどうかな？」

「うん、フェイトもとっても可愛いらしいよ」

「か、可愛ぃ！？あ、あうぅ…／／」

なのはとフェイトの晴れ着姿を褒めた途端に顔を真っ赤に染めて…

―ギュ！！

「痛っ！な、何！？はやて！？ヴィータ！！？」

二人が手の甲をつねってきた！？

「キョウスケ君…今鼻の下、伸びとったで…」

「ふん！！デレデレしてんじゃねーよ！」

…何で怒ってるのさ?

「はぁ…キョウスケ君、はやてちゃんやヴィータちゃんの乙女心をもう少しは…」

シャマルが小声で何か言っていたが?

「はぁ…相変わらずの…まぁええじゃあ皆、気分転換に皆でおみくじでも引いてみよか?」

「あ!そうだね~夜中来た時は、夜店巡りしてて忘れちゃってたし~」

まぁ　何かとドタバタしてたしな~

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

で、皆でクジを引いたのだが…

「皆、どやった?」

「はやてちゃんは?」

「ん?私は大吉や♪」

「いいな~…私なんか末吉なの~」

まぁ、要約すると…

なのは…末吉

フェイト…中吉

はやて…大吉

ヴィータ…大吉

シャマル…吉

シグナム…凶

…って凶!?

「わ、私だけ…運勢が……」

うわっ!?シグナムめっちゃ落ち込んでるよ!?

「ま、まぁ　あまり気にせん方がええよ…そ、そや!今年の始めの内に、悪い運を出しきったと思えば…」

「まっ!私は大吉だけどなっ♪」

「ぐはっ!」

ヴィータさんが何気に止めを刺してるよ…

あ、ちなみにザフィーラは子狼モードの為、おみくじは引いてませんよ？

「ね、ねぇキョウスケはどうだった？」

「ん…僕は中吉だよ」

「あ、私と同じなんだね…な、何だかうれしいな…／／ふふっ、キョウスケとお揃い♪」

僕はフェイトと同じ中吉…なのだが…内容が…

特に最後の待人の項目って何さ！？

【待人…既に現れている…が、後にも多数続々と来たる特に、ツンデレツインテール・青髪格闘姉妹・ロリっ子召喚師は確実でしょう】

……何このピンポイントで狙ったような内容は…

しかも最後のはエリオへのフラグ立たなくなるの！？

「…キョウスケ？どうかしたの？」

「い、いや！？な、何でもないよ！？」

「そう？ならいいんだけど…」

ま、まぁコレはまだ未来の話だしな…よし！気を取り直して！！

「さて、じゃあこの後どこかで外食でもいこうか？」

「あ、たまにはええかな～」

「なのはやフェイトも一緒にどう？僕がご馳走するからさ」

「ふぇ！？で、でも…」

「何か悪いし…」

2人とも遠慮してるのかな？

「はぁ、別に今更遠慮する仲じゃないだろ？」

「う、うん…／／」

「あ、ありがとうキョウスケ…／／」

さて、じゃあどっか開いている店に…

―ギュ！！

「…って、はやてさんヴィータさん…2人して僕の足を踏んでらっしゃるのは何故…」

「…べ～つ～にぃ～～　なぁヴィータ？」

「…ああ、べ～つ～にぃ～…フン！」

―グリグリッ！

「って痛いって!?」

な、なんなのさ一体!?

その後、開いていたファミレスにてご飯を食べました…

あ、ザフィーラは人型に戻ってますよ？　…初めの入店時に犬に間違われ、入店を遠慮された為に急遽人型になったのだが…

「……我は狼…気高き狼なのだ…決して犬では…しかし主は犬が欲しいと言っておられたしこのまま犬として…いやいや!!これでは守護獣としてのプライドが…」

…何かの葛藤と戦っていたザフィーラだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

捧げられた生贄！？（笑）

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――時空管理局本局――――

キョウスケＳｉｄｅ

僕は今、はやて達と共に時空管理局の本局へ来ています…

理由は…まぁはやて達は闇の書事件の事後処理…というか罪の償いの為、管理局へ入局して罪を償うという選択をしたので入局手続き？で来たのだ

もっとも一応は試験や面接はあるようだが…

「みんなはこれから個人面接と第二試験やね」

「ですね」

「ついててあげられたらええねんけど…マスターは近くに居たらあかんそうやから…あかん！！大丈夫か心配や～！！」

「は、はやてぇ…少し過保護過ぎだよ」

「ええ～！そないな事あらへんってキョウスケ君～」

そんな慌てている所見ると説得力ないんですが…

「別に初めてのお使いって訳じゃないんだし…な？」

「うぅ…そやけど…やっぱそれでも心配や～！！皆！ひとりで大丈夫なん！？」

「へ、平気だよはやて、ちゃんと真面目にやるからさ」

「はい、任せて下さい主」

「はやてちゃんは心配性なんですから～」

「……（コクッ）」

「そ、そか…　ええか皆…改めて言うとくけど、私らがしたこと…罪は罪や
私も含めて皆で背負って時間かけて償ってかなあかんことや…そやけど自分を責めすぎてもあかん！
ご迷惑かけた皆さんには背筋伸ばしてまっしぐ謝ろ」

「「「「はい」」」」

「で、後はお仕事一生懸命や！皆で一緒に居られるようかんばろ！！」

「うん！はやて！！」

「よしよし　ええコやなヴィータは…がんばろな～」

―ナデナデ

「えへへ♪」

はやてに頭を撫でられて嬉しそうだなヴィータ…

「そーいえば、キョウスケ君はヴィータ達とは別になるんやっけ？」

「ん？ああ、確かクロノが迎えに来てくれて…」

―ゾクッ！

クロノの名前を出した瞬間、僕たちの背後から黒いオーラが！！？

「…神代」

「…シグナム、言いたい事はすっごく解るが…」

―ガタガタガタッ

場所的にオーラの発生源の1番近くにいたシャマルは涙目で震えてるし…

「…キ、キョウスケ君～（泣）」

「…きき恭介ぇぇ～（泣）」

はやてとヴィータは泣いてるし…はぁ

「…いい加減落ち着け、なのは・フェイト」

オーラの発生源は…なのはとフェイトだった

「い、いやだな～キョウスケ君！私、落ち着いてるよ？ねっ？フェイトちゃん？」

「う、うん！そうだよキョウスケ！！至って冷静だよ！？」

「…だったら殺気を消してくれ…はぁ…」

さて、実は本局には僕たちの他になのはとフェイトも同行しているのです

…まぁこの2人はほぼ私用で来ているんですが

その私用に実は僕やはやて達も絡んでいるのが実にお約束的な…

こうなった経緯は昨日まで遡り…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

――――八神家、リビング――――

「2泊3日の温泉旅行？」

「うん！私の所とフェイトちゃん達での家族合同旅行なの♪」

「本当はアリサやすずかも誘いたかったんだけど…今海外だし…」

あ～…まだ帰国してなかったんだ…まぁ事が事だったし…

「でね、キョウスケ君達も参加でいいよね？」

「あ～…あんなぁ、なのはちゃん…」

「僕やはやて達は行かないぞ？」

―ピシッ！！

あ、なのはとフェイトが凍り付いた

「な、なんでなの～！！？」

なんで…って

「キ、キョウスケ！！もしかして私に飽きたの！？飽きたから捨てるの！？」

「って！フェイト！変な事口走るんぢゃない！！」

誰だ!?フェイトに変な知識詰め込んでるのは!?

「…まぁ、こう見えても私ら保護観察中やから…行動拘束はそないないんやけど、一応旅行とかは自粛せんと…真面目に罪を償っていかんとあかんし…」

「で、そーゆー訳ではやてが行かないのに僕らだけ行ける訳ないって事だな」

「別にキョウスケ君は行ってもええんよ?私らは自粛しとるだけやし…」

「あのなぁ…僕だって蒐集には関わってたんだし…それに、はやて達だけ留守番に残して僕だけ遊びに行ける訳ないじゃんか」

「せやけど…」

はやてはまだ何か言いたそうにしてるが…

「ねぇ、キョウスケ君…はやてちゃん達が来てくれればキョウスケ君も参加してくれるの?」

「ん…まぁ、な」

「でもはやては…」

「うん、ごめんな~なのはちゃんフェイトちゃん今回は…」

内心ははやても旅行行きたいんだろうな~

今まで足が不自由で遠出なんてしてなかったから…出来る事なら旅

行に行かせたいが…本人が自粛って言っているからな～…

「う～～ん…あ、そうだ！！」

「どうしたの？なのは？」

「クロノ君にはやてちゃんを説得してもらおうよ！」

…何故そこでクロノの名が！？

「だって、はやてちゃんの保護観察責任者ってクロノ君でしょ？」

…そうだったっけ？

まぁ、おそらくクロノが書類上そうしたのかな？

…でも実際は保護観察なんかされてないんだろうけどね…

「そっか！じゃあクロノがはやてに旅行に行くように言ってくれれば…」

「あ…あの～、なのはちゃん？フェイトちゃん？」

さすがにはやても話の展開の早さに困惑しているが…

「安心してはやてちゃん！！ちゃんとクロノ君を説得してはやてちゃん達も行けるようにするの！！」

「うん！だから安心し私達にまかせて！！」

何か微妙に話がズレてきてるし！？別にクロノが旅行禁止にしてる

訳じゃ…

「あの～…　私は自粛しとるだけやから…」

はやても同じ事を思ったらしく、2人の暴走を止めようとするが…

「…はやて、多分2人とも聞いてないよ…」

こう暴走した2人には正論は通じないさ…

「あはは…」

「「フッ…フフフ…覚悟して（なの）クロノ（君）…」」

この瞬間、クロノは理不尽な生贄となった…

――――回想終了――――

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

とまぁ…そーゆー訳でなのはとフェイトも本局に居るクロノに会う為に、僕たちの出頭に付いて来たのだった…

「じゃあはやて、行ってくるよ」

「うん、しっかりなヴィータ！」

「それではまた後ほど」

「行ってきます　はやてちゃん」

「……（コクッ）」

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラは面接がある為試験場に向かった

「はやて～！恭介～！お昼には帰るからな～！」

「ああ！皆しっかりな～」

「う～～ん…ホンマ大丈夫やろか…」

「大丈夫だよはやて、シグナム達はしっかりしてるんだから」

「そうだよはやてちゃん！絶対ぜーったい皆受かるよ！！」

「うん…ありがとな　フェイトちゃんなのはちゃん♪」

なのは達がはやてを励ましていたその時、

「おーい！！」

こちらに手を振って向かってくる黒髪の少年…生贄クロノが現れた！！

「お…おぅ　クロノ…」

「待たせたか？…どうしたキョウスケ…顔色が悪いが…？」

「…その理由はすぐ解るさ…クロノ、折れた線香の1本ぐらいは立ててやるから安心して成仏してくれ…」

「なんだそれは！？…ん？なのはにフェイトも一緒だっ…」

―ゾクッ！

ああ…いきなり覇気を放出しましたか…

「…ねぇクロノ君…お願いがあるんだけど…」

「…な…なんだ？お願いって…」

「…そこの部屋…今使ってないみたいだから…そこで命を刈り取…お話しよ？クロノ…」

「フ、フェイト！？どうしたんだ！？てか今物騒な単語を言いかけなかったか！？」

「フフッ…そんな事ないよ　いやだな～クロノったら」

「お、おい！キョウスケ！！　なのはやフェイトに何があったんだ！？また君絡みか！？」

さすが執務官！いい読みしてるな～

―ガシッ！

「さあクロノ君…逝こうか？」

「ち…ちょっと待て！明らかに字が違うぞ！！？お、おい！キョウスケ！！助け…」

―ガチャ、バタン！

「……なぁキョウスケ君…私のせいなんかな？」

「……いや…これは不幸な事故だよ…とりあえず…旅行には行こうか？」

クロノの供養にもなるし…

「せやね……クロノ君、迷わず成仏してな？」

そのすぐ後…管理局本局に大きな破壊音が響いたという…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

振り返れば…何故そこに!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

クロノが生贄に…ハッ!?

「クロノの効果発動!このクロノは闇属性モンスターを召喚する時、1体で2体分となる!!僕はクロノ1体生贄に…ブラックマジシャンを召喚!!ブラックマジシャンの攻撃!黒魔導(ブラックマジック)!!」

『…現実逃避は気がすみましたか?』

「……はい」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

なのはとフェイトがクロノを拉致って数分後…

「…よく生きていたな…クロノ」

無事…かどうかは微妙なボロボロの姿のクロノがあった…

「……ああ、死ぬかと本気で思ったがな…」

そ、そんな攻撃受けてたんだ…

「つか2人とも…」

僕はジト目で実行犯の2人を見て…

「にゃはは～　やり過ぎちゃったの」

「ちょっとだけ…やり過ぎちゃたかな?」

やり過ぎちゃ…って

「まったく…なのはもフェイトも…いつも言ってるだろ?クロノ相手には、ちゃんと半殺し程度にしとくようにって!」

「うん、再起不能はマズイんだよね～」

「私はちゃんと加減してるんだけど…」

「ちょ!?ちょっと待て!君はフェイト達にそんな事を言っているのか!?」

そう言いながら、クロノが何やら真っ青になって詰め寄ってきた

「ん？いや～こう言っておかないと2人とも最初から全力全壊で瞬殺するからな～」

勿論友達としてのやさしさからだよ？ちゃんと手加減するようにって言っているんだし

「……何故半殺しが前提なのか疑問だが…なら！僕を襲わないよう言えばいいじゃないか！？」

「……あっ」

「お前！？今「あっ」って言ったな！？さては今思い付いたな！？というかその事に今まで気付かなかったのか！！？」

まくし立てるようにクロノが騒いでいるが…そっか～　その選択肢はなかったな～…

「……クロノ君、それ以上キョウスケ君に乱暴な事したら…」

「…クロノに新しいマニューバーの的になってもらうよ？フフ…初めてだから加減が効かないけど…」

「あ、それいいかもフェイトちゃん。
私も新しい集束魔法があるから試し打ちの的が欲しかったの～♪」

……ああ、詰んだなクロノ…

「ちょ！？ま、待ってくれ2人とも！！？分かった！！もう彼には危害は加えないから！！だからデバイスを待機状態にしてくれ！！？」

「「……チッ」」

……怖ッ！？

「あはは…なのはちゃんにフェイトちゃん…過激やなぁ…」

はやて…君もそちら側の人ではなかったか！？

「…キョウスケ君、また失礼な事考えとったやろ？」

「い、いやだな～…ソンナコトナイヨ？」

相変わらず鋭いな～…

「ゴホン、え～…八神はやて　なのは達からの要望であった旅行の件だが…こちらとしても、そこまで君の行動を拘束するつもりもないので行ってくれて構わない…というか行ってくれ！！でないと僕の命が危ない！？」

…クロノ…トラウマになったか…

「あはは～…は、はい解りました～」

はやても事の経緯を見た為、今度は断れないよな～…

「よかったね！はやてちゃん！」

「これでキョウスケも一緒に行ってくれるよね？」

「あ、ああ…」

まぁ…これはこれでいいのかな？

「それではキョウスケ、君をこれからダイテツ副元帥の元に案内するから…頼むから大人しくしていてくれよ…」

「あ～…まぁ善処しとくよ」

いよいよご対面か…

「ふ、不安だ…ああ、なのはにフェイト　君達ははやて一緒に帰っていいぞ？」

「ええ！？クロノ君！私達もキョウスケ君と…」

「済まないが…ダイテツ副元帥の指示でキョウスケ1人での面会なんだ…僕も部屋まで案内するだけだし」

何！？ますますあやしさ大爆発だな…

「そっか…それじゃ仕方ないよなのは…」

「フェイトちゃん…分かったよクロノ君」

まっ何かあった場合、僕1人の方が身軽だしな

「あ、そや！キョウスケ君　今日の夕飯は何がええ？」

「ん～…はやてに任せるよ　はやての料理なら何でも美味しいしね」

「そ、そか！／／ほんなら腕によりを掛けて美味しいの作って待っとるな？」

「ああ、楽しみにしてるよ　はやて」

「は、はやてちゃん！？私もお料理手伝うよ！！」

「わ、私も手伝うよ！はやて！！」

急になのはとフェイトも料理を作ると言い出した！？

「「で、キョウスケ（君）に私の手料理も食べて欲しい（の）！！」」

…まぁ美味しい物を食べられればいいけど…

「ほ～…2人とも、それは私に対する挑戦なんやろか？ええで！！その勝負受けたったる！！」

って！いつの間にか料理対決！？

「ほな【第1回誰の料理が1番おいしいか選手権大会】開催や！！」

「「おおーーー！！」」

段々妙に大事になっていくような…

「なら優勝者にはキョウスケを1日好きに出来る権なんてどうだ？」

ってオイクロノ！？テメー何言いやがる！？

「フッ、何…いつものお礼（仕返し）さ」

コイツ…さっきの事まだ根に持ってるな…

「「「クロノ（君）！グッジョブ（や）（なの）！！！」」」

…ああ、どうせ僕に拒否権なんてないだろうな…僕の人権とかって…

「ほな急いで材料買わなあかんな！」

「負けないよ！はやてちゃん！フェイトちゃん！」

「私だって負けないよ？」

…3人とも…火花を散らしていらっしゃるし…

「キョウスケ君、楽しみにしててな？」

「美味しいお料理作って待ってるの！」

「キョウスケ！あの…私、頑張るね」

―タッタッタ…

そう言い残し、3人は転送ポートへ向かっていった…まぁ、この戦

い…シャマルが参加してないだけよしとするか…

「じゃあキョウスケ、副元帥がお待ちだ　行こうか？」

「…ああ」

いよいよ…ご対面か…一体何者なんだ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

クロノの案内で、とある部屋の前まで来た…

「ここだ、この部屋にダイテツ・ミナセ副元帥がいらっしゃる…そそうのないようにな？」

「はぁ…分かったよ」

原作には居ない存在…その正体がようやく解るのか…

―コンコン！

「クロノ・ハラオウンです！神代恭介を連れて来ました」

〔解りましたクロノ執務官、では彼に入って貰って下さい〕

…ん？今の女性の声…どこかで聞いたような…？

「ではキョウスケ、ここから先は君1人で入ってくれ」

「ああ…ところでクロノ、今の声の人は？」

「今のは副元帥の専属秘書のレフィーナさんだ」

…レフィーナ　ねぇ…

ま、部屋に入れば解るか…

「…神代恭介、入ります」

―ガチャ

僕は意を決し部屋に入ると…1人の老人と若い女性が…

「…久しいのキョウスケよ」

「お久しぶり！キョウスケ君♪」

…僕の目の前に見知った顔が…

「…って！あんたらかい！！？」

僕をこの世界に送った神とスクルドさんが居た…

なんでさ…

Side Out

何気に世界の危機！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

ダイテツ副元帥と名乗る人物と面会すると…

なっ！？神ぃぃぃ！！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

…なんでさｏｒｚ

「久しいしの～　さくらを与えて以来じゃの～」

いや！それ以前に！！

「とりあえず！何でここに！！？しかも副元帥って何さ！！！？」

と、ツッコミを入れてやった！

「ふぉふぉふぉ…それは、「それは神様が不祥事を起こしたからですよ！」…ス、スクルド君…そんなバッサリ言わなくても…」

「…不祥事？なんです？スクルドさん」

…何か聞くと不幸になりそうな気がするが…

「キョウスケ君、この世界に来て何か…ぶっちゃけスパロボ的なイレギュラーな存在に会ったりしてないかしら？」

…イレギュラーって…

「…思いっきり心当たりが…闇の書のアインストや量産型Wシリーズとかですか？」

リリカルにスパロボのキャラが居るのは異常だよな～

「…キョウスケ君、その原因は…この駄神のせいなんですよ」

……は？

「えっと…スクルドさん、どうゆう事ですか？」

「実は…神様があなたをこの世界に送った後…神様が暇潰しに【スーパーロボット大戦ＯＧｓ】を下界から取り寄せて天界でプレイし

ていたんですけど…」

…ヲイ、その時点ですでにツッコミ所が満載だぞ!?

「…実はそのゲームデータの一部を…この神が誤って貴方のいるリリカルなのはの世界に落としてしまったのよ…」

なっ!?

「いや～すまんすまん。お茶をこぼした拍子にのぅ…」

お茶って…つかコイツ、反省の色なし!?

…じゃあ何か?あのアインストやWシリーズ出現の原因は…コイツなのか!?

―プチッ

「…インフィニティ、Ｓｅｔ　Ｕｐ」

『オーライ、裏モード起動　コード【神殺し】」

―ピカァ!

「ふぉ!?ま、待つのじゃ!?というかなんじゃ!?その物騒なモードは!?」

「問答無用だぁ!!テメー!!叩っ斬ってやる!!」

「ぬぉ!?ス、スクルド君!!助けてくれ!!」

「自業自得ですよ！！まったく」

「さぁ…お前の罪の数を数えな！！」

「N～～～～ｏ！！！？」

―ザンザンザンッ！バキガキドカッ！

「ぐふぉ…ふ、不幸じゃ…ガクッ」

「ふぅ…悪は滅びた…」

こうして僕は諸悪の根源を駆逐するのであ「ま、待つのじゃ…は、話しを聞いてくれ…」

…チッ　まだ生きていたか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「で、話しとは何だ？」

一応話を聞く事になったので気を取り直して尋ねると…

「実はの…今回の件の影響で、ワシが管理しておるこの【リリカルなのは】の世界が崩壊する可能性があるのじゃ…」

いきなり色々ぶっ飛ばして崩壊発言!?

「つか崩壊って!?何でだよ!!?」

「…あの闇の書の暴走プログラムから生まれたアインストレジセイアじゃ…アレの能力は危険で未知数…しかも、闇の書の暴走プログラムの力まで取り込んでおるしの…」

た、たしかに…アインスト＋闇の書暴走プログラムって…極悪なコンボだな…

「で、事態を収拾する為に…ワシは自分とスクルド君の分身をこの世界に割り込ませたのじゃ」

「なぁ…元々ゲームデータだったんだから…だったら、そんなまどろっこしい手間をかけなくて…パパッとそのゲームデータとかを取り出したりは出来ないのか?一応神様なんだろ?その位は…」

神って言ったら全知全能だろ?

「キョウスケ君、我々神族はいかなる世界にも直接的な干渉は出来ないのですよ～　今回のは事故という事で色々と便宜が計られていますが…

先程も言いましたが、この体も本体ではなく一種の人形に私達の思念体の一部を憑依させてる状態で…こういう仕様で力を制限して何とかこっちに干渉出来たのよ～…まぁホント裏技みたいな物ね」

裏技って…あれ?

「ちょ、ちょっと待て!?　神が直接干渉出来ないなら…どうやっ

て事態を収拾するんだ？」

もしかして…スクルドさんが！？

「ふぉふぉ…その為の副元帥じゃよ。」

神のこの不気味な笑い…嫌な予感しかしないのは気のせいか！？

「キョウスケ、おぬしにはワシ…ダイテツミナセ副元帥直属の独立部隊所属となっともらってイレギュラーに対応してもらいたいのじゃよ…」

って！それってつまり僕に丸投げっすか！！？

「ワシらとしても心苦しいのじゃが…おぬしに動いてもらうしか手がないのが現状なんじゃ…」

「はぁ…」

「勿論、ワシらも出来る限り協力はするぞい？何せ副元帥じゃから何かと融通が効くしの～」

な、なんか微妙に危ない発言！？

「おぬしも薄々気付いておるかもしれんが…この世界は、原作とは似て非なる世界になりつつある…何がきっかけで世界が崩壊するか…」

神様が何処で覚えたのか、碇ゲンドウ的なポーズで格好つけているが…

「つか、カッコつけてるがアンタのせいだよな!?」

「うぐっ…ま、まぁの～…」

まったく…本当に神か疑わしいな…

「…はぁ、分かったよ　確かに世界の崩壊ってのはほっとけないし…今の僕には守りたい人達もいるしな」

こっちで出来た家族や友達とかな

「ふぉ!?引き受けてくれるか!?」

「仕方ないだろ…で、具体的にはどうするんだ?」

「とりあえず…まず入局テストは受けてくれんかの?」

「は!?テスト?今更何でさ…」

「ちょっとした戦技テストよ～
大丈夫、テストといっても…ちょこっと本気で模擬戦してくれるだけでいいのよ?」

…ちょこっと本気、ねぇ…

「時にキョウスケよ…シンクロユニゾンはフェイトとしかしておらんのか?」

「えっ!?まぁそうだけど…いきなり何?」

「うむ…模擬戦には、シンクロユニゾンで行ってもらいたいのじゃが…」

「えっ!?シンクロユニゾンを…?」

「実は…シンクロユニゾンは、こちらの【リリカルなのはの世界】以外の力に対抗する為に装備した物なのじゃよ…フェイトとシンクロユニゾンした時の武装などスパロボ系じゃったろ?あれは、スパロボ系の敵にはスパロボ系じゃ!と思っての(笑)」

(笑)って何!?

「まぁ…確かにフェイトとのシンクロ時のバルデッシュって斬艦刀っぽかったし…でも今さくらはメンテナンス中だし…それにパートナーが…」

フェイトは地球に帰っているしな~

「さくらの事なら心配無用じゃ…スクルド君」

「はい…」

呼ばれたスクルドさんは目を閉じ、何やら呟いている…

〔Ｇａｔｅ　Ｏｐｅｎ〕

―グォン!

スクルドさんが呪文らしき物を唱えると、空間に扉が現れた!?

「こ、これは？」

「これは異なる場所を繋ぐ扉なんです。」

え～と…つまり…

「……どこでもド「キョウスケ君！それ以上は禁則事項です！！」

そ、そうですか…」

僕の思考には、某青いタヌキの事が頭に過ぎったが…この事も口には出さない方がいいな…

「では神様、これからキョウスケ君の別荘でさくらちゃんをメンテ&

…はは、ホントご都合主義や…

「まぁその代わりと言っては何じゃが…勝手に新機能は付けさせてもらったがの（ボソッ）」

「…ん？何か言ったか？」

「い、いや　何も言っとらんぞ？
…さて、さくらはスクルド君に任せて…次はシンクロユニゾンのパートナーじゃな…確かヴィータとシャマルがまだ本局に居った筈…どれどれ」

そう言うと神はどこかに連絡をしているようだが…

「…ああそうじゃ、ヴォルケンリッター達の面接が終わったらワシの所に…うむ、迎えにはクロノ執務官を向かわせる…後、第三訓練室を…うむ…」

…今思ったが…テストって今からなのか！？

「では頼んだぞ！」

「な、なぁ…テストって…今すぐなのか？」

「ふむ…そうじゃが？
善は急げというしの～フォフォフォ」

…って事は、ヴィータかシャマルとシンクロユニゾンするって事か…

…なのはやはやてが聞いたら暴れ出しそうだな…

side Out

模擬戦！キョウスケＶＳクロノ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

神様のせいで世界の危機が迫っていた！！

「ワ、ワシのせい！？」

「当たり前だ！！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――第三訓練室――

キョウスケｓｉｄｅ

あの後、面接を終えたシグナム達と合流して訳を説明（入局テストで模擬戦やる事になったから手を貸してくれと）し、この訓練室に

やってきました！

「悪いなヴィータ、僕のテストに付き合わせて」

「別にいーってことよ！　私もあのメンドクセー面接でストレスが溜まってたんだ！！ここで憂さ晴らしさせてもらうぜ！！」

気合い入っているな～ヴィータは

…余談だが、シンクロユニゾンで模擬戦とすると話した時、ヴィータとシャマルどちらがユニゾンするかで2人で話し合うように促した後、僕が一旦席を外して戻ってきたら…何故がシャマルがヴィータを見ながら震えていたのは…何故？

ま、まぁそれはともかく…この模擬戦のヤラレ役となった不幸な人物…

「クロノ！。骨は拾ってやるからな」

「き、君達には手加減という言葉は知っているのか！？」

若干テンパっていたクロノがそこに居た…

「えへへっ、キョウ君と久々のユニゾンだね～♪」

そして、さくらも神族特製プログラムで完全復帰！絶賛売り出し中だ！

〔ではキョウスケ君、ユニゾンして下さい〕

スクルドさんのアナウンス訓練室に響き僕は…

「じゃあさくら…」

「うん！」

「「ユニゾン・イン！！」」

―ピカッ！

さくらとユニゾン！　さらに…

「いくぞ！ヴィータ！」

「おう！！」

「「シンクロ・イン！！」」

―ピカッ！！

ヴィータとのユニゾンでバリアジャケットは紅く、両肩には大型のプロテクター、髪も燃える用な紅に変わっていた…

「…ってこれ…アルトアイゼンかよ！？」

そう！その証拠に、右腕には特徴的な武装の杭打ち機…リボルビング・ステーク…？

あれ？よく見るとステーク本体にグラーフアイゼンのハンマー部分が融合している…？

「（キョウ君、そのステークにはグラーフアイゼンとインフィニティ君が融合しているから）」

説明ありがとう！さくらさん

どうやらステークのベースはグラーフアイゼンのラケーテンフォルムのようだ…

「ヴィータ、初シンクロだけど…大丈夫か？」

『（…ワリィ、少し問題が…）』

えっ！？もしかして…融合事故！！？

『（なんつーか…き…）』

き…？

『（気持ち良すぎて…／／

恭介と…ようやく１つになったと思ったら…んっ／／）』

…いや、これ１８禁ぢゃないよ？（まだ）

とりあえず…しばらくほっとくか…

「クロノ！とりあえずこっちの準備はいいぞー！！」

「あ…ああ…」

ん？…何かクロノ…顔色悪くないか？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

クロノＳｉｄｅ

僕はダイテツ副元帥の命令で、シンクロユニゾンしたキョウスケと模擬戦をする事になったのだが…な、なんだ！？あのデタラメな魔力は！？

闇の書最終決戦の時には気付かなかったが…こうやって対峙すると解る…

少なくてもＳＳＳクラスの魔力量だ！

…おそらく戦闘になれば更に跳ね上がるだろう…

というか…アイツ、ちゃんと非殺傷設定にしているんだろうな！？

…ああ父さん、僕を護ってください…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケSide

「…さて、じゃあ行くか！」

―ビーーーッ！

〔戦闘開始〕

―ダンッ！

開始合図と同時に僕はクロノに向かって突進！

「くっ！」

《Blaze cannon》

―ズカァァァン！！

クロノは砲撃で迎撃を計ってきたが…

―ドカァァァ！！

クロノの砲撃が直撃し、辺り一面に煙が立ち込めた

「…手応えはあったが…」

クロノが警戒しながら煙を見ている…

―ヒュン！！

「なっ！？無傷！！？」

煙から無傷で現れた僕にクロノが驚いていた！

「…アルトの装甲、舐めるなよ！」

『（…つかムチャすんなよ恭介！！あの位余裕で回避できんだろ！？）』

「ワリィ、ヴィータ…でもこのアルトの特性を実感したかったからさ～」

「（キョウ君、ダメージゼロ！マジックコート正常稼動中だよ！）」

ヴィータとのシンクロユニゾンの特性…装甲防御に特化！しかも魔法を防ぐバリア【マジックコート】常時展開のおまけ付き！

…なのはのスターライトブレイカーも防げるインチキ仕様だそうだ

…よかった！これでなのはのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを防げる！！

――――八神家――――

「はくちゅん！！」

「なのは…風邪？」

「あかんで～なのはちゃん。明日から旅行なんやし…風邪うつさん

といてな？」

「ふぇ！？ち、ちなうよ～…誰かが噂してるのかな～？…あ！」

「どうしたの？なのは？」

「…何か今、すっごくスターライトブレイカーの威力上げたくなったの…」

「えっ！？な、なんで？」

「今のままじゃダメだって…誰かが囁いて」

「なのはちゃん…でんぱ…なん？」

「ちょ！？何！？でんぱって～！！？」

「いや～、とうとうなのはちゃんが妖精さんと交信出来るようになったんかな～と」

「な、なのは？病院行こ？保険証持った？」

「ふぇぇぇ！？はやてちゃん！フェイトちゃん！ひどいよ～！！」

――――訓練室――――

「…何か今、なのはの魂の叫びが聞こえたような？」

『（はぁ！？アイツの声なんて聞こえねーぞ？）』

…気のせいか？

「（キョウ君！！来るよ！！）」

「食らえ！！」

《Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｂｌａｄｅ　Ｅｘｅｃｕｔｉｏｎ　ｓｈｉｆｔ》

クロノの周りに無数の魔力刃が浮かび…って！？

「クロノ！おまっ！？何の冗談だ！？」

あれは…シャレにならない数だぞ！？

「…君に手加減して勝てるとは思わないからな…悪いが本気で行かせてもらう！！行けっ！！」

―ヒュン！ヒュン！！

って、これ戦技を見る模擬戦だよな？アイツ…主旨忘れてねー？

「…だったらこっちも遠慮しねー！ヴィータ！！」

『（おう！迎撃準備ＯＫだ！！）』

こちらに向かってくる魔力刃…なら数には数だ！！

「クレイモア！！」

―ズガガガガッ！！

肩のプロテクターからベアリング弾…ではなく、魔力を高密度に圧縮した魔力弾を広範囲に打ち出した！

「なっ！？」

まさか迎撃されるとは思っていなかったのか、クロノに一瞬のスキが！

―ダンッ！

そのスキを付いて僕はクロノに突進！右腕を構え…

「くらえ！ステーク！！」

「くっ！！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

―ガキッ！

とっさにクロノはプロテクションを張りステークを受け止めるが…

「カートリッジ！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！ドキュ！

カートリッジをロード！！

…普通ならカートリッジで瞬間的に魔力を高めるのだが…

この状態でのカートリッジ使用…どうやら１発１発が、そのままステークの破壊力に上乗せされるようで…結果

―バキィ！！ドカァ！！

「ぐはっ！！」

―バキィィィ！！

一発目のカートリッジでプロテクション破壊、二発目のカートリッジで勢いよくクロノにヒット！

クロノは反対側の壁に激突してしまった…

『（……あ～…恭介…）』

「…非殺傷だから…多分大丈夫…かな？」

…バーストモード使っていたら逝ってたかもな…クロノ…

〔クロノ執務官、戦闘不能。勝者、神代恭介！〕

…とりあえず回復魔法位はかけてやるか～

Side Out

うっかりにも程がある！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

クロノとの模擬戦で勝利した僕…クロノ、安らかに眠っ「おいっ！！勝手に殺すな！！」…あ、まだ生きていたか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――医務室――

キョウスケＳｉｄｅ

あの後、僕はクロノにケアルガをかけてたのだが…一応大事をとってクロノを医師に診てもらった…

「…まったく、死ぬかと思ったぞ！！」

そう文句を言う包帯をグルグル巻きにしているクロノ君！

「いや～ワリィ、手加減間違えてさ～」

悪気はないよ?ちょっとテンション上がっただけで～

「いや～ホント危なかったね～クロノ君!
プロテクションどころかバリアジャケットまで貫いていたんだから～」

いや～、カートリッジであそこまで威力上がるとは…って!?

「エイミィさん!?いつの間に!?」

ホント神出鬼没だな…

「えっ?いや～レフィーナがキョウスケ君とクロノ君が模擬戦やるから見に来いって言うからさ～♪」

…ヲイ

「…エイミィさん、スクル…レフィーナさんとお知り合いで?」

「そうだよ～　レフィーナとは最近知り合ったんだけど、何か意気投合しちゃってさ～
今じゃ親友だよ♪」

…いいのか?神族が原作キャラと親友って…

「へ、へ～…そうなんですか…」

まぁ…メインの主要キャラじゃないからいいのかな?

「って！ちょっと待てエイミィ！バリアジャケットまで貫いていたって…本当なのか！？」

何やらクロノが顔を真っ青にして尋ねているが…

「えっ？ホントだよ～

いや～、あの威力で非殺傷だっていうんだからビックリだよね～」

…まぁ、その主な原因はカートリッジだろうな～。

使った本人もビックリだし

「そういや…回復魔法かける時、確かアバラが数本折れていたが…

ま、気にするな」

ちゃんと治したんだし

「いや！！気にするに決まってる！！てか、それは既に非殺傷か疑わしいぞ！！！」

いやだな～　正真正銘の非殺傷だったよ…多分

「まぁ、とりあえず生きているんだから…何事も経験だぞ？」

「そんな生死をさ迷う経験なんかしたくない！」

…まぁ、そ～だろうな～…

「さて、クロノの見舞いも終わったし…エイミィさん、後はお願いします

僕はレフィーナさんに呼ばれているので」

「OK♪まっかせなさい！！ちゃーんとクロノ君の事は弄んでおくからね～」

さすがエイミィさん！解ってる（笑）

「おい！エイミィ！！僕は一応ケガ人なんだが…」

「な～に言ってるのクロノ君！　殆どキョウスケ君が治してくれたんだし～…クックック～」

エイミィさんは、面白い玩具を見つけたような目でクロノを見て黒い笑いをしていた…

…ああ、エイミィさん…Sっ気全開だな～

「…では、ごゆっくり～」

「なっ！！？お、おいキョウスケ！！助け…」

―バタン！

クロノが何か言っていたような気がしたが…まぁ、これがきっかけで2人の仲が進展するかもしれないし…結果オーライ…だよな？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――待合室――――

―ガチャ

「失礼します」

待合室に入ると、さくらとヴォルケンズが談話中だったが…

「あれ？レフィーナさんは…まだ来てないんだ」

ここに来るよう呼びだした本人がまだいなかった…

ちょうど近くにいたシグナムに尋ねると

「ん？いや、まだ誰も来ていないが…ちょうどいい、神代…実は頼みがあるのだが…」

シグナムが頼み事って珍しいな…

「頼み事って？」

「今度ぜひ模擬戦を！！」

…あ～…そうだった、シグナムはこーゆー人種だった…

バトルマニア…

「…キョウ君～、シグナムさんがシンクロユニゾンして戦ってほし

いって…」

さくらがお疲れ顔でダウンしていた…

「勿論さくらやヴィータの承諾は取ってある！！
後は神代がいいと言ってくれれば！！さあ！！神代！！私と心踊る戦いを！！！」

ち、ちょ！？シグナムさん！！目が恐いっす！！

つか、さくらやヴィータの承諾？？
僕は2人に目線を送ると…

「うっ……（サッ）」

「にゃ……（ササッ）」

2人に視線反らされた！？

「…をい、2人とも…」

「ご、ごめんなさいキョウ君～！！だ、だってシグナムさんの迫力には…」

「…まぁ…なんだ、その……すまねぇ…」

…シグナムの覇気に負けたんですね…

「…はぁ、解ったよ…時間があったらちゃんと模擬戦するから…それでいいかシグナム？」

ここで断ってもこのバトル狂は引き下がらないだろうしな…まぁ1回戦えば気が済むと思うし…多分

「ホントだな!?フッフッフッ…あの素晴らしい力と戦える…血湧き肉踊る思いだ!!!」

…ヤバイ…完全に目がイッてる…

「…キョウスケ君、治療は私に任せて下さいね」

そうならない事を祈りたいよ…そう思っていると…

―ガチャ

「やっほー♪キョウスケ君居る?」

スクルド…もとい、レフィーナさんが現れたしかもハイテンションで!?

「…恭介、誰だ!?この年増は?」

いきなりレフィーナさんを睨みつけるんすか!?ヴィータさん!?

「…あ、ヴォルケンリッターの方も居たのをすっかり忘れてたわ…」

って!?呼び出した本人が忘れんな!!

「…それに私はまだ１４歳です！（設定は）」

…かなりサバよん「何か考え事かしら？キョウスケ君？」

「…イエ、ナニモ」

何やら凄い覇気が！？いや、神気か？

「…十分年増じゃねーか…私なんて（見た目年齢）まだ８歳だぞ？」

―ピキッ！

あ…何かにヒビが入った音が…

「…あ～ら、総稼動年齢が数百年以上の貴女よりは若いわよ～？」

…そこはあなたも変わらないんぢゃね？

…とツッコミは入れないが…

「んだと！？恭介！！コイツ誰だよ！？」

さて、これ以上はこの部屋が壊滅しかねないからな…

「ヴィータ、この人はここの副元帥の秘書をしているレフィーナさん…模擬戦の測定してくれてた人だよ」

「……やけに恭介に馴れ馴れしかったな…知り合いか？」

…まぁ…前世と来世の狭間で知り合ったんだけどね…

「んふふ～　そりゃ～ね～　何せ今後、キョウスケ君の部隊の補佐をするんだし～」

「「「「部隊！？」」」」

ヴォルケンズ達が驚いているが…まぁそうだよな～

入局してすぐ部隊持つって異常だし…

「キョウスケ君はこれからダイテツミナセ副元帥直属独立部隊【ＦＡＩＴＨ】所属になります…勿論私もよ♪」

わ～…あからさまに部隊名ってアレだよね？種運命的な…

「…というか、入局決定？」

…まぁ出来レースだな～と内心思っていたけどさ…

「あ、勿論文句なしの合格よ？」

だよな～…

「あの～…ちょっといいですか？」

シャマルがおずおずと手を挙げた

「何かしら？シャマルさん？」

「その独立部隊って…どんな任務を？」

「主な任務については機密です。ですが、独立部隊と名乗っているので解ると思いますが…基本はキョウスケ君独自の判断で自由に行動できる権限があります。

また通常の部隊指揮官より上位の権力を持ち、作戦立案及び実行の優先的な命令権もあります。

しかも発言力も副元帥と同等の力があります。」

…うわっ！？どこかのロンド・ベル隊以上じゃね？

「……それほどの権力を何故今、入局が決まったばかりのキョウスケに？」

今度はザフィーラがツッコ…もとい、尋ねてきた

…まぁ、端から見たらそうだよな～…一般局員に成り立てのヤツがこんなトンデモ権限を…

「それは…キョウスケ君の力が必要だからです！あのアインストを倒す力が…」

って！？

「ちょ！？レフィーナさん！！何サラッと機密バラしてんすか！！？」

「…あっ！？い、いっけな～い…つい……テヘッ♪」

テヘッ♪ぢゃねーよ！！

「…恭介、アインストって…何だ？」

「あ～……その…」

ヤバイ…どうやってごまかすか？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

祝福の…あれ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

スクルド＝レフィーナがサラッとアインストの事を！？

「てへっ♪ついうっかり（笑）」

機密の意味ね～ぇ！！！そして反省の色がねぇ！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「…恭介、アインストって何だ？」

ヴィータがこちらをジッと見つめ尋ねてくる…

ううう…どうすっかな～

「（ねぇキョウ君、皆にも話した方がいいんじゃないかな？）」

さくら…はぁ、仕方ない

「…まぁ、あながち無関係って訳じゃないからな…特にヴィータやシャマルには…」

「なっ！？おい神代！！私は無関係なのか！！？」

「……我も無関係か？」

シグナムは激昂し、ザフィーラは軽く落ち込んでた…

いや、だって…なぁ？

「お、落ち着け！言い方が悪かった！！
少なくても仮契約者の協力が必要って意味だからさ！」

「む…そ、そうなのか？」

「……なるほど」

はぁ…とりあえず収まったか…

「実は…闇の書から生まれたあのアンノウン…アレの名称がアインストなんだ」

「何！？あの時のヤツか！？」

「そうだよヴィータ、さらにアインストには確認されただけで数種

類の個体が確認されている…」

「何だと!?あれ1体ではなかったのか!!?」

「もちろん僕たちが見た個体は現在あの1体しか確認されていないが、その下位クラスと思われるアインストが他の次元世界に現れているらしいんだ…」

…まぁ、いつかは出現するんだし…あながち嘘じゃないよ…な?

「……被害はどの位でているのだ?」

「えっと…とりあえず表だっての被害は微々たる物ないんだが…何を目的で行動してるかは現在不明なんだ」

後半のはホント!あのアインスト…何が目的なんだ…?

「…目的不明のアインスト…んなモン管理局総出で攻めりゃ倒せんだろ?」

「どうやらそう簡単な話しじゃないらしいんだ…
一般局員ではおそらく下位クラスすら歯が立たないと思う…エースクラスでやっと互角とか相打ちか…」

「なっ!?…た、たしかにあの闇の書のアインストは膨大な力を感じたが…下位クラスでも凄ましいのだな…」

「だけど、僕の力やシンクロユニゾンなら…あの闇の書のアインストにも対抗できた…　それで、今回の話しが来たんだ」

「なるほどな…恭介も大概チートだかんな」

「……それは褒めてるのかな？ヴィータ？」

「…ま、まぁ…それは置いといて、」

…置いとくんかい！？

「それなら私やはやてもその…【ＦＡＩＴＨ】ってのに入った方がいいのか？」

あ～…どうだろう？将来的な事もあるし…ここでヴィータやシャマルはともかく、はやてもＦＡＩＴＨに入れたら機動六課フラグ無くなるか？

「…いや、当面は僕だけで大丈夫だよ」

「…でもよ…」

「ヴィータさん、ＦＡＩＴＨに入隊するには…最低でも魔導士ランクＳＳＳは必須条件です。残念ながら今の貴女では…」

そんな条件…あったのか？

「…じゃあオメーはＳＳＳなのかよ？」

…何だろう…ヴィータとレフィーナさんの視線の間に火花が散ってるようにみえるが…？

「私は副元帥に命令されて所属するので…問題ありません。それに、

私の仕事は情報収集はもちろんバックアップ等になりますから…基本非戦闘員です」

…スクルドさんならアインストにも対抗出来そうだけと…って、それ所じゃないな…

「まぁヴィータ、まだ適性試験も受けてないんだろ？それに…はやてを入局早々危ない事には巻き込みたくないんだ…」

「恭介…」

「それに…皆の力が必要な時は、僕がＦＡＩＴＨの権限で召集かければ皆が何処の所属でもすぐ一緒に仕事できるし…そうでしょ？レフィーナさん？」

それ位の権力…あるよね？

「ええ…最優先で出向という形になるわね」

「だから、ね？それに…はやてだって何かやりたい事があるだろうし…」

「……判ったよ…だけど！！何かあったらすぐに呼べよな！恭介！！」

「ああ、頼りにしてるよヴィータ（ニコッ）」

「うぇ！！？お、おうっ／／！！」

とりあえず…機動六課フラグは大丈夫かな？

「でもこれでキョウスケ君とは別々になるんですね～…淋しくなるわね…」

シャマルはガッカリしているけど…

「シャマル…家に帰れば一緒に居られるんだから…」

「「「「……あ！」」」」

…なにその「あ！」って！？

「……皆…まさかその事忘れてた？」

「そ、そんなことある訳ねーじゃねーか！！な、な？シグナム！？」

「う、うむ！勿論失念などしとらんぞ！？なぁシャマル！？」

「えぇ！？は、はい！勿論ですよ～　ザフィーラも忘れてないわよね～？」

「……（コクコク）」

４人は否定しているが…完全に忘れていたな…

「じゃあキョウスケ君とさくらちゃんは、これから正式な辞令をダイテツ副元帥から受け取って下さいね。ヴォルケンリッターの方々は今日は帰宅してもらって大丈夫ですよ？」

「そか～
じゃあシグナム達も家に帰ったら旅行の準備しておいてくれないか？」

「ああ、わかった」

「へへっ♪旅行♪旅行っ♪」

「ヴィータちゃん、楽しそうね～」

「おう！初めての旅行だかんな！」

…う～ん、僕の別荘はカウントされないのかな？

「じゃあキョウスケ君さくらちゃん、行きましょうか？」

「「はい」」

僕たちは待合室を後にした

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

んで、今ダイテツ…まぁ神様の居る部屋に来たのだが…

「…とりあえず、叩っ斬っていい？」

「ふぉ！？ま、まつのじゃ！？」

僕たちが部屋に入ると神様は…Ｗｉｉスポーツをやっていたのだ…

「こ、これはじゃな…そう！健康の為の運動じゃ！！決して遊んどった訳ではないぞい！？」

はぁ…ホントに神様か疑わしくなるよ

「ゴホン…その…何じゃ、スクルド君にＦＡＩＴＨの事は聞いたかの？」

強引に話題すり替えた！？

「…まぁ、トンデモ権限ってのは聞いたよ…」

「うむ、それに伴いキョウスケにはこれを…」

そう言うと神様はバッチを差し出してきた

…僕の目がおかしくなければ…

「…まんまＦＡＩＴＨのバッチだな」

種運命と同じデザインのバッチだった…少しは捻れよ！？

「ぶっちゃけデザイン考えるのも面倒ぢゃ！」

ホントに丸投げ気味だな！

「それと…これもやっと完成したぞ」

神様がさらに小さな箱を取り出した

「これは…？」

僕はその箱を開けてみると、はやてのシュベルクロイツの待機状態に似た十字架の形をしたデザインの指輪が１つ…

「まぁ、物は試しじゃ。指輪を付けてみて魔力を送ってみるのじゃ」

「ああ、じゃあ…」

僕は指輪を付けて魔力を込めると…

―キィィィン！

指輪が光り、辺りを照らし出した

光が収まると…そこに居たのは…

「…リインフォース？」

リインフォースがそこに浮かんでいた

「…魔力ライン再構築…確認しました
おはようございますマイマスターキョウスケ」

「あ、ああ　リインフォース…なんだよな？」

「はい、そうです
…どうしたのですか？」

…どうしたって…これは…

「リインフォースさん…大人モードなのに…ちっちゃい？」

そう！さくらが言った通り、リインフォースは元？の姿なのだが…サイズがツヴァイの様にミニマムサイズなのだ！？

「ああ、この体ですか。状況に応じて変化させる事が可能になりました。」

―ピカッ！

そう言うとまたリインフォースが光に包まれ…現れた姿は元の大人モードのリインフォースだった

「どうですか？他にも今のマスターの姿に合わせた子供モードにもなれます」

は～…多種多様に変身？出来る様になったんですね…

「んふふ～　驚いた？キョウスケ君？」

「えっ？スクルドさん？」

「リインフォースさんに、デバッグプログラムを使ってデータ整理したら…かなり容量が空いていたから、神様に言われた新機能の他にも色々機能追加しちゃった♪」

…今サラっとトンデモ発言してないか？

「つか新機能!?というか、リインフォース!体の方は大丈夫なのか!!?」

なんかバ神ーズのノリで色々変な事されてね!?

「はい、色々とマ改造…調整されましたが、身体の方は問題ありません…
それと、貴方の事も神様に聞きました」

「えっ!?か、神様って…」

僕が神様達の方を向くと…

「ああ、彼女には我等の事を話したぞ?」

何その今更何を言ってる的な顔は!?

「ホント今更ですよ~キョウスケ君♪」

ぼ、僕に味方はいないのかぁ!!!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

『…さくら、最近私の出番…ないですよね？』

「えっと…私だって最近まで出番なかったし…」

『その上リインフォースまでマスターのデバイスに…マ、マスイ！！このままでは本格的に出番が！！？』

「だ、大丈夫だよインフィ君！

…多分」

『クッ！これも作者が出番を増やさないからです！！大体作者は書きながら思い付きで書いているらしいですから無計画なんですよ！』

「イ、インフィ君…そんな事言ったら…作者さんだって頑張ってるんだから…」

『頑張ってるんだったら私の出番を増や…』

―パキッ！

『……』

「イ、インフィ君？」

作：うるさいからＡＩダウンさせました

ったく、久々に口開いたら作者批判ですか…出番さらに削ってやろうか…

「あはは…インフィ君、口は災いの元だよ？」

予兆

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

インフィニティが創造主（作者）批判し怒りを買い、天に召さ『ちょ！？マ、マスター！！おまけ話しを真に受けないで下さい！！』

あ、無事だったんだ…

「えっと…リインフォースさんにも、私達と神様の関係がばれちゃったんだよね？キョウ君」

ああ…そうだった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「えっと…リインフォース、神様って」

「はい、キョウスケが転生して来た事もこの世界が…物語のとしてキョウスケの世界で語られていた事も聞きました…正直驚きですが

…」

うわっ！！全部バレてーら…

「…をい、バラしてよかったのか？神様よ」

ジト目で神様を睨むと

「ま、まぁ…リインフォースは今後お主専用デバイスとなるからの…それに我々の加護（マ改造）を受けたのじゃから話さん訳にはいかんじゃろ…」

今サラっと副音声でマ改造って認めたよな！？

「…まぁ、別にいいんだけどさ…でだ！さっきリインフォースに変な機能付けたとか言ってたな？」

「ふぉ！？変な機能とは酷いの～何たいした機能ではないぞよ？」

「どんな機能なんだ？」

「まずの指輪じゃが…リインフォースは通常その中におるのじゃ…魔導書を持ち歩くのも不便じゃろ？」

…一応次元空間に収納スペースあるんだけど…？まぁいいか

「次にじゃ！キョウスケも見た通り身体変化機能付きぢゃ！リインフォースの意思で子供～大人モードになれるのは勿論じゃが、ミニマムモードにもなれるのじゃ！！」

ミニマムモード以外は僕と同じか～

僕も身体変化できるし

「さらにじゃ！リインフォースには…なんとえっちぃ事が出来る機能が追…」

―スパーーン！！

「へぶしっ！？」

「「何妙な機能つけてるんじゃ（ですか）！！」」

僕とスクル…この場はレフィーナさんか…は、どこからか出したハリセンで神の頭をひっ叩たいた！

「ぬぉびぉ！？い、痛いではない…か…」

そしてレフィーナさんに至っては、さらに神様に黒いオーラを出しながら近付いて…って恐っ！？

何！？このドス黒さ！？

「…カみサマ？私ニ渡したアのプロぐラムにそんナ機能入れてタんデスネ？」

…な、何か言語がめちゃくちゃなんですが…

「す、スクルド君！？お、落ち着こうじゃないか！？」

「…こ…これが落ち着いていられますか！！タダでさえキョウスケ君の貞操が危ないのに！！コレ以上何ライバル増やしてんですか！？」

な、なんかとんでもない事口走ってね？

「それに！！キョウスケ君の貞操を奪うのは私です！！」

…そして自重しようねレフィーナさん…

――――数分後――――

何とか落ち着いてくれたレフィーナさん…

「ご、ごめんなさい／／取り乱しちゃって…」

「い、いえ…」

錯乱していた時の事を思い出して真っ赤になってるレフィーナさん…

「あの…キョウスケ。」

「あ、ああごめんリインフォース…何だい？」

話題の中心だったリインフォースも顔を赤らめ…赤らめ？…何で？

「あの…私は…そういう知識には疎いので…その…リードしていただければ…こ、今夜にでも…／／」

―ピシッ！

その瞬間、現場の空気が凍てついた…

「だ、ダメーーー！！」

いち早く回復したさくらが大声で叫んだ！？

「ダ、ダメ！！絶対ゼーッタイだめー！！
キョウ君は…キョウ君の初めては私が貰うんだから！！」

―ピシッピシッ！！

さらに現場の空気が凍りついた…

つかさくら！？アンタまで何暴走してんだ！？

「…仕方ありません、なら私はさくらの次で構いません」

いや！？何か色々間違ってますから！？

「ふぉふぉ～　さすがキョウスケ、モテモテじゃの～」

「こ、この騒ぎの張本人が何言ってるだーーー！！インフィニティ！！カートリッジ！！」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ（よ、よかった！出番が！）』

―ドキュ！ドキュ！

「さあ…神狩りの時間だ…」

「ひょ！？ち…ちょ！？」

「ブラスト…シグヴァーーン！！」

―ドガァァァン！！

こうして悪は滅びさった…

「ま…まだ生きとるわい…ガクッ」

ちっ…しぶとい…

余談だが、後ろでさくら・リインフォース・レフィーナさんが真っ青になって震えていたそうな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

あの後始末を終えた後（結界があったので部屋自体には被害はなかった）何とか落ち着いたさくらとリインフォース…あとレフィーナさんも…

「よし、さくらにリインフォース！帰るぞ」

「「Ｙｅｓ！Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ！！（ビシッ！）」」

二人は直立不動で敬礼を…

「…別に敬礼はいいから…」

…ちょっとやり過ぎたかな～　あはは…

「じゃあスク…じゃなくレフィーナさん、僕たちは家に帰りますね

…と、その前にリインフォースは指輪の中に戻っていてくれ」

「は、はい！解りました！！」

…いや、だからそんなに怯えなくても…

―ピカッ

っと、　そう思っている内にリインフォースは指輪の中に消えていった

「リインフォース、分かっていると思うけど…」

「（はい、主はやてや騎士達に悟られないようにします…）」

「…悪いな、最低でもツヴァイが出来るまでだから」

「（はい、私の後継機でしたね。楽しみです）」

後継機の割には性格が真逆なのが不思議なんだよな～

「じゃあ…レフィーナさん、失礼します」

「ええ、気をつけてねキョウスケ君
…何かあったらまた連絡するわね」

「はい、じゃあさくら　いくか」

「うん！」

―ガチャ

こうして僕たちは管理局を後に「ちょっと待ってくれ！キョウスケ！」ん？

「なんだクロノ、まさかずっと待っていたのか？」

扉を開けたらそこにはクロノがいた…ストーカー？

「いや！激しく違うからな！！」

ちっ…こいつまで心読むスキルを…

「で、どうしたんだ？」

「実は君に頼みたい事があるんだが…」

「頼み？また別荘に入れてくれとかか？」

「実はまた報告書が山積みで…って違わないが違う！！」

「はいはい。で、何だ？」

「実は…アリアとロッテの事なんだが…」

…ん？ありあ？ろって？

「……誰？」

―ズコッ！

僕がそう答えるとクロノが何故かスッ転んだ！

「き、君は彼女達の事を忘れたのか！？」

ん～…と言われても…

「さくら、知ってるか？」

「ほぇ！？ん～…ゴメン！解らないよ～」

「君達は…グレアム元提督の使い魔だ！！」

「……おお！！そーいや居たな～　そんな名前のクズが」

「あっ！！はやてちゃんにひどい事した猫だよね！！」

いや～　キレイさっぱり記憶から消去してたよ～

「…で、その猫共がどうした？保健所にでも引き渡すのか？」

「…実は…彼女達を元に戻してほしいんだ…君の魔法でカエルになったままで…」

……おお！！そーいやハーデスでステータス異常フルコース＆カエルの姿にしたんだっけ～

「彼女たちは僕の師匠でもあるし、色々と世話になったんだ…いくらなんでもあのままというのは不敏で…
頼む！彼女たちを元に戻してくれないか？」

クロノは頭を下げて僕に頼んでいるが…

「……アイツらがはやてやヴィータ達にした事を忘れたか？命が有っただけ有り難く思え！！」

「…彼女達のした事は許される事ではないのは十分解る…だが、それでも…頼む！」

…う～ん…どうすっかな～　原作じゃあの後は出番なくグレアムと隠居してたから…今後表舞台には出てこないだろうし…

「…ねぇキョウ君、クロノ君がこんなにお願いしてるんだし…」

さくら…はぁ…仕方ない

「…1つ条件がある。元のには戻すが魔力は人型を保つ程度に封印させてもらうぞ？」

念には念をいれないとな…逆恨みではやて達を襲ってこないようにしとかないと…

「ああ！解った！」

「…はぁ、ちょっと待ってろ」

そう言い僕は収納空間から万能薬改を取り出し…

「…さらにちょっとアレンジして…とほらクロノ！この薬を飲ませてみろ。姿は元に戻る…が、その代わり魔力は二度と使えんがな…」

そう言いクロノに万能薬改＋αを渡す

「ああ、有り難く使わせてもらうよ」

「じゃあ僕たちは家に帰るな～いくぞさくら」

「うん！じゃあクロノ君、またね～」

―シュン！

こうして僕たちは八神家に帰った…のだが…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「神様、キョウスケ君にリインフォースの肝心の能力教えましたか？」

「……ひょ！？」

「忘れてましたね…全く…
それにこの件の事もキョウスケ君に話してないですよね？」

「…まぁ…この件に関してはまだ未確定じゃからの～…
暫くは様子見じゃの」

「…まぁ私も原作は余り詳しくないのでもしかしたら実際にあった事かもしれませんが…時期が…それにこれは不自然ですし」

「うむ…」

―パサッ

神様の手にした書類にはこう書かれていた…

―12月24日

ミッドチルダにて次元航行船が謎の爆発事故…

原因は現在調査中…

生存者一名

生存者名…

ティアナ・ランスター

第1次スーパー料理大戦!?　前編

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

管理局で神様がいて、ＦＡＩＴＨに入隊して…リインフォースがマ
改造されて…ヴィータともシンクロしたし…ああ！後クロノに泣き
落としもされたな…

で、色々とあって家に帰ってきたのだが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――八神家――

キョウスケＳｉｄｅ

「…で、何故こうなった?」

みなさんこんにちは、神代恭介です

状況が解らないよ?という人に説明すると…

「さぁキョウスケ君!!誰が1番か決めてな?」

「私が1番だよね?」

「私だよね?キョウスケ?」

「私だろ?恭介!!」

「私だよね?キョウ君♪」

「私「「「「「シャマルは論外や(なの)(です)(だ)(ですよ)!!」」」」」…うぅ…ひ、酷いわ!!」

…という口論をなのは達がしているのです…

何故こうなったかというと…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――数時間前――

―ガチャ

「ただいまー!」

「ただいま～」

僕とさくらが玄関を開けると…

「ん？　ねぇキョウ君、何かいい匂いしない？」

「…そうだな、キッチンからだけど…夕飯の支度？
今日の当番は僕だったと思ったんだけど…」

はやてが気を利かせて作ってるのかな？

―ガチャ

で、リビングを覗いてみると…

「…シグナム、とりあえず状況説明を…」

「ん？神代、今帰って来たのか」

「ああ。で、何このカオスは？」

僕の目の前では、キッチンで料理しているはやて・なのは・フェイト・ヴィータ・シャマル…ってシャマルが料理ぃ！！？

「我らが帰って来た時に、主達が神代に食べてもらう料理を作っていたのだが…1番おいしい料理を作った者は、神代を好きに出来る権力があると聞いた途端…その…ヴィータやシャマルも参加して…スマン神代。ヴィータはともかく、シャマルを止める事が出来なか

った…」

…という事は…

『シャマル女史の料理を食べるんですね？マスター』

「…シグナム、僕は今から旅に出るん「あ、キョウスケ君！お帰りなの～♪という訳でバインド♪」なっ！？」

―ガチィ！

「駄目だよキョウスケ君、今日の主役（景品）が居てくれないと…」

「あはは…や、やあ皆…ただいま～」

「あ、キョウスケ君お帰り～　ちょ待っててな？もう少しで出来るから♪」

「キョウスケの為に一生懸命作ったんだよ　楽しみにしててね？」

「待ってよろ恭介！ギガうまな料理を作るかんな！」

なのはやはやて、フェイトとヴィータ…正直な話し…４人の料理の味は問題ないだろう…だが！！

「待ってて下さいねキョウスケ君　美味しいお料理作りますから♪」

シャマル！その手元の鍋の中のグツグツに煮えたぎっている緑色の液体は何さ！！？

「…キョウ君、胃薬持ってくる？」

…いや、胃薬効かんだろ…アレは…

――――という訳で…――――

『第１回！誰の料理が１番おいしいか選手権大会！開催でーす！なお、解説は私マスターのインテリジェンスデバイス・インフィニティと…』

「えっと…キョウ君のユニゾンデバイスのさくらでお送りしま～す」

…えらく楽しそうですね…ウチのデバイスズ達は…

『今まで出番が少なかった分、いい仕事しますよ』

いやいやいや！お前の仕事それじゃねーだろ！？

『さぁ！まず１番手は…』

つかマスターの事は無視なんですね～

『ゴボン！気を取り直して…１番手は天然美少女フェイト嬢！』

「イ、インフィニティ…私天然じゃないよ！？」

…いや…十二分に天然でしょう？しかも美少女は否定しないんです

ね…まぁ確かに美少女だけどさ…

『フェイト嬢が手にしているのは…カルボナーラ！！濃厚なソースが食欲を刺激しますね～　どうでしょう？さくらさん？』

「ほぇ！？　え、えっと…キョウ君はパスタ系は5本の指に入る好物だから…フェイトちゃんポイント高いです…こんなカンジのコメントでいいのかな？インフィ君？」

『はい、ありがとうございますではマスター！熱いうちにどうぞー！』

…いや、どうぞー　と言われても…

「…バインドが見えんのか？インフィニティ？」

さっきから桃色の魔王特製バインドで身動きが取れないんだが…

『おっと失礼　ではフェイト嬢、ここはマスターに伝説の【あーん】をしてあげて下さい♪』

なっ！？何口走ってんですくぁぁぁ！？

「え、えっと…／／じゃあ…キョウスケ…はい、あーん／／」

フェイトは迷いなくフォークにパスタを絡ませて、僕の口に運んでくる…つかバインド解除すればいいだけだろ！？

…そう思い、魔ぉ…なのはに視線を移すと…

「フフ…キョウスケ君に…あーんが出来る…／／

そ、その為なら…多少の犠牲は目をつぶるの…／／」

つかその犠牲って主に僕だよね！？

だ、駄目だ…目がイッてやがる…しかも他の奴らも何を妄想しているのか自分の世界に浸ってるし！？

「キョウスケ／／はい、あーん／／」

くっ…し、仕方ない…ここはさっさとサクッと済ませよう…

「あ、あーん…パクッ」

―もぐもぐ…

「ど、どうかな？」

フェイトは不安げに尋ねてくるが…

「…うん、美味いよ！ちゃんとアルデンテになってるし、味付けもバッチリだ」

思った以上の出来だった　いやマジで！

「よ、よかった～…頑張って勉強してたんだよ？」

そっか…頑張ってるんだなフェイト…

『おおっと！フェイト嬢のカルボナーラの評価はかなり高いようです！これはいきなり優勝決定か～！？』

「ち、ちょっと待ってなの！！つ、次は私の番だよ！」

『おおっと！2番手には翠屋の看板娘、高町なのは嬢が名乗りを挙げたぁ！！』

…ほんっとノリノリだなコイツ…

「なのはちゃんは…ハンバーグだね♪
あ、しかもチーズが乗っている～♪
これはポイントかなり高いよ？キョウ君はチーズが大好物だから」

確かにチーズは好きだが…さくらに教えたっけ？

「あ、作者さんに教えてもらったんだよ？」

…ああ、さいですか…

「な、なんやて…？私かて知らなかった事を…クッ！料理の選択間違ごうた…ｏｒｚ」

「チーズか…よ、よかった…一応私の料理には入ってんかんな♪」

はやてはガッカリ、ヴィータはホッとしていた…

「はい、じゃあキョウスケ君♪」

そう言うと、なのははハンバーグを一口サイズに切って…な、なのはサン？何故そのフォークに刺さったハンバーグをご自分の口元に…？

「フーフー…はい！あーんなの／／」

な…な…何なさってらっしゃるんです！？アレですか！？あーんに加えフーフーまで！？

「し、しまった…その手を忘れてた…ｏｒｚ」

横目でフェイトを見るとｏｒｚの姿が…

「もう、キョウスケ君ってば…よそ見してないで…はやくぅ♪」

なのははそりゃ楽しそうにフォークをこちらに向けて…クッ！仕方ない…

「あーん…パクッ」

―もぐもぐ…

腹をくくって食べてみたが…これは…

「ど、どう…かなぁ？」

「…うん、美味しい　肉汁も口の中で溢れだして…焼き具合もバッチリだよ！」

「えへへ／／お母さん直伝のハンバーグなんだよ♪」

へ～…何だかんだでも料理の勉強とかはしてるんだ…この情熱をもっと違う事に向けてくれれば…

「勿論向けてるよ？主に…その…キ、キョウスケ君に／／（ゴニョゴニョ）」

最後の方が聞き取れなかったが…？

『さぁ！なのは嬢のハンバーグも高ポイント！！では次の料理は誰だ！？』

「クッ…次は私の番や！！」

『3番手は八神家のエセ関西人、はやて嬢の登場です！！』

「ちょ！？インフィニティ！？エセって何や！？」

…はやてはああ言っているが…

「そこも！！何変な事考えとるんや！！」

だから皆して心読むなよ…何か？魔導師は読心術が必須スキルなんか！？」

「えっと…キョウ君、考え事はもういいかな？」

ってさくらさん！？あなたも読心術を！？

「…途中から声出てたよ？」

な、なんだって！？う、迂闊だった…

『さくらさん…マスターはスルーして先に進んじゃって下さい。』

酷っ!?

「えーと…はやてちゃんの料理は…和食の定番、肉じゃがだね♪」

『これははやて嬢、計算高い!!世の男性を落とす伝家の宝刀を抜いて来ましたぁー!!
この味に心揺さぶられる男はいないです!!』

「フーフー…はい、キョウスケ君　あーん♪」

…もはや何も言うまい…

はやてが箸でじゃがいもを僕の口元に持ってきて…

「パクッ…もぐもぐ…」

「ど、どや?」

「うん、流石はやてだね!とっても美味しい♪」

はやては元から料理上手いからね~

「これならいいお嫁さんになれそうだね~」

「ふぇ!?おおお嫁さんっ／／／!!?」

―ピシッ!!

…ん？はやてが顔を真っ赤に？

それに…何だろう…？空気が凍り付いたような…？

『おおっと！！これは驚きましたー！！マスターがまさかのプロポーズ発言！！』

…プロポーズ…？

ポクポクポク…チーン！

「ハッ！？い、いや！そーゆー意味で言った訳では…ハッ！！？」

…背後からどす黒い気配が…

恐る恐る振り向くと…

「…キョウスケ君、久々にちょーーっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ…しようか？」

「…フフフ…キョウスケ、大丈夫だよ？途中から気持ち良くなるから…」

なのははホント久々に目をハイライトにしてレイハさんを構えていた…

つかフェイト！？その発言色々ヤバイから！？

『さぁではここで一端休憩に入りますー』

なっ！？テメ！！何言いやがる！？

「…ちょうどいいね…さぁキョウスケ君、逝コウカ？」

―ガシッ！

「…なのは、私の分もとっておいてね？」

「お、おい！？ちょ…マ、マジで助け…」

「「問答無用なの（だよ）！！」」

ふ…不幸だぁぁぁぁ！！！

―ガチャ、バタン！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「キョウ君…プロポーズ発言は駄目だよ…」

その後１時間は戻って来なかったとか…

ちなみに…

「ぐふふふ…キョウスケ君にプププロポーズされてもうた…／／こ、

これはもう初夜に突入せな…／／」

「は、はやてぇ！！しっかりしてくれー！！」

「は、はやてちゃん…ヨダレが」

「あ、主…」

はやてはしばらく妄想の世界にドップリ浸かっていたそうな…

続く…

「つ、続くんかい！？」

第1次スーパー料理大戦!?後編

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

『マスターの身体を賭けた第1回!誰の料理がおいしいか選手権!ただ今フェイト嬢・なのは嬢・はやて嬢の料理を食べ、折り返し地点へとやってまいりましたー!!』

「ほ、本当にノリノリだね　インフィ君…」

『そりゃそうですよ!!ギャグパートとは言え、メインMCなんですから!』

「あはは…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

なのはとフェイトのO☆HA…止めよう、思い出すだけで震えが…
ガクガク…

で、リビングに帰ってきたのだが…

「さ、キョウ君♪早く座って♪」

何故がエプロン姿のさくらが…しかも結構似合ってる!?

「さくらさん…何故にエプロン姿に?」

「えっと…飛び入り参加?かな」

飛び入り参加って…何故?

「つか、さくらって…料理出来たっけ?」

「むー!!酷いんだ~!!私も料理位出来るんだよ?」

さくらは頬を膨らませて怒ってます的な仕草をしていた…

…ちょっとドキッとしたのは内緒だ…

『さぁ景品…じゃなく、マスターが戻って来たので後半戦いきましょー!!』

今確実に景品って言ったよな!?…コイツやっぱバラしてマリアナ海溝辺りに沈めてやろうか…

『なお、アシスタントのさくらが急遽飛び入り参加したので…解説はシグナム卿にお願いいたしました！』

「…何で私がこんな…」

『すみません、他に頼める方が居なかったので…ザフィーラ氏は…』

「…まぁ、アレの犠牲にならなかったのだ…文句は言うまい…」

えっ！？何か話しを聞くとザフィーラに何かあったようだけど…？

「…ザフィーラは…シャマルに料理の味見を（強制的に）頼まれてな…」

…は？マジ？そういやザフィーラの姿が見えないが…

つか、その料理を僕は食べさせられるのか…！？

『…彼の尊い犠牲に敬意を表し…さあ！後半戦スタートです！！』

うわっ！！ザフィーラの事、軽く流しやがった！？

『ではヴィータ嬢！お願いします！』

「お、おう！！」

ヴィータは緊張した面持ちで料理を僕の目の前に運んで来た

『さぁ！ヴィータ嬢の料理は…カレーのようです！
おや？カレーに何か入っていますね？』

「…なるほど、ヴィータはカレーにチーズを入れたようだな」

『ほほぅ…チーズカレーですか
チーズはマスターの好物ですからね～　しかも全人類が好物なカレーとのコラボ！！これは対マスター用の最強の組み合わせだー！！』

…いや、まぁカレー好きだけど…そこまで大袈裟に言う？

「ほ、ほら　恭介／／あ、あーん／／」

…っ！！そういやまだ魔王のバインドがあったんだ！！？

「い、いやヴィータ　ちょっと待って…おい！なのは！！いい加減バインドを「わ、私のあーんは…嫌なのか？」ってヴィータさん！？」

そ、そんな今にも泣き出しそうな顔しなくても…ええい！！

「た、食べさせて頂きます…」

ああ…NOと言える日本人になりたい…

「じ、じゃあ…いくぞ？…あ、あーん／／」

ヴィータはスプーンにカレーを盛り付け僕の口元に運んで来る」

「…あー「あ！ま、まだカレー熱いかもな…フーフー／／」って！？」

ヴィータはスプーンの方に顔を近付けてカレーを冷ましている…つかヴィータ!!顔!!顔が近い!!!!

うっ…ヴィータの息がかかる距離だ…その距離約１０センチ!!

「ちょ!?ヴィータちゃん!!顔近いよ!!」

「ヴィータ!?それは反則や!!」

「…み、みんな…私以上の匠の技を…」

なのはとはやては猛講義、フェイトは相変わらずｏｒｚと膝を折っていた…

「（…ちっ、はやてに言われたら仕方ねーか…）あ、ワリィ恭介」

…今舌打ちしなかったか？

「気のせいだ!!さぁ恭介!!あーん!!」

サラっと心を読まれた気もするが…

「あ、あーん…パクッ」

―モグモグ…

「ど、どうだ?美味しい…か?」

「…うん!美味しいよヴィータ!また腕を上げたね!」

ヴィータの作ったカレーはチーズのまろやかさで辛さを包み込み、ちょうどいい具合になっていた

「ほ、ホントか!?ホントに本ッ当に美味しいか!?」

「あ、ああ…だから落ち着こうな?ヴィータ」

つか顔近いって…

『ヴィータ嬢のチーズカレーも好評価のようです!!』

「うむ、あれでヴィータは負けず嫌いだからな　並々ならぬ努力をしたのだろう」

『そういえば…シグナム卿の料理の腕はいかがですか?』

「ブッ!?な!?、いや…それはだな…そ、そう!私は主はやての剣な訳であってだな…」

『…食べる専門ですか…』

「うぐっ!!そ、そんな事より次だ!!次の選手は誰だ!?」

『無理矢理話題変えましたか…まぁこの件に関しては今は置いときましょう…』

…シグナムを手玉に取るデバイス…侮れないな…

「さぁ次は私の番で『次は特別参加のさくらさん!どうぞー!!』ってちょっと!?インフィ君!?順番的に私じゃないの!?」

『あ、いえ　シャマル女史は最後にした方がいいかと…（オチ担当ですし）
それに最後ならマスターが倒れても問題ありませんし♪』

こ、コイツ…やっぱＡＩを粒子レベルまで分解したろか…

「じゃあ私の番だね♪　ハイ、キョウ君！！」

さくらが手にしているのは、チーズの香りとトマトソースの匂いが食欲をそそるイタリアン料理の一つ…

『さくら選手の料理は…ピッツアだー！！』

「ほぅ…しかしトマトソースとチーズだけのシンプルな料理だが…」

『…おおっと？ただ今入った情報ですと、マスターの１番の好物はどうやらそのピッツアのようです！！これはさくら選手！！ある意味ズルイ！！独自の情報をフル活用！！ガチで勝ちに来ています！！！』

「そ、そうだよ！さくらちゃん！！ずるいよ！！ピッツアなら私だって前にピザ○ットさんのタイアップの時に色々勉強したから得意なんだよ！！」

「それ以前に、私達キョウスケがチーズ好きとかも知らなかったし…」

「あまつさえ何や！？キョウスケ君の好物をどストレートで出してきよって！！？」

「べ、別にずるくないもん！！
そ、それにキョウ君の好物とかなのはちゃん達に聞かれなかったし…
そ、それに！私だってキョウ君と…イチャイチャしたいんだもん！
！」

さ、さくらさん？それって爆弾投下っすか？

それとなのは…サラっと宣伝してないか？

「劇場版A’ｓの時もお世話になるの♪」

…実際ありそうだし…

「さ、キョウ君♪あーん♪」

さくらはピザを1ピース手に取り、僕に食べさせようと口元に運んで…まぁもうここまで来たら諦めよう…

「あ、あ～ん…」

だがここで気付くべきだった…

さくらは素手でピザを持っている…となると…

―パクッ

「あっ…／／もぅ…キョウ君ったら♪」

「「「「ああああーーーー！！！」」」」

…ピザと一緒に…その…さくらの指も口の中に入れてしまった訳で…うっ!?ものすごい殺気が!!?

「で…キョウ君…その…おいしいかな?」

「あ、うん…美味しいかった…ヒッ!?」

さらになのは達からの黒いナニカが噴き出した!?

「…ふーん…さくらちゃんの指も美味しかったのかぁ?キョウスケクン?私の指も味見してなの…フフッ」

「…キョウスケ、指だったら私の方が綺麗ダヨ?タベテミル?フ…フフッ…」

「キョウスケ君、そないな小娘共の指じゃなく…私の指や身体も舐めてええんよ?…フッフッフ」

「…恭介、ついさっき私ら身も心も1つになったんだ…え、遠慮しねーで言ってくれりゃ…いつでもいいぞ／／」

つか皆さん!?ぼ、暴走すか!?

ヴィータに至っては何かとてつもない誤解を招きそうな発言を!!?

『さぁ!マスターも生命の危機を向かえ…ここでダメ押しと逝きましょう!!最後の選手…シャマル女史です!!どうぞー!!』

こ…こいつ絶対バラして粉々に砕いてやる!!

「はーい♪お待たせしました～　はい♪キョウスケ君」

…ああ…とうとう来たか…この時が…ん？あれ？

「…シャマルの料理…だよな？」

「当たり前ですよキョウスケ君。私だって本気を出せばこの位は～」

『おおっと！！これは意外！！シャマル女史の料理が何時もと違いマトモだぁ！！』

「ふむ…これは天変地異の前触れか？」

…さすがに僕も今回はインフィとシグナムの意見に同意するな…シャマルが作った？クリームシチューがマトモに見えるんだが…

「さ、キョウスケ君♪あーんしてください♪」

シャマルはシチューをスプーンですくい上げ、僕の口元に運んできた

「…じ、じゃあ…あーん…パクッ」

…だがこの時僕は2つのミスを犯していた…

1つはザフィーラの犠牲…

もう1つは…シャマルが使ったであろうキッチン周りに…定規や絵の具が散乱していた事を…

―モグモグ…

「どうかしら?キョウスケ君?」

「……グッ!?」

―バタン!!

「キ、キョウスケ君!?どうしたの!?」

「ちょ!?シャマルどきぃ!!」

「キ、キョウスケの口から白いナニカが!?」

「おい!!シャマルてめー!!恭介に何食わしやがった!?」

「えっ!?わ、私はただ…見栄え良く作ろうとして…」

「あーーー!!?シ、シャマルさんが使っていたキッチンに絵の具やボンドが!?」

「な、なんやて!?シャマル…まさか料理に使った何て言わへんよ…な?」

「えっと…なかなかいい色が出ないんで…その…隠し(色)味に」

―ピシッ!!

「…シャマルさん…キョウスケ君に何してくれてるのかな?…レイジングハート…」

「な、なのはちゃん!?何でデバイスを起動しているの!?」

「…勿論シャマルさんを消し炭にする為なの♪」

「な…何で恐い事サラっと言ってるの!?は、はやてちゃん助けて!!」

「…なのはちゃん、さすがに家が壊れてもうから…別荘で思う存分やったろな?」

「は、はやてちゃん酷っ!?」

「「「「「シャマル（さん）に言われたくないで（ねー）（です）」」」」」

「そ、そんなぁ…シグナム助けて!!」

「…シャマル、今後一切料理禁止だ」

「…さぁシャマルさん…逝こう?」

「さくらちゃんはキョウスケ君の治療お願いな?」

「うん!任せてはやてちゃん!!」

「おら!さっさときやがれ!!アイゼンの錆にしてやる!!」

「ヴィータ、私の分も残しておいてね?」

「い、いやーー!!」

―ガチャ…バタン！！

『…えーと、これは審査所ではないですね』

「…まったく、同じヴォルケンリッターとして恥ずかしい！！」

『まぁ　皆さんがシャマル女史の説教が終わるまで最低でも1時間掛かりますから…マスターの蘇生の手助けでもしますか』

「そうだった！！のんびり解説などしていられん！！さくら！私に出来る事は何かないか！？」

こうして…僕は蘇生されるまで気を失っていた訳で…

…しかし治療にラストエリクサー5本使ったとさくらから聞いた時には…今回のシャマルの料理の殺傷力はすざましかった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

で、数時間後…

―ガチャ

「あ、キョウスケ君！！もう大丈夫なの？」

「ああ…今回はマジでやばかったけど…シャマルは？」

「シャマルなら何とか原型は留めてるよ…チッ」

…フェイトさんが何か恐い事言っていたような…原型って…

「恭介～　仇は取ってやったぞ♪」

「勘忍な～キョウスケ君、主の監督不行きやったわ…でもちゃんとシャマルには言い聞かせといたんで大丈夫や♪」

…何が大丈夫とか言うより…シャマルは無事なんだろうか！？

『さぁ！！皆さんが戻って来た所で…マスター、誰の料理が１番美味しかったですか？』

…うっ、そうだった…それがまだ残っていたか…このままうやむやに出来ると思ったのに…

――――回想終了――――

と、まぁ…それで前回の話の冒頭に戻るのだが…

シャマルも何気に復活早かったな…

「「「「「「キョウスケ君！！誰の料理が１番！！！！！！？」」」」」」

…こ…これはどうすっか…

そ、そうだ！

「…ん、皆（シャマル以外）美味しくて甲乙つけがたい…という事で…全員（シャマル以外）全員優勝！！…ってのは？」

これなら皆【な、なんで～ずるい！？】とか言ってドタバタ騒動的に終わらせられるはず！！

…だったが…

「しゃあないな～、じゃあキョウスケ君を自由に出来る権力も全員って事でええか？勿論キョウスケ君には拒否権あらへんで？」

な、なんだって！？

何その予想斜め上いく展開は！？

「あ、ちなみにキョウスケ君に何してもらうから別荘内で皆で話あったんだよ♪」

…って事は…こうなる事は予想済みっすか！？

「そんな無茶な事じゃねーから大丈夫だって恭介♪」

「そ、そうなのか…？因みにどんな？」

「えっと…明日皆で旅行行った時なんだけど…はうぅ／／」

はうぅ…ってフェイトが顔を真っ赤に？な、なんか嫌な予感しかし

ないんだが…

「キョウスケ君には温泉で私らと一緒に入って貰うだけや♪ぐひひ…裸の付き合いやで～♪」

はやてが獲物を捉らえる野獣の目つきを…って！

「な、何だよそれ！？む、無理矢「拒否権は無いって言ったやんか～　それとも…シャマル特製シチューお代わりする？」…うぐっ」

そ、それは勘弁してくれ…

「なら決まりやな♪」

「やったー！！キョウスケ君と一緒に入れるの♪」

「キョウスケと…裸の付き合い…／／」

「恭介恭介！背中の流しっこしよーな♪も、もちろん…その…ま、前の流しっこでもいいんだけどさ…／／」

「…キョウ君と一緒に…はにゃーん／／」

み、みなさんご自分の世界に浸っているが…こ、これはヤバイ！色んな意味でヤバイかも…

「「「「「楽しみ～～～～」」」」」

…ふ、不幸だ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ちなみに…

ザフィーラは全身真っ白に燃え付きて発見された…

シャマルは…

「…どうせ私なんか…私なんか…ブツブツ…」

部屋の片隅でおもいっきりイジケていた…

温泉って憩いの場…なんだよね？普通…　ｂｙキョウスケ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

皆さん、こんにちは　神代恭介です…

前回の料理対決でとんでもない約束をさせられたまま僕たち高町＆八神＆アースラ（というかフェイト＆アルフ＆エイミィ）達でとある旅館に来たのですが…

「士郎さん、まさか旅館丸ごと貸し切りとは…」

僕たちが旅館に着いたら…旅館従業員全員でお出迎えされ、あまつさえ【歓迎！！高町家＆ハラオウン家＆八神家御一行様】と横断幕的な物を…

「いや…普通に予約入れた筈なんだが…」

士郎さんも困惑しているご様子

「…何かの手違いとか？とりあえず旅館の人に聞いてみましょう」

「そうだな…桃子達はちょっと待っていなさい」

「ええ、解ったわ」

「桃子さん、すみませんがはやて達の事もお願いします」

「大丈夫よキョウスケ君、ね？はやてちゃん？」

「あ、はい　私の事は大丈夫やで？」

「ん、そうか　じゃあ行きましょうか士郎さん」

「ああ、」

という訳で僕と士郎さんが代表で聞きに行ったのだが…

――――旅館、受付――――

「…マジで士郎さん名義で貸し切りだったとは…しかも料金まで既に支払われているって…」

旅館の女将さんに事情を聞いた所、旅館全体貸し切りで予約されていて、しかも料金まで支払われていたという奇妙な状態だった…

「一体誰が…？」

「士郎さんの知り合い…とかではないですよね？」

「ああ、今回の旅行の事は他の人には話していないしね…魔法関係者って事もあったし」

ですよね～　まぁ考えていても仕方ない…

「とりあえずチェックインしましょうか？何かあったら僕が料金支払いますし」

「いや、それでは大人の立場が…料金の事は我々大人に任せてくれ」

…お金に関しては以前神様が国歌予算並に口座に入れてくれたから大丈夫なんだが…まぁ最終手段って事にするか

「じゃあ僕は皆を呼んで来ますんで士郎さんは手続きお願いしますね」

「ああ、解った」

僕は早速はやて達が待っている所まで向かったのだが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「…敢えて聞こう、何故ここに居る！？」

「アンタ達が私達に黙って旅行行くからよ！！」

「ア、アリサちゃん…私達だってようやく日本に帰って来たんだし…いきなりケンカは…」

僕がはやて達が待っている場所に行くと…アリサ・すずかが！いつの間に！？

「にしてもよ！！なのは！フェイト！はやて！何で私達に教えなかったのよ！！？」

「ふぇぇ！？れ、連絡しようにもアリサちゃん達海外だったし…」

「うん…そうだね」

「というか、すずかちゃん達は何で私らが今日旅行に行く事が解ったん？」

…そうだよな～　僕とはやてなんかはギリギリまで行く予定なかったんだし…

「そんなの私のパパに頼んで調べてもらったのよ！！」

うわっ…これだから金持ちは…

「ア、アリサちゃんったら…キョウスケ君、アリサちゃんはこんな事言っているけど…本当はちょっと違うの…」

「違う？」

「うん、キョウスケ君…今日泊まる旅館で変な事なかった？」

変な事…？おもいっきりありましたよ？

「ああ…何か旅館が貸し切りで、しかも料金が既に支払われ…って！？まさかアリサかすずかが？」

それなら納得できるな～　２人とも世界屈指のお嬢だし…

「ううん…私達じゃないの…」

「私達じゃ…って何か誰がやったか知ってるような口ぶりだね…」

「ねぇすずかちゃん、一体何があったの？」

「うん…実「あら皆さんこんにちは～」あ…秋穂さん！？」

はっ！？秋穂さん！？

声が聞こえた方を見ると…

「久しぶりねキョウスケ君♪」

またまた登場！？乃木坂秋穂さん！！？

「こ、こんにちは…奇遇ですね」

「あら、奇遇じゃないわよ？」

はっ！？それって…？

「前回、春香を助けてくれた御礼をしようと貴方の事をバニングス

家の人に聞いて…そしたらたまたま貴方が旅行に行くって事が解って…それで調べたらなんと！たまたま乃木坂家系列の旅館に泊まるって解ったからおもてなしをと…」

…何か、たまたまが不自然な程出てきてません？

「それでね～キョウスケ君、ついでに私達も正月旅行にこの旅行に泊まるのよ～」

「はぁ…ん？私達…？」

そう疑問に思っていると…

「やっほー♪おにーちゃん　久しぶりだねっ！」

「あ…その…お久しぶりです…神代さん／／」

…気が付けば美夏＆春香さんまでいらっしゃる！？

「や、やあ…2人とも久しぶ…ッ！？」

僕が挨拶をしようとしたその時！？

「…キョウスケ君、またＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか…」

「…つかキョウスケ君、誰や？その子ら…？」

「…キョウスケ、またフラグ立てたの？私の体だけじゃ飽きたらず…」

「…恭介がロリ趣味…こ、これは喜んでいいのか？」

「むーっ…キョウ君、とうとう年下にまで…私だってなろうと思えば年下設定に…」

皆さんからは黒いオーラが…約何名かが微妙な発言をしたが…

「あ～、なのはとヴィータは前のアリサ誘拐事件で会った事あった事あるよね？」

「ないよ！！」

「ああ、ねーな！！」

…あるぇ？

「あ、あの…神代さん…私もアリサちゃんとすずかちゃん以外初対面なんですが…」

……おお！そういやあの時はなのは達は留守番してたし…会ってなかったか～

「あ…その、こちらは前に誘拐されたアリサ共々助け出した御令嬢です」

「初めまして…乃木坂春香です」

「妹の美夏でーす！」

「で、こっちが僕の家族＆友達とその家族だ」

と、簡潔に説明したのだが…

「ややな～　キョウスケ君、夫婦やなんて♪」

…いや、んな事一言も言ってねーぞ！

「はやてちゃん…キョウスケ君との夫婦は私だよ？」

「なのはもはやても違うよ！！キョウスケは私と夫婦だよ？」

「てめーら！恭介は私とはやての物だって言ってんだろ！？」

「…ヴィータちゃん、出来たらそこに私も入れてほしいんですけど」

…ただの自己紹介で何だ！？この混沌っぷりは！？

「「……」」

流石に免疫がない乃木坂姉妹はどん引きしてるよ！？

「ち、ちょっとアンタ達！？いつの間にキョウスケがあんたらの物になったのよ！！？」

「キョウスケ君…もう誰かの物になっちゃったの？」

さらにアリサもあの混沌にダイブしていくし…

すずかは涙目で僕の方を見てくるし…

「あらあら、キョウスケ君　モテモテなのね～」

秋穂さんは面白いそうに笑っていやがるし！！

「は～…おにーちゃん、凄いハーレム状態だね～」

美夏も凄い物を見るようになのは達を見ている…まぁ、実際凄いんだが…

「面白そうだから…私達も参戦しようか？お姉ちゃん♪」

「み、美夏！？な、ななな何を言ってるんですか／／！？」

「え～、だってお姉ちゃんもおにーちゃんの事好「わーわーわー！！！ななななな何で事を言うの／／！！？」…お姉ちゃん動揺しすぎだよ…」

…何か乃木坂姉妹が漫才をしていたが…？

「と、とにかくだ！こんな所じゃ何だし…早く皆部屋に行こうか？」

「おーー！！！」×多数

…はぁ、全然旅行に来ている気がしないな…

「所でキョウスケ、アンタの隣に居る女は誰よ！？」

「えっ！？隣にって…さくらの事？」

「ほえぇぇ!?わ、私!?」

「へぇぇぇ…さくらって言うんだ～…で、アンタの何!?」

「私も聞きたいな～…キョウスケ君とどうゆう関係?」

「え、えっと…2人とも初対面だったっけ?」

「「うん、そうだよ!!」」

うわ～…2人とも凄く素敵な笑顔ですね…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――旅館内、鳳凰の間――

アリサとすずかの恐怖の質問タイムをくぐり抜けて…とりあえず高町家、アースラ・アリすず組、八神家と部屋割りをし、僕ははやて達と同じ鳳凰の間に居る…

ちなみに乃木坂家の皆さんはＶＩＰルームに泊まるらしい…

一応乃木坂家傘下の旅館だから当然か…

「なぁなぁ恭介!!見ろよ!!すげーいい眺めだぜ!!」

「ズズズ…うむ、流石一流旅館　いいお茶を使っているな」

「シグナム～　何か発言がおばちゃん臭いで？シグナムはまだ若いんやから～」

「くすっ、そうよシグナム　そんな事言ってるとすぐ気持ちが老け込んじゃいますよ」

「ぐっ…わ、我々は別に年は取らん！！最悪取っても神代が何とかする！！」

って僕かよ！？

「あ、だったら美容系のポーション作ってみる？キョウ君ならすぐ出来ると思うし…」

…まぁ…不可能じゃないけどさ…

「それはともかく…キョウスケ君、約束忘れてへんよな～？」

ギクッ！

「…ナンノコ「男やったらいい加減腹括ったらどうや？」クッ…だ、だかアリサやすずかもいる事だし…」

「それなら大丈夫や！既に2人には了承済みや♪」

な、何だって！？いつの間に！！？

「キョウスケ君が先に旅館に行った時や！推理力が足らんよ～ワト

ソン君」

…さいですか。ったく、こーゆー事は仕事早いな…

「さぁキョウスケ君、という訳で温泉へＧＯや！！」

「はっ！？い、いや…まだ昼過ぎだし…」

「んふふ…まずは家族水入らずで親睦を深めよな～　ヴィータ！シャマル！」

「おうっ！！」

「はいっ！！」

―ガキッガチッ！！

「なっ！？バインド！？」

こ、ここまでするか！？

「これで準備ＯＫや！さぁ行くで～」

「「おーーー！！」」

「シグナムも行くで！！ザフィーラはなのはちゃん達を監視しといてな？」

「は、はい／／」

「……（コクッ）」

な、何シグナムも普通に入ろうとしてるんですか!?さ…最後の希望がぁぁぁ!?

しかもザフィーラ（コクッ）って…はやて!?絶対守護騎士の使い方間違ってるから!!

「ふっふっふ…キョウスケ君、体の隅々まで洗ったげるで～♪」

「は、はやて…私もいいか／／？」

「勿論ええで～♪」

「あ、2人だけずるいよ!?私もキョウ君の体洗いたいよ～!!」

や、やめて!!男として何かが終わりそうな!

つか、確実に何かを失う!?

「さぁキョウ君♪早く行こ♪」

さ、さくらもかよ…ぼ、僕に味方はいないのかぁぁぁ!!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――時空管理局――

？？？Ｓｉｄｅ

「ん？」

［どうかされましたか？］

［いや、フラグメーカーの叫びが聞こえただけじゃ。気にするな］

［は、はぁ…それではこちらに彼を派遣してほしいのですが…］

「…うむ、既にそちらにも出現したか」

［何とかゲートはこちらで封鎖出来ましたが、数体こちらに侵入していまい…対抗出来る者が居ないので…彼女たちも頑張っているのですが］

「確かそちらは転生者は居ないのじゃったな…解った、早急に彼をそちらに送ろう…」

［お願いします。こちらで彼が行動しやすいよう調整しますので…それでは］

―プツッ

「…ふぅ、スクルド君　彼は確か今…」

「はい、現在温泉旅行中です」

「一緒にいる彼女らには悪いが…彼に連絡を」

「はい、分かりました」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

混浴は何歳まで？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

だ、誰か助けてくれっ！！

…えっ！？いきなりじゃ分からない？

あ～…今僕は温泉に入っているんです

…しかし…

「おにーちゃん！いいお湯だね♪」

…何故かツインテール娘…乃木坂さんの妹の美夏と一緒に２人で入っているのです…

…なんでさ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

はやて達が僕を拉致って、今まさに温泉に強制連行されている真っ最中…

「さあキョウスケ君、もうすぐ混浴風呂に到着や～…じゅるり！」

な、何はやてのキャラ変わってねーか!?

「な、なぁ皆…考え直さないか？」

「何言うとるん!!ここまで来て引き返えますかい!?」

「う〝…シグナム達も何か言っ「まぁ、諦めろ神代…一応料理対決の結果なのだ」つか、その料理対決すら元々僕の知らぬ間にそんな流れになったんだろ!?」

くそっ!…ならさくらに助けを…

「ご、ごめんキョウ君…私もキョウ君と一緒に入りたいな～なんて…てへ♪」

てへ♪ぢゃねーー!!

「ええい!!諦めの悪い男やな…ヴィータ、バインドでキョウスケ君の口も塞ぎぃ♪」

「なっ!?お、お…ムグッ!?」

―ガチッ！

瞬く間にヴィータのバインドが僕の口元を塞いだ！？

「わ、ワリィな恭介…でも…わ、私も一緒に入りてーし…／／」

くっ！？本格的にマズイ！？

…仕方ない…本気で逃げるか…

まずは…バインドを無効化しないとな…

僕ははやて達にバレないように異空間に閉まってある一降りの刀をコッソリ取り出し…

―ザンッ！

「「「「「なっ！？」」」」」

僕は【細雪】をバインドに触れさせ霧散させた

「悪いはやて…だが、男として守らなきゃならない物があるんだーーー！！」

という訳で戦略的撤退！！

―キュッ、ダン！！

僕は瞬動で脇道に一気に駆け込んだ！！

…何？能力の無駄遣い？ええい！こっちはいろいろヤバイんだ！！いい加減理性とかが！！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「ま、待たんかーい！！」

くっ！バインドでグルグル巻きにしとった分、油断しとったわ！！つか細雪まで使うんかい！！？

にしても…あの根性ナシはぁぁぁ！！いい加減私らを食って…ゴ、ゴホン！あかんあかん、危うく１８禁になる所やった～

「ええい！シグナム！ヴィータ！！シャマル！！さくらちゃん！！！　キョウスケ君を捕まえるで！！」

「「「おーーー！！！」」」

ぐふふ…逃ぃーがさへんで～ぇ！！！

この時の様子を（一応）冷静に見ていたシグナムは後に、

「み、皆の目つきが肉食獣並になってる…」

と語ったそうな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

くっ！！いい加減このまま走っていても埒があかないな…

と、その時！

―ガラッ！ガチッ！

「ぐをぉ！？」

突如部屋の扉が開き、そこからのびた腕が僕を掴かみ…

「はいは～い　１名様ご案内で～す」

と強引に部屋に引きずりこまれた！？

…この声…はやて！？バ、バカな…はやてとはかなり距離が開いて

いたはず！？

「はやて！？いつの間…って、あれ？」

振り返ってみると…そこにいたのは…はやてではなく…

「貴方がキョウスケ君ですね～　お話は美夏様からから聞いてますよ」

メイドさんが現れた！？

…ぢゃなくて！？

「あ…あの～」

「あ、これは失礼しました～　乃木坂家メイド隊序列三位の七城那波と申します～　…というわけで、失礼しまーす♪」

「へっ…おわっ！？」

メイドさん…那波さんは有無を言わさぬ手際の良さで僕の服を脱がし始め…ってあっという間に脱がされた！？

「では美夏様がお待ちですのでこちらへどうぞ～…あ、こちらがタオルですので♪」

「ちょ！？ま、まって下さい！？何が何だが…」

「ほらほら～　いい子はお姉さんの言う事を聞いてくださいね～♪」

那波さんは有無を言わさずにそう言うと、奥の扉に手を掛け…

―ガラッ

「えい♪」

―バシャーン!!

強引に僕を中に押し込んだぁ!?

「きゃ!?」

…ん?今女の子の声が…そういやさっき美夏様がお待ちとか言っていたような…

「お、おにーちゃん!温泉は静かに入る物なんだよ?」

温泉の中に、バスタオルを巻いた美夏が居た…

――回想終了――

「おにーちゃん、ごめんね～　那波さんがちょーっと強引な事しちゃって」

…あれがちょっとか!?つかあの時僕は瞬動で逃げていたんだけど…まったく、乃木坂家メイド隊は化け物か!?

「で、一体こんな事までして…というか僕と美夏ちゃんって接点な

いよね！？」

あの誘拐事件の時に一言二言交わしただけだよな…？

「ん～…今の所はね～　所でおにーちゃんに聞きたい事があるんだけど…」

「な、何を？」

※キョウスケは美夏に背中を向けて話し中です

「おねーちゃんの事…どう思ってる？」

…はっ！？おねーちゃん…って春香だよな？

「どうっ…って言われても…何でそんな事を急に？」

全くもって脈絡が解らないんだが…

「あのおねーちゃんが初めてお父さん以外の男の人に興味持ったんだよ！！大事件だよ！！」

へ～…原作開始前の幼少期にそんなイベントあったのか～

「って！興味持ったのっておにーちゃんの事だよ！？」

なっ！？美夏にも心読まれ…って僕！？

「そ、そんな訳ないんじゃ？彼女ともそんな接点ないし…」

「接点ならあるよ！おにーちゃん、おねーちゃんの事助けてくれたんだよね？それだけでも十分過ぎてお釣りが利息付きで返ってくるよ？」

…むぅ…そうなのか？

「それに、おねーちゃんの憧れの魔法使いなんだし♪」

ああ…確かこの頃からアニメ好きだったようだし……あれ？今聞き逃したらいけない単語なかったか！？

「……美夏チャン？今ナンテ？」

「だーかーらー！おにーちゃん魔法使いなんでしょ？」

―ピシッ

をいをい…何でバレてんだ？

「おねーちゃん、あの事件の後「私も魔法少女になる～」って部屋で叫んでた」

…さいですか…

「で、それとなくおねーちゃんに聞いてみたら「べ、別に助けてくれた神代さんが魔法使いだったから私も、もしかしたら魔法が使えるかも…とか思っていなくて～」って独り言を大声で言ってたし…おねーちゃんが嘘言う訳ないし半信半疑だったんだけど…その反応を見ると…ホントにおにーちゃん魔法使えるみたいだね？」

…は、春香さん!?おもいっきり秘密ダダ洩れっす…

「あ～…その～…」

どうする?どうごまかす!?

「あ、大丈夫だよ。今の所、知ってるのは私と那波さんと葉月さんにおかーさん位だから」

って秋穂さんまで知ってるんかい!?

「おかーさんも別に魔法自体にはそんなに感心は持ってないから～どちらかと言うと…おねーちゃんの気になる男の子って意味合いで興味があるみたい♪」

…そ、それはそれで厄介な…

「で、美夏ちゃんはそれを聞きたくて温泉に僕を引きずりこんだの?」

「えっ?だって～おにーちゃんの周りに何時もあのおねーちゃん達がいるから…話しかけようとしても…怖くて…」

…た、確かにそこは否定できんかも…

「でね、おにーちゃんにはウチのおねーちゃんの事どう思ってるのを聞くついでに…その魔法を見せてほしいな～なんて♪」

…はぁ…まぁここまでバレたんなら別にいいけどさ…

こっちには魔法バレたらオコジョになるとかのペナルティーはない

し…

「まぁ、魔法っていっても色々あるんだけど…」

とりあえず僕は指先に魔力弾を精製！

「うわぁ…これが魔法……」

美夏は目をキラキラさせながら魔法弾を見ている…

と　その時…

―ブォン！

［キョウスケ君！緊急の仕事…ってあら？お取り込み中？］

空中に突如ウインドウが現れ通信が入った！

「えっ！？だ、誰！？」

まぁ当然いきなり現れたウインドウに美夏はビックリしてますが…

［ああ、キョウスケ君がロリコン趣味でも大丈夫ですよ？］

いや…何が大丈夫なんです？

「で、緊急の仕事って何です？」

［えっと…ＦＡＩＴＨのお仕事なんだけど…］

…という事はアインスト絡みか…はぁ、せっかく温泉に来たのに骨休めも出来ないとは…

…もっともはやて達が暴走中だから休めないだろうが…

「解りました、詳細なデータをインフィニティに転送して下さい」

…さて、こっからは仕事モードだな

「ごめん、美夏ちゃん…どうやら急用が入ったみたいだから」

「そ、そんなぁ…はぁ、お仕事じゃ仕方ないか～」

美夏は残念そうな顔を浮かべているが…

「せっかくこの後おねーちゃんと3人で一緒に入ろうと思ったのに…」

……あ、危なかった…

そんな事がまかり間違い、なのはやはやて達の耳に入った日には…

『…マスター、美夏お嬢と一緒に入った時点でアウトですよ?』

うぐっ!?

「み、美夏ちゃん?僕と一緒に温泉入った事はナイショにしてくれるかな?」

じゃないと主に僕の身が危険だ!?

「ん～…じゃあ美夏のお願い聞いてくれたらいいよ♪」

「お願い…？ムチャなのじゃなければ…」

「じゃあね～　おにーちゃんの携帯番号教えて？」

えっ！？そ、そんなんでいいの？

「うん♪こうしとけば何時でもおにーちゃんと話せるし～」

ま、まぁその位なら問題ないからいいけど…

「いいよ　携帯は脱衣所の服に入っているから」

「やったー♪じゃあ携帯持って、入口で待ち合わせね♪」

そう言うと美夏は脱衣所（女）に向かって行った

「さて…［キョ～ウスケく～ん…］ってスクルドさん？な、なんでそんなに怖い顔を！？」

［いーえ！！怒ってません！！早く現場に向かって下さい！！以上通信終わり！！］

―ブチッ！

…確実に怒ってるぢゃんか…なんでさ？　…ってそれ所じゃないか

「インフィニティ、任務内容と場所は？」

地球の東京とかだったら…ちょっと厄介かな～

『…マスター、これは…何といいますか…』

ん？インフィにしては歯切れが悪いな？

「ちょっと内容見せてくれ……はっ！？なんじゃこりゃ！？」

この任務場所って…こりゃ皆には言わないで行った方がいいな…付いて来た場合かなり問題が…

「あ…じゃあ、シンクロユニゾンどうしよ？」

――任務内容――

【平行世界】の一つにアインストが侵入。
ＦＡＩＴＨ部隊は現地に急行し、現地協力者と共にこれを殲滅せよ
目的地…

もうひとつの【リリカルなのはの世界】…

Side Out

平行世界にようこそ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

温泉に来ている時、突如としてアインスト出現の一報！！

ただ…出現した世界が…ここことは違うリリカルなのはの世界とは…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

とりあえず美夏とは電話番号を交換して（かなり喜んでいたが）、僕は人気のいない屋上に来ています…

「キョウ君、初任務だよね！がんばろう？」

勿論さくらも、はやて達にバレないように念話でここに来るように指示した…

余談だが、さくらに聞いた話しだと…はやてが…かなりカオスってたらしい…怖っ！！

「しかし…まさか平行世界までアインスト退治に行くとは思わなかったけどな」

いきなり世界の枠を飛び越えてだからな～…

「あはは…それでキョウ君、シンクロユニゾンはどうしよっか？」

「ん～…まぁ資料によると下級アインストだけだから大丈夫とは思うけど…万が一の時はリインフォースとシンクロユニゾンするか…」

ん？リインフォース居るのか？って？

いますよ？

今は指輪の中で待機中だけど…それにちゃんとリインフォースとの仮契約カードもありますし…

『マスター、時間です。ゲート開きます』

今回、平行世界の移動には神様が手助けしてくれるので楽だな～

―グォン！

すると、僕の目の前には門…というかドーナツ状のワッカか現れ…って！？

「…これも神の趣味か…クロスゲート…」

スパロボネタでゲート作ったのか…

ま、まさかアストラ○ガンとか出て来ないよ…な？

「…じゃあ行くぞ！」

「うん！」

―グォン、グォン…グォン！

こうして僕とさくらはゲートをくぐった…

背後からもう一人、付いて来た事も気付かずに…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――平行世界、地球――

―グォン、グォン！

「っと…到着っと！」

「ここが…もうひとつの…？」

う～ん…平行世界って言っても僕の居た世界と変わらないな

「さて、先ずは…」

現地協力者と合流…と言おうとしたその時！

―グォン！

「きゃああ！！」

「へっ！？」

ゲートから聞き覚えのある声が！？

「えっ！？キ、キョウ君…」

さくらも驚いている…そりゃそうか…僕だってビックリしてるし…

はぁ…

「…何でここに居るんだ？…なのは？」

ゲートから出てきたのは…なのはだった…

「にゃはは～、キョウスケ君！来ちゃったの♪」

「来ちゃったの♪じゃねー！！」

「はうぅ…ご、ごめんなさい…」

まったく…

「で、何でここに居るんだ？」

「…キョウスケ君を探してホテルの屋上に来たら…さくらちゃんと一緒にどこかに行こうとしているのが見えたから…」

「…それでコッソリ付いて来た…と？」

「う、うん…2人っきりでどこかに行っちゃうと思って…」

…別に遊びに行く訳じゃないんだから…

「なのは、僕とさくらは極秘任務で来た訳だから…別に遊びに来た訳じゃないぞ？」

「極秘…任務？？」

「ああ、だか「キョウ君、ゲートが消えちゃったよ？」って何！？」なのはには戻ってもらおうとしたのだが…あ、ホントだ…消えてーら…

「……」

どうしようか考えていると…

「…ねぇ、キョウスケ君…その極秘任務？私にもお手伝い出来ないかな？」

「は？なのは…何言って…」

「足手まといになるかもしれないけど…私も…私だってキョウスケ君の力になりたいの！！」

…う～ん…ゲートは閉じちまったし…
何より…こうなったなのははテコでも動かないからな～
仕方ないか…

「…ちゃんと僕の指示に従ってくれよ？」

「えっ！？お手伝いしていいの？」

「ま、ゲートも閉じちゃったし…今更戻れとも言えないしな」

「あ、ありがとう！！キョウスケ君♪」

さて…今回のパーティーになのはが加わった事で…まずしなくてはいけない事が…

「とりあえずなのは、まず髪型変えてくれ。そうだな…ポニーテールにでもしてくれ」

「ふぇ！？ど、どうして？…で、でもキョウスケ君の好みがポニーテールなら…よ、喜んで変えるの／／」

「…キョウ君ってポニーテールが好きなんだ…私も伸ばそうなか？」

…何か話しが違う方向に？

「はぁ…なのは、僕は別にポニーテール好きとかではないぞ？」

「えっ！？そ、そうなの？」

ああ、残念ながらポニーテール属性はないぞ？

「じゃあ何でキョウ君はポニーテール何て急に言ったの？」

…いや、さくら…貴女は少なくても理解していないと…

「…なのは、ちなみに此処がどこか解るか？」

「え？ここって…あれ？海鳴市…だよね？」

「半分は正解かな？　さくら、答えは？」

「ほぇ！？えっと…平行世界の…あっ！そっか！！だから見分けが付くようになのはちゃんの髪型を！！！」

ようやくさくらは気付いたようだな～

「ま、そーゆー事だ。正解したさくらにはご褒美として頭を撫でてあげよう」

―ナデナデ

あ、何か久々の感触だな～　和む～

「はにゃ～～ん／／／」

さくらは…ちょっと人様には見せられない顔をしている…はっ！？

「むーーーっ！！キョウスケ君！！そんなご褒美あるなんて聞いてないの！！」

まぁ…思い付きで行動したからね（笑）

「ま、冗談はさておき…なのは、此処は【僕たち】が住んでいる海鳴市ではないんだ
リリ…ゲフン！…
平行世界の海鳴市なんだよ？」

「……ふぇ？」

…まぁ　いきなり言われてもピンとこないか～

「あ～…つまりだな、この世界には【ｉｆ】の世界…まぁ僕が居なかったらどうなっていたかって世界…かな？」

僕はイレギュラーだからね～

「え？え？それって……えええええぇぇえ！！！？」

予想道理、混乱したか？

「落ち着け、なのは！」

―ピシッ！

「あうぅ！」

とりあえずなのはにはデコピンをして落ち着かせた

「でだ、この世界は平行世界…つまりこちら側のフェイトやはやて…勿論なのはも居るんだ」

「ふぇぇ!?わ、私がもう1人いるの!?」

「うん、だからキョウ君はこちら側のなのはちゃんと見分けが付くように髪型を変える様に言ったんだよ…ね？」

まあね～

「そ、そっか…うん、解ったの！じゃあ髪型変えるね」

そう言い、なのはは髪型をポニーテールに…

ん？サイドポニーではないですよ？一応…

「それでキョウスケ君、これからどうするの？」

「ん？ああ、こちら側の協力者にコンタクトを…」

と、その時！！

―キィィィン！！

「えっ！？結界！？」

突如として、あたり一面結界に覆われた！！

「…はぁ、イキナリ戦闘しないといけないのか…インフィニティ！」

『…ここから北に向かった所に魔力反応が…近くにアインストの反応もあります』

ここから北…町のど真ん中かよ！！

「ちっ…いくぞ！なのは、さくら！！」

「「うん！！」」

「インフィニティ…」

「レイジングハート…」

「「セットアップ！！」」

さてと…チャッチャと片付けますか！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――市街地――

クロノＳｉｄｅ

くっ！！何なんだコイツ！！
こんな奴見た事ないぞ！？

―ズカァァァン！！

「「きゃあああ！！！」」

「！？大丈夫か！？なのは！フェイト！」

「う…うん、何とか…」

「私も…大丈夫…」

口ではああ言っているが…2人とも満身創痍だ…

「クッ！！たった1体に僕たちがここまで…」

大体、僕らの魔法攻撃が半減されるって！？しかも遠距離砲撃を放つわ妙な触手で攻撃するわ…

せめて…はやて達が居てくれれば…

「（クロノ！！大丈夫か！？）」

「（大丈夫…と言いたいが…かなりピンチだな…それよりユーノ、結界の維持頼むぞ！）」

「（ああ、わかっ…ッ！？クロノ！！結界の外から魔力反応が！！）」

…本局からの増援？…いや、それにしては対応が早過ぎる…

「（見えて来た！！…えっ！？な、なんで…）」

「（ユーノ！どうした！？）」

「（そ…そんな…だって…え？ちょ…うわあああああ！？）」

「（おい！どうした！応答しろ！淫獣！！）」

くそっ！念話が繋がらなくなった…

「クロノ君…？どうしたの？」

「…ユーノとの念話が途絶えた…」

「ええ！？ユーノ君が！！？」

「大丈夫なの？クロノ…」

「…結界がまだ存在しているから大丈夫とは思うが…」

ユーノのあの慌てよう…まさか新たなアンノウンか！？

くそっ！！せっかく闇の書事件が解決したばかりだというのに！！

―ブォン！

〔クロノ！聞こえるか！？というか無事か！？〕

「ギ、ギリアム少将！？」

少将自ら通信！？何で！？

〔今そちらに援軍が向かっているのが…〕

という事は…やはりさっきのは援軍なのか？

ならユーノは一体どうして…？ん？

「あの…どうかしましたか？少将？」

何か言いづらそうなカンジ？

〔まぁ…何だ、驚くなよ？ちなみに援軍は独立部隊ＦＡＩＴＨだ〕

ＦＡＩＴＨ…？そんな部隊あったか？

「クロノ！危ない！！」

「■■■■■■■ッ！！」

ッ！？しまった！！アンノウンから高エネルギー反応！？マズイ！

！こちらに攻撃を！？

―ズガァァァン！

…攻撃をされる前に、桃色の砲撃がアンノウンに直撃した！

…なのはか？まったく少ない魔力で無茶して…

「すまないなのは…助か…「クロノ君、私はこっちだよ？」何！？」

た、確かに…砲撃が放たれた方向とは逆の位置になのはは居る…じゃあ誰が！？

「…大丈夫？クロノ君？」

「まったく…いきなりスターライトぶっ放すか～」

「あはは…なのはちゃん…容赦ナシだね」

…そこに現れたのは、見た事がない男女と…

「な…なのはが…２人？」

もう１人のなのはが現れた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

平行世界での出会い

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

平行世界に来たのだが…なのはが着いて来てしまった!?

…はぁ、無事にアインスト退治できればいいが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想・遡る事数分前――

キョウスケSide

僕となのはとさくらはバリアジャケットを纏い、アインストの反応がある地点へ向かっています

「あの結界って…ユーノ君の結界だよね?」

「ああ、この魔力色はユーノだろうな…」

ユーノは結界魔法とかが得意だったからな～

「あ、キョウ君！噂をすればあそこにユーノ君がいるよ！！」

ん？…あ、確かに！

どうやら結界強化に専念しているようだが…よし！

「なのは・さくら！時間がないからこのまま突っ込むぞ！」

そのまま僕は異空間から細雪を取り出した！

「ほぇ！？」

「キ、キョウスケ君？突っ込むって…ユーノ君にちゃんと話せば…」

「その話す時間すら惜しいからな！！とりあえず結界をぶった切る！！」

「「ええーーー！！？」」

「２人とも！！僕の後ろに！！…いくぞ！！」

僕は細雪を構え…結界に突っ込んだ！！

…何かユーノがなのはを指差して慌てていたようだが…まぁ些細な事だ！！

―ザシュ！！…シュゥゥゥ…

細雪を一線すると…結界の一部は消滅！！僕たちは結界内部に侵入

した

「…キョウスケ君ってこんな突撃思考だったっけ？」

「あ～…キョウ君は…その、たまに…あはは～…」

「「はぁ…」」

何でそこでため息を！？

「「自覚なし！？」」

…だから何がさ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

で、結界内部に侵入した僕たち…ん？あれは…

『マスター！前方にアインストが！！』

ああ、見えてるよ…あれは確か…アインストグリード…だったかな？見た目植物っぽい…って！？

「キョウ君！あそこにクロノ君が！！」

さくらの指差す方を見ると、アインストの砲撃がチャージされ、クロノを狙ってる場面だった！！

「チッ、間に合うか！？インフ「任せて！キョウスケ君！！」ってなのは？」

なのはが構えたレイジングハートに魔力が集束され…えっ！？いきなりそれぶっ放す…？

「スターライトぉ…ブレイカーーー！！」

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

―ズカァァァン！！

なのはから放たれた魔砲撃はアインストに命中！…って、あれ？

「なのは…スターライトの破壊力が上がってね？」

「うん♪この前発射シークエンスを少し変えて威力上げてみたの♪」

そりゃ…なんというか…

Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩには気をつけないと…

―――回想終了―――

という訳で、何とか間一髪?クロノを助けたんだが…

「…大丈夫?クロノ君?」

「まったく…いきなりスターライトぶっ放すか~」

「あはは…なのはちゃん…容赦ナシだね」

しかし…よくクロノをスターライトに巻き込まなかった…ん?

「な…なのはが…2人?」

クロノが何か驚いて…ああ、そっか!なのはが2人いればそりゃ驚くか~

「な、なのはがもう1人…?」

「え?ええっ!?な、何で私があそこに!!?」

こちら側のフェイトやなのはも驚いているし…って!?

「なのは!フェイト!KY!何ほうけてる!早くソイツから離れろ!!」

あの位で倒せるなら苦労しないし!!

「■■■■■■!!」

案の定というか…砲撃の煙の中から現れた!!

―シュルシュル！！

アインストの触手が近くに居るフェイト達に向かって延びた！

「「きゃあああああ！！」」

ッ！させるかよ！！

―ギュッ…タッ！！

僕は瞬動で一気にアインストとの間合いを詰め…

「クロックマネージャー！！」

相手の時間そのものを一定時間止める能力でアインストの動きを止めた！

「ふぅ…大丈夫か？２人とも？」

「あ…はい、助けてくれてありがとうございます」

「おかげで…助かりました」

「なに、これも任「武器を捨てて手を挙げろ！！」…は？」

振り向くと、デュランダルをこちらに向けいるクロノがいた…はぁ、こっちの世界でもクロノはＫＹかぁ…

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！君達には聞きたい事が

ある!!武器を捨ててこちらの指示に従ってもらおうか?」

…訂正、こっちのクロノの方がさらにムカツク

「クロノ君!?この人は私達を助けてくれたんだよ?悪い人じゃないよ!!」

「そうだよクロノ!!この人が居なかったら…今頃クロノは…」

まぁ、確実に消されてたな~

「それは…だ、だが!!彼らが怪しい人物なのは確かだ!!特にあのなのはに似た人物とか!!」

「ふ、ふぇ!?わ、私のせい!?」

急に話しを振られたなのはは驚いていた…

そりゃ~助けた相手から名指しで怪しいとか言われればな~

「…キョウ君、こっちのクロノ君って性格最悪だね…」

それは僕も同意するぞ!さくら

「…はぁ、こちらの執務官の質もたかがしれてるな~」

「ッ!!なんだと貴様!!」

おー!クロノが凄い目つきで睨んでるよ!!

ま、このままじゃ埒があかないな～

「…時空管理局独立部隊ＦＡＩＴＨ所属　神代恭介だ…ちなみに階級はないが権限等は副元帥と同等だぞ？」

―ピシッ

その瞬間、空気が凍りついた…

「な、なななななななな！！！？」

案の定クロノが真っ青になってガタガタ震えている…ざまぁ！

「で、出鱈目いうな！！大体僕はＦＡＩＴＨなんて部隊知らないぞ！！」

お、思ったより早く再起動したな～

―ブォン

〔いえ、彼の言っている事は本当です。クロノ執務管〕

通信ウインドウがクロノの前に開かれ…あれ？あの容姿って…

「ギ、ギリアム少将！？で、ではアイツ…彼が少将がおっしゃっていた援軍…ですか？」

…なんか、クロノが凄くイヤそうな顔をした…あんちくしょう…後で模擬戦で潰したろか！？

〔…部下の非礼を許してくれ〕

そして、ウインドウの中には…うん、容姿完璧ギリアムさんですね！
ていう事は…

「…貴方がこちら側の…ですか？」

勿論、神族って意味を込めて聞いてみた

〔フッ、君にはこの顔をみせれば通じると君の上司が言っていたぞ〕

ああ、あの全ての元凶のゲーマー駄神か～

「はぁ、それで僕の事はクロノ等には…」

〔一応援軍が行くと伝えたのだが…クロノ執務官、彼等は信用に足る人物だ。それは私が保証しよう
それと彼等の経緯については後ほど話す…いいかな？〕

「は、はい！解りました！！」

…とりあえず…話しは着いたかな？

「とりあえず…マテリア【かいふく】＋【ぜんたいか】セット！！
ケアルガ！！」

―ピカァァァ！！

ダメージを受けてボロボロのなのはとフェイトを回復させた…なのはとフェイトのみを（笑）

「ふぇ!?痛みが…なくなったの!!」

「うん…今までのケガが嘘みたいだ…」

よし、これで2人は大丈「あ、あの…」ん?

「どうした?ダメダメKY執務官?」

「ッ!あ、あの~…僕も…その…回復させて貰えると助かるのですが…」

こちら側の上司に注意された為か、さっきよりは高圧的な態度は消えたが…ふむ…

「ん?助けた恩人にいきなりデバイス突き付け攻撃しようとした…そんな恩を仇で返す人間を回復しろと?」

「うっ……」

流石にバツが悪いのか、目を反らしたな~クロノ

「あ…あの~、神代君…」

ん?こちら側のなのはか?

「どうしました?」

すると、なのははいきなり頭を下げ…えっ!?

「お願いします！クロノ君の事も治してあげて下さい！」

「わ、私からもお願いします！クロノも決して悪気があった訳ではなくて…その…」

ってフェイトまで頭を下げて！？

「ねぇキョウスケ君、そんな意地悪しないで治してあげようよ…」

ってこっちのなのはもか！？

「キョウ君…」

クッ！！これじゃ僕が悪者みたいじゃないか！？

「…ハァ…判ったよ…クロノ、皆に感謝するんだな…【ケアルラ】」

―ピカァァァ

これでクロノも回復した訳で…まぁ使った魔法のランクが前より低いのは気のせいだ！

「まぁ、戦力は少しでもあった方がいいしな」

「「「戦力？？？」」」

こちら側のなのは達が不思議がってるが…だって僕はまだクロックマネージャーでアインストの動きを一定時間止めただけだし…そろそろ…

「■■■■■■！！」

って言ってる側から再起動しやがったな！！

「ふぇぇぇ！！？ま、まだ動けたの！？」

「そんな！？倒したんじゃないの！？」

なのはとフェイトが驚いているが…

「だって…僕は相手の動きを一定時間だけ止めただけだし…」

「なっ！？なんだって！？」

それを聞いたクロノも驚いた…

「大丈夫！さくら！！ユニゾンだ！！」

「うん！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

―ピカッ！

僕はさくらとユニゾン！！

「「えええっ！！？が、合体しちゃった！？」」

「これは…失われた古代ベルカのユニゾンデバイス…？」

こちら側のメンバーは初見なのか驚いてるな～

「よし！なのは！シンクロユニゾンだ！！」

「えっ！？う…うん！！」

なのはは懐から仮契約カードを取り出して唱えた…

「「シンクロ・イン！！」」

―ピカッ

僕となのはは1つになった…

『マスターとなのは嬢がそんな関係に…とうとう大人の階段を…』

…はっ！？いやいやいや！！！！！

普通にユニゾンしただけだから勘違いしないでくれよっ！！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

白騎士降臨

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

平行世界に来た途端、速攻アインストとの戦闘になってしまった…

ふ、不幸だ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「「シンクロ・イン！！」」

―ピカッ！

僕となのははアインストに対抗する為シンクロユニゾンをした

髪はなのはと同じ茶髪っぽくなり、バリアジャケットは白を基調とした姿…まぁ、なのはのバリアジャケットを男性用にした感じだ…

「なのはとは初シンクロだけど…大丈夫か？」

『（……／／）』

……あれ？返事がない？？

もしかして…ミスった？

「さ、さくら！！ユニゾン事故ったか！？」

「（えっと…ううん、シンクロユニゾンは問題ないけど…？）」

大丈夫…？なら何でなのはから応答がないんだ？

『（キ…キョウスケ君……ん／／）』

「な、なのは！？大丈夫か！？返事がないから心配したが…」

…何か妙に声が艶っぽいが…？

『（こ…これ…す…凄く気持ちいい…あん／／）』

……はぁ！？

『（あんっ／／ら、らめぇ～！！／／』）

……前々から思っていたが…フェイトやヴィータもシンクロユニゾンすると毎回コレだよな…

何かあるのか！？シンクロユニゾン！！？

「まぁ、とりあえず…レイジングハート！インフィニティ！！コネクト！！」

―カチッ！ピカッ！！

光に包まれた合成されていくレイジングハートとインフィニティ…

光が収まり、現れたのは…

「∞（インフィニット）レイジング！！」

と命名したランチャータイプのデバイス…ってこれは…

「オクスタンランチャー…だよな？て事は、ヴァイスリッター？」

どうやらなのはとのシンクロはヴァイスリッター系になるようだ…

言い得て妙だな…白銀の堕天使って所が実になのはらしいというか…

『（キョウスケ君！今何か失礼な事考えてなかった？）』

「イ、イエ！？ソンナ事アリマセンヨ？」

…あぶね～ぇ、相変わらずの読心術っぷりだな…

「「「……」」」

ん？　何か平行世界Ｓｉｄｅのなのは達がア然としているが…何かあった？

「（キョウ君～…多分ユニゾンが珍しいからじゃないかな？）」

…そうなのか？

「■■■■■■■ッ！！」

って、それ所じゃねーな！！
アインストが本格的に攻撃体制に！？

「３人とも！！ボサッとしてないで散開しろ！！狙われるぞ！！」

「…ハッ！？そ、そうだ！！
なのは！フェイト！君達は左右に分かれて攻撃を！！」

「「う、うん！！」」

ふぅん…一応は執務官と言った所か…

『（キョウスケ君！私達は？）』

ふっ…勿論…

「派手にぶっ放す！！」

「（…ああ～、なのはちゃんの影響か…キョウ君が変なテンションにっ！！）」

『（ふぇぇ！！？わ、私のせい！？）』

…いや、そんなに感染されてない…と思うよ？…多分？

「…さくら、フェアリースフィアを」

「（う、うん！！スフィア展開！！）」

―ヒュン！ヒュン！

…とりあえず性格汚染の事は後で検討するとして…

さくらの制御の元に僕の周りにスフィアを…

「…つかスフィアの数多くね？」

普段は６つ位のスフィアの数が…何か倍以上あるように見えますが…

「（えっ！？これでも少な目だよ？それと…（ゴニョゴニョ）…な事も出来るよ？）」

…ハァ、ホントにシンクロって反則ぽいよな…

「ま、まぁ折角だし…試してみるか～…フェアリー！！」

―ヒュンヒュン！ヒュン！！

現れたスフィアを操作して、僕の周囲に配置する！

「３人とも一端引け！！巻き込まれるぞ！！」

「「「う、うん！！（判った！！）」」」

僕の声に反応して、アインストに攻撃していたクロノ達は一端距離をとった

「よし、なのは！」

『（…スフィア同調率…７０…８０…９０…１００％！！いつでもＯＫだよキョウスケ君！！）』

「いくぞ！！」

―カチャ！

僕は∞レイジングをアインストに向け魔力を集束していき…

「スターダスト…」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！ドキュ！！

「ブレイカー！！」

《Ｓｔａｒｄｕｓｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》

―ズガァァァァ!!ズガズガズガァァァァ…

∞レイジングがら放たれた集束砲撃…基本的にはスターライトブレイカーの強化版なのだが…スフィアからもスターライトブレイカーが放たれた!!

…まっ、簡潔に説明すると…スフィアと同調させる事で、僕が放つ砲撃系魔法をそのまま同威力で放てるらしい…

…つかスフィアの数をもっと増やしてスターライトぶっ放したら…

…あれ?少なくても惑星破壊可能?

《マスター、目標に着弾確認しました

…というか既に跡形もなく消えてます…まぁあれだけオーバーキルすれば当然ですが…》

インフィニティからの説明でアインストが居た場所を見ると…

「「「……(。д。;)」」」

クロノ達が変な顔を…あれ?街のど真ん中にクレーターなんてあったっけ?

「「「や、やりすぎだ!!(だよ!!)(なの!!)」」」

うぉ!?こちら側のメンバーからツッコまれた!?

「ま、まぁ…あはは~…」

僕は渇いた笑いしか出来なかった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

その頃…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――旅館――

はやてＳｉｄｅ

キョウスケ君が居なくなって、皆で旅館を家捜ししとると…レフィーナさんから通信が入ったんやけど…

「なっ!?なんやて!!!?も１回言ってみい!!!?」

「で、ですから…キョウスケ君は緊急の任務である世界に言ってもらったので…」

「そこやない!!その後や!!」

〔ヒッ!?…え、えっと…なのはちゃんもキョウスケ君の後をこっそり着いていって…〕

―パリン!!

「あ、主はやて…ゆ、湯呑み茶碗が…」

「は、はやて…握り潰してる…」

「で、でもちゃんと魔力で強化してケガしないようにしている所が…まぁ、はやてちゃんらしいというか…」

「フフッ…なのは、また抜け駆けしてるんだね…しょうがないな…徹底的に話し合わないといけないね…」

「…なぁ、レフィーナさん…キョウスケ君らは何処に向かったんかな?…というか何処や!!今から後追い掛けな!!あんの魔王、ほっといたらキョウスケ君に何するかわからへん!!」

「そ、そうだ!!あの高町なのはの事だ!!恭介に寝ている部屋にこっそり忍び込んで…ヤ、ヤベー!!はやて!早く追いかけねーと!!」

ヴィータの言う通りや!!それに…キョウスケ君の貞操を奪うんは私が先や!!

〔…あの~…キョウスケ君が行った場所は…ぶっちゃけザックリ言うとパラレルワールドだから簡単には行けないのよ?〕

……へ?

「「「な、なんだって（やて）ーーー！！」」」

パ、パラレルワールドって！？

〔だから残念ながらはやてちゃん達は行けないのよ…それにパラレルワールドの移動にはキョウスケ君のデバイス【インフィニティ】の高速演算処理能力が必要だから…〕

「つまり…最低でもインフィがいないと…パラレルワールドには行けないん？」

〔それだけじゃないんですけど…まぁそう思ってくれていいです〕

な、なんやて！？

あのインフィが…唯のお笑いデバイスじゃなかったんか…それにしても…

「……フフ…フ…」

「は、はやて？どーした？」

「…ヴィータ…いやな、キョウスケ君はお仕事やから仕方ないんやろうけど…なのはちゃんはな～…ちょーっとお仕置きが必要やなと…なぁシグナム」

「は、はい！何でしょう？」

「すずかちゃんに頼んで…アイアンメイデン用意してもらってな？」

「「「「……は？」」」」

「だからアイアンメイデンをすずかちゃん家から借りて来てほしいんよ…確かすずかちゃんが家の地下にあるって言っとったし…フフッ」

「「「「（な、なんですずか（ちゃん）の家の地下にそんな拷問器具が！！！！？）」」」」

それに…万が一、２人にナニかあったら…キョウスケ君もお仕置きや…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

―ゾクッ！？

な、なんだ!?今とてつもない寒気が!?

「キ、キョウスケ君…何か今悪寒が…」

「な、なのはもか?」

一体何か…風邪??

おまけ2

―ゾクッ!?

「ッ!?」

「な、なのは?どうしたの?」

「う、うん…何か分からないけど…妙な寒気が…」

平行世界のなのはにも影響を与えていた…

インターミッション（前書き）

みなさん今晩は
ヨシユキです。

今回の地震で私の地区は無事でした

こんな中、更新するのはどうかと思いましたが…
このような小説でも皆様の疲れた心を癒やせるなら幸いです

インターミッション

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

アインストグリートを撃破（オーバーキル）した僕たち…

その後、平行世界側のクロノ達とアースラに向かったのだった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――アースラ――

キョウスケＳｉｄｅ

「…平行世界…俄かには信じられないわね…」

僕たちはブリーフィングルームでクロノ達とリンディさん達を加え、現状を説明中…

〔ですが事実ですよリンディ提督〕

ディスプレイには…この世界の神らしい人がリンディさんと話し合っている

「…まぁ、ギリアム少将がおっしゃるなら…それに…ねぇ」

ため息混じりで僕の隣に座るなのはに目をやって…

「ふぇ!?リ、リンディさん…?私の顔に何か付いてますか?」

…まぁ、なのはが2人居て…簡易検査とはいえＤＮＡや魔力パターンが完全一致で同一人物って結果出ればな～…

「しかしギリアム少将、何故わざわざ平行世界から彼等を?そもそも少将は平行世界に干渉が出来るのですか?」

クロノは何気に核心を付いてくるし…

〔…後者の質問に関しては…出来ると言えるが…何故彼等を…また、どうやって等は極秘事項にあたるので…すまないな〕

ま、神様同士の繋がりです!とかは言えないよな～…しかもこっちにアインストが現れた原因が…神様のせいとも…

「それで…ギリアム少将でしたか?僕はこれから残り2体のアインストを撃退すればいいのですか?」

資料によると、現れたアインストは【クノッヘン】【グリート】【ゲミュート】の3体…グリートは撃破したから残り2体か…

〔いや、残りアインストは1体だ〕

……は？

「残り1体…ですか？こちらの情報とは違うようですが…？」

「…それは僕から説明しよう…」

と、クロノが手を挙げた

「君が来る数日前…1体目のアインストが現れたんだ…
それに対応したのが…八神はやてとヴォルケンリッター達だ」

「なっ！？そ、そういや…こっちに来てからはやて達を見かけなかったが…」

はやて達がアインストと戦闘って無茶苦茶な…ハッ！？

「おい！！はやて達は無事なのか！？」

僕は興奮のあまりクロノに掴みかかった！

「お、落ち着け！神代恭介！！
…はやてとヴォルケンリッター達は無事だ！」

「そ、そうか…「ただ…」ってオイ！？」

「ク、クロノ君…はやてちゃん達どうなったの…？」

なのはも平行世界とはいえ心配して泣きそうな顔をしてる…

「はやて達はアインストを倒す事が出来たが…5人がかりでも相打ちがやっとだった…今は集中治療室に…」

「そ…そんな…」

「…オイ、クロノ…はやて達が戦っている間、お前達は何をしていた?」

少なくても、アースラチームで対応していれば…勝てなくても逃げる位は出来たろ!?

「…済まない…アンノウンの反応があった地域に偵察任務ではやて達だけを送ったのは僕のミスだ…気付いた時にはもう…」

「クロノ…貴方だけのせいではないわ…私達にも落ち度はあったのだし…」

「…母さん…」

クソッ!僕がもっと早く来ていれば…!!

「…はやて達の容態は?」

「はやて達はダメージが深く…何とか一命は取り留めたが…いつ目を覚ますが…」

思った以上に深刻なダメージって事か…

「…ギリアム少将、はやて達の治療の許可を」

僕が持っている回復薬や回復魔法なら…助ける事が出来るかも！！

〔…そうか、君の力なら…いいだろう。それに元々ＦＡＩＴＨの権限は私以上だ　君の判断で行動してくれ〕

「…こちら側でもＦＡＩＴＨの権限は通用するのですか？」

ＦＡＩＴＨなんて僕の世界にしかないと思うんだが…

〔なに　その点は心配しなくていい…あの伝説の３提督も承認済みだ…勿論、君の事も知った上でなので気にしなくていい〕

「そ、そうですか…」

…何か、結構簡単に認めるんだな…伝説の老人会の方々って

「ならクロノ、はやて達の所に案内を…ってどうした？リンディさんも…？」

２人とも驚いた顔しているけど…？

「…あなたって…はぁ…いえ、何でもありません…クロノ、彼等を丁重に案内してあげて」

「…は、はい母さ…リンディ提督…」

「そうだ、なのはもさくらも付いてくるだろ？」

「「勿論だよ！！」」

とりあえず…まずははやて達の治療が優先だな…

と言う訳で、治療の為はやて達の病室に向かっているのですが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「なぁクロノ、何でさっきリンディさん共々あんな呆れ顔してたんだ？」

「…君は…ハァ、ＦＡＩＴＨだったか？あの３提督がその権限を認めたという事は…君は実質管理局のＮｏ．２と同等になったのだ…非常識を通り越して呆れるに決まってるだろ！！」

…ああ、なるほどね

「まぁ…ホラ、アレだ…僕は平行世界の住人だし、一時的な措置だろ？」

アインストを退治したら元の世界に戻るんだし

「…にしても非常識な…おっ、着いたぞ」

「ここか…」

―プシュ

僕が病室の扉を開けると…

「…あ、クロノ君」

「……クロノ……」

中にはこちら側のなのはとフェイトが居た

「なのは！フェイト！君達はまだ治療中のはずだ！！」

「大丈夫だよクロノ君…この位かすり傷だよ…」

「…それより…はやてやシグナム達の方が…あ…君達は…」

フェイトが僕らの存在に気付いたようだ

「やぁフェイト、はじめまして…と言うのも少し変かな？」

「えっ！？どこかで会った事ありますか？」

「いや、こちら側ではないよ」

まぁ戦闘中はドタバタしてたからな…

「…本当にフェイトちゃん、キョウスケ君の事知らないんだ」

僕の背後に居たこっちのなのはが顔を出してきた

「えっ!?な、なのは!?で、でもこっちにもなのはが!?え?」

「わ、私が…じゃあ貴方達がさっきの人達?」

「そうだよなのは…僕たちは平行世界から来たんだ」

――――クロノ説明中――――

「という訳なんだ…」

「平行世界の私…」

「うん、何か不思議な感じだね」

「キョウスケ、じゃあ平行世界にも私は居るのかな?」

「ああ、フェイトは勿論はやて達も…っと、そうだった!はやて達の治療をしないと…」

「えっ!?はやてちゃん達の治療!?」

「はやて達は…助かるの?」

「そうだよ2人とも、キョウ君ならきっと何とかしてくれるよ!絶対大丈夫だから安心して…ね?」

「まぁ…さくらの言う通り大丈夫だよ…その前に…」

―ガサゴソ

僕は空間からエリクサーを取り出し

「先ずは2人の怪我を治さないとな　2人ともコレを飲んでみて」

2人にエリクサーを渡す

「これは…？」

「…栄養ドリンク？」

…ヲイヲイ

「いや…まぁ見た目はともかく…中身は最高ランクの回復薬だから！ケガは勿論、体力魔力完全回復するからさ」

「ホ、ホント？…じ、じゃあ…ゴクゴク」

「う、うん…私も…ゴクゴク…」

―ピカァ！

2人がエリクサーを飲むと、傷がみるみる回復していく…

「あ…痛みが全然なくなったの！！」

「ほ、ホントだ…身体も魔力も回復しているのが解る…す…凄い…」

「このリポ○タン…じゃなく、エリクサーをはやて達に飲ませれば大丈夫な筈だよ？ほら、はやて達の分！」

さらにエリクサーをなのは達に渡した…大量生産しといてよかったな～

「そ、そっか！！じゃあ私はやてちゃん達に飲ませてくるの！！」

「ま、まってなのは！！私も手伝うよ！！」

なのはとフェイトはエリクサーを受け取ると、はやて達が居る奥の部屋へと向かった

「さて、これではやて達は大丈夫だろ…≪（キョウスケ…）≫ん？」

この声は…リインフォース？

「（どうした？リインフォース？）」

≪（ありがとうキョウスケ…平行世界とはいえ、私の大切な人…愛する騎士達を救ってくれて…）≫

「（ただ僕は…出来る事をしただけだよ？）」

≪（それでも…ありがとう…）≫

「（フッ、どういたしまして）」

リインフォースも律儀だな…そういやこちら側のリインフォースってどうなったんだろ？

…やはり原作道理か…？

「…ョ…ス……キョウスケ君ってば！！」

「うわっ！な、何だなのはか…脅かすなよ…」

「何だ…ってヒドーイ！！私、何度も呼んだのに…キョウスケ君ったら上の空なんだし！！」

…ああ、リインフォースとの念話に集中し過ぎたか？

「ゴメンなのは！ちょっと考え事してたんで…それで何かな？」

「…もぅ…キョウスケ君、これからアインストを倒しにいくの？」

「ああ、そーいや話しの途中だったな…クロノ、残り1体のアインストは見つかっているのか？」

「…いや、まだ発見されていない…」

…じゃあ見つかるか手掛かりが出て来るまで待機だな…

「…済まないクロノ、僕となのはとさくら…アインストを退治するまで滞在するのだが…アースラの個室を貸してくれないか？」

確か向こうのアースラも個室けっこう空いていたと思ったから…こっちも空いていると思うが…

「ああ、それは構わない　部屋もかなり空いているしな」

やっぱ同じか～

「じゃあ暫くお世話になるよクロノ」

「ああ、」

こうして暫くはアースラ常駐という事が決まった…のだが…

なぜああなった？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

変わらぬ？日常…か？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

平行世界で暴れていたアインストを倒す為、僕とさくら（勝手に付いてきたなのは）

とりあえずアースラに滞在して最後の一体のアインストの行方を追っているのだが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

ど…どうしてこうなった？

ん？いきなりどうしたと？

それは…

――――八神家――――

「キョウスケ君らの面倒は私がまとめて見てあげるな♪」

「あ～…いや、はやてさん?僕らはアースラに厄介になってるから…」

「何言うとるん!!キョウスケ君は私らの命の恩人や!!その恩は返さなあかん!!」

…とまあ、エリクサーで完全回復したはやてが僕らに家に住むようにと絶賛興奮中です…

「そうだ神代!我らや主を救ってくれたのに、その恩を返せないのは騎士の名折れだ!!」

「ま、まぁ…別に助けてくれって頼んだ覚えはねーんだけどよ…はやてを助けてくれた事は感謝してるし…お礼位はしねーとな」

「ヴィータちゃんったら素直じゃないんだから～　キョウスケ君、こんな事を言ってるけど…私達皆、貴方に感謝しているのよ?ねっ♪ヴィータちゃん?」

「なっ!?シ、シャマル!!テメー何いい加減な事言うんだよ／／

！！」

「あら、だってホントの事じゃない～。ね♪ザフィーラ？」

「……（コクッ）」

とまあ…ヴォルケンズ達からも感謝されっぱなしなのである…

「にゃはは、キョウスケ君の回復薬って効き目抜群だもんね～」

「その気になったらキョウ君って…死者蘇生も出来るんじゃない？」

うっ…それは微妙に否定出来ないかも…　何気にフェニックスの尾もあるし…

「しかし…平行世界のなのはちゃんか～…　髪型以外ほとんど見分けつかへんなぁ」

「うん、こっちのはやてちゃんも向こうのはやてちゃんと変わらないよ？」

「へ～…なぁ、なのはちゃん？向こうの私ってキョウスケ君とはどんな感じや？」

「えっ！？ど、どうって…にゃはは…さくらちゃん、どうかな？」

「ほえぇ！？わ、私に丸投げ！？
え…えっと…基本的には仲はいいよ？ただ…」

「ただ…何や？」

「そ、その…ね…」

―チラッチラッ

…何か、さくらの視線を感じるのは…気のせい？

「…も、もしかして…向こうの私って…やっぱり…／／」

さらにはやての視線まで追加されて…あれ？何かはやての視線が熱っぽい？

「えっと、実は…はやてちゃんだけじゃなく…なのはちゃんやフェイトちゃん…ついでに言うとヴィータちゃんシャマルさんシグナムさん…は微妙かな？（それと私も…／／）」

―ピシッ

ん？空気が変わった？てか凍りついた？

「な、なんや！？その天元突破的な超弩級究極リア充状態は！？」

「にゃはは…ついでに言うとアリサちゃんとすずかちゃんもなんだ～…ホント毎回Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてるのにライバル増やしてるの…（ボソッ）」

な、何か寒気が！？

「な…ハァ…そこまで行くと、逆に清々しいな…しかしキョウスケ君、いつか後ろから刺されるで？」

なんでさ!?僕が一体何をしたって!?

「…これは重症やな…向こうの私も苦労しとるんやな～」

しかも、こちらのはやても何気に心読むし!?

「…なぁはやて、その【何とかりあじゅう】…って何だ?」

「あんなヴィータ…それは私らがキョウスケ君に（ゴニョゴニョ）なんやって～」

はやてがヴィータに耳打ちで何か話した瞬間、

「なっ!!?なななななな／／!!!?」

ヴィータは真っ赤になって僕を指差した…だから何故?

「って何だヴィータ?僕の顔に何か?」

「～～ッ!!／／な、何でもねーっ!!な、何で向こうの私がコイツと…／／べ、別にイヤッて訳じゃねーけどよ…（ゴニョゴニョ）」

後半が聞き取れなかったが…とりあえず、おもいっきり動揺してるよね?

「と、とにかくや!!キョウスケ君らは家に泊まってもらうのは決定事項や!!リンディさんも（面白がって）了承済みやから拒否権はないで!!」

「ちょっと待てはやて!?今変な単語が隠れてなかったか!?」

「そこは気にしたら負けや♪」

クッ!こっちに来ても扱いは同じかよ!?

「まぁキョウ君、むこうでもはやてちゃんの家に住んでるんだし…」

ちょ!?さ、さくらさん!?今それを言うんすか!!?

「…へっ!?さ、さくらちゃん?今何て言うたん?」

「ほぇ?キョウ君がはやてちゃんと一緒に住ん「だぁ!?ちょ、ちょっと待て!!」むー!?」

あわててさくらの口を押さえたが…

「…えっと…キョウスケ君、私ら同棲しとったん／／?私ら既にそんな進んだ関係に…／／」

何かはやてさんは、間違った方向に勘違いなさってるし!?

―カチャ!

「…神代、どういう事だ?」

シグナムがレヴァンティンを構え…って!?

「ちょ…ま、待て待て待て!!落ち着けシグナム!!」

―ガチャ！

「…オメー、はやてに何しやがった？」

ヴィータさんもグラーフアイゼンを構えてらっしゃるし！！？

「いや…だ、だから…確かにはやての家に厄介になっているが…ただ下宿させてもらってるだけだよ！！」

うん！凄く正しく事実を伝えたよな！？

「では主はやてには何もしていないのだな？」

ギクッ！

「……モ、モチロンナニモ…シテマセンヨ？」

「何故片言になっている？」

ぐっ…ヤバイ…何としても最重要機密だけは『おや、はやて嬢とキスしてませんでしたっけ？』ってオイ！？

「イ、インフィニティ！？テメ！！今まで沈黙してたのに！？」

毎回ここぞという場面で爆弾投下しやがって…ハッ！？

「…ほぅ、神代…詳しく説明してもらおうか？」

「テメー！！はやてに『ついでに言うとヴィータ嬢、貴女もマスタ

ーとキスしてますよ』んなっ！？／／」

イ、インフィニティ！！お前！何空気読まない発言を！！？

「…キョウスケ君、私という者が居ながらヴィータともなん？向こう側の事とはいえ…浮気は関心せんな～…」

こ、こちら側のはやてさんも凄く素敵な笑顔でどす黒いオーラを出してますね…

「テテテテメー！？どーゆー事だ！！？私にまでキッ…／／キスしただとぉーーー！！？」

…いや、正確にはされた方なんですが…って、冷静にツッコミ入れている場合じゃねー！！！

「だ、だから今説明「言い訳無用だ！！男なら責任取って腹を切れ！！」ってシグナム！！」

「安心しろ、恩人のお前の為に介錯位はしてやる」

全っ然安心できねーー！！！

「な、なのは！！さくら！！助け「テメー今すぐブッ潰してやる！！／／」って！！ヴィータ！！落ち着けーー！！」

こ、これじゃ元の世界と変わらねー！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

さくらＳｉｄｅ

「あ～あ…ねぇなのはちゃん、そろそろキョウ君の事助けないと…」

「ん～…キョウスケ君なら2人相手でも大丈夫だろうけど…お家壊れちゃうのはマズイよね～…」

キョウ君の心配じゃないんだ！！？

「だってキョウスケ君は無敵だもん♪」

信頼してるんだな～なのはちゃん…

そうだよね！何たってキョウ君なんだから何があっても絶対大丈夫！！

「ち、ちょい待ち！シグナム！ヴィータ！そんなデバイス振り回したら家が壊れてまう！！」

あ～…でも、はやてちゃん…さすがにお家崩壊の危機感があったみたい…

あ！そうだ！！

「あの！シャマルさん！！とりあえず結界張ってもらえますか？」

それなら何とかなりそうだし…私も結界魔法覚えようかな？

「そうね～、はやてちゃんのお家が壊れちゃうのは困っちゃうし…えい！」

―ブォン！

「これでよし！っと…」

シャマルさんに結界を張ってもらったから…これで大丈夫！！

…と思ったら

「シャマルでかした！！これでおもいっきりぶっ潰せるぜ！！おら！！逃げんな恭介！！わ、私のキス返しやがれーー！！」

―ズカーーン！！

……あれ？

「…もしかして…悪化してるかな？なのはちゃん…」

「えっと…にゃはは～…」

…キョウ君、ごめんなさい…でもでもお家は守られたよ？

「ふ、不幸だーーー！！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

その頃…

――――旅館――――

すずかＳｉｄｅ

「ええーー！！おにーちゃん居ないの！！」

「そうなのよ！！全くアイツは！！せっかく温泉に来たのに！！！」

居なくなったキョウスケ君の事を捜しに来た美夏ちゃん…

ホント何処に行ったんだろう…？

「ア、アリサちゃん…キョウスケ君も何か用事があったのかもしれないし…」

「ハァ…すずか、アンタ本当にいいお嫁さんになりそうね…」

「そ、そうかな？／／えへへ♪」

キョウスケ君のお嫁さん…ふふっ／／やっぱり結婚式はウエディン

グドレスがいいな♪

「はぁ…改めて思うけど…おねーちゃんのライバル多すぎだよ～」

「チッ…やっぱり春香もキョウスケの事を…」

「ア、アリサおねーちゃん…何気に舌打ち!?」

「まぁいいわ!誰が来ようがキョウスケは渡さないんだから!!」

「アリサちゃん…それはこっちの台詞だよ??」

「ふん!!いくらすずかだって…これぱっかりは譲れないんだから!!

勿論なのはやフェイトやはやてやヴィータにも!!」

フフフ…でもねアリサちゃん…私だってキョウスケ君は譲らないよ?

…万が一の場合は愛人でもいいかな?

「そーいえば、おにーちゃんに今1番近い人って誰なの?」

「「そ…それは…」」

…そーいえば…誰だろう?

―ガラッ

「失礼する」

そう考えていたら…シグナムさんが慌てて入って来た

「あれ？シグナムさん？どうしたんですか？」

「月村、すまないのだが…主がある物を貸してほしいといっているのだ…貸してはくれないだろうか？」

「はやてちゃんが？何をです？」

「……その…何だ……アイアン…メイデンだ…」

「「「……は？」」」

アイアンメイデンって…

「シグナムさん…それってアレですか？トゲトゲが付いた…鋼鉄の乙女的な？」

「ああ、そうだ」

「ちょ！！ちょっと待った！！何ではやてがそんな物を！？というか、すずかが持っている訳が…」

「実は…神代が急な仕事で出掛けてしまってな…しかも高町がその仕事に一緒に付いていってしまった事に主は腹を立てて…」

―ピシッ！

「…解りましたシグナムさん…すぐこちらに取り寄せます！！」

…なのはちゃん…抜け駆けは…だめだよね？

「つか持ってるんかい！？てかすずか！！何でアンタそんな物騒な物をフツーに持ってるのよ！？」

「えっ？うーん…嫁入り道具？」

「「こ…怖ッ！！？」」

「えっ？怖くないよ～　いやだな～アリサちゃんも美夏ちゃんも～…フフ…フッフフ…」

…なのはちゃんの血…美味しそうだから楽しみだな～…

「で、では頼んだぞ？」

―ガラッバタン！！

「ちょ！？ちょっと！！？シグナムさん！！この雰囲気どうしてくれるのよ！！？」

「フッフフ…フフフ…」

「すずかおねーちゃん…壊れちゃってるしーー！！？」

「2人トモ？ワたしはふツうダヨ？」

「「目を単色にしている人が言う台詞かーーー！！？」」

Side Out

あれ？何気に禁断の？フラグ！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シグナム&ヴィータのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩで半死半生状態の僕…

い、一体僕が何をしたーーー！！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

で、次の日…

――アースラ――

キョウスケＳｉｄｅ

「…で、クロノ…アインストの反応はあったか？」

「いや…まだ反応はないが…というか…どうしたキョウスケ!?1日でかなり窶れてないか!?」

「…ハハハ、詳しくは前話を読んでくれ…」

なんとかシグナムとヴィータの説得には成功したが…ライフポイントがガリガリに削られたよ…

「??…ところで…そっちのなのはは今日はどうしたんだ?」

「ん?なのはは今朝こちら側のなのはが来て翠屋に連れていった…僕は遠慮して、代わりにさくらに行ってもらったが…」

…翠屋で何が起こっているか容易に想像できるな～

おそらく…こちら側のなのはが士郎さん達に紹介してるんだろうな…知らない人が見たら双子だよな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――その頃、翠屋――

さくらＳｉｄｅ

私となのはちゃんは、こちら側のなのはちゃんとフェイトちゃんに連れられて翠屋さんに来ているんだけど…

「じゃあ2人とも、ちょっと待っててね♪行こうフェイトちゃん」

「う、うん…なのは、楽しそうだね？」

「にゃはは、だってお父さんやお母さん達の驚く顔が見られるんだもん♪」

…こちら側のなのはちゃんも…やっぱりちょっと黒いみたい…

「…さくらちゃん、今すっごく失礼な事考えてなかったかな？かな？」

うっ…こっち側のなのはちゃんに気付かれた!?

「ほぇぇぇ!?そ、そんなことないよ～…」

「そう？ならいいんだけど…」

ふぅ…危ない危ない…キョウ君の気持ちが少し解ったかも…

「じゃあ2人はまっててなの♪」

そう言うと、扉に手をかけて…

―カランカラン

「たっだいま～!!」

「あ…お邪魔します」

元気よく先にこちら側の2人が翠屋に入っていった…

「お帰りなのは、フェイトちゃんもいらっしゃい」

「ねぇお父さん！お母さん！新しいお友達が2人居るんだけど…入ってもらっていいかな？」

「あら、なのはのお友達なら大歓迎よ」

「ああ、入ってもらいなさい」

「ふふふ、お父さんもお母さんも驚かないでね？入っていいよー！さくらちゃん、なのはちゃん！」

「「な、なのはちゃん！！？」」

あ、やっぱり同じ名前だから反応したみたい…というか同一人物なんだけどね…

「お、おじゃましまーす…」

先ずは私が先に入り…

「えっと…こ、こんにちは？になるのかなぁ？」

私の後ろからなのはちゃんが続いて入る…

「「……な、なのはが…2人！？」」

うん、やっぱりそういう反応になるよね～…

「にゃはは～、やっぱりお父さんもお母さんも驚いたよね♪」

「な、なのは…彼女は一体…？」

「どうみても…他人の空似…には見えないのよねぇ…」

平行世界とはいえ、娘には変わりないもんね～

「へへっ、実はね……」

――――なのは説明、時々フェイトがフォロー中――――

「「へ、平行世界！？」」

「うん！そうなんだよね～♪なのはちゃん」

「にゃはは…」

「私も初めて見た時はビックリしました」

「…やはり魔法というのは何でもアリだな…」

う～ん…魔法と言っても万能じゃないんだけど…キョウ君のは別格…というか桁外れ？寧ろ時々神様にすらケンカ売ったりするからな～…

「それにしても…なのはそっくりね～

あ、平行世界だから当たり前ね」

「ところでなのは、そちらのお嬢さんは？」

あ、私の事？

「えっと、はじめまして
キョウ君のユニゾンデバイスのさくらです」

「キョウ君？？」

「ユニゾンデバイス？？」

…あれ、なのはちゃんのお父さんとお母さんが？顔だけど？

「あ！お母さん、ユニゾンデバイスって言うのは、私のレイジングハートの人型版だと思ってくれればいいよ？」

こっち側のなのはちゃんがフォローしてくれた…そっか、ユニゾンデバイスって珍しいってキョウ君も言っていたっけ？

「…なのは、キョウ君って言うのは誰だい？」

「へっ？えっと…なのはちゃんと一緒に来た平行世界の男の子だよ？ねっ？なのはちゃん」

「うん！それでね…なのはの恋人なの♪」

―ピシッ！

な、なのはちゃん！！キョウ君はなのはちゃんの恋人じゃないよー！！

というか…今、空気が変わったような…？

「ほ、ほぅ…平行世界のなのはの恋人か…これは後で挨拶をしないといけないなぁ…」

あ～…空気が変わったのはお父さんのせいか～

―ドドドドッ！！

ん？な、何が外から凄い音が！？

―バタン！！！

「な、なのはに恋人だとぉぉぉぉぉ！！！！！？」

ほ、ほぇぇぇぇ！！？

な、何か凄い勢いで男の人が入ってきた！！？

…ってあれ？確かこの人は？

「「あ、お兄ちゃん！お帰りなさいなの」」

確かなのはちゃんのお兄さんの恭也さんだっけ？前にキョウ君がフルボッコにしたって言っていた…

「ああ、ただいまなの……は……」

あれあれ？お兄さんがなのはちゃんを見て固まってる？

「…疲れているのか?…なのはが2人いるような…」

あっ!お兄さんにはまだ説明してなかった!

「えっと…なのはのお兄さん、実は…」

――フェイトちゃん説明中――

「……という訳なんです」

フェイトちゃんがお兄さんに説明してくれたので、大体は理解してくれたようです

「…ねぇさくら、何か私…さっきからフォローとか説明とかしか出番がないような…」

そ、そこは気にしちゃダメだよフェイトちゃん!

「平行世界のなのは…なのか?」

「「そうだよお兄ちゃん♪(ニコッ)」」

「グハッ!?」

―バタン!!

ツインなのはちゃんの精神攻撃?を受けたお兄さんは…鼻血を出して倒れちゃった!?

「「お、お兄ちゃーーん!??」」

なのはちゃんsが慌てて駆け寄ってお兄さんを揺さぶっているけど…たぶん逆効果だよ?

「……な、なのはが2人……ツインとポ、ポニーテール…萌え…グフッ!!」

な、何か血を吐きながら危ない発言してなかった!?

あ…確かなのはちゃんのお兄さん…シスコンだって前キョウ君が言ってた!!

と、とりあえず…なのはちゃん達をお兄さんに近付けちゃいけないようにしないと…

「えっと…さくら、こーゆー場合どうしたら?」

「…フェイトちゃん、多分トドメを刺した方がいいんだけど…一応なのはちゃんのお兄さんだから…助ける?」

「な、何で疑問形!?というかトドメって…」

多分それが世の中の女の子の為だ!ってキョウ君なら言うからだよ?(笑)

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

ん？今何かさくらから電波があったような…？

「どうしたキョウスケ？」

「いや、何でもない…」

「そうか、確か今日はフェイトも朝からなのはの所に行ったのだが…」

「フェイトも？」

「ああ、君のくれた薬で傷が回復したので…てっきり僕との日課の模擬戦でもするのかと思ったのだが…」

「…クロノ、こっちのフェイトもバトルマニアか？」

「……というと、そちら側のフェイトもか？」

…まぁ、まだ病的な程じゃないんだけどな～…

「「……ハァ」」

もうため息しか出ないや…

「あ、2人とも～！そんな深いため息つくと幸せが逃げちゃうよ～！！」

と、明るい声でいきなりエイミィさんが現れた！！

…待ち伏せ？

「エイミィ…ため息もつきたくなるさ…毎日毎日フェイトの模擬戦に付き合ってるんだから…」

…毎回模擬戦してたのか！？そりゃクロノも大変だな…

…でも毎回模擬戦している割には…クロノの戦闘スキルってあんまり高くないような…

まぁ武士の情けで口には出さないが…

「あ、キョウスケ君！いらっしゃ～い」

こちらのエイミィさんもテンション高いな！？

「お邪魔しますエイミィさん」

「ねーねー！！キョウスケ君！！向こう側の私ってどんな感じかな～？

やっぱり美人で知的でパーフェクトな感じ？」

…訂正、バカッぽさが増してるかも…

「…なーんか失礼な事考えてない？」

「い、いえ！そんな事ないですよ！！」

だから何で心読まれるかなぁ？

「平行世界と言っても、そんなに変わってないですよ？」

美人で知的でパーフェクトかどうかは…まぁ…ねぇ？

「所でエイミィ、こんな所でどうしたんだ？」

「あっ！いっけなーい！！キョウスケ君、アインストの反応があったよ！！」

「そうですか、アインストの反応があっ……」

……なっ！！？

「「そ、それを早く言えーーーー！！！」」

のんびり世間話している場合じゃないだろ！？

「だって～～、私もキョウスケ君と親睦を深めたかったんだもん！！」

だもん…ってエイミィさん…

「それにキョウスケ君は今じゃアースラ女子局員の１番人気なんだよ？

かなりのイケメンで将来性アリ！即ファンクラブが出来る位だし…

こーゆー機会がないと話し掛けるなんて恐れ多くて…」

な、何だそりゃ！？

「…はぁ、色々ツッコミたい所ですが…今はアインストの反応が優先ですね…ブリッジに急ぎましょう」

「あ、ああ…エイミィ！いくぞ！！」

「あーん！？ま、まってよキョウスケ君！クロノ君！！」

しっかし…アインストより僕との話しが優先って…仕事してくれよエイミィさん…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「…所でエイミィ、君はまさか…キョウスケのファンクラブに入っていたりしないだろうな…？」

「いやだな～クロノ君！！私がファンクラブに入るなんて…」

「そ、そうか？そうだよ「だって私がファンクラブ設立したんだから元からに決まってるよ♪／／」なん…だと！？というか何故顔を赤らめる！！？」

「んふふ～／／」

……とりあえずスルーしよ……

はやてＶＳエイミィ！？前哨戦…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

『マスターのファンクラブ創設者、こちら側のエイミィ史にマスターがフラグを立「立ててねーー！！つかそこはスルーってんだろ！！？」…チッ、つまらない…』

だからどうやったらデバイスが舌打ち出来んのさ！？

と、とりあえず最後のアインストが発見されました！！

本編どうぞ！！

『で、マスター的にＫＹからエイミィ史を略奪してハーレムに加える…と』

…コイツ…まさかこのネタひっぱるつもりか…！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――アースラブリッジ――

キョウスケSide

―プシュ！

「リンディ提督！アインストの反応があったって聞きましたが？」

僕はブリッジに入りリンディさんに確認…しようとしたら

「遅いで！キョウスケ君！！」

…何故かはやてやヴォルケンリッター達が先に来ていた！？

「は、はやて？それに皆も…何でここに？」

「勿論キョウスケ君のお手伝いをする為や！！」

いや…お手伝いって…全回復したとはいえ病み上がりじゃんか！？

「それに…やられっぱなしは私の主義じゃねーしな！」

「ああ…我々を苦しめたアインスト…今度は後れはとらん！！」

ヴィータとシグナムがえらいやる気満々だよ…リベンジに燃えてるな～

「フフッ、2人ともキョウスケ君の力になりたいって言ってなかっ

たかしら？」

「「なぁっ！！？ななな何を言ってる（んだ）シャマルッ！！？」」

「あら？違ったかしら？フフッ」

「いやっ！！ま、まぁ…違わなくもないが…／／」

「私は！は、はやてがコイツの手伝いしたいって言うからっ！し、仕方なく力を貸してやろーと…／／」

…こっちのシャマルさん…シグナムやヴィータを手玉に取りまくりだな…

「……フッ、神代…前にも言ったが我々は主を救ってくれたお前に恩返しがしたいのだ…まぁ若干２人ほど素直ではないがな」

ザ、ザフィーラ…よ、ようやく長台詞が言えたんだね…こっちのザフィーラは空気にはならなかったようだ…

「……今、我が言った事が台無しにされた気がするのは気のせいか？」

…うっ、鋭いな…

「あはは…ありがとう皆」

でも病み上がりだから無理はしないでほしいな…平行世界とはいえ家族なんだし…

「それでリンディ提督、アインストの反応に間違いないのですか？」

「ええ、このパターンは以前と同じ反応です…おそらく…」

「そうですか…それで反応があった場所は何処です？」

「ちょっとまって…ユーノさん？」

「はい…反応は…海鳴臨海公園付近です」

オペレーターのユーノが答え…って！？

「ユーノ！？お前いつからアースラのオペレーターになったんだ！？」

無限書庫の司書はどうした！？

「…エイミィさんに押し付けられて（頼まれて）…」

ユ、ユーノ…本音と建前が逆になってるぞ？

「…君が神代恭介君ですか？話しはなのは達から聞いています」

…あ、そーいやこっちのユーノとは結界破壊以来か～

「ああ、以前はすまなかった…

改めて…時空管理局独立部隊ＦＡＩＴＨ所属、神代恭介だ」

「僕はユーノ・スクライアです…と言っても、向こう側の僕の事は

ご存知ですよね？」

まぁ…淫獣とか淫獣とか淫獣で…

「……ああ、（一応）友達……かな？」

「何でそこは疑問形なんです！？」

いや～よく考えたらあまり仲は良くないような気が…

―プシュ！

「ハァ…ハァ…キョ、キョウスケ君！走るの早いよ～！！」

「エイミィ、君はただ単に運動不足なだけだ！！」

遅れて来たエイミィさんとクロノがブリッジに入って来た…

「エイミィ、早くユーノさんと変わりなさい！！まったく…」

「はーい！！わっかりました艦長！！」

…ホントにエイミィさん…無駄にテンション高いな！？

「…なぁクロノ、こっちのエイミィさんって…いつもこんなカンジか？」

「…ああ、確かに何時もテンション高いが…今回は特にだな」

今回は？…何かいいことあったからか？

「おーい！キョースケくーん！！おねーさんの仕事っぷりをしっかり見ててね～♪」

「は、はぁ…」

ちゃんと仕事してくれるなら問題ないん…ん？

―ジィィィ…

な、何か隣のＫＹから穴が空くほどの視線を感じるんだが…

「…な、何だクロノ？」

「……別に何でも…」

いや！？何かあるだろ！！その態度！？

―ゴゴゴゴゴォ…

な、何か黒いオーラが背後から感じる！？

「へぇぇ…キョウスケ君、エイミィさんと仲ええんやなぁ…」

「…オメーはやてや私って者が居ながら浮気か！！」

な、何でこっちのはやてやヴィータが黒いオーラを！？

「…何かイラッときたからや！…それとヴィータ、【はやてや私って者が居ながら】って…ヴィータは別にキョウスケ君の事は何とも

思ってないんやなかったか？」

「うっ…そ、それは…その…／／む、向こう側とは言え…ゴニョゴニョ…」

はやての猛攻（ツッコミにたじろぐヴィータ…あれ？このケンカの原因って…僕？

「…まぁええわ、それにキョウスケ君があんな年増で胸も中途半端な女に興味あるとも思えへんしな♪」

…は、はやてが…黒さ増量してる！？

「…はやてちゃ～ん？中途半端は酷いんじゃないかな～？私って結構着痩せするタイプだから…脱いだら凄いんだよ～」

エイミィさんもコンピュータから目を話さず、黒いオーラを放ちながらはやてに対抗してるし！？

「…う〝」

「どうした？クロノ？」

何か鼻を押さえて上を向いているが…？

「い、いや…何でもない（エイミィの……を想像したら、何て言えない…）」

「それに、はやてちゃんなんかペッタンコじゃないのかな？」

「いややな～エイミィさん…私にはまだ有望な未来があるで？これからバーンとおっきくなる予定や♪
それに比べて…エイミィさんはもう成長打ち止めとちゃうん？」

…何このカオスっぷりは？

「…コホン！エイミィ！！至急分析お願いね！」

「は、はい艦長！！さーて、気を取り直して！このエイミィさんの実力見てちゃうよ～～！！」

リンディさんの一喝で何とかなったが…解析に少し時間かかりそうだな…

「（あ、あの！ちょっといいですか？）」

…これはユーノからの念話？

「（ん？何だい？ユーノ）」

「（……えっと…あの、神代さん…向こう側では…その…なのはとはどういう関係なんですか？）」

……何？

「（どういう関係…とは？）」

「（…神代さんと一緒に来たなのは…さんを見ていると…とても仲が良さそうだったので…）」

…まぁ、仲は良いとは思うが…

「（まぁ…なのはとはパートナー（仮契約とかで）…かな？）」

「（パ、パートナー（恋人）ですか！？）」

…何でそんなに驚く？

「（…そうなんですか……そうですよね…貴方みたいな人がなのはの隣に居るんなら…僕は……）」

な、何かユーノが段々と闇に沈んでいくような…！？

「（…なぁキョウスケ）」

今度はクロノからの念話？

「（どうした？クロノ？）」

「（前々から聞きたかったんだが…君は向こう側ではフェイトとはどういう関係なんだ？）」

クロノからも似たような話し！？…あ～、クロノの義理の妹になるんだから気になるのか？

「（ああ、ユーノにもなのはとの関係を聞かれたけど…なのはとフェイトは僕のパートナー（仮契約的な）だぞ？）」

―ピシッ！

ん？何か空気が凍り付いた効果音が聞こえたが？

「…き、君はフェイトとなのは…２股かけているのか！？」

……え…

「えっ！？２股！？

か、神代さん…貴方がそんな人だったなんて…」

ユーノも何そんな軽蔑するような目で見るんだ！？

「ち、ちょっと待て！？何か勘違いしてないか！？なのはとフェイトは仲間上のパートナーだって意味だ！！」

「そ、そうなんですか？はは、勿論分かっていましたよ？」

「あ、ああ…僕は始めから分かっていたがな…」

……お前ら…絶対疑ってたろ！？

『（…まぁ、そう思っているのはマスターだけで…皆さんはマスターの貞操を狙ってますけどね…

ま、こちら側のＫＹや淫獣に話しても…男相手ならマスターは武力行使で黙らせてしまって面白くないですから黙ってますが…）』

…何だろう、今スッゴクこのインフィニティを握り潰したくなったこの衝動は…？

「つかはやてにヴィータ！？何故にそんな殺気をこちらに飛ばしてるんです！？」

さっきから殺気が刺さって痛いんですが！？

「「べ～つ～に～い…」」

明らかに不機嫌っすよね！？

「シ、シャマルさん？はやて達は何で不機嫌なんです？」

「キョウスケ君、年頃の女の子には色々あるのよ♪」

さ、さいですか…

「はーい！！解析終了！！艦長、目標地点の空間の歪みが徐々に拡大中！後1時間ほどで最大になります！」

「解りました…キョウスケ君、後は君に指揮権を委ねる事になりますが…よろしいですか？」

まぁアインスト相手なら僕が作戦指揮権を持った方がいいのかな？

「では…目標地点にの周囲に広域結界展開の準備をお願いします…それから現場には僕とさくらとこちら側のなのはが向かいます」

さくらとなのはとのシンクロユニゾンで一気に殲滅出来ると思うが…残ったアインストゲミュートって…無駄に装甲硬いからな～

「キョウスケ君！私らは？」

「まさかこのまま置いていこうなど言うまいな？」

「私らだってオメーの力になれるんだかんな！！」

「そうね、私はサポートしか出来ないけど」

「…弾避け位には努めてみせる！」

…皆やる気満々だな…正直置いていこうと思ったけど…仕方ない…

「…僕の指示には従ってもらう…これが絶対条件だ…いいか？」

「「「「「うん（おう）（はい）！！」」」」」

ま、何とかなるかな？

「クロノとユーノは封鎖結界の方を頼む。なるべく強固なヤツで頼む」

下手したら結界破壊とか有り得るからな…

「ああ、任せてくれ！」

「結界は僕の専売特許だからね！」

さて…多少の編成があったが…最後のアインスト…仕留めに行くか！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――海鳴臨海公園――――

キョウスケSide

僕は今、アインストの反応があった公園に到着している…のだが…

「なぁさくら…なのは…何でこの2人もいるんでしょうか？」

「えっと…てへ♪」

「にゃはは…♪」

笑ってごまかすなよ！！

「ご、ごめんなさいキョウ君…一応危ないからって止めたんだけど…ね、なのはちゃん？」

「うん…だけど2人頑固で…さすが私って感じかな？」

一応自分が頑固とは認識してるんだ…

「…で、何で居るんだ？なのは、フェイト？」

そう、こちら側のなのはとフェイト（オマケのアルフ）が戦闘モードで来てたんですよ！？

「わたしゃオマケかい！？」

…あ、平行世界のアルフ初登場だな…

「…はやてちゃん達も戦うのに…私だって黙っていられないよ！！」

「うん、私も友達が戦うのに…黙ってなんかいられない！！」

こりゃ…止めても無駄なパターンすか！？

「神代、テスタロッサ達も生半可な気持ちでここに居るのではない…気持ちを汲んでやってくれ」

汲んでくれって…ハァ、仕方ない

「…2人とも、はやて達にも言ったが…僕の指示には従ってもらうから…これが守れないならアースラに強制転送だからな？」

「「うん！！」」

…ホントに分かってるかな…？

特になのはが！！

「それでキョウスケ君、これからどないするんや？」

「先ずはアインストが現れた瞬間に結界を展開してアインストを結界内に閉じ込める…準備は大丈夫か？クロノにユーノ？」

「（ああ、問題ない。各員所定の位置で待機中だ）」

「（こちらも大丈夫です！いつでもいけます！）」

結界チームは大丈夫そうだな

「で、次にシャマルとザフィーラとアルフでアインストにバインドを掛けて動きを止めてくれ」

「はい、任せて下さい！」

「…心得た！」

「任せておくれ！！ビシッと止めとくよ！」

「それで残りは…アインストに一斉攻撃を！」

「「「「「分かった（の）（で）」」」」」

…これで倒せれば簡単なんだがな…

――――1時間後――――

「……現れんな」

「……現れねーな」

はい、そうですね～…って何故!?

「エイミィさん、そちらのサーチャーには何か反応ありますか？」

［う～ん…空間が歪んでいるのは観測さるてるんだけど…1時間前と大差ないのよ～…」

まさか…アインストがこちらを警戒して…？

「とりあえず現状維持を…皆、気を抜かないよ……」

―パリン!!

突如として空間にヒビが入り、そこから現れたのは…!!

「■■■■■■ッ!!」

アインストが現れた!!

「ちっ、皆!!散か…」

僕が皆に指示を出そうとするが…

―グォォォォン!!

アインストが現れた亀裂に物凄い勢いで引っ張られた！

「なっ！？吸い込まれる！？」

「くっ…な、何て力なの！？」

クソッ！油断した！！このままじゃ皆吸い込まれてしまう！！

せめて皆だけでも！！

しかし…

「きゃあああ！！？」

「は、はやて！！？」

「はやてちゃん！？」

「はやてぇーーー！！？」

はやてか耐えられず亀裂に吸い込まれてしまった！！

「この…ヤロォォ！！」

僕は、はやてを追い掛け亀裂の中に飛び込んだ！

「お前もいい加減…引っ込め！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！ドキュ！

「ブラスト…シグヴァーーン！！」

《Ｉｇｎｉｔｉｏｎ》

―ズガァァァァ！！

亀裂に居たアインストを押し込めて亀裂に突入した！！

「「キョウスケ君！！」」

「キョウスケ！！」

「恭介ーー！！」

「神代ッ！！」

「皆！！必ずはやてを連れて帰る！！それまで亀裂の維持を頼む！！」

僕はそのままアインスト共々亀裂の中の異空間に突入した！！

恐らくこの空間は…規模は小さいがアインスト空間の可能性が高い…その中に入って出入り口を塞がれたら…帰還可能性が低くなるかもしれないしな…

「■■■■■■■！」

ッ！？コイツ！？ブラストシグヴァンが効いてない！？…いや、効

いてはいるが装甲が硬いのか！？
さすがは鎧の姿をしてるだけはあるな…

「だが…このまま切り裂く！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

―ズガァァン！！

「■■■■■■！？！」

僕はアインストを上下に切り裂いた！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

さくらＳｉｄｅ

キ、キョウ君が亀裂の中に吸い込まれちゃった！？
ど、どうしよう！？

「さくらちゃん！！キョウスケ君が吸い込まれた亀裂が小さくなっていくの！！」

ほぇぇぇぇ!?そ、それじゃキョウ君が…キョウ君達が戻って来られる可能性が!?

「み、皆!!力を貸して!!皆の魔力をぶつけて、何とか亀裂を維持しないと…キョウ君達が戻って来れなくなっちゃう!!」

「ええっ!?」

「な、なら私達もキョウスケ達を探しに行った方が!!」

「ダ、ダメだよ!!この中の空間はどうなっているか解らないんだよ!?
キョウ君なら何とかなるかもしれないけど…私達じゃ迷って永久に出てこれなくなるよ!!」

「そ、そんな…」

「じ、じゃあはやてはどうなんだよ!?」

「落ち着けヴィータ!!」

「落ち着いていられっか!!私だけでも探しに行…」

―パァン!!

錯乱状態だったヴィータちゃんにシグナムさんがビンタをした!?

…うわぁ…痛そう…

「落ち着けと言っているだろヴィータ!!」

「シ、シグナム…」

「ヴィータちゃん…はやてちゃんの事はキョウスケ君に任せましょ？キョウスケ君も言っていたしょ？【必ずはやてを連れて帰る】って…今は彼を信じて待ちましょ…ね？」

「…シャマル」

「……それに神代は向こう側のお前や主が好意を持つ程の男だ…こちらのお前も信じてやったらどうだ？」

「なっ！？ななな何言ってんだザフィーラ／／！！？」

…ヴィータちゃん？何でこっち側のあなたが顔を赤くするのかなぁ…

「ち、ちょっと皆！！」

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ中の所悪いんだけ…ど！！」

「シグナム！私となのは達だけじゃ…この亀裂の維持が…キツイ！？」

あ…今亀裂に魔力ぶつけてるのってなのはちゃんｓ達とフェイトちゃんだけだった！？

…というより…なのはちゃん？お話の字がちがうよ～～！？

「あっ！？わりぃ！ホラいくぞ！シグナム・シャマル・ザフィーラ！！」

「フッ、ああ！」

「そうね、キョウスケ君を信じて…」

「我らの出来る事を！！」

皆キョウ君を信じて待ってるんだから…必ず戻って来てね…

「…さくら、皆私の事…忘れてないかい？」

……あ、アルフさんの事忘れてた！？

「ほぇ！？そ、そんな事ないですよ？……多分」

「な、何でそんなに自信なさげに！？」

「ホ、ホラ！！私達も早く皆のお手伝いに行きましょ！！」

「あ…ああ…」

あはは……でも、ホントに無事に帰って来てね…キョウ君……

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

「はぁ…はぁ…は、はやては!?」

僕は辺りを確認するが…

「…見当たらない…クッ!諦めるか!!インフィニティ!【ハイパースキャン!!】」

―ヴォン!!

ハイパースキャンで広域探索を掛けてみる…

「インフィニティ!はやての反応は!?」

『…反応ありました!マスターの頭上です!』

って上かよ!?ホント灯台下って事か…

「はやては…居た!!」

僕の遥か上空にはやてが浮かんでいた!

―タッ!!

僕は虚空瞬動ではやての下に駆け付けた

《キョウスケ、主はやては!?》

僕の隣に半透明の姿で現れたリインフォース…

「…大丈夫、気を失っているだけだから」

《そうですか…よかった》

「…う…ううん…」

おっ？はやてが目を覚ましそうだな

「リインフォース…」

《はい、解りました》

そう言うとリインフォースの姿は消えた

「ううん…あ、キョウスケ…君？」

「お目覚めですか？お姫様（ニコッ）」

「ッ／／！？ね、寝起きにそんな破壊力抜群な笑顔は…反則や…／／」

…はやての顔から煙が…？

「ハッ！？そ、そうや！！私は何か変な空間に吸い込まれて…ここは…？」

お、再起動したみたいだな

「多分ここは…アインスト空間（の縮小版みたいな）だと思う…」

空間全体が紅いからそうだとは思うが…

「…キョウスケ君、私ら…帰れるんやろか…」

はやては不安げな表情を浮かべてるけど…

「ん～…ま、大丈夫だろ？」

「軽っ！？な、何でそんなに落ち着いていられるん！？」

何でって…

「僕らが吸い込まれた出入り口は、多分さくら達が維持しているだろうし…万が一閉じられても空間破か…空間移動の術はいくつかあるし」

「ちょい待ち！！今空間破壊って物騒な単語を言いかけてへんかったか！！？」

…ちっ、鋭いな　まぁこの程度の劣化版アインスト空間なら破壊して脱出は可能だが…帰還する座標が特定出来ないから何処に出るかが解らないんだよな～…

「ま、まぁ　それは置いといて「置いとくんかい！？」…コホン…とりあえずは出入り口に向かって行こうか

はやて、飛べるかい？」

「あ、うん…何とか…」

…とりあえず外傷はないようだな…

「じゃあはやて、向こうの『マスター！！後方から高エネルギー反応！！』何ッ！？」

後ろを振り向くと…

「……セイジャク…ミダス…ハイジョ…」

―ガシッ！ガシッ！！…ビュンビュン！！！

倒した筈のアインストゲミュートの鎧がが迫ってくる！？

「ちっ！！はやて！！離れろ！！」

―ドン！！

「きゃ！？」

僕ははやてを突き飛ばした！！

…多少手荒に扱ってしまったが…ごめん、はやて…

そして…

―ドォオオオオ！！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「きゃ！？」

後ろからキョウスケ君に突き飛ばされてもうた私…文句を言ったろうと振り向くと…

―ドォオオオオ！！！

……えっ？

何が…起こったんや……？

キョウスケ君が居た筈の場所に…あのアインストの鎧の残骸がぶつかって…

「……キョウスケ…く…ん…？」

う…嘘…やろ…？

なぁ…キョウスケ君？

「キョウスケ君ーーーッ！！！！」

…わ…私のせいや！！私が…私がキョウスケ君の足を引っ張ったせいでッ！！

私が愕然としとった次の瞬間…

《Ｄｉｖｉｄｅ　Ｚｅｒｏ》

……えっ？今の声…

…リイン…フォース？

―ドゴォォォォォン！！

キョウスケ君を押し潰していたアインストの残骸が…１発の砲撃で一瞬で木っ端微塵に！？

そして……

「…キョウスケ…君？」

目の前に居たのは…銀髪にエメラルドグリーンの瞳…何時もと違う黒いバリアジャケットに…ナイフの形の銃身をした銃を持った…キョウスケ君やった……

Side Out

平行世界での再会

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

倒したと思ったアインストが背後から攻撃してきた！！

はやてを巻き込まないよう何とか逃がす事はできたが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――少し遡り…――――

キョウスケＳｉｄｅ

―ガシッ！ガシッ！！…ビュンビュン！！！

倒した筈のアインストゲミュートの鎧がが迫ってくる！？

「ちっ！！はやて！！離れろ！！」

―ドン！！

「きゃ！？」

僕ははやてを突き飛ばした！！

…多少手荒に扱ってしまったが…ごめん、はやて…

そして…

《キョウスケ！！緊急ユニゾン！！》

―ピカッ！！

い、今の声…リインフォースか！？

気がつくと僕はリインフォースとユニゾンしていた

「リ、リインフォース？これは一体…？」

シンクロユニゾンならともかく…普通にユニゾンって出来たのか！？

《説明は後です！キョウスケ、スタート・アップと唱えて下さい！！》

「あ、ああ！スタート・アップ！！」

《Ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

―バシュ！

僕の手に現れたのは…銃に大ぶりなサバイバルナイフを融合させたような武器が…って！？

「…ＥＣ…ディバイダー…だと！？」

ナンバーは刻印されていないが…間違いなく【あの】ディバイダーだ…

《キョウスケ！今は目の前の敵を！！》

ちっ…ツッコミ所満載だが…仕方ない！！

―カチャ

目の前に迫ってくるアインストの鎧に照準を合わせ…って間に合わない！？

《私が護ります！！》

―ブゥン！！

僕の目の前に一冊の魔導書が現れ…あれ？あれって天空の書…？いや、細部のデザインが違うが…

―バサバサバサッ！！

魔導書からページが飛び散り僕を守るよう周りに展開された

そして…

―ドォォォォ！！！

アインストゲミュートの鎧突撃？を魔導書のページが防いでくれた！！

《キョウスケ！今です！！》

この能力…やはり…アレなのか…？だとしたら…いや、今は…

「…ディバイド・ゼロ」

《Ｄｉｖｉｄｅ　Ｚｅｒｏ》

―ドォォォォ！！！

僕の一撃で、アインストゲミュートの鎧を吹き飛ばした！！

――――回想終了――――

とりあえずアインストを今度こそ撃破した…

「…リインフォース、これは一体…？」

ＥＣディバイダー…これは確かＦｏｒｃｅで出て来る武器…

《キョウスケ、これは神が私にくれた新たな力…らしいです》

…またあの神が絡んでるのかよ…

《この力を使った時にキョウスケに伝えてほしいと神からの伝言があるのですが…》

「…伝言…？何だ？」

《ええ、【お主が考えてるＥＣウイルスや病化・暴走などはないぞ？形や力を再現しただけじゃから安心せい】だそうです…》

…とりあえずＥＣ感染はないようだ…

つか、さらにチート街道まっしぐらだよな…まぁ今更か

とにかく流石に精神と生命を維持するために、人を殺し続ける必要があるってのは…なぁ…

《…キョウスケ、ＥＣウイルスとか病化とは何です？》

…ユニゾンした本人が知らないのか？

「ああ、それ…」

「キョウスケ君！！」

リインフォースに説明しようとしたら…はやてが突進してき…えっ？突進？？

―ドゴッ！！

「グハッ！？」

はやての突進が僕のお腹にクリーンヒット？！…こ、効果はばつぐんだ…

「キ、キョウスケ君ーー！！
無事で…無事でよかった…キョウスケ君に何かあったら…私…私っ…グスッ！！」

「ゲホッ…は、はやて…うん、心配かけてごめん…」

はやてが涙目で抱き着いて来た…ホント心配かけちゃったな…

「キョウスケ君、ケガとかはないん！？」

「……大丈夫だヨ？」

「……何で微妙な間を開けたん？」

う〃…　だって、はやての突進がお腹を直撃したから…昼間食べたパスタがにゅるって出てくる所だったし…

『マスター、感動のシーンが台なしです！！』

《そうです…もう少しムードというものを…》

デバイス二人に思考読まれた！？

「ッ！！そうや！！今の声！！リインフォースやないん！？」

……あ〝

「……キノセ「気のせいやあらへん！！主だった私がリインフォースの声を聞き間違う訳ないで！！」…」

……う～ん…こりゃごまかしきれない？

まぁ…まだこちら側のはやてだし…話しても大丈夫…かな？

「…はやて、これから話す事ははやての心の中だけに留めて置いてくれよ？」

「…うん…解った」

「…リインフォース、ユニゾンアウト！！」

―ピカッ！！

僕の身体が一瞬光り…

「…お久しぶりです、主はやて…」

リインフォースが僕達の前に現れた

「…ほんまに…リイン…フォースなんか？」

「…はい、正確には【向こう側】のですが…」

「えっ…向こう側…？」

――――リインフォース説明中――――

「…という訳で私はキョウスケに救われたのです」

リインフォースの説明を真剣な表情で聞いているはやては…

「…そっか…」

そう呟いた

…やっぱりこちら側のリインフォースじゃないから…ガッカリさせちゃったかな？

「…ごめん、はやて…ぬか喜びさせちゃって」

「ううん、そんな事ないで！！
それにちゃんとリインフォースが救われた世界があるんやな～って思うとっただけや！！」

「主はやて…」

「リインフォース、今のマスターはキョウスケ君やろ？なら私の事

は【はやて】でええで！」

「で、ですが…」

「ダメや！！これは決定事項や！！聞く耳もたへんで！！あーあー聞こえへーん！！」

まるで駄々っ子だな～

「…ぷっ、リインフォース　諦めろ
こうなったはやてはテコでも動かないぞ？」

「…はぁ、解りました　は…はやて…？」

「うん♪リインフォース」

はやては嬉しそうに笑っていた…

やっぱりはやてには笑顔でいてほしいな…

「…ところでキョウスケ君、向こう側の私やなのはちゃん達やリインフォースが無事なのは知ってるん？」

…うっ…やっぱりこの質問が来たか…

「あ～…実は知らないんだ～…あはは」

ヤバッ…ど、どうしよう？

「……へっ？何でや？向こう側の私に秘密って…？」

「それ『それは、はやて嬢に二代目リインフォースを生み出してもらう為です』ってインフィニティ！？」

何サラっと言ってるんですか！？

「二代目？そ、そら私もこっちのリインフォースとの約束で…新しい家族を創ろう思うとったけど…」

『ですが…向こう側のはやて嬢にリインフォースが無事な事を伝えると、二代目リインフォースが生まれない可能性があります。だから、それまでは向こう側のみなさんには秘密にしているのです』

「う～ん…何かインフィ君の説明やと…何か私が二代目リインフォースを創らな困るって聞こえるんやけど…？」

まぁ実際困るんだけど…

「はやて、本来私は消えてしまう筈でしたが…キョウスケのお陰で今こうしていられますですが、私が贈った言葉…【はやてがいつか手にする新たな魔導の器に私の名を】とお願いししたのを覚えてますか？本来新たに生まれる二代目祝福の風が、私の存在している事で居なくなるのは悲しい事です…ですからせめて…その二代目祝福の風が生まれるまでは私の事はまだ秘密にしているのです」

リインフォースもフォローしてくれたが…ちょっと無理があるような…さすがにはやても納得は…

「…解った！リインフォースがそう言うなら私も黙っとくな！」

しちゃったよ！？あの結構穴だらけの説得に！？

「あ、いや…正確には、向こう側のなのはに黙っていてもらえれば…」

向こう側のなのはにバレたら…万が一向こう側のはやてにバレたら…まずＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩになるし…

「じゃあこっちの皆には話してもええの？」

「…まぁ、出来たら僕らが元の世界に帰った後に…」

その方が確実だしな…

「あ……そっか、キョウスケ君…帰ってしまうんやったな…」

「まぁ一応アインストは倒したしね」

「……」

ん？はやて…？

『…所でマスター、長話もいいですが…そろそろこの空間が消滅しますよ？』

……あ〝

「やっべ！忘れてた！！はやて、急いで脱出するぞ！！」

「えっ！？ち、ちょ！？」

「リインフォースも指輪に待機してくれ！」

「は、はい　でははやて…」

―ピカッ

リインフォースを戻してっと…

「急ぐぞ！はやて！！」

―ヒュン！！

僕ははやての手を引っ張り瞬動を発動した

…結果…

「ちょ！キョウスケくーーん！！！？ス、スピード！！スピード出し過ぎやぁぁぁぁ！！！」

まぁ…慣れない人には瞬動レベルの加速はキツかったようだ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

その頃……

――――旅館――――

はやてＳｉｄｅ

私は今…猛烈に不機嫌や…
ん？理由？…そんなん決まっとるやろ！！

「……キョウスケ君が居なくなって丸１日…」

…キョウスケ君がお仕事で出掛けたんは理解出来るで？

…ただ…

「しかも高町なのはと一緒…」

ヴィータの言う通り…あの魔王と一緒なんが気に食わん！！

―ガチャ

「おまたせ！はやてちゃん！！例の物が届いたよ」

「ホンマかすずかちゃん！？」

…フッフッフ　これで準備万端や！！

「すぐセッティングするからね…フフッ、なのはちゃん…血の貯蔵は十分かしら…？」

これで準備は調ったで！！

さぁ魔王！！キョウスケ君と2人っきりて過ごした罪を償ってもらうで！！

「……なぁ、シャマル　神代は確かさくらも一緒に連れていったのだと思ったが…」

「はやてちゃん、さくらちゃんの存在…すっかり忘れちゃってるわね～…」

「……主達を止めなくていいのか？」

「「止められると思う（か）？」」

「……すまん」

「「「フッフッフ…アーハッハッハ！！」」」

…部屋の中にはやて・ヴィータ・すずかの笑い声が響いていたとか…

「「「アーハッハッ…ゲホッ！ゲホッ！！」」」

…むせたのはまた別の話し…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

宴会開始！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

アインスト空間に吸い込まれたはやてを救出！（まぁ…こちら側のはやてにはリインフォースの事がバレたのは些細な事だ）

そして、アインスト空間から脱出すると…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「っと…何とか間に合ったな…皆、ありがとう」

亀裂から脱出すると同時に皆が倒れ込んだ…やっぱ無茶させちゃったかな…

「ハァ…ハァ…キ、キョウ君…よ、よかった…無事で」

「つ…疲れた～　でも、無事でよかったの」

「うん…2人とも無事でよかった…」

「でもさぁ…もうちょっと早く帰って来てほしかったもんだねぇ～。フェイトも私も…もう限界だよ」

「はは…悪いなアルフ」

リインフォースの事ではやてと話しこんじゃったからな～

「ごめんな皆、ありがとな…」

はやても皆に感謝してお礼を言った

「いえ…我々は主が無事ならそれで満足です…神代、ありがとう…」

「ああ、はやてが無事なら私は満足だ！！」

「ふぅ…何とかなるものね～」

「……」

ヴォルケンズ達も流石に魔力が底をついちゃったようだな…よし！

「インフィ、インフィニットレイヤー発動！！」

―ピカッ！！

発動させた光が皆を優しく包み込むと…

「…あ、魔力が…」

「回復していく!?」

インフィニットレイヤー（魔力回復効果）を使い、皆を回復させた

「…スゲー!!あっという間に回復してんぞ!!」

「…信じられない…こんな一瞬で魔力を回復させるなんて…」

ヴィータとシャマルは驚いているな～

「にゃはは、キョウスケ君のこの魔法には私も助けられたんだよ～お陰でリンカーコアの回復もすぐだったの♪」

…ああ、蒐集の時のことか～…ん?

「どうしたシグナム?何か顔が引き攣っているけど…?」

「…い、いや…高町、もしかしてそれは…いや、すまん…何でもない…」

……ああ、こっち側でも同じ事あったから心当たりがあってバツが悪いのか…

一応原作のイベントだからな…

「キョウスケ君!!聞こえる!?というか無事!?」

っと…アースラからエイミィさんからの通信が…

「聞こえます、こちら神代　若干の作戦変更はありましたが…アインストの撃破に成功しました
隊員は軽傷ではありますが全員無事です」

一応、作戦指揮官だからね～…報告はちゃんとしないと

［よ…よかったぁ～　キョウスケ君に何かあったら…］

あ…エイミィさんにも心配か［何かあったら愛を確かめ合えなくなっちゃうと思って心配したよ～］…仕事しろよ…とツッコミたいが…とりあえず聞かなかった事にしよう…うん

［えっ!?ちょ!?か、艦長!!?な、何ですそのお茶…えっ!?今飲め?艦長命令!!?い、いやーーー!!?］

―プツン

エイミィさんが映っていたディスプレイは悲鳴と共に消え……
…な、何があった!?

―ピッ

［…ごめんなさいねキョウスケ君、報告は聞きました
後はこちらの局員がしばらく監視していますので皆さんは一旦アースラに帰還して下さい］

「は、はぁ…分かりました」

通信はサウンドオンリーに変わって、リンディさんが対応してくれ

たが…

「な、なぁキョウスケ君…エイミィさんはどないしたんや?」

「……はやて、世の中には知らない方がいい事もあるんだよ?」

恐らくは…リンディ茶の餌食になっただけだろう…

「う…うん…」

はやても納得してくれたようだ

「さ、皆　アースラに帰ろう!!」

「おーーー!!!」×9

さて、転送の準備を…あれ?何か忘れてたいるような…?

「…なぁユーノ」

「…何だいクロノ?」

「…僕たちに何か連絡はあったか?」

「……ないよ」

結局、結界の出番が無かった為…忘れられていた2人だった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――アースラ――――

「…という訳で、こちら側に来たアインストは撃破出来ました」

[…そうか…すまないなキョウスケ君、こちら側の面倒をかけてしまって」

とりあえず帰還した後解散し、僕はこちら側担当の神族のギリアムさんに報告をしていた

「それで今回の任務は終了ですね」

[ああ、この後君はすぐに元の世界に帰るのかな?」

「あ…いえ、皆が明日送別会を開いてくれるとの事で、もう一日は滞在予定です」

[そうか…寂しくなるな。君みたいな人材がこちらに居てくれれば助かるのだが…」

「はは、まぁまた何かあったら連絡下さい」

「フッ…まぁ　そうならない事が1番なんだが…（少女達はそうなってほしいと思ってそうだがな）それではゲートを開く時はまた連絡してくれ…では」

―プツン

さて、と…

『マスター、これからどちらへ？』

「送別会の時間までは…余裕があるからな」

送別会の会場は、はやての家で行う事になったのだ

「…まぁ料理は、はやて達が任せてと言ってたし…僕はスイーツ位作るかな…」

今回は時間がないから、あまり手の込んだ物は作れないが…う～ん…

「…ま、とりあえず買い出しに行くか」

そうして僕はスーパーへと買い出しに向かった

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

翌日

――――八神家――――

「えー、それでは…カンパーイ！！」

っていきなり脈絡もなく乾杯すか！？リンディさん！？

「あら、いいじゃない♪無礼講って事で」

…まぁ　いいけどさ…

今回の送別会、八神家には僕と面識があったメンバーのみで行われた

「キョウスケ君！！これ私となのはちゃん達で作った料理なんよ♪
沢山食べてな～」

「にゃはは、向こうの私にキョウスケ君の好きな物とか聞いて作ってみたの♪」

「うん、私も頑張ったんだよ」

「こっちのフェイトちゃん、手つきが危なっかしくてハラハラしちゃったけど」

「うっ…さくらぁ…どうせ私は向こう側と違って、料理の経験少ないから…」

「もう、だめだよ～さくらちゃん！　フェイトちゃん、大丈夫だよ？ちゃんと上手に出来たから」

「な、なのはぁ…やっぱり向こう側のなのはも優しいんだね」

とまぁ、僕の目の前にはやて達が作った料理が並べられていた

「どれどれ…モグモグ…うん、美味しいよ！」

「あ、それ…私が作ったやつや♪　男の子に食べて貰うんは初めてやから…照れるなぁ／／」

「まっ、はや「はやての料理はギガうまだかんな！だろ？ヴィータ？」って人の台詞取るんじゃねー！！」

「はは、ごめんごめん」

「料理で思い出したけど…なぁキョウスケ君、向こうのヴィータって料理出来るって聞いたんやけど…ホンマなん？」

「ん？ああ、ヴィータの料理もはやてに劣らぬ腕だったよ？」

ヴィータの料理は何度か食べたが…結構美味しかったのは事実だ

「ホー…そうなんか～　こっちのヴィータにも料理スキルはあるんかな？」

ん？

「…って事はこっちのヴィータは料理は…」

「う、うるせー！！べ、別にいいじゃねーかよ！！はやてが作ってくれた方がギガうまなんだしよ！」

…食べる専門か…何か勿体ないな～

「しかし神代、こう言うのは何だが…このヴィータが料理とは…想像がつかんのだが…本当なのか？」

「…何かヒデェ言われようだなオイ…」

ヴィータはシグナムを睨みながら突っ込んだ

「本当だよシグナム、…そういや何でむこう側のヴィータは料理に目覚めたんだろ？？」

原作でもそんなシーンなかったよな？

『（…まぁマスターが気付かない事は気付いてましたが…あまりにもヴィータ嬢が不憫ですねぇ）』

…？？何か電波が？

「…ところで、あえて視界に入れないようにしていたんだが…」

はやて達が作ってくれた料理…どれも美味しいんだが…テーブルの端にある緑色の物体Xがチラチラ目につくんだよな…

「…言うな神代…我々もどう処理していいか困っているのだ」

ですよね～…平行世界だから微かな違いを望んでいたのだが…

「…恭介、やっぱ向こうのシャマルも…ああなのか？」

「……最近は更に磨きが掛かっているがな…」

「磨き？どんなんや？」

聞くと不幸になるぞ？はやて…

「…ついちょっと前までは目の前にあるような未知の物体を作っていたのだが…それでも！それでもまぁ一応、原材料は基本食べられる物を使っていたのだが…最近は見た目にこだわって…色合いを求め絵の具を…形を整えるのに接着剤とか使いだしたからな…」

もはや工作のカテゴリーに入るよな…

「……私らのシャマルの方がまだマシなんやな…」

「……上には上がいたな…」

「……つか、そっち側のシャマルは何処に行こうとしてんだよ…」

それはこっちが聞きたいよ…

「……まぁお前も苦労しているのだな」

ザフィーラは励ましてくれるけど…

「あ～…ザフィーラ…他人事みたいに言っているが、高確率で向こうのザフィーラが犠牲になってるぞ？」

ザッフィーがまず毒味役に定着してたからな…

「……シャマルに少し話しが出来た…失礼する」

そう言うとザフィーラはシャマルが居る方に向かって行った…

「…？何だったんだろう？」

「さぁな…それより飯だ飯！！早くしねーと無くなっちまう！！」

「…ヴィータ、程々にな　後で僕が作ったスイーツ出すから」

「ふぇっ？キョウスケ君って料理出来たの？」

こちら側のなのはが驚いた顔をしているが…

「って…ああそうか、こっちのなのはは知らないんだっけ？」

「あのね、キョウ君の作るスイーツはすっっごく美味しいんだよ！！」

「うん、そうなの♪キョウスケ君の作るスイーツ…翠家に匹敵する美味しさなの♪」

さくらとむこう側のなのはには好評だが…別に普通に作っただけだから味も普通だぞ？

「キョウスケ君！！あの味を普通って言っちゃうと…全世界のスイーツ大半が普通以下の味になっちゃうよ！！」

う…そうなのか？

「へ～、キョウスケ君お手製のスイーツか～　楽しみやな～♪」

「スイーツがあんのか～　し、仕方ねーな　食べてやっか♪」

「キョウスケが作ったスイーツか…楽しみだね、なのは？」

「うん、向こうの私が絶賛してる位だから楽しみなの♪」

…何か何気にハードル上がってね？

「…ま、まぁその…何だ…折角だから私も頂くとするか」

シ、シグナムすらスイーツに期待を！？

こ、こりゃプレッシャーだな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「あら、ザフィーラ？どうしたの？」

「……シャマル、少し高町式のオハナシをしようか？」

「…えっ！？な、なのはちゃん…って…えっ！！？な、何！？その獲物を狙う目つきは！？　しかもグルル…って！！？ま、待って！！？」

その後シャマルがどうなったかは…別の話し…

スイーツパニック！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

今日は八神家で、僕の送別会を開催中

…途中シャマルの悲鳴が聞こえたような気がしたが…まぁ気のせいだな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「さて、じゃあお待ち兼ねの…スイーツターイム！！」

「「「「「「おおーーー！！！！！！」」」」」」

食事も終わり（謎の物体Ｘの行方は後半に…）いよいよ僕が作った

スイーツのお披露目となったのだが…

「…期待度が高まってるのに何だが…そんなに大した物じゃないぞ？」

「前置きはいいから早く食おーぜ！！」

…ヴィータさん？貴女はさっきあんなに食べたのに何故そんなに食べ気満々なんですか！？

「甘い物は別腹だかんな♪」

…だから何で皆、心を読めるんだよ…

「ん～…なんだか甘い匂いがするの～」

ま、勿体つけるのも何だしな…

「じゃあ…はい！」

僕が作ったスイーツ…それは…

「「「「「おおーーーー！！！ロールケーキだ（（なの））（や）（だね）♪」」」」」

そう！ロールケーキ、しかも3種類！！

「キョウスケ君キョウスケ君！！これは？」

「えっと…プレーンのロールケーキにティラミスロールケーキ、そ

れに苺ロールケーキだよ」

時間がなかったから3本しか作れなかったけどね～

「凄く美味しそうやな～♪」

「……これ、キョウスケ君が作ったんだよね…？

わ、私より上手に…いつもお店のお手伝いしている私より…ｏｒｚ」

こちら側のなのはがえらい落ち込んでるな…

「にゃはは…やっぱりこっち側の私もショックだよね～」

…なのは？何かショックなんだ？

「なっ！なっ！早く食べようぜ！！」

「焦らなくても大丈夫だよヴィータ、今切り分けるから…えーと」

とりあえず一口サイズに切っていくか…

「あら、美味しそうなロールケーキね」

と、そこへリンディさんがやってきた！

…さすが甘党！体は砂糖で出来ているというか…

「…何かバカにされたような気がするのは気のせいかしら？」

しかもこの人まで読心術のスキルもってるんかい！？

「あはは…リンディさんもいかがです？」

一応リンディさんにも薦めてみるが…

―ジィィィ…

うっ…僕の後ろで複数の【オイテメー！分け前減るだろ！？】的な視線が刺さったが…いや、ロールケーキ位でそんな殺気立たなくても…

「じゃあ…お言葉に甘えちゃおうかしら♪」

リンディさんも殺気に気付かないのかスルーしてるのかマイペースですし

「はい…ところで…あそこの木の後ろに張り付いて、隠れながらこっちをガン見しているストーカーは何です？」

遠くからでもハァハァ言っているのが解る位危ないんですが…

「…あら、やっぱり気付いちゃった？」

あれで気付かん方がおかしいぞ！？

「まぁ…大丈夫よ　エイミィにはちゃんとキョウスケ君に危害を加えないように調きょ…コホン…説得したから」

「そうですか？ならいいんですが…あ、コラ！ヴィータ！ケーキは1人3つまでだぞ？」

「う〝…い、いいじゃねーか…（ウルウル）」

クッ!?こちらのヴィータが涙目＋上目で訴えてくるのか!!?

「こらっ!ヴィータぁ!キョウスケ君を困らせたらアカンよ?」

「うっ…はやてぇ～…」

はやてが注意してくれた

「そうだよヴィータちゃん、皆だって食べたいんだから」

「…何かオメーに正論言われるとムカつくな…」

「ふぇぇ!?な、何でなの!?」

「何でもだ!!」

「り、理不尽なのーー!!」

こちら側のなのはとは…まぁ、仲があまり…

はぁ…こりゃ人数分はちゃんと切り分けないと…

「…というかキョウスケ君、何気に調教って台詞をスルーされると…ちょっと淋しいんだけど」

…ん?何か言いましたか?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

さて…人数分を切り分けて、

「「「「「「いただきまーーーす!!!」」」」」」

皆がロールケーキを食べた…まぁ　若干切ったロールケーキが薄目なのはカンベンしてくれ…

「お、美味しい!!」

「うん…思ってたより…凄く美味しい」

「でしょ?キョウ君の手作りスイーツは世界一だよ!」

「う…うめぇ…（はやて以上かもしんねー…）」

「……うむ、甘さも見た目よりは控え目で…苺の酸味がいいアクセントになっているな」

「ま…負けた…私の負けや…これは匠の…いや!神の技や!!キョウスケ君!君にはゴッド・オブ・パティシエの称号を与えなアカンな～」

何そのキ○グ・オブ・○ートみたいな恥ずかしい称号は!?

「ハァ…ハァ…キョウスケたんの手作り…じゅるり…」

…エイミィさん　アンタもう帰れや…

「って…そういやクロノやユーノは？」

そういや今日は見かけてないな…

「ユーノ君？ん～そういえば見てないの」

「クロノも朝から見かけないね…アルフ知ってる？」

「ガツガツガツっ…えっ？何だいフェイト？」

「…ううん…何でもない」

なのはもフェイトも…興味がないようだ…哀れすぎるぞ！？ＫＹ＆ａｍｐ；淫獣コンビ！！

「……そういえば…」

「何やザフィーラ？２人が何処に居るか知っとるんか？」

「……先程シャマルの所に行った時に…その時、２人がシャマルの近くで顔を青くして転がっていたような…」

「「「「「「……」」」」」」

……あ～…うん、アレだ……

「とりあえず…聞かなかった事にしよう」

「「「「「「「そ、そだね……」」」」」」」

2人は僕らの心の中に生き続けてるさ!!

『…マスターって…たまに酷いですよね?』

何を言うんだ?こんな善人を捕まえて?

「キョウ君!!ケーキおかわり~!!」

「あっ!!さくらズリーぞ!!恭介!!私も!!」

…しっかしよく食べるな…

「はやて達はどうする?まだ若干だけど残ってるが…」

このままだと…この2人にすべて食べられるぞ?

「う~ん…食べたいのは山々なんやけど…なぁ」

「にゃはは…ちょっとカロリーが…」

「うん…ちょっと食べ過ぎちゃったかな?」

…別に小学生からカロリー気にする事はないんじゃ…

「「「乙女にとって1グラムの増減は死活問題や(なの)(だよ)!!!」」」

「は、はい！！すみません！！」

…こ、怖えぇ…

「…じゃあこのケーキは」

「私らが貰っても問題ね～な？♪」

さくらとヴィータが満面の笑みを浮かべてケーキに手を付けようとすると…

「「「う…や、やっぱりダメー！！！」」」

はやて達が光の早さでロールケーキを掴み取った！！

「うぅ…やっぱこの極上ケーキの誘惑には勝てへん…何て物を作ってもうたんや！！キョウスケ君！！」

「そ、そうだよ！！これはある意味犯罪なの！！」

「せ、責任取ってよ…ね？キョウスケ」

…ケーキ1つでえらい言われようだな…つかフェイト！？責任って何！？

「えっ！？そ…それは…はうぅ／／」

「フッフッ…おやおや～？フェイト、顔が赤いよ～？」

「なっ!?ア、アルフ!?な、なな何言っているの!?別にキョウスケにそんな…／／」

フェイトは顔を赤くしてアルフに慌てて何か言っているけど…何？

何か僕の名前が出てきたような…？

「…むぅ」

「……っ」

ん？

「どうした？はやてになのは？急に黙って…？」

あんだけ騒いでいたのに…急に不機嫌？なオーラ出してる…よな？

「別に…何でもないで（フェイトちゃん…あの反応…もしかして？）」

「…うん、何でもないよ？（…何でだろう…？フェイトちゃんを見ていたら…何でかイラッてするの…）」

……そうなのか？

「（…はぁ、キョウ君…こんな所まで来てフラグ立てるなんて…）」

「（う～ん…平行世界の私だから…やっぱりキョウスケ君に…それにはやてちゃんやフェイトちゃんも間違いなく…何だかライバルがもう1セット出来た気がするの…）」

「…どうしたさくら？なのは？」

何か２人も複雑そうな顔をしてるし？

「…キョウ君、もう少し乙女心が分かるようになろうよ」

「…さくらちゃん、それが出来ていたら私達も苦労しないよ…」

失礼な！それなりに理解してるぞ？…多分

「「……はぁ……」」

な、何でそこで深いため息をつくんですか！？

「…神代…流石の私でもそれは理解できるぞ？」

何かシグナムにまでツッコまれるし…

な、何だよ乙女心ってーーー！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「フフ…フッフッ…キョウスケ君が…私に…私だけに作ってくれた…ケーキ…こ、これはもはやプロポーズ!!んふふふふ…」

「…さ、流石にそろそろエイミィを止めないとマズイかしら…あら、これは…？」

リンディが見付けた物…それは…

「エイミィ、こっちにも手作り料理があるわよ…食べる？」

「フッフッ…えっ!?も、勿論です!!あーん♪」

「はい、あーん♪」

―パクッ

リンディがエイミィに【手作り料理】を食べさせた！

「モグモグ……！!?グフッ!?」

―バタン！

エイミィは顔を真っ青を通り越した顔色で倒れた！

「一口で…まさに一撃必殺…恐ろしいわね…シャマルさん特製物体X…」

…人知れず撃墜されたエイミィであった…

「「ぼ、僕たちの……出番…は？」」

作：あ、ごめん　忘れてた

「「ひ…酷い…ガクッ」」

君達の犠牲は忘れないよ！！

多分？

最凶の魔法…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

エイミィさんが天に召された後「ち、ちょっと！！まだ生きてるよ～！！」…チッ、元の世界に帰るまで出番無ければよかったのに…

「酷っ！？…あ、あれかぁ～　好きな女の子に意地悪したくなるっていう小学生特有の…ってキョウスケ君！？な、何でデバイスを構えて！？しかも何発カートリッジロードしてるの！？あ…ちょ！？ひいぃぃぃ！！？」

―ズガァァァァ！！！

…ふっ　悪は滅びた…

『マ、マスター！？キャラ変わってません！？』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

僕の送別会から一晩明け…今日は僕が元の世界に帰る日になったのですが…

「……うっ／／」

「……はぅ／／」

「…ねぇキョウスケ君、何ではやてちゃんと目を合わすと2人して顔が紅くなるのかな?かな?」

…うぐっ!?な、なのはのやつ…鋭い…

「…キョウ君、2人して顔を真っ赤にしてるのに…鋭いも何もないよ…」

グハッ!?し、しまった!?

「…ねぇはやて…キョウスケと何かあったの?」

「…2人して見つめ合って…何なの?」

「えっ!?えっとな…」

こ、こちらのフェイトとなのはも目をハイライト化してはやてに詰め寄ってる～!?

マ、マズイ!?はやて!!今朝の事はばらさないでくれ!!?

――――回想――――

――――数時間前・朝――――

―チュンチュン…

「……ふぁ～　朝か…」

しっかし、昨日は大変だったな～

結局、送別会2次会に突入して騒ぎまくってカラオケ大会になって…よく皆あのテンション維持できたよな…

「…とりあえず…起きよ…」

僕がベットから出ようとすると…

―フニャ！

……あれ？布団ってこんな感触だったっけ？

…まるで人肌みたいな……

「……んんっ……」

あれ？最近のベットって触ると音声が出るんだっけ？

……分かってる！ああ分かってるさ！！
伊達に同じ経験は積んでないさ！！！

―バサッ！！

僕が勢いよく布団をめくると…

「……んん…あ、おはようさんキョウスケ君…／／」

はやてが布団に潜り込んでいた……

なんでさ…というかテジャブ？

「あ～…とりあえずツッコミたい所は多々あるが…なんで僕の布団に居るんだ？」

昨晩ちゃんとはやてを部屋に送っていった筈なのに！？

「えへっ♪来ちゃった／／」

来ちゃった♪ぢゃねー！？

……ん？

僕はその時、布団の中にあった【ある物】を見た…

…あるぇ～…？？アレは確かに僕が所有している物だが…微妙に違う…？マ、マサカ…

「…ハヤテさん、ソレハ？」

嫌な予感しかしなかったが…一応はやてに尋ねると…

「えっ？　ああ、これか？何やキョウスケ君とキスしたら出てきたんやけど…／／」

……

「はやて、どうやら僕の耳がおかしくなったみたいだ…すまないがもう一回言ってくれないか？」

この歳で幻聴が聞こえるとは…ハハハ…

「せやから！！　昨日キョウスケ君が寝とった隙にキスしたら、このカードが出てきたんよ♪」

……何だろう…この歴史は繰り返す的な感覚…ｏｒｚ

「っか、はやて？何でそんな事を！？」

こっちのはやてとは会ってまだ数日しか経っていないのに…色々すっ飛ばして、いきなりキスって…！？

「そんなんキョウスケ君が好きやからに決まっとるやないか／／！！」

即答!?

「す、好き…って…／／」

な、なんでこうなったんだ!?

「だって…キョウスケ君は…キョウスケ君は私にとって初恋なんや!!

こんな気持ち初めてやし…それにキョウスケ君は今日帰ってまうんやろ…?

そう考えたら頭の中グチャグチになってもうて…気がついたらキョウスケ君の部屋の前に居て…せめてキョウスケ君との思い出が欲しい思て…その…部屋の中に…／／」

「はやて……」

…僕のせいではやてがこんなに悩ん「で、中に入ったらインフィ君が『あ、はやて嬢!マスターとキスすれば繋がりが出来ますよ』って」ッておおおい!!?ちょっと待てぃぃ!!?

アイツか!?またアイツが絡んでいたのか!?

『いや～　このままサヨナラっていうのもはやて嬢が不憫で…（それに面白そうですし）』

…決めた!コイツ帰ったらぜってー速攻ＡＩ破壊する!!

…しかし…こちら側のはやてと仮契約カード…どこかの百合っ娘剣士と同じ…向こうのはやてとは絵柄も別バージョンだな…

「…キョウスケ君…怒っとる？」

はやては涙を浮かべながら僕を見ている…だから捨てられそうな子犬みたいな目はやめてーーー！！？

「…別に怒ってないよ」

『そうですよ！向こう側のはやて嬢とはそれはそれは濃厚なキスをしまくっ…』

―ベキッ！！

キョウスケはシャ○ニングフィ○ガーを発動！！

何かが砕ける音がした！！

「キ、キョウスケ君！？い、インフィ君が折れてへん！？」

「ん？インフィ？ナニソレ？オイシイノ？？」

「……えっと…うん、私の気のせいやな。うんきっとそうや」

「そうだよ、はやて……別に怒ってないよ」

「（今の間、編集点なん！？）そ、そか…よかった…」

…はやてさん？何で顔が引き攣ってらっしゃるんで？

その後僕は仮契約カードを分割し、カードの機能の説明をした…

余談だが、カードに備わった通信機能…はやての願望がそうさせた

のか、平行世界の壁を飛び越えて可能（まぁ精度は落ちるが）と分かった時のはやての喜びようは凄かった…

――回想終了――

という事があったので…はやて！！特にむこう側のなのはには黙っててくれ！！

「えっと…キョウスケ君と2人だけの秘密や♪」

―ピシッ

な、何！？今の凍り付くような効果音は！？

「「「「キョースケくーーーん？？？」」」」

ちょ！？何！？その地を這いつくばるような低い声は！？

「キョウスケ君…こっちのはやてちゃんと何があったノカナ？」

「そうだよ…私達には言えない事なの？」

「駄目だよキョウスケ…秘密はいけない事だよ…？」

「…おめー、はやてにだけ何したんだ！？」

上からなのは・こちら側のなのは、フェイト・ヴィータと凄い勢いで迫ってきた！？

「ちょ…ちょっと待て!?僕は別に…「キョウ君…」って…さ、さくら?」

「キョウ君…こっちのはやてちゃんと仮契約しちゃったんだよね…」

な、何でさくらが知ってるんだ!?

「…忘れちゃったの?私が仮契約の管理しているって事…」

……あっ!?そ、そーいえばそんな事言っていたような…

「ええっ!?キョウスケ君!?こっちのはやてちゃんとも仮契約をしちゃったの!?」

「…ん?おい!むこう側の高町なのは、仮契約って…何だ?」

「…キョウスケ君とキスすると仮契約っていうのが出来て、その証にこーゆーカードが現れるの…

…というかキョウスケ君…はやてちゃんとキスしたんだ~…フフ…フフフ…」

な、なのはさん?何やら黒い瘴気が出てますが…

「へ~キスねぇ……ってオイ!!!て事は…恭介とはやてがキスしただと!?」

「ええっ!?ほ、ホントなの!?キョウスケ!!?」

「あ…いや…それは…」

キスした記憶はないが…カードがあったって事は…

―ジャキ！！

…はい？ジャキ…って…

「シ、シグナムさん！？」

シグナムがレヴァンティンを僕の喉元に…って軽く刺さってるよ！？

「神代…貴様ぁ！！主の唇を奪っただと！？」

鬼が居たよ…ピンクの鬼が！！？

「えっと…だからそれは…」

―ガチィ！！

ガチィ！？こ、今度は…

「恭介！オメーとうとう…むこうの私やはやてだけじゃなく、こっちの私らにまで…」

グラーフアイゼンを起動されているヴィータ様がガ○ガイ○ーのように…って！？

だ、だから誤解だって！？しかも微妙に自分もキスされたような表現になってるし！？

「ま、まて！？は、話せば「「キョウスケ君、帰る前にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ…だね？」」…って！？な、なのはさんｓ！！？２人

して既にスタライ発射体制！？」

「ま、待て高町！？その位置では！！」

「私らも巻き添えじゃねーか！？」

僕にデバイスを突き付けていたシグナムとヴィータ…

ちなみにさくらやフェイトは既に射線上からちゃっかり退避済み…

「ちょ！？なのはちゃん！？それは家が壊れてまう！？シャマル！！結界や！！」

「は、はいっ！！」

―キィィン！！

…つかはやて…出来れば僕らを助けてほしいんだが！？

「「スターライト…ブレイカーーーー！！！！」」

《《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》》

―ズガァァァァァン！！！

―――

―――

――

Ｓｉｔｅ　Ｏｕｔ

クロノＳｉｔｅ

「…結界反応があったから急いで来てみれば…」

「「にゃはは～」」

…まったく何処と戦争する気だ！！

「…なのはちゃん達…やり過ぎや」

「うっ…」

「ご、ごめんなさい…」

「…2人分のスターライトブレイカー…2人が同一人物だからブレイカー同士が共鳴し、相乗効果で威力を高めた…と、まさか結界を破壊ではなく跡形もなく粉々に粉砕させるとは…末恐ろしいな…」

正直この破壊力…アルカンシェルと同等じゃないかと思えるぞ！？

「クロノ、周囲に被害はないんだけど…キョウスケ達が…」

ハァ…胃が痛む…

「…とりあえずユーノ、シグナムとヴィータはシャマルに任せて君はキョウスケの治療をしてくれ…」

「う、うん！」

…しかし、よく生きていたな…

「ク、クロノ…勝手に殺すな…」

「まぁ…その位悪態がつけるなら大丈夫そうだな」

「…こ、これが大丈夫に見えるなら…眼科に行け…というかお前もWスターライト受けてみるか…？」

う〝…そ、それは…

「…遠慮しておく」

僕もまだ生きていたいしな…

Ｓｉｔｅ　Ｏｕｔ

ちなみにこれが元で、
元の世界に帰る時間が数時間延びたのだった…

帰還

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじや…

えっと…みなさんこんにちは、八神はやてです

え、何で私がここに？

キョウスケ君は…まぁ何や…なのはちゃんｓらのＷスタライを食らってもうて…あはは…

…まぁ御蔭で、ちょこっとだけやけど…キョウスケ君とまだ一緒に居られるんやから…なのはちゃんらには感謝やな～

でも…やっぱり別れの時が近づくんやな…

では、魔法少女リリカルなのは…始まります…

『は、はやて嬢がシリアスモード！？ふ、不吉な！？』

…なんやインフィ君…失礼な…私かて、たまにはシリアスになるんや！！

『でもこの小説、ギャグが大半ですから…シリアスも霞みますよ？』

…くっ！？こら！！作者！！たまにはシリアスな話書かんかい！？

作：無理！！

即答かい！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｔｅ

なのは達のギガスレイブ並の魔砲撃を受けたおかげで…大幅に帰る時間を過ぎてしまった…

「大丈夫？キョウスケ君？」

なのはが心配そうに僕を見ている…が！！

「魔法ぶっ放した張本人に言われたくないんだけど…」

「うっ…ご、ごめんなさい…」

「まぁキョウ君、なのはちゃんも悪気があった訳じゃないんだし…」

あったら尚更悪いわ！！

「まぁ何はともあれ、これで君ともお別れか…淋しくなるな」

クロ「んー！！んぐーーっ！？」…ハァ、あえてスルーしていたが…

「……でだ、クロノ…アレは何だ？」

妙な声の発生元を指差す僕…

「……ああでもしないと君の後を追い掛けかねなくてな」

「……あ～…うん、そだね」

指差す先には…グルグル巻きにバインドを掛けられ、口にもバインドされたエイミィさんがいた…

つか付いてくる気満々！？

「ね、ねぇクロノ…何でエイミィがあんな恰好に…？」

「それ「あら、フェイトさん…それはクロノの趣味だからよ♪」って母さん！？」

「「「「「えっ！？」」」」」

リンディさんが面白い事を言った…つかいつの間に居たんです？

「ちょ！？母さん！！？何を！？…というか皆！？なんでそんなに距離を取るんだ！！？」

そりゃあ…ねぇ…

「クロノ君…（軽蔑の眼差し）」

「こっちのクロノ君にはそんな趣味が…ま、まさかむこうのクロノ君にも！？」

「…クロノ…最低だね…」

「クロノ君…それはないわぁ～ドン引きや」

「クロノ君にそーゆー趣味があったんだ」

「……執務官も地に堕ちたな…嘆かわしい」

「テメー！！はやてに近付いてみろ！？ぶっ潰してやる！！」

「わ、私も…その趣味にはちょっと…」

「……男の風上は勿論、風下にも置けんな」

「フェイトにも近付くんじゃないよ！！」

「クロノ…君ってやつは…」

クロノは皆からこれでもかという位冷たい目で見られた…

「ちょ…僕はそんな趣味はない！！おい！！キョウスケ！！君から

も何か「あ、ごめん無理！」ドちくしょょょう！！」

あ、クロノが血の涙を流しながら逃げたした！？

「あら、ちょっとからかい過ぎたかしら…」

分かっててもやる人なんですよね…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

〔では準備はいいかな？〕

「はい、お願いしますギリアム少将」

ギリアム少将はゲートを開く力をもっている（神族）ので、通信を繋いでくれていた…

―クイッ

ん？服の裾を引っ張られる…？

「はやて？」

「キョウスケ君…もう行ってまうんやね…」

「うん…この数日ありがとう、はやて」

何だかんだでお世話になったしな

「…キョウスケ君、さよならは言わへんよ！また絶対会おうな？約束や！」

「ああ…と言うか、仮契約カードのメール機能使えば連絡とれるし…」

カードに隠された機能…まさかメール機能まであったとは…解った時は携帯電話かよ！？ってツッコんだしな～

「それに私はキョウスケ君に身も心を捧げたんや♪貰ってくれへんと困るしな～」

……なに？

「ちょ！？はや「キョウスケ君…」な、なんですか？なのはサン？」

「はやてちゃんに身も心もって…ドウイウコトカナ？カナ？」

ちょ！？なのは！？目がとても濁った瞳になってますよ！？

「恭介っ！！オメーやっぱりはやてと！？何しやがった！？」

「ま、まてヴィータ！！何もしてないぞ！！」

「嘘つけ！！はやてにした事…私にもしやがれ！！！」

そして軽く暴走！？

「あ、ずるいよヴィータちゃん！！なら私もしてもらいたいの！！」

「えっ！？なのはも！？だ、だったら…私も…その…してほしいかな…／／」

こちら側のなのはやフェイトも連鎖的に暴走かい！？

「く、ユーノ！！クロノ！！ボサッと見てないて止めてくれ！！」

近くに居る淫獣と変態の方を向くと…

「…な、なのはが…なのはがぁ…ｏｒｚ」

「…ふ、フェイトがぁ～　義妹のフェイトがあんな男に…ｏｒｚ」

って！？何二人して絶望の淵に沈んでるんだよ！？

「シグナム！シャマル！ザフィーラ！！何とかしてくれ！！」

僅かな望みを賭けてまだまともそうな３人（シャマルは微妙だが）に声を掛けるが…

「神代、もはやこうなったら…責任を取れ！！」

「キョウスケ君ならハーレムの１００人や１０００位大丈夫よ？」

「……諦めろ」

見捨てられた！？つか女性２人は発言おかしくね！？

「主が最も幸せな道を選んだだけだ…決して私が、模擬戦の相手に事欠かなくなるから等と私的な打算とかはないぞ！？」

むしろそっちが本音かい！？

つかそろそろ本気でヤバイ…色んな意味で！！

「ギリアム少将！！ゲートを！！早く！！急がないと何かが奪われる！！？」

いやマジでそう思うッス！

〔あ、ああ…では…ゲートオープン！アポロン！！〕

何気にネタ！？

―ヴォン

よ、よし！！とにかくゲートが開いた！！

「先にいくぞ！さくら！なのは！」

「ほえぇ！？き、キョウ君！？」

「にゃあ！？ま、待ってよキョウスケ君！？」

「じゃあはやて、皆！！またな！！」

―ヴォン！

「あ！！もう…いこう！なのはちゃん！！」

「う、うん！じゃあ皆！お世話になりました！」

―ヴォン！ヴォン！

こうして僕たちは元の世界へと帰っていった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「…行ってもうたな…」

「主…よかったのですか？あんな別れ方で？」

「いいんよ…湿っぽくなったら…キョウスケ君が困るし…それになシグナム…１つ間違ごうとるで！」

「は…？」

「これが今生の別れって訳やないで！またいつか…いや、絶対！またキョウスケ君に会える思うとるんよ！キョウスケ君も【またな】言うとったしな♪」

「…はぁ、はやてぇ…アイツの事そんなに気に入ってんのかよ…」

「なんや？ヴィータだってキョウスケ君の事、満更じゃなかったやろ？」

「なっ！！？わわ私はべべ別にそんなんじゃねーよ／／！！？」

「ふふ…ヴィータちゃん？お顔が真っ赤じゃ説得力ないわよ？」

「う、うるせーぞシャマル／／！！」

「…確か向こうのヴィータは神代とは…かなり仲がよかったんだったな？唇を許す間柄だったとか」

「なっ／／！？シグナム！！テメー！！それにアレは私じゃねね「…その話…詳しく聞かせてくれるかな？かな？」っておわっ！？」

「た、高町？どうし「シグナムもその話…詳しく聞かせてくれるよね？」ッ！？テ、テスタロッサ！？」

な、なのはちゃんとフェイトちゃんの目がハイライトや…こ、これはアカン！！魔王降臨や！？

…ヴィータ、シグナム…2人の犠牲は無駄にせんよ？

…今のうちに逃げな…

【しかし、なのは達に回り込まれた】

って何や！？この→ＲＰＧによくあるテロップは！？

「…ああ、勿論はやてちゃんにも…」

「聞きたい事があるんだよ?…身も心もってドウイウコトカナァ…?」

「あはは…えっと…禁則事項や♪ってのはダメ…なんやろうなぁ?」

「「勿論なの（だよ）」」

…キ、キョウスケ君!早速私を助けに戻って来てーーーー!!

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―ヴォン!

「…ふう、どうやら無事に着いたな「お帰りなさい!キョウスケ君!!」ってはやて!?」

ゲートから出た瞬間、はやてが居た…ん？

「ああ…ただいまはやて、それで何で皆がそんな微妙な顔をしてるんだ？」

はやての後ろにフェイト達が勢揃いしているんだけど…何か…可哀相な子を見るような視線が…？

「なぁキョウスケ君、なのはちゃんはドコや？」

「え？なのは？もうすぐゲートから出て来ると思うけど…」

―ヴォン！ヴォン！

っと、噂をすれば…

「ただいまなの～」

「ただいま～！」

なのはとさくらがゲートから現れた

「おかえり、なのはちゃん」

「あ、すずかちゃん！ただいま～」

すずかがなのはに微笑みながら―

―ガチッ！！

…ガチッ？

「ふ、ふぇ！？す、すずかちゃん！？何で手錠なんかかけるの！？」

「ふふ、なのはちゃん…3日もキョウスケ君を1人占めして…お仕置きが必要だよね…ねぇ、はやてちゃん？」

「そやね…シグナム、ザフィーラ！例の物を！！」

「「ハッ！！」」

奥からシグナムとザフィーラが何かを運んで…えっ！？

「な、なぁすずか…それって…」

「うん、アイアンメイデンだよ♪」

だよ♪って…何でそんな物を！？

「この中になのはちゃんをぶち込む為に決まってるよ♪」

な、何にこやかに物騒な事言ってんですか！！

「ま、待ってすすがちゃん！！話せば解るよ！！とゆーか、この中って刺々的な針がびっしり！？」

「ああ、大丈夫だよなのはちゃん…この針の9割はゴム製のダミーだから～」

「そ、そっか～…って！！残りの1割は！？」

「…大丈夫や！運がよかったら臓器は避けて刺さるらしいで♪」

「それ全然大丈夫じゃないの！？」

「「さあ…逝コウカ…」」

「に、にゃあああ！！？」

―ギィィ…バターン！！

その後…なのはがどうなっ「あ、次はキョウスケ君の尋問やからな♪」なっ！？

「ち、ちょっと待て！？何でそうなる！？」

「黙って旅行抜けた罰や！！しかも帰って来るんが帰宅日ってどうゆう事かキッチリ説明してもらわんとな～」

「…それにねキョウスケ君、むこうでなのはちゃんと何があったのか…説明してくれるとうれしいな♪」

ふ、２人ともエンジェルスマイルだが…どう見ても怖いんですが何故！！？

「あはは、はは…」

こりゃ…もう笑うしかないな…

ちなみにこの一連のやりとりを遠くから見ていたフェイト達は…

「「「「こ、怖っ！！！？」」」」

と震えていたそうな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「し、シャマルさん！？これって公開処刑！？」

「美夏ちゃん…え～っと…違うと言い切れない所が怖いわね…」

「言い切れないの！？」

「…ああなったすずか達は…誰も止められないわ…」

「あ、アリサおねーちゃん…何気に冷静なんだね…」

「馴れれば問題ないわ！！」

「あはは…」

スクールパニック！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――八神家――――

キョウスケＳｉｄｅ

旅行中では…まぁ、色々あったが…それは置いておいて…

「キョウスケ君！！はよせんと学校遅刻するで！！」

「あ、もうこんな時間か！！」

今日は新学期の初登校日！

…実は管理局の面倒ご…仕事があるから学校辞めようとはやてに話したら…

「あかん！！小学中退なんてシャレにならんで！！却下や！！…それに折角…（ボソッ）」

と言う意見で却下された

…最後の方が声が小さく聞き取れなかったが…まぁいいか

…何故か辞める事を却下になったと聞いたヴィータはガッカリしていたな～

…ああ、僕と遊べる時間が増えると思っていたからかな？

『（…まぁ、微妙に正解ですけど…）』

？何か言ったか？インフィ？

…ま、何はともあれ…

「じゃあはやて！行ってくるね！！」

「ほなら…行ってきますのチューを♪」

「…行ってきます」

「うぅ～　スルーするんかい！？」

…つか朝っぱらから何してんだ！？

「えっ？新婚さんの朝の情事や♪」

…また変な昼ドラに影響されたな…

「…とりあえず今日は午前中には帰って来るから」

「うん！解った！じゃあ【後で】な♪キョウスケ君！」

「ああ、じゃあ行ってきます」

―バタン！

さーて、学校行くのも久しぶりだな～

…この時の僕は、学校であんな事があるとは思いもしなかった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

はやてＳｉｄｅ

「…フフフ…さぁ私も早く準備せな！」

この日の為にキョウスケ君には内緒で進めてたオペレーションＤ発動や！！

「はやてちゃん、制服の準備出来ました～」

「おっ、ありがとなシャマル」

「…はやてちゃん、やっぱり私も一緒に行きましょうか？はやてちゃん１人じゃ心配で…」

「はは、シャマルは心配性さんやな～。大丈夫やて！足だってもう完治しとるし」

これもキョウスケ君のエリクサーとか言う薬のおかげやな♪

「シャマルは皆の事見とってな。皆の朝ごはんはテーブルに置いてあるで」

「はい、任せて下さい！！お昼ご飯は私が頑張っ「あ、お昼はええよ！！私かキョウスケ君が作る…というかシャマルはキッチン出入り禁止中や言うたろ！？」…ううぅ…わ、分かりましたぁ～…シクシク…」

いや、嘘泣きバレバレやで！？

…さて、と　私も急がな遅刻してまうな～　キョウスケ君の驚く顔…今から楽しみやな～♪

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校――

キョウスケSide

さて、久々の学校だな…何か数ヶ月振りという感覚があるが…気のせいか？

作：気のせいです！

…何か妖精さんからの電波が聞こえたような…？

ま、いいか

―ガラッ！

僕は教室に入り…

「おはよー」

何時通り挨拶をして教室に入っ…ん？

「「「「「「……」」」」」」

な、何！？この静けさ&

というか何!?新手のいじめ!?嫌がらせ!?このまま学期崩壊まっしぐらスか!?

―ガラッ

「おはよー、あ、キョウスケ君♪おはよ～なの♪」

「おはよう、キョウスケ君」

「アンタがこんなに早く来るなんて珍しいわね」

後ろからなのは・すずか・アリサが教室に入ってきた

…つかアリサ…何か失礼な発言してなかったか!?

「「「「…キ、キョウスケ!!!!?」」」」

おわっ!?な、何だいきなり…?

「ね、ねぇ高町さん…キョウスケ君…って神代君…の事だよね?」

「にゃ!?そうだよ?」

「……彼が神代…君??」

「当たり前じゃない!?コイツ以外にキョウスケって居る!?」

何やらクラスメートがなのは達に僕の事聞いているけど…

そ、そんなに影が薄かったのか!?

…結構ショックなんですが…

「だ、だって……」

「「「「「神代君、休み前と全然見た目違うし!!?」」」」」

……なに?

「……あ～…なるほどね」

「アリサちゃん?何がなるほどなの?」

「…コイツ冬休み前までメガネ…というか認識阻害の魔法使っていたから…（ボソッ）」

「あっ!?そっか…今メガネしてないから皆分からなかったんだ（ボソッ）」

……あああ!!?そ、そっか!!
今は認識阻害メガネしてないから皆分からなくなったのか!!

「（キ、キョウスケ君!!どうしよう!!?）」

なのはが念話で僕に話かけてきた

「（どうしよう…って…ごまかすしかないだろ?）」

「（で、でもでも!!どうやって!?）」

「（まぁ…とりあえず僕にまかせてくれ!）」

…最悪、皆の記憶消去する…かな？

「あ～…皆、アレだよ…休み明けだからイメチェンしてみたんだ～アハハ」

「「「そ、それは無理があるんじゃ…」」」

なのは達からのツッコミが…し、仕方ないじゃんか！！
それとも整形したとか言った方がいいか！？

「「「「「なるほど～」」」」」

「「「「納得するの！？」」」」

ほら、皆は納得してくれたろ？

「な、何か納得出来ないのーーー！！？」

何だよ！？何か不満でもあるのか？

「なのは…もう気にしたら負けよ」

「何たってキョウスケ君なんだし」

…何かすごく馬鹿にされている気がするんだけど？

―ガラッ

「あ、キョウスケおはよー…ってどうかしたの？」

「…フェイト…いや、何でもない」

「？？？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

朝のドタバタは解決？したのだが…

気のせいか視線をアチコチから感じるんだが…

「キョウスケ君、前の時もカッコよかったけど…今もさらにカッコイイよね／／？」

「うん…何か凄く大人っぽいというか…／／」

「私、アタックしようかな～キャ／／」

「ちょっと！！先に神代君に告白するのは私よ！？」

という女子達の会話が密かに行われていたなどこの時の僕は気付かなかった

―ガラッ

お、先生が来たみたいだ

「皆さんおはようございます　今日は皆に新しいお友達を紹介します」

…転入生か？

「それじゃ八神さん、入って来て」

八神？　はやてと同じ名字だな～

まぁ、そんなに珍しい名字でもないし…

―ガラッ

「ふぇ！？」

「えっ！？」

「なっ！？」

「ええっ！？」

４人娘が驚いている…そりゃそうだろう？

だって…

「皆さんはじめまして、八神はやてです。長い間病気の為休学してましたが復学する事になりました　これからヨロシクお願いします」

「「「「は、はやて（ちゃん）！！？」」」」

我らのよく知っているはやてだったから…って！？何でいるんだ？

「あら、八神さん？高町さん達とお知り合いなの？」

「はい、なのはちゃん達とはお友達（ライバル）です」

…ん？何かお友達のイントネーションが微妙に違ったような？

「じゃあ八神さんの席は高町さん達の近く「あっ先生、私の席は神代君の隣がええんですけど…？」あら？神代君ともお友達だったの？」

はやては何故か僕の席の隣を希望しているが…まぁ確かに隣の席は空いているけど…

「神し…キョウスケ君とは結婚を前提にお付き合いしてますんで…ちなみに既に同棲中や♪」

―ピシッ！！

…なっ！？

「「「「「な、何だってーーーー！！！？」」」」」

クラス中が悲鳴を上げた…つかうるせー！！

「おい！神代！！テメー！クラス…いや！！聖祥４大美少女の高町さん達だけじゃなく…あんな美少女も毒牙にかけたのか！？」

ど、毒牙って…人聞きの悪いぞ？名も知らぬ男子クラスメートＡ

「イケメン…イケメンは全人類の敵じゃぁぁぁ！！」

「いやぁぁぁ！！！神代君が…神代君がぁぁぁ！！」

「告白する前にフラれるなんて…」

「こ、こうなったら体を使って略奪するまで！！」

「神代君が他人の物になるなら…いっそ私の手で…フフフ…」

お、男からも凄い殺気だが…女子がそれ以上に怖いんですが！？

特に最後の２人！！？

それ絶対アウトだから！！？

「じ、じゃあ八神さんは神代君の隣の席に…（さ、最近の小学生は進んでるわね…）」

「はい♪」

嬉しそうに返事をしたはやては、僕の隣の席に座り…

「驚いたか？キョウスケ君」

…いや、まぁ驚いたけどさ…

「復学するならするって言ってくれれば…」

「そないな事言うたら…ドッキリにならんよ！」

「さ、さいですか…つか、さっきの結婚前提って何！？」

その発言のせいで、未だにクラスの男女から絶賛睨まれ中なんです

が！？

…つか先生…ＨＲなんだから注意してくれよ…

「そんなん、これ以上キョウスケ君に悪い害虫が着かん様にする為に決まっとる！！」

はやてがそう断言し僕を指差した…いや、害虫って…

「ちなみに今日は一緒に帰ろな？
帰り途中どっか寄り道して…制服デートってのもええな～♪ショッピングしたり、ゲームセンターでプリクラ撮ったり…」

は、はやてさん…？別に制服デートはいいんですが…

「「「「はやて（ちゃん）！！！抜け駆けはズルイ（よ）（の）（わよ）！！！」」」」

…声がダダ漏れだから…案の定、なのは達が噛み付いてきたよ…

…ハァ、無事に家に帰れるが心配だ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「や、八神さん…出来たら寄り道せずに帰って欲しいんだけど…」

先生…多分はやてには聞こえてませんよ…

騒々しい日常

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

学校新学期！

足が完治したはやては学校に復学した

…だが、今更だが主要キャラを１つのクラスに纏め過ぎぢゃね？

どっかの葱的なクラスに段々近付いていくような…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校――

キョウスケＳｉｄｅ

―キーンコーンカーンコーン

よし、今日のお勤め終了…っと

ま、始業式だからすぐ終わったん「キョウスケ君！急いで帰るで！！」って…

「はやて、別にそんなに急がなくても…」

「急ぐに決まっとるやないか！！また【あんな事】になったらこっちの身が持たん！！」

いや…持たん！って…それに【あんな事】って？？

「「「「キョウスケ（君）！！」」」」

…っと？なのは達が…もう帰る準備万端で僕の席に集まって来た！

「キョウスケ君！早く学校から脱出するの！！」

「そうだよ！キョウスケ！！この学校はもう…」

な、なんかなのはとフェイトまで壊れ気味に慌ててるよな…

「アンタねぇ…今自分が置かれている状況って理解してる！？」

…状況って…？

「…気付いてないんだね…キョウスケ君…はぁ」

す、すずかまで！？しかもため息付きで！？

「…あんな、キョウスケ君…今日キョウスケ君の身に何があったか覚えとる？」

ん～～～…変わった事は特に…

しいていえば…

――――回想中――――

ケース１

休み時間に、他のクラスの女の子に体育館裏に呼び出された僕…

「えっと…僕に何か用かな？」

「あ、あの…／／」

呼び出した女の子は、顔を真っ赤にして俯き…そして意を決し…

「か、神代君！あ、あの！私、神「ちょっと待ったあああああ！！！」ヒッ！？」

女の子の言葉を遮り、大声をだして現れたのは…

「は、はやて？」

はやてが凄い勢いで走って現れた!?

…あ、足は大丈夫なのか?

「ゼェ…ゼェ…すぅ〜〜…」

「あ、あの…はやて?大丈「キョウスケ君は黙っとって!!」は、はい!」

な、何か僕の直感が今のはやてに逆らったらダメだって警告してる!?

「八神さん…何ですか?」

だが、僕を呼び出した女の子はお構いなしにはやてに向かって行った…

ゆ、勇者だ!勇者が居るよ!?

「アンタ!!言っとくけどな!!キョウスケ君に手ぇ出そうもんなら…容赦せぇへんで!!」

はやてから凄い覇気が噴出した!?

…気のせいか?そのはやての背後に一尾の守鶴(狸?)が見えるような!?

「キャアア!!!」

やはりその守鶴?の殺気に勝てる訳もなく…少女は泣きながら走り

去って行った…

…結局何の用だったんだろう…？

ケース２

「せ、先輩！ちょっとだけ…時間、いいですか？」

人気がない廊下を歩いていると、下級生？が僕を呼び止めた

「は、はぁ…何だい？」

「あ、あああ、あの…その…／／」

何か凄く怯えているような…？

僕…何かしたかな？

「あ、あの神代先輩！！」

「は、はい！？」

女の子は意を決したのか、強い意志を宿した瞳で僕を見つめ…

「先輩の事…ずっと前から好「…ねぇ、ちょっといいかな？かな？」

えっ？」

女の子が背後から声を掛けられ振り向くと…

「な、なのは？」

なのはが無表情で立っていた！？

「…ねぇ、貴女…向こうで少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ、シヨウカ？」

「た、高町先輩！？い、いえ！わ、わわ私は…」

「…遠慮シナクテイイヨ？スグ終ワルカラ…」

な、何で片言が混じってるんだ！？

「えっ！？ちょっ！？い、いやぁぁぁ！！？」

なのはが女の子を引きずって行ってしまった…

…だ、だから用件は？

ケース３

「ねぇ神代君、ちょっといいかな？」

「ん？何だい？」

教室の席に座っていたらクラスメートの女の子が話し掛けて来た…

えっと…

「愛原さん…だっけ？」

たしかそんな名前だったような…

「あ、私の事は香織でいいわよ」

「は、はぁ…それで僕に何か？」

「今度の日曜日ヒマ？よかったら一緒に遊「あ！！キ、キョウスケ！！」チッ…」

何やら舌打ちが聞こえたような…

「ちょっと！テスタロッサさん…私が神代君と話しているのに…邪魔しないでく…れ……」

愛原さんがフェイトに突っ掛かって行ったが…

―ゴゴゴゴゴォ…

な！？フ、フェイトの髪が重力に逆らって揺れ始めた！？

「…キョウスケはこれから大切な用があるから…あなたは遠慮してほしいんだけど…いいかな？」

フ、フェイトさん？

目が狂気に染まってませんか！？

「…じゃないと…フフッ…」

フフッ…って何だ!?こ、怖っ!?

「あ…えっと…し、失礼しましたぁぁぁ!!」

フェイトの笑みを見て、真っ青になった愛原さん?は逃げるようにその場を去った…

だ、だから用件はちゃんと言っていけよー!!

――――回想終了――――

「……という具合に、女の子から話し掛けられた位で…ってど、どうした?」

皆、目が点になっているが…

「…なんや…この微妙な心境は?」

「う、うん…(告白を)阻止出来たのはいいんだけど…」

「な、何だか…我が身のような…」

「…というかコイツの鈍感は治らないのかしら…ハァ」

「キョウスケ君らしい…のかなぁ?」

な、何か僕が悪い事したのか？

「…あ～…何か知らないが…すまん」

「「「「「……はぁ」」」」」

なっ…！？み、皆そろってため息って！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

とりあえずあの後なのは達に（強制）連行され学校を出たのだが…

「…どうすっか…この手紙の山…」

下駄箱に大量の手紙が入っていたのだ！！さらに！！

「…なぁ、何で皆して僕の周りを？」

その手紙の山を見たなのは達は、ＳＰのように僕に張り付いて周りを威嚇しながら…って、何で威嚇してんだ！？

「（こちらホワイトラビット！前方異常なしなの！！）」

「（こちらブラックラビット！こっちも異常ないよ！　はや…ブルーラビットは？）」

「（こちらは…あ、３時の方向に不審な女狐集団発見や！！）アリ

サちゃん、すずかちゃん！」

「「了解！！」」

な、何が了解なんだ！？って突っ込む間もない位のスピードでアリサとすずかはどこかに行ってしまった…

「な、なぁはやて…アリサ達は何処に？」

「い、いや～　2人の知り合いを見かけたんでそれを教えたら、ちょっと【挨拶】に行くって言っとったで？」

「ふーん…まぁいい「ギャアアアア！！」な、何だ！？今の悲鳴は！？」

悲鳴が聞こえた方向…アリサ達が向かった場所！？

「ま、まさか2人の身に何か！？」

2人とも誘拐され易い体質？だから…

「あ、大丈夫だよキョウスケ」

「うん、あ！ほら！アリサちゃんとすずかちゃんがこっち来たよ！」

あ、ホントだ…何故か2人とも清々しい顔をしているが…良い事でもあったのかな？

「おまたせ皆！」

「さ、行きましょ！！」

…2人の制服に赤い染みが僅かに着いているが…うん、多分ソレ気にしたら負けだな…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ところでキョウスケ、この後の予定はあるの？」

「ん？この後は…僕とはやてとシグナム達は管理局に行くんだっけ？」

「せや！私やシグナム達は嘱託魔導師の手続きをしに行くんや」

この前の面接は皆問題なく通過し、はやては嘱託として…後々正式に入局なんだろうな～

「あ、キョウスケ君達も本局に行くんだ？」

「達も？じゃあなのはも？」

「うん！フェイトちゃんと一緒に！」

「今度私となのはは、3ヶ月の短期だけど武装隊の陸士訓練校に行くんだ。それでその手続きに」

「3ヶ月も！？じゃあその間こっちの学校は…」

「ううん、こっちの学校にもちゃんと行くよ！でも当分は訓練校優先になっちゃうかな～」

「そうなんだ」

「はやてちゃんもその訓練校に行くの？」

「ん～…まだ詳しい事は決まっとらんのよ～　…私的にはキョウスケ君と同じ部隊のＦＡＩＴＨに入りたかったんやけど…」

「ああ、あそこは最低魔力ＳＳＳランク必須だからな～」

ま、ＦＡＩＴＨはぶっちゃけ神が責任者という非常識な部隊だからなＳＳＳなんて一握りしかいないから…言い方を変えれば暗に【入れる気がない！！】って言っているのと同じだし

…まぁ、なのは達なら別に入れてもいいんだけど…殆ど対アインスト部隊だから危険だし…う～～ん…

「キョウスケ？どうしたの？難しい顔して…心配事？」

「フェイト…いや、何でもないよ」

ちょっと考え込んでて、フェイトに心配かけちゃったみたいた…

「私に出来る事があったら何でも言って…ね？」

「うっ／／…あ、ああ」

くっ！！ちょっとドキッとしてしまった…／／

「「「「……ムッ」」」」

ん？…何かなのは達が不機嫌な顔をしているが…？？

「キョウスケは、はやての付き添いで本局に行くの？」

「まあね、それに何かさくらも連れて来てくれって。なぁはやて？」

まぁ、さくらはどっちにしろ付いて来そうだが…

「そや！何やマリエルさんって人が、さくらちゃんを見てみたいって騒い…じゃなく、言うとったってエイミィさんが苦笑しながら言うとったで」

マリエル…はて、どこかで聞いたような…まぁいいか

「じゃあ、準備があるから僕たちは先に行くね。行こうはやて」

「ほなまた後でな！なのはちゃん　フェイトちゃん」

「うん、また後でねキョウスケ君！はやてちゃん！」

「シグナム達にもよろしくね」

「…まぁお仕事なら仕方ないけど…たまには私達にも付き合いなさいよ！！」

「またね！キョウスケ君、はやてちゃん」

僕は人目がない事を確認して、転送魔法を発動させた！

―シュン！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

エイミィさんの憂鬱…？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――時空管理局本局――――

キョウスケＳｉｄｅ

あの後、なのは達と再び合流し…やってきました管理局本局！！

今回ははやての付き添いで来たけど…一応神様も常勤？しているらしいから挨拶位は行くか…つか仕事してんのか！？

リアルにゲームしている姿しかイメージ出来ないんだが…

「おーーい！！みんな～！！」

「あ、エイミィさんや！！」

「エイミィ！！」

「……ッ！？」

やって来たエイミィさんにはやてとフェイトは手を振って、なのは

はレイジングハートを起動させ…あれ？起動！させた！？なぜ？？

「……エイミィさん…これ以上キョウスケ君に近付いたら」

や、ヤバイ！？目が覇王化してる！！？

「ち、ちょっと待て！なのは！！」

「な、なのは！？どうしたの！！？」

「なのはちゃん！？どうしたんや！？と、とりあえず落ち着こ？な？」

この後なのはの説得にしばらく掛かった…

てか何でエイミィさんに……あっ！？も、もしかして…

「な、なのは…こっちのエイミィさんは大丈夫だから」

「……ホント？キョウスケ君を危ない目で見て狙ってないの？」

「ああ、こっちのエイミィさんは無害だから…落ち着こう？」

「…うん、分かったの…」

納得してくれたなのはは、レイジングハートを待機状態にして落ち着いてくれた

「…あ～…キョウスケ君、助けてくれたのは有り難いんだけど…何

気に酷い事言ってなかった！？」

あ……

「えっと…実はですね…」

――――説明中――――

「…という訳で平行世界のエイミィさんとこっちのエイミィさんだと勘違いしちゃったんですよ」

なのはがエイミィさんにレイジングハートを向けた原因…それは以前に行った平行世界のエイミィさんが原因だった…

…まぁ確かに危ない人だったよな…

「へ、平行世界の私って一体…」

話しを聞いたエイミィさんがｏｒｚと手を付いて落ち込んでいた…

「あ～…確かにそんなあぶねー奴…コイツもレイジングハート構える訳だな…」

「ヴィータ言い過ぎ…でもないなぁ…激しく同意やな」

「え、エイミィ…その…ドンマイ！」

「ま、まぁエイミィさん…僕は気にしてませんから…」

「キ、キョウスケ君…今はその優しさが…残酷だよ…」

この後、エイミィさんの再起動に全員総出で慰めた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「さぁ気を取り直して行こうか！！」

つか切り替え早！？

女性は過去を引きずらないってどこかの文献でみた事あるが…

「それじゃなのはちゃんとフェイトちゃんは私に着いて来てね」

「「はい！」」

「あ、エイミィさん　私らは？」

「はやてちゃん達は…あ、来た来た！！」

エイミィさんが見ていた方向から眼鏡をかけた1人の女性が来た

「す、すみません！遅れちゃいました！！」

「しょうがないなぁ」

「あの…エイミィさん？その人は？」

「あ、初対面の人が多数だったね！この子は…」

「はじめまして、マリエル・アテンザです。マリーって呼んで下さい」

あ～…この人がさくらと会いたいって言っていた人？

「って…貴女は…」

「ほぇ！？な、何ですか？」

早速さくらに気付き凝視しているが…

「あ、貴女がさくらちゃん！？あの古代ベルカの失われた技術で作られた融合型デバイスの！？」

…まぁ以前クロノに話し時はベルカのノウハウをって言ったけど…まぁ実際は違うんだよな…

「えっと…た、確かに私はキョウ君のユニゾンデバイスですけど…」

さくらはマリーさんの迫力に押されっぱなしで後退りしていた…

「わ、私初めて見ました！！凄いです！！うわ～！握手して下さい！！」

…何かさくらがアイドル扱い！？

「エイミィさん…彼女は…？」

「あはは～…彼女メカニックマイスターの資格を持っててね～本局でもデバイスの整備とかしてるんだけど…デバイスの事となると…ねぇ？」

ねぇ？って言われても…

「ちなみになのはちゃんとフェイトちゃんのデバイスにカートリッジシステムを組み込んでくれたのも彼女よ」

「えっ！？そうなんですか！」

「じゃあ…お礼、言わないとね」

なのはとフェイトはそう言っていたが…

「うわっ～！！す、凄いです！！これぞ人類の英知の結晶！！この可愛さ…反則です！！」

…マリーさんはそれどころではなかった…

「ほ、ほえぇぇぇ！！」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「落ち着いた？マリー？」

「は、はい…すみません先輩…」

何とか正気に戻ったマリーさん…

メカニックマイスターじゃなくミーハーメカニックヲタクなのか？

「あ、あの…神代君…」

と考えていたら腐女子に話しかけられた

「何ですか？」

「実は…今度はやてちゃんの融合型デバイスを創るんですが…」

あ～ツヴァイの事かな？

「そうなのか？はやて？」

「うん…リインフォースの名を受け継ぐ子は、私の手で創った融合型デバイスがええかな　って
消えてもうたリインフォースもその方が喜んでくれる思うてな」

「（…だそうだぞ？リインフォース？）」

はやて達にはバレないよう念話で待機状態のリインフォースに話し掛けると

《（…主はやて…お気遣いありがとうございます）》

…リインフォースも嬉しそうだな

「そんでな？その事を前にエイミィさんに話したら…」

「そーゆー事にうってつけな人物がいる！って事で紹介したのがマリーなんだよ！」

なるほどね～…ん？

「あれ？だったら何でさくらも連れて来てくれなんて？」

「じ、実は私もユニゾンデバイスなんて初めてで…そしたら神代君のユニゾンデバイスのさくらちゃんの事をエイミィ先輩に聞いたんです。それなら是非この目で見てみたいな～って」

「えっと…要約すると【ユニゾンデバイス創る為にさくらを参考にさせてくれ！】って事？」

「え、ええ…まぁ、ぶっちゃけるとそんな感じです…ダメ…ですか？」

「ええっ！？ダメなんか？キョウスケ君…？」

…そーゆー事なら協力はしたいんだけど…

「ちなみに…マリーさん、どのようにしてユニゾンデバイスを創るか聞いていいですか？」

「あ、はい！先ずはマスターになるはやてちゃんのリンカーコアをコピーして、それを基にさくらちゃんを参考に得た技術を組み込んで行こうかと…これなら短時間で完成できる筈です」

「…さくら、どうする？」

「え、えっと…私ははやてちゃんに協力してもいいかな…って思っているけど…ねぇ？」

あ、さくらもあの事に気付いたか

「そうだよな～…協力はしてもいいんだが…」

「神代？何かマズい事でもあるのか？」

シグナムが僕の曖昧な態度に気付いたのか不思議そうに尋ねてきた

「…まぁとりあえず協力自体はいいんですが…（口で言うより自分の目で見た方が納得するか）さくら、悪いけど…」

「うん、分かったよキョウ君！」

「じゃあ、いいんですか？」

「ええ…とりあえず協力します」

でも…おそらく結果は…

「じ、じゃあ急いでラボに行きましょ！！さ、はやてちゃん！さくらちゃん！！行きますよー！！」

「えっ！？ちょ！！マリーさん！！？」

「にゃああ！？」

哀れ…はやてとさくらはマリーさんに引きずられて行ってしまった…

「さっ、私達も行くわよ！なのはちゃん！フェイトちゃん！」

「「は、はい…あはは…」」

なのは達も若干マリーさんの行動に引きつつエイミィさんの後に付いて行った…

「…そーいやヴィータ達はどうすんだ？」

何か唖然てしている間にはやてが拉致られていったが…

「…あ、ああ…どうすっか…恭介はどうすんだ？」

「僕は一応、自分の部隊の方へ行こうかと…」

何か新しいアインスト情報が入っているかもしれないしな

「そっか…な、なぁ恭介…私も付いてってもいいか？」

…まぁ、部隊部屋にも接客室があったから…ヴィータにそこで待っててもらえば大丈夫かな？

「いいよ」

僕が二つ返事で了承すると…

「よっしゃ！！」

と、ヴィータがガッツポーズで喜んだ…別にそんなに面白くないと思うけど…

「なら私達は主と行動を共にしよう…シャマル・ザフィーラはどうする？」

「私もはやてちゃんの様子が気になるから一緒に行くわ」

「……我も主の元へ」

「じゃあ急いで行かないとはやて達…見失っちゃうぞ？」

「そうだな…それではまた後でな」

「それじゃ後でねキョウスケ君！ヴィータちゃん」

「……後で合流しよう」

そう言い残し、シグナム達はマリーさん達の後を追って行った

「さ、僕らも行こうか？ヴィータ？」

「お、おおおう／／！！」

…ん？

「どうしたヴィータ？顔が真っ赤だぞ？」

「なななななんでもねーぞ／／！！（ひ、久々に恭介と2人っきり…ヤ、ヤベー！！何か緊張してきた／／）」

「？まぁいいか、じゃあ行こうか」

「あ、ああ…／／」

こうして僕たちも移動したのだが…

「♪～♪～？～／／」

と、移動中ずっと上機嫌だったヴィータ

いい事でもあったのかな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

《（…インフィニティ…解ってはいたのですが…彼は何時もこうなのですか？）》

『（まぁ…概ねそうですね…）』

《（主はやてや鉄槌の騎士も苦労してますね…）》

『（なのは嬢やフェイト嬢も苦労してますよ…）』

『≪（（……ハァ）））≫』

Ｆａｔｅ／Ｌｙｒｉｃａｌ　ｎｉｇｈｔ…って違うし！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

はやて達と本局にやってきました！

で、とりあえず僕はヴィータと一緒にダイテツ（神）がいるＦＡＩＴＨの部署の扉を開けたのだが…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

―プシュ

僕が扉を開けると、そこに居たのは…

「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ《我が骨子は捻れ狂う》」

…は？

「――――偽・螺旋剣（カラドボルグ）！！」

―シュッ！タン！！

「おお！！見たかねスクルド君！！ど真ん中に当たったぞい！！」

「……はぁ」

…そこにはＷｉｉスポーツのアーチェリーをプレイしていた神様と、
それを呆れて見ていたスクルドさんがいた…

「……あら、キョウスケ君♪…とオマケが１人？」

「テメー！！誰がオマケだ！！」

…ヴィータとスクルドさんって…相変わらず仲が悪いな～

それはともかく…

―カチャ

「…それでダイテツ副元帥…あなたは何やってるんですか？」

僕はインフィニティを構えて神様に尋ねると…

「ふぉ！？キ、キョウスケ！！？あ、あのじゃな…暇だったので…
Ｗｉｉ使ってアーチャーごっこ？てへ♪」

―ブチッ！

「…ＯＫ分かった…解毒薬の貯蔵は十分か…？」

「い、いや！？ま、待つんじゃ！！と言うか何故解毒薬なんじ「…バイオ」ぎゃあああ！！ど、毒！？毒がぁぁぁ！！？」

まったく…仕事しないで遊んでるからだ…反省してろ！！

「……い、いいのか恭介…？一応は偉い人なんだろ？」

「大丈夫だ。問題ない」

一応アレでも神だからな

「い、いや！？大丈夫じゃないぞ！！？わ、ワシが悪かったから…げ、解毒ををををを！！！？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

あの後、仕方なく…ホンット仕方なく【エスナ】を掛けて回復させた神様は…

「ふぅ…えらい目にあったわい…」

…反省してるのか…コイツ？

「大体、前から聞こうと思っていたが…何でここにＷｉｉがあるんだ？」

まさか任○堂が次元世界進出！…って事もないだろうし

「ん？Ａｍ○ｚｏ○で注文したんじゃよ？
いや～最近はネット通販とかあって便利じゃの～」

…マテヤオイコラ！！何で○ｍａｚ○ｎで注文した商品がミッド周辺まで配達されんだ！？

「そこは気にしたら負けじゃよ　ふぉふぉふぉ」

…コイツに【デス】掛けたろか！！

…後にこのＷｉｉが本局の娯楽施設に置かれ大人気に！！

噂を聞いたミッドチルダの各メーカーが地球のゲームメーカーと秘密利に提携し、ミッドでも販売され大人気になり…数年後、ノリノリ狸の一声で何故か後の機動六課に標準装備になるに至る事になるのは…少し未来の話だ…

「…もういいや、ツッコミ疲れた…」

「ま、まぁ恭介…元気だせよ…な？」

うぅ…ヴィータの優しさが身に染みるよ…

「所でキョウスケ君、今日はどうしたの？こちらに来る予定はなかったと思ったけど？」

「今日ははやての付き添いで…というかなのはもフェイトも一緒ですが、それで本局に来たんですよ。
で、ついでにアインストの新情報か入ったかなと思って来たんですが…」

まさか仕事そっちのけでゲームしてるとは…予想は出来たが…本当にしてるとはな…

「そうですか…残念ながら今の所、新しい情報は…」

「そうですか…」

やっぱそうそう簡単に見つからないか…

「のうキョウスケ、折角来たんじゃ！次はＷｉｉボーリングで対戦じゃ！！」

…空気読めよ…というか仕事しろよな…

「そうじゃ、ヴィータ嬢ちゃんもやらんか？」

神様はヴィータにゲームで対戦を求めるが…

「めんどいからパス！！」

ヴィータにバッサリ切られた！

「そうじゃの～…ゲームでワシに勝てたら、そなたを特別にＦＡＩＴＨに入る事を許可するぞい？」

…何かまたトンデモない事言ってね？

まぁでも、ヴィータがそんな事で釣られ…

「よし！勝負だじーさん！！さっさと始めんぞ！！」

釣られた！？しかも割と速攻で！？

「では、ボーリングで勝負じゃ！！」

「へっ！！鉄槌の騎士にボーリングで挑んでくんのか？」

いや、そこ鉄槌は関係ないし！？

「ぬぉぉぉぉ！！」

―ガコン！

「おりゃあああああ！！」

―ガコン！！

…あ、２人とも熱中してら…

「やるのぉ…なら！！これでどうじゃ！！」

―ガコーン！！！

お、ストライク出した！

「甘めーよ！！私だって鉄球の扱いは得意なんだかんな！！おりゃー！！」

―ガコン！！

…いや、ヴィータ…それＴＶゲームだから…今はそれ関係ないんじゃね？

…まぁヴィータもストライク取ったから何とも言えないけど…

―――

――

―

結果、ボーリング勝負は神様が勝ったのは…まぁどうでもいいや

「うぅ…ま、負け…私が負けなんて…ｏｒｚ」

「ヴ、ヴィータは頑張ったよ！？」

僕は勝負に負け、うなだれているヴィータを慰めた…

つか初心者のヴィータにハンデなしの超本気出すのって…神としてどうよ？

「勝てば官軍じゃ♪」

…あ、頭が痛い…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

神々の戯れの後、

「次やる時はぜってー勝つからな！！」

と言うヴィータの捨て台詞と共に僕らは部屋を出たのだった

…一体僕は何しに行ったのだろう？

ま、まぁそれで時間があったので…管理局内のカフェコーナーでヴィータとお茶をしてはやて達を待っていた…

「ちっくしょう…せっかくＦＡＩＴＨに入れると思ったのに…あー！！思い出すだけで腹立つ！！！」

ヴィータはまだ引きずっているのかご機嫌斜めだ…

「まぁ落ち着けって…ホラ、注文した飲み物が来たぞ」

ウェイトレスの人が持ってきたのはコーヒーとオレンジジュース

当然僕がコーヒーでヴィータがオレンジジュースなのだが…あれ？

「お待たせしました～。ご注文のアメリカンとオレンジジュース（カップル仕様）です」

ウェイトレスの人がテーブルに飲み物を置いてくれたが…何か変な単語言ってなかったか！？

「…なぁヴィータ、何でジュースにストローが2本付いてんだ？」

1人で2本使って飲むとか？

「も、もちろん恭介と…その…あの…い、一緒に…飲みたくてさ…／／」

…なんですと！？

「あの～…僕はコー「い、嫌なのかょ…？」ヒ…い、いただきます…」

だから上目づかい＋涙目コンボは止めてくれ！！

良心という名のライフポイントが一気に削られるから！？

「じ、じゃあ…せーので飲むかんな／／！？」

「あ、ああ…」

しかも…何か周りの局員達の生温かい視線が痛いんですが！？

「「…せー「…何だか面白い事してるんだね…キョウスケ君、ヴィータちゃん…？」な、なのは！？」」

いきなり魔王が現れた！？

「キョウスケ君、私カタート山脈にいきなり現れたシャ○ラニ○ドゥじゃないんだから！いきなりは現れないよ！！」

何でなのはがそのネタを！？つか何時からいたんだ！？

「…キョウスケがいただきますって言った辺りからだよ？」

フ、フェイトまでいたのか！？

「それで…キョウスケはヴィータと何をしようとしていたねかなぁ？」

「そうだよ…キョウスケ君…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩシヨウカ…？」

「い、いや！？その…「あ、いたいた！！キョウスケ君～！！」あ、はやて！！」」

いいタイミングではやて達が帰って来た…あれ？マリーさんも一緒なんだが…うなだれてる？？

「「チッ…タイミング逃した（の…）」」

…ホントにヤバかった…はやて達に感謝だな

「（クッソー！！後ちょっとで恭介と間接キス出来たのに…
最近、恭介とキスしてねーから恭介成分が足んねーし…何とか手を打たねーとな。…はやてと相談すっか…？）」

―ゾクッ！

な、何か今…身の危険を感じたが…気のせいか？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ツヴァイ誕生！準備編

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

なのはに封印されていた赤眼の魔王（ルビーアイ）シャブラ「だーかーらー！！そんな物騒な物、封印されてないの！！というかそのネタまだ引きずるの！？」ってなのは！？何でこのコーナーに来てるんだ！？

「何か作者さんの使いっていう後ろ姿が黒光りするGに似た謎の神官？さんが来て教えてくれたの！！」

ちっ…作者も余計な事を…

まぁネタ発言だから別にいいか…

まっ、とりあえず本編をどうぞ！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理局、カフェコーナー――

キョウスケＳｉｄｅ

合流したはやて達もテーブルに着き、僕らは平和的に…そう！！平和的にティータイムを楽しんでいる！！

（大事な所だから2度言ってやった！！）

「ゴホン！…それではやて、デバイスの方はどうなった？」

「それが…杖（シュベルトクロイツ）の方は問題ないんやけどな…」

「ん？何か問題でもあったのか？」

「問題…というかそれ以前の問題やな～」

…まぁ何となく予想は出来るけど…

「…キョウスケ君、何なんですか！？あのさくらちゃんは！？どう調べても解析不能とエラーのオンパレード！？管理局の最新解析装置でも解析出来ないって…一体どこのオーバーなテクノロジーですか！？」

どんより雰囲気で落ち込んでいたマリーさんは、興奮気味にテンパッていた

…まぁ、こうなる事は予想出来たんだけど…

ユニゾンデバイスのさくらの製作者は表向きは僕だが…実際は、あのゲーマー（神）だからな～
そりゃ一般局員が解析出来る訳ないのは道理…

「キョウスケ君！！さくらちゃんを創ったのはあなたなんですよね！？どうやって製作したのですか！！？」

…う～ん…上手くごまかすか

「えっと…さくらは僕の出身世界の技術をベースに、こっちで発見したベルカの技術をハイブリットさせたユニゾンデバイスなんですよ」

「純粋なベルカ式じゃないんですね…キョウスケ君って次元漂流者でしたよね？元の世界が分からないって聞きましたし…というか異なる技術のハイブリットっていうのも凄いですが…ちなみにキョウスケ君、その時のデータとかって？」

「いや～、製作過程で色々とアドリブで調整しながら創ったので…さくらの正確な製作データはないんですよ～」

「そ、そうなんですか…あっ！？なら、そのこっちて発見したベルカのデータは？」

「…ベルカのデータと言っても、一般閲覧可能な情報程度ですよ？より詳細なデータが見たいなら…ユーノに依頼したらどうですか？確か彼は管理局の無限書庫の司書に就職したはずですし…彼の探索技術ならそれこそ詳細なデータを抽出してくれると思いますよ？」

僕はユーノを生け贄に（笑）何とかごまかす！！

ま、これで一応話しの筋は通ったかな？

「そうですか…はぁ、やっぱり地道に製作しないとダメなんですね～」

「まぁ、出来る範囲であれば僕も製作には協力しますよ？何たってはやての家族が増えるんだし…だろ？はやて？」

ま、僕が手を貸さなくても完成するだろうけど…

「そや！八神家の末っ子が産まれるんやから…キョウスケ君にも子作り協力しともらわんとな♪」

そうそう子作りを…って！？ヲイ！！ちょっと待て！！

「「ちょ、ちょっとまった（なの）ーーーー！！！」」

軽く混乱している所に、なのはとフェイトの絶叫が響いた！！

「は、はやてちゃん！？…こ、子作りって…／／」

「そうだよはやて！？キ、キョウスケとのこ、子作り行為は私が先…はぅぅ／／」

なのはが顔を真っ赤にし猛抗議！！

…フェイトは何を想像したのかオーバーヒートしているし…

…というか…

「はやて…そーゆーギャグはいいから…なのはもフェイトも真に受けない！！」

「えっ！？じ、冗談…？」

「…ハッ！？じゃあキョウスケはまだ純真まっさらなままなんだね？」

…フェイトさん？何か純真まっさらなのかはツッコまないが…

…何か複雑な気分だな…

「…チッ、キョウスケ君～　ノリが悪いでぇ～…せっかくの既成事実が～」

はいそこ！！アブナイ事言ってふて腐れないで！！

「しゃあないな～…じゃあキョウスケ君には技術面で協力してもらう！ちゅう事でええか？」

「まぁそれなら…と言うか、それが普通なんだけど…」

まったくこの狸は…

「なぁなぁはやて！！そいつ何時会えるんだ？」

ヴィータ嬉しそだな～　まぁ感覚的には妹が出来るような物だからな～

「ん～…直ぐにって訳にもいかんしなぁ…」

そんなに急がなくても確実に完成するんだし…

「あの～…」

すると、今まで黙っていたシャマルが怖ず怖ずと手を挙げた

「ん？何やシャマル？」

「あのですね、はやてちゃん…時間的な事なら、キョウスケ君の別荘を使ったらどうでしょう？」

……あ、

「そ、それやーーー！！」

そーいやその手があったな～…

「そや！！なぁキョウスケ君、別荘使うてユニゾンデバイスって創れへんか？」

う～ん…

「まぁ、設備的には可能だけど？」

「なら決まりや！！ユニゾンデバイスはキョウスケ君の別荘で製作し「ち、ちょっと待って！はやてちゃん！！」って、何やエリーさん…　折角盛り上がっとったのに…クロノ君のＫＹが染ったんちゃ

うか？」

何気に酷い事をサラっと言ってないか？

「わ、私だって空気位読めますよ～！！
クロノ執務官と一緒にしないで下さい！！」

…マリーさんも人畜無害なカンジなのに酷い事を…というかクロノ！！あいつは局内でどんな評価なんだ！？

「って！？そうじゃなくて！その別荘って何ですか？と言うか、話しを聞くとキョウスケ君の別荘には少なくても管理局と同等の設備があるように聞こえるんですが？」

「ん？まぁ同等かどうかは別として…それなりの施設はありますよ？」

基本さくらのメンテとか趣味のハッキングとかで必要だからな～

ん？ハッキングは犯罪？
大丈夫、ばれなければ問題ないさ！

「それに恭介の別荘は一種の隔離結界で、中の１日が外の１時間だかんな！！どうだ？スゲーだろ！！」

ヴィータが胸を張って自慢しているけど…何故アナタが自慢するん？

…別にいいけどさ…

「そ、そんな結界まであるんですか…キョウスケ君って…何でもあ

りのバグキャラですか？」

別に何でも…ってバグは酷くない！？

「じゃあそれで決まりやな！
なのはちゃん、悪いんやけどユーノ君にユニゾンデバイスに関する資料集めてくれるように頼んでくれるか？
なのはちゃんから頼んだった方が効果的やろうしな～」

効果的って…な、何かはやて黒くないか！？

「うん、分かったの」

「で、マリーさんは必要なデータを纏めといてな　シャマル、マリーさんのお手伝いお願いな？」

「はい、はやてちゃん」

「えっ！？それってもうキョウスケ君の別荘てデバイス創る事決定！？」

「そやでマリーさん♪折角の別荘や！使わな損や！！」

損や！！って…

「なぁはやて…今更だけど、管理局員って言っても公務員みたいな物だから…色々上司とかに許可貰わないとマズいんじゃ…」

管理局も基本縦社会だからな～

「キョウスケ君が許可すればええんちゃう？
ＦＡＩＴＨのキョウスケ君って副元帥並の権限あるんやろ？だったら問題まったく無しや！！」

…あ～、そういやそんな権限あったような…よく覚えてたな

「ええっ！！？キ、キョウスケ君って…そんな偉い人だったんですか！！？」

マリーさん、えらく驚いているが…知らなかったのか？
てっきりエイミィさんかクロノから聞いていると思ったが…

「き、聞いてないですよ！？わ、私そんな人を君付けで読んじゃったの！！？」

「あ～…別にそこは気にしなくていいですよ？副元帥なんてオマケみたいな肩書ですし」

「は、はぁ…オマケですか…ははは」

何か疲れきった顔のマリーさんだが…どうしたんだ？

「シグナムは一応クロノ君やリンディさんに話しを通しといてな？一応私らの保護責任者やから」

「ハッ！判りました主はやて」

「あ、シグナム！私も一緒に行きます」

「すまんなテスタロッサ」

…しかし、こうして見ると…はやてって指揮官適性高いって感じるな～

さすが未来の起動六課の部隊長だな

…ただ、職権乱用しまくりそうな感が否めないが…

「ほな私らは先に帰って別荘の準備や！！最近使うてなかったからホコリ積もってそうやしな～」

…あの～、一応あの別荘って僕のなんですが…何かはやての所有物的なニュアンスに聞こえるのは気のせい？

「ね、ねぇキョウ君…はやてちゃん何かはりきってるね…？」

「まぁ…はやて的には、リインフォースの想いを受け継ぐ子を自分の手で創れるんだし…うれしいんだろ？」

もっともリインフォースは健在なんだが…

『（私の後継機…私も会うのが楽しみです）』

リインフォースとツヴァイ…何か腹違いの姉妹って感じかな？

「キョウスケ君！！何しとるん？家に戻って準備するで！！」

「早く行こーぜ！！恭介！！」

はやてとヴィータ、もう転送ポートに向かってるし！？

「ああ！今行くよ！！」

別荘使ってツヴァイの製作か…完全に原作前倒しだよな～

まぁ別に問題ないか！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「お会計４９８０円です」

「……キョウスケ、支払いは我なのか？」

……あ、ザフィーラの事忘れてた！！

ツヴァイ誕生！…あれ？（前書き）

風邪ひいて更新おくれました…

ツヴァイ誕生！…あれ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

みなさんこんにちは。神代恭介です

話しの流れで、僕の別荘のラボでリインフォース・ツヴァイを製作する事になりました…

それに同行した技術者のマリーさんは…

「こ、これは…まだ局でも導入していない演算装置！？ああ！！こ、こっちは見た事のない機材が！？」

…という具合に興奮気味だったのは記憶に新しいな…

それからユーノからもユニゾンデバイスの資料が届き（資料を受け取る時、「なのはが！なのはが僕を頼ってくれたんだ！！」と嬉しそうに語っていたが…それ、はやて経緯でなのはが頼んだだけだから…哀れユーノ！！）マリーさん中心で製作チームが結成（僕とはやてが補佐でマリーさんがメイン）され、デバイス製作が別荘内で開始された

ただ途中、

「フフフ…これだけの施設があれば…最強無敵のデバイスが…」

と呟いていたような…まさか…隠れマッドか！？

ゴ、ゴホン！

とりあえず餅は餅屋にって事で、マリーさんにユニゾンデバイスの製作を丸投…任せて、僕らはサポートに徹した

ちなみに暫くしてから僕とはやては別荘から出て、数時間置きにマリーさんの様子を見に行く程度にした…

ん？なんで積極的に手伝いをしないのかと？

だって…見た事のない技術を使えるって事で、マリーさんはスーパーハイテンション状態！

そんな狂科学者モード全開のマリーさんに近付くほど僕等も命知らずではないんです…いやマジで！！

その結果、マリーさんは…その貪欲な探求心で休息なしの突貫作業を続け…

そして…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

―――別荘内―――

キョウスケSide

あれから数日経ち…マリーさんからデバイスの完成の知らせを聞き、八神家御一行で別荘にやってきた！

…ちなみになのはとフェイトは訓練校に行っている為、留守だったりする

…そーいや訓練校って何すんだろ？

やっぱサバイバル訓練かな？

「み、みんなぁ～～…」

掠れた声で僕らを呼ぶ声が聞こえたのでそちらを見ると…えっ　ゞ！？

「…なぁキョウスケ君、私…目ぇおかしくなったんかな？」

「…安心しろはやて…多分僕も目がおかしくなってるから」

「…ってオイ！？何2人して現実逃避してんだよ！？」

「……まぁ、主達の気持ちも解らんでもないが…」

だって…僕らの目の前には…明らかに真っ白に燃え尽きた?とツッコミたくなるほどボロボロになったマリーさん…らしい人が居たのだ…

「って!?そんな事言ってる場合じゃありません!!」

…っとそうだった!

「は~や~て~ちゃ~~ん…完成しました~ぁ…最高の…デバ……グフッ!?」

―バタン!

って言い終る前に倒れた!?

「マ、マリーさん!?あかん!!シャマル!!急いでマリーさんの容態を!!!」

「は、はい!!」

「わ、私のマイスター人生に…一片の…く、悔いなし…ガクッ」

マリーさん…貴女の事は生涯忘れません!!

「あの~…キョウスケ君?彼女、一応まだ生きてますよ?」

あ…そうなんだ

「…神代、何気に酷いな…」

「ゴホン！ま、まぁそれはそれで置いておいて…「置いとくんかい！？」…だって、はやてだって早く見たいだろ？自分のユニゾンデバイスを～」

「うっ…その誘惑には勝てへんなぁ～

…よし！マリーさんの供養を兼ねて今から見に行こか？」

「…はやても何気にヒデーな…ま、私は別にいいけどな」

はやてもヴィータも何気に酷いな～

というか、みんな基本自分に正直というか何と言うか…

「「キョウスケ君（恭介）の影響やから（だかん）な！！」」

って僕のせい！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内・研究所――

マリーさんはとりあえず医務室に連れて行き、とりあえずシャマルに付き添いを頼んだ

…まぁ、アレでも後の六課の医務官なんだし…大丈夫だろう…多分

とりあえず僕らは研究室の前に来ています

―ガチャ

扉を開けるとそこには…

「あ、キョウ君！それに皆～！！」

中には白衣に眼鏡をかけたさくらが居た

…ちょっとグッときたのは内緒だ…！

「さくら、はやてのデバイスが完成したってマリーさんから聞いたんだが…？」

「うん！出来てるよ～　後は起動するだけだよ♪」

さくらの前には…カプセルの中で眠ったようにしているリインフォースツヴァイが居た…

うん、見た目も完璧に原作どうりだよかった

…また、さくらみたいなケース（途中で路線変更的な）な事も有り得たからな…

「じゃあ早速起動したいんだけど…スイッチは、はやてが押した方がいいかな？」

「えっ！？ええの！？」

「当たり前じゃんか！　これから生まれるデバイスは、はやての為に生まれるんだしね」

「キョウスケ君…ありがとな」

「じゃあはやてちゃん、こっちの起動ボタンを押してくれる？」

「う、うん…何や緊張してきた…」

「主はやて！頑張って下さい！！」

「はやて！！ファイトだ！！」

「……（コクッ）！！」

…いや、皆さん？ただボタン押すだけなんですが…？

「……ほな…新たな祝福の風よ！今こそ目覚めよ！！」

そう言うと、はやてはボタンを…

―ガシャ！！

…ガラスカバー位は外して押してくれよ…　どっかのウサ耳オペレーターみたいなプログラムドラァーイブ！！じゃないんだから…

―プシュ

と、とにかくはやてが起動ボタンを押して、目の前のカプセルが開き…

「……ふぁぁ、よく寝ました～ぁ」

…何だろう…すごく聞いた事のある台詞…

「……か……」

…か？蚊でも居たのか？

「かわえぇぇぇーーーー！！！」

はやてが暴走した！？

「「「……」」」

ほら見ろ！！シグナム達も軽く引いてるし！！

しかし…何だろう…？この光景も前にあったような？？

「えっと…マイスターはやてちゃんですね？」

「私の事ははやてでええよ～♪
や～ん！何やこの凶悪な可愛さは～♪」

「く、苦しいですぅ～！！」

はやてはリインを掴み？頬すりしまくってるし…まったく…

「あ～コホン！和んでいる所悪いけど…この子の最終チェックしていいかな？」

「…ハッ！？こ、ごめんなキョウスケ君！もう少しで引き返せない世界に足を踏み込んでたわ…」

我に帰ったはやてがやっとリインを手放した

…つか、ホントにヤバかったんだな…止めてよかった～

「はわわ～…た、助かりました～！」

…それに大丈夫かなリインは？トラウマにならなければいいが…

「じゃあ…　えっと、これから2、3質問するけど…これは起動テストなので解ってるかもしれないけど気を悪くしないでね？」

「は、はいです！！」

復活したリインは緊張した顔でこちらを見ている…

「じゃあ自分の名前は言えるかな？」

「はい！マイスター…じゃなく、はやてちゃんから頂いていた名前は【リインフォースツヴァイ】です！リインって呼んで下さい！ダーリン♪」

……

「…じゃあ次は「「ちょ！？ちょい待ち（待て）！！！」」って顔

！顔が近い！？２人とも！！」

はやてとヴィータが物凄い形相で詰め寄ってきたから…

「ふぇぇぇ！？こ、怖いです～！！」

リインが脅えてるじゃないか！！

…まぁ確かに問題発言があったけどさ…

「な、なぁリイン？何でキョウスケ君をダーリン何て呼ぶん？」

いきなり核心聞きますか！？

「ええっとですね～…なんというか～…リインの心がそう望んでいるんです～」

「…って言っているけどよ…意味解るか？恭介？」

って言われてもな…

「ん～…さくら、育成プログラムに問題は？」

「ほぇ！？勿論問題ないよ？」

だよな～…

「神代、育成プログラムとは？」

「ああ、説明してなかったっけ？

僕はインテリジェントデバイスの感情面から育てる方針なんだ」

…失敗例（インフィ）があったからな…それにイレギュラーがある可能性があるし、細心の注意をしながらリインのメンタルを構築したんだよな～

「感情の安定が確立してからの方が、デバイス自信が学ぶ意志を持っているから成長が早いんだけど…」

ダーリンは予想外だったな…色々な過程すっ飛ばしてるし…学び過ぎたか？

「あっ！！キョウ君、もしかして…」

「どうしたさくら？何か心当たりでも？」

「…リインちゃんは、はやてちゃんのリンカーコアをコピーして作製したから…それが原因じゃ…」

……ま、まさかそれは～…

…思いっきりありえるぞ？

「えぇ！？わ、私のせいなん！？そ、そんな事ない筈や！そうやろシグナム？ヴィータ？ザフィーラ？」

いきなりお鉢が回ってきたはやては、否定しようとシグナム達に助けを求め視線を送るが…

「…うっ！……（サッ）」

「あ～…その……（サッ）」

「……（サッ）」

3人は目を反らした！？

「な、何で目反らすんや！？うがーーー！！？」

「お、落ち着けはやて！あくまでも可能性の話しだから！！」

「そ、そうだよはやてちゃん！（可能性はとてつもなく高いけど）もしかしての話しだから…ね？」

「ちょ！？さくらちゃん！！？副音声で何サラっと言うたん！？」

「ほぇぇぇ！？な、ナンノコトカナ？」

「ぐすっ…ええんやええんや…どーせウチなんか…」

あああああ！？は、はやてがｍ○ｓｏ○ｏ化してイジけてる！？

「…ヴィータちゃん？さくらお姉様って…結構どＳキャラなんですか？」

「なっ！？おいリイン！？お前そんな言葉どこで覚えたんだよ！？」

「えっ？ん～…マリーさんが教えてくれました～♪」

…あの人は何を教えてるんだ！？

「…悪ぃ恭介、ちょっくら医務室行ってトドメ刺してくる…」

「…私も付き合うぞヴィータ…」

―ガチャ…バタン！

そう言いヴィータとシグナムは部屋を出ていった…

…マリーさん、自業自得ですが…ご愁傷様です

「あれ？シグナムとヴィータちゃんはどこに行ったんですかぁ？」

「…リイン、とりあえずマリーさんから教わった事は忘れようね？」

「？？何だかよくわかりませんが…ダーリンが言うならそうしますね♪」

…リイン、素直なのは良いが…ダーリンは止めようよ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

《（…キョウスケ、あの子の将来がとてつもなく不安なのですが…？）》

…そりゃリインフォースも不安になるよな～

…まぁ、まだ成長期だから何とかなる…かな？

シグナムさんの悩み

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

リインが無事に…かどかは微妙だが…とりあえず起動は成功しました
ちなみにマリーさんはあの後どうなったのかは…うん、断末魔的な
悲鳴が聞こえたのは気のせいだな。

…ただ帰って来たシグナムとヴィータは、何かやり切った感の笑顔
をしていたな…

あ、ちなみにリインのメンタル面の育成をさくらに任せ（消去法で、
このメンバーの中で1番マトモだった為）しばらく別荘内で平和的
に過ごしていた…

…いた筈なんだけどな～…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――別荘内――

キョウスケSide

「ん～！こんなにのんびり出来たのは久しぶりだな～」

別荘内に設置してあるオープンテラスで、1人コーヒーを飲みながらまったりとしていると、そこへ…

「神代…」

「どうしたんだシグナム？」

シグナムが難しい顔をしてやってきた！

「…少し相談…といか頼みがあるのだが…」

シグナムからの頼み…ハッ！？

「……あ～…模擬戦なら次の機会がいいんだが…」

せっかく久々にのんびり過ごしているんだから…ねぇ？

「むっ…そうか…仕方な…ではない！！」

「あれ？違ったのか？」

シグナムの頼み＝模擬戦の公式しか浮かばないんだが…

「コホン！ま、まぁ模擬戦も確かに後ほど頼みに入るが…今回はだな…その……／／」

結局模擬戦かよ！？

だが…何だ？言いたい事は結構ズバッと言うシグナムが…顔を真っ赤にして俯いている！？

…こ、これはかなりレアな表情なのでは？

「か、神代！！わ、私と……こ、恋人になってくれ／／！！」

……はい？

…いや、また幻聴が聞こえるのは気のせいか？

―ズドドドド！！！

「「ちょっと待ったーーーー！！！」」

どこから聞き付けたのか、はやてとヴィータが現れた！？

「おい！シグナム！！オメー何1人抜け駆けしてんだよ！！」

「…シグナム？そー言うんは、先ず正妻の私の許可を得てからにしてくれへんか？」

い、いきなり現れて何かとんでもない事言ってませんか！？

「ヴ、ヴィータ！？それに主はやてまで！？い、いえ！？これは…／／」

「私かて鬼やないんや！シグナムなら、シャマルに代わって3号に昇格してもかまへんし…」

「まぁ、もちろん不動の2号は私だかんな！」

な、何か本人の意思とは関係なく…とんでもない発言してね…？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――医務室――

シャマル・マリーＳｉｄｅ

―ピキーン！

「…ハッ！？」

「……どうかしましたか？シャマルさん？」

「何かしら…？今、物凄く何かに負けたような…」

「はぁ…」

「ま、気のせいだと思うし…じゃあマリーさん、シャマル印の特製お粥です！
これを食べて早く元気になって下さいね♪」

「シ、シャマルさん…ありがとうございます！！本当にシャマルさんにはお世話になりっぱなしで…先程もシャマルさんに回復魔法掛けてもらわなかったら…」

「いえ、医者を志す者として当然です。でも、シグナムもヴィータちゃんも…部屋に入ってくるなりいきなり襲ってくるなんて…マリーさん？何かしましたか？」

「い、いえ…まったく心当たりがなく…」

「そうですか…あ、冷めちゃわない内に食べちゃって下さいね」

「あ、はい！いただきま～す♪…パクッ」

……この後、医務室で起きたさらなる惨劇は…想像にお任せします…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

はやてもヴィータも何かトンデモ発言していたが…

「ま、待って下さい!?ご、誤解です!主もヴィータも落ち着いて下さい!!?」

「「誤解!!??」」

ん…?誤解って?

「…どう言う事や?説明してくれるんやろ?」

「は、はい…実は…私が通っていた剣道道場の師範代の息子が…どういう訳か私と付き合いたいと言い出してきたのです…勿論私は断りましたが…ん?」

「「「……」」」

「あの…主はやて?どうかしましたか?」

「…いやな、シグナムからそんな恋バナが聞けるなんて意外やな~って」

「…ああ、色恋沙汰に1番遠そうなシグナムからそんな話しが聞けるって…明日は槍が降んな…」

確かに意外だけど…言い過ぎなんじゃ？

「はは、まぁはやてもヴィータも…シグナムだって魅力的な女性なんだから。そーゆー話しが出てもおかしくないだろ？」

シグナムもかなりの美人だからな～

世の男もほっとかないのも頷けるし…

「なっ／／！？な、何を言っている！？か、からかうな神代！！？」

「えっ？別にからかってな…い……」

―ジィィィ…

な、何か背後からエクスカリバーで突き刺すような視線が…！？

「ど、どうした？はやてにヴィータ？」

「「……やっぱキョウスケ君（恭介）は胸（か）なん！？」」

……な、何でそんな話しになる！？

「こうなったら…ヴィータ！！私らも巨乳になって対抗するで！！年齢詐称薬を！！」

「おう！！了解だ！はやて！！」

って！？だから何でそーなるんだ！！？

つかまだ年齢詐称薬持っていたのか！？

「ふっふっふっ…待っててなキョウスケ君…すぐにヴィータと一緒に巨乳になって、１８禁小説みたいなご奉仕を…」

って!?何だそのアブナイ発言!?

「…恭介、大丈夫だ…はやてに教わった通り噛んだりしねーから…／／」

おい!はやて!?ヴィータに何を教えた!?

というかそーゆー知識はどっから仕入れるんだ!?

「シャマルがこっそり買っとった雑誌や…いや～アレは刺激的なレボリューションやった…／／」

シャ～マ～ルぅ～～～!!

後でキッチリなのは式Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてやる!!!

「つか!!それより先ずはシグナムの相談だろ!!」

「「……チッ」」

何故に舌打ち!?

というかそっちが本題だろ!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ゴホン！…それではシグナム、続きを聞かせてくれるかな？」

話しの腰を折ったから…何とか修正しないと…

「あ、ああ…その相手が断っても付き纏って困っているのだ…」

「なんだぁ？そんな事なら何時もみてーにぶった切ればいいじゃねーか？」

「こらヴィータ、そんな血ぃ見るような物騒な事言ったらアカンよ？…それにここは、シャマルの料理を相手に食べさせれば平和的に１発や！！」

…いや、どこが平和的か聞きたいんですが…

「…ヴィータ、何時私がそんな事をした？というか私はお前の中でどんなイメージなんだ！！？」

「んとだな、イメージとしちゃ…【桃色デストロイヤー】【炎のバーサーカー】【蝶のように舞い蜂のようにブッ刺す　そしてブルドーザーの様に通った後はペンペン草１本残さない】後は…」

「なんだ！？そのどこかの花の名前の紅い女性型ＳＰロボットみたいな通り名は！？」

…シグナム、何でそのコアなマニアにしか解らないネタを知ってい

る!?

「と、とりあえず!話しが進まないから苦情は後でな…で、シグナム続きを…」

「う、うむ…私としてはお世話になった人の息子という手前、穏便に事を運ぼうと思い…その…既に心に決めた人が居ると伝えたのだが…相手がその男に合わせてほしいと言い出して…」

…あ~…なるほどな~

「つまり、僕にその恋人のフリをしてほしいと?」

「あ、ああ…そうしないと相手も諦めてはくれんしな…」

ま、そーゆー事なら…

「分かった、そーゆー事なら協力するよ」

「そ、そうか?恩に着る…／／」

…ん?シグナム、少し…?

「…何やシグナム、嬉しそうやな…?」

はやてが鋭くツッコミ入れたな~

確かにシグナム嬉しそうだ…

「い、いえ!?こ、これは…そう!これはようやく相手を何とか出来るからでして…決して神代と恋人になれるからという訳では…／

／」

「…オイシグナム、あくまでも恋人のフリなんだかんな！？恭介に変なマネすんなよ？」

…ヴィータも敏感に察知し殺気混じりで確認しているが…

あくまでもフリなんだし…それに変なマネって…

「も、もももちろんだ！！！騎士の名に掛けて変な事…ぅぅ／／」

…いや、そんな事に騎士の名を掛けられても…ねぇ？

「「（……あ、あやしい…これは…））」」

「ん？どうしたはやて？ヴィータ？」

何やら2人、難しい顔で考え込んでいるが？

「い、いや！？何でもないで？なぁヴィータ？」

「あ、ああ！何でもねーぞ？」

…気のせいだったか？

「じゃあシグナム、僕は何時その人に会えばいいのかな？色々と打ち合わせしとかないといけないし…」

前もって打ち合わせはしないとな～

「ああ、日取りの方は…」

こうして僕はシグナムとの打ち合わせをしたのだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「…ヴィータ、分かっとるな？」

「…勿論だはやて…」

「「こっそり後を尾行する（んや）！！」」

知らない事は不幸の始まり！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シグナムに言い寄っている男を何とかしてほしいと頼まれ、僕はシグナムの恋人のフリをして会う事になりました…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

そして決戦?当日、僕はシグナムと共に（僕は年齢変化済）男と待ち合わせた場所の喫茶店に向かった…

「…済まないな神代、面倒をかけてしまって…」

「まぁ、気にしなくていいよシグナム…お、ここか」

談笑している内に喫茶店に着いたようだ…

「神代、先ずは私1人で行く…」

「ん…わかった。じゃあ待っているから出番が来たら呼んでくれな？」

「ああ…」

―ガチャ

「いらっしゃいませー」

…シグナム、えらい気合い入ってるな…まぁストーカー1歩手前の相手だったからな…

一般人だから下手な真似は……ま、バレなきゃ問題ないか？

「（神代、済まないが来てくれ）」

おっと、早速出番か…

―ガチャ

「いらっしゃいませー。お1人様ですか？」

「あ、すみません　知り合いと待ち合わせしているので…あ、あそこです」

指差す席には…シグナムと例のストーカー男がいた…さて、こっからが本場だな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

？？？Ｓｉｄｅ

キョウスケ君らかは離れる事、数メートル…今私らはキョウスケ君らにバレへんように尾行中や！

「…はやて、２人とも中に入ってってったぞ？」

ふむ…ここまでは予想どうりやな…

「私らも中に潜入するで！
その前にヴィータ！！例の年齢詐称薬を！これで変装は完璧や！！」

「あの…はやてちゃん…？年齢詐称薬で成長しても…キョウスケ君はその姿は既に知っているのでは…」

「その点は抜かりなしや！！その為に…じゃーん！！どや？これを装備すればもう完璧にバレないで～！！」

私が取り出した装備…それは…

「は、はやてちゃん!?そ、それは!?」

「そうやシャマル!!かつてシャマルが愛用していた…変装用サングラスや!!」

「おお!!何よくわかんねーケド…すげーな、はやて!!」

「そやろ?もっと褒めてええよ♪ちゃんと人数分あるから安心せぇな」

「…あの…私が言うのも何ですが…何でサングラスなんですか?はやてちゃんの年齢なら、もっとオシャレなメガネの方が似合うのに…」

「そんなん決まっとるやないか?変装にはサングラスをってのが八神家の伝統やからや!」

「そ、そんな伝統いつ出来たんですか!?」

「いや~、前に石田先生にシャマルがサングラス掛けて怪しさ大爆発の変装しとったて聞いてからや♪」

「私のせい!?あの黒歴史が!?」

「いや~、シャマルは分かっとるな~♪主として誇りに思うで♪」

「そ、そんな事に誇らないで下さい…それにあれは緊急だったので…うぅ、今考えると恥ずかしいです…／／」

恥ずかしがりやさんやな～シャマルは～

「所でさくらお姉様、ダーリンとシグナムは何してるんですかぁ？」

「えっとね…シグナムさんに迷惑かけている人に注意しに行ったんだよ？」

「ええー！！人に迷惑かけたらダメですのにー！！何でそんな事するんでしょう？」

な、なんや！？この純粋な生き物は！？

「うっ…リイン！ピュアや！ピュアピュア過ぎるで！！薄汚れた私には眩し過ぎるで！！」

「だ、大丈夫だ！はやてだって十分ピュアだかんな！！」

「うぅ…ありがとなヴィータ…」

「…ところではやてちゃん？お店の中には入らないの？」

……ハッ！？し、しまった！？スッポリ抜け落ちてもうてた！！

「さくらちゃん！それ早よう言ってな！！こうしちゃおられへん！！早速入るで！！」

そうと決まれば先ずは詐称薬を…ゴクッ！

―ボォン！！

「うわぁ！！はやてちゃん、大人です～」

「どや？リイン？このナイスバディーは？」

「はい！はやてちゃんおっぱい大きいです～」

「ええ子やな～リインは♪あ、リインは私の胸の谷間に隠れとってな？」

「はいです！！」

「ほぇぇ！？は、はやてちゃん…大胆なんだね…」

「いや～、ホントはキョウスケ君のを挟みたいんやけどな～／／」

あ～、早くキョウスケ君と大人な関係に…／／

やっぱ外掘りから埋めて行くんが効果的やな…

「はやてちゃん？ダーリンは挟むと喜ぶんですか？だったらリインも挟みたいです♪」

「そかそか♪じゃあリインも一緒にキョウスケ君にしてあげよな～」

リインにも年齢詐称薬飲ませれば…フッフッフ…今回の事でシグナムも本格的に加入して…八神家総攻撃でキョウスケ君を攻めれば…

確実に墜ちるで！！

「フッフッフ…アーハッハッハ！！」

これで…そうこれで私は…新世界の神になるんやー！！

「ほぇぇぇ！？

は、はやてちゃん！！？それＤ○ＡＴ○ＮＯ○Ｅみたいな立てたらダメなフラグだよ！？それより早くキョウ君の後を！！」

…っと、そやった！！

「コ、コホン！じゃあ…急いでこっそり突入や！！」

「「「「おーーー！！！！！」」」」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「なぁリイン？私の胸はどうだ？」

「はい！ヴィータちゃんもとっても大きいです！」

「そ、そか！よし！大丈夫！私も大きいんだ！！」

…何かを確認し確かな自信を持つヴィータだった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

キョウスケSide

さて、先ず思う事は…ナニコイツ？

「彼がシグナムさんの彼氏…ですか？」

「そうだ…これで納得してくれたか？私には貴方の思いには答えられない」

シグナムはこれでもかとバッサリ切り捨てたのだが…

「いや～、シグナムさんにお笑いのセンスがあるとは…ただ、僕は関西系のお笑いはちょっと…」

ってオイ！？僕がシグナムの彼氏だとお笑いなのか！？

…ん？今何か…はやての「関西のお笑いバカにしくさってー！！」って電波が聞こえたようか…？

「（なぁシグナム、この男…本当に剣道道場の師範の息子なのか？…言っちゃ何だが…チャラくね？）」

そう！とてもじゃないが…剣道に取り組んでいる人には見えない！！というか、礼節のカケラも見当たらない！？

「（…残念ながら確かに師範の息子だ…ただ聞いた話しだと、幼い頃は剣道に打ち込んでいたのだが…いつしか剣道を辞め、道場の後

を継ぐのも拒んだらしい…今は何かの会社を経営しているらしいが…師範も自分の代で道場がなくなるのかと嘆いていたな…ただ剣道の実力はかなり高いらしい…もっとも一般的なレベルでだが…）」

詳しい解説ありがとうシグナム！

…ま、とりあえず…

「…あの、これ以上シグナムに付き纏うのは止めていただけますか？彼女は迷惑しているので」

平和的に話してみると…

「…フン！ガキが大人の話しに口出しするなよ！！ああぁ？」

…何か脅されているんですが？

…確かに年齢変化しても何故か１８～２０歳位しかならなかった…で、相手の男も２０代半ば…

見た目年齢的には…僕＜シグナム＜男って年齢順になるのだが…

…よし、とにかく殺ろう！！

「さぁシグナムさん！こんなガキは放って置いて、僕と…」

男の手がシグナムに触れようとする寸前で！！

―バシッ！！

僕はその男の手を払いのけた!!

「…おい、小僧…いい度胸しているな…」

居るんだよね～　こーゆーバカな人種…

「…シグナムさんからも聞いていると思うが…僕は幼少から剣道の英才教育を受けていてね…君みたいな雑魚なんて簡単に潰せるんだ…」

「…ふーん…で?」

脅しているんだろうが…当然、はっきり言って全く怖くない!!

「ほぅ…痛い目を見ないと分からないようだな…いいだろう!!君がシグナムさんに相応しくない事を教え「ん?君はキョウスケか?」って誰だ!!」

勘違いダメンズの戯言を遮って声を掛けてきた人物…それは…

「恭也さん!?それに忍さん!?」

バカップルが現れた!?

「へぇ…キョウスケ君のその姿が、前になのはちゃんが言っていた…」

…そーいや忍さんにはこの姿は初見なんだが…よく分かったな?

「あらキョウスケ君、そんなの女の勘よ♪」

勘かよ！？

「…それより何かお取り込み中かしら？」

「え、ええ…まぁ、忍さん達は何で此処に？」

「あら、喫茶店に来ているんだからお茶に決まってるじゃない？ねぇ？恭也？」

「ああ…」

つまりデート中ですか～

「おい！テメーら！人を無視すんじゃねー！！」

あ、まだ居たのか？

「キョウスケ、彼は君の知り合いか？」

「いや、シグナムのストーカー。ちょうど僕に痛い目を見せてくれるって言ってた所」

勿論返り討ち確定だけどね～

「そ、それは…何と無謀な…」

おい…どっちの味方だよ！？

「ちょっと待って恭也！その前にストーカー！？」

「ええ、平和的にこれ以上シグナムに付き纏わないようにお話していたんですが…」

こーゆー輩はホント黒光りするG以下だよな

「待っててシグナムさん！今、月村家の総力でそこの最低男を社会的に抹殺するから！！」

…社会的にって…まぁ別にいいか～

「こ、小娘！！てめぇ…黙って聞いてりゃ好き勝手いいやがって！！第一お前みたいな小娘に何が出来る！！」

うわっ！？コイツ終わったな…というか、一応会社経営してるんだから…有名な月村の名前位知らないのか？

―ブチッ！

ん？何かがキレる音が…？

「貴様…忍に向かってのその罵倒…キョウスケ！構わん！コイツを物理的に潰せ！！」

お、落ち着いて下さい！？恭也さん！！

「ほぅ…こんなガキにやられる程、剣の腕は鈍ってないんでね…いいだろう！お前に剣道をの厳しさを教えてやるよ…実践でな」

ああ…舌なめずりなんかして…三流以下だな…こんなヤツに付き纏われて…シグナムも不幸というか…

「なら場所はウチの道場を使うといい！」

…にしても恭也さん？何か勝手に話し進めてません？

「ん？お前の家も剣道やっていたのか？まぁどうせ大したことない流派だろうがな」

…コイツ本当に終わったな…

しかも高町家の道場でって事は…御神流の使い手の士朗さんも居るんだよね…

「か、神代…何か話しが妙な方向に進んでないか？」

「まぁ、結果的にはフルボッコにするつもりだったし…いいんじゃない？」

「…全然穏便ではないのだが…仕方ないか…師範には後日謝罪するか…」

そーいや全然穏便じゃないな…ごめんシグナム…でも後悔はしてないが！！

まぁ、多少予定と違ったが…こうして何故か高町家の道場で、このストーカー男と決闘する事になってしまった…

「キョウスケ君！！とりあえず後始末は任せて思う存分に殺ってい

いわよ♪最終的には戸籍すら消しちゃうから問題ナシよ♪」

…こえーなオイ…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

一部始終を見守っていたはやて達はというと…

「いや～　これは思わぬ展開やな～」

「ふん！恭介があんな奴に負けっかよ！！寧ろ勝負にすらなんねーし！！」

「まぁキョウスケ君だから手加減は…しないわね～」

「キョウ君って身内には甘々だからね～。その身内に何かあった時のキレっぷりは…」

「あ～そやな～　前にそれで恭也さんが犠牲になったんやったな…」

「あ、はやてちゃん！！ダーリンがお店を出ますです！！」

「おっと！こうしちゃおられへん！！場所は分かったんやから先回りや！！」

「「「「「おーーー！！！」」」」」

―チーン

「お会計４２８０円になます」

「「「「「い、意外に高っ！！！？」」」」」

知らない事は不幸の始まり！？（後書き）

とうとう…とうとうこの日がキタ――――（ﾟ∀ﾟ）――――！！

「どうしたんですか？作者さん？」

お、これは最近新加入しかリインさん！

実は…

「…ゴクリ…じ、実は…？」

第２次スーパーロボット大戦ＯＧの発売が決定したんですよー！！

いや～　どれだけこの日を待ち望んだか！！

「そうですか～、よかったですね♪作者さんが嬉しいとリインも嬉しいです！！」

ありがとうリイン！！いや～　ＰＳ２の準備をしないと…

「…あれあれ？この【すうぱあろぼっとたいせん】って…ＰｌａｙＳｔａｔｉｏｎ３専用って書いてあるですよ？」

……なん……だと……！？

「もちろん作者さんは持って…ってど、どうしたんですか!?作者さん!!?」

……も、持ってない……ｏｒｚ

「はうぅ!?そ、そうなんですか!?えっと…そ、そうです!!リインにゲームを差し込めば!?」

いやいや!?ファミ通連載していたＴＥＲＡ－Ｏじゃないんだから!?

…はぁ発売までまだ日にちあるし…どうするか考えるか…

「リインもお手伝いしますから一緒にがんばりましょう!!おーです!!」

はは…そうだねリイン

我がネタ技に自重なし！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シグナムに付き纏うストーカーと対決することに！？

…あれ？　なんでこうなった？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――高町家・道場――

キョウスケＳｉｄｅ

さて、現状を皆さんに伝えると…

「さぁハンデをやろう！どこからでもかかって来たまえ！！」

…えーと、木刀を持ったピエロが僕を挑発しています…

ちなみに審判は恭也さん、ギャラリーにシグナムとカメラを持った忍さ…えっ？

「…あの～、忍さん？何故にカメラを？」

「えっ！？勿論すずかのコレクションに加えてあげようなか～って♪」

何かサラっと怪しげな事言ってなかったか！？

つかコレクションって事は…複数はあるって事だよな…はぁ…僕に肖像権…ないよな～

「お喋りとは余裕だね…それとも馬鹿にされてるのかな？」

…そりゃ両方だな。コイツ相手は余裕だし馬鹿にもしてるし～

さて…勝てる事は確定しているが…アレでも一応は…嫌なことに一応、一般人だから魔法は控えた方がいいよな～…剣撃だけで再起不能にしないと♪

…となると…

「さあ！どこからでもかかって来たまえ！！」

あっそ…じゃあ遠慮なく…

「…それでは…ハッ！！」

―ダンッ！！

僕は一気に加速…といっても瞬動ほどではないが…間合いを詰め…

―バキッ！！

「なっ！？」

相手が構えていた木刀を弾いた！！

…よし！ここで！！

「…飛天御剣流…」

―グンッ！！

僕は弾いた勢いのまま身体を一回転させて…

「…龍巻閃！！」

―ドカッ！！

遠心力によって威力を倍増させた一撃を懐に叩き込んだ！！

「ぐは…っ！！！」

…一応、手加減してんだから…まだ倒れるなよ？

「飛天御剣流…奥義…」

「ま、まてっ…まいっ…」

相手が何かを言っているようだが…ここは敢えてスルー！！

…僕と出会った事を…地獄で後悔しやがれ！！

「…九頭龍閃っ！！」

―ドカアアッ！！！

「ぐはぁ！！！」

神速の斬撃を９つ同時に叩き込む！！……そして……

―ダーンッ！！！バタッ！！

相手は壁に吹っ飛び、崩れ落ちるように倒れ込んだ…

…ん？戦闘シーンが少ない？

だって…ねぇ…多少腕が立つとはいえ…モブキャラ相手だからね～
サクッと倒さないと～

「…ハッ！？し、勝者！神代！！」

ア然としていた恭也さんが再起動し、勝ち名乗りを挙げてくれた…

「お、おい！確かに潰せとは言ったが…アレは生きているのか？」

…ん？そりゃあ…

「安心して下さい恭也さん…みね打ちですから」

それに死なないようにネタ技を使ったんだし…

「神代…木刀では…みね打ちと言うのは意味がないのでは？」

……おお！！気付かなかったな～

「ん～…ま、粉砕骨折程度だから大丈夫でしょ？」

「いやいや！粉砕骨折はダメだろ！？…ハァ…師範には菓子折りでも持って行った方がいいな」

「あはは…ま、まぁでも…これでもうシグナムに付き纏うって事はしなくなると思うよ？」

「ん？なぜだ？」

「そりゃこれだけ身体も心もズタボロにしてやったんだが…今後シグナムに付き纏わったら…またこうなるって恐怖心でトラウマは確実だな～」

「うっ…それはそうだな…明らかにオーバーキルだろうが…」

そんな事ないぞ？止めの天翔龍閃を使わなかったんだし～

「あら、開始数秒で完全決着…あ～あ、もう少し遊んであげてもよかったんじゃない？」

「あ～…忍さん？何か不機嫌ですか？」

「そりゃ～ね…何たってコレクション用の画像数が少なすぎて…」

うん…早めに決着つけてよかったな…

「まったく…これじゃすずかの夜のオカ…じゃなくて！コレクションがあまり増えないわ…」

…ヲイ…今あきらかにスルーしちゃダメな爆弾落としかけなかったか！？

―♪～～♪～♪

と、忍さんの携帯が鳴った！

「もしもし…ええ、例の件ね…そう　判ったわ　じゃあ♪」

例の件…って…何か聞いたらいけないような気「忍、例の件って何だ？」って恭也さん！？何サラっと聞いてるんです！？

怖い物知らずもイイトコだな…

「え？そこに転がってるゴミの会社をウチが吸収して、速攻でソレを解任してクビにしたのよ？」

…乗っ取り！？この短時間で！！？

…恐るべき月村家の影響力！！

「まぁ武士の情けで戸籍は残しておいたけど…」

…さ、さすがに自重したのか？…乗っ取りって時点でやり過ぎじゃね？って思うのは僕だけ？

「しかし、流石にやり過ぎだったのでは…」

あ、よかった！シグナムもそう思っていたか…

「あら、ちゃんと許可は貰っているから大丈夫よ？」

…へ？許可…？誰から？？

「あ、そうそう！シグナムさん」

「は、はい！？何でしょう？」

「後であなたの通っていた道場の師範の人が正式に謝罪するって言っていたわよ？」

「なっ！？師範が！？」

「ええ、何でも前々から息子の素行の悪さが目に余るって事で何とかしようとした所に私がシグナムさんの事を話して…」

…っていつの間に！？つか許可ってもしかして…

「それで『会社乗っ取っていいですか？』って聞いたら『おお！！遠慮はいらん！存分にやって下さい！』って♪」

…な、なんというか…

「シグナム…お世話になった師範って…」

「…真面目で礼節を重んじる人…だった…はず……？」

……その人、何と言うか…まぁいいや…

「…とりあえず、菓子折りは別にいいかも…逆に息子のお詫びで何か貰いそうだし…」

「……ああ」

さて、後は…転がってるコレはどうすっか？

「ああ、後始末は私達がしておくから2人は帰っていいわよ？」

後始末って…いいや…考えたら負けな気がするし…

「じゃあお言葉に甘えて…行こうかシグナム？」

「あ、ああ…」

シグナムも何か微妙な表情してるけど…多分命だけは保証…出来るよな？

「とにかく…僕らはこれで失礼します…」

「またねキョウスケ君♪今度は家に遊びに来てね？すずかも喜ぶし～…何ならお泊りもＯＫよ？」

「あはは…か、考えておきま「行くぞ神代！！グズグズするな！！」

って痛てて！！ちょ！？引っ張らなくても分かってるから！！」

急にシグナムが僕の腕を強引に掴んで（かなりの握力で！！）引っ張ってる！？

「…フン！！」

…しかも何故か機嫌悪い？

まぁ、こうして僕とシグナムは高町家道場を後にした…

後日、師範がシグナムに菓子折りを持って来て…

「息子を1から鍛え直し、あの腐り曲がった根性を叩き直しておる所じゃ！！！！」

と豪快に笑いながら言っていた…

ま…息子の再教育と後継ぎが出来そうで結果オーライ…か？

「所で…息子を鍛えようと竹刀を持たせると…えらく錯乱し暴れるので鍛えるのも一苦労なんじゃが…何か知っておるかの～？」

…あ…やはりトラウマになったか？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

道場からシグナムに引っ張られるように出てきた僕たち…

「さて、シグナム…これからどうしよっか？」

当初の目的は達成されたからな～

「そうだな…」

シグナムも考え込んでるが…あ、そうだ！！

「せっかくだから…このまま遊びに行こうか？考えてみたらシグナムと一緒に遊んだ事とかないし…」

いや、模擬戦は…ノーカンだよな～？

「わ、私とか！？」

「そうだけど…嫌だったら別にい「いや！！全く問題ないぞ！！！」って…そ、そうか…というかシグナム…顔が近いって…」

その距離約数センチ！？

「うっ…す、スマン…／／」

まぁ別にいいけど…何でシグナム顔が赤いんだろう…？

「で、どこか行きたい所とかあるかい？」

シグナムのリクエストがあるなら叶えてあげないとな～

「そうだな…だったら1つお願いが…」

「ん？何だい？」

「あ～…その…何だ…ぷ…／／」

…ぷ？

「…ぷりくら…というのを…一緒に撮ってはくれまいか／／？」

……よもやシグナムからプリクラという単語が出て来るとは予想外だ…

「…何やらバカにされているのは気のせいか？」

「そ、そんな事ないよ！！？だ、だから街中でレヴァンティン抜こうとしないで！！？」

…シグナムも読心術出来たんだっけ？

…うかつな事は考えないようにしないと…

「ま、まぁとにかくプリクラならゲームセンターに行こうか？」

「あ、ああ…そうだな…／／」

…？？だから何で顔を赤くしてるのさ？

…風邪？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？？？Ｓｉｄｅ

いや～…私もビックリや！！

まさかあのシグナムからまさかのプリクラ撮ろう発言！！

「…あ、そういえば…」

「どないしたん？シャマル？」

「確か…前に読んでいた雑誌の占いに【異性と一緒に撮ったプリクラを持っていると両想いになる】って書いてあって…」

なっ！？それは初耳やで！？

「…まさかシグナムのヤツ…それを狙って…あのやろう…もう当初の目的は済ましてんだろうが！！」

「ヴ、ヴィータちゃん！！？」

…ん？そういえば…

「なぁ皆…キョウスケ君と2ショット写真って…持っとる？」

「「「「……あ」」」」

という事は…

「キ、キョウスケ君との初の2ショット写真Ｇｅｔ出来るんは…シグナムぅぅぅ！！？」

クッ…盲点やった！！　キョウスケ君とのあらゆる初めては私が奪う予定やったのに！！

「さくらお姉様もダーリンとの写真持ってないんですか？」

「ほぇ！？うーん…考えてみたら持ってないかな？
いつも一緒に居るから～」

…それはそれで羨ましいで！！さくらちゃん！！

くっ…今日ほどデバイスになりたいと思ったことはないで！！！

「あ、はやてちゃん！！キョウスケ君達が移動するわよ！！」

…本来なら乱入して阻止したい所やけど…後々の事を考えたら…うぅ…

「考えててもしゃあない！！皆！！尾行続行や！！！」

「「「「おーーー！！！！」」」」

…シグナム、帰ったらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩや…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ジューンブライド（仮）の誘い

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

シグナムにストーカー紛いの真似をしていた奴をボッコボコにし、余った時間でシグナムとプリクラを撮ろうって話しになりました…

まぁ…後にこれがあんな展開に発展するとは…ｏｒｚ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

早速シグナムとプリクラを撮る為にゲームセンターに来た僕たち

「ゲームセンターという所は…色々とあるのだな…」

と、初めて見る光景に驚いているシグナム！

「まぁ、ここは結構最新機種とかすぐ入るからね～

あ、ちなみにこのゲームセンター、はやてとヴィータと一緒に来た

事があるから～。
2人ともクレーンゲームによくハマってるよ」

なんとな～く自分に良く似た魔砲少女系のキャラクターを見つけては…それを狙って数千円掛けてたからな…資金提供は僕なんだけど…

「そ、そうなのか!?主はやてはともかく…ヴィータがこーゆー場所に来るとは…」

まぁ…ヴィータってイメージ的にアウトドアってカンジするからね～

「ま、とにかく早速撮ろうか?」

「あ、ああ…よろしく頼む…／／」

さてと…プリクラは何処にあるんだ…あれ?

「どうした神代?」

「ん?ああ、プリクラはどうやら別館に有るみたいだ…奥の方に通路があるから行ってみよう!」

しかし…何でプリクラだけ別館なんだろ?

―――――

―――

――

と、いう訳でプリクラ機が置いてある別館にやってきたのだが…ドアには看板が…

「え～…何々【当プリクラコーナーは女性専用となっております。】ってそうなん！？」

まさかここに来て女性専用コーナーとは…どうりで中は女性客ばっかりなんだ…しかし、これだとシグナムとプリクラは撮れないな…

「仕方ない、違う店に行こうか？」

少し遠いが…まぁ仕方ないよな～

「まて神代、まだ続きが書いてあるぞ？」

えっ？あ、ホントだ…えっと…

「【なお、男性の方はカップル限定で入店可です】……」

な、なんじゃそりゃーー！！？

「なるほど…なら我々は問題ないな／／かかか…カップルのように振る舞えばいいのだし…／／」

ちょ！？シグナムさん！？

「べ、別にここにこだわらなくても別のゲーセンに行けば普通に撮

れ「…私とカップルの振りは不服なのか？」い、いえ！？わ、分かったから殺気を抑えて！！」

…はやてやヴィータと違い、涙目コンボじゃなくストレートに殺気飛ばすって…まぁらしいと言えばらしいが…しかし…中を見た感じ、他のカップルも居ないようなんだが…

…この男率０の女の子だらけの空間に男の僕が１人が入るの？

「で、では行くぞ！！」

そう言うとシグナムは僕の腕を組んで…って／／！！？

う、腕にとてつもなく柔らかい感触がぁぁぁ！！？

し、しかも腕が谷間に挟まってぇぇぇ！？

「ちょ！？し、シグナムさん！？む、む…」

胸が当たってるを通り越してとんでもない状態になってるんですが！？

「…こ、こうするのと…そのだな…神代と…恋人同士のように見えるのだろう…／／」

な、何この何時もと違うシグナムは！？

「ま、まぁ…そうだけどさ…／／」

「なら問題ないな！」

いやいやいや！？かなり問題あるぞ！！？

―ジィィィ…

…ん？何かゲイボルグで串刺すような…妙な視線を感じるが…

ああ！やっぱシグナムみたいな美人な人は目立つのか…？

「さあ！いざ決戦の場へ！！」

…今更だけど…シグナム？プリクラってちゃんと何か分かってるよな？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

？？？（はやて）Ｓｉｄｅ

…キョウスケ君達が、私らがよくデート（はやて個人の主張）に使うゲームセンターに入っていった…あれ？そーいえばあのお店ってプリクラの機械置いてへんかったような…？

「あ、はやてちゃん！！キョウ君とシグナムさんが奥の方へ行っちゃうよ！？」

「奥の方？…なぁヴィータ？あのゲーセンって奥に何があったん？」

私とヴィータは、主に出入口付近にあるクレーンゲームに熱中しとるからなぁ…

「…そーいや奥に行った事ねーな…」

…まぁヴィータも私と行動範囲は同じやからな～

後はキョウスケ君がドリフトが売りな頭文字がDなレーシングゲームをやっとるのを見とる位やし…

そーいえば…そのレーシングゲーム中のキョウスケ君を見とる時のヴィータの顔色が微妙で「…イナーシャル…リフティング…」って口元をを引き攣らせて呟いとったけど…何でやろ？？

「あ、はやてちゃん！どうやら奥にある別館にプリクラ専用ブースがあるみたいですよ」

は～…　別館丸々プリクラ専用に使っとるんか～　えらい力の入れようやな～

「よっしゃ！私らも行くで！！」

「「「「おーー！！！！」」」」

と言う訳でキョウスケ君らの後をついていき別館入口についたんやけど…

「……なぁヴィータ？私の目ぇおかしくなったんかなぁ…シグナムの胸にキョウスケ君の腕がこれでもかという位に挟まっとるように見えるんは…？」

「……大丈夫だはやて…私も同じように見えるから…」

「そっか…見間違えでもなく幻想でもなく、やっぱそうなんや…」

…シグナム？そーゆーんは先ずは主であり正妻である私の許可を取ってからやろ…？

「…よし、その幻想、私がぶち壊したる！！」

私が某不幸少年みたいな台詞を言っとると…

「あらあら…シグナムも大胆ね～。私もシグナム程じゃないけど形と張りはいいから…キョウスケ君にしてみようかしら～」

「…うぅ…いいなぁシャマルさん…私は…あんまりだし…はぅぅ！！」

「さ、さくらお姉様！元気出して下さい！！」

「くそっ！あの牛チチ女は！！わ、私だって今の姿ならあの位は出来んだぞ！！／／」

…シャマル…確かにええ乳しとっけど…今の私かて…十分ええおっぱいしとるんや！！

…さくらちゃんは…後で慰めてあげな…

「ん？なぁはやて、恭介達に誰か話しかけてんぞ？」

なんやて！？

ホンマや…何や大人な女性やけど…ま、まさか逆ナン！？

…まぁそれならシグナムが瞬殺するやろ～なぁ～

「あっ！？はやてちゃん！！ダーリン達がお店に入らないであの知らない女の人の後を付いていってるです！！」

ちょ！？プリクラはどうしたんや！？

…こうなったらまたまた尾行続行や！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

遡る事数分前…

キョウスケＳｉｄｅ

僕とシグナムがお店に入ろうとすると…

「あの～…ちょっといいですか？」

「はい？」

声を掛けて来たのは…２０代前半位の女性だが…誰？

「何でしょうか？」

「あのですね…私こういう者なんですが…」

女性が名刺を出して来たので受け取って見てみると…

「…【ブライダル専門店　フェアフォーチュン】？」

…ブライダルって事は結婚式関係のお店の人…？

そんな人が僕らに一体…

「えっと…いきなりで不躾なのは十分に分かってるんですが…実はお願いがあるんです…」

…ホントいきなりだな…

「実はウチのお店に飾る写真を今から撮る予定だったんだけど…新郎新婦役のモデルが急に来れなくなって…しかも写真を撮る機材やカメラマンの人も今日しか都合がつかなくて…どうしようか途方に暮れて居た時に貴方達を見つけて…」

…この話しの展開…何か嫌な予感しかしないんだが…

「お願いします！！写真のモデルになってくれないかな？　あ、勿論バイト代は出すわよ？お店もすぐ近くだし…貴方達みたいな美男美女のカップル、滅多に見つからないし…というか、頼んだモデル以上のクオリティなのよ！！」

…やっぱり…そーゆー流れか…

「…神代、新郎新婦と言うのは…結婚した男女の事を言うんだったのだな？」

「えっ！？ま、まぁそうだけど？」

何を当たり前な事を確認してるんだ？

「…あの、私と神代がモデルという事は…神代が新郎で…わ、私が新婦に…？／／」

「え？ええ、そうよ

…ウェディングドレス着れるわよ？」

着れるわよ？って…ベルカの騎士であるシグナムがウェディングドレスで釣られる訳…

「この話、お受けしましょう！！！」

…って釣れた！？しかも結構あっさり！？

「あ…ありがとう！！助かるわ～！！」

ちょ！？僕の意見は！！？

「なに、同じ写真なら専門家に撮ってもらった方が得ではないか？」

なにそのＭＯＴＴＡＩＮＡＩ精神に似た考え！？

「（そ、それに…神代と…一時とはいえ結婚気分を味わえるのも…／／）」

…というか…モデルって事は…

「…ちなみに撮った写真はどうするんですか？」

「えっ？勿論店頭に飾るわよ？
大丈夫、貴方達ならベストカップル賞だって狙えるわよ？」

別に狙いたくもないんだが…じゃなく！！飾るぅ！！！？

…マ、マズイ…もしそんな写真がはやてに発見されたら…いや、この場合はなのはの方がヤバさ１００倍だ…アイツなら「乙女は黙って…スターライトブレイカー」って濁った目をしながらぶっ放しそうだし…

よし、ここは丁重にお断りし「さぁ行きましょう！！もうスタッフも準備万端だしね」って！？

「ま、待って下「はい、では参りましょう！！」ってシグナム！？」

「ん？何だ神代？早くいくぞ！！」

ってこれは…既に外堀は埋められた!?

《（マスター、諦めが肝心ですよ?.）》

…インフィ、久々の登場だと思ったら速攻で死刑宣告!?

《（…作者が本気で忘れていたんですよ…まったく私が居ないし間にまた新しくリインフォースの後継機が出来たようですが…ますます私の出番が…ブツブツ…）》

い、インフィニティ…何気に苦労してんだな…

「神代!では行くぞ!!」

「じゃあ着いて来て下さい~」

僕はシグナムに引っ張られるように強制連行されてしまった…

ヤバイ…今はこっちの危機を何とかしないと!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

花嫁はシグナム！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

僕とシグナムはプリクラを撮りにゲームセンターに向かったんだが…何故かブライダル店に飾る写真を撮る羽目に…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――ブライダル店フェアフォーチュン・店内――

キョウスケＳｉｄｅ

僕たちがお店に来て…

「店長～！！とびっきりのモデルをスカウトしてきました～」

と、僕らを連れて来た女性店員が上機嫌で店に入って行った

「お帰りなさい！いい人材…は……」

そして店長らしい女性は…こちらを見てフリーズした！？

…何で？

「…で…」

…で？

「でかしたぁぁぁーーー！！！！」

いきなり絶叫！？

「愛美ちゃん！貴女スカウトの才能あるわ！！」

「ありがとうございますテンチョー！！ボーナスお願いしますね～」

僕らを連れて来た女の人は愛美って名前なのか～

…とりあえずツッコムか…

「あの～…」

「あら御免なさいね～

…フムフム…これは2人ともかなりのハイスペックね～…田中さん！」

「あ、はーい」

店の奥でショーケースを磨いていた別の店員さん（田中さん）が呼ばれてこちらに来た

「何ですか？テンチョー？」

「悪いんだけど彼女の着替え、手伝ってあげてくれる？ドレスとかのチョイスは任せるわ」

「分っかりました、テンチョー！！」

えらくノリが軽いと言うか…

「おっ、これはかなりデキる女性って感じですね～。これはやり甲斐があるってもんですな～…じゅるり…」

…若干アブナイ発言が混じっていたが…と、とにかく田中さん？から見たシグナムの感想はそんな感じだった

…まぁ確かにシグナムは仕事バリバリ出来るキャリアウーマンって言われても違和感ないよな～

…意外とスーツ姿も似合いそうだし

「さ、じゃあ奥でフィッテングしようか？」

「よ、よろしくお願いします…」

…若干シグナムが口を引き攣らせている…まぁ気持ちは分かるが…

シグナムはドレスを着る為に別室に移動し、

「じゃあ貴方も着替えましょうか？」

「あ…はい」

という訳で、僕も写真を撮る為にタキシードを着る事となった…

――――数分後――――

何はともあれ…僕はタキシードに着替えると…

「おぉ…こ、これは…彼氏、なかなかのクオリティね……／／」

そう言いながら、店長さんは何故か顔を赤くしてこちらをジッと見つめてる…？

「そ、そうですか？」

まぁタキシードなんて初めてきたからな～

つかこの人、僕とシグナムを恋人同士と勘違いしているのかな？

…まぁ一応そのように振る舞って女性専用（男はカップルのみ入店可）プリクラ館に入ろうとしてたから仕方ないか…

「それで、シグナムは？」

「ん～、女の子は準備に相当な時間がかかるのよ～。彼女って素材が良いから田中さんも気合い入りまくりで…」

…まぁ、はやて達も支度にはえらい時間をかけてるからな…

「そーゆー訳で、ちょっとお茶しましょうか？」

…そういえば喉が渇いた事だし…

「そうですね、いただきます」

厚意は素直に受けとかないと逆に失礼だしな～

「ホント！？じ、じゃあ今すぐお茶を持って来るわね！！」

店長さんはそう言うと、慌てて部屋を出て行…

―ガチャ！！

「お待たせ～！！」

戻るの早っ！？部屋を出て数秒で持ってきた！？

「ハァ…ハァ…（こ、こんなイケメンとお茶出来る機会なんて滅多にないんだし！！この際彼女持ちだろうが関係ないわ！！）」

…何だろう…何か物凄く寒気がしたけど…？

とりあえず、シグナムが着替え終るまで僕は店長さん（名前は真樹

さんだそうだ）と談笑しながら一時を過ごした…

…ただ、「私の事は真樹って呼んでね？」とか「彼女とは長いの？」とか「彼女に満足してる？」と聞いてきて、終いには「……大人のテクニックに興味ないかしらぁ／／？」等とアブナイ発言をしていて困ったが…

青少年をからかうのもいい加減にしてほしいっす…

『（マ、マスター！？何故彼女がマジだと気付かないんでしょう！！？）』

…ん？何かインフィから電波が出てた？

と、

―ガチャ

「テンチョー！！準備出来ました～！！」

田中さんが部屋に入って来た

入って来た田中さんの何か物凄くやり切った感の満足げな顔をしていた

「いや～、彼女美人な上に巨乳だからサイズがなかなかなくて～！！」

…えらくストレートな物言いだな…

「それでは…シグナムさん！どうぞー！！！」

―ガチャ

扉からウェディングドレスを着たシグナムが……

「……」

「か、神代…／／」

…思わず見とれてしまった…

純白のウェディングドレスを身にまとい、ヴェールに包まれた顔を赤らめるシグナム…

「や、やはり私には似合わないか…」

「い、いやいや！！そんな事ないぞ！？ちょっと驚いただけど、似合ってると思うぞ！？」

「なっ…／／！？」

…いや、そんなに僕の言葉が予想外だったか？

シグナムがさらに真っ赤になりながら驚いているけど…

「し、社交辞令ならいらんぞ！？」

「えっ！？お世辞じゃなくホントに似合ってるって！綺麗だよシグナム」

「きき…／／！？」

…？何やらシグナムがエライ慌てっぷりだが…ああ！何時もは動き易い服装とは真逆なドレス姿だから落ち着かないのか？

《（……キョウスケ…世間に疎い私でも分かるのに…烈火の将…同情します）》

…ん？今度はリインフォースから電波が聞こえたような…？

「さ、じゃあさっさと写真を撮りましょうか…愛美ちゃん、カメラマンさんに来てもらって」

「はーい！！」

…何でか店長さんが少し不機嫌っぽいが…どうしたんだろう？

『《（（はぁ…いつか絶対に女性に刺される！！！））》』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

そしてカメラマン（女性）が来て写真を撮ってもらう事になったのだが…

「じゃあ2人とも並んで～」

―パシャ

「はい、じゃあこっち向いて笑って～…ん～まだ何か固いな～　固いのは夜に取っておいてね～♪」

…セクハラ発言全開だった…

「……／／／」

シグナムもさっきから真っ赤になって固まってるし…

「あ、じゃあ彼氏！彼女をお姫様抱っこしててみようか？」

…は、はぁ！？

「その方が絵になるしね～」

いや…絵になるってそんな突拍子もない事を…

「ホラホラ～、恥ずかしがらずに～」

…こ、これはやらないと終わらせません的なオーラが場を支配しているし！？

「…し、仕方ない…シグナム…シグナム？」

何かシグナムの反応がないが…ん？何やらブツブツ呟いているな？

僕はシグナムに耳を傾けてみると…

「…わ、私が…キレイ…キレイ…フフッ…／／／」

…って!?何かシグナムが壊れてる!?

「仕方ない…シグナムごめん!!」

ちょっと強引だったか、シグナムを後ろから抱き抱えて持ち上げ…

つまり伝説の【お姫様抱っこ】をすると

「なっ!!?か、神代!!?何をする／／／!?」

おっ?意外と軽い…じゃなく、壊れてたシグナムが再起動した!

「は、離せ神代!!…い、いや…離さなくて…じゃなく!!」

…やっぱ壊れたままか?えらく混乱中だし

『(だからマスターのせいでシグナム卿は混乱しているのがわからないんでしょうか?)』

「おっ、彼女は何か初々しい反応だね~はい2人ともそのままそのまま~」

―パシャ

「ん~　じゃあ最後にそのままキスしてみようか~♪」

―ピシッ!

…何か世界が凍り付き音を聞いたような…

「「なっ!?キ、キス!!?」」

僕とシグナムの声が重なりシンクロツッコミを入れた!!

「あら、恋人同士なんだから問題ないでしょ?」

…ヤバイ…ここに来て恋人同士のフリをしていたツケがこう返ってくるとは…

…仕方ない、ここは正直に僕とシグナムが恋人じゃないと言って断「「「ちょっとまったーーー!!!!」」」って!?こ、この声は!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――少し時間を遡り……――

はやてＳｉｄｅ

キョウスケ君らか入っていったお店…なになに?ブライダル専門店…

「はやてちゃん、【ぶらいだる】って何ですか？」

「ブライダルって言うのはな、結婚式のサポートをし…て……」

……えっと…キョウスケ君とシグナムが入った店→ブライダル専門店→結婚…なっ！？

「「「な、なんやて（だって）ーーーー！！？」」」

そ、そんな話し聞いてないで！！？

「な、な…シグナムと恭介が結婚だと！？」

「そんな！？キョウ君が…」

まさか…シグナムがこんな迅速に事を運んでいたとは…

「…フフッ……フフフッ……」

「は、はやてちゃん？」

「……シぃグぅナぁムぅぅぅ……主を差し置いてキョウスケ君と結婚やて…？

ヴィータ！シャマル！！さくらちゃん！！！」

「「「は、はい！！！？」」」

「シグナムを狩りに行くで！！

…ついでにキョウスケ君にも、正妻を差し置いて3号と先に結婚式

挙げようとする根性…叩き直したるで！！」

フフッ…待っとれシグナム…主としてちゃーんと調教したるで…

「はやてちゃん！私はどうしたらいいですかー？」

「あ、リインはそのまま私の胸の谷間で待機や！」

「分かりました～」

リインにはまだ早い話しやしなぁ…まぁ将来的には神代ハーレムの一員になるやろうし…まぁ先ずは…

「……今すぐ突入して…シグナムとじーっくり２４時間耐久でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩやな…」

さぁシグナム…己の罪の数を数えて待ってな…

「さぁ！！行くで！！突貫ーーー！！！」

「「「おーーーー！！！」」」

かくして…微妙な誤解から生まれた魔女裁判の幕が開かれたのだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

修羅場、再び！？（前書き）

明日は近所で祭があります

特殊な事情により…不幸だ…

修羅場、再び!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ「そないな悠長な事言ってられるかーー!!」…って…は、はやて!?

いや、ここはまだ本編じゃないからさ…

「そんなん無理を通して道理を蹴飛ばすで!!」

いやいやいや!?どこのグレンな兄貴の名言を言われても!?

と、とにかくシグナムと写真を撮っていたら思わぬ珍入者が!?

『…というか既にネタバレしているのでは?』

…う〜ん…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

僕とシグナムが写真を撮っていると…

「「「ちょっと待ったーーー!!!」」」

と、叫びながら乱入してきたのは…

「は、はやて!?それにヴィータにさくら!?」

「私もいますよ～♪」

「（はい、私もいるですよ!ダーリン♪）」

シャマルとリインまで居るのか…リインは空気を読んで念話だし…

というか…前者の3人がえらい形相でこちらを睨んでるんですが…

「あの…貴女たちは？」

流石に不信人物を見るように店長さんが尋ねると…

「「「キョウスケ君の妻（だ）です!!!」」」

…うん、だから何で皆して問題発言するのさ？

「私は愛人でもいいんだけど～」

「（リインも【あいじん】ってのでいいですよ～♪　ところで【あいじん】って何ですか？）」

…シャマルも変な発言しないでくれ!!

…リインも変に影響されちゃってるし!?

「え、えっと…皆さんキョウスケ君の…お知り合「「「だから妻です!!!」」」…キ、キョウスケ君…?」

て、店長さん!?その救いを求めるような目で見られても…

「…すみません、皆僕の家族です…」

…こう言うしかないよな~

「と言うか…何ではやて達がここに?確か留守番している筈じゃ…(しかも何で年齢詐称薬まで飲んで来てるんだ!?)」

後半は念話でツッコんでみると…

「そ、それは…なぁヴィータ」

「わ、私か!?えっと…さくらパス!」

「ほえぇぇ!?わ、私に!?えっと…シャマルさん?」

…何で他に丸投げしてるんだよ…

「えっとねキョウスケ君、皆キョウスケ君とシグナムの事が気になって後を付けてたのよ♪」

「「サラっとバラした!!?」」

…って後を付けていたぁぁ!!?い、何時から!?

「もちろん初めからよ～　それでシグナムがプリクラ撮りたいって所で知らない人がキョウスケ君達を連れていっちゃって着いた場所がブライダル専門店だったから…はやてちゃん達大慌てで～」

「「「さらに全てゲロッた!!?」」」

…はやて達…女の子なんだから、不適切な表現は控え……って初めからだって!!?

「それにしても…シグナムのウェディングドレス姿…綺麗ね～ぇフフフ♪」

「ッ～～～／／!!?」

…シャマルがからかうように言うからシグナムが真っ赤になって俯いてるし…

そういやシグナム、さっきから黙ったままだけ…ど……

「……ちぇ……」

―ゾクッ

な、何かシグナムから純白のドレスと真逆なドスっ黒いオーラが立ち上ってるんですが!?

「チェストォォォォ！！！」

いきなりシグナムがレヴァンティンを振り回した！？

「どわぁ！？お、落ち着けシグナム！！」

「シャマル！大人しく斬られろ！！」

ピンポイントでシャマルにターゲットを絞ったようだ…

「って私だけなの！？」

…ま、まぁとりあえずゲロッた本人だからな～

「「「（よ、よかった…茶化さないで…）」」」

…はやて達、おもいっきり安堵した表情してるな…

「キャーーー！！？ま、待ってシグナム！？ちょっとしたお茶目じゃない！！」

「も、問答無用だーーっ！！」

…つか暴れ過ぎだろ！？

仕方ない、止めるか…

「シ、シグナム！！気持ちは解「そこを退け神代！！」って…」

シャマルとの間に入って止めようとしたが、もはやバーサーカーモードに突入して周りが見えてない！？

…と、その時！！

―ガシャ！！

「ぬぁ！？」

「…へっ！？」

シグナムが照明のコードを足に引っ掛けてしまった！！

普段のシグナムならすぐ体制を整える…というか足を引っ掛ける事すらしないのだが…

「あぶなっ！？」

バランスを崩し、倒れそうなシグナムを支え…んぐっ！？！？

―チュッ

「「「なっ！！！！？」」」

「あら…」

…勢いよく倒れて来たシグナムを支えようとしたのだが…思いの外に加速かついて…距離感がその…若干ズレて…／／

「……ん／／」

―ピカッ！！

…僕の唇がシグナムの唇と触れ合って…あ、シグナムの…いい香りが…／／

「「「な・な・何してる（んや）（の）んだーーーーー！！！？」」」

はやて達の絶叫で正気に戻り…って！？な、何してるんだ僕は！？

「！！？…すすすすすまない神代…／／」

再起動したシグナムも顔を真っ赤にしながらも慌てて離れた…

「い、いや…こっちもごめ……ッ！！？」

シグナムに謝っていると、ある方向から一方通行（アクセラレーター）顔負けのベクトル変化が！？

「……あ、主はやて！？それにヴィータもさ、さくらまで！？」

…うん、流石のシグナムでも顔を引き攣らせるのも分かるよ…

「……ほぉ、私の許可なくキスするとは…ええ度胸やなぁ…」

「……シグナム、オメー騎士の誇りに誓って何もしねーって言ってたよな…」

「……キョウ君もキョウ君だよ…何も私の前でしなくても…」

「ちがっ！？いや！これは事故です！！」

「そ、そうだよ！！これは事故だから！」

何とかはやて達の怒りを抑えないとと思い、説得するが…

「…その割にはシグナム？キョウスケ君に舌、入れとったなぁ…」

はやてのカウンターが決まった！？

…た、たしかにちょっと舌が絡まったというか…／／

「恭介！！オメー何も何顔を真っ赤にしてんだよ！！こ、こーなったら…はやて！！」

…ヴィータさん？何をする気ですか！？

「…そやな…シグナムだけっちゅうのは不公平やし…それに最近はご無沙汰やったしな…」

…な、何！？物凄くこの後の展開が予想出来るんですが！？

「「「私達にもキスしてーーー！！！」」」

な、何だってーー！！？

「いや！？ちょ！！？な、何でそうな「問答無用や！！」ってせめて最後まで言わせろー！！？」

「いいじゃねーか　どっちにしろするんだからよ♪」

「そーゆー意味じ…んんっ!?」

―チュッ

言い切る前にヴィータに…キ、キスを!?!?

「…くちゅ…ん……／／」

「あ、こらヴィータ!!ズルイで!!次は私や!!」

「…ぷはぁ…／／あ、うん…／／」

……ハッ!?いけない!!意識が飛んでいた!!

「だ、だから落ち着…んぐっ!?」

―チュッ

こ、今度は…は、はやてと／／!!?

「…んちゅ…ん…んん……／／」

は、はやてとの深いキス…はやてが唇を割って舌を絡ま…せ……／／

「は、はやてちゃん!!交代だよ!!」

「…んんっ…はぁ…／／　仕方あらへんなぁ…／／」

……ハッ!?だからまた意識がかなり飛んでいた!?

「……キョウ君とのキスって…考えたら初めてだよね…／／」

ちょ！？さ、さくらさん！？

「……キョウ君……ん……」

―チュッ

…さくらとの初めてのキス…／／

―ピカッ！

「……ん／／」

…唇に感じる柔らかい感触…そして優しい石鹸の香りが……／／

「……んっ…私のファーストキスだよ／／♪」

…うぅ…ちょっとカワイイって思っちまったじゃないか／／！！

「さ、次は私のば「シャマルは却下や！！」ん…って何で！？はやてちゃん！！？」

「そら…何かの元凶っぽいからや！！」

「何です！その曖昧で未確定な理由は！？というか私はドコの元凶でもありませーん！！」

…何故かはやての理由に説得力を感じるのは気のせいか…？

―ツンツン

ん?誰かが突いてくるけど…って!?

「さ、さくら…／／」

突いて来たのはさくらだった…や、ヤバイ!!まだ顔が赤い／／!!

「キョウ君…／／はいこれ♪」

さくらが差し出したのは……あ!?

「か、仮契約カード…しかも2枚!?」

「うん／／シグナムさんと…わ、私のカードだよ／／」

…さくらとも仮契約が成立するんだ…しかしいきなり2枚とは…

「ちゃんと大切にしてね?…で、出来れば…その…わ…私の…とか…／／」

「あ、ああ…／／」

そんな潤んだ目でみられたらハイとしか言えないじゃんか!?…まぁ、元々皆のカードは大切にしているけど…

「…なぁ～に2人だけでイチャついてんだよ…」

「ヴ、ヴィータ!?いや!!別にイチャついてないって!?」

「ふ～～～ん…ま、別にいいけどな…おりゃ！！」

―ムニュ

っていきなりヴィータが腕に抱き着いてきた！？

「へへへ／／久々にこの姿になったんだしな！！」

ってヴィータさん！？む…胸が！！

「当ててるに決まってんだろ！！…何なら…触っか／／？」

心読まれた！？

「ちょ！？ヴィータちゃん！！キョウ君に何してるの！？」

「ん？胸当てて触って貰おうと」

何か堂々とトンデモ発言してないか！？

「どーだ！！さくらには出来ねーだろ！？」

「むぅぅぅ…」

ちょ！？何挑発してるんです！？

…そりゃ…さくらはヴィータに比べると…小さいが…

「…キョウ君、今とても失礼な事を考えてなかった？」

「イ、イエ!?ソンナコトナイヨ!!?」

さ、さくらも読心術使えたんだっけ…どうして僕の周りの人達は読心術を標準装備してんだよ!?

「ふ、ふんだ!!わ、私だって出来るよ!!えい!!」

―ムニュ

さくらもヴィータとは反対側の腕に抱き着いて…じゃなく!!

「どう…かな?気持ちいい／／？」

た…確かにさくらもそれなりに膨らみが…じゃなく!!

「ふ、２人とも落ち着い「「恭介（キョウ君）!!どっちが気持ちいい??」て!!だから人の話しを聞いてくれーーー!!」

だ、たから何でこうなるんだ!!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「て、テンチョー…何ですか?このカオスというかハーレムは…?」

「…知らないわ…というか…リアルにハーレムって存在したのね…

…」

「……あはは、しかも皆美少女ですし…下手な芸能事務所よりハイレベルですよね…」

「……こうなれはもうヤケよ！！田中さん！！ここに居る全員分のドレスの手配をして！！これだけの逸材、放っておく手はないわ！！」

「は、はい！！」

「て、テンチョー！？」

「ここに居る全員を撮影よ！！カメラマンさんもいいですね！？」

「ハイ！！まさかリアルハーレムを撮影出来る日が来るなんて…いい修羅場も撮れそうね～♪」

「フフ…こうなったら…皆まとめて面倒みちゃる！！！アーハッハッハ！！！」

「テンチョーが壊れた！？」

結婚行進曲…か？（前書き）

ようやく地デジテレビを購入しました～　というか気付けばアナログ放送のカウントダウンが消えてた！？

…なんだろう…この微妙な敗北感は…？

結婚行進曲…か？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

みなさんこんばんは…神代恭介です。

あの後テンチョーさんの鶴の一声で、はやて達とも写真を撮り事に…

…しかし、若干そのテンチョーさんがイラついていたのは…気のせいか？

「…まったく、まさかハーレム持ちとは…何か世の中、間違ってるわよね…

ああ、どこかにいい男居ないかしら…ハァ」

…うん、何やら凄く哀愁が漂ってるな…

そっとしておいてあげよう…

『（その要因の一端を担ってると気付かないマスターもすごいですが…）』

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

…あの異様な黒歴史が過ぎ去り…

「じゃあ皆さん、こちらに来て下さいね～」

「「「「はーーーい！！！」」」」

はやて達もウェディングドレスに着替える為、田中さんと部屋を出ていった…この場に残っているのは僕とシグナムのみ…い、いかん！！まださっきの事が…／／

「し、しかし結局皆と撮る事になるとはなぁ～…」

それとなくシグナムに話しかけるが…

「……／／」

…返事がない？

ん？何かブツブツ呟いているな？

僕はそっとシグナムに近づき聞いてみると…

「…神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス…／／」

シグナムは仮契約カードを見つめながら呪詛のように呟いていた

…うん、聞かなかった事にしよう！！その方が誰も傷つかないし！！

「はぁ～…シグナムも見事な壊れっぷりですね～」

ホントだよな～…って誰！？

「ねぇ、ダーリン！！リインも【かりけいやく】をしてカードが欲しいです！！」

ってリ、リイン！！？

「リイン！？誰かに見られたら…」

リインは現在普通？の小人モードだから…誰かに見つかったらマズイ！？

「あ、大丈夫です！【すてるすもーど】って言うのを使ってますから～エッヘン♪」

す、ステルスモード！？そんな機能付けた記憶が…

「マリーさんが色々とリインに付けてくれたんですよ！」

マリーさんが！？…何だろう…何か言いようのない不安が…

「…なぁリイン、ちなみに他の機能とかマリーさんに付けられたりしたか？」

「はいです！たしか…【あうとふれーむ】とか…」

ふむ、たしか燃費が悪くなるが見た目を今のはやて位に出来るモードか…原作と同じ…

「【おっぱいがばーんって大きくなるもーど】とか【ダーリンとえっちな事「ってちょっと待て！！？」が…え！？な、何ですか？？」

今明らかに原作とは違うスルーしちゃいけない機能がなかったか！？

「リイン、後半２つは…マリーさんが付けた機能なんだよね？」

「はいです♪」

…あんのデバイスヲタクは…人のデバイス（はやてのだけど）何付けとるんじゃい！？

―ガチャ

「おまたせー…ってどないしたん？キョウスケ君？？」

僕が頭を痛めていると誰かが部屋に…ってこの声は！

「ああ、はや……て…？」

そこに居たはやては…ウェディングドレスを着ている為か…その…とても綺麗で…／／

「……／／」

「ん?どないしたん?…あ!もしかして見とれとった♪?」

「い、いやっ!?そんな事は…／／」

「ほんまかぁ～??」

は、はやてさん!?そう屈んで下から僕を覗き込むようにすると…その…角度的に胸元が…／／

「…すみません、正直見とれてました…／／」

「うん、素直でよろしい♪」

…どうやら胸元に視線が（ちょっとだけ）行ったのは気付かれなかったようだ…

「ちなみにキョウスケ君、言ってくれれば何時でも見てええんよ?ホラ♪」

そう言うとはやては指で胸元を広げ…ってバレてる!?

「ちょ!?は、はやて／／」

何とかはやてを止めるが…

ハァ…やっぱりこの大人バージョンになると、どうも思春期真っ盛りの精神状態に…やっぱ魂が肉体に引っ張られているみたいだ…気をつけないと…色々と…

「遠慮せんでもええのに～」

…ホント色々とヤバイから勘弁して…理性がけっこうギリギリだよ…

「はやてちゃん、とっても綺麗です！」

「ありがとなリイン！所でリインは何しとったん？」

「はい、ダーリンに【かりけいやく】をおねだりしてたです！皆も同じカードもっているのにリインだけ持ってないのはズルイです～！」

いや、ズルイって言われても…

「ん～…リインにはまだ早いで～」

なっ！？あのはやてがリインを説得している！？

「…なんやバカにされたような気がするんやけど…」

…あ、そして相変わらずの読心術っぷりだな…

「ええぇ～～！？」

「でも大丈夫やリイン！後でシャマル監修の【誰でも解る！保険体育の神秘】第1巻でお勉強した後でキョウスケ君にしてもらおな？」

な、何だその怪しげな本は！？

「はいです！！お勉強がんばります！！」

…というか僕の意思はスルーすか!?

―ガチャ

「…なんかスースーすんな、この服」

「ヴ、ヴィータちゃん!?そんなに裾を上げると見えちゃうよ!?」

「ヴィータちゃんもさくらちゃんも…お化粧のノリが良くていいわね～　ハァ」

同じくウェディングドレス姿のヴィータ・さくら・シャマルが部屋に入ってきた!?

「ど、どうだ?恭介…変じゃねーよな…?」

「キョウ君?ど、どうかな?」

「私のドレス姿もなかなかでしょ♪」

皆、タイプの違うドレスで…／／

「う、うん…皆とっても綺麗だよ…／／」

…はやてもそうだが、ヴィータもさくらも普段していない化粧しているのか…何か新鮮というか…／／

―ガチャ

「はーい！皆準備できたわね！これから順番に撮影していくわよ～」

っと、テンチョーさんが来た…そーいや…

「所で撮影って…皆一緒に撮るんですか？」

集合写真的な感じで？

「フフフ…そんな勿体ない事しないわよ！！」

も、勿体ないって何が！？

「勿論キョウスケ君との２ショットよ！！これだけの美男美女なんだし…全員分撮ったら全部店頭に飾る予定よ！！これなら広告効果は絶大よ！！」

ちょ！？それってつまり…

「キョウスケ君には悪いけど、１人休憩ナシの強行撮影会よ！！」

…マジ！？

「あ、あの～」

「八神さん…だっけ？何かしら？」

「その撮影した写真は…頂けるんですか？」

「え？ええ、それは構わないわよ？」

「よっしゃ！！」

はやてはガッツポーズをして喜んでいる…まぁ一応記念になるからかな…？

「「「「是非私たちにも！！！！！」」」」

そしてはやてに便乗して、ヴィータ達も凄い勢いでテンチョーさんに詰め寄り、写真を希望した！！？

…つかみんな…そんなに危機迫る勢いで詰め寄ると…

「え、ええ…（ガクガク）」

…ほら見ろ！テンチョーさんが怯えてるじゃないか！

で、先ずはやてとの撮影から始まり…

「はーい、じゃあ撮りますよー！３５×５１÷２４は～？」

ってベタに１＋１じゃないの！？

「えっと…インフィ君、こーゆー時の演算機能や！！答えは何や？」

確かにこの程度の計算なら簡単に…

『……えっと…』

って解らないんかい！？ホントにデバイス！？

「ぶー！！正解は７４．３７５でしたー」

しかも答えが２でなかった！？

とまあ…若干の悶着はあったがその後、ヴィータ・さくら・シャマルの順番で２ショットの撮影をした…

ん？シグナムはどうしたって？？

…それは…

「…フフフ…神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス神代とキス…／／」

と控え室の隅でトリップ中…って！？まだ呪詛を唱えてたんかい！？

「…しょーがねーな…叩けば治っか？アイゼン！！」

《Ｊａ》

ち、ちょ！？ヴィータさん！？アイゼンを起動してどうしようと…

「いい加減…目ぇ覚ませーーーー！！！」

―ドカァァ！！！

「グハッ！？い、いきなり何をするヴィータ！！？」

アイゼンの一撃でようやく正気に戻ったか…

「ほらな！やっぱ叩けば治ったな！！」

…って古いテレビじゃあるまいし…

と、とにかくシグナムとも無事？に写真を撮り終えた…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「皆、お疲れ様～良い写真が撮れたわ～」

…所用時間3時間…つ、疲れた…

「とりあえずコレが出来た写真よ～ハイ！」

「「「「「ありがとうございます！！！！！」」」」」

愛美さんが皆に仕上がった写真を配っていた

しかし…みんな元気だね～

「キョウ君、大丈夫？」

「さくら…まぁちょっと疲れたかな」

ホントに休憩ナシとは…

「お疲れ様キョウスケ君　それにしても今日はええ収穫やったな～♪」

そう言いながらはやては写真を大事そうに何度も見て…

「…今度は本番で着せてな？キョウスケ君♪」

「あ、はやて！！そん時は私も一緒がいい！！」

「あ、ずるいよ！はやてちゃんにヴィータちゃん！！
私もキョウ君に本番で着せてもらう予定なんだよ！？」

…何か凄く盛り上がっているが…

「別に着せるのはいいが…」

「「「えっ！！？い、いいの！！？」」」

…何で驚いてるんだ？

「そりゃ…デザインがあればドレスでも魔力物質化の要領で創れ…ってどうした！？」

何故かはやて達がガックリうなだれているけど…

「「「そんな事だろうと思ったよ……」」」

…？？？

「なぁシャマル、何ではやて達は落ち込んでるんだ？服創ってあげるって言っているのに…？」

「…キョウスケ君てわざとやっているんじゃないかって思う時があるわよね～…ハァ」

な、なんだそれ！？

「そういや…シグナムはどうした？」

さっきっから見掛けてないが…

「シグナムなら…あそこ」

シャマルが指差した方向では…

「頼む！！ぜひこの写真のネガを譲ってくれ！！」

「こ、困ります！！

この後写真を拡大して店頭に飾る予定なんですし…」

「何！？拡大も出来るのか！？た、頼む！！その拡大した写真も是非とも譲ってくれ！！！」

…何やってんだ？シグナムは…

こうしてシグナムのストーカー被害から始まった事件？はこうして幕を閉じたのだった

そして後日、店頭に僕たちの写真が飾られた…

その写真が好評で、さらに個別に撮った写真をプロマイドにして販売した所、飛ぶように売れ大きな利益を出したとか…

というか肖像権はどうした!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ…

数日後…

あれだけ噂になった写真…当然なのは達も目撃し…

「はやてちゃん達ばっかりずるいのー！！！」

「…キョウスケ？勿論、私達とも写真撮ってくれるよ…ね？」

魔王と夜叉が同時降臨しました…

さらに…

「ちょっとキョウスケ!!アンタ私とも撮りなさいよ!!」

「…私とも撮ってくれると嬉しいな～♪」

お嬢2人も参加してきたのだった…

リベンジ？　キョウスケVSクロノ！！前編

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――時空管理局・訓練室――――

キョウスケSide

「と言う訳で「ちょっと待て！！」…って何だ【的】？」

「誰が的だ誰が！！僕はクロノだっ！！

呼ばれて来てみればいきなり模擬戦とはどういう事だ！！？」

「どういう…って、それはシグナムに聞いてくれ」

「うむ、実は……」

さて、みなさんこんにちは　神代恭介です

今回はクロノと再び模擬戦をする事になりました～

何故かというと……

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

「えっ！？模擬戦をしたい？」

あ～…確かにシグナムと模擬戦するとは約束したが…バトルマニア相手だと疲労がなぁ…

「実は新たな力、シンクロユニゾンを体験したいのだが…」

…そーいやこの前、事故とはいえ仮契約したから可能になったんだよな…それにシンクロユニゾンならシグナム相手にしなくていいし…

「そうだな…じゃあ相手は…クロノにでも頼むか～ヴィータの時も相手になってくれたし、今回も快く受けてくれるだろう…インフィ、とりあえずクロノのスケジュールと管理局の訓練室の使用許可を最優先で押さえてくれ」

『解りました、管理コンピュータにハッキング&強制割り込みを掛けますね』

「ああ、よろし「ち、ちょっと待て！！」ん？どうしたシグナム？」

「…か、神代…今インフィニティが聞き捨てならぬ事を言ってなか

ったか？ハッキングとか…」

「えっ？言ってたけど…何か問題でも？」

「いやいやいや！？大問題だぞ！！？機械に疎い私でもハッキングは犯罪と知っているぞ！？」

「バレなきゃ問題ないよ？万が一に、ここのＩＤがバレない様に識別コードは巧妙に擬装してるし」

元々ハッキングはよく日常生活の一部って感覚でしてるから、それこそ今更ってカンジだな

…特に暇潰しに何度も無限書庫のデータベースにも行っているし（そのせいで、ユーノの仕事が多少増えたらしいが些細な事だ）

それに…基本管理局のコンピュータってどうも管理が甘すぎてすぐハッキングできるから機密駄々漏れってカンジだよ？…大丈夫か管理局？

「…ハァ、神代だから仕方ないか…」

…何か失礼な意味が込められてなかったか？

『マスター、クロノ執務官のスケジュール及び訓練室の使用許可押さえました。すぐに使用出来ます』

「了解～　じゃ早速行こうか？シグナム？」

「あ…ああ…」

――――回想終了――――

「…という訳だ」

「な…！？」

ん？クロノ？何そんな面白い顔をしているんだ？

「…じゃあ急に僕のスケジュールが急に変更になったのは…」

「ん？僕が書き換えたから♪」

「サラっと犯罪発言するなーーー！！！」

「うるさいな～、だったら僕も突破できないセキュリティを構築しろ！！」

「う゛…」

痛い所を突かれたのか、クロノが苦虫を噛むような表情をしていた

「キョウ君～　ダメだよ～　クロノ君が可哀相だよ」

「さくら…まぁちょっと言い過ぎ「クロノ君弱いんだから弱い者いじめはダメだよ？」…ってトドメさしたな…さくら」

「ほぇぇ！？と、トドメって？」

「クロノの方を見てみろ」

僕が指差した先には…

「…よ…弱い…？　ボ、ボクガ？…ハハハ…ハハハ……」

ｏｒｚになったクロノがぶっ壊れた中だった

「ほらみろ、さくらがホントの事言うから…」

「ほえぇぇぇ！？ご、ごめんなさいクロノ君！！つい本当の事を…」

さくらの会心の一撃！！！

「グハッ！！！」

クロノに３４２ポイントのダメージ！！！

…クロノ…ご愁傷様…

「か、神代もさくらも…い、いや　何でもない…」

シグナムが引き攣った表情しているけど…何で？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――訓練室・モニタールーム――

はやてＳｉｄｅ

キョウスケ君とさくらちゃんとシグナムが、クロノ君相手に模擬戦するっちゅう事で私らは見学に来たんやけど…

「クロノ君、何遊んどるんやろ？」

「う～～ん…フェイトちゃん解る？」

「クロノは自分は余裕だって言いたいのかな？」

「アホかアイツは！？恭介とシグナム相手に余裕かましてる場合か？」

「正確にはキョウスケ君とさくらちゃんとシグナムだけどね～確かシグナムとのシンクロユニゾンをテストするって聞いたけど…」

「【しんくろゆにぞん】って初めて見ますから楽しみです～」

シンクロユニゾンか～　シグナムとのシンクロっちゅう事は…剣を主体にしたタイプになるんやろか？

「…そーいえば私とはやてちゃんってまだキョウスケ君とシンクロ

ユニゾンした事ないわよね？」

…そうや！シャマルの言う通りや！？

なのはちゃんにフェイトちゃん、ヴィータもした事あるっちゅうのに！！

「…そこん所どうなんや？作者さん？？」

作：そ、そこで作者にフリますか！？

「その方が手っ取り早いんや！で、どうなんや？」

作：まぁ…はやてさんとのシンクロユニゾンのネタは出来てますから大丈夫なんですが…

「何や、私のは構想済みやったんか？ならお披露目も間近っちゅう事やな♪」

作：（まぁ出番はまだ未定ですが）

「あの～…作者さん？私のシンクロユニゾンはどうなんでしょうか？」

作：ギクッ！？

「ちょ！？今ギクッって…どう言う事ですか！？」

作：い、いや～…その……シャマルさんのユニゾンのネタが難航していて…

「それはつまり…シャマルの存在が地味やから思いつかないっちゅう事なん？」

作：…ノーコメントで

…それは肯定と同じやで？

「…どーせ私は地味ですよ～…魔法もサポート主体ですし…くすん」

作：だ、大丈夫！すぐ考えてますから！

「ま、気長に待っとこな？シャマル？」

「は、はい……」

「あ、はやてちゃん！クロノ君が復活したよ？」

お、ホンマや！　クロノ君も復活が早うなってきたな～

…ハァ、私もシンクロユニゾンして気持ち良うなりたい…

作：何か論点ずれてません！？

激しく気のせいや♪

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「じゃあ…さくら！！」

「うん！！行っくよー！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

―ピカッ！！

僕はさくらと（久々の）ユニゾンをした！

「久々のユニゾンだけど…さくら、どうだ？」

《（ん…大丈夫だよキョウ君！）》

「じゃあシグナム、準備はいい？」

「ああ、こちらは問題ない…始めるぞ神代！！」

シグナムと僕は仮契約カードを掲げ…そして…

「「シンクロ・イン！！」」

―ピカッ！！！

光に包まれ、僕とシグナムは一つになり…光から現れた僕の姿は、髪は漆黒に変化しておりバリアジャケットは青色に…腰には1回り大きな剣が…そして特徴的なのは少しボロボロになった赤いマントを…あ、この姿って…

「…ヴァイサーガか…さくら、シグナム　何か問題あるか？」

「（大丈夫だよキョウ君！）」

「シグナムはどうだ？」

『（……ダメだ…あっ！／／）』

いきなりダメ発言！？

「どうしたシグナム！？な、何かトラブルか！？」

ヤバイ！！もしそうならシンクロアウトで解除しないと…

『（…ヴ、ヴィータに前もって…んぁ！？…聞いていたが……き…／／）』

……き…？

『（気持ち良く…／／だ、ダメだ神代！？そ、そんな動いたら…あ あっ／／！！？）』

…あ～…シグナムまで謎の副作用？に…

「（…私は大丈夫なんだけど…何でかな？）」

…それはこっちが聞きたいよ…ハァ

―――――

―――

――

―

数分後…

『（す、すまない神代…大分落ち着いたので大丈夫だ…／／）』

「そ、そうか…／／」

《…マスター？顔が赤いですよ？》

「な、何でもない！！」

…まったく…数分とは言え、シグナムのあんな声聞いていたら…色々とヤバかった…

「…おい、キョウスケ…準備はいいのか？」

あ…クロノを放置していたのをすっかり忘れてた…

「…あ、ああ　待たせたな」

「…僕にとっては前回のリベンジだ…前のようにいかないぞ！！」

えらい気合い入ってるな～

「（そう言えば…前はキョウ君のアルトのステークでバリア貫通してジャケット破損で致命傷寸前だったんだよね？）」

「ぐはぁ！！！」

クロノが血を吐いた！？

…さくらさん？確かにそうだけど…何かクロノに怨みでもあるのか？

「くっ…確かにそれは認めよう…だが！！僕だってあれから強くなったんだぁーー！！」

…クロノってこんなに熱血タイプだったかな？

「ま、いいか　…じゃあクロノ…いくぞ！！」

―カチャ

僕は腰にある大剣…五大剣と変化したインフィニティ（…）を構え…

「今度こそ……絶対勝つ！！」

「まぁ…程々にいくぞ！！」

【神代恭介ＶＳクロノ・ハラオウン…試合開始！！】

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

リベンジ？　キョウスケVSクロノ　後編

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

僕とシグナムのシンクロユニゾンでクロノと2度目の模擬戦を開始した…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――医務室――

キョウスケSide

「……すまないクロノ…まさかこんな事になるとは…」

「キョウスケは悪くないよ！！これは…不幸な事故だったんだよ！

！」

「そうだよ！！まさかこんな事になるなんて誰にも分からないよ！！」

「…フェイト…なのは…」

「クロノ君も全力を出せたんやし…本望やったやろ…もうゆっくり眠らせたろ…な？」

「…はやて…そうだな…クロノ、ゆっくり休んでくれ…」

僕らはベットに横たわるクロ「…おい、何だその人が亡くなったような言い方は！？」…あ…

「い、いや～　ちょっとシャレッ気を…それにあながち間違いじゃないだろ？」

現在クロノは、包帯でグルグル巻きのミイラ化していた…

「プッ…も、もうダメだ！！あはははははは！！！」

「ヴ、ヴィータ！笑ってはハラオウン執務官に悪…プッ！！」

「シ、シグナムだって笑いを堪えてるじゃねーか！！」

…ヴィータとシグナムは大爆笑だ…

「クッ…笑いたければ笑え！！」

「ク、クロノ君　そう自棄にならんで…コラァ、ヴィータにシグナム!!笑ったらアカンやろ!!」

「「は、はい!!」」

…まぁグルグル巻きのクロノを見たら…笑うなって言う方が酷だよな～

「で、シャマル…クロノの容態は？」

「とりあえず骨には異常はないみたいですけど…やっぱり最後の【一矢】のダメージがキツかったみたいで…全身火傷ですね～」

「ダーリンとっても強かったです～♪」

…いやぁ、アレは予想外の威力だったしな～

―ガチャ

「クロノ!!怪我したんです……プッ!!」

リンディさんが入室してクロノを見た途端…吹き出した!?

「か、母さんまで……」

実の母親に笑われるって…可哀相なクロノ君!!

…ん？何でクロノが医務室でミイラ化しているのかって？

それは……

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

「いくぞ！！ファイアッ！！」

―ドンドンッ！！

クロノはいきなり魔力弾を放って来た！

「…というか…単純な魔力弾が効くか…よ！！」

―ザンッ！！

僕は剣を一線すると…魔力弾はキレイに真っ二つになった

「その位、想定内だ！！これならどうだ！！」

《Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ》

―ドォン！！

「なら…ハッ！！」

―バチッ！！

僕は剣を上段から地面に叩きつけ、魔力エネルギーを発生・停滞させ…

「地斬…疾空刀ッ！！！」

―ドカァァ！！

停滞していた魔力エネルギーを剣で打ち出した！！

―ドカァァァァ！！

打ち出した二つの魔力がぶつかり合い、僕らの攻撃魔法は相殺しあった

「…そのフォーム、剣撃特化型かと思っていたが…相変わらず無茶苦茶っぷりだな…」

むっ…無茶苦茶って失礼な！ちゃんとした技だろ？

『（…しかし、さすが執務官と言った所か…実際このシンクロフォルムの遠距離攻撃系はあまりない…神代、どうする？）』

…そりゃ～決まってる！！

「じゃあ…クロノのお望み道理、剣撃特化型の心髄を見せてやるか！！」

「（ふっ…それでこそ神代だ！！）」

《マ、マスターもバトルマニアに…》

『（き、キョウく～ん！！そっちの世界は危ないよ～！？）』

…いや、バトルマニアになってませんから！！

「よし！！いくぞ！！」

僕は剣を構え…

―タッ！！

一気にクロノとの距離を…

―ジャキィィ！！

…はい？

「なっ！？バインド！？」

詰めようとしたら…いきなり現れたバインドによって僕は拘束された！？

「フフフ…かかったなキョウスケ！！」

「クロノ…いつの間にバインドを！？」

「初手の魔力弾を放った時にさ…君が僕の魔力弾を切った時にディレイドバインドを設置させてもらったのさ…」

…と言う事は…

『（あの魔力弾はバインドを設置するのを隠す目くらましだったという事か…）』

「（む～…何かズルイ～！！）」

まぁ、戦略なんだからズルイって訳でもないんだけど…さくらには不評だなぁ…

「と、とにかくだ！！これでチェックメイトだ！！デュランダル！！」

《Ｏｋ　ｂｏｏｓ》

…えっ？それって…

「凍てつけ！！」

《Ｅｔｅｒｎａｌ　ｃｏｆｆｉｎ》

ちょ！？対人でそれ使う！？

―パキッピキッ！！

デュランダルから放たれる凍結魔法…エターナルコフィンが僕の身体を凍りつかせた…

「や、やった…とうとう…とうとうキョウスケに勝っ…」

―パリッ…

「何!?氷にヒビが!?」

―ドォーーン!!

「な、何…だと!?」

「…悪いが仮にも烈火の将と呼ばれるシグナムとユニゾンしてるんだ…その程度の氷は…効かない!!」

僕は氷を内側から炎を使い脱出したのだ!!

「（キョウ君!!またバインドが設置されてるかもしれないから、遠距離攻撃に切り替えよう!!）」

さくらは心配性だな～

…というか遠距離攻撃に?また地斬疾空刀を?

≪（マスター、このシンクロフォルムの能力は…）≫

インフィに能力の説明を聞くが…何その一粒で二度美味しい的な能力!?

「クッ…なら!!遠距離からありったけの砲撃を放って近付けさせるか!!」

クロノごめん…その作戦、効かないや…だって…

「フォルムチェンジ！！」

『（Ｃｏｒｄ　Ａｎｇｅｌｇ）』

―ピカッ！！

再び僕の身体が光りに包まれ…

―バサッ！！

光の中から現れた僕の姿は…髪はシグナムに似た桃色に変化しており、バリアジャケットも白を基調としピンクのラインが入った物に…何より特徴的なのは、背中からは純白の翼を羽ばたかせた姿…

「フォルムチェンジ、アンジュルグ！！」

「なっ！？姿が変わっただと！？」

これがシグナムとのシンクロユニゾンの効果…ヴァイサーガとアンジュルグの２つを使い分ける事が出来るのだ！！

…もしかして…中の人ネタか？

「（キョウ君…それは禁則事項だよ？）」

…ま、まぁ…それはともかく…

「…さっきのお返しだ！！」

僕の手の中に魔力光の玉が現れ…その光を物質化！
僕はアンジュルグ最大の武器である弓を具現化した！

「…コード入力」

「（コード確認！！インフィ君！カートリッジ！！）」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！！ドキュ！！

カートリッジをロード…僕が弓を引くと…高出力の光の矢が現れた

「何！？え、遠距離攻撃だと！？」

驚いているクロノに狙いを定め…

「舞え！鳳凰！！」

―キィィィィン！！

魔力が集束され…って！？あれ？コレって集束系なの！！？…まぁいいか

『（リミット解除…コード…ファントムフェニックス！！）』

―ドゴォォォ！！

撃ち出した光の矢は、鳳凰（フェニックス）の姿となりクロノに襲いかかった！！

「なっ！？シ、シールド！！」

《Ｒｏｕｎｄ　ｓｈｉｅｌｄ》

クロノはとっさにシールドを張ったが…

―パリン！！

「なっ！？バリアを抜け…ぐわぁぁぁぁ！！？」

―ドカァァァァン！！

クロノのシールドを軽く無視するように貫いて…クロノは炎に包まれ…って！

「…あ」

み、見間違えかな？クロノが火だるまになっているような…

『（…完全に燃えているな…ふむ、手加減を間違えたか…）』

って冷静に分析してる場合！？

「（キ、キョウ君！！流石にアレはちょっとまずいよ～！！）」

「っとそうだった！！」

とりあえず模擬戦の結果は僕の勝利となり、急いでクロノを救出し

たのだったのだが…

『（…私としてはダメ押しで…ヴァイサーガモードの光刃閃をトドメに使いたかったが…）』

いやいやいや!?それは流石にオーバーキル過ぎっす…

――――回想終了――――

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

…という事があって慌てて医務室に駆け込み、シャマルに看てもらって現在に至るのです

「しっかし、最後のアノ技…ファントムフェニックスだったか？バリアを紙みてーに貫通してったよな…」

「ああ、あの技はバリア貫通能力が付加されてるみたいで…あの場合は避けた方が正解なんだが…」

「…バ、バリア貫通って…どんな反則だよ…」

…まぁ…ヴィータの気持ちも解るが…

「大体そんな事分かるか!!しかも初見だぞ!!」

そ、そんなに興奮すると傷が開くぞ?

「でも…クロノのゲガが大した事なくてよかった」

「…フェイト…僕のケガは十分に大した事だと思うぞ…」

「クロノ君～　男がそないな細かい事、ごちゃごちゃ言うとるんやないで!!」

「そうだよクロノ君、キョウスケ君が手加減してくれたからその程度で済んだのに…」

「ちょって待て!そこは僕が責められるのか!?」

…どうやらここにはクロノの味方は…あ、リンディさんが居たか!?

「まったく…他の女性局員にチヤホヤされて気を抜いているからこんな大怪我するのよ!」

「なっ!?何言ってるんです母さん!?」

「あら、私が知らないとでも?　最近クロノが多数の女性局員とお茶しているって目撃情報が入ってるのよ?」

へ～…クロノがねぇ～　まぁ別にクロノはモテると思うが…ケッ、これだからイケメンは…絶滅すればいいのに…

『（…マスター、貴方もそのカテゴリーに入るのですよ？それもかなりの上位に）』

…またインフィから電波を感じたような…？

「大体それは、キョウスケの事を聞かれたからだ！！」

へっ？僕の事？…なんでさ？

「…知らないのか？女性局員の間で君のファンクラブがあるんだぞ？」

な…何！？初耳だぞ！？

「何でも君のプライベートについて教えてほしいか…どんな女性が好みとか聞か…れ……」

―ゴゴゴゴゴゴゴゴォ…

な、何か凄い威圧感が！？

「…ヘェ…ソウナンダ…ふぁんくらぶナンテアるンダ…」

「…クロノ？　勿論教えてないよね？　個人情報保護法と言う言葉は知ってるんだよね？」

…魔王と夜叉が召喚されましたよ…

「あ…いや…それは…「教えてもうたんか？」…ハ、ハイ！！すみません！！！」

…そして砂の一尾も現れた!?

「…オイ!誰に話した…今からぶっ潰しに行くぞ!!」

ガ、ガオガ○ガーまでファイナルフュージョン済み!?

「…さあクロノ君?」

「誰に話したのか…」

「とっとと話さんかい!!」

「ま、まて!おいキョウスケ!!何とかしろ!!」

クロノはヘビに睨まれたカエルのような目で助けを求めてくるけど…

「……大丈夫だクロノ、君は僕の心の中で生き続けるから!」

「ちょ!?それ答えになってないぞ!??というか全然大丈夫でもないし!!」

「黙れ負け犬!とっとと吐きやがれ!!」

「ヴ、ヴィータちゃん…病室ではグラーフアイゼン起動しないで~!!」

シャマルの願いも虚しく…クロノは…いや…ご想像にお任せします…

ただ…この後、女性局員の悲鳴が聞こえたとか…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

《ちなみにマスターの好みの女性と聞かれ、何と答えたんですか？》

「もちろん…胸が大きい女性と答えたぞ？」

《クロノ執務官、正解です》

…とりあえずクロノにはトドメ刺すか…

「…ところで神代、ハラオウン執務官のケガだが…」

「ん？ああ、待っててくれシグナム…今からさらに不幸な事故が起きるから…クロノには永遠の休養が必要だからな…フッフッフ…」

「そ、そうなのか…ま、まぁ程々にな…」

進路はよく考えよう？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

さて、クロノの公開処け…じゃなく！模擬戦から時が経ち…

――管理局本局――

「ど、どうかな？この制服…？」

「その…似合ってるかな？」

なのはとフェイトの訓練校研修＆いつの間にかの仮配属期間も無事終了し、現在管理局の制服を着ている…

…というか管理局よ…いくら人手不足だからと短期研修にも程がある早さだろ！？

「……に、似合わないかなぁ（ウルウル）」

「……キョウスケの趣味じゃないならすぐ脱ぐよ？」

…っと、考え事してついボーってしてしまった！

「あ、いや　2人とも似合ってるよ」

「ホ、ホント！？ホントにホント！？」

「よ、よかった～」

2人とも喜んで…あれ？

「フェイト？髪下ろしたんだ？」

「う、うん／／どうかな…？」

「うん、何だかぐっと大人っぽくなった感じだね。綺麗だよ」

「そ、そうかな…／／ありがとうキョウスケ」

「どういたしまして」

女の子って…髪型変えるだけでかなり雰囲気変わるからある意味スゴイよな～

「…むぅ…私も髪、伸ばそうかなぁ…（ボソッ）」

ん…なのはが何か不機嫌みたいだけど…？？

「ねぇ、キョウスケ君…キョウスケ君は髪長い女の子が好みなの？」

なのはが変な爆弾を投下した!?

「ぶっ!!な、何をいきなり言うんだ!?」

「だって…フェイトちゃんばっかり褒めるから…その…／／」

あ～…フェイトばかり褒めたから、むくれたのかな?

「…心配しなくても、なのはも十分可愛いよ?」

―ナデナデ

「ふぇ／／!!?」

僕はなのはの頭を撫でてあげると…

「はうぅ…／／」

なのはは一瞬驚いたが…気持ち良さそうに目を閉じて幸せそうな顔をしていた

…これで機嫌は直ったかな?

…結局なのは達は正式に管理局に入局、なのはは武装隊候補生　フェイトは執務官候補生と…まぁ原作道理になったんだよな～

…出来る事ならなのはの戦技教導隊入りは遠慮してほしかったが…

え?だって…教導隊入りで魔王化が促進されるのが目に見えてるからな～…いっそＦＡＩＴＨに入れるか?

と、考えていると

「おーい!キョウスケ君!なのはちゃん!フェイトちゃ～ん!」

「あ、エイミィさん」

「おー!!ちゃんと着替え出来たみたいだね～」

わざわざなのは達の制服姿を見に来たのですか?

「だって早く見たかったんだょ～♪」

…もはや普通に心読むんスね～

「ところでキョウスケ君、何故になのはちゃんの頭を撫でてるのかな?」

おっと…ついつい撫で続けてしまった

「あ、いえ　ちょっと話しの流れで…」

僕がなのはの頭から手を離すと…

「…ぁ」

名残惜しそうな顔でこちらを見てくるなのは…別に僕の手からマイナスイオンは出てないんだが…

「…なのはだけズルイ…（ボソッ）」

「ん？何か言ったかフェイト？」

「う、ううん！！何でもないよッ！！？」

…フェイトが何か言ったような気がしたが…気のせいだったみたいだな…

―ガチャ

「おまたせ～キョウスケ君♪」

「着替え終わったよ～」

「あ、はやてにさくら」

はやて達も制服に着替え、部屋から出てきた

「あ、エイミィさんもおったんや～」

「こんにちは～」

「おー！！はやてちゃんもさくらちゃんもバッチリ似合ってるね～」

「あはは、どーもです」

「ありがとうございます♪」

はやては特別捜査官候補生として…まぁ指揮官適正も高い筈だから後の機動六課の隊長なんだよな～

…さくらは当然、僕のユニゾンデバイスなので常に行動を共にする…というか、知らない間にＦＡＩＴＨに隊員としても登録されてたし！？

「あ、キョウスケ君もその新しい制服似合っとるで♪」

「ん…？ああ、これ？」

実は僕の部隊…ＦＡＩＴＨ用に新たに制服が作られたのだ！

ちなみに僕とさくらが着ているＦＡＩＴＨの制服は…某プラントの赤服…ではなく、オーブの方の白と青の軍服が採用されたのだ

…その結果

「にゃはは、何だかキョウスケ君と私の制服って似てるね～♪」

…まぁ確かに教導隊の制服と色彩は似ているよな～

「な、やんやて…私かてペアルックにはまだ手ぇ出してへんのに…」

…をい、まだって…いつかするつもりだったのか！？

「…キョウスケとペアルック……

エイミィ！！私、武装隊志望に変更する！いいよね？ね！？ねっ！？」

「そや！その手があったんや！！私もそっちに志願するで！！」

しかも何やらフェイトとはやてが無茶苦茶言っているし…

「ちょ！？ふ、２人とも！！無茶言わないでよーーー！？」

…まぁ…何だ、エイミィさん頑張れ！

「み、みんな～！！

私のはキョウ君と全く同じ制服だから…私こそが正真正銘のペアルックだよーー！？」

…さくら、多分誰も聞いてないぞ？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

その後、はやてとフェイトの説得？も何とか成功し落ち着かせ…

「エイミィさん、フェイトちゃんはアースラ勤務になったんですよね～？」

「そーだよ　艦長、ホントはなのはちゃんも欲しかったみたいなんだけど…さすがにＡＡＡ級３人は保持させてもらえないって～」

そうなのだ

フェイトはアースラチームと一緒だけど、なのはやはやてとは別々になっちゃうんだよな～

…というかＡＡＡ級ってアースラに居たのか？

「キ、キョウスケ君？多分だけどウチにＡＡＡクラス居たのか？って考えてない？」

な！？またエイミィさんに心読まれた！？

「いやいやいや！思いっきり顔に出てるって…一応クロノ君がＡＡＡ級なんだよ？」

「ええっ！？」

「いや、そこ驚く所！？」

…いや、だって…クロノって活躍した記憶がないし…あの戦闘力でＡＡＡ？というか、やられキャラの間違いぢゃ？

「…ま、まぁキョウスケ君と比べたらクロノ君が可哀相だけど…」

「にゃはは～、クロノ君ってキョウスケ君にボロ雑巾のように連敗だもんね～」

…なのは、本人の前でそれは言わない方がいいぞ？

…言ったら多分、無限書庫に引きこもりそうだし…

「いや～、そんなお義兄ちゃんと一緒でよかったな～　フェイトち

ゃん」

「…う、うん…一応ありがとう…はやて」

さすがのフェイトもちょっと嫌だったのか微妙な反応だし…そういや、つい先日フェイトは正式にハラオウン家に養女として引き取られたんだっけ…

…はぁ、これでクロノのシスコンが覚醒するのか…？

「私も基本的にはうちのコたちと一緒やし…管理局は人情人事をしてくれたんやね～」

…あ…この話題って…

「…あれ？はやてちゃん、キョウスケ君から聞いてないの？」

「えっ！？キョウスケ君からって？？」

「…本当はヴォルケンリッターの皆と、はやてちゃんは別々の配属にするって一部の人達が騒いでいたんだけど…」

「ちょ！？エイミィさん！！」

慌ててエイミィさんを制止するが…遅かったか…

「えっ！？…もしかして…内緒だった？」

はやてを心配させないよいにしていたのに…

「…キョウスケ君？何があったんや？」

「あ～…一部の高官たちが「闇の書の主と守護騎士を一緒にし、もし管理局に反旗を翻した場合を考えろ！！別々に配属するのが普通だろ！！」って暴言を吐いていたんだけど…それで、ちょっと僕が【説得】して一緒に居られるようにしただけだよ？」

うん、間違った事は言ってないよ？

…説得した後、何人か鬱状態になっていたけど大した事じゃないよな？

「な、何や【説得】の所を妙に強調しとる所が激しく気になんやけど…そこは触れたらアカンような気が…」

『（はやて嬢、正解です！あれは…確実に放送コードに引っ掛かります！相手の命があったのが不思議な位ですし）』

…何かまたインフィにツッコまれた気がするが…

「とにかく、はやては何も心配しなくてもいいよ？はやては僕が守るからさ」

「「なっ！！？」」

…ん？なのはとフェイトがビックリしたような表情しているけど…何か変な事言った…かなぁ？

「んふふ～　キョウスケく～ん！それって、はやてちゃんに告は…ひぃぃぃぃ！？」

エイミィさんが何か言いかけたその時！

「…エイミィサン？ナニカイイマシタカ？」

「…エイミィ？妄想は程々に…ね？
じゃないと…うっかり手を滑らして…バルデッシュで切り刻んじゃうかも？」

なのはとフェイトからのどす黒いオーラの前に震えだした！？つかフェイト！？凄く物騒な事を言ってませんか！？

「ご、ごめんなさ～～～ぃ！！お願いだから…い、命だけは～～！！！」

エイミィさんも必死で謝ってるし…どんだけ怖がらせるんだよ！？

「…ハァ、キョウ君が原因って分かってるのかなぁ～…」

ええっ！？僕の！？何でさ！？？

「…はぁ…」

さらに溜息！？

「…さぁエイミィさん…」

「…大丈夫…ちょっと脳に電気的な刺激与えて…もう変な事を思いつかないようにするだけだから…」

「いやいやいや！！？それ医学的にもダメだから！？」

…エイミィさん、貴女の事は忘れません！

「キ、キョウスケ君！！諦めないで助けてよーーーーっ！！！」

…教訓、不用意な発言は控えよう…

「ちょ…ま、まっ…キャァァァァ！！？」

―バチバチバチッ！！！

…あ、逝ったか…

『まぁ　毎度のギャグ補正で次回には復活してるでしょうが』

…ネタバレは程々にな…インフィ

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「キョウスケ君にプロポーズされてもうたキョウスケ君にプロポーズされてもうたキョウスケ君にプロポーズされてもうた…／／キョウスケ君!!私はいつでもＯＫや!!これはもう結婚式なんて悠長な事は後回しで、早速初夜に向かってベットへＧＯや!!!…じゅるり／／」

…は、はやてさん?な、何その肉食獣みたいな目は!?

お、落ち着いてーーー!!?

模擬戦…なんだよね？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

エイミィさんが、なのは達にボッコボコにされてた…合掌！

「ちょっとー！！まだ生きてるよ！？」

…あ、無事だったのか…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

エイミィさんの復活を待っていると…

「主はやて、こちらでしたか」

「はやて♪」

「はやてちゃ～ん♪」

「あ、みんな～」

シグナム達もこちらにやって来た

…ちなみにシグナム達は武装隊に所属しているが、基本はやての補佐である

「って、あれ？シグナムとヴィータの制服って…」

シグナムとヴィータが着ている服は、局の制服…ではないよな？？

「ああ、これは武装隊甲冑のアンダースーツだ　局の女子制服は窮屈でいかん」

「まっ、こっちの方が楽だかんな」

…まぁ、この2人は…らしいっちゃらしいか

「…って！！そんな事よか、何でさくらが恭介と同じ制服着てんだよ！？」

「ほぇ！？だ、だって私はキョウ君と同じＦＡＩＴＨ所属になったから…」

「なっ！？聞いてねーぞ！？」

聞いてねーって言われても…ねぇ？

「落ち着けヴィータ、全く神代の事となると落ち着かない奴だ…」

「うっせー！！恭介の事で騒がないで、いつ騒ぐんだ！？」

…えぇ！？それって僕のせいなの！！？

「ま、まぁヴィータ…さくらは僕の融合デバイスって事で同じ部隊になったんだから…」

…まぁ、違う部隊に入れる気もないが…下手な所に配属になって…何かされたら大変だしな…

≪（…キョウスケは身内には甘いですからね）≫

べ、別にそんな事はないぞ！？リインフォース！！？

≪（そう思っているのは本人だけです…これがツンデレと言う物ですか？）≫

な、何でリインフォースからツンデレなんて単語が！？

≪（インフィニティから聞きましたが…何か？）≫

…よし、アイツバラそう！！そりゃもう、１つ１つ真心込めて解体してやる！！

「ど、どうした恭介？何かこえー顔してっけど…？」

おっと！ついインフィニティの公開解体ショーを考え『（ちょ！？

ま、待って下さいマスター！！？私が悪かったですから…ど、どうか解体だけはぁぁぁぁ！！？）』…ちっ、仕方ない…なのはのＳＲＢの的で許してやるか…

『（ちょ！！？それ破壊が確定されてません！？）』

…運が良ければ大丈夫ダヨ？

…そーいや、デバイスにも非殺傷設定って効くのかなぁ…？

『（い…いゃぁぁぁぁぁ！！！？）』

…フッ、リインフォースに変な事を吹き込んだ罪だ…っとそれより…

「いや、何でもないよ？ごめんね、ヴィータ」

ちゃんとヴィータには謝っておかないとね～

「…ま、まぁ恭介に言われたらしゃあねーな…こ、今度…その…付き合ってくれたら許してやるよ／／」

…付き合う？

―ポクポクポク…チーン！！

ああ！！そんな事か！！

「まぁ「「「ちょ！？ヴィータ（ちゃん）！！ドサマギで何言ってる（（の））んや！！？」ら…って！？」

僕が答える前に、はやて・なのは・フェイトが詰め寄って来た！？

「ヴィータちゃん…？相変わらずの抜け駆けっぷりだね？」

「ず、ずるいよ…私だって…その…キョウスケと付き合いたいのに…／／」

「ヴィータ？別に付き合うんはええんやけど…私が常に最優先やで！？」

「お、おう！？（ガクガクガクッ！）」

…み、みなさん？そんなに殺気全開で詰め寄るからヴィータが怖がってるじゃないか！！

「あぁ～！！皆ばっかりズルイです～！！リインもダーリンとお付き合いたいです～！」

「ん～…キョウスケ君とは大人のお付き合いがしたいわよね～…そう思わない？シグナム？」

「なっ！？なななぜ私にそんな事を聞く／／！！？」

「じゃあ…シグナムはキョウスケ君と付き合いたくないのかしら～？」

「い、いや…そ、それはだな…うぅ…／／」

…な、何だか皆…好き勝手に騒いでいるけど…

「あの、別に付き合う位いいよ？」

「「「「「…へっ!?」」」」」

いや、なに皆してそんなに驚いてんだ?

「別に…買い物位、いつでも付き合うけど?」

「「「「「……」」」」」

…あれ?時が止まった?

「「「「「……そ……」」」」」

…そ?…そうめん??

「「「「「そんな事だろうと思ったよーーー!!!!!?」」」」」

ええっ!?な、何か変な事言ったか?

≪(き、キョウスケ…鈍さに磨きがかかってますよ…)≫

…リインフォースにまで突っ込まれた!?

『(…まぁ鈍感さは、どこぞのハイスピードバトルの主人公…織○一夏並の域に達してますよね~)』

…いや、だからネタ発言は分からない人もいるから!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

何だかんだであの後、結局なのは達とは買い物に行く約束をして…

「そういえば、シャマルさんは局の制服と…それはもしかして？」

「ふふ…なのはちゃん、やっと気付いてくれた？医療班は白衣もセットで着てるんですよ♪」

ふ～ん…世界が違えど、医療と言えば白衣は全世界共通なんだな～

「と言う事でキョウスケ君？後で保健室でイイ事しましょうか？」

…いや、だから何がと言う訳なんだよ…

「…しゃ～ま～るぅぅぅ……」

ど、どこからか怨念を込めまくった声が…！？

「あ、あら？はやてちゃん？？地を這うような声を出して…ど、どうしたのかしら～？」

シャマルは動揺しまくりだな…

「私を差し置いて…保健室でナニしようとしとるんやーーー！！！」

―パシィィィ！！！

「ご、ごめんなさは～～～い！！」

はやてがどこからが取り出したハリセンでシャマルに突っ込み…ってハリセンなんて何処から!?

「そら私の谷間からに決まっとるやないか?」

…いやいやいや!?何当たり前の様に言ってるんです!?

…第一、今のはやてにはまだ谷間なん…て……はっ!?

「キョウスケ君?何処を見とるんや?…キョウスケ君はえっちぃな~♪」

「い、いや!?その…／／」

ついつい、はやての胸を…凝視してまった!?

「仕方あらへんなぁ~。…じゃあ続きは体育館倉庫で…／／」

はやてが僕の手を掴…

―パシッ!!

…掴む前に誰かの手がはやての手を払った!?

「…はやてちゃん?キョウスケ君を何処に連れ込む気かなぁ…?」

「…はやて、第一ここには体育館倉庫なんてないよ?」

僕とはやての間に、なのはとフェイトが割って入って…な、なんか

凄いプレッシャーなんですが…

「…何や2人して…これからキョウスケ君とイイコトする所なんやから…」

「「……ふ～ん…」」

…ちょ！？な、何か空気が重くなって…さなには険悪な雰囲気になってないか！？

「さ、3人とも落ち着いて！！シグナム達も見てないで止めるの手伝って！？」

何故から解らないが、一触即発の3人を止める為にシグナム達に助けを求めるが…

「…済まない神代…私では荷が重過ぎる…」

「…その中に入るのは…ねぇ…」

「…つか、流石にあの中に飛び込む勇気は…」

まさかの諦め！？

「リインちゃんは危ないから私と一緒にいようね？」

「はいです♪さくらお姉様」

だ、誰も止めないのかよ！？

≪（キョウスケが止めないのですか？）≫

…いや、リインフォースさん？流石にあの中に１人で入るのは…

「「「……殺る？」」」

ってオイ！？いよいよ物騒な事言い出してないか！？

唯一の救いは…確かなのは達のデバイスって今整備中だったんだよな…

よかった～！！万が一、手元にデバイスがあろう物なら…今頃…

と考えていると！？

「あ、皆さんここに居たんですか～…って！？な、何ですか！？この浮気現場を彼女に見つかったような状況は！？」

マリーさんがこちらにやってきた！？

「あ、マリーさん…ちょっとした喧嘩…かな？」

「あ～…またキョウスケ君絡みですか？」

ぐっ！？否定できないのが悲しい…

「ところでマリーさん、何か？」

「あ、はやてちゃんの杖【シュベルトクロイツ】のＶｅｒ８が試作機が出来たから、後でテストお願いしたようと捜していたんですよ」

…ちょ！？今そんな話ししたら！！？

「…ほんまですか？喜んで試させてもらいます…ちょうど動く的も２つここに…フフフフフ」

は、はやてが黒ッ！？

「「マ、マリー（さん）！？私のバルデッシュ（レイジングハート）は！！？」」

「え、ええ…レイジングハートとバルデッシュも補強調整も終わったから…デバイスルームに…」

「「今すぐ取りにいきますッ！！」」

―ダッ！！

なのはとフェイトが瞬間加速（イグニッションブースト）の如く、デバイスルームに一直線に向かって…つか早っ！？

「…シグナム！ヴィータ！シャマル！！」

「「「は、はい！？」」」

「今から…なのはちゃん達と模擬戦（争）や！！…もちろん景品はキョウスケ君やから気合い入れるで！！！」

なっ！？ちょっと待て！？何で僕が景品なんだ？というか今、１文

字変な言葉が入ってなかったか!?

「な、なぁはやて…少し落ち着いて…」

「負けられない闘いが…ここにあるんやー!!!」

って話し聞いてないし!?　というかネタが微妙に古い!!?

「…まぁ何だ…神代よ、主もいつもの事だ…諦めろ」

「それかもう慣れるしかないわよ?」

「まぁ心配しなくても私らが勝つから大丈夫だ!あの魔王コンビに恭介は渡さねーかんな!!!」

…うわ~…こっちもこっちでいつも道理た~~…何気にヴィータさんもはやて並に気合い入ってるし~!?

「ね、ねぇキョウスケ君…これって私のせいなのかな?」

「……マリーさん…恨みますよ」

「ええっ!!?そ、そんなぁ~~!!?」

…ハァ…とりあえず…ケガだけはしないように…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

2015

模擬戦争開始！！

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――管理局・戦闘訓練室――――

クロノ　Ｓｉｄｅ

僕は…何でこんな所に居るんだろう…？

あれはたしか…ユーノに資料を頼む為に無限書庫に行ったら…なのはが居て…そして急に拉致られて…って！？拉致って確か犯罪じゃないか！？

「えー、とゆー訳で…久しぶりの集団戦です」

「って、ちょっと待てはやて！？色々とツッコム所があるんだが…とりあえず、何で僕までその模擬戦に参加させられているんだ！？いや！それ以前に、確か君達の今日のスケジュールには模擬戦なんてなかった筈だが…」

「う～ん…ザックリ説明すると…キョウスケ君を賭けた闘いや！！」

…な、何だ！？その人身売買に引っ掛かりそうな理由は！？

「…というか、またキョウスケが原因か…」

あいつが絡むとロクな事がないな…うっ！胃が痛む…

「…ね、ねぇはやて…そのキョウスケは今何処にいるの？」

隣に居た…というか一緒に拉致られたユーノがはやてに尋ねると…

「あ、ユーノ君！キョウスケ君は賞品だから観戦室にいるんだよ？」

代わりになのはが答えてくれたが…

「…なのは、君が参加するのか？」

「もちろんだよ！！キョウスケ君が賭かった大事な一戦なの！！だから…同じチームで協力してね？クロノ君にユーノ君（ニコッ）」

「うっ…／／ま、まかせてなのは！！」

…ユーノ、君はまだなのはに…はぁ

「クロノ…今回はチーム戦だから…」

「フェイトも…参加していたのか…」

最近、僕の義妹になったフェイト…くっ！！あんな奴にフェイトを渡す位なら…わざと負けてはやて達にキョウスケを…

「…クロノ？余計な事は考えないでね？でないと…うっかり背後か

ら攻撃しちゃうかも…だから…ね？」

…うん、やっぱり正々堂々と不正はしないでがんばろう！！

「それではルールを説明するで！
ルールは（一応）局の戦闘訓練準拠で、攻撃は（一応）非殺傷設定は言うに及ばず
武器持ちの子は相手のバリアジャケットを（一応）抜かんようちゃんと威力設定してな～」

…なんだろう…所々に不穏な単語が隠れていたような…

「リーダーは…ミッドチームはクロノ君！で、ベルカチームは私…八神はやてや！！」

…ああ、しかも僕がなし崩し的に僕がリーダーかぁ…

…とにかく死人が出ない様にしないとな…ああ、また胃が痛みだした…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――訓練室・モニタールーム――

キョウスケＳｉｄｅ

今回、僕は脇役かぁ…

「キョウ君？キョウ君は脇役じゃなくて景品だよ？」

…ああ、現実に戻してくれてありがとう…

「貴方が神代君ね？噂は聞いているわ」

モニター室にリンディさんと一緒にいた女性…

「えっと…」

…誰だっけ？

「自己紹介がまだだったわね…レティ・ロウラン、これでも提督よ？よろしくね」

…ああ、確かはやてをゲットしたっていう提督だっけ？

「初めまして、独立部隊ＦＡＩＴＨ所属、神代恭介です…で、こっちが」

「キ、キョウ君のパートナーのさくらですッ！」

…ってさくら、緊張しているのか？

「貴方達の事はリンディに色々と聞いてるわ…まぁ、管理局でも有名人だけど…」

「はぁ…？」

そんなに目立つ事…したのかなぁ？

「闇の書事件の実質的な功労者、管理局に入局すると同時にダイテツ副元帥直属部隊、対アインスト部隊ＦＡＩＴＨに任命され、さらに副元帥と同等の階級って有名にならない方がおかしいわ」

「まぁ、改めて聞くと…本当にとんでもないわよねぇ～」

リンディさん、言われなくても十分解ってます…

「…でも気をつけた方がいいわよ？一部では快く思っていない人もいるから」

…まぁ、組織だからな～…いきなり大出世なんて反感しか買わないからな…

「まぁまぁ…キョウスケ君も十分気をつけてるから大丈夫よ？」

「…そうね、彼の実力なら簡単に返り討ちにするでしょうし…」

…まぁ、確かにそこは否定しませんが…

「まぁ…それ以前に神代君に何かあったら、局の【神代恭介ファンクラブ（仮）】の女性局員が総力を挙げて、手を出した人物に報復するでしょうね～」

……は？

「ちょ！？待って下さい！！？何です？その危ない過激派は！？」

…確かに以前にクロノからファンクラブがあるとは聞いていたが…
（本人未公認）

「あら？そんなに過激かしら？
まぁ…確かにその気になったら、キョウスケ君の一声で女性局員全員で本局位は軽く制圧しちゃうかしら？」

「そうねぇ…否定できないのが怖いわね～」

そこは否定してくださいよ！？

「あ！キョウ君！！はやてちゃん達、始めたみたいだよ？」

はぁ…まぁ、気を取り直して…

僕がモニターに視線を移すと…

―バキッ！！ドカッ！！ドコォォォ！！！

……なぁ、アレってホントに模擬戦？

「くっ！？大人しく的に…なるの！！！」

―ドカァァァ！！

［アホか！？そっちこそ…ブッ潰れやがれーーー！！！］

―バキィィッ！！

［隙あり！！バルデッシュ！！］

―ザンッ！！

［甘い！？甘いでフェイトちゃん！！砂糖に練乳かけて食べる位に甘々や！！］

―ドコォォォォ！！！

通信機から聞こえる声…うん、絶対に模擬戦のレベル越えてるな…
というかアレ非殺傷設定か！？
見ろ！あのバトルマニアのシグナムだってドン引きしてるし！？

「はわぁ…はやてちゃん達、凄いですね～」

…というかやり過ぎだろ…って！？

「リイン！？いつの間に！？」

全然気付かなかった…

「リインはまだ経験不足で危ないから、はやてちゃんに見学するように言われたです！」

…まぁ確かにリインは経験値が足りないからな～

「まー…何と言うか…若い子達は元気ねぇ」

いやいや！！あれは元気というか、何か殺伐としていませんか！？

「そうねぇ…仕事でもトレーニングはしてるでしょうに」

「今が伸び盛りだから技術向上が楽しいんでしょうね～」

「…それにしても、闇の書事件って第１級ロストロギア関連事件なのに…終わってみれば死者０名
おまけにレア能力付きの魔導騎士と即戦力レベルの配下４名までゲットして…極め付けに、一気に管理局高官にまで駆け上がる人材が１名…」

リンディさんとレティさんがモニターの戦闘を見ながら話しているけど…最後のは確実に僕の事だよな…

「リンディ提督は一体どんな奇跡を使ったんだって噂になってるわよ？」

「あらまぁ…奇跡かどうかわからないけど、あの子達はなんとも頼もしいわ…
あの子達がもっと大きくなって、部下とか教え子を引き連れて一緒に事件や捜査に向かって行くようになったら…世界はきっともう少し平和で安全になるかもね」

…子供を戦場に立たせて得られる平和…か…

まぁ、それはともかく

「…お二人とも…それはいいんですけど…今現在の訓練室がちょっと…というか、かなり危険度絶賛上昇中ですよ？」

「「えっ！？」」

…ありゃ～訓練室の結界持つか？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――訓練室――

はやてＳｉｄｅ

「…はぁ…はぁ…」

よ、予想はできとったが…なのはちゃんとフェイトちゃん、連携攻撃がかなり出来とるなぁ…

私らも何とか対抗しとるが…くっ！？

「さっきから邪魔やーーー！！何やこのディレイドバインドの山は！？」

動く度に発動しおって！？　…こんないやらしい設置の仕方するんは…ムッツリスケベのＫＹしかおらん！！」

「だっ！？誰がムッツリだ！誰が！？」

「ありゃ！？何で考えてた事がクロノ君にバレとるんや！？」

「……主よ、途中から声が出ていました…」

しまった！？つい心の声がダダ漏れに！？…というか、ザフィーラ…居たんや…

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　ｃｈａｒｇｅ　ｓｅｔ》

なんて漫才しとったらレイジングハートから不穏な声が！！？

し、しもうた！？バインドに気を取られすぎてもうた！！

「…フィールド形成！発動準備完了ッ！！」

あかん…なのはちゃんの一撃が…来る！？

「お待たせしました…おっきいのいきますっ！！フェイトちゃん！！」

「こっちもＯＫだよ！なのは！！」

って２二人掛かりで合体技かい！？

―キィィィィィン！！

「「Ｎ＆ａｍｐ；Ｆ中距離コンビネーション！！空間攻撃ブラストカラミティッ！！」」

…確かにあの２人の合体魔法は強力やろうけど…！

「どっこい、こっちも既に詠唱完了や！！こっちにも広域攻撃Ｓランクの意地があるんやで！！」

「全力…全開ッ！！」

「疾風迅雷ッ！！」

「響け！！終焉の笛…ラグナロク…」

「「「ブラスト…シュゥーーートッッ！！！」」」

―ドコォォォォォ！！！！！

「「うわぁぁぁぁ！！！」」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

―ドコォォォォ！！！

「うわっ！？」

け、結構揺れたな！？

「あわわわわ～」

「リインちゃん！？大丈夫！？」

「ら、らいじょうぶです～ぅ…」

今、訓練室が大爆発してなかったか！？

というか…生きているのか！？

「リンディ提督！レティ提督！僕、急いで救助に行きます！！」

「えっ！？えっと…こういう場合は…」

「リンディ！！落ち着きなさい！！神代君、お願いします！！」

大丈夫とは思うけど…急がないと！！

「ま、まってキョウ君！！私も！！」

「リ、リインも一緒に行くです！」

「分かった!!2人とも手に掴まって!!」

僕は2人の手を掴み、訓練室に直接転移した!!

―シュン!!

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――訓練室――

―シュン!!

「皆!!無事…かぁ!?」

ボロボロになった訓練室の中で僕が見た物は…

「私の攻撃が決まったから私の勝ちなの!!」

「ちょ!?な、なのは!?私との連携攻撃なんだから…なのはが勝ちなら私も勝ちだよ!?」

「何言うとるんや2人とも!?私の攻撃が2人の攻撃を押し返して決まったから私の勝ちや!!」

…あ、あんなに派手にやらかしたのに…まだあんな元気あるんかい

!?

「…キ、キョウスケ君…」

「シ、シャマル!?大丈夫か!?というかバリアジャケットがボロボロじゃないか!?」

「さ、3人の攻撃を抑えようと結界を張ったんですけど…」

…予想を超える威力に結界が持たなかったんだね…

「そういえばユーノやクロノは?あの2人…というかユーノは結界魔法が得意な筈だから…」

シャマルと2人なら防げたと思うんだけど…

「…ユーノ君達は…真っ先になのはちゃん達の攻撃がぶつかった余波で吹っ飛んじゃいました…」

そ、そういえば…何やらなのは達の攻撃がぶつかった時に悲鳴が聞こえたような…というか、クロノ&ユーノ…もう少し頑張れよ…既にやられキャラになってないか!?

「…恭介ぇ〜…」

「ヴィータ!?大丈夫か?」

「も、もうダメかも…」

ちょ!?い、急いで回復魔法をかけ…

「た、頼む恭介…だ、抱きしめてくれ…／／」

「わ、分かった！！」

―ギュッ！！

「…んん／／」

…あれ？何で回復魔法をかけようとして…ヴィータを抱きしめてるんだ？

―ゴゴゴゴゴゴゴゴォ…

…な、何か僕の背後から…物凄い勢いで魔力が上昇しているのが解るんですが…

「…キョウスケ君？ヴィータちゃん？何舐めた事してるのかぁ？」

「…フフフ…2人とも…ダメだよ？そんな事しちゃ…」

「…ええ度胸やなぁ…私らが戦ってる間に抜け駆けしてそんな…羨ましい事を？　…覚悟はええか？2人とも？」

……ああ、とても素敵な笑顔で恐ろしい事を…

「って！？ま、まて！？3人とも！？そ、ソレはマジでシャレにならんぞ！？」

3人がデバイス片手に魔力を高めてるんだ！！あ、あんなのを食ら

ったら…

「ああ…／／我が人生に悔いも後悔もね～…／／」

いやいやいや!?そこは後悔しようよ!?つか逃げないと!?

…ガチッ!!

「…へっ!?バインド?いや…これは風!?」

風が僕とヴィータを拘束して…ま、まさかこれは!?

「…キョウ君、私も抱きしめてもらった事ないのに…ヴィータちゃんと…ヴィータちゃんと……」

…さくらの風(ウィンディ)!?

「…キョウ君には少しお仕置きが必要だね（ニコッ）」

…ああ、さくらの性格が段々なのは達に似て来ているのは気のせいか…?

「「「……フフフ…トリプル…ブレイカーァァァ!!!」」」

―ドカァァァァ!!!

…この後、どうなったか僕の記憶にはまったく無く、気がついたら…

――――病室――――

『（…しかしマスター、よく生きてましたね～）』

≪（…さすがに今回はダメかと思いましたが…）≫

……僕もそう思うよ…

僕はベットの上で目を醒まし…

「はい、キョウスケ君♪あーん♪」

「キョウスケ、こっちのプリンの方がおいしいよ？はい、あーん♪」

「2人とも！キョウスケ君の看護は私が1人でやる言うたやろ！？
あ、キョウスケ君♪あーんや♪」

…なのは・フェイト・はやてに看病されてます…

「おいこら！！はやて以外は恭介にあーんすんじゃねーー！！！」

「大人しくしていろヴィータ！…まったく…」

「そうよヴィータちゃん…非殺傷設定だったとはいえ魔力ダメージがまだ残ってるんですから…」

「……尤も、そのダメージは自業自得のような物だがな…」

…ちなみにもう一人の被害者？ヴィータは僕と同じ病室で隣のベットで暴れていた…いや、安静にしようよ？

「くっそー！！体が動けば…私だって…私だってあーん出来んのにーーー！！？」

…いや、だから安静に…

―ガラッ！！

「あーー！！！３人とも！！キョウ君の看病は私達がするっていったよね！？」

「そうです！！ダーリンの看病は、さくらお姉様とリインがするです！！」

…何か知らない間に誰が僕を看病するかでもめている？

「それになのはちゃん達はこれから訓練室の修復のお手伝いでしょ！？」

「「「クッ……そ、そうだった…ｏｒｚ」」」

後で聞いた話しによると、訓練室を大破させた直接的な原因の３人に修復をさせていたらしい…

「…なのはちゃんが手加減せぇへんかったからや」

「にゃあ！？は、はやてちゃんだって手加減してなかったの！！」

「…私は2人が手加減してなかったせいだと思うよ？」

「「フェイトちゃんだって手加減してなかったの（やろ）！！？」」

…というか、手加減抜きの攻撃を僕にぶっ放ったんかい！？

―ガラッ

「来るのが遅いと思ったら…随分元気が有り余ってるようだな…」

「「「ク、クロノ（（君））！！？」」」

かなり不機嫌そうな顔でクロノが部屋に入ってきた

…そーいやクロノってあの模擬戦で無事だったのか？

「……真っ先に彼女達に吹っ飛ばされたのが幸いして、それほとダメージを受けなかったんだ…」

……何か嫌な助かり方だな…

「ねぇクロノ！？何でヴィータがキョウスケと同じ病室なの！？」

「そ、そうだよクロノ君！？そんなのズル…じゃなくおかしいよ！！」

…フェイトとなのはが何かクロノに詰め寄っているけど…

―ピシッ

あ、クロノの不機嫌度が増した!?

「…君達が放った攻撃で、一般局員にも被害が出てな…その一般局員を搬送して病室か殆ど埋まってしまって…というか君達のせいでこうなったということを忘れないでほしいんだが…（怒）」

「「「うっ……（汗）」」」

…ああ、巻き添いになった局員のみなさん…何かごめんなさい…

「さぁ、母さ…リンディ提督も待っているんだ…いくぞ!」

「ううう…」

「し、仕方ないよ…なのは」

「こうなったら…速攻で直してアイシャルリターンや!」

「待っててねキョウスケ君!すぐ戻ってくるからね!!」

そう言うと、なのは達は急いで部屋を出ていった…

「では神代、私達も一度帰宅する」

「キョウスケ君?ヴィータちゃん?今日1日安静にしていて下さいね?」

「……ではリインにさくら、キョウスケとヴィータの事、頼んだぞ?」

「うん！まかせて！！」

「リインにおまかせです！！」

シグナム達も帰っていった…まぁケガと言っても大事をとって一日入院だからな…

「じゃあリインちゃん、クロノ君からお見舞いで貰った果物でも切ろうか？」

…へぇ～、クロノがお見舞い持ってきたんだ…珍しい

「あ、でも果物ナイフがないです…」

「じゃあ…キッチンから借りてこようか？」

「はいです！」

「キョウ君、ヴィータちゃん！ちょっと待っててね？行こうリインちゃん」

「はーい♪」

―ガラッ

…ふぅ…さっきは賑やかだったのに…急に静かになったな～

「…き、恭介…」

「ん？何だヴィー…って！？な、何やってるんだ！？」

まともに動けない筈のヴィータが、何を思ったかベットから起きてフラつきながら僕のベットまで歩いてきた！？

「無茶すんなよヴィータ！？まだ体が動かないんだろ？」

「ち、ちょっと位なら大丈夫だ…そ、それより…／／」

そう言うとヴィータは先程までなのは達が持っていたプリンを手に取り…

「ほら…恭介…あ、アーン…／／」

って！？わざわざアーンする為に無茶したのか！？

「やっぱ…はやて達がやっている所見てんと…その…我慢できなくなってな…／／そ、そんな事よりホラ！！早く食べろよ！！」

まったく…ヴィータは…

「あ、ああ…じゃあ…あーん…」

―パクッ

―ガラッ！！

「「あああああーーー！！？」」

食べると同時に扉が開き…って病室なんだから静かに！

「ヴ、ヴィータちゃん…それは…リインがやりたかったですのに～～！！！」

「ヴィータちゃんもケガ人なんだから安静にしてないと！！というか、私もキョウ君にあーんってしたいのに～～～～！！」

…しっかし、何で皆はあーんがしたがるのかな？

「さくらお姉様！リイン、突貫します！！」

……へ？

「行くですよ？ダーリン！！」

そう言うリインは先端に果物が刺さったフォークを担ぎ…ってちょっと待て！？突貫ってまさか…

「とおりゃぁぁぁぁ！！」

やっぱし飛んで突っ込んで来たーーーーー！！？

―ガキン！！

な、何とか見切って歯でフォークを受け止める事に成功！！

「どうですかダーリン？おいしいですか？」

「ひ、ひぃんしゃん！！はふなひふぁらひゅっふひ…」

「…恭介…何言ってるかわからねーぞ？」

危ないからゆっくりって言ったんだぞ？

「あ、私も！！いっくよーキョウ君！！えーーい！！！」

だ、だから何でフォーク片手に突っ込んで来るんだ！？

―カツッ！

「ほえ！？」

さくらがつまずき…その勢いのまま僕に体当たり…え…　！？た、体当たり！！？

「ほえぇぇぇぇぇ！！？ど、どいてぇーーー！！？」

「「「む、無理ーーーー！！！？」」」

―ドカァ！！！

…結果…

「…様子見の入院だったのですが…これは1週間の入院ですね…一体何をやっていたのですか？」

「あははは…」

…僕とヴィータの入院期間が延びたのだった…

ちなみにこの後、病院の方で被害がでないようにと完全隔離をされて静かな1週間をおくったのだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

瞳の先に映るものは…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

キョウスケSide

「（キョウ君！！右に5体接近！！）」

「ああ！食らえ…メテオザッパーー！！！」

「「「「■■■■■■ッ！！」」」」」

―ドカァァァァ！！

「……ふぅ、これで最後か…」

「（お疲れ様、キョウ君）」

みなさんこんにちは　神代恭介です

今回はとある任務…ＦＡＩＴＨ本来の職務であるアインスト討伐の

為、無人世界に来ています

「（でも、折角今日はキョウ君達の中学校の入学式だったのに…）」

「ま、別にいいさ…入学式なんて転生前に経験済みだし…それに、それを言ったらなのはもそうだろ？」

「（う～ん…なのはちゃんも可愛そうだよ…もう！！管理局の人は何考えてるの！？）」

…ま、どうせ上は何も考えてないんじゃない？

…ん？読者の方には話しがイマイチ見えない？

そうだな…あれは数時間前…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――回想――

今日は僕らの中等部の入学式！

まぁ、僕にとっては2度目の中学生活が始まるんだが…

「…で、はやて…何で僕と腕を組んでいるんだ？」

はやてと家を出た途端に僕の腕を取り、それなりに発育した胸の谷間に…って!?

「もちろんキョウスケ君と腕を組みたいからに決まっとるやろ?」

だから何その【そこに山があるから登るんだ!!】的な理論!?

「それにキョウスケ君も気持ちええやろ♪」

…た、確かに腕に柔らかい感触が…って!?

「そ、そんなことナイジャナイデスカ／／!?」

「…なぁ~んで片言になっとるんやろ~なぁ~?」

…いや、もうホント勘弁して下さい…朝から理性がぁぁぁ…

『(…マスターの肉体年齢を考えれば…そろそろ思春期に突入ですね…クックック…)』

…あ、今何か無性にインフィニティを解体したくなったな…

「あ、なのはちゃん達や!なのはちゃーん!!フェイトちゃーん!!」

「「あ、おは…よ……」」

待ち合わせをしていたなのは達と合流し…ん?なのはとフェイトがこちらを向いてフリーズしているけど…??

「……ねぇ、はやてちゃん…朝っぱらから何してるのかなぁ…？」

「え？見ての通り、キョウスケ君に私の胸を堪能してもらってるんや♪」

ち…ちょ！？はやてさん！？何サラっと問題発言してるんですか！？

『（でも事実は間違ってませんよね？マスター？）』

…くっ！！反論出来ない自分が憎いィィ！！

「キョウスケ…その…私の方が…はやてより胸大きいから…言ってくれれば…その…ね？／／」

フェイトさん！？貴方もかなりの問題発言してませんか！？

「あー！！抜け駆けはズルイよフェイトちゃん！！私だってはやてちゃんよりは発育してるの！！」

…前々から思っていたんだが、僕の前でガールズトークするのは何故ですか！？

「…くっ！？わ、私かてまだまだ成長期なんや！！いずれは2人を追い抜いてやるで！！」

…いや、多分原作的に無理なんじゃあ…？

「…ナニカユウタカナ？キョウスケクン？」

「い、いえ!?いやだな～!何も言ってないヨ?はやて」

…あっぶねー!!危うく死亡フラグ立てる所だった…

「と、ところで…アリサとすずかはどうしたんだ?確か待ち合わせて行こうって言った張本人の筈なのに?」

何とか強引に話題を変えて、なのはに聞いてみると

「にゃはは…アリサちゃん達は…あ、来たみたい!」

なのはの視線の先には…黒い車体のリムジンが走って来た…つか無駄に長っ!?

「おはよー!なのは・フェイト・はやて…とついでにキョウスケも!」

…って僕はついでかい!?

「アリサちゃんったら…ごめんねみんな、遅くなっちゃって」

確かにアリサはともかく、すずかが時間に遅れるって珍しいな…

「アリサちゃんったら、髪型が上手くいかないって何度も直してたから…キョウスケ君に笑わ「ちょ!?すずか!?なななななに言ってるかなぁ!?」あ、アリサちゃん!?わ、解ったから頭!頭を揺らさないでーーぇ!!?」

何やら慌てたアリサが、すずかの頭を派手に揺らして脳みそシェイクしてますが…すずかの脳細胞が混ざるからやめてやれ…

「…ハァ…ハァ…と、所でキョウスケ！！何でアンタは、はやてとくっついてるのよ！？」

…あ、そーいやまだはやてに密着されてたんだっけ！？

「あ…いや、はやてが「キョウスケ君がおっぱい触りたい言うからこうしてくっついてるんよ♪」って！？何テキトーに捏造してるんだ！？はやて！！」

―プチッ！！

あ…何かキレた音が聞こえたよ…

「ぬぁぁぁんですってぇぇぇぇ！！！！」

…修羅だ！修羅神がいるよ！？

「「キョウスケ（君）！！私のも触って！！（なの）！」」

って！？2人とも！？何ブレザー脱いで迫って来てるんですか！？

「……ううっ…私はちょっと…まだ…くすん…」

すずかは何やら一人落ち込んでいるけど…今はこの危機的状況を何とかしないと！？

このままじゃご近所中に僕が変質者と認識されてしまう！？

と、考えていたその時！

―ピッピッピッピッ

『…マスター、ＦＡＩＴＨより緊急通信です！』

緊急通信？ま、まぁとりあえず助かった！！

「……チッ、仕事か」

…アリサさん…舌打ちは女性としてどうかと思うが…

―ピッピッピッピッ

「ふぇ！？私も！？」

…なのはのレイジングハートからも緊急通信の呼出しが…ま、とりあえず出るか

「はい、こちらアサルト１」

…ちなみにアサルト１はＦＡＩＴＨにおける僕のコールサインだったりする…ちなみにアサルト２はさくらだ…

［キョウスケ君！こちらスクルド！］

…いや、スクルドさん？サラっと真名バラしてません？

［…コホン！こちらレフィーナ！緊急事態よ！無人世界にアインスト反応が現れたわ！！］

…サラっと無かったようにスルー…ってアインスト!!?

「本当にアインストなんですか!?」

「ええ、識別はアインストクノッヘンが多数…今も数を増やしているわ!」

…クノッヘンか…下位クラスなら数は問題ないが…面倒だなぁ…

「分かりました。座標データをインフィニティに転送して下さい」

「了解よ!さくらちゃ…アサルト2は先行して現場に向かっているから合流して」

…クノッヘンなら、さくらだけでも十分対応できるからな~

「了解!」

さて…と

「キョウスケ君…アインストが現れたんか?」

「ん?ああ…」

「私も一緒に行こか?」

「大丈夫だよ、さくらも先行しているし…それにはやてはこれから入学式だろ?」

「それを言ったらキョウスケ君もそやろ？」

「ま、僕は正式な仕事だからね～　はやては気にせず学校に行ってほしいな～」

せっかく足が完治したんだし…はやてには今までの分を取り返すと言う意味で色んなイベント事には参加してほしいんだよな…

「…キョウスケ君…分かったけど、何かあったらすぐに呼んでな？超特急で駆け付けるで！！」

「フッ…その時は頼むよ」

「ッ／／！！？ま、まかしとき／／！！（キ、キョウスケ君…カッコエエ…／／）」

…ん？はやての顔が真っ赤だけど…風邪？

「……解りしました！すぐに現地に向かいます」

っと、なのはの方も仕事か？

「なのはも出動か？」

「うん、ヴィータちゃんと合流してロストロギア反応があった場所の調査を…」

…なのはさん？部署が違うのに任務内容を話していいのか？…ま、いいか…

それより…

「そっか…じゃあなのは、毎度の事だけどコレを忘れずに」

僕はなのはに液体の入った小瓶を渡した…中身は…

「にゃはは～ありがとうキョウスケ君♪」

「ねぇなのは、キョウスケから何貰ったの？」

「えっ？これはキョウスケ君特製の回復薬だよアリサちゃん♪」

「私らもキョウスケ君からはちょくちょく貰ってるで～　なぁフェイトちゃん？」

「うん…どんなケガも魔力も回復してくれるから助かってるんだよ」

…中身はラストエリクサーなんだけどね！

一応、皆にも何本か持たせているが…本命は、なのはの撃墜事件対策なんだよね～

…そもそもアレは、なのはの無茶なオーバーワークが原因だが…ラストエリクサーを飲んでいれば体力的には万全になるし、最悪エリクサーがあれば直ぐさま回復できるしな…

一応ヴィータにもそれとなくなのはの事は注意して見ていてくれと言ってあるが…（その際にヴィータに「何でだ！まさか浮気か！？」と問い詰められたが…ま、今度買い物に付き合うって事で納得して

くれたが…）幸い、それらしいイベントは発生せずにいるが…何とか回避できたのかなぁ？

「ふぅん…相変わらずの過保護っぷりね～…（いいなぁ…なのは達魔導師組は…私も…魔法が使えれば…キョウスケも…）」

…ん？

「どうしたアリサ？何か暗い顔をして…」

「なっ！？何でもないわよ！！アンタこれから仕事なんでしょ！？早く行きなさいよ！！」

「あ、ああ…じゃあはやて・フェイト・すずか、行ってくるよ」

「気をつけてな？」

「行ってらっしゃい　キョウスケ」

「無理はしないでね？キョウスケ君」

「にゃああ！！？ま、待ってよ～キョウスケ君！！途中まで一緒に行こうよ～～～！！」

――――回想終了――――

と、まぁそんな感じで後はさくらと合流・ユニゾンして、アインストの群れを討伐したのだが…

『ッ!?マスター!!前方に空間の歪みが!!』

ええぇ…まだアインストが出て来るの!?

―ザザッ―ザッ

「（キョウ君!!ヴィータちゃんから通信が!!）」

ヴィータから?何だろう?

「…どうしたヴィータ?」

『恭……大……なの……赤……!!』

…通信状況が悪い?

《キョウスケ…どうやらこの辺り一帯の空間が歪んで通信機能が正常に働かないみたいです》

「リインフォース、原因は解るか?」

《…いえ…ッ!!キョウスケ!!前方の歪みから魔力反応が!!パターンからアインストと思われますが…未確認の反応です!」

…未確認…アインストアイゼンか!?

―グォォォォォ…

『マスター…来ます！！』

そして空間から現れたのは…

「……なるほど、レジセイアモドキも現れたんだから…アレも現れる可能性もあった訳か…」

現れた者…それは真っ赤な鎧に身を包み、その両肩には特徴的な鬼の面を携えた…

「……ペルゼイン・リヒカイト…か」

…僕の中学生活は、この波瀾から幕開けしたのだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

変化する未来

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

中学生活が始まろうとした矢先、任務で管理外世界に発生したアインストを討伐に来た僕達…

そこに突如として現れた者は…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

ペルゼイン・リヒカイト…

いや、アインストが現れている時点で予感がなかった訳じゃないが…

「（キ、キョウ君!?あれってまさか…）」

「…ああ、上位クラスの相手だな…」

…ん？でも何か違和感が…？

「……」

「……ん？」

…しかも一行に動く気配がない？

『…動きませんね？』

「…でかい図体で動けないとか？」

いや、まさかそれはないよな～

《（…でかい？キョウスケ、相手はキョウスケと同じ位ですが？）》

そっか～、僕と同じ位ならけっこうな大き…って！？

「えええっ！？」

改めて見ると…あ、ホントだ！　実物大じゃないんだ…

「……キョウスケ…見つけましたの…」

ッ！？ペルゼインから声が！？

「（キョウ君！？今の声ってあの赤い人から！？）」

…どうやらサイズ的には多少の違いはあるが…意思はあるようだな…

…ん？ちょっと待て！？

今の声って…ケロリｎ…じゃなく！水谷ボイスじゃなかったような…

『（また一部にしか分からないネタを…）』

…インフィはスルーして…

『ちょ！？またスルーですか！？』

…ゴホン！

しかし、あのペルゼインから聞こえた声…どこかで聞いたような…

ああ！！思い出せない！？

「…キョウスケ…私の…気になる人…ようやく見つけましたの…」

またペルゼインから声が…って何！？

いやいやいや！？少なくても初対面ですよね！？

「（…キョウ君…また何処でフラグを…）」

《（…一体いくつ立てれば…）》

『…と言うかアインスト相手にフラグですか…もはや何でもありですか？』

だ、だから知らないって！？

「おい！？そこの機体！！変な事言うな！！てか初対面だろ！！？つーか何者だ！？」

「…ああ、この姿じゃ分からないですのね…今、バリアジャケットを解除しますの」

…つかそれバリアジャケットだったのかよ！？

「はい、全身装甲（フルスキン）型ですのよ？」

…しかも何気に心読むし！？

―ピカッ！！

ペルゼインから光が溢れ、その光の中から現れた姿は…

「…えっ…？」

僕の予想をとは違い…水色の髪はそのままだが、その顔立ちは紛れも無く…

「……ティア…ナ…？」

年齢的に僕と同じ位の姿をしたティアナ・ランスターがいた…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――管理外世界――

ヴィータSide

クソ！クソッ！！クソッ！！！クソッ！！！！

何で…何でこんな事になっちまったんだっ！！！

「……から……だい……じょうぶ…」

私の腕の中で…白のバリアジャケットを血で真っ赤に染めたなのはが…ッ！！

「しっかりしろ！！なのは！！」

「…ゴメン……ヴィータ…ちゃん…油断…しちゃった……ゴホッ！！」

「なのはッ！！」

ちきしょう…あのお面ヤロー！！！

クソッ！恭介に貰った薬が残ってれば…！！

恭介ならこんなケガ直ぐさま治すのに…私は…何で無力なんだ…

「医療班っ!!何やってんだよッ!!早くしてくれよ!!じゃねーとコイツが…!!」

…ちきしょう…恭介との念話も急に切れちまうし……念話?まてよ?前に恭介が…

――――回想――――

――――八神家――――

「……っと送信と」

「??なぁ恭介、はやての仮契約カードで何してんだ?」

「ん?ああ、これははやてにメールを送ってるんだよ」

「メール?はやてだったらキッチンに居るじゃねーか?」

「…ああ、これは平行世界のはやてに送ったんだよ」

「平行世界って…前に高町なのはと行ったっていう…」

―ガチャ!

「そ、そうだけど…ヴィータ?何でアイゼンを構えてるんだ?」

「いや、何となく高町なのはって聞いてイラッとしたからだ　気にすんな」

「気にすんな…って、あきらかにソレを振り下ろそうとしていた人に言われても…」

「ま、それよか何でメールなんだ?カードの通信機能使えばメールなんてまどろっこしい事しないで直に話せんじゃ…ま、まさか!?向こうのはやてにエロ写メくれとか言ってたのか!?」

「いやいやいや!?違うから!?違うからアイゼンをラケーテンに変形させないで!!?」

「じゃあ…何でなんだ?」

「この仮契約カードの通信機能は世界の壁を越える程強力なんだけど…さすがに通話は難しいんだよ…まぁ平行世界とかとんでもない場所じゃなければ、何処に居ようが通話妨害とか圏外とかなく通話可能なんだけどね」

「ふぅん…まぁ私らには念話があんだしあんま使わねー機能かもな」

「まぁ…それを言ったら身も蓋も無いけどね」

「キョウスケ君~ヴィータ~ご飯やで~」

「お、じゃあ行こうか?」

「おう!ご飯♪ご飯♪」

――――回想終了――――

…仮契約カードの機能ならもしかして…

「恭介っ！！聞こえるか！！恭介！！頼む！応答してくれ！！」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「…な、何でティアナが…」

「（キョウ君…あの子って…確か原作キャラの…）」

「…ああ、ティアナ・ランスター…だけど、彼女はまだこの時間系列では出てこない…というか年齢的に僕と同じなんで有り得ない…」

ティアナは僕よりは年下になるなら…今、僕の前に居るティアナの姿は…それにあの髪の色…どうなってるんだ！？

「…ふふふ…キョウスケ…そんなに見つめられると…テレますの／／」

…って何赤くなってんすか!?

「（…キョウ君…とても初対面には見えない反応なんだけど…身に覚えないのかなぁ？）」

いや!?マジで無いって!!

「…キョウスケ…今日はご挨拶にまいりましたの…やっと動けるようになりましたので…」

「…とりあえず君の名前とか聞かせてくれるのかな？」

何にせよ、情報は手に入れないと…

「…忘れてしまったのですか？…ああ、こちらが忘れてましたの…今はこちら側で私の基となった人の姿でしたの…私はアルフェミィと申しますですのよ…」

…やはりアルフェミィ…しかし、何か前から僕の事を知ってる口ぶり…

…ん？ちょっと待て!?

今、何かとんでもない事をサラっと言ってなかったか!?

たしか……今の姿は…こちら側の基になっ…た…って!?

…確かゲームのアルフェミィは…エクセレンの…ま、まさか…

「……アルフェミィ…ティアナに何をした？」

まさか…ティアナの身に…

「…ふふふ、それは秘密ですことよ？キョウスケ…」

…そうそう切り札は切らない…か

「…あくまでだんまりか…なら…力ずくで聞き出すだけだ！！インフィニティ！！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

―ドキュ！！

僕はカードリッジを使い臨戦体制に！

「あら…短気は損気ですのよ？」

「言ってろ！」

アルフェミィの動きを注意しつつ、インフィニティを構え何時でも仕掛けられるようにしていると…

「ふふふ…でも残念ながら今の私は動く事が精一杯…出来る事は不意打ち位ですの…」

…ブラフか？油断させようと？

「…不意打ちを喰らう程油断しないさ…」

「…ふふ、そうですの…先程の魔導師とは違い、スキがないですの…流石キョウスケ…」

「先程？…どういう意味だ？」

「フフフ…こういう意味ですのよ？」

―カチャ

アルフェミィがそう言うと手にした血に染まった刀を構えて…血！？誰か襲われたのか！！？

［恭介っ！！聞こえるか！！恭介！！頼む！応答してくれ！！］

ヴィータからの通信！？それにこれは…かなり慌てているけど？

「（…ヴィータ、どうした？）」

［キョウスケ！？繋がった！！た、大変なんだ！！なのはが！なのはがッ！！］

「（…落ち着けヴィータ！！なのはがどうしたんだ？）」

［なのはが…大怪我しちまった！！］

…ッ！！まさかそれって…原作のアレか！？回避は無理だったか…

「（落ち着け、万が一にって渡してあったラストエリクサーを使えば大丈夫だから）」

…とはいえ、万が一がホントになるとは…

［（そ、それがよ…なのはのやつ、先発隊と合流した時に見かけた重傷者に全部使っちまって…）］

…え〝

［なのはの奴…自分は大丈夫とかいいながら使っちまって…その後遺跡を調査してたら変なアンノウンが出て来て、何とかそいつらは全部ブッ潰したんだけど…その後に現れたお面ヤローが…なのはの背後に急に現れて…なのはが…ヤツの刀に切られちまった…すまねぇ恭介…護れなかった…］

…何だって…？

「…ヴィータ、お面ヤローって…両肩に般若の面がある赤い姿をした奴か？」

［あ、ああ…って何で恭介が知ってんだ!？］

「…インフィニティ」

『はい…スキャンした結果…あの刀に付着した血のＤＮＡパターンが…なのは嬢と一致しました…』

…ッ！！嫌な予感が的中しちまったな…

「…アルフェミィ…貴様…なのはを…」

「…なのは?…ああ、あの魔導師の事ですか?お仕事のジャマでしたのでご退場願いましたの…」

…じゃあ何か?アンノウン（ガジェット）に襲われ大怪我するイベントは回避できたが、イレギュラーな介入…アルフェミィに襲われたって事か!?

「ッ!?恭介!!なのはがまた血を!!」

くっ…現状はアルフェミィよりなのはの治療を優先しないと…その前に…

「…アルフェミィ!!お前の目的は何だ!!?」

「……ふふふ…それは……残念ながらクライアントから早く帰還するように言われましたの…早く手に入れた品が見たいそうですの…」

「クライアントだと!?」

アインストが雇われてるとでも言うのか!?

「はいですの…名残惜しいですけど…これで失礼しますの…」

「（キョウ君!!また空間に歪みが!!）」

アルフェミィの姿が歪みの中に消え…

「…そうそう…キョウスケ…これから末永いお付き合いになりそうですの…ごきげんよう…ですの」

―ブォン！！

アルフェミィは謎の言葉を残し消えていった…結局収穫はなし…いや…カギはティアナか…

『マスター！！今は早くなのは嬢の所に！！』

「っと、そうだ！急がないと！！さくら！！ヴィータのカードの位置を特定して転移を！！」

「（もうやってるよ！！…見つけた！！キョウ君！！）」

「サポートは任せる！！…ん！！」

―シュン！！

そして僕はなのは達の所に向かったのだった…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――??????――――

「ただ今帰りましたの…」

「やぁ、アルフェミィ　ご苦労様…早速で悪いんだけど…」

「はいですの…ご要望の【レリック】ですの…」

「流石だねぇ…しかし、出来れば寄り道はしないでほしかったのだがね…」

「探していた人がいましたので…」

「…まぁ、君達アインストには世話になっているからね　その位は大目に見よう」

「それはこちらも同じですのよ…大破したペルゼインのデバイス化…助かりましたの…」

「いやいや、こちらも未知の技術に触れられたのだしね…尤も、私めまだ完全に把握できていないがね…実に面白い」

「……それではまた何かありましたら…」

「ああ、また頼むよアルフェミィ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――？？？――――

「――――――」

「はいですの…多少のイレギュラーはありましたが概ね順調ですの…」

「――――――」

「はい…完全覚醒にはまだまだ時がかかりますの…」

「――――――！」

「…大丈夫ですの…アレが手に入れば…」

「――――――？」

「白き魔星…それに匹敵する力は確実に…」

「――――――」

「はいですの…ですので今は力を蓄える時期ですの…」

「――――――」

「…はい、必ず…静寂な世界を…」

折れた翼…は意外に頑丈！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

…あの後、ヴィータの元に駆け付けた時…

「恭介…すまねぇ…私は…私は…」

ヴィータは泣きながら何度も謝って…

なのはは…真っ白なバリアジャケットが…見るも無残に切り裂かれ、真っ赤に染めていた…

何とか僕が【フルケア】と手持ちのエリクサーで何とか傷や魔力は回復させたが…流石に失った血まではどうにもできず、急いで病院に運んだのだった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――病院――

なのはを搬送した後、僕とヴィータは待合室でなのはの処置や検査が終わるのを待っているのだが…

「……」

「……」

…く、空気が重い！？

「……私のせいだ…」

…ん？

「私が…油断しなければ…なのはがあんな目に遭うことはなかったんだ…全部…私の…」

……ヴィータ…

―スッ

ヴィータの手に僕の手を重ね…

「…そんな事ないよ…ヴィータはしっかりやってくれたよ…」

「…でも！！でもよ！！？」

「…それになのはだってそんな風に思ってないと思うよ？逆に「私のせいで心配かけてごめんなさい」って言いそうだし」

…普段はアレだが…根は優しい子…の筈？

「……何か今、自信なさ気に言ってなかったか？」

「い、いやぁ…あはは～…」

相変わらず鋭いな～…と考えていると、

―タッタッタッタッ

「キョウスケ！！」

「ヴィータ！！」

フェイトとはやてが息を切らしながら走って来た

「はぁ…はぁ…キ、キョウスケ！！なのはが大怪我して入院したって聞いたんだけど…なのはの…なのは容体はどうなの！？」

「そ、そうや！！聞いた話しやと…両手両足をポッキリ骨折して、苦しくてうずくまっとる所に横綱がドスンとのしかかる位な酷いケガやって…」

…はやてさん？何そのＹＯＫＯＳＨＩＭＡ的な例え？

「えっ！？ちがうんか？エイミィさんがそう言うとったから…」

あの人は…何がしたいんだ！？

「あ～…、とりあえず命に別状はないからそこは安心してくれ」

「ほ、ホント!?ホントにホントだよね!?」

とりあえず落ち着こうか…フェイトさん?

「ああ…今は処置や検査を…って、どうやら終わったみたいだな」

気付くと処置中のランプが消えていた

―プシュ

すると、中から先生が出てきた

「あ、先生…なのはの容態はどうですか?」

「ええ…内蔵器官もリンカーコアも無事で、傷も綺麗に消えています
今は輸血して落ち着いています…とりあえず様子を見ましょうか」

「そうですか…後遺症とかの心配は?」

「その可能性はないでしょう…
ここに運ばれる時には既に傷は完治に近かったですから…いやはや、
まさか噂の回復薬は本当にあったんですなぁ」

…噂の?って何?

「おや?ご存知ないのですか?　神代さんは、あきらかに医者にケ
ンカ売っているって程に強力かつ非常識な回復薬を持っている…と」

…ま、まぁ…間違ってないなら反応に困るが…

「あはは…ま、まぁそれはＦＡＩＴＨの機密事項って事で…」

…実は医療機関から何度も問い合わせがあったらしいんだが…本来この世界にないマジックアイテムを一般的に公表するのは…という理由でレフィーナさんが断ったらしいのだが…これでフェニックスの尾なんて出したら…完全にロストロギアになりそうだな…

「それにしても…なのはちゃんが無事でなりよりや」

「うん…でね…キョウスケ、何でキョウスケはヴィータの手を握ってるのかなぁ…？」

えっ！？…あっ！！さっきヴィータを慰めてた時に…ッ！？殺気！！？

―ザンッ！！

「ってフェイト！！？何いきなりバルデッシュで切り掛かってくるんだ！？」

「もちろん…繋いだ手を離させる為だよ…フフ」

「だったら口で言え！！あぶねーだろ！！」

まったく…とヴィータと繋いだ手を離すと…

「……ぁ」

「ん？どうしたヴィータ？」

「い、いや…何でもねぇ…」

何かヴィータは繋いでいた手をじっと見つめているけど…

あっ！！もしかして僕の汗がヴィータの手に付いちゃった！？

《……ハァ》

って何でそこでため息するかなぁ？インフィは

「ねぇキョウスケ…なのはを襲ったアンノウンってキョウスケの所にも現れたんだよね？何か分からないかな？」

やっぱり気になるのかな？

「えっと…あの赤いお面…どうやら新種のアインストみたいなんだ」

「なっ！？あいつもアインストなのか！？にしちゃ…なんつうか…意思みたいなのを感じたんだけどよ…」

…ヴィータさん、鋭いですね～

中にはアルフェミィが居たから…しかもティアナ似の…

「フェイト、この事件はアインストが関わってるからＦＡＩＴＨの担当になると思うから…」

基本ＦＡＩＴＨの仕事は、こちらから協力要請しない限り他の部署は不可侵って事になってるからな～

しかも今回はティアナ似ってのが後々の事を考えると…下手したらティアナ本人が拘束されかねないし…

…そーいや、さくらとリインフォースにティアナの資料を出来るだけ集めるように頼んだんだけど…そろそろ集まったかな？

「うぅ…確かにアインストに関しては専門機関のＦＡＩＴＨに一任って事になってるけど…私…私達だって何か出来る筈だよ？」

「そうだ！！それにあのヤローに１発食らわせねーと気が済まねーッ！！」

…まぁ、やっぱこうゆう反応するよな～

「ま、まぁ…とりあえず今解っているのは、あの赤いのが新たなアインストだって位で…まだ詳しい事は解らないんだよ…情報がなくちゃまだ動けないだろ？」

「だったら！私も調べ「はい、ストップ」ってな、何？キョウスケ？」

「フェイト…近々執務官試験あるんだろ？」

「えぇ！？な、何で知ってるの！！？」

原作知識です…とは言えないしな…

「そりゃ前からフェイトが執務官目指してるって聞いたからね」

「そ…そっか…／／覚えててくれたんだ…／／」

…フェイトは、なのは撃墜のショックや不安が原因…？の一端で２回落ちていたけど……今回、なのはは軽傷（刀で切られるのが軽傷かは微妙だが）で済んだから精神的には大丈夫…だよな？

「フェイトは今、大事な時期なんだから…そっちに集中しないとなのはに自分のせいで試験落ちたって思わせたくないだろ？」

「う、うん…分かった」

…こう言っておけば落ちる心配はないと思うが…いや、フェイトは成績優秀だし大丈夫！！…天然だけど…

「うーん…せやけど何でアインストはなのはちゃんを襲ったんやろ？」

…そういやアルフェミィは仕事の邪魔だったって言っていたけど…

「…そーいやヴィータ、確か遺跡内にロストロギア反応があったから調査に向かったんだよな？」

「ん…ああ、そうだけどよ…」

「…ちなみにロストロギアって…どんなのだったんだ？」

「……あ」

ちょ！？何！？その【あ】って！？

「…ヴィータ？まさかとは思うんやけど…忘れとった？」

「……ごめん、はやて」

マジすか～…まぁそれ所じゃなかったし…

「…確か、その遺跡からはもうロストロギア反応は無かったってクロノから聞いたけど…」

「状況から判断して…そのアインストが遺跡にあったロストロギアを回収しに来たらヴィータ達が居て、邪魔だったから襲った…っていうのが妥当かな…しかしどんなロストロギアか解らないのは痛いな…」

ロストロギアって言っても、おマヌケアイテム～世界崩壊レベルのアイテムまであるし…

「…それにょ、あのアインストが現れる前に現れたアンノウンは何だったんだ？明らかにアインストとは別系統だったしょ…」

「それはこっちで調査してるってクロノが言ってたよ？…残骸が粉々で苦労するって言ってもいたけどね」

「うぅ…度々すまねぇ…」

「ま、まぁ…とりあえず現状は手掛かりなし…か」

…ティアナっていうファクター以外は

「さて、と…」

「キョウスケ君？どこ行くんや？」

「えっ？とりあえずなのはのお見舞いの品でも買ってこようかと」

ついでに今回の件について神様に色々と聞かないとな…流石に何か知ってるだろうし

「あ～…私らも何か持ってきた方がええのかな？」

「…急いで来たから何も持ってきてないよね…」

「…私も何も無ぇ…」

「あはは、じゃあ皆の分も一緒って事にしておくよ」

…ま、無難に果物詰め合わせでいいかな？

「あはは…おおきにな～キョウスケ君」

「ありがとうキョウスケ」

「あ～…なんか悪ぃな恭介…」

「ん…まぁ気にしなくていいよ　じゃ（キョウ君！！キョウ君！！）…ん？？」

さくらからの…念話？

「（さくら？どうした？）」

（ティアナちゃんの事で分かった事があるの！！それにあのティアナちゃん似のアルフェミィが何でキョウ君の事を知っていたかも！！）

…何か一気に謎が解明された！？

（まったくもうッ！！何でこの人は…）

何だか…さくら怒ってる？

「（で、今どこに居るんだ？）」

（今神様の所だよ　…今なのはちゃん式ＯＨＡＮＡＳＨＩ中だけど…）

…あ～…それってやっぱり今回の件に関して、おもいっきり神様絡んでるって事ですね…

ま、元々アインスト事件は神様がミスったのが原因だし…でも何でアルフェミィが僕の事を探していたんだろ？　キョウスケ繋がり？？

「…くん！…キョ…ん！！……キョースケくーーん！！！」

「うわっ！？な、なんだはやて？急に大声出して！？」

「急やないで？さっきっから呼んどったのに…どないしたん？」

「あ、いや…何でもないよ？」

「ならええんやけど…」

「じ、じゃあはやて、後はよろしくね？」

「うん…気ぃつけてな？」

はやては心配性だな～…　さて、僕も神様にＯＨＡＮＡＳＨＩしないとな…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

1番のトラブルメーカーってコイツじゃね？ｂｙキョウスケ（前書き）

あるぇ？　シリアス風に書いていたのに…？？

1番のトラブルメーカーってコイツじゃね？ｂｙキョウスケ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

さて、さくらからの連絡でティアナとアルフェミィについて何か解ったと連絡があり神様が居る…まぁＦＡＩＴＨの部署なんだけど…その部屋の扉を開けると…

―プシュ

…うん、僕は何も見なかった…

―プシュ

「キョウ君？どうしたの？急に出ていっちゃって…」

さくらが部屋から出て来たけど…だって…ねぇ？

「あ～…さくらさん？中で何をしていらっしゃるのでしょうか？」

「えっ？神様とＯＨＡＮＡＳＨＩだよ？」

…アレが？

それもその筈！！

…だって僕が部屋の中で見た物は…

「ぬおおお！！？いだだだだだ！！痛い痛い痛いーーーッ！！」

…三角型のギザギサの板の上に正座させられ、膝の上に石畳を何枚も乗せられた神様がいましたよ…

「あれは石抱きって言う江戸時代にあったＯＨＡＮＡＳＨＩ方法なんだよ？」

…何だか妙にシックリして納得してしまう自分が居るんですが…

と言うか、明らかに拷問だよね！？

「一部ではそうとも言うみたいだね♪」

心読まれた！？つか、爽やかな笑顔で肯定したよ！？

「あ、キョウスケ君！！」

しかも中に居たスクル…この場ではレフィーナさんか…がにこやかに石畳を積み上げながらこちらに話しかけたよ…

「…とりあえず…何があったのでしょうか？」

「ちょ！？儂のことはスルー！？」

「…神様？少し黙ってて下さいね♪」

―ドスン！

「ぐふぬぉぉぉぉ！？！？」

レフィーナさん…楽しそうに石畳を更に追加したよ…ありゃ３０キロあるんじゃ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「コホン…キョウスケ君、アルフェミィについてなんですが…まず、何でキョウスケ君の事を知っていたか…それは実はこの事が原因なんです…」

そう言いながらレフィーナさんが僕に見せたのは…

「これって…スーパーロボット大戦ＯＧのソフト…ですよね？」

アインスト発生の原因となったゲーム…と何かもう一つあるけど？

「…アクションリプレイ集（神Ｖｅｒ）？？」

アクションリプレイ集ってアレだよね？経験値とかお金をＭＡＸとか出来るゲームの改造ツール…まぁ僕は前世でも使った事はないけど…

「実はこの神様…この改造ツールを使って…主人公をキョウスケ君

に書き換えていたんですよ！」

……はい？

「…えっと…状況が飲み込めないんですが？」

「まぁ論より証拠…さくらちゃん！セッティングは出来ましたか？」

「はーい！ＰＳ２接続出来ました～！！」

さくら…いつの間に！？

「後はこのメモリーカードを…っと！じゃあスタート！！」

レフィーナさんが持っていたゲーム機と改造ツールをセットして起動！

「…後はＯＰＴＩＯＮ画面で…キャラクター図鑑…キョウスケ・ナンブをクリックすると…ホラッ！！」

「……はぁ！？」

驚くのも当然だ！！

だって…キャラクター図鑑に載っていたがメッシュ入りの男性キャラ、キョウスケ・ナンブではなく…

「な、何で僕に変わってるんですか！？」

…うん、どっからどう見ても僕だよね…

「…カミサマ？ドウイウコトデショウ？」

「あ、あのじゃな…改造ツールで数値を弄ぶついでに…キャラクターもお主に変えた方が面白「…レフィーナさん、石…追加…」ま、待つんじゃ！？話せば分か…ぐぎぁぁあぁぁぁあ！！！！」

じゃあ何か！？話しをまとめると…

神様が改造ツールでキョウスケ・ナンブを神代恭介に変更した為にゲーム内ではアルフェミィは変更後の僕を【キョウスケ】と認識…で、更にそのままデータ流出でリリなのの世界に具現化して今に至る…ってありえねぇ…ｏｒｚ

「ごめんなさいキョウスケ君…秘書としてもっとしっかり監視していれば…」

「あ～…いえ、悪いのは改造に手を出したアレですから…」

「ま、待つんじゃ！？改造は仕方なかったんじゃ！！！忙しい大人には経験値稼ぎや資金稼ぎの時間がないんじゃ！！だから改造ツールに頼るし「…さくら、更に石追加！！」「はーい♪」ぬぐぎぁぁあああああああ！！！！？」

大体誰のせいで、この世界が現在進行系でピンチになってるんだ！！？

―プシュ

「キョウスケ…ここに居まし…何ですか？この状況は？」

「あ、リインフォース？」

神様とＯＨＡＮＡＳＨＩしていたら、リインフォースが部屋に入って…って！？

「ちょ！？リインフォース！！？何フツーに実体化してんだ！？」

リインフォースは公式上は消えた事になってるんだから…誰かに見られたらマズイだろ！？

「大丈夫ですよキョウスケ…妹のリインに見習い【ステルスモード】を展開していますから」

リインフォース…いつの間にそんな事が出来るように！？

「それでキョウスケ…頼まれたティアナ・ランスターにおける資料なのですが…」

リインフォースの手には【マル秘】とかかれた封筒が…ん？何やらリインフォースがそわそわしているような…？

「どれどれ…」

「……」

僕はリインフォースから資料を受け取り、読み進めていくと……え！？

「…次元船大破事件…原因不明…生存者１名…ティアナ・ランスター！？」

何この原作に無かったイベントは!?

「キョウスケ君…実はその事故…私たちの見解ではアインストが関わっているのではないかと推測しているんですよ」

「えっ!?レフィーナさん?それって…前から知っていたんですか!?」

「ええ…実はキョウスケ君があの闇の書のアインストと戦った後に起こっているの…」

戦った後って…僕が逃がした後か…

「…全ては私のせいです…」

あ～…もしかして、自分のせいだと思ってさっきから落ち着きがなかったのか…

「いや、リインフォースのせいじゃないよ…
でも…レフィーナさん?これだけじゃ…その事故＝アインスト関係って結び付けるのは早計じゃ…」

いくらこの小説がご都合主義とはいえ…

「…しかもその事故で救出されたティアナさんは…大事故だったのにケガはおろか衣服にも焦げ目一つなく発見されたらしいの…」

…うわぁ…そりゃエクセ姉様まんまだな…ゲーム知っている人ならすぐ結び付ける内容だ…

「それと…これは発表されてないのですが…当時その事故についてティアナさんに事情聴取をした局員が…行方不明になっているんです…」

「行方…不明？というかティアナに事情聴取ですか？」

…なんで？

「当時はティアナさんに爆破テロの容疑は掛かり…その局員が取り調べを担当したのですが…

どうやら子供相手に行き過ぎた取り調べをしていたらしく…その時は駆け付けた彼女の兄…ティーダ・ランスターがその局員ともみ合いになり…まぁ何とか事なきを得たのですが…その数日後、取り調べをした局員が行方不明になっていたんです…」

…うん、ティーダさんの暴走っぷりが目に浮かぶよ…

「…表向きには、その行き過ぎた取り調べがバレ、立場を悪くしたのが原因で姿を消した…という事になっているのですが…」

ん？…何か歯切れが悪いような…？

「…何か、あったんですか？」

「ええ…彼との連絡がつかなくなって、局員が彼の部屋を訪れたんですが…部屋の中で局員が目にしたのは…

部屋ビッシリに埋め尽くされた植物のツタと…

部屋の真ん中に存在した不気味に光る紅い珠だったんです…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「続きはワシが説明しよう…」

あ、神様…復活したんた？

「いつまでもギャグキャラではおれんからのぉ…」

…いや、そう言っている時点でギャグキャラでは？

「ゴホン！！勿論儂らはその後、その部屋のツタやら珠を調べたのじゃが…」

あ、珍しく真面目な顔付きに…

「それで…何か解ったんですか？」

「…うむ、ツタの方はアインストと酷似しとった…」

…マジか…

「それと紅い珠の方じゃが…」

…嫌な予感しかしないんだけど…

「…紅い珠の方にはリンカーコアの反応があったんじゃよ…その行方不明の局員と同一のがのぉ…」

ハァ…やっぱり…嫌な予感的中か…

紅い珠にリンカーコア反応…しかも局員と同じ…それから導き出される答えは…

「キョウスケ…それはもしかして…」

先程まで黙って聞いていたリインフォース…まぁそこまで言われれば流石に予想はつ…

「ううぅぅ…ね、ねぇキョウ君…複雑過ぎて話しがよく解らないんだけど…」

…あ、予感がつかなかった子がココにいたわ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「ほえぇぇぇぇぇ！！？じ、じゃあ…その人がそうなっちゃったの！？」

何とかさくらに親切丁寧に説明した結果…何とか理解してくれた

「キョウ君…それって…ティアナちゃんがやったの？」

そこが問題なんだよな…

「確かに…アインストについてある程度知っている僕らから見れば…つじつまは合うんだけど…
実際問題どうなんですか？レフィーナさん？」

「…少なくてもティアナさんとアインストに何かしらの接触はあったと思います…でなければアルフェミィがあそこまでティアナさんに似ているなんてありえませんし…」

だよなぁ…

「儂も彼女の事は気にかけておるんじゃ…もし本当にアインストに何かされておったら…儂らの責任じゃ…」

そうだよな…んん！？僕等の…？

「「「いや、アンタだけの責任だろ（です）（だよ）！！」」」

何シリアスな空気で責任を分散させようとしてんだ！？

「そ、そこはスルーしていいんじゃないかのぉ…」

何か言っているみたいだけど無視無視！！

「ティアナさんを調べようにも…彼女はまだ一般人…いきなり管理局が【貴女の身体を調べさせてくれ】って言う訳にもいかないですし…」

それって、聞きようによってはアブナイ発言だよな…

「そこでじゃ！！」

…あ、もう復活したのか…タフだな～

「…儂、泣いていいかのぉ…」

…あ～　ハイハイ話し進まないから続けてくれ…

「激しくバカにされておるような…
とにかくじゃ！現状は彼女は一般人…じゃが後数年で彼女は少なくとも訓練校に入る筈じゃ！！」

まぁ…原作どうりなら、だけどな～…しっかし、言い方変えれば中学生で警察学校に入るって…つくづく異常だな…

「そこでじゃ！！そこで行われるであろう身体測定で彼女の身体データを入手するのじゃ！！どうじゃ？完璧じゃろう？」

「「「「……」」」」

…僕を含め、レフィーナさん・さくら・リインフォースも開いた口が塞がらないというか…

「…いや、それ多分普通に犯罪じゃね？というか性犯罪に入りそうな…」

「ふぉ！？な、何故そうなるんじゃ！？」

気付いてないのかい！？

「キョウ君…やっぱり石、たくさん乗せた方がいいかな？」

「…そうですね、さくら…私もお手伝いします…」

「…自分の上司が…ロ…ロ…ロリコンだったなんて…」

「ま、待つんじゃ！？儂は決してそのような…」

「「「問答無用です！！！この女の敵！！！」」」

…その後、この部屋に神様の悲鳴が響きわたったそうな…

…あ、ちゃんと防音しないとな～

《マスターも何気に酷いですねぇ…》

…インフィ君？君もあのカオスの中に入りたいのかい？

《すっ、すみませんでしたあああああああ！！！！！！！そ、それだけは許してくださいいいいい！！！！！！》

分かればいいのだよ…フッフッフ

《（マ、マスター…何て恐ろしい御人なんだ……）》

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！！わ、ワシが悪かったーーー！！！だ、だから…そ、それだけは…ぐぶぁは！？」

あ、防音♪防音♪

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

病院では静かにしようね♪　ｂｙさくら（前書き）

今回はとある作品からゲストが登場しています（笑）

病院では静かにしようね♪　ｂｙさくら

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

あ、何かこれ久しぶりだな～

「キョウ君キョウ君、それより早くあらすじを…（コソッ）」

ああ、そうだった！

え～っと…確かロリコンという名の犯罪者を捕まえたんだっけ？

「うん、そうだよ！　これで全国の小学生の女の子は安心だね♪」

ああ、これで「わ、儂は無実じゃあああああ！！！べ、弁護士ををををを！！！」…まだ居たか性犯罪者…

「うわぁ…」

さくらもドン引きで見てるよ…

神様？僕が付き添ってあげるから警察に行こうか？

「な、何でこーゆー時だけ優しいんぢゃあああ！！？」

《…キョウスケ　さくら…話しが進みませんから犯罪者は放っておきましょう》

ん…ま、そだな～

「…儂…何かしたか？」

「「「そりゃ色々と！！！」」」

「くっ…当たっているだけに何も言えん…じゃが弁護士は呼んでくれいいいっ！！！」

《…はぁ、とりあえずみなさんは本編どうぞ…》

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

神様とＯＨＡ…相談した結果、しばらくティアナはレフィーナさんの使い魔を使って護衛兼監視という事に落ち着いた…

…ただ…レフィーナさんが…

「キョウスケ君は確か年齢を任意で変化させられるんですよね？
まぁ…3歳位なら見た目は変わらないですから大した問題ないですよね？」

…と言う、フラグ感満載の台詞を残していたような…うん、聞かなかった事にしよう…

「あ、お待たせキョウ君！
頼まれたなのはちゃんのお見舞いの品、買ってきたよ～」

「お、サンキューさくら」

さくらにお見舞い用の果物詰め合わせや菓子折りｅｔｃ…はやて達の分も買ってきてもらい再びなのはの病室へ向かい…

「なのはちゃん、大丈夫だよね？」

「ん？まぁ原作よりは酷くはないから…」

と、さくらと談笑しながら病室に向かうと…

「あれ？はやて達…？」

なのはの病室のドアの前にはやて達が立っている？

「あ、おかえりキョウスケ君」

「ああ、ただいま…で、何で皆は中に入らないんだ？」

別に面会謝絶ではないんだが…

「あのねキョウスケ…今なのはのご家族が来て…」

……へ？

「フ、フェイトさん？今…戦闘民族高町家御一行が来てるって言ったの？」

「えっ！？戦闘民族って…なのはの家族は普通だよ？」

いやいやいや！？あのオレより強い奴に会いに行く的な戦闘狂の家族の何処が普通なんだ！？

「どうしたんやキョウスケ君？顔が引き攣っとるけど…」

そ、そりゃ引き攣りもするよ！！

なのはが…治療して完治しているとはいえ大怪我したんだ！！その事実だけであの面倒くさいシスコンが黙っている訳が…」

―ガラッ

「ほぉ…よく分かっているじゃないか」

「き、恭也さん！？」

久々のシスコン兄が現れた！？

「あ～…お久しぶりです…それで、何が分かっていると？」

「…なのはを傷物にしてタダでは済まないって事だ」

ですよね～…というか何で僕が考えている事が分かったんだ!?

「キョウスケ…途中から声が出でたよ…」

えっ!?マジすかフェイトさん!?

「あはは…そ、それでなのはは?」

「…今さっき目を覚まして父さん達と話している」

あ、とりあえず意識は回復したんだ…

「よかったなフェイトちゃん!なのはちゃん目ぇ覚まして」

「うん…よかった」

「へ、へっ!!アイツがそんな簡単にくたばる訳ねぇって分かってたけどな!!」

「フフフ…なんやヴィータ?さっきまで泣きそうな顔しとったのに～」

「ぬあっ!!そそそそんな訳ねーって!!!」

まぁ、何だかんだで1番ヴィータが気にしていたからな～

「そ、そんな事よか恭介!!何か美味そうなの持ってんな!?」

「ん？ああ、一応なのはのお見舞いの品を買いに行ってたんだっけ…恭也さん、これ僕ら全員からのお見舞いの品です」

勿論はやて達の分も一緒に渡したぞ？…お金出したのは僕だが…

「ああ、有り難く貰っておく…　だがキョウスケ、なのはを傷物にした罪は償ってもらうぞ！！」

別に僕が傷物にした…って訳じゃないんだかな…この人に通用する訳ないか…

「ちょ！？ま、まてよ！！キョウスケは何も悪くねーぞ！！むしろなのはの体調を気にかけてくれたり、ケガだって治してくれだんだ！！！

それを言うなら悪いのは…私の…私のせいだ！！！」

「ヴィータ…」

シスコ…恭也さんと僕の間に割って入ってきたヴィータが弁明してくれているけど…

「ありがとうヴィータ…その気持ちだけで十分だよ」

なのはが大怪我するって事は前から知っていたのに…イレギュラーがあったとは言え、防げなかったのは僕の落ち度だし…

「き、恭介ぇ…」

「それで…僕は何をすればいいんですか？」

正直サンドバックにされる事を覚悟していたが…

「…責任を取ってなのはと結婚しろ」

……

……

……

……へ？

「「「「……はあああ！！？」」」」

予想を超えると言うか、ワームホール通過してとんでもない角度から…って、

ちょっと待ていいぃい！！？

けけけけけけけっこん！！？

けっこんって…あの事件現場にある血のあとの事！！？

『（マスター、それは血痕です…しかし第1婦人がなのは嬢とは…私的にははやて嬢かと思ってましたが…）』

ちょ！？何冷静にツッコミ入れてんだ！？
というか第1って何さ！？あからさまにそれ以降ありますって言ってね！！？

「ちょ！？な、何でそんな話しになるんや！！？」

「そ、そうだよ！？それに恭也はキョウスケの事嫌ってたよね！？なのに何で！！？」

「というか恭介は私の嫁だーーーっ！！！」

「ヴィータちゃん！？それを言うなら婿だよ…って、そうじゃないよ！！キョウ君は私のマスターなんだから私のだよ！！？」

…何このカオスは…恭也さん、どうしてくれるんだ…

それとヴィータ、その台詞は銀髪眼帯軍人さんの専売特許だから！？

その頃…

――――某Ｉ○学園・某所――――

「…むっ？」

「どうしたの？ラウラ？」

「いや…何やら何処か遠い世界で呼ばれたような…まぁ気のせいだろう」

「そ、そうなんだ…」

「それより早く嫁を誘って食堂に行くとしよう」

「はぁ…だからそれを言うなら婿だって…というか、一夏はラウラの嫁じゃないからね!?」

「…しかしシャルロット、我々の出番はこれだけか?」

「え、え~と…どうなんだろうねぇ~。あはは…」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「オレとしても甚だ不本意だが…キョウスケならなのはを任せてもいいだろうと家族会議で決定してな…」

いや！だからそんな迷惑な会議、本人不在でいつの間に開いたんだ！？

「「「「ぜ、絶対に反対だ（や）（だよ）（なんだから）！！！」」」」

当然、女性陣は猛反発！！

「ま、まぁ別に今すぐと言う訳ではない…」

流石にこの迫力には怯んだか？

「というか、僕としては何でそんな話しになったか疑問しかないんですが…」

まったく話しが見えないんですが…てか中学生同士が結婚出来る訳ないだろ？

「ああ、それはだな…」

―ガラッ

「それは私から説明しよう」

恭也さんの台詞を遮るよう病室から出できたのは…

「士郎さん!?」

「久しぶりだねキョウスケ君…ふむ、また一段と腕を上げたね」

わ、判るんですか!?流石は戦闘民族…スカウター要らずか…

「あ、あの!!」

「ん?君は確かなのはの友達のはやてちゃんだったね」

「はい…それで、何でキョウスケ君がなのはちゃんと結婚せなあかんのです…

……というか、キョウスケ君とは私が結婚するんで手ぇ出さんといてくれます?ちなみに側室はヴィータとシグナム…まぁ一応シャマルも居ますし、控えでリイン居ますけど何か問題でも?」

…いや、突っ込む所が多すぎて問題しかないんだが…

《(勿論、私も側室で構いませんよ?)》

…何やらリインフォースから電波が出ていたような?

「待ってはやて!
キョウスケとは…その…わ、私が…結婚するんだから!そうだよね!?キョウスケ!??」

「何寝言を言ってんだ!?恭介とは私らとはやてが結婚すんだからオメーはすっこんでろ!!」

「ま、待ってよ皆！！キョウ君とは私が未来永劫一緒に居るんだからねっ！！」

…うん、とりあえず皆落ち着いて考えてから喋ろうね？

『（…しかし…ここまで言われてもウチのマスターは何故みなさんの好意に気付かないんでしょう…）』

≪（…恐らく好意（友情、または友愛としては）は感じているでしょうが…好意（恋愛）までは…）≫

『≪（（……ハァ）≫』

今、確実にデバイスｓに馬鹿にされた電波が出てた…気がする！？

「それで理由だが…」

「「「「「理由は……」」」」」

―ゴクリ…

「…桃子のＯＨＡＮＡＳＨＩを受けて…」

…おいおい、

「ちょ！？御神流の剣士が、なに奥さんのＯＨＡＮＡＳＨＩに屈しとるんやーーーー！！」

―スパーン!!

はやては取り出した伝説の武器【血染めのハリセン（偽）】を取り出し士郎さんにツッコンだ…というかはやてさん?何処から取り出した!?

「い、いやーはやてちゃんは筋がいいね～どうだい?御神流を習ってみるかい?美由希といい勝負になりそうだ」

士郎さんも何勧誘してんですか!?

「と、父さん!!母さんのアレは…お、思い出させないでくれ!!ま、まだ膝が震えて…」

…桃子さんが原因でトラウマ!?てか士郎さん!?桃子さんのＯＨＡＮＡＳＨＩって…ハッ!?

ま、まさか…アレって高町家の女性だけに受け継がれている一子相伝の奥義とか!!?

―ガラッ

「あら、キョウスケ君?何か変な事考えてないかしら?」

噂をすれば…桃子さん…?

「い、いや!?ソンナコトナイデスッテ?」

…だから何で皆は心読めるんだよ!?デフォルトで装備してるんじゃないかって本気で思うよ…

「あのっ！！桃子さん！！」

「あら、なぁに？フェイトちゃん？」

「あの…何でなのはとキョウスケが…け、結婚しなくちゃいけないんですか？」

「フフ、それはね～…」

「「「「そ、それは…」」」」

「おもし…キョウスケ君なら、なのはを任せられる男の子からよ…？」

ちょっと待てい！？今面白そうって言いかけたよな！？

「気のせいよ♪キョウスケ君
大体、面白そうだからなんて理由は８割位しか思ってないから～」

ってほとんどじゃねーか！？

「…で、残りの２割はどー思ってだよ？」

ヴィータも半ばジト目で尋ねると…

「キョウスケ君みたいな男の子が息子に欲しいかな～って　テヘッ♪」

テヘッ♪じゃねー！！　殆どロクな理由じゃねー！！？

「桃子さん…第一本人の意識っての「あら、なのはだったら問題ないわよ?ほら」へっ?」

―ガラッ

桃子さんが病室の扉を開けると…

「いい?なのは…キョウスケ君を落とすには手段を選んじゃダメよ?」

「わかったの!!お姉ちゃん!!!」

何普通に気合い入れてるんですか!?しかも若干恐い事言ってね?

「その意気よ!!ふふふ…これでキョウスケ君が義弟に……それで義姉の権限でキョウスケ君にスカートを……キョウスケ君って美形だからきっと……グフッ!?」

「お、お姉ちゃん!?は、鼻!!鼻から何か赤い何かがでてるの!!?」

…うん、なのはが元気になったのはいいんだが…話している内容が色々とダメな気がする!?

「……も、もちろんスカートは絶対領域で…」

「お、お姉ちゃーーん!!?それ以上は妄想しちゃ命に関わるの!!」

…いや、むしろアンタはそのまま入院してくれ…じゃないと身の危

険が…

「…キョウスケ君のスカート姿…うん、それはそれでアリやな♪」

「うん…お化粧とかすれば…いいかも／／」

「うん、キョウ君って肌が綺麗だから絶対似合うよ～」

…背後ではやて・フェイト・さくらが何か言っているのがしっかり聞こえたが…記憶から削除しよう…うん、そうしよう

「??なぁ、何で恭介にスカートはかせんだ??」

ヴィータさん…貴女だけは変な世界の扉を開かないで下さい…いや、マジで!!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはとデートとコアクマと!?　いち!

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

「…はぁ、酷い目にあったよ…」

「まったくもう!!キョウ君には私という者がついているのにっ!!」

…あの後、何とか高町家とはやて達の魔手をかわし（特に美由希さんのあの熱気を帯びた目が怖かったが…）脱出に成功!!

ちなみになのはは、今日中に退院できるらしい…ま、あれだけ暴れ…つか動ければ問題ないだろう…

「さて、これからどうす「キョウスケ君ーーー!!!!」ってなのは!?」

噂をすれば何とやらだな…

「なのはちゃん!?そんなに動いて大丈夫なの!!!?」

「うん、もう大丈夫なの!!」

…大怪我負ったその日に退院…さすがエリクサーだな…

「そ、それでねキョウスケ君…その…お願いがあるんだけど…」

「ん？何？」

「あの…明日…買い物に付き合ってほしいんだけど…いいかなぁ？」

…さっきまでベットの上に居た人の台詞とは思えない発言だなオイ…

「ま、まぁ明日は予定はな……って、さくらさん？何で僕の足を踏んでいらっしゃるんでしょう？」

踏まれると地味に痛いんですが…

「ふんっだ！！」

いや、何で不機嫌になってるのでしょう？

「どうしたの？キョウスケ君？…もしかしてダメ、だった？」

うっ、そんな泣きそうな顔で迫られると何か凄く罪悪感が！？

「…い、いや大丈夫。何でもないから」

「本当！？よかった～♪じゃあ明日一緒にお出かけしようね（ニコッ）」

「（ドキッ）あ、ああ…／／」

う〝っ…なのはの笑顔ってこんなに可愛いかった…ヒッ!?

「…キョーウく～～～ん…何で顔が赤いのかなぁぁぁぁぁ??」

「い、いや!?ナンデモナイデスヨ!?」

さくらが…さくらからもの凄い武装色の覇気を感じるんですが!?

「じゃあ明日１０時に駅前で待ち合わせねっ♪忘れないでね絶対だよ!!」

―タッタッタッ

そう言い残し、なのはは去っていった…

―ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

「……（怒）」

「いや、さくらさん?だから何で睨んでるんです?」

「…睨んでないです…こーゆー目つきなんだよ…」

いや、さくらはもっと可愛いらしかったぞ!?　つか何処かで聞いたような台詞!?

「…まったく、何も私の目の前でデートの約束しなくても…（ボソッ）」

「??何か言ったか?」

「乙女心が解らない人は、縮退砲に撃たれてブラックホールに吸い込まれちゃえ!!!」

…いや、それかなり恐い内容ですよね?

…はぁ…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

で、翌日

――駅前――

現在の時間…10:30

「……遅い」

約束の時間から既に30分オーバー!!

まぁ、女の子は支度とか色々あるって事で時間がかかるってのは解るし、その位は許容しよう!!

…ただ…

「（ヒソヒソ）わ、あの人可愛くてカッコイイ～！！」

「（ヒソヒソ）彼って一人なのしら？」

「（ヒソヒソ）ちょっとアンタ声かけてみなさいよ」

「（ヒソヒソ）ええ！？は、恥ずかしいよ～」

「（ヒソヒソ）年下美少年…じゅるり」

…周りからの雰囲気がめっさ怖いんですが！？

と、身の危険を感じていると…

―タッタッタッタ！！

「ご、ごめん！！キョウスケ君！！遅くなっちゃったの！！！」

ようやくなのはがやってきた！！

「まったく…遅かったな」

「うぐっ！！そ、そこは【僕も今来た所だよマイハニー】って言う所だよ～！？」

「誰がマイハニーだ！誰が！？　大方、出掛ける前に着て行く服が今履いているミュールに合ってなくて慌てて部屋に戻って着替えて、いつの間にかこんな時間になったんだろ？」

「に、にゃああ!!?な、何でそんなピンポイントでしかも正確に解るの!!?」

…いや、テキトーに言っただけだったんだが…

「…ま、まぁ何だ　何時もなのはの事を見ているから…何となくかな?」

ま、大体女の子の遅刻の理由ベスト3には入ると思うし…

「そ、そうなんだ…／／にゃはは…何だか照れるな…／／」

…??何で照れてるんだ???

「ま、とりあえず行こうか?」

「う、うん／／」

こうして僕たちは電車でショッピングモールへと向かった…

…背後から尾行されているのも気付かずに……

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――ショッピングモール――

「へー　こんな所にこんなショッピングモールが出来てたんだな～」

「うん、最近リニューアルオープンしたみたいなんだよ？」

へ～…しっかし、結構人が多いな～

「あ、あの…キョウスケ君……／／」

「ん？何だ？」

何やらなのはがモジモジしながら手を差し出して…

「手…繋いでもいいかなぁ／／？」

…ああ、こんな人込みじゃ確かにはぐれちゃうかもしれないしな

「ああ、いいよ」

―ギュッ

僕はなのはを手を繋「ち、違うよキョウスケ君！！」っえ？

「こう繋ぐんだよ…／／」

なのはが僕の左手を自分の右手で絡めるように繋いで…ってこれはいわゆる恋人繋ぎっすか！？

「にゃはは／／さ、行こ♪キョウスケ君」

…ま、別にいいんですけど…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケ達から数メートル後方……

？？？Ｓｉｄｅ

前日…さくらちゃんからの緊急連絡で、キョウスケ君とあのドＳ魔王がデートするっちゅう話しを聞いて…こうして尾行しとるんやけど…

「……なぁヴィータ」

「……何だ？はやて？」

「……あれ、手ぇ繋いでるように見えんのは気のせいやろか？」

「……大丈夫だ…私にもそう見えてっから…」

「……そか、やっぱそうなんや…見間違いや幻覚でものうて、やっぱそうなんやなぁ～……よっしゃ！！今すぐあんな幻想ブッ潰したるで！！！」

「ちょ！？ま、待ってはやて！！？こんな街中じゃ危ないよ！？」

「止めても無駄やフェイトちゃん！！それに、そんなん結界張れば問題無しや！！」

「あわわわわ！！？は、はやてちゃんが壊れたですーーーっ！！？」

「大丈夫やよ？リイン…スグニオワルカラナァ…」

「目をハイライトにしている人が言っても全然説得力がないです！！？」

「いくでぇ！！私のこの手が光って唸るぅぅぅ！！」

「ってはやて！？イマジン的なブレイカーじゃなくてそっち！？」

フフフ…それはな、物理的に潰さんと収まりつかないんや！！

「ちょっとはやてちゃん落ち着いて！！あ！！キョウ君達が行っちゃうよ！？」

「なっ！？ホンマや！？」

チィ！！見失ったらシャレにならん！！

「急いで尾行続行や！！」

「「「「「おーーーーー！！！！！」」」」」

キョウスケ君の貞操は……私が守るんやーーっ！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「……なぁシャマル……」

「なぁに？シグナム？」

「ついて来た我らが言うのも何だが…主達を止めなくてよいのか？」

「……逆に聞くけど…今のはやてちゃん達を止められる？」

「……無理だな」

「……せめて一般人には被害が行かないようにしましょう」

「……ああ」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「で、なのはは何を買いたいんだ？」

予想としては新作の服とかアクセサリーかと思うのだが…

「えっと…あそこなんだけど…」

なのはが指差す先には……

「……帰っていいか？」

「ふぇ！？な、何でなの！？」

そこを何でと聞く君の頭の中が何で？と聞きたいんだが…

「どこの世界に男を連れて、女性下着売り場に連れていく人が「此

処にいるよ♪」ああそうでしたねコンチキショーーー！！！」

そう…なのはが僕を連れて行こうとしたのは…ランジェリーショップだった…ｏｒｚ

「大体何でそんな所に！？」

「え～と、最近ブラがキツくなっちゃって…」

って買いに行く理由じゃなくて、そんな場所に僕を連れていく理由を聞いてるんダァァァァ！！！

「にゃはは　折角だからキョウスケ君の好みのブラジャーにしようかな～って♪」

「…と言うか、あの場所に入った瞬間に僕は確実に捕まるんですが！？」

「大丈夫だよ！今はカップルで一緒に買いに行く人が結構いるから♪」

それはカップルだから何とか許されるんだろ！？

※店舗によりお断りする場合があります。よい子は気をつけよう！

「だから大丈夫だよ～　カップルって事で行けばいいんだし～」

「だからって行けるかーー！！！　そんなんなら水着売場の方がまだマシだぁぁ！！」

「……（ニヤッ）」

な、何だ!?なのはが今一瞬…新世界の神のように笑った?

「フフフ…じゃあ水着売場ならいいんだね?さあ行こう!!すぐ行こう!!直ちに行こうキョウスケ君♪」

「なのは何を…ハッ!!?ま、まさか…本命はそっち!?」

「フフフ～…キョウスケ君はなかなかそーゆー場所に一緒に行ってくれないから…
それに、男の子が一度言ったことを撤回しないよね?」

これは…始めは断れて当然のハードル高い条件を定時した後、断ったそのハードルを下げた条件を相手に飲ませ…ってソレって値切り交渉のテクの応用じゃねーのか!!?

「言質はちゃんとレイジングハートに録音してあるから…ねっ?レイジングハート?」

《Ｙｅｓ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

くっ!?デバイスの高性能さが憎いぃぃ!!?

「さ、行こう　キョウスケ君♪」

「いや…ま、まて!?」

「待たないよ～♪（フッフッフ…これでキョウスケ君を悩殺するの

♪）」

こうして僕はなのはに引きずられるように強制連行された…

ああ、ドナドナが聞こえる…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

似た者同士だった主人公ｓ！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

前回までのあらすじ…

なのはの策略に嵌まり、水着売場に強制連行されてしまった…

つか、もはや嫌な予感しかしないんですが！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

「……僕達は…どうしてこんな所まで来てしまったんだろう…」

僕は、某フリーダムなパイロットの台詞を呟いてみたが…

「どうしてって…水着買うからなの！」

はい、真っ当な返事が返ってきました

「…というか、水着ならフェイトやはやてと一緒の方がよかったんじゃ…？」

女性水着なんて僕じゃよく分からないし…

「…キョウスケ君？

一緒にいる女の子の前で他の女の子の名前言うなんて失礼なんだよ！？」

…他のって…なのはさん？友達だろ！？

「あ、ああ…ごめん…ってなのは！？その手に持った大量の水着…まさか全部買うのか？」

…明らかに数十着はあるよな？

「にゃはは、だって可愛い水着が沢山あってどれにするか迷っちゃうよ～」

…まぁ、なのはは可愛いから何着ても似合うと思うけどな」

―ボンッ！

「にににゃあああ／／／！！！！？！？」

「ど、どうしたなのは！？いきなり奇声なんか発して！？」

しかも顔が真っ赤になってるし！？

「キ、キョウスケ君が変な言を言うからだよ!?…もうぅ…／／」

ええっ!?変な事って、何か言ったかな??

「な、何でもないの／／!!（途中から声が出てたのに気付いてないし…）

じ、じゃあ私コレ試着してみるね!!すみませーん!!」

なのはは定員さんに声をかけると、そのままフィッティングルームへ消えていった…

で、結局何だったんだろう??

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

「おまたせー　キョウスケ君♪」

しばらくして、フィッティングルームからなのはの声が…

余談だが待っている間、周りの視線が痛かった…

「　ど、どうかな／／?変じゃない?」

なのはが着ているのは、ピンクのビキニタイプで2段フリルスカート姿…

「……／／」

「??キョウスケ君?」

「あ、ああ…」

ヤバイ…つい見とれてしまった…／／

「この水着…変じゃないなかぁ／／」

「い、いや!?似合ってると思うぞ!?」

「ホ、ホント!?にゃははは～、な、何だか照れるね～／／」

…というか、中学生にしたら胸元がかなり…／／

「キ、キョウスケ君…／／あの…そんなに見られるとさすがに恥ずかしいかな…／／」

「ごごごめんッッ!!!」

いかんいかん!!つい凝視してしまった／／

「じゃあ次の水着に着替えるね…／／」

そう言い、再びフィッティングルームになのはは消えていった…

…こ、これはかなり精神的にヤバイ!?

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

なのはＳｉｄｅ

フフフ…確かにキョウスケ君が胸が好きとは知っていたし、意図的に胸元が強調される水着を選んだんだけど…あの反応は、少なからず私の事…その…ちゃんと女の子として意識しているんだよね♪

よーしっ！！この調子でガンガン攻めるの！！！

そ、それで…今夜はキョウスケ君と…／／うん、ちゃんと勝負下着も万端なの！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

―ゾクッ！！

「…な、何だが不穏な気配が…それに寒気も……風邪ひいたか？」

シグナムＳｉｄｅ

私達は主はやてと共に神代達の尾行を続けていたのだが…

「……ヴィータ」

「……何だはやて？」

「ここでディアボリック放っても聖戦って事で罪にはならんよなぁ…？」

「ああ、私のアイゼンをブン回しても同様に罪はならねーよな…」

「「……よし、殺るか！！」」

主はやて達が物騒な事を言い出した！！？

「殺るか…じゃありませーーん！？はやてちゃん！？ヴィータちゃん！！？それ普通に犯罪ですから！？」

「「……ちっ…シャマルの癖に…」」

「シ、シグナム～～！！はやてちゃんとヴィータちゃんが不良になっちゃった～～～ぁ！！！」

「いや…不良とかそれ以前の問題では…というか、主はやても落ち着いて下さい！！ヴィータも騎士なら少しは冷静になれ！！」

全く…2人とも神代の事になると見境がなくなるのは困ったものだ…

「せやかてシグナム…なのはちゃんの水着姿見たキョウスケ君のあの表情…許せるか？」

…ま、まぁ確かに私も少し神代や高町を見ていると…イラッとくるが…

「…あンやろー…病み上がりの癖に恭介に色目使いやがって…あの時いっそ止めを刺してやればよかったな…」

…いや、それは流石にマズイだろう！？

「はぁ……ん？そういえばテスタロッサやさくら達の姿が見えないが…」

普段ならこの騒ぎに参加している筈なのだが…？？

「ああ、フェイトちゃん達なら…あそこよ」

シャマルが教えてくれた場所を見ると…

「こ、これが水着！？ほとんどヒモしかないよね！？で、でも…これならキョウスケも襲ってくれるかな……／／」

「…この水着ならキョウ君も…でも…胸が……はぁ、パット何枚必要かな？」

「リ、リインに合うサイズがないですーーー！！？」

あちらはあちらで大騒ぎだったか…

「……まぁ、あちらは平和でよかった」

「平和……なのかしら？明らかに色んな問題が先送りになってないかしら？？」

…そこは否定できんな…

「……さて、私も水着を買うとしようか」

折角このような場所に来たのだ。
1着位は持っていても損はなかろう

それに…まぁ神代にも私のその…水着姿を見てもらいし……／／

「あら、シグナムもキョウスケ君の誘惑用水着を買うの？」

「なっ！？何を言うシャマル！！！？わわわ私は別にそのような考えは……／／」

「ふふっ、顔を真っ赤にして否定しても説得力がないわよ？」

「くっ…そ、そう言うお前はどうなのだ！？」

「あら、当然キョウスケ君を魅了する水着を買うわよ♪」

…たまに思うが、シャマルのこの堂々とした行動力がうらやましいな…

「さ～てと、どの水着が1番脱がされ易い「ちょっと待て!?」って何かしら?シグナム??」

「何故脱がし易いを基準で水着を選ぶ!?」

「それは勿論、キョウスケ君と岩場の影でもすぐ出来るようによ♪」

…何が出来るのだ!?…とツッコンではいけないような気がするのは私だけだろうか?

聞くべきかどうか思案した結果…

「……まぁ神代には頑張ってもらうか」

色んな意味で丸投げする事にした

神代ならどちらに転んでも大丈夫だろう

…その時は…わ、私も混ぜて貰えれば……／／

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケSide

あれからなのはの水着ファッションショーが1時間ほど続き…

「…う～ん…どれにしよう…」

なのははまだ迷っていた…

女の子の買い物は長いって解ってはいたが…キツイ…主に現状の環境に……

女性水着売場に1時間も男がいるのに、警察に通報されないのが不思議だ…

「ねぇキョウスケ君、どっちの水着が好み？」

どうやら最終選考に残った2着を…って！？

「僕の好み基準かよ！？」

「え～　せっかくだからキョウスケ君の好みの水着にしたいの！」

…と言われてもな～　僕自身のセンスは、そんなに悪くないとは思いたいが…

「…まぁ、最初のピンクのがいいかな？全体的な雰囲気といい、なのはのイメージ（魔力光）とピッタリ合うし…」

なのはだったら可愛さを全面に出した方がいいと思うし…

「にゃはは…そ、そうなか／／じゃあこっちの方にするの♪」

「…別に僕の意見はそんなに気にしなくて、なのはが気に入ったのを買った方がいいんじゃ？」

「ううん！キョウスケ君が気に入ったのが私の気に入ったのだからいいんだよ？」

…まぁ、本人がいいって言ってるんだからいいか

「じゃあ買ってくるからちょっとまっててね♪」

そう言うとなのははレジに一直線に向かっていった…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

なのはの買い物が終った後…

「あ、なのは！ちょっと本屋に寄っていいか？」

「えっ？うん、勿論♪」

という訳で僕は某本屋【〇むよ〇】に来ています

「キョウスケ君、どんな本を買うの？」

「ん～…っと、確か新刊で今日発売の…あ、これだ」

僕が手に取った本はライトノベルで…女性にしか動かせない機械の万能服の登場で女尊男卑の世界の中、唯一男で動かしてしまった為に女の子だらけの機械の万能服の養成学校に通う羽目になったというハーレム的な男性主人公の物語の本だ

「へ～、ねぇ！これってどんなお話なの？」

…ちょっとお話って単語に寒気を感じたが…

「えっと…この主人公、周りの女の子から好意を向けられているのにまったく気付かない唐変木で、しかも鈍感スキルの持ち主なのだが…フツーあんだけアピールされれば気付くだろ！？空気読めって言いたくなるよな～…って、どうしたなのは？」

僕って説明下手だから分からなかったかな？

「あはは…はぁ…（キョウスケ君だけには言われたくないだろうな～…その主人公さんも…）」

苦笑いしているなのはだった…つか何故！？

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ1

――――某○S学園――――

「は…はっくしょん!!」

「何だ一夏？風邪か？」

「まぁそれは大変です!!一夏さん、すぐお休みにならないと!!看病は私にお任せ下さいな」

「待ちなさいよ!!何サラっと二人っきりになろうとしてるのよ!?」

「あら鈴さん？病人を労るのは当たり前の事ではなくて？」

「だーかーらー!!何でセシリアが看病しなきゃいけないのよ!!一夏は私が看病するからアンタはすっこんでなさい!!」

「待てお前達!!さっきから聞いていれば好き勝手いっているが…一夏は私が看病するに決まっているだろう!!」

「なっ!?ほ、箒さん？貴女も随分好き勝手いっているではありませんか!?」

「何を言う!私は一夏の幼なじみなのだから当然であろう!!」

「だったら私も一夏の幼なじみなんだから問題ないわよね!?」

「何を言う!?私は一夏のファースト幼なじみなのだから私が1番に決まっているだろう!?」

「付き合いは私の方が長いんだから、私の方が一夏も安心するに決まってるわよ!!」

「さぁ一夏さん、おバカ2人は放っておいて行きましょう?風邪はこじらせてはいけませんわよ?」

「「ちょっと待てーーー!!?何ドサクサ紛れにやってる!!?」」

「…ちっ、気付かれましたか…」

「こうなったら…」

「ええ…力ずくで…」

「決めてやろうじゃないの!!」

「「「表(アリーナ)に出ろーーー!!!」」」

「あ~…別に俺は風邪じゃないから…って聞いてねぇし…こりゃまた千冬姉の出席簿が飛んでくるな…はぁ…」

…今日も平和なⅠ〇学園だった…

おまけ2

「キョウスケ君らは何処や!?」

「確かなのはとこの本屋に入って行ったのは見えたんだけど…」

「ここの本屋…無駄に広すぎてるよな…恭介は何処だよ?」

「…ハッ!?もしやあそこか!?」

「はやて!?心辺りがあるのか!?」

「大有りや!?行くで!!」

―ダッ!!

「キョウスケ君ここにおる!?」

「…つかはやて、何の迷いもなくグラビアコーナーに来んのかよ…」

「そ、そうだよはやて！！いくらキョウスケでもグラビアコーナーには…」

「そうやな～…あ、もしや成人誌コーナーに…」

「「いや、それ１８禁だから！？」」

「…と言うか、高町と一緒なのだからそれはなかろう？」

「そうねぇ～　それに雑誌に頼らなくてもキョウスケ君なら一声言ってくれれば…きゃ♪」

「シャマル…少しは自重しろ」

「？？さくらお姉様、その【せーじんざっし】って何なんですか？」

「ほぇぇえ！？そ、それは…その……うにゅ～／／」

「さ、さくらお姉様！？お顔が真っ赤ですぅ！？」

その後、はやては店員さんに注意されたとか…

「な、何で私だけなんやーーー！！？」

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

キョウスケＳｉｄｅ

なのはとの買い物も一段落着いて、ショッピングモールをうろついていると…

「あれ？あそこにいるのは…」

何か見覚えがある人物が…

「どうしたの？キョウスケ君…ってあれ！？」

なのはも気付くって事は人違いじゃないよな…

「アリサちゃんにすすかちゃん！？しかも何か変な人に絡まれてるの！？」

…だよなぁ　まぁ、誘拐だったらシャレにならんし…助けに行くか

「レイジングハー「ってオイ！？何フツーにデバイス起動させようとしてるんだ！？」ええっ！？で、でも早く助けないと！！」

…まぁ魔法秘匿とか別にないっちゃあ無いからいいんだけど…

「とりあえず僕に任せて」

「う、うん！！」

さて…行くか！！

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

アリサＳｉｄｅ

…まったく、今日は特に最悪だわ…

「ですからぜひ一度…」

「結構です！！私達そーゆうの興味ありませんから！！」

「そこを何とか…1番社長と会って頂くだけでも」

「結構です！！」

…この押し問答をさっきから繰り返して…すずかだって怯えて何も言えなくなっちゃったし…

「行きましょ、すすか」

「う、うん…」

私はすずかの手を掴んでその場を立ち去ろうとすると…

「ま、待って下さい！！考え直していただけませんか？」

私達の道を塞ぐように回り込んで…ホントにしつこいわねーー！！

「アンタ…いい加減に「アリサ！すずか！！」ってその声は！？」

一瞬その声を聞いた瞬間、条件反射で胸の鼓動が跳ね上がったのが自分でも分かる…だってその声の主は…私の…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

キョウスケＳｉｄｅ

「アリサ！すずか！！」

「「キ、キョウスケ（君）！？」」

いきなり声をかけたから驚いたかな？

まぁ、先ずは…

「…僕の知り合いが何かしましたか？」

軽く睨むカンジでアリサ達に付き纏っていた男に話しかける…いや、殺気までは出してないから！

「い、いえ…その…」

「ナンパだったら他を当たって下さい…彼女達も迷惑していますし」

「い、いえ！！決してそのような…私はこういう者でして…」

男が慌てて名刺を差し出してきたので見てみると…

「……○×芸能プロダクション？」

「はい、以前からお誘いしているのですが…良いお返事がなかなか頂けなくて…」

「私達はその気はないって言ってるわよ！！」

「うん…私もその気はありませんから…」

なるほど…2人を芸能界にスカウトしているのか…

確かにすずかは可愛いし、アリサは……まぁ…黙っていればレベル高いからな

「……アンタ今、すごく失礼な事考えてなかった？」

ヤバッ！アリサの読心スキルを忘れてた！？

「そ、そんな事より…アンタ！2人ともその気がないっていってるぞ！」

「いえ…だから…それをこれからじっくり話し合おうとですね…」

「……まぁ確かにこんだけ可愛い女の子2人もいれば必死になる貴方の気持ちも分からなくもないですが…」

「で、でしたら「だけどな！！」な、なんです！？」

「…2人が嫌がっているのを無理矢理ってのはどうですか…？本気でストーカーとして警察に通報しますよ？…なのは！！」

さっきから物影に隠れていたなのは…と言っても、実はいつでも警察に通報出来るように携帯片手に待機させてたんだけど

「うん！！すぐにでも通報できるよ！！」

後は…

―ビリッ

僕は先程の名刺を破り捨て…

「…警察呼ばれたくなかったら諦めて他の子を捜す事をお勧めしますよ？」

今度は軽く殺気を込めて丁寧にご退場を願った

「……ヒッ！？」

殺気が効果ばつぐんだったのか、男は慌てて逃げ出していった…

「2人とも、大丈…夫？」

「「……／／」」

2人も何か顔を真っ赤にしてボーッてしているけど…？？

「おーい…2人とも？」

「…ッ！？キキキキョウスケ／／！！？」

「…ふにぁ／／！！？」

何二人でそんなに慌ててるんだ？

「…とりあえず大丈夫そうだな？」

「う、うん…ありがとうキョウスケ君／／（キョウスケ君に可愛いって言われた／／キョウスケ君に可愛いって言われた／／／／キョウスケ君に可愛いって言われた／／／／）」

「まぁ…その…一応お礼は言っておくわ…／／（キョウスケが私の事可愛いって…やっぱその…そういう対象として見ていてくれてるって事よね／／？）」

…何やら2人とも嬉しそうにしているけど…？ああ、しつこい人か

ら開放されたからかな??

「しっかし、芸能事務所からのスカウトって凄いよな～?
断ってよかったのか?」

こんなチャンス滅多にないと思うが…

「いいのよ!!あんな面倒なのは!!まったく、さっきの人も毎回
毎回付き纏っていい迷惑よ!!」

「うん…何だか監視されてるみたいで怖かった…」

「ふ～ん…そういう物なのかねぇ…」

…この時、自分がアリサ達の苦労を予想斜め上から味わう事になる
とは思わなかったが…

「……キョウスケく～～ん…私の事、忘れてないかなぁ?」

「……いや、忘れてないよ　なのは」

…ごめん、ちょっと忘れてた

「…そーいやアンタ達2人で何してたの?」

…何やら急に重苦しい空気になったけど…アリサから黒いオーラが
出てるように見えるのは幻覚だな…うん

「もちろんキョウスケ君と2人っきりでデートなの♪」

「「なっ…！？」」

「ちょ！？なのは！？僕たちはただ2人で買い物に来ただけだろ！？」

「キョウスケ君…解ってはいたけど…もう少し乙女心を勉強してなの！！」

ええっ！？それなりに勉強はしてるんだけど…

「「（…ああ、いつもの鈍感王モードか…）」」

アリサもすずかも何か可哀相な子を見るような目で見てくるし…何さ！？

「あ、あのキョウスケ君　立ち話も何だから…どこか入らない？助けてくれたお礼もしたいし…」

「そうね、せっかく会えたんだし…お茶でもしながらその【買い物】について詳しく聞きましょうか…ねぇ、な～の～は～ぁ！？」

「ア、アリサちゃん…ちょっと恐いよ～」

「フフフ…そうだね…なのはちゃんには特に、その辺りを詳しく丁寧に説明してもらいたいなぁ…」

「すずかちゃんも目を単色にさせないでなのーーー！！？」

おおっ!?魔王がシ○ナとスノ○に負けた!?

「ホラ!!アンタも下らない事考えてないで行くわよ!!」

「キョウスケ君…あんまり遅いと…雪だるま的な物をたーくさん召喚しちゃうよ?」

ってM○Rの人!?中身の人格が変わってません!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――ジ○ナサ○――

そんな訳で某ファミレスでアリサとすずかに事の経緯を話していると…

「って!?ちょっと待ちなさいよ!?なのは!!アンタ昨日そんな大怪我して今出歩いて大丈夫なの!?」

「にゃはは　うん、キョウスケ君のお陰で全力全快なの♪」

「…はぁ、キョウスケと関わっている時点で私の常識が遠のいていくわ…」

何か失礼な事言ってね!?

「でもなのはちゃん…無理しちゃダメだよ～」

「うん、ありがとうすずかちゃん」

「そういえば、なのははどんな水着を買ったの？」

「えっと…ピンクのビキニタイプだよ♪キョウスケ君に選んでもらっの♪」

「…へ～ぇ、前々から分かってはいたけど…アンタ本当にそーゆーの好きねぇ…」

アリサはジト目でこちらを睨んで…って！？

「ちょ！？ア、アリサ！！？そーゆーのって何だよ！？」

「アンタの胸好きに決まってるじゃない！！ビキニ選んでる時点で谷間見る気満々じゃない！！」

なっ！？何て言い掛かりな！？

「というか、前々から誤解があるようだが…僕は別に胸が好きという訳では…てかその噂はどこ発信だよ！？」

「私ははやてから聞いたけど？」

「私も…」

「私はインフィ君だったかな～」

…乳もみ魔とガラクタか…よし、先ずはインフィニティを握り潰し…って、あっ！？そーいや今日はアイツ置いてきたんだっけ…チッ、

運がいいヤツ…

「ま、まぁアンタがそんなに胸が好きなら……わ、私の…その…む、胸を見せてあげても…／／」

「ん？悪いアリサ、考え事してて聞こえなかった…何て言ったんだ？」

「な…なんでもないわよっ／／！！」

「（…アリサちゃん…大胆…ううん！！わ、私だってキョウスケ君の為だったら…／／
こ、今年は頑張ってビキニに挑戦…しようかな／／？）」

「すずかもどうかした？急に黙り込んで…？」

「う、ううん！！何でもないよ！！？」

…まぁ…とにかく変な噂が身内関係者に広まってるのは由々しき問題だな…

「まぁいいわ、キョウスケ！！アンタ私の水着選びも手伝いなさいよ！！」

いきなり何！？その暴君っぷりは！？

「私の水着も選んでくれると嬉しいな～？」

貴女もですか！？すずかさん！？

「…2人とも…キョウスケ君に水着選んでもらえるのは…私だけなんだよ？」

…あ、魔王が復活した！？

「な、何よ！？別にいいじゃない！！」

「そうだよ～　なのはちゃんだけなんてズルイよ！！」

…と言うか僕が水着選ぶ事は確定すか！？

「あの「「「キョウスケ君（アンタ）は黙ってて！！」」」…は、はい！！」

ヤバイ…何この状況！？

「だいたいアンタ達魔導師組はいっつも一緒にいるんだから、たまにはこっちに融通きかせなさいよ！！」

「そ、それとこれとは別なの！！」

「さ、キョウスケ君　2人っきりでお店にいこ♪」

「「すずか（ちゃん）！！何抜け駆け禁止ーーー！！！」」

「ちぇ…もう少しだったのに…」

あの…お店の中なんだから…静かにしようよ…

「もうっ！2人共…いいかげんにしないと…呪うぞーーーっ！！」

いや！？なのは！！？それキャラ違うぞ！？

…その後、新たな乱入者によりお店が大騒ぎになり…
当然ながら店員さんに注意され出入り禁止になったのは言うまでもないか…不幸だ…

ん？乱入者って誰？

それは…

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

おまけ

「あかん……キョウスケ君…何処に行ったんやーーーー！！！」

「完っ全に見失っちまったな…」

「ど、どないしよヴィータ！？このままだとキョウスケ君が…あの魔王の毒牙に！？」

「クソッ！？　シャマル！！探索魔法でわかんねーのかよ！？」

「えっと…近くにいるのは確実なんだけど…待ってて今正確な場「そないな悠長な事言ってられへんでヴィータ！！ここは女の勘で捜し当てるんや！！」ってはや「おう！！ぜってー見つけてやる！！」ヴィータちゃんも落ち着いてーー！！」

「…はやてちゃんもヴィータちゃんもテンパり過ぎだよ～！？」

「…ねぇシグナム…探索魔法で正確な位置を捜してからの方が見つけるのが早いと思うのは間違いかな？」

「普通はそうだが…言い出したヴィータすら慌てすぎてその事に気付かないとは…」

「…まぁ、帰って来たらキョウスケとなのはには尋問しないとね…フフフ」

「…もはやテスタロッサはオブラートに包んで話す気はないのだな…」

「はやてちゃん、リインはもうお腹ペコペコですぅ……」

「…しゃあないな…あそこのファミレスで補給しながら作戦会議や！！」

―ピキーン！！

「…はっ！？何か命の危険な予感が…」

「ちょっとキョウスケ！！何ボーッとしてるのよ！！」

「アリサちゃん！！私の旦那様（キョウスケ君）に何言ってるの！？」

…つか、なのはさん？もはや主音声と副音声が逆になってません！？

「ねぇキョウスケ君？アリサちゃん達は放っておいて一緒に水着買いに行こ？」

「「だから抜け駆けすんな（しないの）ーーー！！！」」

…いつまで続くんだよ？

作：もうすぐ終わりますよ？

ほ、本当か!?作者よ!!?

作：……無事でいろよ?主人公…

……へっ?

―ピンポーン

「いらっしゃいませー」

そして…悪夢の扉は開かれた……

「は、はやて!?ヴィータ!?こ、これは…ってフェイトさん!?何で店内でバルデッシュを!?　ちょっ!?なのはもレイジングハート出して対抗しないでくれーー!!?」

―ドッゴォォォォ…

作：はたして主人公の生死は!?

「い、生きて……ガクッ」

作：…まぁ、次回には復活してるからいいか♪

「…何気に神より酷くないか！？」

作：いやぁそれほどでも

「褒めてねーよ！！」

主人公の必須能力は…

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――学校――

キョウスケＳｉｄｅ

さて、今日は久々な感じがするが学校に来ています

…ん？学生なら学校に行くのは当たり前？

いや～　何気にＦＡＩＴＨの任務が入ってたりしてね～　まぁ、なのは達よりは出動頻度は低いが…

と、言う訳で昼休み…

僕はいつものメンバー…まぁ、なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずかと一緒にお弁当を食べています

「キョウスケ？誰に話しかけてるの？」

「いや…まぁフェイトさん…察して下さい」

「？？」

「そんな事よりキョウスケ君、今日のお弁当はどや？」

そんな事って…ま、まぁその方がこちらも助かるけどさ～…

「いつもながらはやての腕前は完璧だな～」

「そ、そか～／／そう言ってもらえると作り甲斐があるってもんやな～」

うん、はやての作るお弁当は美味し…ん？

「「「「ジィィィィ…」」」」

いや、皆してそんなに凝視されてる…？

「あ、あの…そんなに睨まれると…食べにくいんですが…」

「…ねぇ、はやてちゃん…何ではやてちゃんはキョウスケ君のお弁当を作ってくるの？」

「そら一緒の家に住んどるんやからお弁当作るのは当たり前やないか♪」

まぁ、家事ははやてと分担してやっているからな～…シグナムやヴィータも多少は手伝ってくれてるし…

シャマルは……ま、まぁキッチンにさえ入らなければ害はないし…
ザフィーラは……ま、まぁ管理局の仕事で活躍してもらおう！！
うん！！

「（はやてちゃん…羨ましいの…）」

「（キョウスケにお弁当…今度作ってこようかな…そ、そしたらキョウスケも…／／）」

「（…クッ、分かっていた事とはいえ…でもお弁当作るなんて私のキャラじゃないし…はぁ）」

「（…はやてちゃんには…負けないんだから！！）」

…何やら分からないが…凄いオーラがなのは達から出ているような…

「ところで次の時間ってＬＨＲやろ？何やるか聞いとる？」

「確か…今度やる大規模なイベントの準備…だったっけ？」

近々何やらイベントが開かれるらしいのだが…詳細はまったくもって分からないんだよな…何やら機密扱いとかで…

「ああ、私知ってるわよ？」

「私も知ってるよ？」

いきなり機密ダダ漏れ！？学校のセキュリティは大丈夫なのか！？

「本当！？アリサちゃん！？すずかちゃん！！？」

「ええ、家の方にイベントに協力してくれって話しがあったから」

「私の家の方にもあったよ
…何だか衣装協力をしてほしいって」

「「「「衣装協力！！！？」」」」

衣装って…劇でもやんのか？

「アリサの方はどんな協力をしたんだ？」

「私の所も衣装協力よ」

「というか…一体ウチの学校はそないに衣装集めて何する気や！？」

「アリサ達は知ってるんだよね？何なの？」

「う～ん…一応発表まで黙っててって言われてるし…」

「まぁ少なくても…私達には被害がないのが救いよね～」

「ア、アリサちゃん！？被害って…そんな危なそうな事するの！？」

「ああ、大丈夫よ？なのはが考えてるような事じゃないから。
ただ…賞品獲得の確実性が無くなるのは痛いわね…」

…い、一体この学校で何が起ころうとしてるんだ！？

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――教室・ＬＨＲ――

その答えは割と早く判明したが…

「「「「「ミ・ミスコンーーーー！？」」」」」

「ええそうよ？全学年対抗の…ね」

中学でミスコンをするって…いいのか義務教育機関！？

「ってか、何でアリサがＨＲ仕切ってんだ！？」

「そんなの私がクラス委員だからに決まってるじゃない！？」

…えぇ～　そうだったっけ？

…確かに無駄にカリスマ性はあるけどさ～…

「…何か文句でもあるの？アンタは！？」

「い、いえ…特には…」

相変わらず鋭いな～

「ねぇアリサ、ミスコンって具体的には？」

「各クラス代表1名を選抜して最終的には投票で1番を決めるのよ！」

…割と普通のルールだな

「ちなみに優勝したクラスには…学食のスイーツ年間優先&無料パスよ！！」

「「「「「おおおおーーーー！！！！！」」」」」

クラスの女子ほぼ全員から歓喜の雄叫びが！？

ここの学食のスイーツ…最近になってかなりのレベルになり、女子学生は勿論女性教員からも絶大な人気で販売数分で全て完売になるのだ！！1番人気のショートケーキなど入手困難な程の伝説級の一品なのだ…

…まぁ、実は僕が暇潰しに作ったスイーツなんだけど（笑）その為に数に限りがあり入手困難になってるんだよな～

この事実を知っているなのは・フェイト・はやてには別荘で何度か出しているので皆程は騒いでないようだ…

「ゆ、優先となると…あの入手困難な伝説のケーキも…」

「ああ…夢にまで見たホール食い…」

「あの至高のケーキを食べると…どんな願いも1つだけ叶うという…」

そんな大層な物でもないんだけどな～　というか最後の人！！それドラゴン〇ールだから！？

「だったらウチのクラスは優勝確実だよな～」

「ああ、何せ聖祥５大美少女がそろってんだ！誰が出ても優勝間違いないよな～」

ウチのクラスの男子生徒ＡとＢがそんな事を言っているけど…

まぁ確かにそこは否定はしないが…

「ああ、ちなみに私となのは・すずか・フェイト・はやては出場出来ないから」

―ピシッ！！

…あれ？何か空気にヒビが入った音が聞こえたような…

「「「「「な、なにーーーーーッッッッッ！！！！？」」」」」

ク、クラス全員からの絶叫がぁぁぁぁ！！？こ、鼓膜がぁぁ！！？

「うるさーーーい！！！これは決定事項よ！！」

「ね、ねぇアリサちゃん…何で私達が出れないか説明位しないと…」

「ア、アリサ…なのはの言うとうりだぞ？下手したら暴動が起きる勢いだし…」

と言うか、特に男子生徒が殺気立って臨戦体制なんだけど!?

「はぁ…学校側が「貴女たちが出場すると、優勝クラスがその時点で決まってしまい公平さが欠ける」って言ってきたのよ!」

…言われてみればそうだよな～

全校チェックした訳じゃないけど…なのは達以上のルックスを持っている女生徒って居なかったし…

「という訳で、私達以外でクラス代表を選出しないといけないのよ!!分かった!?アンタ達!!!」

「「「「は、はい……」」」」

皆のテンションダダ下がりだな…まぁ勝てる試合が無効試合になったような物だし…

「で、誰が立候補いる!?」

―シーーーーン

つか、そこで立候補って普通は居ないんじゃね？　手を挙げだら自意識過剰って思われるだろ？

「なぁアリサちゃん、ミスコンの出場資格ってどないなっとるん?」

「えっと…参加資格は在学中の生徒なら誰でもＯＫって事になってるわよ?」

「…参加資格はホンマにそれだけなんか?」

「ええ、ルールブックにもちゃんと書いてあるし」

「……だったらキョウスケ君を女装させてみるのはどや？」

……へ？

「キョウスケを！？……確かにルール上は問題ないし…実に面白そうね」

「待て待て待て！！！何でそーなる！？」

「ついこの間そんな話しが出とったしな～　大丈夫やて、キョウスケ君には素質あるで♪」

ぜんっぜん嬉しくねーー！！！

「神代君に女装…面白そうね～」

「そうね～　確かにインパクトはあるわよね～」

「男の娘…ああ、ご飯が進みそうな光景だわ…／／」

「神代が女装って笑えそうだよな～」

「折角の機会だ、笑わせてもらおうぜ！！」

クラス中で既に決定みたいな流れになってね！？　つか真ん中は危ない発言してるし、後半男子生徒は悪意しか感じないよな！？

「じゃあ決定ね！」

「決定ね！じゃねー！！断固拒否するに決まってるだろーが！！」

「往生際が悪いわね～…なのは！フェイト！！すずか！！！」

「「「うん！！！！！」」」

―ガシッ！！

返事と同時に、３人が僕を羽交い締めにした！？

「な、なのは！！フェイトやすずかまで！？な、何の真似だ！？」

「決まってるの！キョウスケ君にこれからお化粧するんだよ？」

な、何恐い事をサラッと言ってるんだ！？

「ごめんねキョウスケ…私も…その…見てみたいな／／」

「キョウスケ君なら素材がいいから可愛くなるよ～♪」

だから全ッ然うれしかねーよ！！

「はやて！！例の物を！！」

「任せときアリサちゃん！！…ジャジャッジャッジャジーン！！メイクセット～」

何ドラ○もん的な効果音でそんな物を！？つか何で持ってるんだ！？

「そら中学生には必須アイテムやからに決まっとるやろ？」

これだから近頃の中学生は…イカンイカン！？発言が年長者的な物になってる！？

「さあキョウスケ！！ここまで来たら腹くくりなさい！！」

「クッ…だ、大体僕が女装しても優勝なんて出来る訳ないだろ！？」

「優勝？…フッフッフ…甘いわね！！既に私達の行動理念は……キョウスケに女装させてみたいになってるのよ！！！」

つか既にミスコン一切関係ねーのかよ！？

「さぁキョウスケ君…お化粧タイムや♪」

「ちょ！？は、はやてさん！？…ま、待て！メイク話せば分か……うわぁぁぁぁ！！！」

「あ、はやてちゃんが使ってるメーカーってマジョリカ？」

「そやよ、なのはちゃんは？」

「私はマキアージュなの♪」

…こ、こんな時にもガールズトークかよ!?

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

――――数分後――――

「…後はこれで…」

ううっ…結局僕は…汚れてしまった…ｏｒｚ

「…さあ!!完成し……た……ッ!!?」

へ??はやてが僕の顔を見るなりｏｒｚ状態に!?

「は、はやてちゃん!?どうしたの?」

「……なのはちゃん…私は…とんでもない物を…パンドラの箱を開けてもうた……」

「とんでもない物って…ねぇキョウスケ君、どうし…た……グハッ!?」

僕の顔を覗きこんだなのはまで血を吐きながらｏｒｚに!?

「は、はやて!?なのは!?」

「2人ともどうしちゃったの!?」

「「……キョウスケ君が……（チラッ）」」

再び2人が僕の顔を見ると

「「…ッ!!?」」

慌てて顔を背けてしまった!?

「何なんだ?なぁフェイト、すずか…どうなって……って、オイ!何で2人も人の顔見るなり顔を背けるんだ!?」

「う、ううん!!!な、何でもないからっ!!!?」

「ぅん…大丈…夫…だから…」

明らかにおかしいよね!?

「なぁ皆……?」

僕が振り向きクラス中を見回すと……

「「「「「「……（。Ｏ。；）」」」」」」

ってなカンジで全員言葉を失なってら…やっぱ僕が女装なんかしたからこんな変な空気になったんだよな～　はぁ…鬱だ…

―ピッピッピッ

『（マスター、Ｋｙ…クロノ執務官からのエマージェンシーです…）』

クロノから？…皆の前だからエアディスプレイは表示できないから音声だけで…っと

「（どうした？この時間は学校なんだが）」

〔（す、すまない！緊急事態だ！！第１２９７２世界でアインストが現れた！！）〕

…チッ、アインストか…

「（…状況は？）」

〔（一体一体なら何とかまだ対処出来るのだが…数が多くて状況的にかなりマズイんだ！！クッ、フリーズブリット！！！）〕

状況はかなりマズイか…

「（分かった！先にさくらを向かわせる！僕もすぐそっちに合流する！！それまで持たせろよ！！）」

〔（なるべく早く頼む！！）〕

…はぁ、仕事ならしょうがないか…

「先生！！」

ＨＲを見守っていた教職員に話しかけ…

「……」

…話しかけたが呆けていた！！

「…はぁ、アリサ…悪いが仕事が入ったから早退するな」

「…ハッ！？仕事って…！！？」

「クロノが絶賛ピンチ中らしいから…じゃあ後は頼んだ！！」

僕は後始末？をアリサに丸投げして急いで教室を後にした…

そう…急いで…だから頭からすっかり抜け落ちていたのだった…

自分の状況を……

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「ち、ちょっと！！！？　ま、待ちなさいよキョウスケ！？この混乱を私に丸投げ！？」

余談だが…その時のクラスの女子はｏｒｚ状態に…

男子は…全員目がハートマークだったとか…

「こ、こんなカオスの状態をどうしろって言うのーーーー！！！！」

クラスの中心で叫んでいたアリサだった…

がんばれクラスいいんちょさん！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8300k/

魔法少女リリカルなのは～仮想の未来～

2011年10月20日02時45分発行